

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第239集

下東西清水上遺跡

県立前橋高等養護学校建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1 9 9 8

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

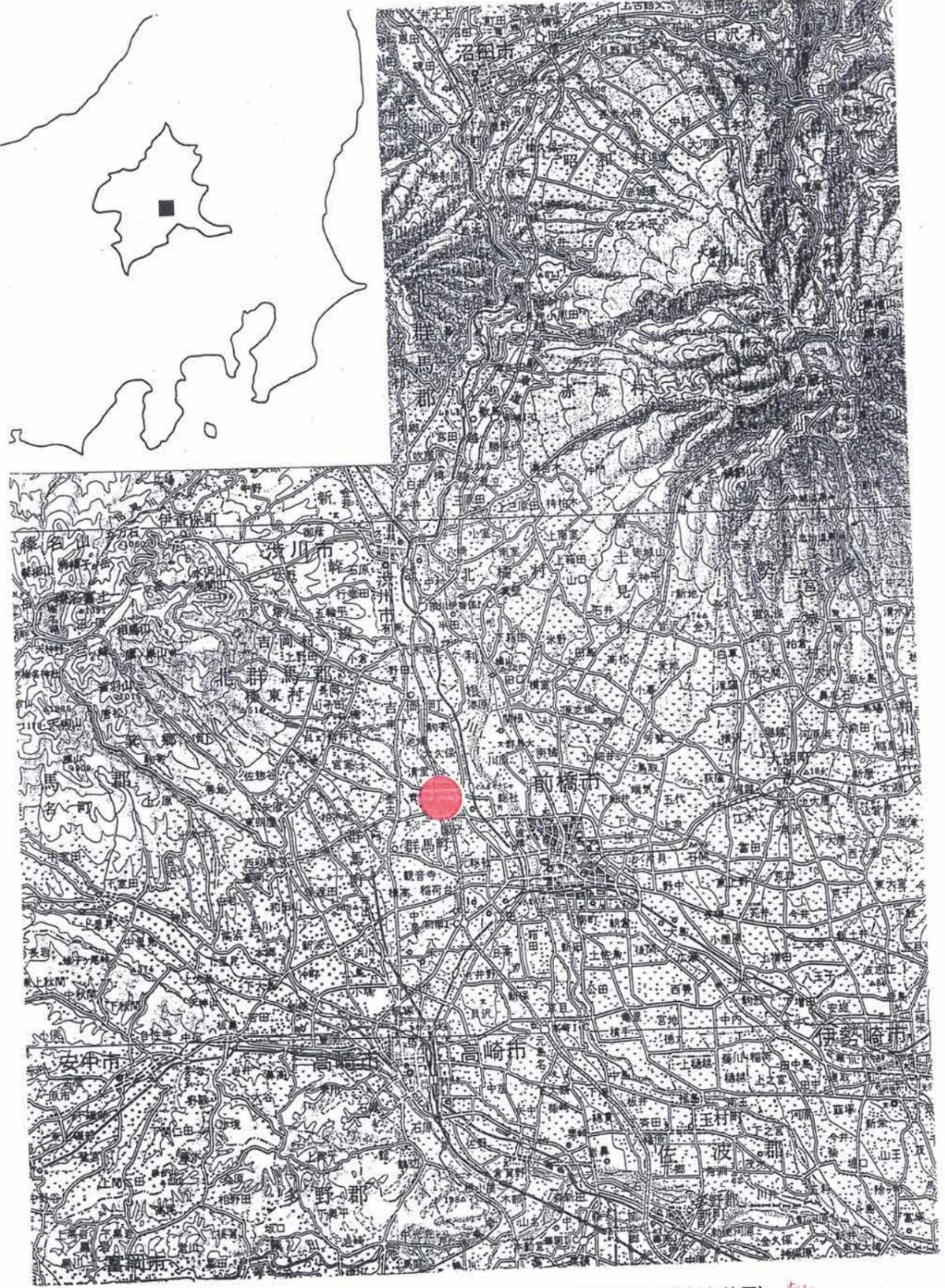
『下東西清水上遺跡』正誤表

例	言	文	3頁	14行	(誤)	『年報』16	(正)	『年報』15
本	文	24頁	2頁	14行	遺跡位置欠落	別図参照	別図参照	別図参照
		41頁	24頁	19行	「☆状周堀」	佐波理	「☆状周堀」	「☆状周堀」
		295頁	41頁	19行	佐波里	暗文(磨き)	佐波理	佐波理
		297頁	295頁	6行	暗文(磨き)	第3節 施釉陶器	暗文(磨き)	第3節 施釉陶器
		298頁	297頁	7・16・28・36行	下東西・清水上遺跡	10世紀代(籜)	第3節 下東西清水上遺跡出土の施釉陶器について	第3節 下東西清水上遺跡
		297頁	298頁	第4表	10世紀代(籜)		下東西清水上遺跡	10世紀代(籜)
				第4表	追加)			

第4表 出土施釉陶器一覧表

No	遺 構	押印番号	遺構の時期	器 種	畿 内		東 海		備 考
					近 江	美濃	10世紀前半	10世紀後半	
1	8号住居-8		10C.後半	碗					
2	8号住居-9	30		碗					京都産の可能性もある
3	8号住居-11			碗?					
4	8号住居-12								
5	13号住居-9		10C.前半	輪花碗					
6	13号住居-9			碗					
7	13号住居-10			碗					
8	13号住居-12			碗					
9	14号住居-20		10C.後半	碗					
10	15号住居-15		8世紀代	碗					京都産の可能性もある
11	17号住居-11		8世紀代	碗?					
12	34号住居-9		8世紀代	碗					
13	35号住居-3		10C.代	碗					
14	36号住居-3		10C.代	香 炉					
15	48号住居-4		11C.前半	碗					
16	48号住居-5			碗					
17	52号住居-6		10C.前半	碗					美濃産か
18	52号住居-7			碗					
19	53号住居-1			碗					
20	63号住居-3			碗					
21	64号住居-6			碗					
22	68号住居-3		9C.中葉	碗					

第1章 調査と整理



第2図 遺跡位置図(国土地理院20万分の1「宇都宮」「長野」使用) 赤丸

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第239集

下東西清水上遺跡

県立前橋高等養護学校建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1 9 9 8

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



下東西清水上遺跡 全景（南から）



下東西清水上遺跡 全景（北から）



銅碗 (15号住居跡)



緑釉陶器

序

群馬県教育委員会では、平成8年度に前橋と高崎の両市に知的障害児教育のための高等養護学校建設を計画しました。このうち、前橋市青梨子町にある下東西清水上遺跡は、この学校建設に先立つ試掘で発見されたものです。調査は県教育委員会事務局管理部管理課からの委託で、当群馬県埋蔵文化財調査事業団が担当し、現地での発掘調査は平成7年10月から平成8年3月までの6ヶ月間、整理と報告書作成作業が平成9年4月から1年間行われました。

学校建設事業の総面積は27,442㎡におよぶものでしたが、調査は、地下に影響のある建物敷地と新規取り付け道路部分にあたる、8,255㎡の範囲を対象と致しました。遺構としては、現在の水田や畑地部分に、奈良時代の掘立柱建物跡や平安時代の竪穴住居跡をはじめとした集落や、近世の畑、中世の館跡の周溝と考えられる大溝などの遺構と、土師器、須恵器、暗文土器、灰釉陶器、緑釉陶器、奈良三彩陶、銅椀、瓦、中近世陶磁器など大量の遺物などが調査されました。

この埋蔵文化財調査の成果が出版される機会に、これまでお世話になった群馬県教育委員会事務局管理部管理課、同文化財保護課、前橋市教育委員会文化財課には深甚の謝意を表し、本報告書の出版が地域の歴史理解の一助となることを心から希望いたします。

平成10年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 **小寺弘之**

例 言

1. 本書は群馬県立前橋高等養護学校建設に伴い、事前に発掘調査された下東西清水上遺跡（しもとうざいしみずうえいせき、SHIMOTOUZAI-SHIMIZU SITE）の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡は群馬県前橋市青梨子町（ぐんまけん まえばしし あおなしまち、Aonashi-Town, Maebashi-City, Gunma-Prefecture, Japan）に所在する。
3. 委託者 群馬県教育委員会事務局管理部管理課
4. 試掘調査 群馬県教育委員会文化財保護課第一係
5. 発掘調査 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
6. 試掘調査の期間は、平成7（1995）年5月10日から12日にかけて実施した。
7. 本遺跡の発掘調査期間は、平成7（1995）年10月1日から平成8（1996）年3月29日までで実施した。
8. 発掘調査に伴う事業組織は次の通りである。

事務担当 中村 英一常務理事

原田 恒弘事務局長

神保 侑史調査研究部長、蜂巢 実管理部長

佐藤 明人調査研究第3課長、小淵 淳総務課長

国定 均係長代理、笠原 秀樹係長代理

須田 朋子主任、吉田 有光主任、柳岡 良宏主任

高橋 定義主事

大澤 友治、吉田 恵子、松井美智子、内山 佳子、星野美智子、羽鳥 京子、

菅原 淑子、今井もと子、並木 綾子

発掘調査 麻生 敏隆専門員、大西 雅広専門員

平方 篤史調査研究員、追川 佳子調査研究員

9. 発掘調査に従事した発掘作業員は次の通りである。

安中市 馬場 陽子

高崎市 青木 昌代、阿久沢一雄、阿部加代子、石倉 敏子、石倉 義夫、梅山 陽子、大前美智子、岡田いそ江、岡田登志子、島方 欣六、須田 安雄、須藤 泰利、反町 ハナ、田角 ナカ、角田 令子、外処登志夫、中島 吉郎、中村スミエ、深沢ハルミ、深沢日出次、深沢ヨシ子、松本 玲子、三谷よし子、箕輪 三郎、矢口 豊子、矢島キクエ、湯浅作次郎、吉田 良子

榛名町 石川 輝子、植杉あや子、加納 文代、佐藤美佐子、柴田 ミツ、清水 次子、白井 精一、鈴木 春美、芹沢 市子、滝沢喜代造、竹鼻タキノ、中里見友江、中島源次郎、福島ミエ子、松井 多喜

箕郷町 石川 眞也、小和瀬深夏、小和瀬幸子、清水 幸子、竹内 昭子、長井 涼子、森田サチ子

群馬町 登坂和久江、細井まゆみ

前橋市 赤石 芳子、五十嵐美智子、石山千恵子、石山日出男、入澤 定吉、小野里 岩男、

小野里ミト、小野沢 誠、河西 三明、金井百合子、川端キヨ子、工藤 隆義、
鈴木ヨシエ、関谷カネ子、曾我 春江、高橋 嘉幸、奈良 芳子、成瀬ケイ子、
浜名 敏子、村山 幾世、山田美由紀、湯浅 紀子、渡部 富江

榛東村 近藤 上

渋川市 穴沢千代子、斎藤 典子、佐藤武四郎、須田多都子、高橋 伸子、手塚ハツエ、
手塚 廣、中山恵美子、柳沢京四郎

吾妻郡 大塚 博男

沼田市 小田島ふじの、小松原傳吉、神保 正幸、高山日出夫、田中八千代、田邊 善三、
富沢 敬夫、永町 勝子、原澤 満仲、平井 恒子、本多 セツ、丸山三代子、
水落さみよ、水野さかゑ

利根郡 関 清、小林 文吉

10. 整理作業期間は、平成9（1997）年4月1日から平成10（1998）年3月31日である。

11. 本報告の作成事業に伴う事業組織は次の通りである。

事務担当 菅野 清常務理事

原田 恒弘事務局長、赤山 容造副事務局長（兼任調査研究第1部部长）

神保 佑史調査研究第2部部长、渡辺 謙管理部長

平野 進一調査研究第1課長、小淵 淳総務課長

笠原 秀樹総務係長、須田 朋子係長代理

宮崎 忠司主事

井上 剛経理係長

吉田 有光主任、柳岡 良宏主任、岡嶋 伸昌主任

大澤 友治、吉田 恵子、内山 佳子、星野美智子、羽鳥 京子、若田 誠、

佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、本地(安藤)友美、松下 次男、浅見 宣記、

吉田 茂、今井もと子、並木 綾子

12. 整理事業の総括は、麻生 敏隆専門員、廣津 英一専門員が行った。

13. 整理作業に従事した臨時職員は次の通りである。

金子 恵子、篠原 富子、岸 トキ子、五十嵐由美子、大澤亜矢子、田中佐恵子、

萩原 由香、武永 いち、高田 栄子、掛川 智子、飯田 和子、永井(高橋)里佳、

鶴岡真希子、都丸美奈子

14. 本遺跡出土金属製品の保存処理に従事した普及資料課保存処理室の職員は次の通りである。

関 邦一技師、小材 浩一、土橋まり子、萩原 妙子

15. 遺構写真の撮影は発掘調査時の各担当者が、遺物写真の撮影には当事業団の普及資料課の佐藤 元彦技師が従事した。

16. 遺構測量は技研測量設計株式会社と株式会社測研に委託した。

17. 空中写真撮影には技研測量設計株式会社所有の気球、斜め全体写真撮影には有限会社山下工業所有の高所作業車を利用した。

18. 遺構図トレースの一部は、技研測量設計株式会社に委託した。

19. 遺物実測図・トレースの一部は株式会社アルカに委託した。

20. 本報告書の本文、観察表の執筆は、主として整理担当者の麻生と廣津があたったが、一部については下記の当事業団職員に協力依頼した。

(遺構) 追川 佳子、大西 雅広

(遺物) 大江 正行主幹兼専門員、大西 雅広、神谷 佳明専門員

木津 博明主幹兼専門員、桜岡 正信主幹兼専門員、関根 慎二専門員

21. 石器及び石製品の石材同定は、飯島静男氏（群馬地質研究会）に依頼した。

22. 本報告書収録の分析関連の原稿については、分析依頼・委託した研究者・研究機関名を各原稿部分に明記した。

23. 本遺跡の発掘調査及び整理にあたっては、下記の機関・個人のご協力をいただいた。

群馬県教育委員会、群馬県住宅供給公社、前橋市教育委員会、前橋市清里地区自治会連合会

国立歴史民俗博物館 高橋 照彦助手、国立奈良文化財研究所 毛利光 利彦、松村 恵司

24. 出土遺物・資料類は一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管しており、資料管理されている。

25. 本遺跡に関して本報告以前にその概要が収録されたのは下記の書籍である。

「下東西清水上遺跡」『年報』16 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1996

凡 例

1. 遺跡名称を決める場合は本来事業団で制定した大字・小字を使用するのが原則だが、今回の発掘調査地点は1980年から1984年にかけて本事業団が発掘調査した下東西遺跡、前橋市教育委員会が発掘調査した清水上遺跡に隣接、あるいは一部が重なるために、本遺跡の名称は「下東西清水上遺跡」とした。
2. 本報告書中に掲載・使用された地形図は下記の通りである
建設省国土地理院発行 1/200,000「宇都宮」・「長野」、1/25,000「前橋」
前橋市 1/2,500「前橋市現況図 24」
3. 本報告書の方位記号の方向は真北を指す。
4. 遺構実測図の縮尺は下記の通りである。
竪穴住居跡 1/60 カマド 1/30 掘立柱建物跡 1/60 竪穴遺構 1/60 溝 1/80
土坑 1/60 ピット 1/40 井戸 1/60 地下式土坑 1/60 石垣 1/60 暗渠
1/60 畑畝跡 1/80 風倒木 1/60 道跡 1/80
主要な遺構の縮尺は上記の通りであるが、その他の遺構、及び詳細図・全体図についてはそれぞれの実測図に縮尺（スケール）を記載した。
5. 等高線・断面基準線は海拔で表示し、断面基準線標高値は L=m で示している。
6. 遺構実測図中では、遺物は原則として実物の形で表記している。
7. 遺構実測図中の遺物番号は、出土遺物実測図の番号と一致し、さらに遺物観察表の番号とも一致する。
8. 遺構面積は、デジタルプランイメーター（タマヤ計測システム株式会社製造 TAMAYA PRANI X 7）による3回の計測の平均値である。
9. 遺構の埋没土層の観察・記載は基本土層を基準とし、土層番号は1～n（nは正数）としている。
10. 本報告書に記載されているテフラについては下記の通りである。
浅間 A 軽石 As-A 浅間 B テフラ As-B 浅間 C 軽石 As-C
浅間総社軽石 As-Sj 浅間板鼻黄色軽石 As-YP 浅間白糸軽石 As-Sr
浅間板鼻褐色軽石 As-BP 榛名ニッ岳火山灰 Hr-FP 榛名ニッ岳火山灰 Hr-FA
始良 Tn 火山灰 AT
11. 本遺跡出土遺物の注記にあたっては、「下東西清水上遺跡（SHIMOTOUZAI-SIMIZU UE SITE）」の頭文字である S と S をとり、「SS」と区番号、遺構番号、出土取り上げ番号、あるいは埋没土中からの出土を示す埋土などの表記をした。
12. 遺物実測にあたっては、当事業団歴史部会で作成・編集した「仕様書—遺物編」に原則として準拠したが、すべてがこの限りではなく、細部では異なる点もある。
13. 遺物実測図の縮尺は、原則として下記の通りである。
(土器・陶磁器) 縄文土器・弥生土器・埴輪・土師器・灰釉陶器・緑釉陶器・中近世陶磁器 1/3
須恵器 1/3、1/4 奈良三彩陶器 1/2
(石器・石製品) 打製石鏃 1/1 紡錘車 1/2 打製石斧・石錐・削器・砥石・こも編み石・
敲石・擦石 1/3 多孔石 1/4
(金属製品) 古銭 1/1 鉄釘・直刀・刀子・紡錘車・飾金具 1/2 鉄鍬・斧 1/3

(その他) 瓦 1/3、1/4

14. 遺物観察表の計測値は、土器では「器高・口径・底径」などを、それ以外の遺物についても、「長さ・幅・厚さ・重さ」などのそれぞれの項目を記載しており、その単位についても記載している。
また、完形以外の遺物については、()を用いて推定値・復元値を、計測不可能な資料については「一」を用いて表記した。
15. 遺物写真の番号は、出土遺物実測図の番号と一致し、さらに遺物観察表の番号とも一致する。
16. 遺物観察表の「色調」は、新版「標準土色帳」農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修、5版 1976年9月発行を使用し記載したが、細部では観察者の個人差がみられる部分もある。
17. 遺物計測位置は、「下東西遺跡」・「国分境遺跡」の報告書に準拠した。
18. 土器の種別は、「土師質須恵器」などの問題もあるが、原則として非轆轤使用・酸火焰焼成の資料を「土師器」、轆轤使用・還元焰焼成の資料を「須恵器」として扱った。
19. 土器の器種は、原則として高台を付ける資料を「椀」、付けない資料を「坏」、口径に比較して器高が著しく低い資料を「皿」とし、その他に甕・蓋・羽釜・甑などを使用した。特に概念規定を明らかにした上で使用した訳ではなく、あくまでも整理上便宜的に使用した。
20. 遺物写真の縮尺は、原則として下記の通りである。

(土器・陶磁器) 縄文土器・弥生土器・埴輪・土師器・須恵器・灰釉陶器 1/4

緑釉陶器 1/4、1/2 奈良三彩陶器 1/2

中近世陶磁器 1/2、1/3

(石器・石製品) 打製石鏃・打製石斧・石錐・削器・砥石・こも編み石・敲石・擦石 1/4

紡錘車 1/3 竈石・多孔石 1/3、1/4

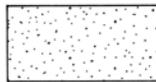
(金属製品) 古銭・飾金具 1/2 鉄釘・直刀・刀子・鉄鋏・紡錘車 1/3

斧・その他(60住-1) 1/4

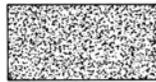
(その他) 瓦 1/3

21. 遺構、遺物実測図中に使用したスクリーンパターンは下記の通りである。

(遺構)



粘土



焼土

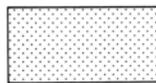


灰



炭

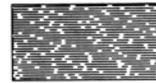
(遺物)



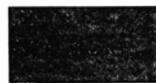
灰釉陶器



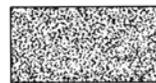
緑釉陶器



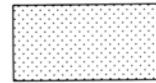
鉄器の木質部分



羽口の鉄附着部分



羽口の還元部分



羽口の酸化部分

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
図 目 次	
表 目 次	
写真目次	
抄 録	
第1章 調査と整理	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 試掘調査の経過	4
第3節 調査の方法	6
第4節 発掘調査の経過	8
第5節 発掘調査の進行状況	10
第6節 整理作業	12
第2章 遺跡の環境	13
第1節 地理的環境	13
第2節 基本土層	17
第3節 歴史的環境	20
第3章 検出された遺構・遺物	31
第1節 遺構・遺物の概要	31
第2節 縄文時代	32
第3節 弥生・古墳時代	40
第4節 奈良・平安時代	41
第5節 鎌倉時代以降	235
第4章 ま と め	291
第1節 遺構・遺跡	291
第2節 轆轤成形の暗文土師器について（桜岡正信）	295
第3節 下東西清水上遺跡出土の施釉陶器について（神谷佳明）	297
第5章 自然化学分析	301
第1節 群馬県出土の銅製容器の材質について	301
第2節 下東西清水上遺跡の土層とテフラ	304
第3節 下東西清水上遺跡の焼失竪穴住居跡の炭化材樹種同定	309

遺物観察表

写真図版

- 附図1 下東西清水上遺跡全体図
- 附図2 下東西清水上遺跡遺構・特殊遺物分布図（その1：竪穴住居）
- 附図3 下東西清水上遺跡遺構・特殊遺物分布図（その2：溝、土坑、その他）
- 附図4 16・19・21・50・53～55号溝（第255図）

図版目次

図版番号	遺跡名	頁	図版番号	遺跡名	頁
第1図	前橋高等養護学校の概要	1	第43図	15号住居跡	64
第2図	遺跡位置図	2	第44図	16号住居跡	64
第3図	前橋高等養護学校の設計概要	3	第45図	16号住居跡	65
第4図	試掘トレンチ配置図	5	第46図	17号住居跡	66
第5図	グリッド設置図	6	第47図	17号住居跡	67
第6図	方眼杭設定図	7	第48図	18・22号住居跡	68
第7図	遺跡近辺の地質図	14	第49図	18・22号住居跡	69
第8図	基本土層模式図	17	第50図	19号住居跡	70
第9図	県内完新主要テフラ分布図	19	第51図	20号住居跡	71
第10図	周辺遺跡と地形図	22	第52図	21号住居跡	72
第11図	周辺遺跡	23	第53図	23号住居跡	72
第12図	縄文石器	33	第54図	23号住居跡	73
第13図	縄文石器	35	第55図	24・25号住居跡	73
第14図	縄文石器	36	第56図	26号住居跡	74
第15図	縄文石器	37	第57図	28・29号住居跡	74
第16図	縄文石器	38	第58図	30号住居跡	75
第17図	縄文石器・石器・弥生土器・埴輪 中近世陶磁器出土分布図	39	第59図	31・32号住居跡	76
第18図	弥生土器・埴輪	40	第60図	33・34号住居跡	77
第19図	1号住居跡	42	第61図	33・34号住居跡	78
第20図	2号住居跡	42	第62図	35・36・37号住居跡	79
第21図	2号住居跡	43	第63図	35号住居跡	80
第22図	3号住居跡	44	第64図	36号住居跡	81
第23図	4号住居跡	45	第65図	38・57号住居跡	82
第24図	5号住居跡	46	第66図	39号住居跡	83
第25図	6号住居跡	47	第67図	40・41・42号住居跡	84
第26図	7号住居跡	48	第68図	40・41号住居跡	85
第27図	7号住居跡	49	第69図	43・44号住居跡	86
第28図	8号住居跡	49	第70図	43・44号住居跡	87
第29図	8号住居跡	50	第71図	45・84号住居跡	88
第30図	8号住居跡	51	第72図	84号住居跡	89
第31図	9・27号住居跡	52	第73図	46・56・58・59・75・80号住居跡	90
第32図	9・27号住居跡	53	第74図	46・56・58・59・75・80号住居跡	91
第33図	10・12号住居跡	54	第75図	46・56号住居跡	92
第34図	10号住居跡	55	第76図	56・58号住居跡	93
第35図	10号住居跡	56	第77図	59号住居跡	94
第36図	11号住居跡	57	第78図	47号住居跡	94
第37図	13号住居跡	58	第79図	48・49号住居跡	95
第38図	13号住居跡	59	第80図	48・49号住居跡	96
第39図	14・15号住居跡	60	第81図	50号住居跡	97
第40図	14・15号住居跡	61	第82図	51・52・53・54・55号住居跡	98
第41図	14・15号住居跡	62	第83図	51・52・53・54・55号住居跡	99
第42図	14・15号住居跡	63	第84図	51・52号住居跡	100
			第85図	52・53号住居跡	101

図版番号	遺跡名	頁
第86図	54号住居跡	102
第87図	60・76・77号住居跡	103
第88図	76号住居跡	104
第89図	61号住居跡	105
第90図	62号住居跡	105
第91図	63号住居跡	106
第92図	64号住居跡	106
第93図	64号住居跡	107
第94図	65号住居跡	108
第95図	66号住居跡	109
第96図	67・81・82号住居跡	109
第97図	67・81・82号住居跡	110
第98図	67・67・81・82号住居跡	111
第99図	81・82号住居跡	112
第100図	68号住居跡	113
第101図	68号住居跡	114
第102図	69号住居跡	115
第103図	69号住居跡	116
第104図	70号住居跡	116
第105図	70号住居跡	117
第106図	71号住居跡	117
第107図	71号住居跡	118
第108図	72・73・74号住居跡	119
第109図	72・73・74号住居跡	120
第110図	78号住居跡	120
第111図	83号住居跡	121
第112図	85号住居跡	121
第113図	86号住居跡	122
第114図	87号住居跡	123
第115図	88号住居跡	124
第116図	89・90号住居跡	125
第117図	89・90号住居跡	126
第118図	90号住居跡	127
第119図	89・90号住居跡	128
第120図	89・90号住居跡	129
第121図	89・90号住居跡	130
第122図	89・90号住居跡	131
第123図	89・90号住居跡	132
第124図	89・90号住居跡	133
第125図	89・90号住居跡	134
第126図	89・90号住居跡	135
第127図	91号住居跡	136
第128図	92号住居跡	137
第129図	93号住居跡	137
第130図	93号住居跡	138
第131図	94号住居跡	138
第132図	95号住居跡	139
第133図	96号住居跡	139
第134図	97号住居跡	140
第135図	98号住居跡	141
第136図	99号住居跡	142
第137図	100・101・102号住居跡	143
第138図	100・101・102号住居跡	144
第139図	100・101・102号住居跡	145
第140図	104号住居跡	145
第141図	105号住居跡	145
第142図	106・107号住居跡	146
第143図	108号住居跡	147
第144図	109号住居跡	148
第145図	110号住居跡	148
第146図	111号住居跡	149
第147図	112号住居跡	150

図版番号	遺跡名	頁
第148図	113号住居跡	151
第149図	114号住居跡	151
第150図	115号住居跡	152
第151図	116・125号住居跡	152
第152図	116・125号住居跡	153
第153図	117号住居跡	154
第154図	118・120号住居跡	155
第155図	119号住居跡	156
第156図	121・122号住居跡	157
第157図	123・124号住居跡	158
第158図	127号住居跡	159
第159図	127号住居跡	160
第160図	128号住居跡	160
第161図	129号住居跡	161
第162図	130・131号住居跡	162
第163図	130号住居跡	163
第164図	130号住居跡	164
第165図	131号住居跡	164
第166図	131号住居跡	165
第167図	132・133・134号住居跡	166
第168図	132・133・134号住居跡	167
第169図	133・134号住居跡	168
第170図	136号住居跡	169
第171図	136号住居跡	170
第172図	136号住居跡	171
第173図	137・138・139号住居跡	172
第174図	137・138・139号住居跡	173
第175図	140・141号住居跡	173
第176図	140・141号住居跡	174
第177図	142・143・144号住居跡	175
第178図	145号住居跡	176
第179図	146号住居跡	177
第180図	147号住居跡	177
第181図	147号住居跡	178
第182図	148号住居跡	178
第183図	149号住居跡	179
第184図	150号住居跡	180
第185図	151号住居跡	182
第186図	152・155号住居跡	183
第187図	153号住居跡	184
第188図	154号住居跡	184
第189図	156号住居跡	185
第190図	157・158号住居跡	185
第191図	157号住居跡	186
第192図	159号住居跡	187
第193図	159号住居跡	188
第194図	159号住居跡	189
第195図	160・172号住居跡	190
第196図	160・172号住居跡	191
第197図	172号住居跡	192
第198図	161号住居跡	192
第199図	161号住居跡	193
第200図	162・179号住居跡	194
第201図	162・179号住居跡	195
第202図	163号住居跡	196
第203図	164・180号住居跡	197
第204図	164・180号住居跡	198
第205図	180号住居跡	199
第206図	165・169号住居跡	200
第207図	165・168号住居跡	201
第208図	165号住居跡	202
第209図	165・168号住居跡	203

図版番号	遺跡名	頁
第210図	166号住居跡	203
第211図	167号住居跡	204
第212図	167号住居跡	205
第213図	170・174・175号住居跡	206
第214図	170・174・175号住居跡	207
第215図	170号住居跡	208
第216図	170・175号住居跡	209
第217図	171号住居跡	210
第218図	173号住居跡	211
第219図	173号住居跡	212
第220図	176号住居跡	213
第221図	177号住居跡	214
第222図	178号住居跡	215
第223図	178号住居跡	216
第224図	178号住居跡	217
第225図	181号住居跡	217
第226図	181号住居跡	218
第227図	182号住居跡	218
第228図	183号住居跡	219
第229図	183号住居跡	220
第230図	184号住居跡	220
第231図	185号住居跡	221
第232図	186号住居跡	222
第233図	187・188号住居跡	222
第234図	187・188号住居跡	223
第235図	189・190・191・192号住居跡	224
第236図	193号住居跡	225
第237図	194号住居跡	225
第238図	1・2号掘立柱建物跡	227
第239図	2号掘立柱建物跡	228
第240図	3号掘立柱建物跡	228
第241図	4号掘立柱建物跡	229
第242図	5号掘立柱建物跡	231
第243図	6号掘立柱建物跡	232
第244図	7号掘立柱建物跡	233
第245図	8号掘立柱建物跡	234
第246図	1・2・3号堅穴状遺構	236
第247図	1・2・3号溝	238
第248図	1・2・3号溝	239
第249図	4・8・9・10・13号溝	239
第250図	12号溝	240
第251図	14・15・17・24・25号溝	241
第252図	20・26～29・31・32・51・52・56号溝	242
第253図	5・6・7・9・11・18号溝	243
第254図	22・23・33号溝	245
第255図	16・19・21・50・53～55号溝	付図
第256図	1～9号土坑	248
第257図	10～15・18～21・32号土坑	249
第258図	19・20・32号土坑	250

図版番号	遺跡名	頁
第259図	17・24～29号土坑	251
第260図	22・30・31・33～35号土坑	252
第261図	36・38～46号土坑	253
第262図	47・48・50～56・58～60・62・66～68号土坑	254
第263図	63・69～76・88～92・95～97・99号土坑	255
第264図	100～117号土坑	256
第265図	118～132号土坑	257
第266図	134・150・151・153～160・166～168・179・ 178号土坑	258
第267図	171・172・176・179号土坑	259
第268図	180～183・185～191・201号坑	260
第269図	194号土坑	261
第270図	192～196・197・205・206号土坑	262
第271図	198～200・202・207・208号土坑	263
第272図	210～220・224・226～228号土坑	264
第273図	230～239・241～244号土坑	265
第274図	245～248号土坑	266
第275図	1～15号ピット	267
第276図	16～24号ピット・32号住居跡周辺ピット	268
第277図	1・2号井戸	269
第278図	地下式土坑	270
第279図	石垣	271
第280図	1号暗渠	272
第281図	畝畝跡、1・2号倒木	273
第282図	4号道跡	275
第283図	グリッド	276
第284図	グリッド	277
第285図	グリッド	278
第286図	グリッド	279
第287図	グリッド	280
第288図	グリッド	281
第289図	1・2区一括	281
第290図	2・3区一括	282
第291図	3区一括	283
第292図	古代瓦	284
第293図	古代瓦	285
第294図	古代瓦	286
第295図	古代瓦	287
第296図	古代瓦	288
第297図	古代瓦・近世瓦	289
第298図	中近世遺物	290
第299図	土師器環法量比較表	292
第300図	こも編み石長・幅・重量相関図	293
第301図	瓦観察統計図	294
第302図	轆轤成形暗文土器集成	296
第303図	群馬県出土銅製容器	301
第304図	土層柱状図、及び分析試粒採集位置	308
第305図	各遺跡出土の炭化材位置とその樹種	312

表 目 次

第1表	完新世の示標テフラの特徴	19
第2表	周辺遺跡一覧表	24
第3表	溝一覧表	247
第4表	出土緑釉陶器一覧表	298、299
第5表	出土灰釉陶器一覧表	299、230
第6表	群馬県出土銅製容器の蛍光 X 線分析	303
第7表	下東西清水上遺跡の屈折率測定結果	308
第8表	下東西清水上遺跡のテフラ検出分析結果	308

第9表	焼失堅穴住居跡の炭化材樹種	312
第10表	堅穴住居ごとの検出樹種	312
第11表	土器観察表	313～356
第12表	縄文石器観察表	354
第13表	瓦観察表	355、356
第14表	石製品観察表	356～358
第15表	金属製品観察表	358～360
第16表	鉄滓・鉄塊系遺物観察表	361

遺構名	頁
第17表 古銭観察表	361
第18表 住居構造一覧表	361~364

遺構名	頁
第19表 中近世遺物観察表	365

写真図版目次

遺構名	頁
下東西清水上遺跡全景（南から）	1
下東西清水上遺跡全景（北から）	1
下東西清水上遺跡1区・2区・3区	2
下東西清水上遺跡2区	2
下東西清水上遺跡3区北側	3
下東西清水上遺跡3区南側	3
1号住居跡	4
2号住居跡	4
3号住居跡	4、5
4号住居跡	5、6
5号住居跡	6
6号住居跡	7
7号住居跡	7、8
8号住居跡	8、9
9号住居跡	9
10号住居跡	10、11
11号住居跡	11、12
12号住居跡	10、11
13号住居跡	12、13
14号住居跡	13、14
15号住居跡	13、14
16号住居跡	14、15
17号住居跡	15、16
18号住居跡	16、17
19号住居跡	18
20号住居跡	18
21号住居跡	18
22号住居跡	17
23号住居跡	18
24号住居跡	18
25号住居跡	19
26号住居跡	19
27号住居跡	9、10
28号住居跡	19
29号住居跡	19
30号住居跡	20
31号住居跡	21
32号住居跡	20、21
33号住居跡	21、22
34号住居跡	21、22
35号住居跡	22、23
36号住居跡	22、23、24
37号住居跡	22、23
38号住居跡	24
39号住居跡	24、25
40号住居跡	25
41号住居跡	25
42号住居跡	25
43号住居跡	25、26
44号住居跡	26
45号住居跡	26、27
46号住居跡	27、28、29
47号住居跡	29
48号住居跡	30、31

遺構名	頁
49号住居跡	30、31
50号住居跡	31
51号住居跡	31、32、33
52号住居跡	32、33
53号住居跡	32、33
54号住居跡	32、34
55号住居跡	32
56号住居跡	27、28、29
57号住居跡	24
58号住居跡	28、29
59号住居跡	27、28、29
60号住居跡	34
61号住居跡	35
62号住居跡	35
63号住居跡	35、36
64号住居跡	35、36、37、100
65号住居跡	35、36、37
66号住居跡	37
67号住居跡	37、38、101
68号住居跡	39、40
69号住居跡	39、40
70号住居跡	39、41
71号住居跡	41、42
72号住居跡	42、43
73号住居跡	42、43
74号住居跡	42、43、44
75号住居跡	27、28、29
76号住居跡	34、35
77号住居跡	34
78号住居跡	42、43
79号住居跡	34
80号住居跡	27、28、29
81号住居跡	37、38、101
82号住居跡	37、38、101
83号住居跡	44
84号住居跡	26、27
85号住居跡	42、43
86号住居跡	44
87号住居跡	44、45
88号住居跡	45
89号住居跡	45、46
90号住居跡	45、46
91号住居跡	46
92号住居跡	46、47
93号住居跡	47
94号住居跡	47、48
95号住居跡	48
96号住居跡	48
97号住居跡	48
98号住居跡	48
99号住居跡	49
100号住居跡	49、50
101号住居跡	49、50
102号住居跡	49、50

遺 構 名	頁
106号住居跡	50、51
107号住居跡	50、51
108号住居跡	51
109号住居跡	51
110号住居跡	51、52
111号住居跡	52
112号住居跡	52、53
113号住居跡	53
114号住居跡	53
115号住居跡	53
116号住居跡	53、54
117号住居跡	54
118号住居跡	55
119号住居跡	55
120号住居跡	56
121号住居跡	56
122号住居跡	56
123号住居跡	56、57
124号住居跡	57
125号住居跡	53、54
127号住居跡	57
128号住居跡	57、58
129号住居跡	58
130号住居跡	58、59
131号住居跡	59、60
132号住居跡	60
133号住居跡	60
134号住居跡	61
135号住居跡	61、62
136号住居跡	62
137号住居跡	62
138号住居跡	62
139号住居跡	62
140号住居跡	62
141号住居跡	62
142号住居跡	63
143号住居跡	63
144号住居跡	63
145号住居跡	63
146号住居跡	64
147号住居跡	64
148号住居跡	64
149号住居跡	65
150号住居跡	66
151号住居跡	66
152号住居跡	66、67
153号住居跡	67
154号住居跡	67
155号住居跡	66、67
156号住居跡	67
157号住居跡	68
158号住居跡	68
159号住居跡	68、69
160号住居跡	69、70
161号住居跡	70、71
162号住居跡	71、72
163号住居跡	72
164号住居跡	73、74
165号住居跡	74、75
166号住居跡	76
167号住居跡	76
168号住居跡	74、75、76

遺 構 名	頁
169号住居跡	74、75
170号住居跡	77
171号住居跡	78
172号住居跡	69、70
173号住居跡	78、79
174号住居跡	77
175号住居跡	77
176号住居跡	79
177号住居跡	79、80
178号住居跡	80
179号住居跡	71、72
180号住居跡	73、74
181号住居跡	80、81
182号住居跡	81
183号住居跡	81
184号住居跡	82
185号住居跡	82
186号住居跡	82
187号住居跡	82、83
188号住居跡	82、83
189号住居跡	83
190号住居跡	83
192号住居跡	83
193号住居跡	83
194号住居跡	84
1号掘立柱建物跡	84
2号掘立柱建物跡	84
3号掘立柱建物跡	84、85
4号掘立柱建物跡	85、86
5号掘立柱建物跡	86、87
6号掘立柱建物跡	86、87、88
8号掘立柱建物跡	88、89
1号竪穴状遺構	89
2・3号竪穴状遺構	89
1号溝	89
2号溝	89
3号溝	90
4号溝	90
5号溝	90
6号溝	90
11号溝	90、91
12号溝	90、91
13号溝	91
14号溝	91
15号溝	91
16号溝	91
17号溝	92
18号溝	92
19号溝	92、93
21号溝	92、93
22号溝	93
23号溝	93
24号溝	94
25号溝	94
31号溝	94
32号溝	94
33号溝	94
50号溝	94
53号溝	94、95
54号溝	94、95
55号溝	95
56号溝	95

遺構名	頁
5号土坑	95
6号土坑	96
7号土坑	96
8号土坑	96
12号土坑	96
13号土坑	96
15号土坑	96
17号土坑	96、97
18号土坑	96
19号土坑	96、97
20号土坑	96、97
21号土坑	96、97
22号土坑	96、97
23号土坑	96
24号土坑	96、97
25号土坑	96、97
26号土坑	96、97
27号土坑	96、97
28号土坑	96、97
29号土坑	96、97
30号土坑	96、97
31号土坑	97
32号土坑	98
33号土坑	98
34号土坑	98
38号土坑	98
39号土坑	98
40号土坑	98
41号土坑	98、99
42号土坑	99
43号土坑	99
45号土坑	99
46号土坑	99
47号土坑	99
51号土坑	99、100
56号土坑	100
59号土坑	100
63号土坑	100
66号土坑	100
69号土坑	100
70号土坑	100
73号土坑	100
76号土坑	101
89号土坑	101
91号土坑	101
100号土坑	101
101号土坑	101
102号土坑	101
103号土坑	101
104号土坑	102
105号土坑	102
106号土坑	102
119号土坑	102
120号土坑	102
121号土坑	102
122号土坑	102
123号土坑	102
124号土坑	102
125号土坑	103
126号土坑	103
127号土坑	103
128号土坑	103

遺構名	頁
129号土坑	103
130号土坑	103
131号土坑	104
132号土坑	104
134号土坑	104
157号土坑	104
158号土坑	104
167号土坑	104
172号土坑	104
173号土坑	104
176号土坑	104、105
177号土坑	105
186号土坑	105
187号土坑	105
188号土坑	105
189号土坑	105
190号土坑	105、106
191号土坑	106
193号土坑	106
194号土坑	106
195号土坑	106
197号土坑	107
199号土坑	107
200号土坑	107
201号土坑	105
207号土坑	107
208号土坑	108
210号土坑	108
217号土坑	108
218号土坑	108
230号土坑	108
232号土坑	108
233号土坑	108
234号土坑	108
235号土坑	109
236号土坑	109
238号土坑	109
241号土坑	109
248号土坑	109
249号土坑	109
8号ピット	109
9号ピット	109
10号ピット	109
11号ピット	109
18号ピット	110
1号井戸	110
2号井戸	110
Hr-FA 下畠跡	110
1号地下式土坑	111
中世土坑群	111
石垣	111
1号暗渠	112
4号道状遺構	112
畠跡確認面	112
倒木痕	112、113
1区西側調査区	113
3区東側溝	113
3区南側	113
192H-16	113
空中写真撮影風景	113
現地説明会風景	113
拡張区	114

遺構名	頁
作業風景	114
箕郷中生徒体験学習風景	114
前橋高等養護学校	114
2、3、4、5、6、7、8、9、10号住出土遺物	115
10、11、13号住出土遺物	116
14、15号住出土遺物	117
15、16、17、18、19号住出土遺物	118
19、21、22、26、27、29、30、32、33、34、35号住出土遺物	119
35、36、38、39、40、43・44、44、45、46号住出土遺物	120
46、47・48、47、48、49、51、52号住出土遺物	121
52、54、56号住出土遺物	122
56、57、58、59、60、64、67号住出土遺物	123
67、68、69、71、67・81・82号住出土遺物	124
72、73、74、76、79、81、82、83、84号住出土遺物	125
84、85、86、87、88号住出土遺物	126
89・90号住出土遺物	127
89・90号住出土遺物	128
89・90号住出土遺物	129
89・90号住出土遺物	130
89・90号住出土遺物	131
89・90号住出土遺物	132
89・90号住出土遺物	133
89・90、91、92、93、94、97号住出土遺物	134
98、100、101、102、108、111、112、116号住出土遺物	135
116、118、119、121、127、128、129、130号住出土遺物	136
130、131号住出土遺物	137
132、133、132・133、134、136号住出土遺物	138
136号住出土遺物	139
136、137、138、139、140、141、145、146、148、149、150、151号住出土遺物	140
152、153、156、157、158、159、160号住出土遺物	141

遺構名	頁
160、161、162、163、164号住出土遺物	142
164、165号住出土遺物	143
167、168、170号住出土遺物	144
170、171、172、173、175、176、177号住出土遺物	145
177、178、180号住出土遺物	146
179、180、181、183号住出土遺物	147
185、187、188、190号住、掘立柱建物跡、1、2、3、7、16号溝住出土遺物	148
12、19、21、25、33、53、54、55号溝、3、6、7、17号土坑住出土遺物	149
22、17、33、35、45、103、157、172、176、182、193、194、1、9、8、198・199号土坑住出土遺物	150
200、202、205、248号土坑、10号ピット、1号井戸、グリッド、55号溝住出土遺物	151
グリッド住出土遺物	152
グリッド住出土遺物	153
グリッド住出土遺物	154
グリッド住出土遺物、1区一括、2区一括、3区一括	155
3区一括	156
縄文土器集合、縄文石器	157
縄文石器集合	158
弥生・古墳・埴輪・置竈集合	159
出土暗文破片集合	160
埴埴、スラグ、銭、古代瓦	161
古代瓦集合	162
古代瓦集合	163
古代瓦・中世瓦集合	164
中近世遺物	165
群馬県出土銅製容器	166
出土炭化材の電子顕微鏡写真	167～170

報告書抄録

フリガナ	シモトウザイシミズウエイセキ
書名	下東西清水上遺跡
副書名	前橋高等養護学校建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第239集
編著者名	麻生敏隆・廣津英一
編集機関	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	〒377-8555 群馬県勢多郡北橘村下箱田784-2
発行年	1998年3月25日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
下東西清水上	前橋市青梨子町 大字清水上	10201	10005 00425	36°30'10"	139°1'4"	19951001～ 19960329	8,255m ²	群馬県立 前橋高等 養護学校 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下東西清水上	集落遺物	奈良・平安 縄文・弥生 古墳 中近世	竪穴住居 193軒 掘立柱建物 8基 土坑 249基 ピット 24基 溝 39本 井戸 2基 暗渠 1基	土師器・須恵器・灰釉陶器・ 緑釉陶器・奈良三彩陶・石 製品(砥石、紡錘車、その 他) 鉄製品(刀子、紡錘車、鏃、 鋏、その他) 縄文土器・石器	8～11世紀代の集落遺跡 銅椀・奈良三彩陶・緑釉陶 器・畿内産土師器片出土・ 暗文土器・甲斐型環・鉄製 品多数出土

第1章 調査と整理

第1節 調査に至る経緯

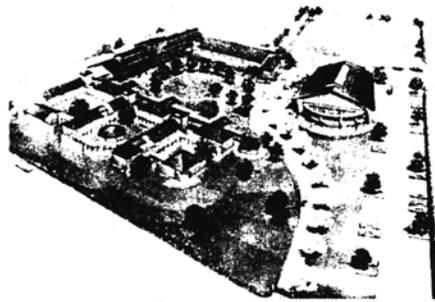
群馬県では、群馬県内の知的障害児教育の充実を図るために、従来の小・中学校までの義務教育の枠を越えて、高等教育の場、さらには職業訓練をも兼ねそなえた高等学校として、新規に県立高等養護学校を2校建設し、1997（平成9）年4月開校することとした。

群馬県教育委員会事務局管理部管理課（以後、管理部管理課と略称）では、その場所として前橋市と高崎市の2箇所を選出した。前橋地区の新設校は、（仮称）中北毛高等養護学校、正式名称を前橋高等養護学校とし、前橋市西部の青梨子町字清水上233-1番地他に建設を決定した。（第2図参照）高崎地区の新設校は、（仮称）西毛高等養護学校、正式名称を高崎高等養護学校とし、高崎東部の柴崎町字熊野前1839-1番地他に建設を決定した。

群馬県教育委員会発行の『教育ぐんま』 No.314 1996（平成8）年2月号（第1図参照）の記事などによれば、その規模はそれぞれが下記の通りである。

前橋高等養護学校は、学校全体の総面積が27,447㎡で、敷地面積は一部二階建ての延べ面積4,884㎡の木造平屋建て校舎と体育館、グラウンド、事務棟、駐車場などからなる。従来は鉄筋コンクリートを使用していた校舎や体育館には、県内木材を使用することにより温もりのある室内空間を演出するとともに、屋外木製デッキを融合させたコートハウス型の教育施設として、建設計画を立てた。一学年を五クラスとし、農業園芸科・産業工芸科・家政被服科・生活教養科の四学科を設置することとした。

高崎高等養護学校は、学校全体の総面積が29,102㎡で、同じく県内木材を使用し、周辺の田園風景に溶け込んだ温もりある伸び伸びした教育施設として、敷地面積は一部二階建ての延べ面積4,872㎡の木造平屋建ての校舎と体育館、グラウンド、事務棟、駐車場などからなる。前橋と同様に一学年を五クラスとし、農業園芸科・産業工芸科・家政被服科・生活教養科の四学科を設置することとした。



コートハウス型の温もりある木造校舎
（前橋高等養護学校）

地域に開かれた機能的な施設

平成八年度に

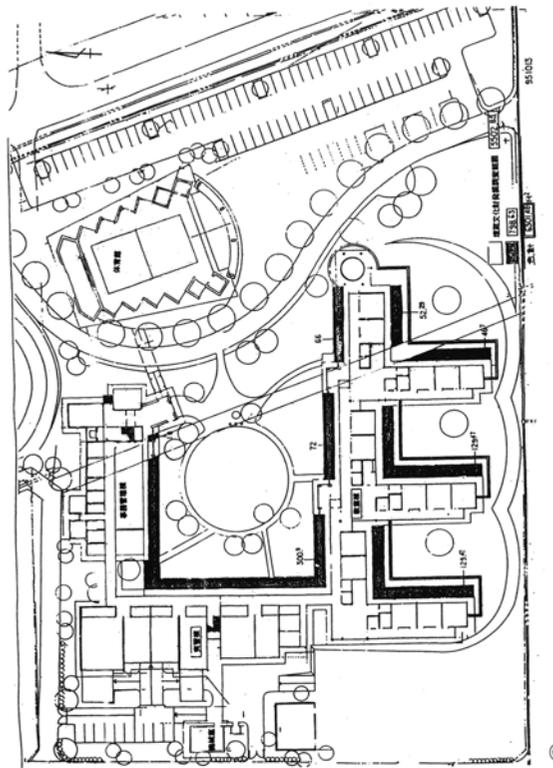
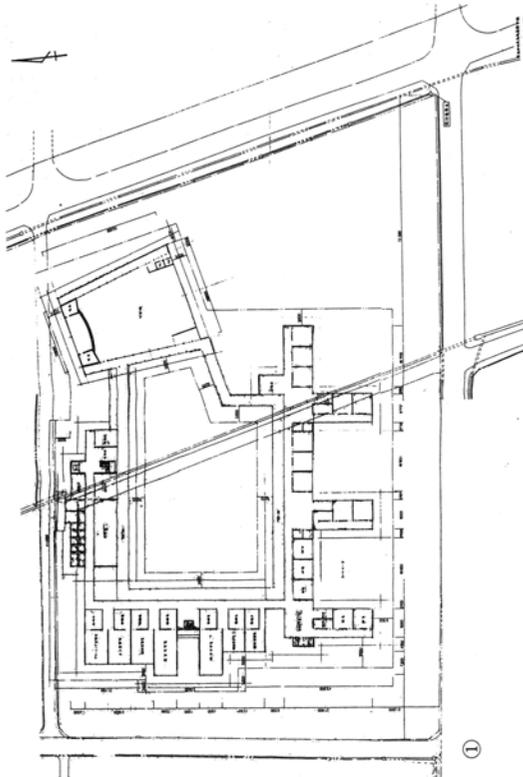
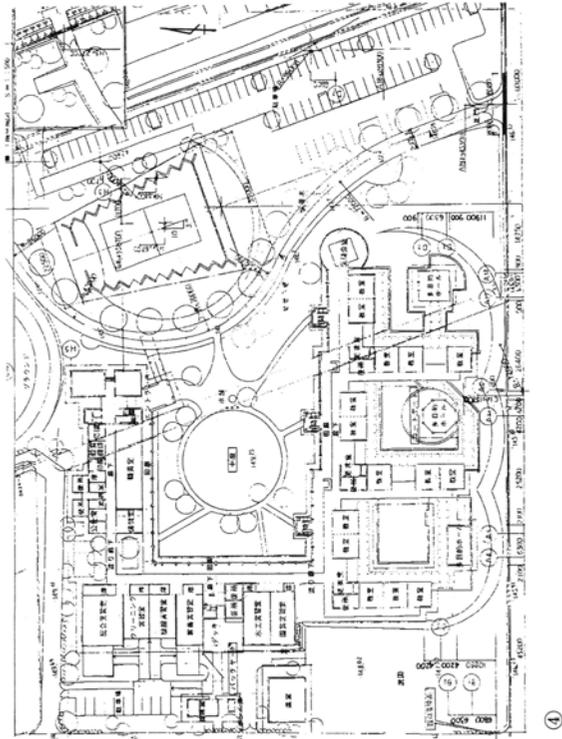
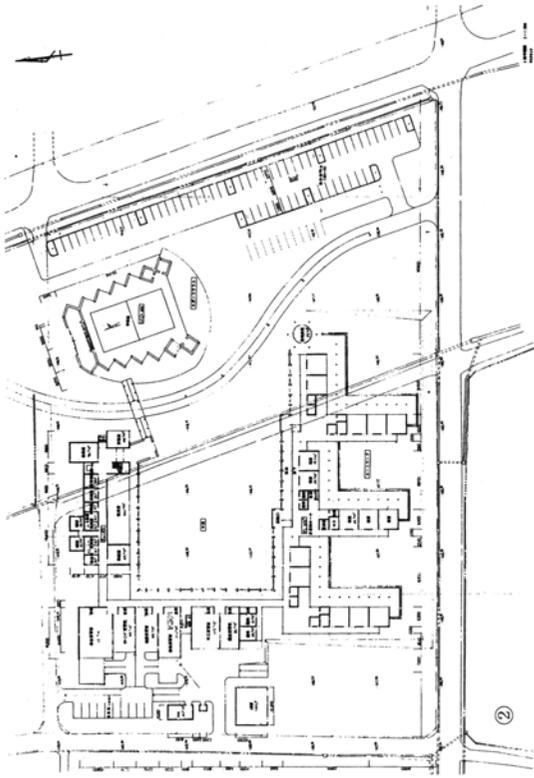
県立養護学校三校

工事着手へ

県教育委員会では、県内の知的障害児教育の充実を図るため、前橋・高崎の両市に、高等養護学校を二校新設します。
また、桐生市に設置されているあさひ養護学校を、建物の老朽化が著しく危険なために、全面的に改築します。

前橋高等養護学校（仮称）
前橋市青梨子町に、県産木材を使用し、温もりのある室内空間と屋外木製デッキを融合させたコートハウス型の教育施設として、木造平屋建ての校舎（一部二階建て、延べ面積四、八八四㎡）を建設します。
一学年を五クラスとし、四学科（農業園芸科、産業工芸科、家政被服科、生活教養科）を設置します。

第1図 前橋高等養護学校の概要



第3図 前橋高等養護学校の設計概要（3回の変更を含む）

第2節 試掘調査の経過

群馬県教育委員会文化財保護課（以後、文化財保護課と略称）では、群馬県関係機関が実施する開発事業について、平素より各課・各機関へ、文書・パンフレット等を送付したり、定期的な打ち合わせを行い、また、土地利用調整会議等の会議を通じてその把握に努め、必要な対応をとろうとしている。

平成7年5月、管理部管理課より、文化財保護課に対し、第1節で記述したような2箇所の高等養護学校建設計画について、所在地内の埋蔵文化財の有無に関する問い合わせがなされた。

これについて、文化財保護課では遺跡地図等を参照したところ、該当地が2箇所共に周知の遺跡地であり試掘調査の必要があるものと判断し、この旨を管理部管理課に回答した。この結果、工事によって地下の遺構に影響が及ぶと判断された範囲について試掘調査を実施するとともに、その結果をもとにした建設工事以前の埋蔵文化財の発掘調査を実施する方向で協議を開始した。

特に、本遺跡の周辺は、東に隣接する関越自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査で、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（以後、本事業団と略称）が実施した下東西遺跡、また西に隣接する圃場整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査で、前橋市教育委員会による清水上遺跡が発掘調査されていることから、奈良・平安時代の遺構を主体として、縄文時代・弥生時代・中近世の遺跡の広がりが想定される地域である。

本遺跡の試掘調査は、文化財保護課埋蔵文化財第一係の職員によって、平成7年5月10日から12日にかけて実施された。その結果、多数の遺構が確認された。

まず、予定地西側北半部の1～4トレンチには奈良・平安時代の住居21軒など、同時代の遺構が濃密に分布している。予定地西側南半部では、桑が植えられていたため試掘は行えなかったが、表面に土器が多数散布しているため、北半部と同様の遺構が存在するものと思われる。

予定地東側南半部の5・7・8トレンチでは、西端付近は削平のため古代の遺構は消滅しているが、東半分には住居7軒など、奈良・平安時代の遺構が分布している。

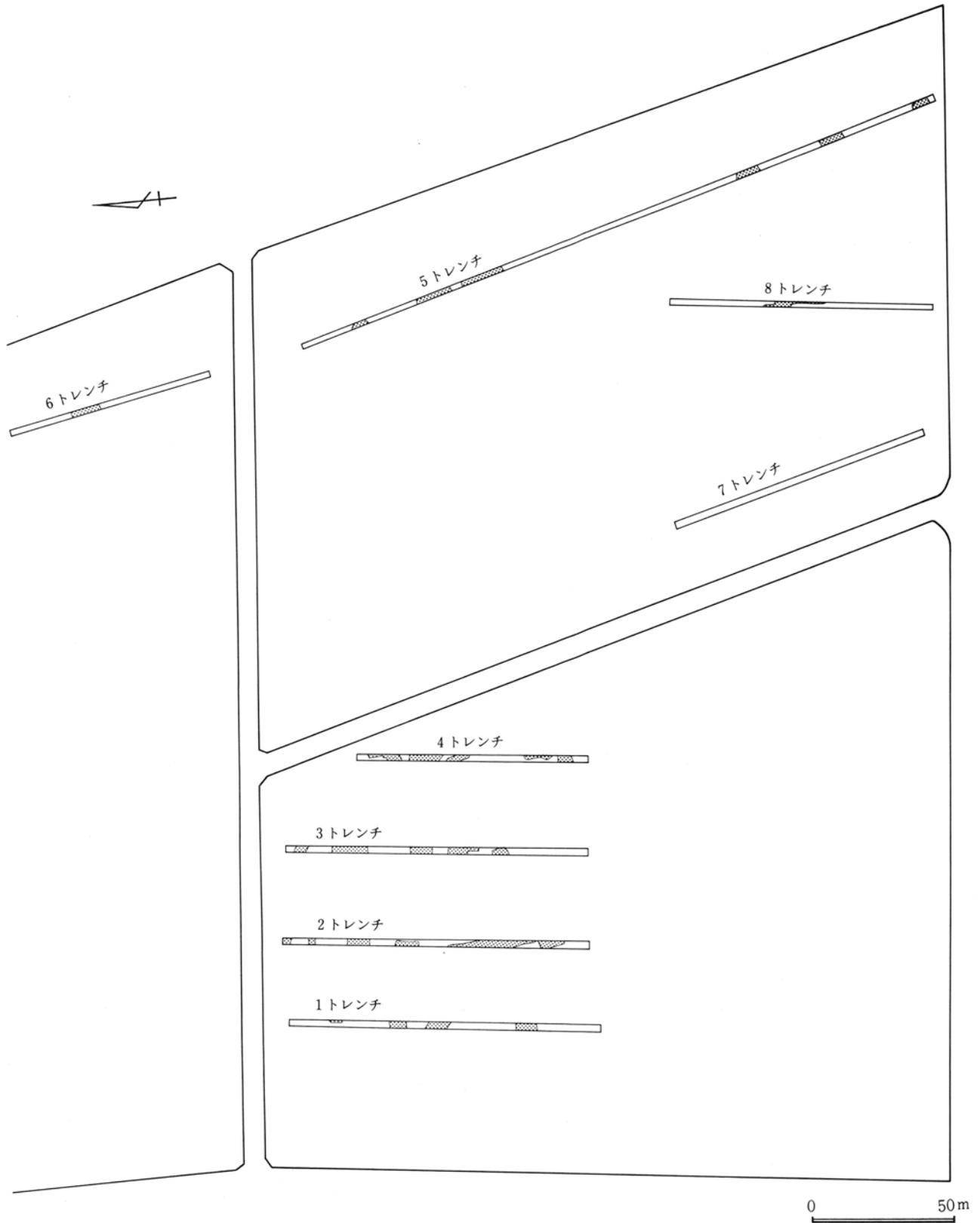
予定地東側の北半部の6トレンチは、住居1軒などの奈良・平安時代の遺構が分布している。

以上のように、対象地には主に奈良・平安時代の遺構が多数確認され、これらの遺構以外にも、土器や古代瓦などの遺物の出土が確認された。（第4図参照）

そこで、文化財保護課から、これらの遺構に掘削が及ぶ場合や2m以上の盛土を行う場合、構造物が建設される場合には、事前の発掘調査が必要と、管理部管理課に「(仮称)中北毛高等養護学校建設に伴う埋蔵文化財試掘調査の結果について(通知)」の書類で通知された。

これを受けて、遺跡の保存について協議を行ったが、事業の公共性等に鑑み、計画の一部変更等により可能な限り現状での保存を図るとともに、遺構の破壊される部分については記録保存の措置を取ることとなり、平成7年6月、管理部管理課より文化財保護課あて、該当工事に伴う埋蔵文化財調査の依頼がなされ、本調査に着手することとなったものである。

こうした経過を受けて、平成7年度後半の発掘の実施が決定し、平成8年度建設工事、平成9年度4月開校に向けて、県教育委員会の委託を受けて、本事業団が発掘調査を実施することとなった。



第4図 試掘トレンチ配置図

第3節 調査の方法

本遺跡の発掘調査にあたっては、関越自動車道建設に伴い発掘調査された下東西遺跡での調査方法を踏襲した。（「下東西遺跡」 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987 5頁参照）

これは、南北に延びる関越自動車道の発掘調査において、これまでは各遺跡毎に設定していた調査区の設定方法を統一した方法で設定することとしたためである。こうした方法は、平安京の京都府京都市や平城京の奈良県奈良市などの古代都城跡などで導入されつつあった方法で、出土遺構の位置を座標値という絶対的な数値で示すことで、相互の比較を可能にするためのものである。

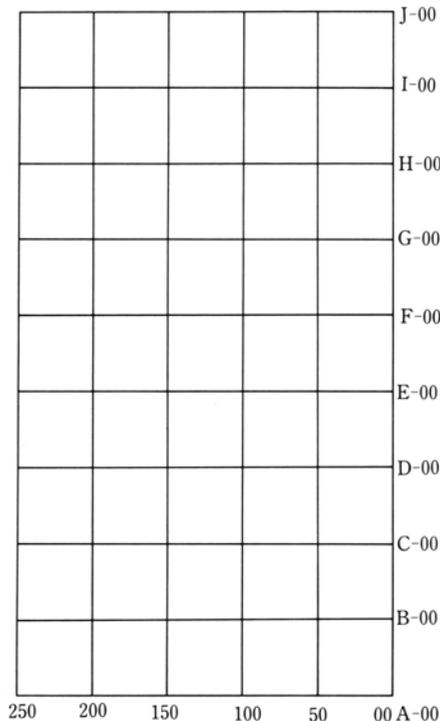
まず、グリッドの設定にあたっては、以下の通りに行うこととする。

1. グリッドの最小単位は、2 m四方とする。
2. 調査区の設定については、座標の第2象限にあてはめ、関越自動車道を横断する東西方向を X 軸とし、関越自動車道を東京側から見て新潟方向に向かう南北を方向 Y 軸とする。
3. 個々のグリッド名称は、南東隅を基準点とする。基準点を00A-00とし、その点から X・Y 軸の各方向での 2 m 四方を00A-00グリッドとする。また、アルファベットの前の数字は、X 軸方向を指し、その数値は無限大に増加する。アルファベットとその後ろの数値は、Y 軸方向を指し、A-00から順次数値が増加し、Y 軸方向へ100mごとにアルファベットも A から順次変化していく。各100mを A 区・B 区・C 区とし、最大値は当面 Z 区までとする。

すなわち、A-00より Y 軸方向へ100mの地点は、A-50ではなく B-00に変わる。（第5図参照）

基準点の00A-00は、国家座標系IX系（全国で13の区域に分かれた平面直角座標系の9番目にあたるもので、IX系の原点は北緯36°・東経139°50'である。）

X = +45,100、Y = -72,300である。



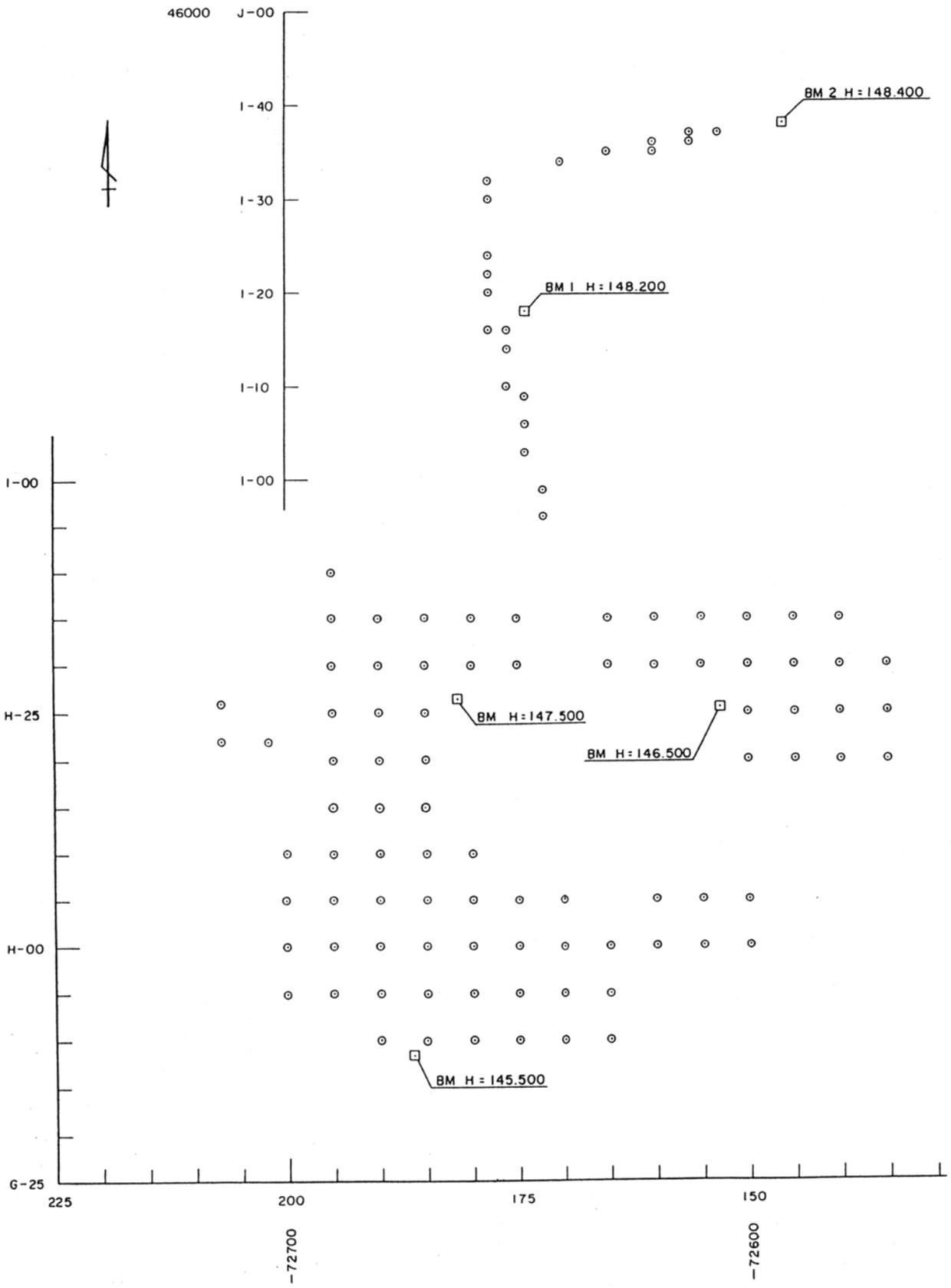
第5図 グリッド設定図

本遺跡の所在する前橋市西部は、南西に隣接する群馬郡群馬町とともに、上野国国府（現在の前橋市元総社町に推定される）や上野国分僧寺・上野国分尼寺（現在の群馬郡群馬町東国分に存在する）など、古代上野国の中枢部が南に近接していることから、国府周辺部の遺跡位置の国家座標による位置の比較が可能になることにより、国府周辺部の様相を把握する上で重要な要素となる。

さらに、今後の発掘調査の成果をも取り込むことが容易になり、研究の発展の手助けとなるであろう。

本遺跡の発掘調査では、測量会社に委託して調査範囲のほぼ全域に 2 m、ないしは 4 m 方眼で、グリッド杭を設置し、各遺構実測に使用した。（第6図参照）

ちなみに下東西清水上遺跡の今回の発掘調査範囲は、H区とI区であり、東端と南端とが120G-25グリッド、西端が210H-21グリッド、北端は144I-44グリッドである。



第6図 方眼杭設定図

第4節 発掘調査の経過

発掘調査は、公共事業である県道前橋長瀬線の公田池尻遺跡の発掘調査に従事している発掘調査3班の内の1班が、担当地区の発掘調査が終了する段階で移動することで対応することとなり、先行して発掘調査事務所の設置や調査区域の設定などの諸準備が実施された。

本調査は平成7年10月から開始した。当初は調査担当者3名に発掘作業員約45名の体制で取り掛かる予定であったが、実際には北陸新幹線の発掘調査が終了し、榛名町・箕郷町・群馬町の発掘作業員が合流するはずであったが、作業期間が延びてしまった。実際には公田池尻遺跡から移動をお願いした前橋市北西部地区の人々を中心とした小人数での開始となった。

また、実際の総面積は27,447㎡であるが、今回の発掘調査対象となるのは校舎や体育館などの建物部分と付け替え道路部分のみの約7,000㎡であり、その調査範囲の設定も設計図に合わせるために多少の凹凸が生じるなど、難しい部分も存在した。

さらに、実際には、鉄筋コンクリートの一部二階建てから総平屋木造への計画変更、さらに、施設内部の再三の設計変更（第3図参照）により、調査対象面積も徐々に拡大されて、最後に最終段階設計が12月後半に決定するまでに、4度もの計画変更がなされた。最終的な発掘調査面積も8,255㎡となった。

また、調査の開始時点では、計画がしっかりと確定していた取り付け道路から遺構の確認作業に着手したが、当初の想定よりも遺構が少ないために、少ない作業員でも十分であった。11月からの北陸新幹線の発掘調査終了に伴うさみだれ的な作業員の移動による人員増加に合わせて、校舎部分とした2区の遺構確認を始めた。遺構の数がかかなり多量であることや、南側部分の校舎の計画変更などによる面積増が見込まれる中で、さらなる発掘作業員の募集による増員と、他遺跡からの応援による図面班を含む発掘作業員の移動をお願いすることとなった。

12月上旬の打ち合わせにおいても、調査が終了した時点での1区の実取り付け道路部分の埋め戻しを12月13日から開始することと、取り付け道路部分の工事を年内に契約して、年明けに開始するために工事業者が事務所を敷地以外の場所に設置することから、安全面の確認を協議することが決まった。また、建物の基礎工事に関係して、発掘調査を通じて遺跡内の地下水の水位の確認と、遺構の深さが1m以上に及ぶ部分の位置図が欲しいとの要望があった。現時点での水位は井戸の調査から2.5mで、竪穴住居跡などの深さは50cm程度なので問題はないのだが、溝の一部や井戸が対象となるために位置図を提出した。

だが、12月中旬の打ち合わせでは、生徒の安全な通学のための通学路確保のために、南市道北側歩道と水路工事計画が急に浮上した。幅3m、長さ75mの規模で、平成6年中に発注して、平成7年度中に工事を完了させる予定とのことだが、埋蔵文化財の調査対象地と考えられていなかったために、管理部管理課と文化財保護課の協議が開始された。建物よりも発掘時期を優先して欲しいとのことで、12月13日からの1区埋め戻しに伴う重機稼働と共に対応することとなり、3軒の竪穴住居跡と数条の溝が確認され、調査した。

さらに、12月の初頭の3区の遺構確認で、想定されたよりも多くの住居跡が検出されたために、吾妻地区の調査が終了したのを受けて、沼田方面の発掘作業員17名の移動を受け入れるとともに、周辺遺跡からの図面班を中心とする移動をお願いして6名を受け入れた。

一方、平成8年度の校舎建設のためには、3区の発掘調査を1月中に着手しなければならないのだが、従来の発掘作業員のみでの増員体制では年度内の調査終了が難しいとの判断がなされた。そのため、道路建設課や前橋土木事務所との協議も実施され、その結果として発掘調査が最終局面に向かいつつあった公田池尻遺

跡からの調査担当者を含む大規模な応援体制が生まれ、3区を主体とする調査体制として展開することとなり、1月下旬から実施された。

途中、水路工事の際に、発掘調査事務所の建物越しにコンクリート製のU字溝が搬入され始めたために、安全面から中止を申し入れるなど、工事側との再度の協議が行われた。

また、校舎南側部分の計画変更による調査期間と調査予算の見直しについても協議が行われた。4月には整地のための土の搬入を予定しているために、極力は年度内の発掘調査終了が望ましいが、4月に延びる場合でも予算確保に努めることと、年度内の西毛高等養護学校の発掘調査の準備が要請された。

さらに、空撮による図化方法の導入や、測量会社への遺構実測の委託などと共に、図面作成の作業員の増員による図面班の編成、作図方法の検討や見直し、出来上がりの確認などを通じて、遺構調査のペースアップに努めた。

3月下旬には、遺跡の発掘調査の最終段階になり、事務所の撤去を含めた事務処理を進めている中で、既存道路の付け替え工事が急に開始された。やはり埋蔵文化財の調査対象地と考えられていなかったために、管理部管理課と文化財保護課の協議がなされ、急いで確認作業と発掘調査を実施し、9軒の竪穴住居跡と数条の溝が確認された。

このように、今回の調査では、度重なる計画変更と、遺構数量が想定された以上に検出されたことから、発掘調査費用と発掘調査工程の見直しが数度に渡った。発掘調査の実施にも多大な影響が生じたことは事実である。その都度の協議を通じてなんとか調査終了までこぎ着けたと言える。

工事に関しても、1月からは予定通りに平成7年度中に取り付け道路部分の先行建設工事が開始され、発掘調査区の明け渡し後、平成8年度の本格的な建設工事を経て、平成9年度の4月開校にこぎつけた。

一方、用地買収が遅れていた西毛高等養護学校建設予定地の試掘調査も、文化財保護課により完了し、台地部分に平安時代の竪穴住居跡が、低地部分にAs-B下水田の存在が認められた。校舎の設計計画も固まっており、工事も5月に入札、6月に着手予定とのことで、埋蔵文化財の発掘調査の時期を4月から6月の3ヶ月でお願いしたいとの要請が出された。

だが、その時点では中北毛の調査の優先ということで、とりあえずは3月末での発掘調査事務所の設置と、4月以降の早急な体制作りに取り組むための努力が続けられた。こうして、平成9年度当初からの発掘調査作業が開始された。

また、遺跡の発掘を通じて関心を持っていただいた地元の自治会役員の方々からの申し入れもあり、地元の人々への遺跡の内容の説明会を行うこととなり、発掘調査終了間際の3月23日に実施した。その内容は、事務所内での主要な出土遺物の展示や、遺跡での遺構説明などである。強い風が吹く中、50名近い方々が見学に訪れ、規模は小さいものの、充実したものであったと思える。

さらに、発掘作業員の中に中学校PTA役員の方が在職していた縁で、箕郷町立箕郷中学校の2年生徒の職場体験の場として、町外ながら本遺跡が選ばれ、3月7日に9名もの中学生が先生の案内で遺跡を訪れ、埋蔵文化財の説明と遺跡の発掘作業体験を行い、その感想文も後日いただいた。

第5節 発掘調査の進行状況

発掘調査日誌抜粋

- 平成7年10月2日 引越。事務所周辺整備。重機搬入。公田池尻II班からの応援。
- 4日 1区表土剥ぎ、遺構確認作業開始。
- 5日 2区表土剥ぎ開始。
- 6日 1区一部の遺構確認開始。
- 9日 北陸新幹線・下芝五反田班からの発掘作業員移動打ち合わせ。
- 11日 遺構調査開始。清里地区自治会連合役員来跡。
- 12日 1区ベンチマーク2ヶ所設置。
- 13日 概念図作成、管理部管理課来跡、遺構確認作業。公田池尻II班の応援終了。
- 16日 この日から下芝五反田班より発掘作業員24名合流。
- 17日 2区方眼杭設置。
- 23日 下芝五反田班より合流（第2次、主として図面班・事務7名）。空撮準備。
- 24日 空撮。3区表土剥ぎ開始。
- 25日 調査区周辺の安全対策として、杉杭・トラロープ・安全板設置。2区遺構確認作業開始
- 26日 3区遺構確認作業開始。
- 11月1日 発掘作業員下芝班より最終合流6名。
- 9日 2区方眼杭設置追加。
- 13日 2区全体概念図（縮尺1/400）作成開始。
- 14日 3区全体概念図（縮尺1/400）作成開始。
- 24日 3区ベンチマーク・方眼杭設置追加。
- 27日 追加部分遺構確認準備。
- 30日 方眼杭の一部に誤差判明、修正作業。1区1号井戸湧水量及び湧水層確認。
- 12月1日 2区トレンチ調査。3区試掘トレンチ調査。
- 5日 2区住居調査開始。南側遺構確認。
- 6日 1区埋め戻し打ち合わせ。中世古銭出土（6～7枚）
- 7日 電気配線完了、使用開始。2区南側全体概念図（縮尺1/100）作成。畑部分全体図（縮尺1/40）作成。
- 8日 2区1号地下式土坑調査開始。
- 11日 鯉沢・白井北中道班より発掘作業員9名合流。
- 12日 県高等学校教職員新任研修（約120名）来跡。
- 13日 1区取り付け道路部分埋め戻し作業開始。
- 14日 昭和女子大学生来跡。
- 15日 1区埋め戻し作業完了。
- 18日 管理課・文化財保護課・事業団、調査工程三者会議。
- 19日 2区南端の石垣を圃場整備前の崖法面と確認。
- 20日 石垣の下の土管より湧水噴出。公田池尻班からと沼田方面からの、発掘作業員移動打ち

合わせ。

21日 前橋市教育委員会唐澤氏来跡。(清水上遺跡の件で)

25日 強風のため作業に影響、午後散水車導入。

27日 2区全体概念図補正。年内作業終了。

12月28日～平成8年1月4日 正月休み。

平成8年1月5日 作業再開。公田池尻班より発掘作業員4名合流。(図面班)

8日 沼田方面の発掘作業員16名合流。

9日 文化財保護課と補正予算の件で打ち合わせ。

12日 3区側道部分調査完了。

16日 ローリングタワー1組搬入。

17日 三者工程会議、プレハブ追加設置、14号住から緑釉出土。

18日 管理課課長来跡。

19日 46号住から紡錘車(未成品)出土。

22日 公田池尻班からの応援25名。3区南側部分遺構確認。

26日 56号住の炭化材、より少量の骨・種子出土。

29日 取り付け道路工事業者プレハブ設営準備。

30日 強風のため散水車導入。

31日 2区建物南限4ヶ所・3区方眼杭設置。

2月1日 古環境研究所早田氏による層位分析。

2日 3区南側埋め戻し開始。

5日 三者工程会議。

6日 桜岡氏により44号住坏が甲斐型と判明。

7日 古環境研究所早田氏による総社砂層上位の再確認。

8日 事業団普及資料課によるビデオ撮影の件の打ち合わせ。

13日 82号住床下土坑、小鍛冶か。1・3区東側水路掘削工事の規模が大きいために、三者による現地協議。

14日 水路工事の立ち合い調査。

15日 三和班との発掘作業員移動の打ち合わせ。

16日 箕郷町立箕郷中学校2年生の職場体験の申し入れ。

19日 雪の除雪作業、前橋北部からの発掘作業員8名合流。緑釉破片出土。

20日 東側水路工事に伴う埋め戻しの件で協議。

21日 普及資料課によるビデオ撮影。写真・スライド整理開始。水路工事に伴うコンクリートU字溝の搬入作業の安全面で、注意申し入れ。

22日 3区調査終了。南側水路工事開始。

23日 公田池尻班の応援終了。

26日 箕郷中学生職場体験の件打ち合わせ。

27日 発掘作業終了後の埋め戻しが4月以降に決定。

第1章 調査と整理

- 3月1日 172号住より銅製品出土。
- 4日 地元自治会らの遺跡説明会開催の申し入れ。
- 7日 箕郷中学校2年生9名による職場体験。
- 8日 前夜の積雪のため作業進まず。
- 11日 箕郷中学校校長・教頭・先生、職場体験のお礼で来跡。
- 12日 強風のため空撮延期。
- 14日 遺跡説明会用のカラー写真パネル作成を発注。
- 15日 雨のため室内作業。
- 19日 前橋市立元総社北小学校から見学申し入れ。
- 21日 元総社北小の先生来跡。遺跡見学会用のパンフレット印刷・搬入。
- 22日 遺跡説明会展示準備。
- 23日 遺跡説明会。高所作業車による撮影。
- 25日 2区北側現有道路の拡幅工事で、竪穴住居跡確認。三者協議により、緊急発掘調査開始。
- 26日 調査終了。引越開始。

第6節 整理作業

本遺跡の整理は、整理期間の算定作業による1年6ヶ月との査定を経て、平成9年度から実施される予定であった。だが、実際には下東西清水上遺跡の発掘調査終了後の平成8年度に発掘調査を実施した高崎高等養護学校建設に伴う柴崎熊野前遺跡が、委託者が同一の群馬県教育委員会事務局管理部であるために、両遺跡の整理事業を抱き合わせ実施することに変更となった。

こうして、18ヶ月と算定された本遺跡の整理期間と、6ヶ月と算定された柴崎熊野前遺跡の整理期間とを合わせる形で、2年で1班ずつの予定から、1年で2班の体制へととなったのである。1年半の班（1.5班）と半年の班（0.5班）の構成である。

整理作業の内容は、従来の方法を踏襲して、下記の通りに実施した。

(遺物)	(遺構図)	(その他)	(収納)
1. 出土遺物確認、点検	1. 図面確認	1. 観察表の入力	1. 遺物の台帳入力準備
2. 接合・復元	2. 図面台帳作成	2. 台割・レイアウトの作成	2. 遺物の収納
3. 器種観察	3. 遺構実測図修正	3. 原稿の執筆	3. 図面類の収納
4. 実測個体の選び出し	4. 第2原図作成		4. 写真ネガのアルバム類の収納
5. 遺物台帳作成	5. トレース		5. スライド類の収納
6. 実測・トレース	6. 図版組		
7. 図版組			

以上の作業工程を経て、本報告書の作成と、本遺跡関係資料の収納を終了した。

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

下東西清水上遺跡の所在する群馬県前橋市は県庁所在地であり、県中央部に位置する。標高は約75m～640mの間にあり、利根川の左岸に位置する赤城山西南麓斜面に広がる東部地域と、右岸の榛名山東南麓斜面に広がる相馬ヶ原扇状地の西部地域とに大きく区分される。

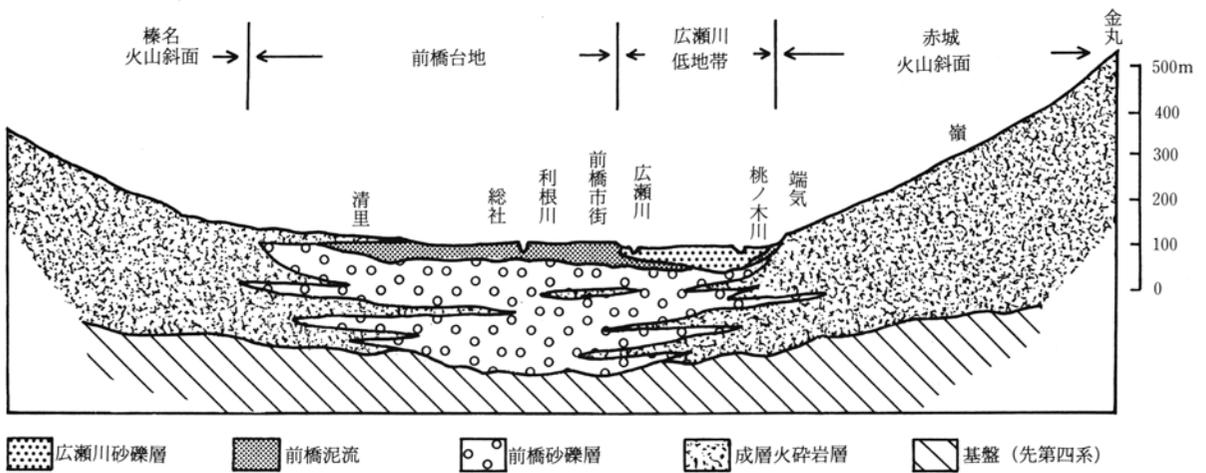
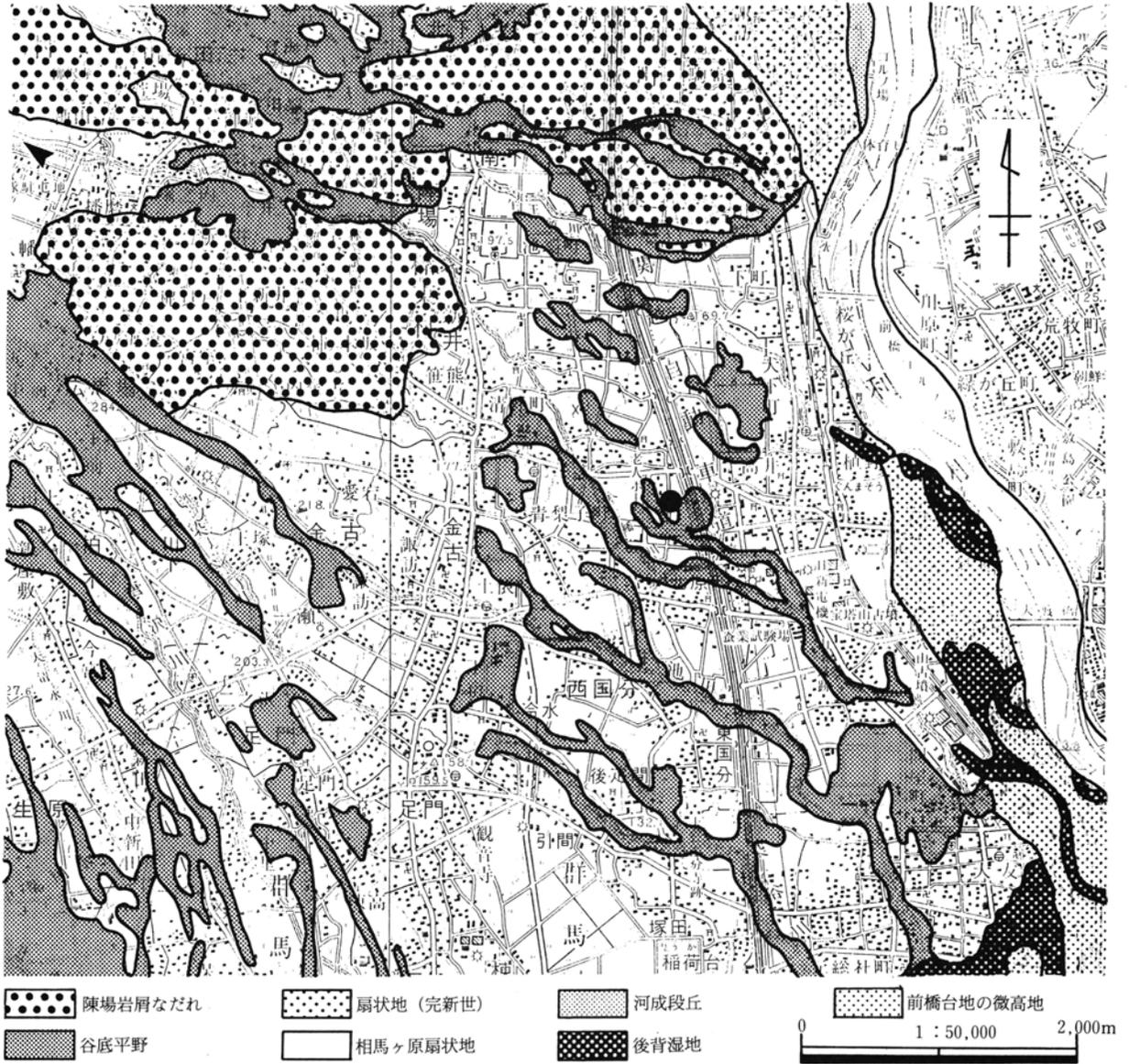
本遺跡は、前橋市青梨子町に所在する。北を牛王頭川、南を八幡川による開析により区切られた、台地の南側に位置する。標高は発掘調査範囲のみに限っても約145～149mである。地形的には、相馬ヶ原扇状地から第四紀に形成された前橋台地までの移行地帯に位置し、東に緩やかに傾斜している地形面を形成する。そのために河川も北西から南東に向かって自然地形に沿う形で流れ下る。また、河川による開析は上流部では山麓を深く刻み込んだ放射谷を形成し、原地形面をかなり侵食しているが、本遺跡の位置するような傾斜が緩やかになる移行地帯では放射谷は幅が広くなるとともに、河床との比高も次第に浅くなり、原地形面がほとんど侵食されずに広がっている。(第7図参照)

早田勉氏(『群馬県史 通史編1』 1990)によれば、地質上の構成では、利根川の堆積物である厚さ200m以上にも及ぶ「前橋砂礫層」が前橋台地の成因として広く分布している。その上位に厚さ約5～15mの「前橋泥流」と呼ばれる火山岩の岩塊や火山灰などが多く含まれる火山起源の堆積物(火山泥流堆積物)層がある。この層は全体として黄褐色を呈し、硬く締まっている。灰色や黒色の垂角礫から角礫の火山岩を多く含み、利根川の現河床にみられる花崗岩類や緑色凝灰岩などの円礫が含まれていることもある。また、堆積物中には水で流されたような層理を認めることはできない。この泥流を上流部に追跡すると、中之条盆地に分布する「中之条泥流堆積物」、さらに浅間山北麓に分布する「応桑泥流堆積物」に相当する。これらの堆積面の上には流れ山が認められる。特に、応桑泥流は浅間山の山体崩壊により発生した岩屑なだれであることは明白なので、前橋泥流の起源も浅間山の山体崩壊が原因であることが分かる。

また、含まれていた炭化していない木片の年代測定から、前橋泥流の堆積年代は $24,000 \pm 650$ yBPの数値が得られている。地層からも、下位にAT(始良Tn火山灰)が発見され、As-BP(浅間一板鼻褐色軽石群)が上位と下位に認められたことから、前橋泥流の発生年代を約24,000年前と考えられる。

前橋泥流の堆積直後から、流水による侵食が始まったと考えられる。上流の流域面積が広い利根川や榛名山に起源をもつ河川は、急速に深い谷を形成し、谷はその後、厚い礫層により埋没している。礫層の上位には淘汰の良い砂層が載り、さらにその上位にAs-Sr(浅間一白糸軽石)が堆積している。

この前橋泥流の上位に、厚さ約4mの前橋泥流に良く似た褐色の火山灰質の泥流堆積物が認められる。この堆積物の直下にはAs-Srが、上位にはAs-YP(浅間一板鼻黄色軽石)が堆積していることから、泥流の堆積年代は約14,000年前と推定される。この堆積物は岩塊相と基質相の組み合わせからなることから、山体崩壊に伴う岩屑なだれの堆積物に由来していると考えられる。層位や分布域、そして含まれる岩片の特徴から、榛名山東麓に分布する「陣場岩屑なだれ」と同一と推定される。陣場岩屑なだれ堆積物の堆積面上には、流れ山が多く認められる。山体崩壊の年代は比較的新しいものの、崩壊跡はほとんど残されていない。これは相馬山の一部が崩壊したのか、あるいは崩壊の跡に相馬山が噴出して覆い尽くしているのか、尾根の一部が崩壊したものであるかのいずれかのためであろう。この岩屑なだれにより榛名山の東南麓の地形は一変し、



第7図 遺跡近辺の地質図

土石流や洪水として岩屑が下流に運び出され、その結果、山麓には「相馬ヶ原扇状地」が形成された。この扇状地の形成は短期間のうちにほぼ終了し、As-YPの降灰時(13,000~14,000年前)にはすでに大部分が離水していたと考えられる。

さらに新しい段階に、前橋泥流堆積物が侵食されて形成された平坦面上の凹地に泥炭層の堆積が認められる。泥炭層はAs-Srの上位に砂層を挟んで発達しており、泥炭層そのものはAs-YPを境として、下部の未分解の泥炭層と上部の分解が進んだ黒泥層に区別される。この泥炭層は、「前橋泥炭層」と呼ばれ、13,130±230yBPのC14年代が得られている。砂層下部の泥炭層からは針葉樹の植物化石が多く発見されており、当時はチョウセンゴヨウ、バラモミ節、カラムツ属を主要素とする比較的単調な森林が広がっていたことが推定される。

また、利根川右岸の前橋泥炭層の上位に「総社砂層」と呼ばれる、葉理が発達した淘汰の良い灰色砂層がある。この堆積物は現在の総社の市街地が載る扇状地を形成しており、厚さは5mを越える場所もある。

総社砂層とAs-YPの間には、分解が進んだ泥炭層が認められる。その中でも、As-Sj(総社軽石)が挟まれている。このAs-Sjの噴出年代は約1万年前と考えられている。

前述したように、相馬ヶ原扇状地は約13,000~14,000年前に大部分の離水が終了していたと考えられるが、一部に新しい扇状地堆積物に覆われた地域が存在する。いくつかの縄文時代の遺跡での調査結果から、相馬ヶ原扇状地上にも、縄文時代のある時期に堆積した砂層が存在する。この砂層は地下で総社砂層に連続している可能性があり、もしそうならば総社砂層の分布はかなり広い範囲に及ぶことになる。

一方、前橋台地上を流れる榛名山を源とする小河川沿いでも、As-YPとAs-C(浅間C軽石)の間の層準に砂層の堆積が認められることが多い。この砂層は、自然堤防全体あるいはその一部を構成している。現在、前橋台地上に発達する自然堤防の基礎は、おおよそ縄文時代のある時期に造られたと考えられる。また、赤城山南麓の宮川付近で認められた縄文時代に谷を埋めた堆積物も、この総社砂層や自然堤防堆積物と一連のもの可能性がある。

つまり、縄文時代早期頃に、すでに相馬ヶ原扇状地から前橋台地にかけて存在していた谷を洪水堆積物が埋積し始めた。縄文時代前期から中期には、場所によって自然堤防が形成されるようになり、その後縄文時代前期から後期までその形成が続いたと考えられる。

完新世では、浅間山のみならず、6世紀の榛名山の2回の噴火活動にも特筆するものがある。ニッ岳の形成に伴う2度の大規模な噴火で、年代は共に古墳時代の6世紀初頭のHr-FA(榛名—ニッ岳火山灰)と、6世紀中葉のHr-FP(榛名—ニッ岳軽石)である。これらの噴火に伴う火山灰や軽石の噴出・堆積、火砕流や洪水による多量の堆積物による集落や水田・畑の埋没を引き起こし、榛名山麓一帯を中心に大きな被害をもたらした。前橋台地上では、これらの噴火に伴って発生した泥流や洪水で大きな地形の変化が起こっており、その影響はその後の地形変化にまで大きく及んでいる。2回の噴火の際には火砕流が発生し、火砕流は流動中に泥流や洪水となって下流に到達した。テフラや火砕流などによって荒廃した地域からは、多量の土砂が下流に流れ下り堆積した。榛名山を源とした諸河川では、上流部で谷の埋積が起こった。埋積した堆積物は現在、相馬ヶ原扇状地を切る谷の中の低位の段丘を構成している。一方、中流から下流にかけての前橋台地上では、河川沿いに自然堤防が形成されている。

一方の浅間山からは、4世紀中葉の噴火に伴って噴出したAs-C(浅間C軽石)直下から県内最古段階の水田が発見された。このAs-Cは比較的単純な軽石噴火に由来していると考えられる。普通As-Cは、黒ボク土中では黄褐色、水成堆積物中では白色の発泡の良い軽石として認められることが多い。前橋台地においてHr

第2章 遺跡の環境

-FAの下位にAs-Cが認められる場合には、堆積後に攪乱を受け、黒ボク土中に散在している場合が多い。これは耕作による攪乱を受けたものと考えられる。

その後、幾度となく噴火を繰り返してきた浅間山の噴火活動のなかで、最大規模の噴火が平安時代後期の1108（天仁元）年の噴火である。この噴火の年代については、従来は1281（弘安四）年とする考えもあったが、「中右記」の記載と堆積物の調査、考古学資料の検討の成果などから、最近では天仁元年と考えられるようになってきている。

この時に噴出したのは、As-B（浅間Bテフラ）と呼ばれる降下テフラと追分火砕流堆積物からなる。テフラは多くのユニットから構成されている。噴火はまず、灰色火山灰の噴出から始まった。この時のテフラは薄いにもかかわらず、前橋市付近でも認められる。火山灰の噴出に続いて発生した噴火は、群馬県内に広く、そして厚く軽石を降らせた。この軽石は、当時前橋台地に広がっていた田畑を覆って堆積した。特に、水田に対する降灰の影響は大きく、前橋台地の一部を除く大部分の地域では降灰後に水田耕作が放棄され、後に畑作へと転換せざるをえない状態となった。

一方、追分火砕流が引き起こした災害については、詳細が不明な部分が多いものの、後述する天明の噴火に伴う火砕流より、はるかに大規模であったことから、かなりの規模の災害が起こったと考えられる。火砕流堆積物は吾妻川沿いでも認められることから、火砕流が吾妻川に流れ込み、下流に大きな災害を与えたことが想定される。

さらに、江戸時代中期の1783（天明三）年の夏に起こった、いわゆる「天明の噴火」は、わが国の火山災害史上、最も有名な災害の一つで、この時の様子については、多くの古文書に記されており、生々しい災害の状況が読み取れる。

この時に噴出したテフラは、As-A（浅間A軽石）と呼ばれている。その被害は浅間山東麓のみならず、高崎・前橋・伊勢崎方面にまで、火山灰や軽石による家屋の破損や水田・畑の埋没を引き起こしている。特に、水田に対する影響は大きく、復旧が試みられるものの、大部分の地域の水田耕作が放棄され、畑作への転換を余儀なくされている。

一方、降灰があまりなかった北麓には、まず小規模な「吾妻火砕流」が流れ下り、次に「鎌原火砕流」と呼ばれる高温の火砕流が発生した。火砕流は1,000度近い温度を保ったまま、時速100mを越える速さで山体斜面を流れ下ったと推定されている。火砕流に含まれていた本質物質は、流走中に山麓に堆積していた土壌などと置き代わり、岩屑なだれとなって流れ下ったようである。その一部が吾妻川に流れ込むことにより、泥流となってさらに下流に及んだ。泥流は時速30～40mで吾妻川を流れ下り、利根川を流れ下る際には、旧利根川の流路であった広瀬川低地帯に一部流れ込み、また、谷壁の比高が小さくなった前橋市南部の公田町付近では、蛇行部の攻撃斜面側の台地上にあふれ、そして伊勢崎の南を流れていた七分川を埋めた。同時に、吾妻川から利根川沿いの集落や田畑にまで多大な被害を与えた。

このように、群馬県内は浅間山や榛名山による火山災害を何度も受けながら、その都度ごとに復旧作業を繰り返してきたことが、文献資料のみならず遺跡の発掘調査からもうかがうことができる。

本遺跡周辺の土地利用では、南北に横切る関越自動車道の東側では、区画整理が進み、住宅のみならず、工業団地や商業地としての利用が進みつつある。一方の西側は一部に宅地化が進みつつあるものの、全体では圃場整備と用水整備による水田と桑畑や野菜畑が広がり、昔ながらの田園風景を残している。

第2節 基本土層

本遺跡の所在する前橋市は榛名山東南麓で、浅間山の東方に位置するために、その基本土層の堆積にはこの二つの火山から噴出した火山灰や軽石の噴出総量と降下分布範囲とが大きく影響する。浅間山と榛名山の火山活動に伴う噴出物は数も多いことから、本遺跡でもその影響を受け、浅間山起源のテフラと榛名山起源のテフラがいくつも確認されている。(第9図、第1表参照)

ここでは、基本土層について記述する。(第8図参照)

第I層 暗褐色土 表土であり、現在の耕作土でもある。一部に鉄分沈着による水田床土が確認できる。個々の遺構では、昭和50年代の圃場整備による水田土壌と、それ以前の畠土壌に区別することも可能であるが、ここでは一括しておく。現在の地表面から約10～30cmの堆積である。

第II層 暗褐色土 As-B や一部に As-A を含む。耕作などの攪乱で交じり混んだものと考えられる。下東西遺跡の第II層に相当する。

第III層 暗褐色土 上面が遺構確認面でもある。遺跡の東側の一部に認められる。

第IV層 Hr-FA 遺跡内では、1区南西部の古墳時代の畑の畝間などの一部にしか認められない。純堆積層である。

第V層 黒褐色土 As-C を含む。下東西遺跡の第III層に相当する。

第VI層 褐色土 若干の軽石類を含み、粘性をもつ。縄文時代から弥生時代にかけての包含層でもある。いわゆる黒ボク土である。下東西遺跡の第IV層に相当する。

第VII層 黄褐色土 ローム漸移層である。

第VIII層 黄褐色土 ローム土層である。

第IX層 総社砂層 下東西遺跡や国分境遺跡の発掘調査当時は認識されておらず、水性堆積のローム土、砂礫、砂の互層と考えられていた。2号井戸などの断面から、厚さは2m以上である。下東西遺跡の第V層から第VII層に相当する。

I
II
III
IV
V
VI
VII
VIII
IX

第8図 基本土層模式図

第2章 遺跡の環境

前記の土層分類は、本遺跡の東に隣接する下東西遺跡の地層区分を参考に、周辺遺跡の北原遺跡、国分境遺跡、熊野谷遺跡などとの対比を通じて行っているが、あくまで考古学サイドの線引きであり、地質学的な地層区分とはおそらく異なる場合があると考えられる。

なお、本遺跡での地質学的な部分については、第5章第2節でテフラ分析として詳細に記述しているのので、参照してもらいたい。

一般に、地層が形成される上で火山の噴出物であるテフラの堆積は重要な要素である。そこで前記したように、本遺跡周辺で分布が考えられるテフラについてみてみることにする。(第9図、第1表参照)

浅間山起源の軽石は、純粋な堆積層の形ではなく、後世の畠などの遺構によって著しく攪乱されてしまい、上位の地層に含まれるものが多く、そうした形で何枚も確認されている。本遺跡の基本土層で見ても、江戸時代のAs-Aや平安時代後期のAs-Bは、主として第II層に含まれているが、第I層の表土にも僅かな量であるが一部含まれている。

また、古墳時代初頭のAs-Cは奈良時代や平安時代の竪穴住居跡などが確認される面の地層である第V層中に、同様に後世の畠などの遺構によって著しく攪乱された状態で含まれている。

一方、榛名山の軽石である古墳時代の6世紀初頭のHr-FPや、6世紀中葉の火山灰であるHr-FAは、主として榛名山の北東から東方面の山麓に厚く降り積もっているが、一部は本遺跡周辺にも堆積している。

本遺跡での具体的な様子は、Hr-FAが畠の畝間に残った状態で確認されている。つまり、古墳時代のHr-FAの噴出段階で、畠が存在した部分の畝や畝間にHr-FAが堆積し、その後の畠などの耕作で畝の部分がかなり削平されてしまい、畝間のみが残存していると考えられる。

本遺跡内では、Hr-FAで埋没した畠跡は1区の南側のみに残存しているが、群馬町北東部から前橋市北西部にかけての一带での発掘調査では、台地部分では必ずと言っていいほどにHr-FAが畝間に残った状態で検出されることから、古墳時代のHr-FAで埋没した畠跡が広がっていることが確認されている。そのことから、本来は本遺跡でも全体に存在していたものと考えられる。

だが、井野川や染谷川の流域の標高100m前後では、主に低地部分を中心に畠跡ではなく、Hr-FAなどで埋没した水田跡が広く検出されるのである。

また、堆積した土層はそのままの厚さで残っているのではなく、前述したように後世の遺構の造成や畠などによる攪乱により土の一部が動いたりしている訳である。

特に、50年代の圃場整備はこの地域での大規模な事業であり、その際にかかなりの土が動いている。そのために、近世から現代にかけてのテフラなどが残りづらい状況がある。旧地表付近の土が動くことにより、掘り込みが浅い遺構は、消失してしまう恐れがある。こうしたことが、中世・近世、さらには、近代・現代の遺構の検出・確認の妨げとなっていることが多い。

一方、第1節で記述したように、火山活動により発生する火砕流や泥流堆積物の厚い堆積により、谷の埋積や河川流域の地形が大きく変化するとともに、旧地表が深い地下にもぐり込んでしまう場合がある。場所によっては、遺跡の確認どころか、旧地形の確認すらできない所もあり、発掘調査の進行を安全面からも含めて妨げるのである。本遺跡でも、2万年以前の洪積世にあたる前橋泥流層、その後の前橋泥炭層や総社砂層などが数m以上も堆積していることから、約1万年前より以前の様子が面的にも把握できないのである。

第3節 歴史的環境

本遺跡の周辺には前述したように、本遺跡の東に隣接して関越自動車道の建設工事に伴い、本事業団が発掘調査した下東西遺跡が、西に隣接して圃場整備工事に伴い事前に前橋市教育委員会が実施した清水上遺跡がそれぞれ存在する。(第10・11図、第2表参照)

以下、各時代についてみていくこととする。

旧石器時代 赤城山南麓のうちの前橋市東部や、最近の北陸新幹線建設に伴う榛名山西南麓での発掘調査で、箕郷町の白川傘松遺跡、和田山古墳群や榛名町の白岩民部遺跡、三ツ子沢中遺跡などのAT下位を中心とした旧石器時代の遺跡が徐々に増えているが、赤城山東南麓や利根川上流域などと比較すると少ない。

これは、第2章第1節の地理的環境で記述したように、約13,000～14,000年前に相馬ヶ原扇状地の形成が終了し、離水や段丘化という地形の変遷を繰り返していた榛名山南東麓に位置する本遺跡周辺では、人の生活活動に適していないために発見されにくいであろう。

縄文時代 本遺跡周辺での縄文時代の集落展開は、前期から中期にかけての発展期と、後期から晩期にかけての衰退期とに大別できるとされている。遺構そのものは検出されていないが、本遺跡は出土した遺物から前者に相当すると考えられる。

周辺では、下東西遺跡(2)で前期の諸磯段階の土坑、上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡群(86)で中期の加曾利E式の住居群、清里長久保遺跡(24)では前期から後期にかけての竪穴住居跡11軒、清里陣場遺跡(99)では中期の加曾利E式の土坑が検出されており、最近の発掘調査では、前橋・伊香保線バイパス予定地の長久保大畑遺跡(22)から前期と中期の集落が検出されており、多量の土器や石器が出土している。

だが、ある程度の規模をもつ集落がみられる遺跡は、上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡群だけで他の遺跡は規模が小さい。時期的には前期から後期前半といった範囲でおさえられる。

弥生時代 本遺跡周辺の弥生時代の集落は、中期に出現し、後期になって急増するという傾向を示すとのことであるが、現在までの発掘調査事例は少なく、下東西遺跡で3軒の竪穴住居跡、上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡群では後期の竪穴住居跡12軒が検出されている。清里庚申塚遺跡(18)からは竪穴住居跡21軒の中期後半の環濠集落が検出されている。

だが、井野川や染谷川の流域の遺跡群に比べて規模が小さいことから、標高100m前後の河川流域や低湿地などを中心とした水田遺構の広がりが確認されているのに対して、本遺跡周辺では乾燥化した土壌による畑遺構の広がりなど地形的要因から生じる生産基盤の差が、その背景にあると考えられる。

古墳時代 本遺跡周辺の古墳時代の遺跡としては、最近の大規模開発に伴う発掘調査で古墳のみならず、集落や生産遺構などが次第に明らかにされつつある。

古墳は比較的多い地域であり、本遺跡の東には王山古墳・宝塔山古墳(61)・蛇穴山古墳(62)・愛宕山古墳(54)・総社二子山古墳(55)・遠見山古墳(96)等の6世紀から終末期である7世紀代にかけての総社古墳群、北には、南下古墳群や長久保古墳群(100)、橋向内林古墳群(65)、柿の木坂古墳群、北寝窪古墳群(108)などが存在する。西から南にかけては、5世紀から6世紀の愛宕山古墳・八幡塚古墳・薬師塚古墳を中心と

した保度田古墳群と、その被葬者達である豪族の居館と考えられている後期前葉の環濠をもつ三ッ寺I遺跡、菅谷古墳群などが存在する。

これらの古墳群は、相馬ヶ原扇状地から前橋台地の小河川単位の群にそれぞれ分けられるものと考えられるものであり、本遺跡を含む一帯を取り囲むように位置している。また、低湿地や後背湿地、微高地には、As-CやHr-FA、あるいはHr-FP火砕流堆積物により埋没した水田や畑が広がっており、この地域が主に居住区域や生産区域であったことが想定される。

また、弥生集落の集落と同様に台地の縁辺部や河川の周辺部に位置することが多いが、その分布はさらに拡大している。前期が上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡群の25軒が台地の南側で、下東西遺跡で中期の、後期は国分境遺跡(46)や長久保大畑遺跡(22)などで検出されており、徐々に居住地域が拡大していく様子が把握できる。

奈良・平安時代 上野国府や上野国分僧寺・尼寺が南に位置し、上野国の中心地域としての性格が、周辺の遺跡に色濃く反映されている。こうした造営事業を支えた勢力の存在が十分に想定され、その具体的事例の一つとして、氏寺としての山王廃寺(52)の存在があげられる。法起寺式と考えられる本格的な伽藍配置をもつこの寺は、白鳳期に建立され平安時代中期まで存続したことが、発掘調査で確認されている。また、出土した「放光寺」の文字瓦から、山ノ上碑に記載されている放光寺とも考えられる。

特に、関越自動車道の発掘調査では、南から中尾遺跡の約250軒、鳥羽遺跡の約1,000軒、上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡群の約1,200軒や国分境遺跡の約130軒、北原遺跡(12)の約100軒、大久保A遺跡(97)の約250軒などの竪穴住居跡が確認され、多くの集落が新たに形成されるなど飛躍的に増加する段階である。

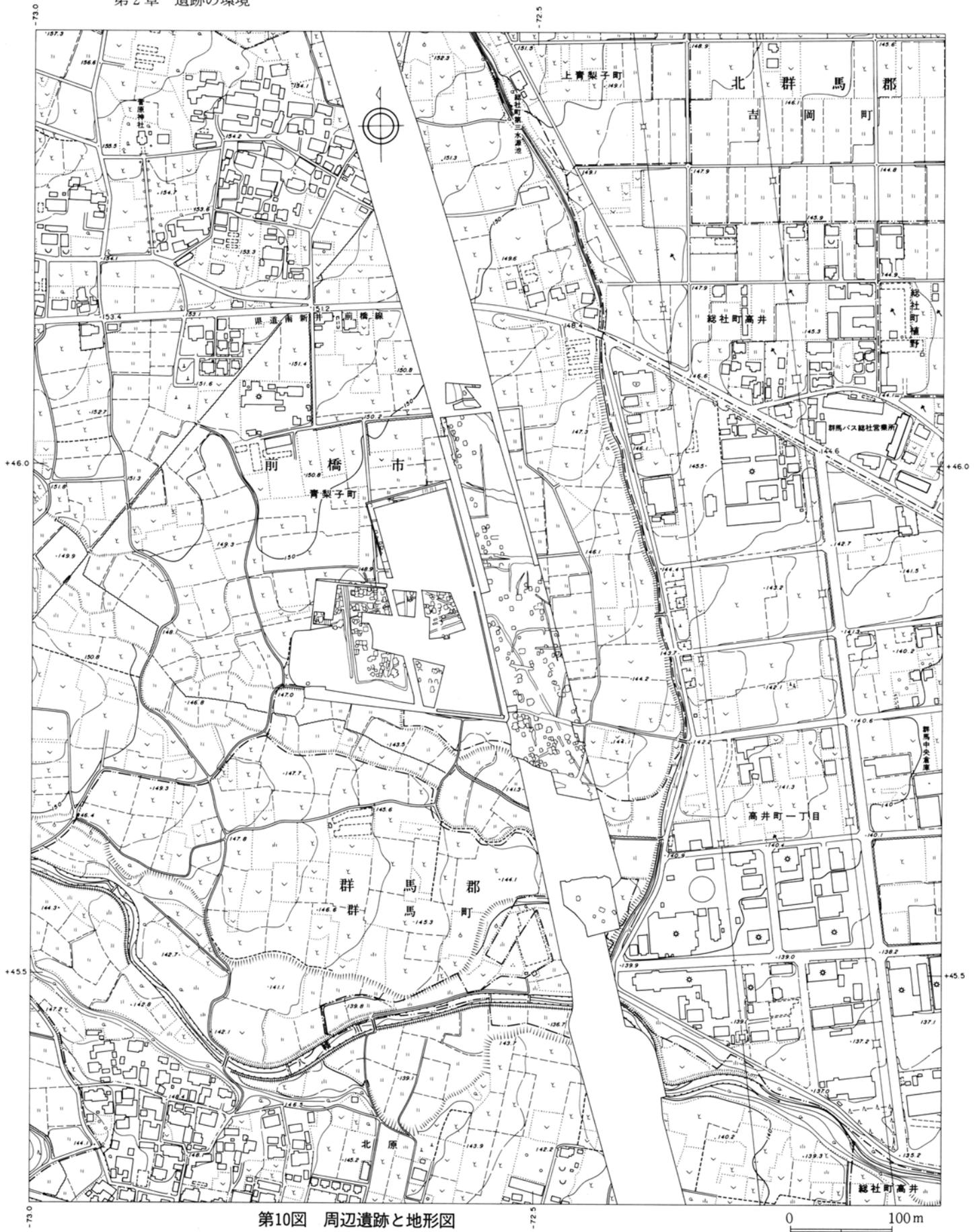
さらに、本遺跡のみならず、下東西遺跡や鳥羽遺跡などで奈良時代の掘立柱建物跡が多数検出されるなど、単なる集落としてではなく、官衙的な様相が見てとれる。

最近では、長久保大畑遺跡、金古北十三町遺跡(70)、熊野谷遺跡(13)などで、この時期の集落が発掘調査されている。

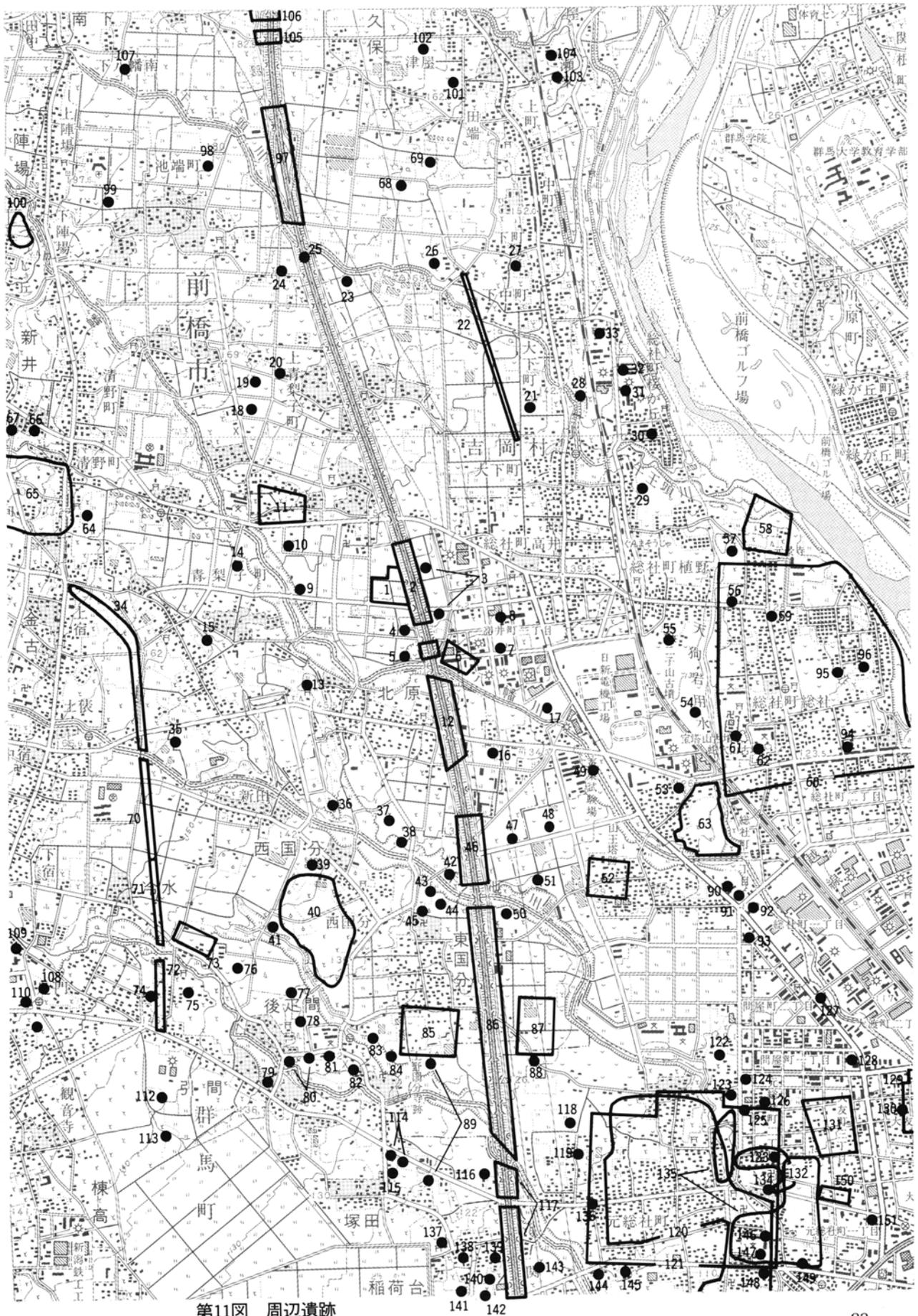
中世 戦乱の時代にあつて、この地域は上野国の中心として政治動向や周辺諸国の影響を強く受けていた。遺跡としては、檜田城跡(6)、青梨子の砦(11)が存在するが、在地勢力の具体的な内容は文献も少なく明確でない。国府周辺も総社長尾氏の居城であつた蒼海城が存在するが、その実態は不明である。

地元に伝承が残る寺院跡といわれる「トウノゴシ(塔残し、塔の腰)」(4)と、東覚寺との関係が興味深い。「トウノゴシ」については、現在の前橋市総社町に所在する光巖寺境内に現存する「伝東覚寺層塔」の故地と考えられており、東覚寺については、現在の長野県佐久郡臼井町に所在する上宮寺に現存する梵鐘に記されている銘の「南間浮提大日國上野國群馬郡高井郷 東覚寺推鐘曆応元年 寅十二月 一日……(中略)……信州佐久郡神宮寺旦那田口左近将監長能……(中略)……天文十二年 卯十一月吉日」から、1338(曆応元)年から1543(天文12)年にかけては確実にこの周辺に存在した寺院であることが分かる。おそらくは、武田氏の上州進攻などの戦乱による混乱の中で消滅した寺からあちこちに拡散したものと考えられる。

上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡群のB・C区で検出されている中世寺院や、下東西遺跡や清里南部遺跡群、葉師前遺跡などから地下式土坑や溝、土坑、井戸などが検出されており、前橋市の西南部から高崎市の東部にかけて数多くみられる環濠屋敷・寺院などに相当するのかもしれない。



第10図 周辺遺跡と地形図



第11図 周辺遺跡

第2章 遺跡の環境

第2表 周辺遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名 (所在地)	遺跡の概要	文献
1	下東西清水上遺跡	本報告書収録。前橋市教育委員会の発掘調査の清水上遺跡も本遺跡の発掘調査範囲に含まれる。	
2	下東西遺跡 (前橋市青梨子町・群馬郡群馬町北原)	弥生時代から中世にかけての集落遺跡。なかでも8世紀初頭の掘立柱建物跡群とそれをとりまく溝と2軒の竪穴住居跡を廊下で連結した遺跡群が、官衙との関連で考えられている。	『下東西遺跡』群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987
3	下東西遺跡(清里南部遺跡群) (前橋市青梨子町下東西)	奈良・平安時代の竪穴住居跡、溝などが検出された。なお関連下東西遺跡の東側に位置する。	『清里南部群III』前橋市教育委員会 1980
4	トウノコシ (前橋市総社町高井池田)	総社町光厳寺に現存する「伝東覚寺層塔」の故地。調査では、遺構は検出されなかった。出土遺物には五輪塔・空風輪・宝篋印塔笠部の破片、瓦片、石臼片、陶磁器がある。	『清里南部遺跡群(III)発掘調査概報』前橋市教育委員会 1981
5	北原遺跡 (群馬郡群馬町北原)	古墳時代の水田跡、奈良・平安時代の竪穴住居跡。掘立柱建物跡、溝、土坑、中世の溝などが検出された。	『昭和55年度埋蔵文化財調査略報』群馬町教育委員会 1981 『北原遺跡』群馬町教育委員会 1986
6	檜田城跡 (前橋市総社町高井檜田)	山沢川の北岸で、その旧河道と推定される沼田と山沢川にはさまれた幅約200m、比高5mの台上にあった。現在は何の遺構も認められない。	山崎 一 『群馬県古城址の研究』上巻 群馬県文化事業振興会 1971
7	膏薬遺跡 (前橋市高井町)	竪穴住居跡1軒が検出された。	『膏薬遺跡』前橋市教育委員会 1988
8	柿木遺跡 (前橋市高井町)	縄文時代、弥生時代の土器片、奈良・平安時代の竪穴住居跡、及び中・近世の土坑などが検出された。	『柿木遺跡』前橋市教育委員会 1984
9	中島遺跡 (前橋市青梨子町中島・中原)	奈良・平安時代から中世以降にわたる竪穴住居跡及びその他の遺構を検出。二彩陶器、風字硯、円面硯が出土した。	『中島遺跡発掘調査概報』前橋市教育委員会 1980
10	薬師前遺跡(清里南部遺跡群) (前橋市青梨子町薬師前)	縄文時代から江戸時代までの遺構。ピット、地下式土坑、溝などが検出された。なお江戸時代の住居跡から鉛釉陶器、硯、墨書土器、巡方などが出土した。	『富田遺跡群・西大室遺跡・清里南部遺跡群』前橋市教育委員会 1980
11	青梨子砦跡 (前橋市清野町青梨子)	現在では消滅して形状の推定も困難である。東西120m、南北80m程で東から南にかけ、別郭をもっていたようである。	山崎 一 『群馬県古城址の研究』上巻 群馬県文化事業振興会 1971
12	北原遺跡 (群馬郡群馬町北原)	古墳時代のHr-FPに伴う河川の氾濫で埋没した水田跡、奈良・平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝、土坑、中世の溝などが検出された。	『北原遺跡』群馬県教育委員会・群馬町教育委員会 1986
13	熊野谷遺跡 (前橋市青梨子町)	縄文時代竪穴住居跡4軒、竪穴状遺構1基、土坑9基、集石1基、平安時代竪穴住居跡25軒、掘立柱建物跡1棟、土坑50基、溝16条が検出された。	『熊野谷遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1989
14	松ノ木遺跡(清里南部遺跡群) (前橋市青梨子町松ノ木)	平安時代の竪穴住居跡、溝、近世以降の土坑などが検出された。	『清里南部遺跡群III』前橋市教育委員会 1980
15	柳原遺跡(清里南部遺跡群) (前橋市青梨子町柳原)	竪穴住居跡と溝が検出された。	『清里南部遺跡群III』前橋市教育委員会 1980
16	北原村東遺跡 (群馬郡群馬町北原村東)	古墳時代から平安時代溝跡が検出された。	群馬町教育委員会
17	八幡川遺跡 (前橋市総社町高井観音鍛冶)	多量の土師、須恵器片に混じって施釉陶器の破片がみられる。	『群馬県遺跡台帳I』(東毛編)群馬県教育委員会 1971
18	清里・庚申塚遺跡 (前橋市上青梨子町)	弥生時代中期後半の竪穴住居跡21軒の環濠集落を中心とした遺跡で、平安時代の竪穴住居跡1軒、井戸、溝、土坑などを検出した。	『清里・庚申塚遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981
19	庚申塚古墳1号・2号 (前橋市上青梨子町)	1号墳は南北径12.7m、東西径12.6mの円墳、周堀は墳丘北西で幅1m、東で1.2m、両袖型の横穴式石室で自然石を用いた乱石積。2号墳は径15.9mの円墳・墳丘は幅3.4m、深さ0.5m、西は幅3.8m、深さ0.2m程の「☆状周堀」、両袖型の横穴式石室は自然石の乱石積。	『清里・長久保遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
20	池端古墳 (前橋市池端町池端)	小丘陵の高所に石室の用材らしきものがあり、埋葬の施設を示すものと思われる。	『群馬県遺跡台帳I』(東毛編)群馬県教育委員会 1971
21	散布地 (北群馬郡吉岡町大久保新田入口)	東西200m、南北150mにおよぶ地域に弥生式土器の破片などが点在している。	『群馬県遺跡台帳I』(東毛編)群馬県教育委員会 1971
22	長久保大畑遺跡 (北群馬郡吉岡町大久保)	縄文時代中期の集落と配石遺構、古墳時代から平安時代の竪穴住居跡、平安時代(As-B下)と中世の水田跡、中世の掘立柱建物跡、平安時代から中・近世の溝、中・近世の井戸・土墳墓などを検出した。	『年報16』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997
23	大久保山古墳 (北群馬郡吉岡町大久保吉開戸)	直径12m、高さ2mの墳丘のみ残存する。	『群馬県遺跡台帳I』(東毛編)群馬県教育委員会 1971

第3節 歴史的環境

遺跡番号	遺跡名(所在地)	遺跡の概要	文献
24	清里・長久保遺跡 (前橋市池端町、北群馬郡吉岡町大久保)	縄文時代中期11軒、後期1軒の竪穴住居跡、土坑2基、土器だまり、平安時代竪穴住居跡1軒、土坑墓2基を検出。また主に陣馬泥流の残丘を利用した6世紀から7世紀の円墳12基も調査した。	『清里・長久保遺跡』 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
25	青梨子古墳 (前橋市池端町)	墳丘径40m、高さ3m、自然地形を利用した山寄古墳。長久保遺跡13号墳と同一である。	『年報1』 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
26	古墳 (北群馬郡吉岡町大久保大松)	直径18m、高さ2mの墳丘が残る。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
27	古墳 (北群馬郡吉岡町大久保下町)	墳石のみが残存する乱石積の円墳。玄室巾1.6m、高さ1.0m、奥行2.7m。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
28	西久保遺跡 (前橋市総社町桜ヶ丘)	平安時代竪穴住居跡5軒、溝1条が検出された。	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
29	桜ヶ丘遺跡 (前橋市総社町植野)	As-C軽石下より弥生時代竪穴住居跡が検出された。	尾崎喜左雄 『第二編 古代上 第一章 古代人の生活』『前橋市史』 前橋市教育委員会 1971
30	大神宮様古墳 (前橋市総社町植野)	墳丘は殆ど破壊され、盛土は北東部から西南部にかけて残っている。その中腹には、石室の石材らしきものがみられる。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
31	総社桜ヶ丘遺跡 (前橋市総社町桜ヶ丘)	平安時代の竪穴住居跡14軒、土坑3基、中世以降の溝2条、畝状遺構1条が検出された。	『総社桜ヶ丘遺跡』 山武考古学研究所 1985
32	総社桜ヶ丘Ⅱ遺跡 (前橋市総社町桜ヶ丘)	竪穴住居跡が1軒検出された。	『総社町桜ヶ丘Ⅱ遺跡』 前橋市教育委員会 1988
33	薬師塚古墳 (前橋市総社町植野)	墳丘は東半分と南の一部が削り取られ、残存部分は南北17m、東西10mの円墳である。横穴式石室は浮石質紡垂状角閃石安山岩使用。	尾崎喜左雄 『第二編 古代上 第二章 豪族の支配と古墳の築造』『前橋市史』 前橋市教育委員会 1971
34	金古北十三町遺跡 (群馬郡群馬町金古北十三町)	古墳時代後期(Hr-FA下)の畝跡、奈良・平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、中世以後の区画堀跡、掘立柱建物跡、井戸、近世の掘立柱建物跡、粘土採掘坑、道跡などを検出した。	『年報16』 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997
35	青梨子金古境遺跡 (前橋市青梨子町金古)	古墳時代の畝跡、奈良・平安時代の竪穴式住居跡14軒が検出された。	県央第一水道遺跡調査会
36	散布地 (群馬郡群馬町北原下屋敷)	縄文時代前期から中期の土器片、短冊型打製石斧片などが発見された。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
37	散布地 (群馬郡群馬町北原下屋敷)	縄文時代、古墳時代の土器片などが多数分布している。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
38	散布地 (群馬郡群馬町北原下屋敷)	縄文時代の土器片、及び古墳時代の土師・須恵器、かまど跡などが出土した。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
39	西国分六ツ割遺跡 (群馬郡群馬町西国分六ツ割)	奈良時代竪穴住居跡3軒、古墳～平安時代住居跡多数、古墳時代畝跡、近世土坑などが検出された。	群馬町教育委員会
40	西国分遺跡群 (群馬郡群馬町西国分)	西国分Ⅰ遺跡 縄文時代中期後半遺物、古墳時代(Hr-FA下)竪穴住居跡、畝跡、奈良・平安時代溝、土坑が検出された。西国分Ⅱ遺跡 縄文時代の土坑、古墳時代から平安時代の竪穴住居跡、古墳時代の畝、道跡、平地建物跡、中世の溝、土墳墓、竪穴建物跡が検出された。	群馬町埋蔵文化財調査報告書 第26集『西国分Ⅰ遺跡』 1989 第28集『西国分Ⅱ遺跡』 1990 群馬町教育委員会
41	散布地 (群馬郡群馬町引間永正庵)	縄文時代の短冊型石斧が4個、すい石が1個出土した。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
42	国分境Ⅲ遺跡 (群馬郡群馬町)	縄文時代中・晩期及び弥生時代包含層、古墳後期～平安時代集落、古墳後期谷遺構、15世紀代の土墳墓、溝、土坑などが検出された。	群馬町埋蔵文化財調査報告書 第35集『国分境Ⅲ遺跡』 群馬町教育委員会 1993
43	散布地 (群馬郡群馬町西国分薬師廻)	縄文時代土器片が出土した。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
44	散布地 (群馬郡群馬町西国分薬師廻)	縄文時代、古墳時代の土器、瓦などが出土した。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
45	散布地 (群馬郡群馬町西国分薬師廻)	古墳時代の土師器片が多数散布している。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
46	国分境遺跡 (群馬郡群馬町北原)	古墳時代後期から平安時代にかけての集落遺跡。竪穴住居跡150軒、溝、井戸、地下式土坑、土坑、県内初の地下式横穴墓などを検出した。さらに県内2例目の木簡などが出土した。	『国分境遺跡』 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
47	北原国分Ⅳ (群馬郡群馬町北原)	竪穴住居跡5軒、ピット・土坑多数が検出された。	『年報15』 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1996
48	国分境Ⅱ (前橋市総社町総社)	古墳時代竪穴住居跡1軒、奈良時代竪穴住居跡2軒が検出された。	前橋市教育委員会

第2章 遺跡の環境

遺跡番号	遺跡名 (所在地)	遺跡の概要	文献
49	総社観音沢遺跡 (前橋市総社町総社)	奈良・平安時代の竪穴住居跡2軒、土坑11基、溝1条などが検出された。	総社観音沢遺跡調査会・山武考古学研究所
50	散布地 (群馬郡群馬町東国分高井道東)	奈良・平安時代の土師・須恵器の壺、瓦などが出土した。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
51	北原分中塚遺跡 (前橋市総社町総社)	平安時代住居が検出された。	前橋市教育委員会
52	山王廃寺跡「放光寺」 (前橋市総社町総社昌楽寺)	伽藍の形態は不明だが、瓦の散布状況は北は蚕糸試験場の周辺から西は旧国府村北原の付近、南は塔跡の南300~400mまで。金堂跡(基壇建物跡)と塔基壇が確認されている。山王塔跡は1928年9月19日、国指定史跡、塔心柱根巻石や寺城出土の緑釉水注は国指定重要文化財になった。	『山王廃寺跡発掘調査報告書』前橋市教育委員会 1975~1982 『群馬県遺跡台帳I』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
53	村東遺跡 (前橋市総社町総社)	竪穴住居跡21軒、溝1条、集石遺構1基、中世の堀1条が検出された。	『村東遺跡』前橋市教育委員会 1988
54	愛宕山古墳 (前橋市総社町総社)	巨石を使用した横穴式両袖型石室をもつ円墳。石室内に凝灰岩製の家型石棺が安置、壁石は巨石の輝石安山岩を乱石積にしている。一部角閃石安山岩も認められる。	『群馬県史』資料編3 群馬県 1981 尾崎喜左雄 『第二編 古代上 第二章 豪族の支配と古墳の築造』前橋市史 前橋市教育委員会 1971
55	総社二子山古墳 (前橋市総社町植野)	前方部、後円部の2ヶ所に両袖の横穴式石室をもち全長約90m。周濠は盾形で幅20m前後と推定される。前方部石室は自然石乱石積、後円部石室の天井石以外は角閃石安山岩の削石を使用している。なお両石室の構築年代には時差がみられる。	『群馬県史』資料編3 群馬県 1981 尾崎喜左雄 『第二編 古代上 第二章 豪族の支配と古墳の築造』前橋市史 前橋市教育委員会 1971 『日本古文化研究所報告第4』日本古文化研究所 1935
56	稲荷山古墳 (前橋市総社町総社)	墳丘は大部分破壊され、横穴式石室の石材も一部露出。頂上部には、穂積稲荷が祀られている。	『群馬県遺跡台帳I』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
57	若宮遺跡 (前橋市総社町植野)	奈良・平安時代竪穴住居跡、溝が検出された。	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
58	勝山城跡 (前橋市総社立石)	ほとんどが利根川に崩落して、現在は跡も不明である。	山崎 一 『群馬県古城址の研究』上巻 群馬県文化事業振興会 1971
59	大小路山古墳 (前橋市総社町総社粟島)	径20m、高さ2m程の円墳で頂上は平坦化されている。石塔や頂上部に散在する石、及び石片は石室に使用されたものと思われる。	『群馬県遺跡台帳I』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
60	総社城跡 (前橋市総社町粟島)	利根川左岸の崖端に築かれていたが、今は大部分崩落し、南北70mの堀跡が鍵形に残り、幅10mにも満たない内郭が認められる。	山崎 一 『群馬県古城址の研究』上巻 群馬県文化事業振興会 1971
61	宝塔山古墳 (前橋市総社町総社)	東西49m、南北54m、高さ12mの方墳である。南面に開口する複室の横穴式両袖型石室には、輝石安山岩と角閃石安山岩が使用され、漆喰が塗布されている。玄室には脚部が格狭間型の家型石棺が安置されている。終末期古墳の典型的なものである。	『群馬県史』資料編3 群馬県 1981 『群馬県総社古墳群』観光資源保護財団 1977
62	蛇穴山古墳 (前橋市総社町総社)	墳丘東西43.4m、南北39.1mの古墳、石室は角閃石安山岩使用の半蔵石切組積の横穴式両袖型石室。奥壁、左右壁、天井ともに一石ずつの巨石で箱状に構成されている。羨道がなく直接前庭に至る。	『群馬県史』資料編3 群馬県 1981
63	大屋敷遺跡 (前橋市総社町)	古墳時代から平安時代の竪穴住居跡、中世の掘立柱建物跡、溝、井戸などが検出された。	『大屋敷遺跡I~IV』前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1993~1996
64	諏訪古墳(諏訪山古墳) (前橋市青梨子町諏訪廻)	諏訪神社が祀られている丘陵頂上社殿には、石室の石材らしきものが散在する。埴輪破片もみられる。	『群馬県遺跡台帳I』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
65	橋向・内林古墳群 (群馬郡群馬町金古橋向内林)	主軸長約100mの前方後円墳3基、径約30mの円墳3基、自然丘利用の小円墳2基ほか計12基の円墳からなる。横穴式石室をもつものが大部分を占める。	『東国史論』第2号 群馬考古学研究会 1987
66	判塚古墳群 (北群馬郡榛東村新井)	円墳2基からなる古墳群。	『東国史論』第2号 群馬考古学研究会 1987
67	観音山古墳 (北群馬郡榛東村新井判塚)	直径7m、高さ3.5mの円墳で開口しており、石室は完存している。	『群馬県遺跡台帳I』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
68	源平山古墳 (北群馬郡吉岡町大久保熊野)	南面にも開口した円墳で、その径15m、高さ2.5m、玄室は完存し、羨道も一部を残す。	『群馬県遺跡台帳I』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
69	古墳 (北群馬郡吉岡町大久保十二)	墳丘のみ残存する。	『群馬県遺跡台帳I』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
70	西国分新田遺跡 (群馬郡群馬町西国分新田他)	古墳時代の水田跡(Hr-FA下)と畠跡、平安時代竪穴住居跡、水田跡(As-B下)、大溝や道跡を検出した。	『年報14』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995
71	冷水村東遺跡 (群馬郡群馬町冷水村東)	古墳時代の水田跡、畠跡、古墳時代から平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、中世以後の畠跡、道跡などを検出した。	『年報14』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995

第3節 歴史的環境

遺跡番号	遺跡名(所在地)	遺跡の概要	文献
72	諏訪西遺跡 (群馬郡群馬町引間諏訪)	古墳時代から平安時代竪穴住居27軒、古墳時代畠跡、近世以降井戸、溝が検出された。	群馬町教育委員会
73	引間城跡 (群馬郡群馬町引間)	染谷川とその支流にはさまれた台地に位置する。主郭は東西の堀切によって東西85m、南北75mの方形の区画を造り出し北側に腰曲輪を配し、その東側から字北谷にかけて畷状土橋が続く。西側の堀跡は、幅30～40mと明確に残っている。	山下歳信『中世城館址』『群馬町の遺跡』群馬町教育委員会 1986
74	散布地 (群馬郡群馬町引間諏訪西)	古墳時代の土器片が多数出土している。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
75	散布地 (群馬郡群馬町引間諏訪西)	縄文時代の土器片や打製石器が出土した。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
76	後疋間遺跡 (群馬郡群馬町後疋間)	古墳時代後期から平安時代にかけての竪穴住居跡が多数検出された。	『後疋間遺跡』I・II・III 群馬町教育委員会 1986、1987、1988
77	散布地 (群馬郡群馬町後疋間村北)	縄文時代、古墳時代、奈良時代の土器などが出土した。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
78	散布地 (群馬郡群馬町引間古屋敷)	古墳時代の土器片が出土した。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
79	散布地 (群馬郡群馬町引間屋敷廻)	縄文時代の横型石匙、打製石器などが出土した。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
80	散布地・古墳 (群馬郡群馬町引間古屋敷)	古墳時代、奈良時代の石製蔵骨器身部、板碑片、土師・須恵器などがある。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
81	散布地 (群馬郡群馬町引間古屋敷)	縄文時代の土器片、石鏃、土師・須恵器片などが出土した。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
82	散布地 (群馬郡群馬町引間石堂)	縄文時代の土器片が多数散布、他に凹石、打製石斧片が出土した。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
83	散布地 (群馬郡群馬町引間妙見)	古墳時代の土器、瓦、人骨などが出土した。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
84	散布地 (群馬郡群馬町石堂)	古墳時代の土師片が多数分布している。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
85	上野国分僧寺跡 (群馬郡群馬町東国分村前・引間石堂)	東西・南北、約220mの方形の中に金堂、講堂、塔、南大門・中大門跡などが想定されている。礎石、瓦など多数散布している。	『上野国分寺周辺地域発掘調査報告』群馬県教育委員会 1971
86	上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡群 (前橋市元総社町・群馬郡群馬町東国分)	縄文時代中期、弥生時代から古墳時代前期、古墳時代後期から中世にかけての集落遺跡。竪穴住居1300軒、土坑200基、溝多数を検出した。	『上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡』群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986～1988
87	上野国分尼寺跡 (前橋市元総社町小見・群馬郡群馬町国分)	金堂・講堂などの存在を確認。古瓦、土師・須恵器の破片が散布している。	『上野国分尼寺跡発掘調査報告』群馬県教育委員会 1970・1971
88	小見内遺跡 (前橋市元総社町)	平安時代の竪穴住居跡と溝が検出された。	前橋市教育委員会
89	国分寺参道遺跡 (群馬郡群馬町塚田稲荷台村東・中原)	古墳時代から奈良・平安時代の竪穴住居跡、土坑、溝が検出された。また土器、瓦などが出土した。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972 前橋市教育委員会
90	昌楽寺廻向II遺跡 (前橋市総社町総社昌楽寺廻り村東)	竪穴住居跡4軒、土坑6基、ピット4基、井戸跡1基が検出された。	『昌楽寺廻向II遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1988
91	昌楽寺廻り村東遺跡 (前橋市総社町総社昌楽寺廻り村東)	建物遺構と推定される柱痕が検出された。	尾崎喜左雄『第三編 古代下 第一章 国司政治』『前橋市史』前橋市教育委員会 1971
92	産業道路東遺跡 (前橋市総社町総社)	縄文時代前期～中期の集落址。	『前橋市史』前橋市教育委員会 1971
93	産業道路西遺跡 (前橋市総社町総社)	縄文時代前期～中期の集落址。	『前橋市史』前橋市教育委員会 1971
94	薬師様古墳 (前橋市総社町総社粟島)		『全国遺跡地図 群馬県』文化庁 1977
95	城川遺跡 (前橋市総社町総社)	遠見山古墳周堀。	前橋市教育委員会
96	遠見山古墳 (前橋市総社町総社粟島)	主軸の長さは約70mの前方後円墳。後円の東南部分は封土が流れ石室の位置を示す。墳丘南北には周濠の一部や葦石が認められる。	『群馬の遺跡』群馬県教育委員会 1963
97	七日市遺跡 (北群馬郡吉岡町大久保七日市)	奈良時代の竪穴住居跡3軒、中世から近世の溝1条を検出した。	『年報2』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983

第2章 遺跡の環境

遺跡番号	遺跡名 (所在地)	遺跡の概要	文献
98	清里3号墳 (前橋市池端町神明宮)	北半分が円形の盛土を示し、埴輪片が認められる。径は30m程と推定される。南半分は神明宮の石段のため崩されている。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
99	清里・陣馬遺跡 (前橋市池端町・北群馬郡吉岡町陣馬)	縄文時代から平安時代までの集落遺跡である。竪穴住居跡64軒、溝、土坑、井戸などを検出した。特に多量の灰釉・緑釉陶器が出土している。	『清里・陣馬遺跡』 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981
100	長久保古墳群 (北群馬郡榛東村新井梨子木長久保)	7世紀前後の前方後円墳2基と円墳20基。いずれも横穴式石室を有する。	『長久保古墳群発掘調査略報』 日本窯業史研究所 1978
101	大日山古墳 (北群馬郡吉岡町大久保不動久保)	墳丘のみが残存する前方後円墳。南北300m、東西150mである。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
102	古墳 (北群馬郡吉岡町大久保三津屋)	南面開口の円墳で直径20m、高さ3.6m、玄室及び羨道が残っている。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
103	瀬来城跡 (北群馬郡吉岡町漆原)	吉岡川南岸丘陵状地点に位置する。土塁の一部は残存し、堀切の東北隅の出張った部分は切り落としたものと思われる。白井城配下の城。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
104	瀬来城跡 (北群馬郡吉岡町漆原瀬来)	16世紀、原孫三郎の築城と考えられる。(漆原文書)堀、堀切、土居、戸口、のろし台などが残存している。	『群馬県の中世の城跡』群馬県教育委員会 1988
105	女塚遺跡 (北群馬郡吉岡町大久保)	古墳時代の溝、奈良・平安時代の竪穴住居跡を検出した。	『年報3』 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
106	大久保A遺跡 (北群馬郡吉岡町大久保宮前宮田)	古墳時代末から平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝及び鎌倉時代の道路状遺構を検出した。	『年報2』 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
107	古墳 (北群馬郡吉岡町南下三疋)		『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
108	北寝窪古墳群 (群馬郡群馬町棟高北寝窪)	円墳が9基ある。内8基は径10~20m、高さ2~3mの小円墳。1基は径40m、高さ7mである。しかしそのほとんどは平夷されており、1基のみ石室幅11mが認められる。	『群馬県の遺跡』 群馬県教育委員会 1963
109	東久保古墳群 (群馬郡群馬町足門東久保)	円墳2基以上からなる古墳群。	『東国史論』第2号 群馬考古学研究会 1987
110	散布地 (群馬郡群馬町棟高北寝窪)	縄文時代の石器や古墳時代の埴輪片、須恵器などが出土した。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
111	葉節さま (群馬郡群馬町)		
112	小池遺跡 (群馬郡群馬町引間小池)	古墳時代後期から平安時代の竪穴住居跡42軒、古墳時代中期の畠(Hr-FA下)2ヶ所が検出された。	群馬町教育委員会
113	西三社免遺跡 (群馬郡群馬町棟高)	弥生時代初頭の遺物、古墳時代初頭竪穴住居跡2軒、奈良・平安時代竪穴住居跡25軒、土坑、溝、井戸が検出された。	群馬県埋蔵文化財調査報告書第29集『西三社免遺跡』群馬町教育委員会 1990
114	散布地・墳墓 (群馬郡群馬町引間松葉)	奈良時代の骨壺、土釜、瓦、陶器片が出土した。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
115	散布地 (群馬郡群馬町引間松葉中原)	古墳時代の土師器片が多数散布している。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
116	塚田村東遺跡 (群馬郡群馬町塚田)	平安時代の集落。竪穴住居跡15軒、井戸1基、溝3条、土坑9基が検出された。	『塚田村東遺跡調査概報』 群馬町教育委員会 1986
117	鳥羽遺跡 (前橋市鳥羽町・元総社町、群馬郡群馬町稲荷台・塚田)	古墳時代から江戸時代の集落跡、奈良・平安時代の集落、鍛冶・神社跡と推定される大型掘立柱建物跡・墓などを検出した。	『鳥羽遺跡』 群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986・1988
118	小見遺跡 (群馬県前橋市元総社町)		
119	草作遺跡 (前橋市元総社町)	縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代の竪穴住居跡、中近世の井戸や溝、土坑を検出した。古墳時代の埴輪・方頭太刀柄頭が出土した。	『草作遺跡』 前橋市埋蔵文化財調査事業団1985 『年報4』 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
120	蒼海城跡 (前橋市元総社町小見、横屋草作)	染谷川と支流にはさまれた区域、本丸は北にあり、その南に二の丸、西南隅に櫓台があった。東側には出雲屋敷、西には五霊神社のある郭がつづく。	山崎 一 『群馬県古城址の研究』 上巻 群馬県文化事業振興会 1971
121	上野国府跡 (前橋市元総社町他)	国府城の範囲については、いくつもの説が出されているが、未だ決定的な遺構が見られない。	尾崎喜左雄 『第三編 古代下 第一章 国司政治』『前橋市史』 前橋市教育委員会 1971

第3節 歴史的環境

遺跡番号	遺跡名 (所在地)	遺跡の概要	文献
122	散布地 (前橋市元総社町)		『全国遺跡地図 群馬県』文化庁1977
123	閑泉明神北遺跡 (前橋市総社町総社)	溝が検出された。	前橋市教育委員会
124	閑泉樋北遺跡 (前橋市元総社町)		
125	閑泉樋南遺跡 (前橋市元総社町)	竪穴住居跡4軒、土坑5基、溝2条、竪穴状遺構1基が検出された。	『閑泉樋南遺跡』前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団1986
126	閑泉樋遺跡 (前橋市元総社町)	古墳時代の竪穴住居跡、奈良・平安時代及び中世の溝を検出した。	『年報2』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1982
127	稻荷山古墳 (前橋市総社町稻荷塚)	墳丘はほとんど平坦化され、その中央部のみが径10数m、高さ2m程残っている。	『上毛古墳総覧』No.1 群馬県1938『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編)群馬県教育委員会1971
128	道場遺跡 (前橋市問屋町)	井戸が検出された。	前橋市教育委員会
129	大友館跡 (前橋市大友町)	現存の長見寺が館跡である。本丸は一辺100mの正方形で、現在も北と東北部高さ2m程の土居が残り、南面中央一方に直虎口がある。南面と西面とは内堀から20m隔てて城跡が認められ、二重堀構えであった。更に聚落の外側には濠も残っている。	山崎一『群馬県古城墓址の研究』上巻 群馬県文化事業振興会1971
130	散布地 (前橋市大友町雲雀海道)	広範囲に土師・須恵器の散布が見られる。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編)群馬県教育委員会1971
131	村山館跡 (前橋市大友町村山)	本丸は一辺70mの正方形で、東面中央の一方虎口は堀幅半ばの逆の喰違いになっていた。外郭は南北240m、東西200mで、西面には幅6～7mの堀址が認められる。	山崎一『群馬県古城墓址の研究』上巻 群馬県文化事業振興会1971
132	八日市場城跡 (前橋市元総社町)	単郭の小城で、北、東、南の三方に濠と土塁をめぐらし西の一方は染谷川に托している。東西、南北、それぞれ150m程であった。	山崎一『群馬県古城墓址の研究』上巻 群馬県文化事業振興会1971
133	堰越Ⅱ遺跡 (前橋市大友町)	平安時代竪穴住居跡6軒、土坑2基が検出された。	『堰越Ⅱ遺跡』前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団1988
134	大友屋敷Ⅲ遺跡 (前橋市元総社町)	古墳時代中期1軒、後期2軒、奈良・平安時代2軒の竪穴住居跡、溝3条、土坑1基が検出された。	『大友屋敷Ⅲ遺跡』前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団1987
135	元総社明神遺跡 (前橋市元総社町)	古墳時代から平安時代の竪穴住居跡、溝、土坑、井戸、中世の溝などが検出された。旧石器時代から弥生時代の遺物が出土している。	『元総社明神Ⅰ～Ⅲ』前橋市教育委員会1982～1984
136	屋敷遺跡 (前橋市元総社町)	竪穴住居跡5軒、井戸2基、溝1条が検出された。	『屋敷遺跡』前橋市教育委員会1987
137	散布地 (群馬郡群馬町塚田村東)	古墳時代から平安時代の土器が出土している。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編)群馬県教育委員会1972
138	墳墓 (群馬郡群馬町稻荷台北金尾)		『全国遺跡地図 群馬県』文化庁1977
139	散布地 (群馬郡群馬町稻荷台北金尾)	奈良時代の土器・陶器などが出土した。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編)群馬県教育委員会1972
140	散布地 (群馬郡群馬町稻荷台北金尾)	古墳時代の土師器片が多数散布している。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編)群馬県教育委員会1972
141	散布地 (群馬郡群馬町稻荷台北金尾)	奈良時代の土器・陶器などが散布している。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編)群馬県教育委員会1972
142	墳墓 (群馬郡群馬町稻荷台北金尾)	土師・須恵器などが出土している。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編)群馬県教育委員会1972
143	弥勒遺跡 (前橋市元総社町弥勒)	古墳時代、奈良・平安時代竪穴住居跡が検出された。また文字瓦が出土した。	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
144	散布地 (前橋市元総社町)		『全国遺跡地図 群馬県』文化庁1977
145	天神遺跡 (前橋市元総社町早道)	竪穴住居跡32軒、土坑14基、井戸跡3基が検出された。	『天神遺跡』前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団1987
146	寺田遺跡 (前橋市元総社町)	Hr-FA 降下以後に掘削された大溝と水口遺構、多量の木製品が検出された。	『寺田遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団1986
147	元総社小学校校庭遺跡 (前橋市元総社町)	古墳時代の住居跡と掘立柱建築跡が検出されている。	尾崎喜左雄『第三編 古代下 第一章 国司政治』『前橋市史』前橋市教育委員会1971

第2章 遺跡の環境

遺跡番号	遺跡名 (所在地)	遺跡の概要	文献
148	元総社寺田遺跡 (前橋市元総社町関泉明神 北・大屋敷・寺田)	古墳時代の水田跡1面、畠2面、弥生時代から平安時代の 竪穴住居跡、奈良時代から近世の土坑、井戸、溝、中世の 蒼海城の外堀などを検出した。	『元総社寺田遺跡』 財団法人群馬県 埋蔵文化財調査事業団 1993・1994・ 1996
149	神明東遺跡 (前橋市元総社町)	竪穴住居跡6軒、土坑6基、溝5条、竪穴状遺構1基が検 出された。	『神明東遺跡』 前橋市教育委員会 1987
150	堰越遺跡 (前橋市大友町)	竪穴住居跡18軒、土坑53基、溝16基、井戸4基が検出され た。	『堰越遺跡』 山武考古学研究所 1988
151	樋越遺跡 (前橋市元総社町)	溝1条、土坑13基が検出された。	『樋越遺跡』 前橋市埋蔵文化財調査 団 1986

近世 周辺の遺跡としては、下東西遺跡や、江戸時代初期に館跡があった可能性がある清里南部遺跡群の薬師前遺跡(10)などが存在する。さらに東に、江戸時代初期の総社藩秋元氏の居城である総社城(60)とそれに関連する寺院などが存在する。

江戸から1889(明治22)年までは群馬郡青梨子村と呼ばれ、総社藩領から幕府領、1764(明和元)年からは沼田藩領となる。明治以後は、沼田県、群馬県、熊谷県を経て、群馬県西群馬郡に属する。村高は、1668(寛文8)年の「上野国郷帳」の高443石余で田方72石余に対して畑方370石余、1711(正徳元)年の村高反別差出帳では高443石で、田1町7反余・畑9町5反余であり、水田よりも畑が圧倒的に多い。養蚕中心の村落であった。

近代 明治22年からは清里村の大字であり、昭和30年から前橋市青梨子町となる。昭和34年の中群馬用水、昭和44年の群馬用水の完成により水田への転換が急速に進んだ。本遺跡周辺も、前橋の市街地の拡大とともに宅地化の波が押し寄せつつあり、昭和50年代の圃場整備と関越自動車道の完成や、県道前橋伊香保線の建設なども加わって、大きく様変わりしつつある。

第3章 検出された遺構・遺物

第1節 遺構・遺物の概要

本遺跡では、圃場整備により付設された農道が、ちょうど東西と南北の軸として基盤の目状に存在することから、地区毎の区分が容易なため、任意で1区、2区、3区と分けした。

1区は今回の調査範囲のなかで最も北側の部分である。また、調査範囲はグラウンド部分の西側から北側にかけての新設の付け替え道路部分のみの一部分だけであり、グラウンド部分については盛土対応とのことで未調査部分となる。ここからは、5軒の竪穴住居跡が検出されている。さらに、1号溝と11号溝の大溝同士は、同一の遺構である可能性があり、もしそうであるならば中世の屋敷の堀である可能性が高い。

また、新設の東側側溝部分については、工事側への申し入れによる工事の一時中断の期間に、断面観察による立ち会い調査を実施したが、基本土層のローム漸位層である第VII層上面までが140～150cmと、西側の付け替え道路部分の10～20cmに比べてかなり深いことから、地形が途中から東側から南東側にかなり傾斜すると考えられ、そのことから東側に位置する下東西遺跡との間に小さな谷が存在するのかもしれない。

2区は南西の部分であり、校舎の主体部分であることから最も発掘調査対象面積が広い。そのために、かなりの部分が発掘調査対象地となっており、掘削範囲はおおまかに見れば逆「コ」の字状であるが、部分的には建物構造物の突出した、あるいは変形した部分に則した掘削範囲で調査を実施した。ここでは大部分が平安時代である多数の竪穴住居跡と、それ以前の掘立柱建物跡、中世の溝などが集中して検出されている。

だが、前述した度重なる設計変更により、南側部分で数回の拡張部分の掘削作業が繰り返し行われた。

地形は北側部分での遺構の確認面が浅いのに対して、南側部分は圃場整備により基本土層の第VI層段階までかなり削平されており、確認された遺構の確認面も浅く、遺構そのものの数も極端に少ない。

また、南西部分は前橋市教育委員会が発掘調査された清水上遺跡にあたり、埋め戻しされた数軒の竪穴住居跡と溝が確認されたが、一部は掘り方部分の調査がなされていないために、遺物が少量残存していた。

3区は北側の体育館部分と校舎の南東部分にあたる南側との大きく2箇所に分けられる。2区の校舎構造物と同様に、設計変更による拡張部分の掘削作業を実施した。

北側部分が、1区の東側側溝部分の土層と同様に、東側から南東側にかけて傾斜することから、遺構の残存状態が比較的良好であるのに対して、南側部分は水田造成の際の階段状の削平によりかなりの竪穴住居跡が壊された状態であったり、遺構の確認面がとても浅いことから、遺構の確認作業時点で多量の遺物が取り上げられる状態であった。

また、1区の東側側溝と同様に新設の東側側溝部分については、断面観察による立ち会い調査と、3軒の竪穴住居跡や溝などの遺構が検出された部分の緊急調査を実施した。

このように全体では、奈良時代の掘立柱建物跡、奈良時代の後期にあたる8世紀中ごろから11世紀にかけての竪穴住居跡群、中世の館、あるいは屋敷の環溝と地下式土坑、近代の道跡、古代から近代までの多数の溝や土坑、ピットなどの遺構が検出されており、遺物では縄文時代の土器・石器から弥生時代の土器、古墳時代の土器・埴輪、古代の土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・奈良三彩陶・鉄器・石製品、中近世の陶磁器などが多数出土している。

それぞれの詳細については、第2節、第3節、第4節に記述しており、そちらを参照してもらいたい。

第2節 縄文時代

本遺跡での縄文時代の遺構は検出されておらず、縄文土器や縄文石器の遺物が後世の遺構埋没土や、第V層中、あるいは縄文時代の包含層に相当する第VI層中などから単独で検出したものである。

遺跡内における縄文土器や縄文石器の分布をみると、2区の北側部分などの微地形の高い部分を中心に分布している傾向がみられる。(第17図参照)

時期が判読しやすい縄文土器についてしてみると、前期後半から後期前半にかけてであり、おそらくは、縄文石器もほぼ同様の時期と考えるのが妥当であろう。下東西遺跡では、前期後半が約6割以上を占めているが、本遺跡では中期から後期前半にかけてのほうが比率が高い。

1 土器 (第12図、写真図版157)

本遺跡出土の縄文土器は、遺構確認中に出土したもので、縄文時代の遺構から出土したものではない。出土総量も多くはなく、図示したものは、縄文時代の時期を特定できる土器である。出土した土器の時期は、前期後半から後期前半である。前期後半の諸磯式期、中期前半の五領ヶ台式期、中期終末の加曽利E式期、後期前半の称名寺～堀之内式期の土器などである。本遺跡周辺において、当該期の遺跡が確認されていることから、周辺地域からもたらされたものと考えられる。以下、出土土器の概略を記す。

(前期) 1は、諸磯c式土器であり、全体に摩滅している。土製円盤に転用されている。文様は、平行沈線で、鋸歯状に施文する。2は、諸磯b式土器である。地文は、RLで浮線を横位に貼付している。

(中期) 3は、中期初頭の五領ヶ台式土器である。平行沈線で、幾何学的に区画し、区画内を斜線で充填する。区画間には、三角の印刻が施される。4は、前期末・中期初頭の土器である。底部付近に平行沈線で結節沈線を横位に施文している。5は、中期前半の土器である。口縁部に屈曲を持ち沈線を斜位の刻みで装飾している。6は、中期終末加曽利EIV式土器である。口縁を折り返し刺突を加えている。

(後期) 7は、後期初頭称名寺式土器である。細い沈線で文様を区画し、区画内を縄紋に似せた、刺突が充填される。8は、後期初頭の土器である。無文で、口縁部を折り返して肥厚させる。9から13は、堀之内I式土器である。胴部にやや太めの沈線で渦巻き模様を描く。沈線内を縄文RLが充填される14、15は、堀之内II式土器である。口縁内部に一条の沈線が施文される。外面は、口縁に沿って刺突を持つ隆線が巡る。隆線以下を、細い沈線で幾何学文様を描き沈線内を縄文LRが充填される。16から18は、堀之内I式土器の粗製土器である。口縁部に太さ10cmの隆線を巡らし、円形の刺突を加える。

2 石器 (第13～16図、写真図版157・158)

本遺跡出土の縄文時代の石器の種類をみると、打製石鏃・打製石錐・石匙・搔器・削器・楔形石器・打製石斧・垂飾・多孔石・くぼみ石・磨り石・石皿・礫器・石核・剝片石器・原石などがあげられる。

ここでは、分類した器種の個々の概要について記述することとする。

打製石鏃 総数で4点が出土している。資料の形状から、従来の分類である凹基無茎(I類)・平基無茎(II類)・有茎(III類)の三つの形態のうちの、中茎を持たず、基部に抉入があり、脚部が明確に作り出されている形状のものを指すI類のみである。石材は、黒曜石2点、黒色安山岩1点、チャート1点であり、黒曜石の占有率が高い。脚部を欠損した資料が1点、先端を欠損した資料が1点である。

石錐(ドリル) 典型的な形状の資料が1点出土している。形態は断面が菱形に近い大型の細身の棒状の



第12図 縄文土器

第3章 検出された遺構・遺物

資料である。摘みがなく、石材は珪質頁岩である。

打製石斧 可能性がある資料も含めて、総数23点と石器の中で最も数多く出土している。形態については従来の短冊形（Ⅰ類）、撥形（Ⅱ類）、分銅形（Ⅲ類）の三種の形状による分類を用いることとする。

Ⅰ類は、両側の側縁が直線的でほぼ平行なものである。だが実際には、刃部が頭部よりも僅かに幅広い資料もその範疇に含めることとする。総数は最も少なく1点である。石材は、黒色頁岩である。

Ⅱ類については、その形状からさらに二つに細分することとする。A類は、両側の側縁は直線的だが、刃部幅が頭部幅よりも広いもので、いわゆる撥形である。だが実際には、側縁が僅かに内・外湾する資料もその範疇に含めることとする。総数は欠損品も含めて7点を数える。石材は、黒色頁岩と頁岩と灰色安山岩が各2点、細粒輝石安山岩1点である。B類は、大形で頭部が細く刃部が大きく広がる資料や、同じく大形で有肩石斧と呼称されるような形状の資料であり、弥生時代の石鎌にも想定される可能性がある。点数は欠損品も含めて2点である。石材は、黒色頁岩と細粒輝石安山岩が各1点である。

Ⅲ類は、両側縁が装着部分である中央部で内側にくびれ、刃部及び頭部が外側に張り出すもので、いわゆる分銅形で、それに近い形状も含む。点数は13点である。これは、縄文時代中期から出現し、後期に数多くみられる資料である。石材は、黒色頁岩10点、細粒輝石安山岩2点、頁岩と珪質頁岩が各1点である。

欠損のために分類不可能な1点の資料の石材は、黒色頁岩1点である。

石斧に認められる使用の痕跡としては、装着痕や刃部の使用痕がいくつかの資料に認められる。これらの痕跡では資料の中央部（基部）の両面や両側縁に装着痕が認められるが、特に剥離面境の稜部分にすれが見られることが多い。また、刃部の使用痕も両面に平行な何条もの線状の擦痕や、剥離面境の稜部分がすれてはつきりしないなどの観察結果が得られている。

欠損品は11点と多く、率として約46%を占める。刃部を欠損する資料が10点と最も多く、頭部と刃部を共に欠損する資料も2点みられる。また、欠損した部分を再生したと考えられる資料が数点存在する。これはリダクションとも呼ばれ、旧石器時代の打製石斧などにも認められるものである。

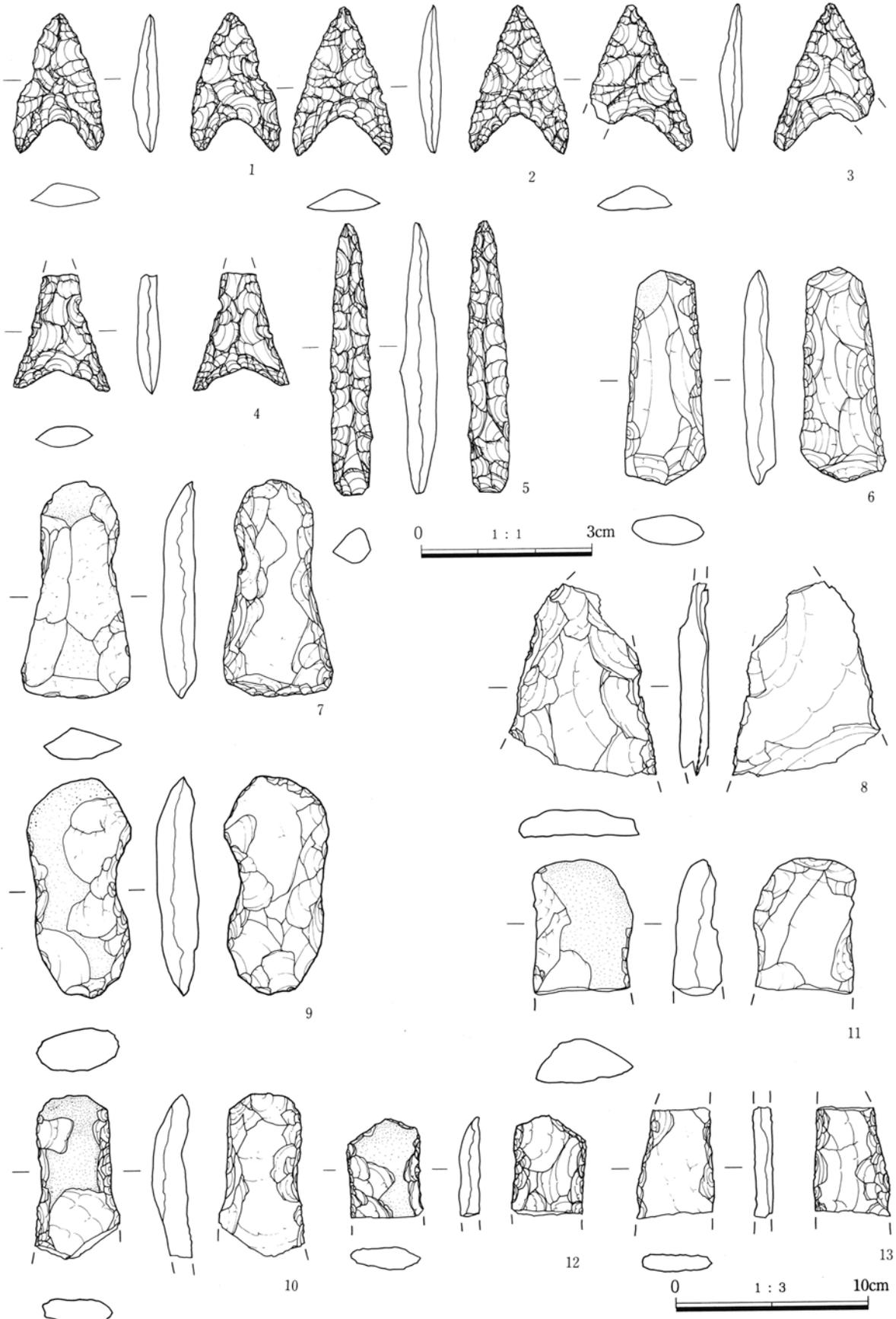
石材に多く用いられるのは、黒色頁岩が最も多く、次に頁岩類と安山岩類である。特に、打製石鎌などの小形の石器に黒曜石などの搬入石材（A類）が多用されるのに対して、打製石斧や削器などの比較的大形で剥離を施す石器に多用される黒色頁岩や頁岩類や安山岩類など、利根川流域などの本遺跡周辺の近い距離で入手可能な石材を、在地系石材（B類）と呼称している。

打製石斧の素材としては、比較的大きく残されている素材時の剥離面から、その大部分が20～30cm程の原礫を半割、ないしは数枚に分割した大形の板状剥片を素材として用いたことが想定される。このことは、片面の一部に礫面や分割面が残存する資料が多く存在することからも、間違いないと考えられる。

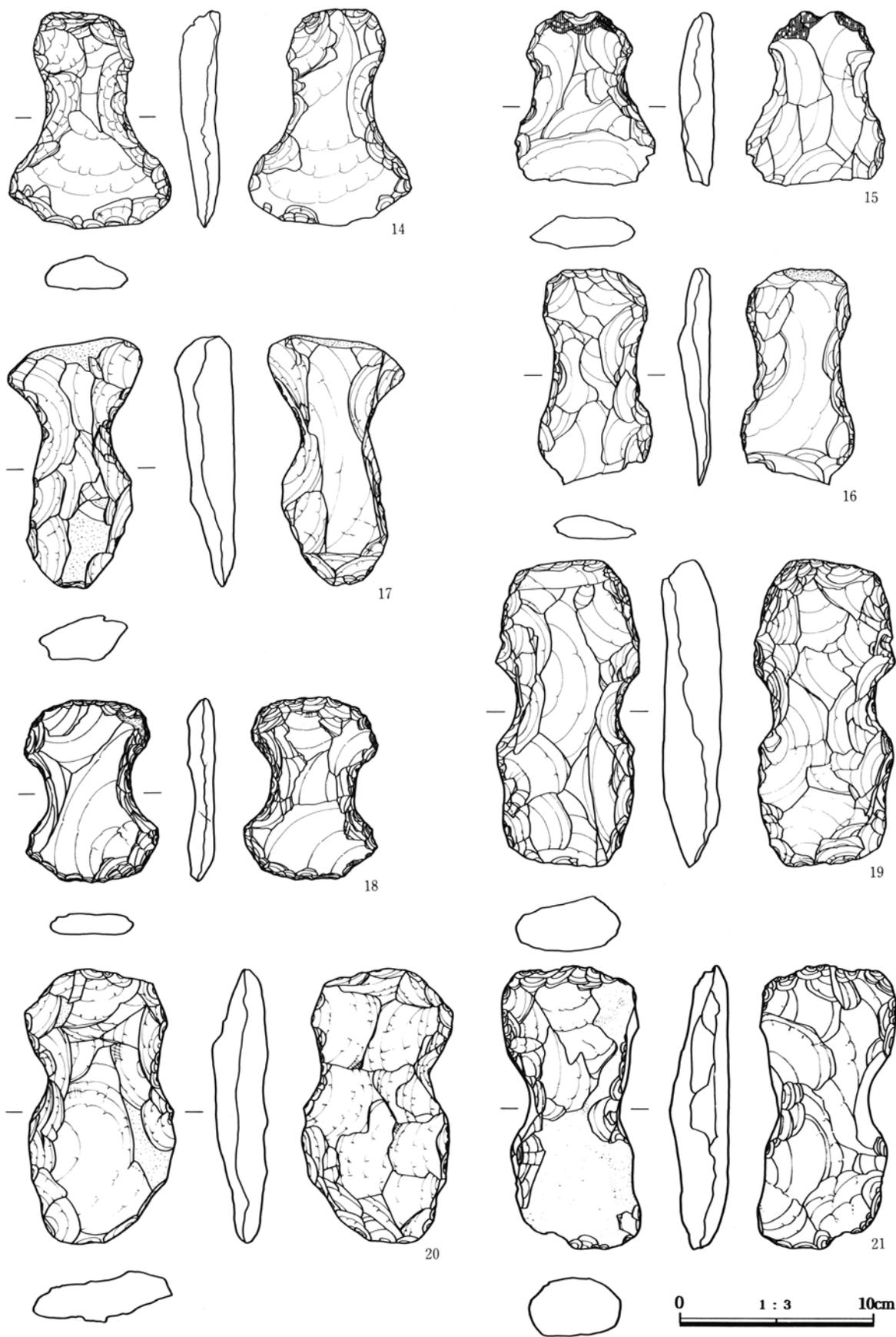
打製石斧の石材の多くを占める黒色頁岩は、利根川支流の赤谷川流域に原産地をもち、利根川下流に転石として分布している。本遺跡の位置が、利根川の河岸段丘右岸の丘陵上であるから、黒色頁岩の産出地、及び転石として分布する流域に近接しているという、地理的環境からくる結果とも言える。

削器（スクレイパー） 剥片を素材とし、素材剥片自体の形状を著しく変えることなく、その周縁や側縁の部分に調整加工を施し、刃部を作り出した資料である。2点出土している。不定形、あるいは横長の剥片を素材としており、剥離も類似することから、打製石斧などの製作段階で作りに出された剥片を利用した可能性も考えられる。石材は、黒色頁岩と玉髓である。

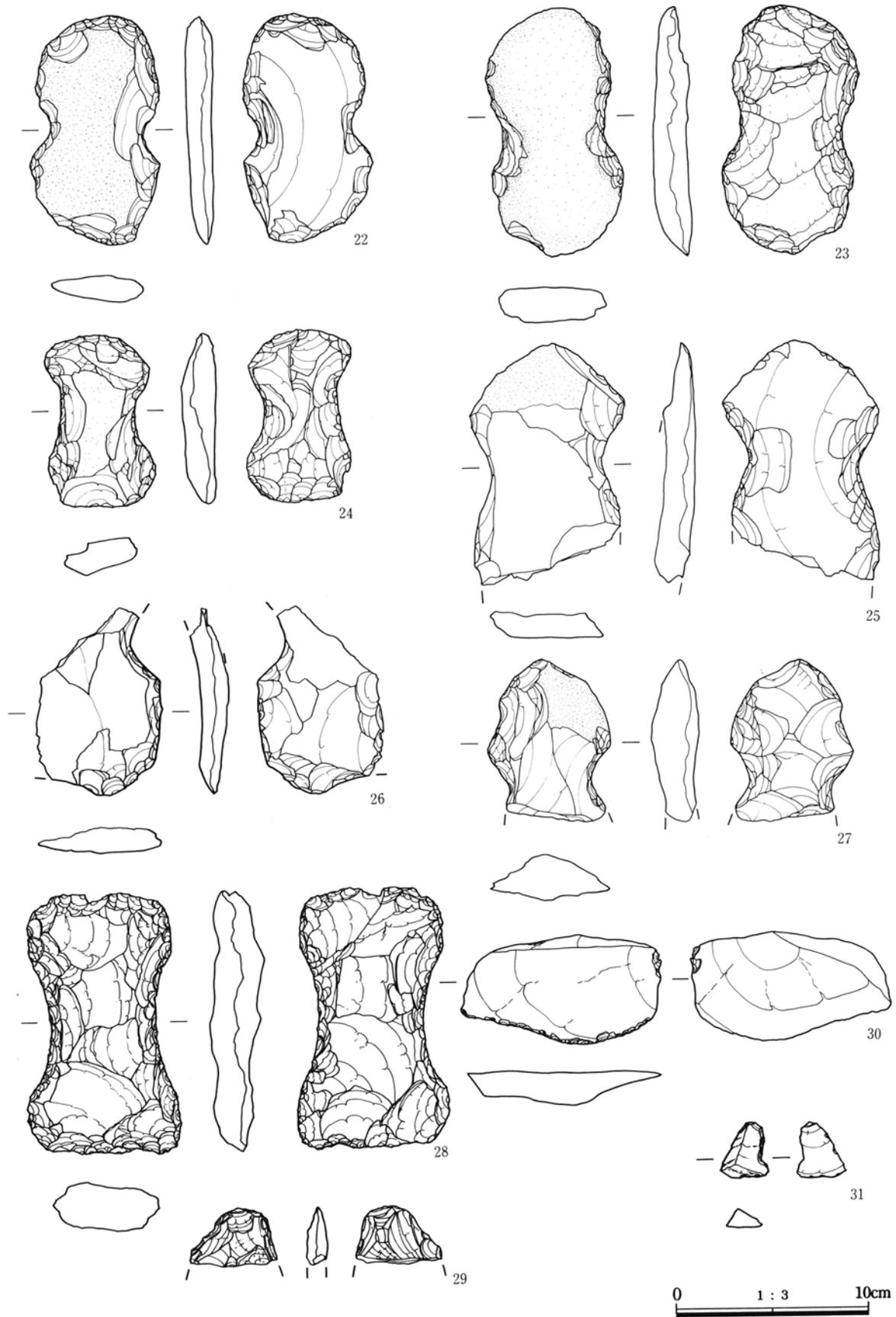
多孔石 総数3点が出土している。礫の両面に多数の穴が穿孔されている資料が2点、片面のみが1点である。石材は3点共に細粒輝石安山岩である。



第13図 縄文石器



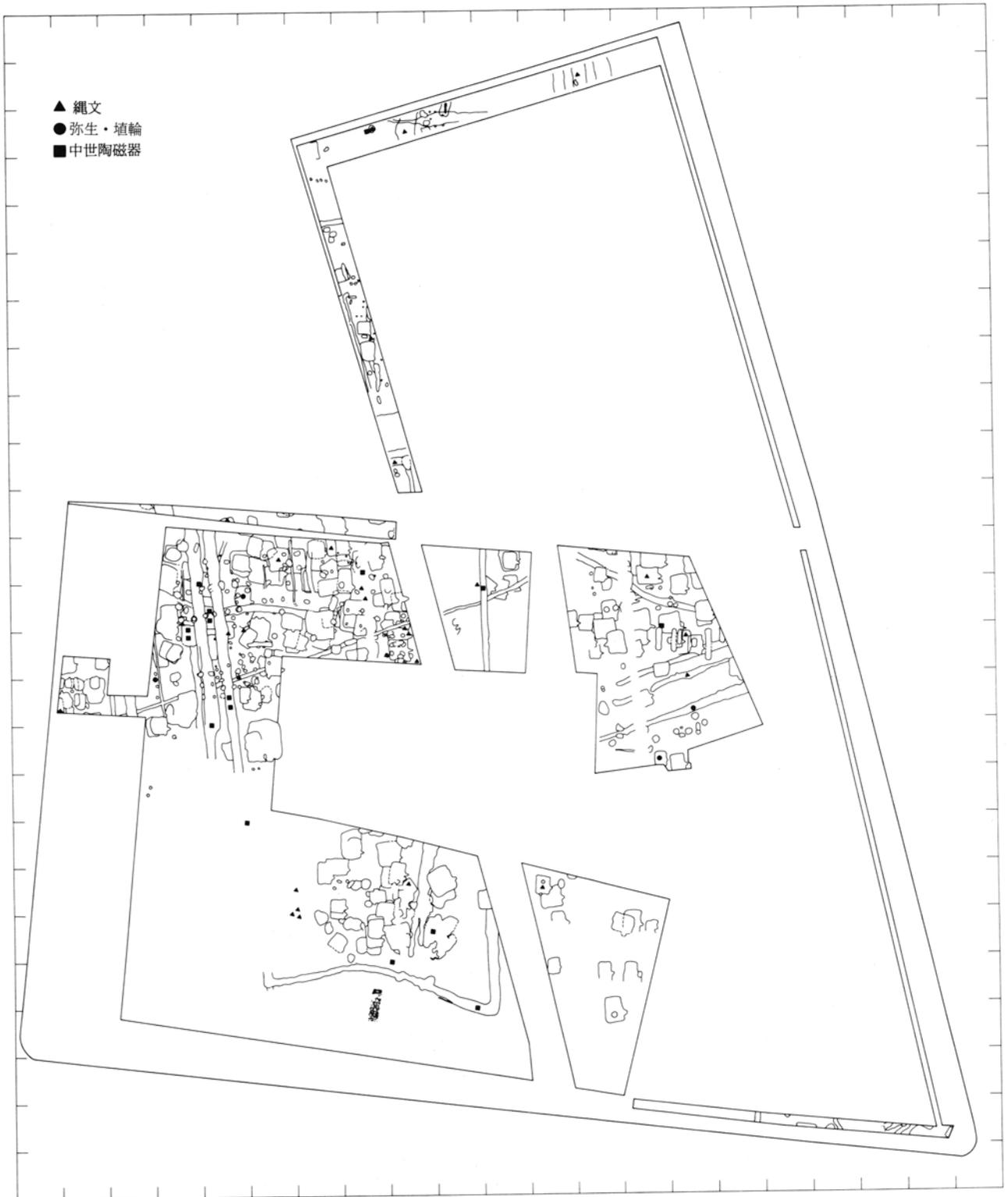
第14図 縄文石器



第15図 縄文石器



第16図 縄文石器



第17図 縄文土器・石器、弥生土器・埴輪、中近世陶磁器出土分布図

第3節 弥生・古墳時代

1. 弥生時代

本遺跡での弥生時代に関する遺構は検出されていないが、土器の破片が僅かに出土している。東に隣接する下東西遺跡では3軒の竪穴住居跡が検出されている。

弥生土器（第18図、写真図版159）

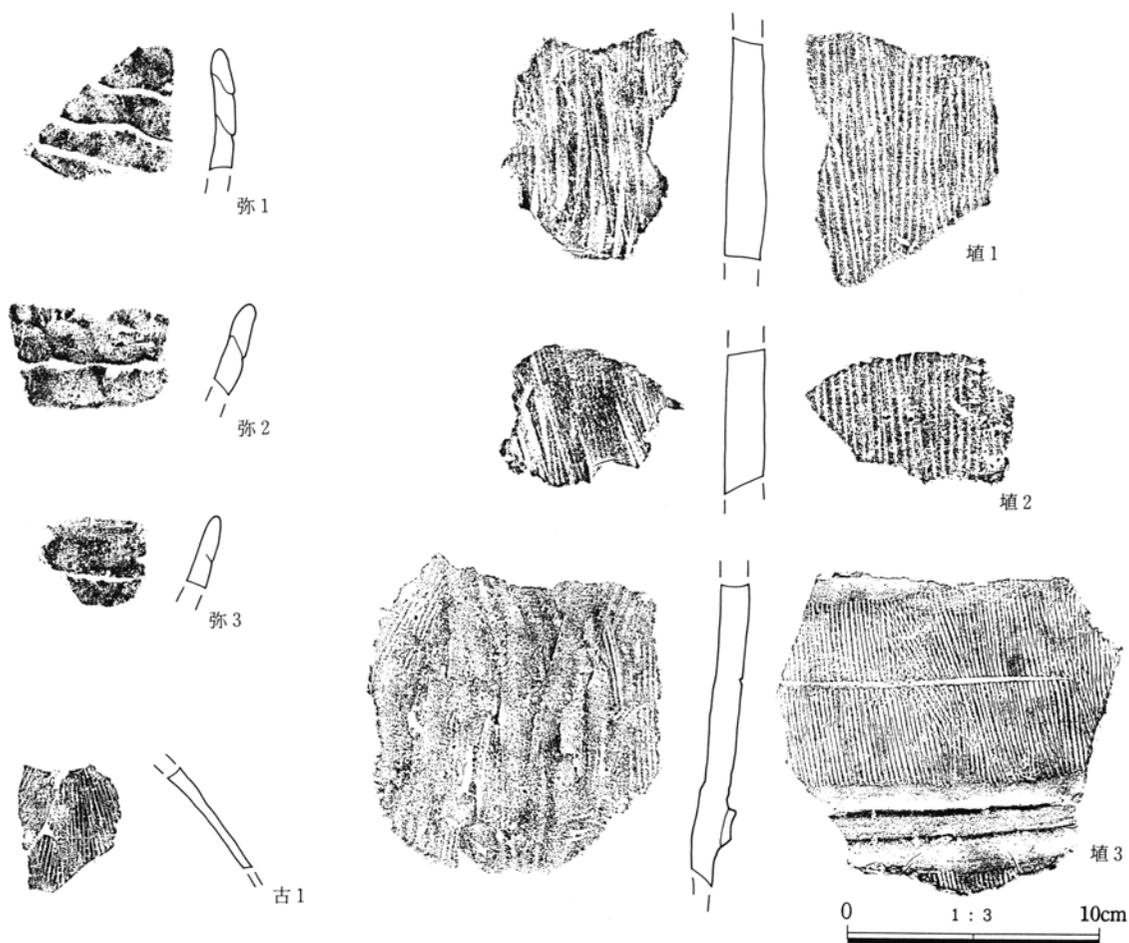
僅かに口縁部の破片が3点出土している。後期の樽式の段階と考えられる。

2. 古墳時代

本遺跡での古墳時代に関する遺構は検出されていないが、古式土師の1点と埴輪3点が出土している。青梨子町内には、1935（昭和10）年作成の『上毛古墳綜覧』によれば、諏訪山（現存する諏訪古墳のことか）・五輪様・浅間山と称される古墳があったとされている。

古式土師・埴輪（第18図、写真図版159）

有段口縁の台付甕の胴部の破片が1点と、円筒埴輪の破片が3点である。



第18図 弥生土器・埴輪

第4節 奈良・平安時代

本遺跡からは、奈良・平安時代の遺構としては竪穴住居跡193軒、竪穴状遺構3基、掘立柱建物跡8棟、溝多数、土坑多数、ピット多数、畠などが検出されており、時期も7世紀後半から11世紀前半までを主体としており、すなわち奈良時代後期から平安時代後期までの約三百年もの期間にわたり途切れることなく、集落が営まれていたことがわかる。

また、出土した遺物の種類も土師器（坏・甕・小形台付甕）、須恵器（坏・高台付椀・高台付皿・高坏・甕・長頸壺・蓋・盤）、灰釉陶器（高台付椀・高台付皿・耳皿・長頸壺・水注）、緑釉陶器（高台付椀・輪花椀・稜椀・高台付皿・高台付段皿・輪花皿・香炉）、奈良三彩陶（香炉）、瓦（鎧・宇・男・女）、銅製品（銅椀・飾り金具）、鉄製品（鋏先・直刀・刀子・鉄鎌・紡錘車・釘）、石製品（紡錘車・砥石・こも編み石）、馬歯、炭化材などの多種である。

次に、本遺跡の特徴を、遺構、遺物別に項目毎に記述することとする。

遺構

1. 集落よりも古い段階の掘立柱建物跡が規則的な並びで8棟ほど存在する。
2. 竪穴住居跡の時期は7世紀後半から11世紀前半まで認められる。
3. 主体となるのは9世紀から10世紀後半にかけての時期の竪穴住居跡である。
4. カマドの構築材に切り出し石を使用している事例が比較的多い。
5. 55号溝が下東西遺跡のSD59から続く溝として確認された。

遺物

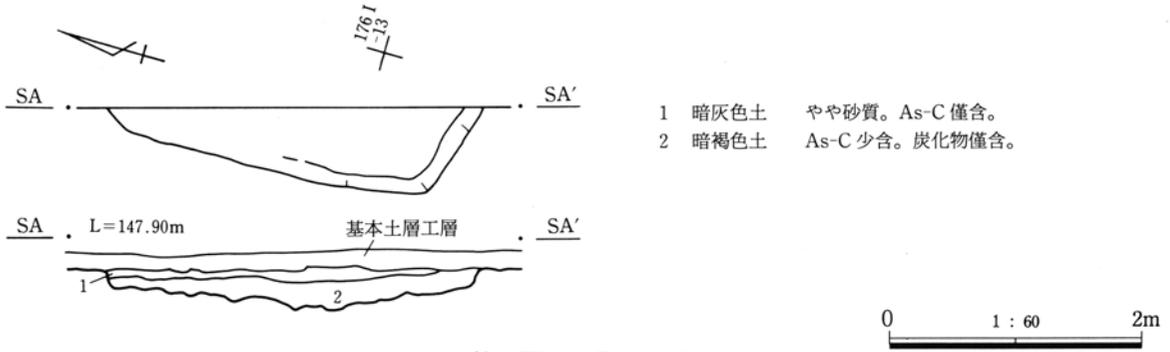
1. 銅の佐波里椀の口縁部の破片が1点だけ出土している。（15号竪穴住居跡）
2. 奈良三彩の破片が1点だけ出土しており、香炉と考えられる。（35号竪穴住居跡）
3. 洛北などの畿内と猿投などの東海と考えられる緑釉陶器の破片が48点出土している。
4. 灰釉陶器は破片を含めて1,162点出土しており、時期は黒笹14号窯式期や黒笹90号窯式期から光ヶ丘1号窯式期、大原2号窯式期、虎溪山1号窯式期まで認められ、丸石2号窯式期は認められない。
5. 全体では大原2号窯式期が主体を占め、虎溪山1号窯式期は少ない傾向が認められる。
6. 畿内産土師器が少量出土している。（33号土坑など）
7. 暗文土器が89号住居跡・90号住居跡などの8世紀代の遺構を中心に多量に出土している。
8. 甲斐型の坏が僅かに1点出土している。（44号竪穴住居跡）
9. 瓦塔の破片が僅かに2点出土している。（18号竪穴住居跡、200号土坑）
10. 付け庇系統の置きカマドが6点出土しており、釜口を二つ持つ形態もみられる。（写真159参照）
11. 脚付土器の脚部分の破片が2点出土している。（55号溝、2区一括）
12. 出土した瓦がすべて国分寺系統であり、上野国分寺や山王廃寺との関係が注目される。

上記した、検出遺構や出土遺物の様子から、本遺跡が古代の上野国の中心地域に近い位置に存在することが改めて理解される。

第3章 検出された遺構・遺物

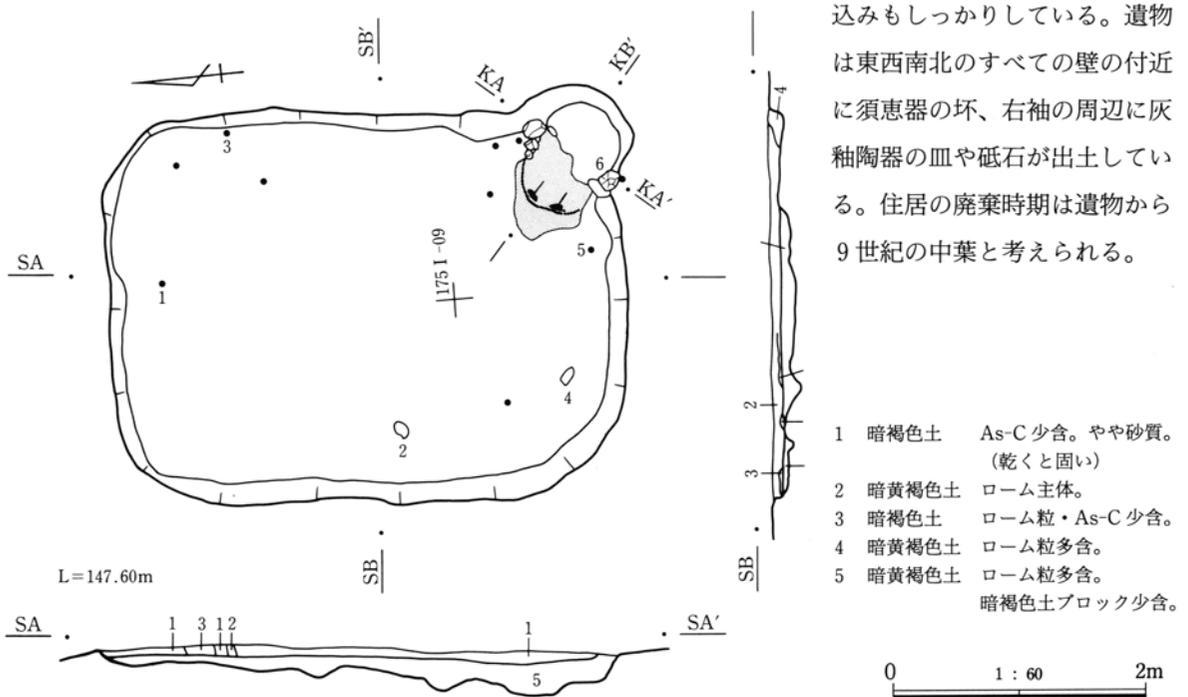
1号竪穴住居跡（第19図、写真図版4）

176I-13グリッドに位置し、東側半分が調査区域外に延びるために重複関係は不明であるが、平面形態は長方形と考えられる。確認面が浅いために床面の一部が削平されている。壁溝、貯蔵穴、柱穴は不明であり、遺物も形状や年代の判断できる資料がほとんど認められない。カマドは東壁に位置すると考えられる。住居の廃棄時期は竪穴住居跡の形態から10世紀の可能性が高い。

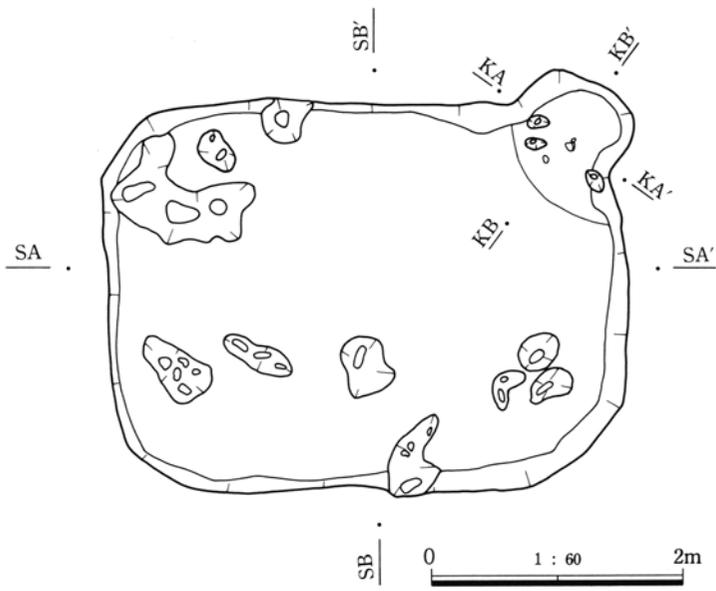


第19図 1号住居跡

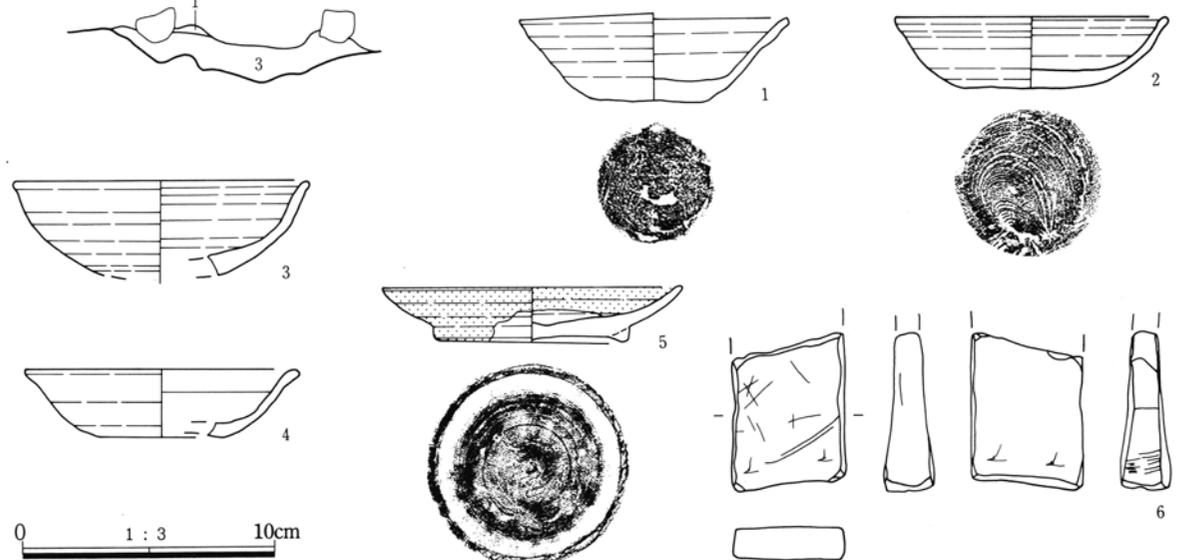
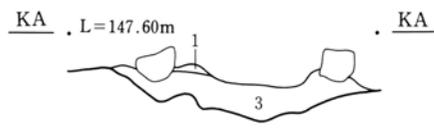
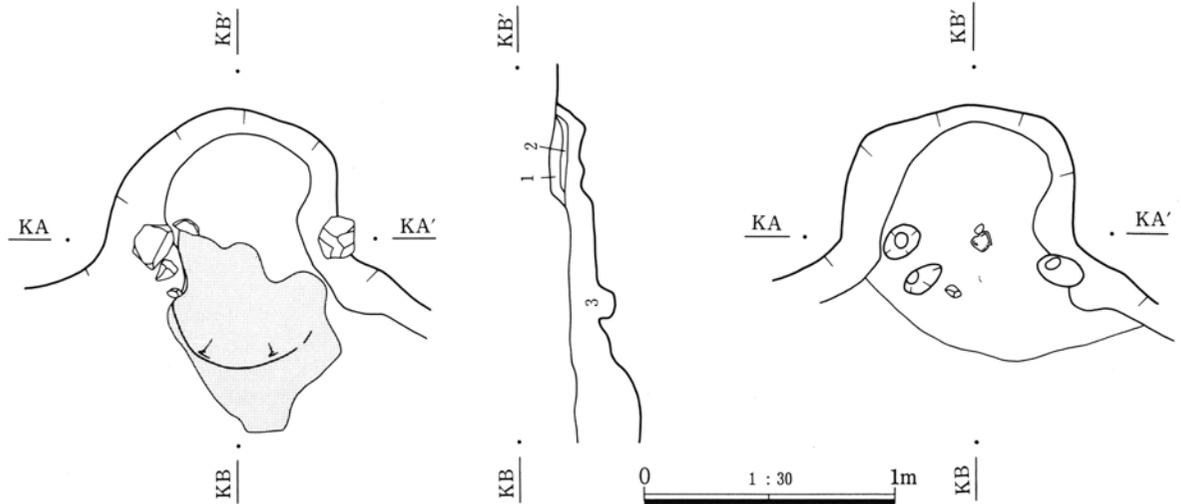
2号竪穴住居跡（第20・21図、写真図版4・115） 175I-09グリッドに位置し、7号溝との重複関係があり、7号溝の方が2号竪穴住居跡より古い。平面形態は隅丸長方形である。床面は貼床が施され、堅く平坦である。確認面は浅く、壁高は約5cmと僅かである。貯蔵穴は無く、明確な柱穴は無いものの、可能性のあるピットが3箇所に認められる。掘り方は床面より約5~25cm程掘り込み、ロームを主体とする暗褐色土の貼り床を施している。遺物は壁際に完形に近い須恵器の坏、カマド周辺に長甕の口縁部や胴部の破片と完形の坏が出土している。カマドは東壁の南東隅に位置し、残存状態は良好である。両袖には構築材としての石が残存する。カマド掘り方は前方部を楕円形に深さ20cm程掘り込んだ後、両袖の石を固定させるための掘り込みもしっかりしている。遺物は東西南北のすべての壁の付近に須恵器の坏、右袖の周辺に灰釉陶器の皿や砥石が出土している。住居の廃棄時期は遺物から9世紀の中葉と考えられる。



第20図 2号住居跡



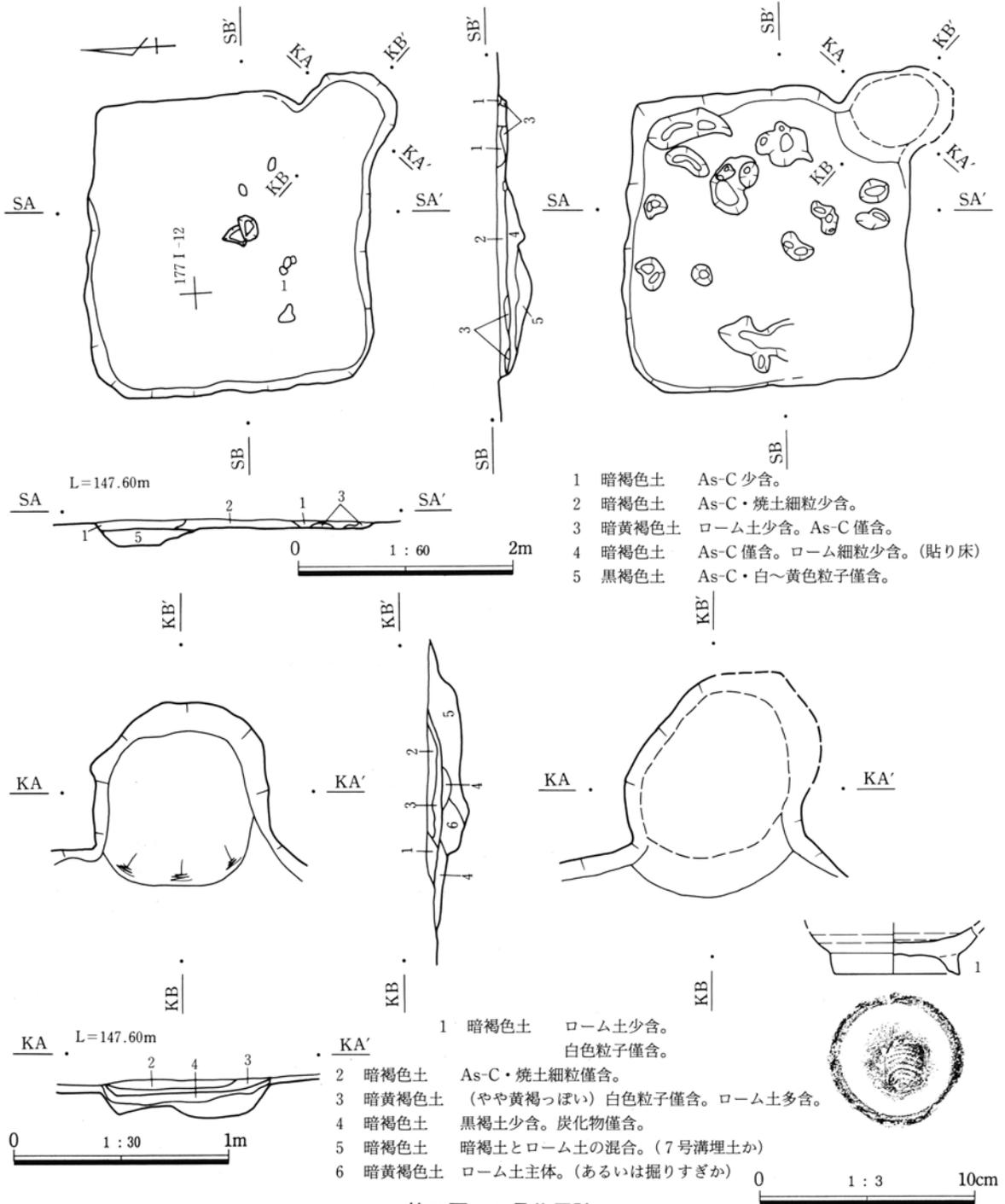
- 1 暗褐色土 白色粒子 (As-C?) 少含。
ロームブロック・焼土細粒僅含。
- 2 暗黄褐色土 白色粒子僅含。ローム土少含。
- 3 暗黄褐色土 暗褐色土をブロック状に少含。
ローム土・白色粒子少含。



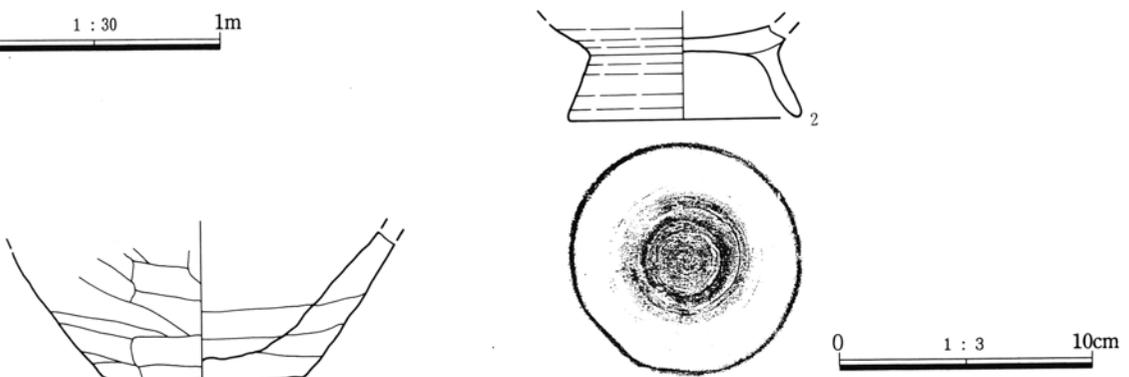
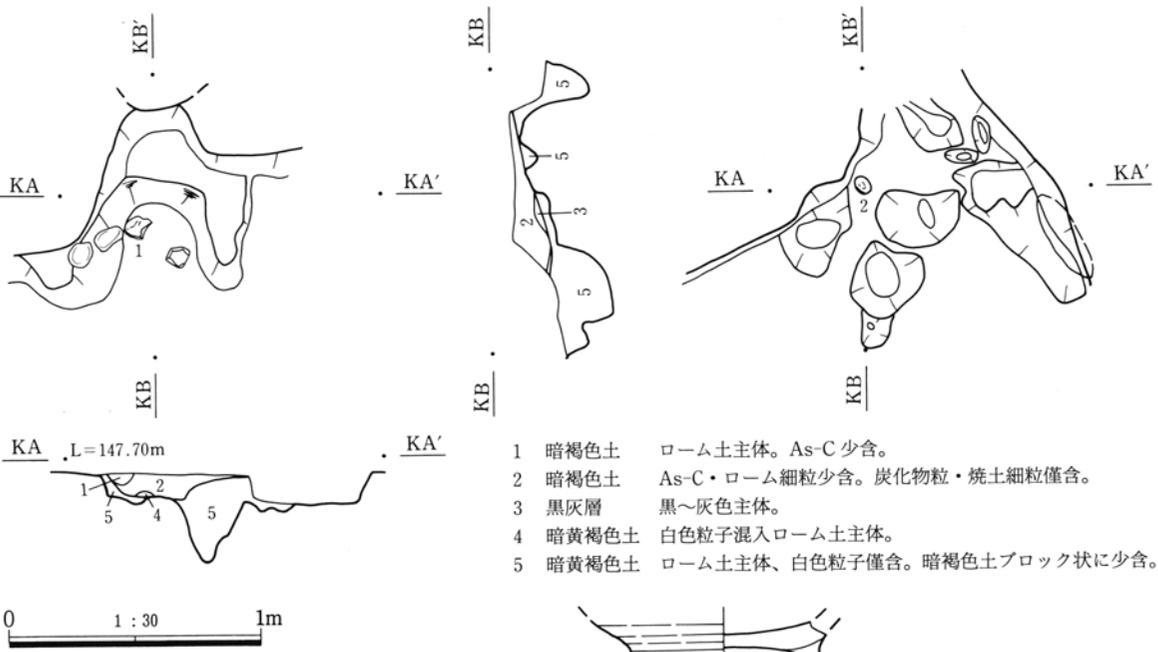
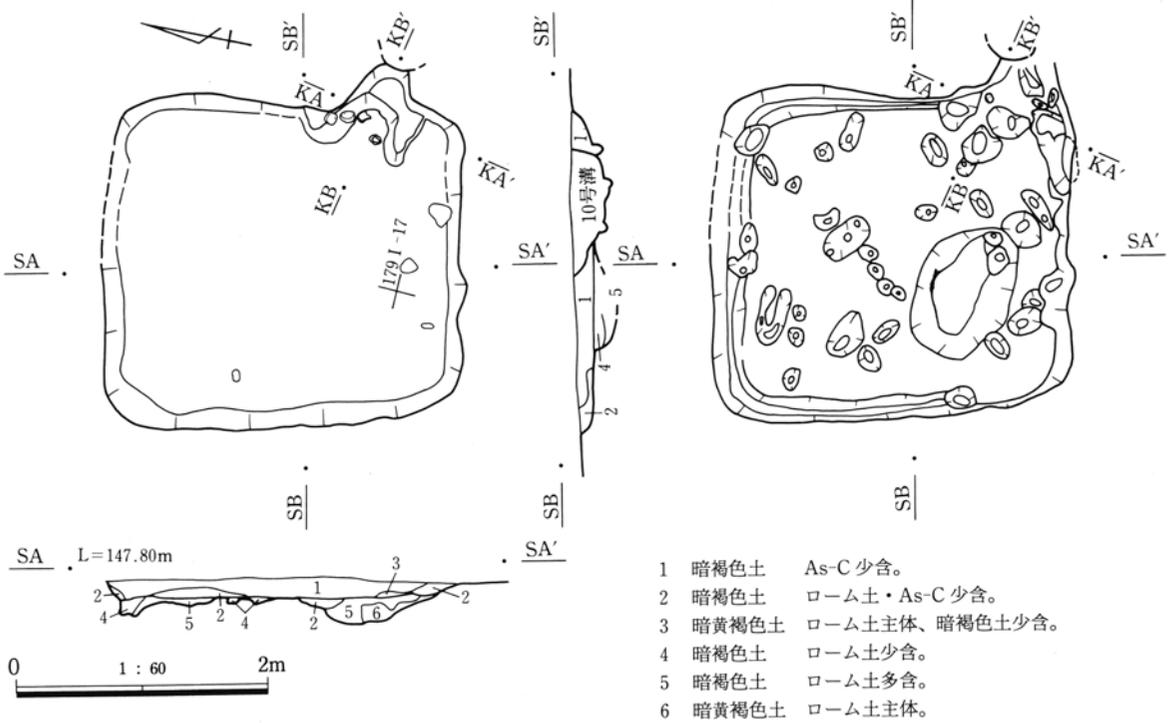
第21図 2号住居跡

第3章 検出された遺構・遺物

3号竪穴住居跡（第22図、写真図版4・5・115） 177I-12グリッドに位置し、重複関係では7号溝よりも3号竪穴住居跡の方が新しく、溝の一部をカマドが壊している。平面形態は隅丸正方形である。確認面が浅いものの、地山を掘り込んだだけの床面は堅く、貼り床面がしっかりしており、平坦である。残存する壁高は約5cmと僅かで、緩やかに立ち上がる。明確な柱穴は無いものの、可能性のあるピットが数箇所に認められる。明確な壁溝、貯蔵穴は検出されていない。遺物は須恵器の椀が床面のほぼ中央から出土している。カマドは東壁の南東隅に位置し、住居の廃棄時期は遺物から9世紀と考えられるが、住居形態からは10世紀の可能性もある。



第22図 3号住居跡

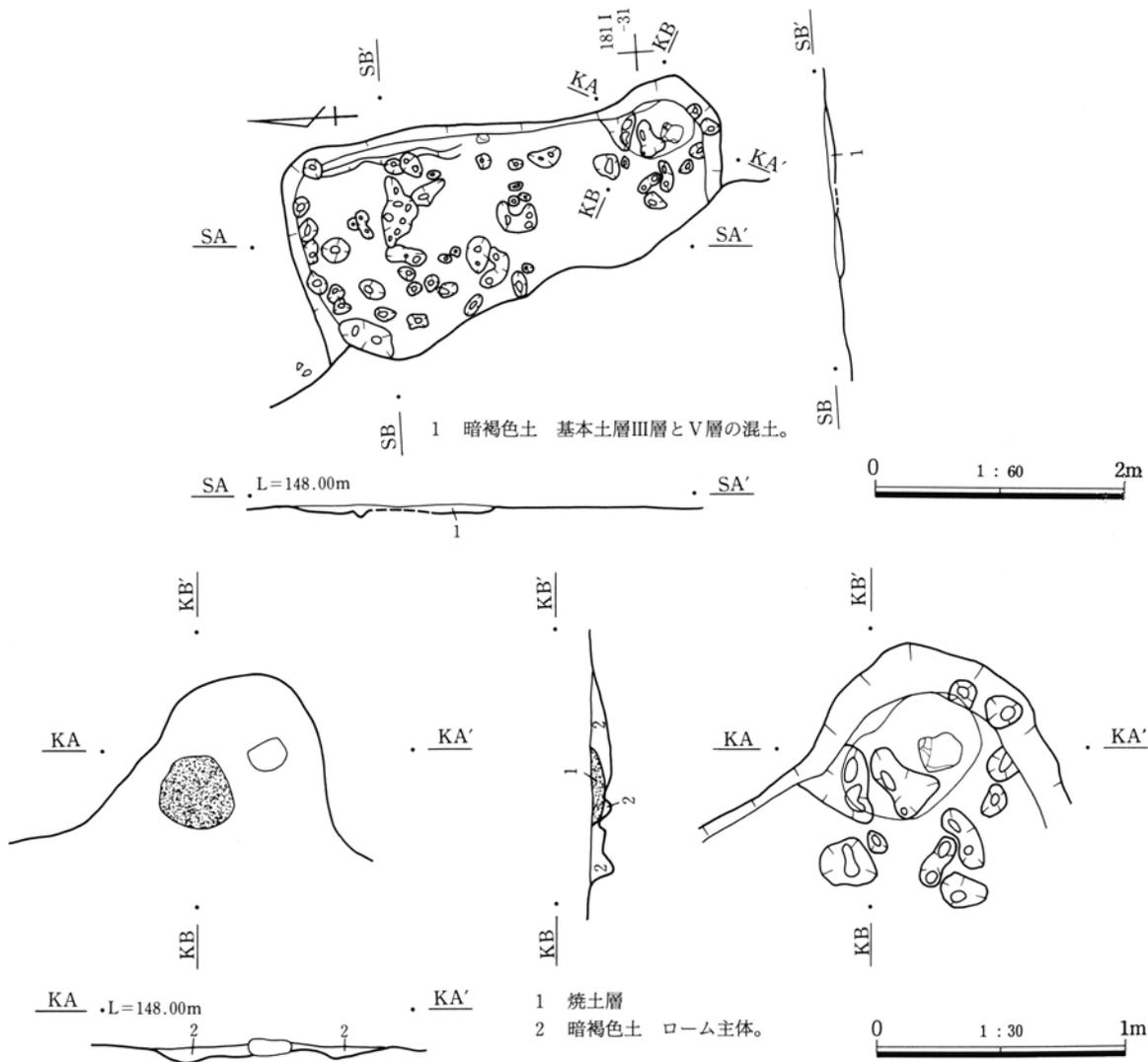


第23図 4号住居跡

第3章 検出された遺構・遺物

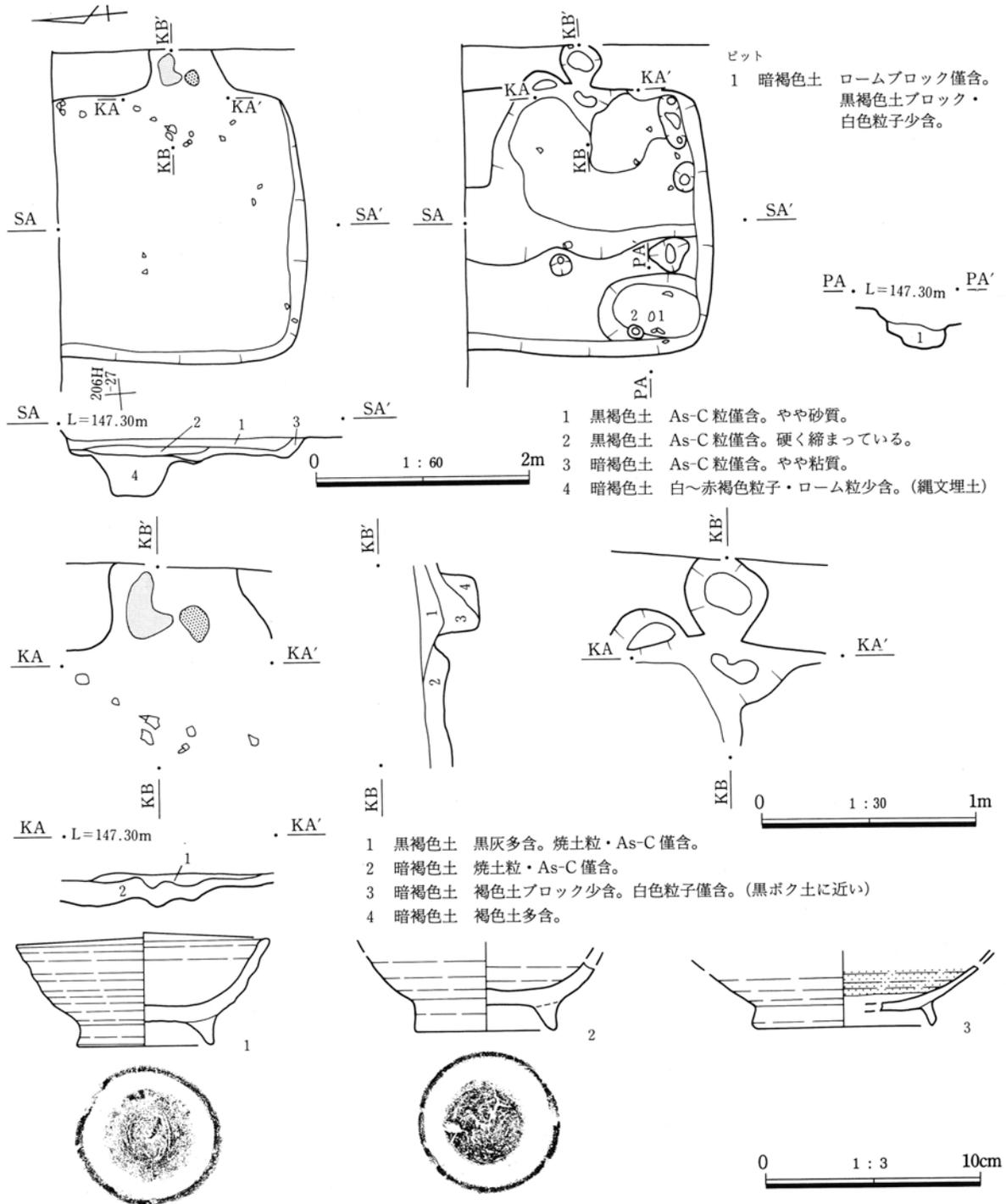
4号竪穴住居跡(第23図、写真図版5・6・115) 179I-17グリッドに位置する。重複関係では、4号竪穴住居跡の方が古く、東側の約半分が10号溝に壊されている。平面形態は正方形に近い長方形である。地山を掘り込んだだけの床面は堅く平坦である。壁高は北部分が約10cmであるのに対して、南側部分は壁が不明確であり、緩やかに立ち上がるが、ほとんど壁すら確認できない状態の部分も存在する。掘り方で東壁から北壁を巡り、西壁に至る範囲に壁溝が検出されたが、明確な貯蔵穴や柱穴は検出されなかった。だが、遺物は須恵器の甕や足高台付椀などがカマド内から出土している。カマドは東壁の中央より南寄りに位置し、煙出し部分が3号ピットに壊されている。住居の廃棄時期は遺物から10世紀後半と考えられる。

5号竪穴住居跡(第24図、写真図版6) 181I-31グリッドに位置し、重複関係は無い。確認面が浅いことから、検出時にすでに床面の西側半分が失われているが、平面形態は隅丸長方形と考えられる。東壁の北半分に壁溝が確認されたが、明確な貯蔵穴、柱穴は検出されていない。だが、掘り方調査段階で大小の床下土坑やピットが検出されていることから、いずれかが相当するかもしれない。カマドは東壁の南東隅に位置し、右袖には構築材として使用された断面正方形の切り出し石の一部が残存する。住居の廃棄時期は住居形態から9世紀から10世紀にかけてと考えられる。

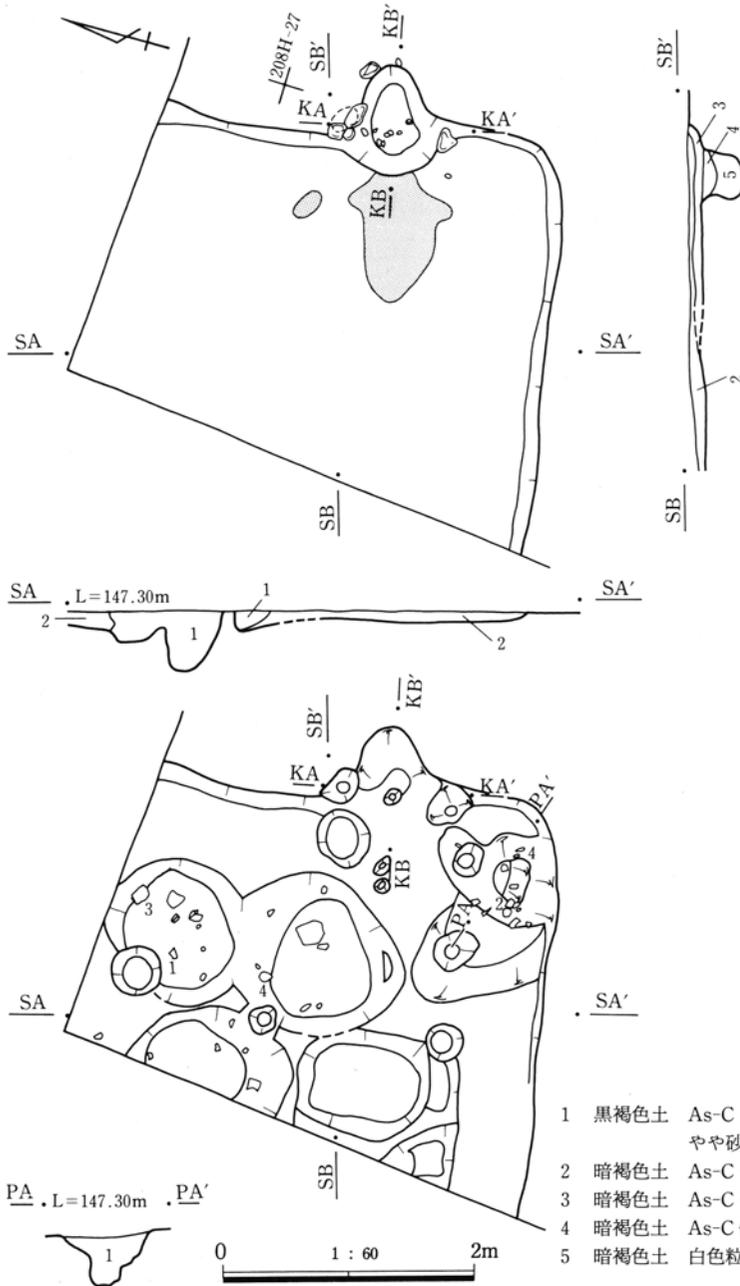


第24図 5号住居跡

6号竪穴住居跡(第25図、写真図版7・115) 206H-27グリッドに位置する。重複関係は無いが、北壁付近とカマドの煙出し部分が調査区域外に延びている。平面形態はおそらくは正方形?である。地山を掘り込んだだけの床面は堅く平坦である。壁高は約5cmと浅く、緩やかに立ち上がる。明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されなかったが、円形から楕円形の形状のいくつかの床下土坑が検出されている。遺物は須恵器の椀や灰釉陶器の椀が出土している。カマドは東壁の中央からやや南寄りに位置する。住居の廃棄時期は遺物から10世紀後半と考えられる。



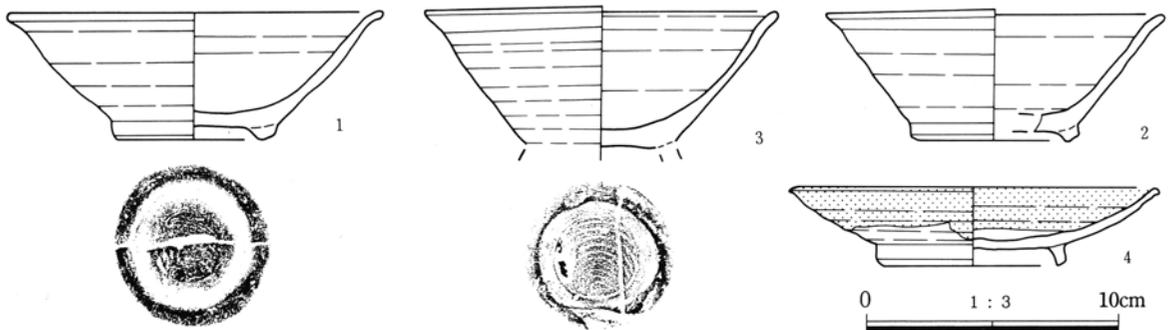
第25図 6号住居跡



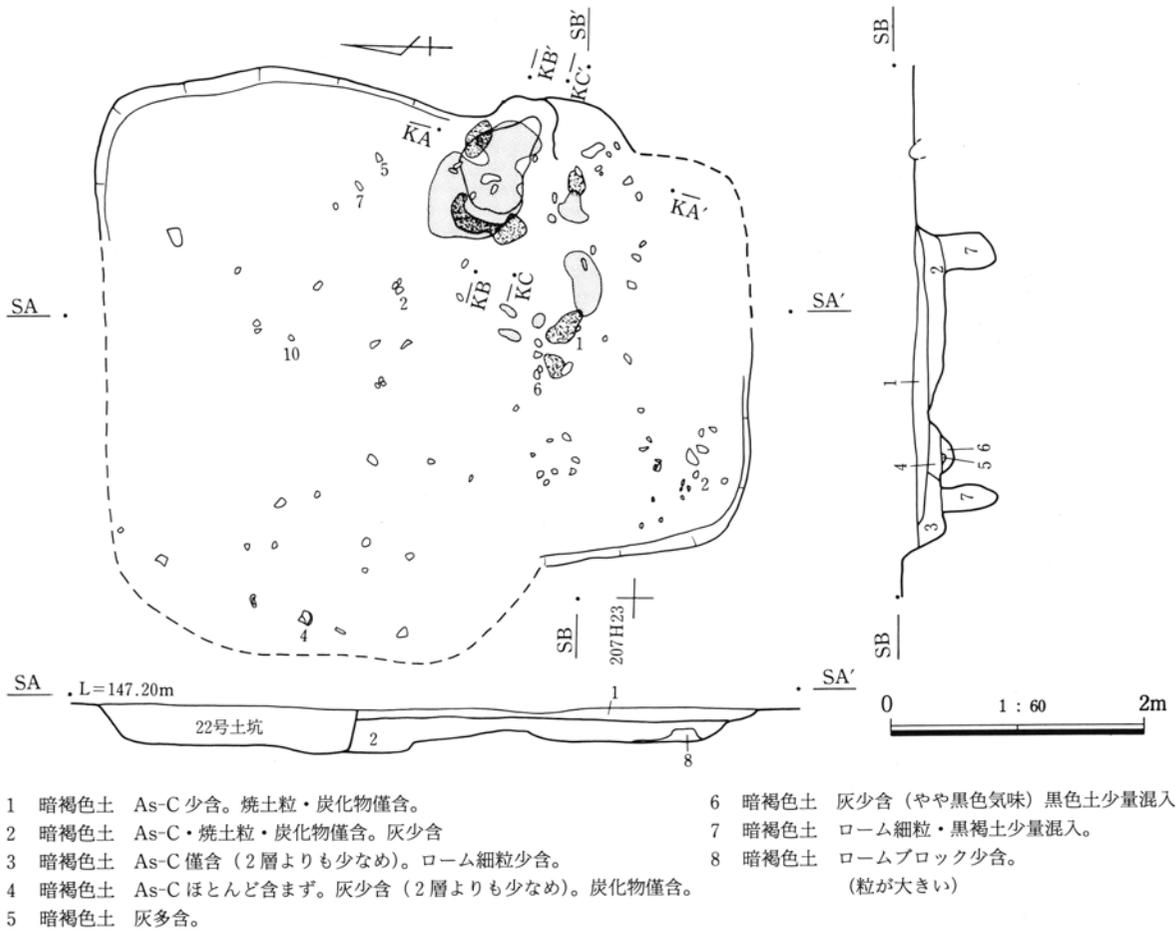
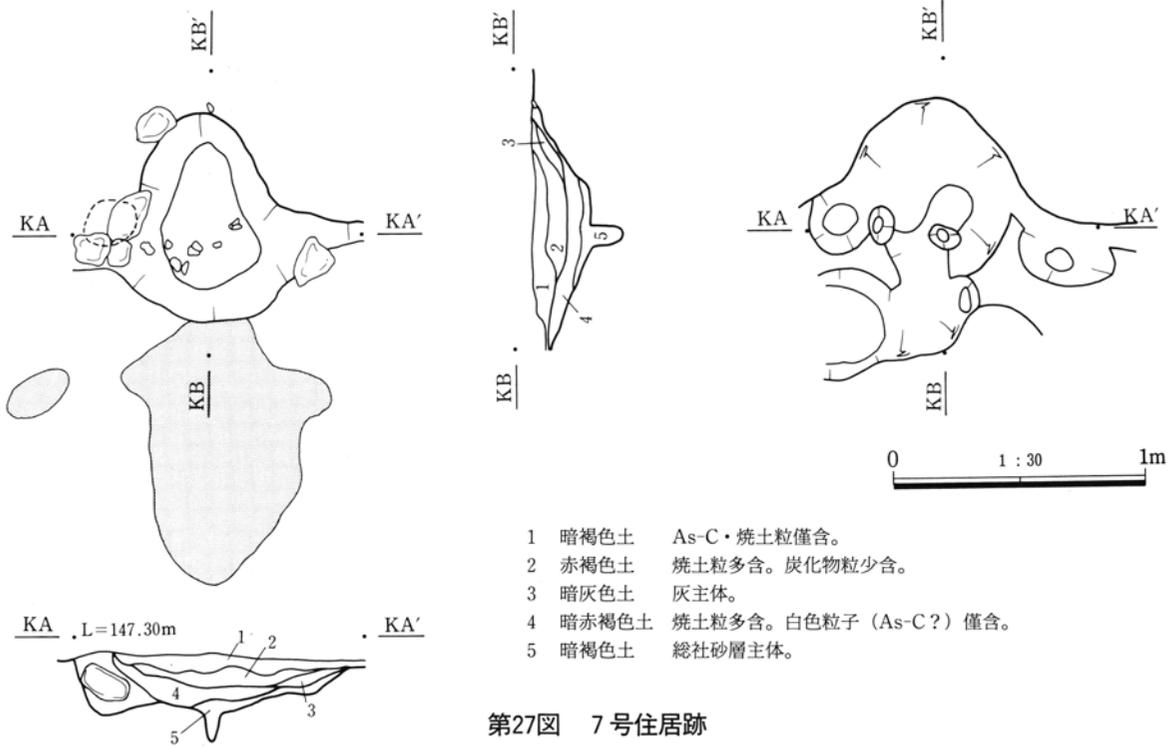
7号竪穴住居跡（第26・27図、写真図版7・8・115）208H-27グリッドに位置する。北壁から西壁にかけての部分が、調査区域外に延びているために、重複関係は不明であり、平面形態も不明である。地山を掘り込んだだけの床面は、堅く平坦である。壁高は約5cmであり、緩やかに立ち上がる。貯蔵穴は南東隅に存在するものの、明確な壁溝、柱穴は検出されなかった。掘り方からは大きな床下土坑が少なくとも4箇所検出されている。遺物は須恵器の椀や灰釉陶器の皿が、貯蔵穴やいくつかの床下土坑から出土している。カマドは東壁の中央からやや南寄りに位置し、両袖は石を構築材として利用して残存しており、掘り方にも埋め込む穴が対の形で存在する。住居の廃棄時期は遺物から10世紀前半と考えられる。

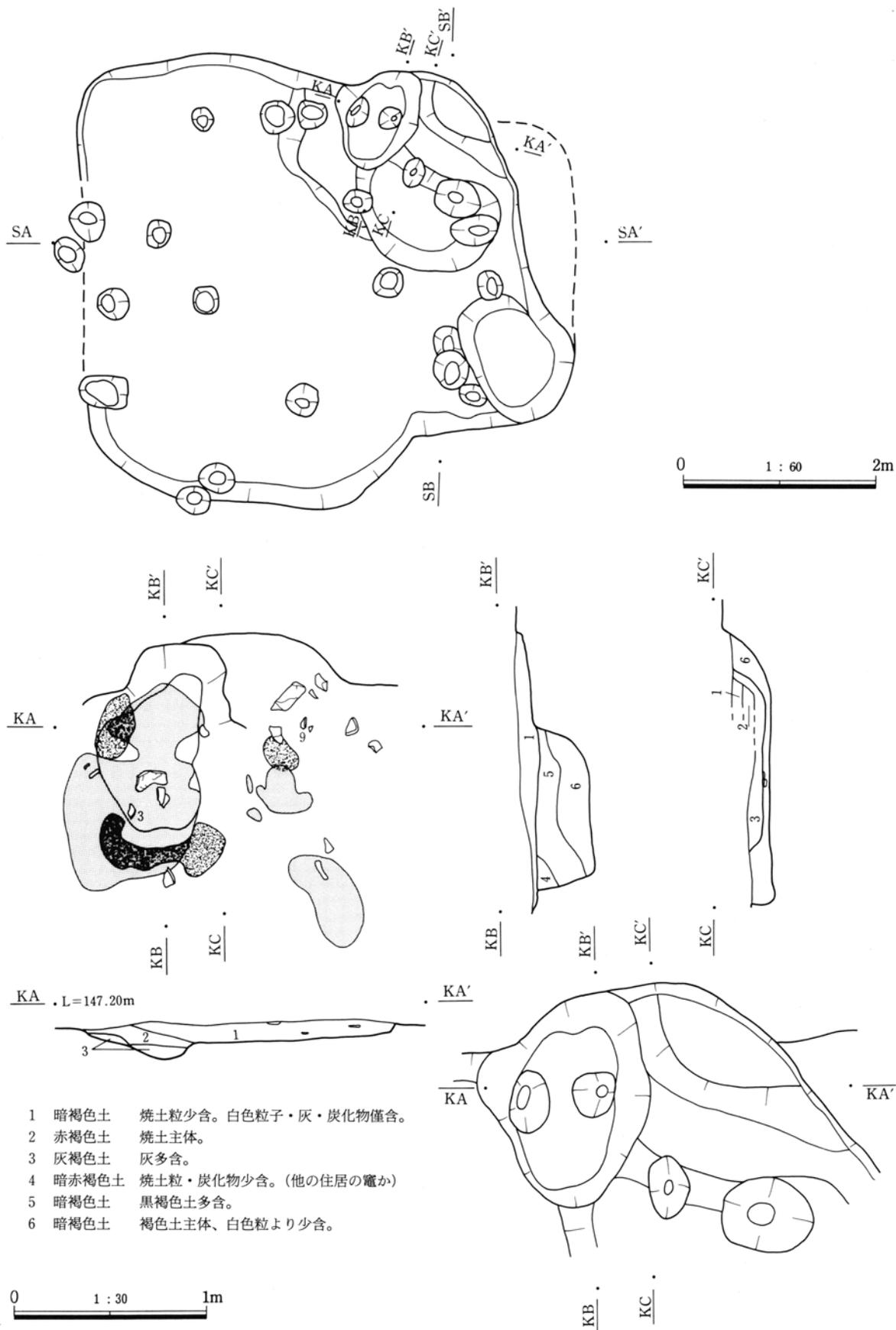
- 1 黒褐色土 As-C（白色粒子）・砂利（ややサクサクしている）少含。やや砂質。
- 2 暗褐色土 As-C・ローム細粒僅含。
- 3 暗褐色土 As-C・ローム細粒・焼土細粒僅含。
- 4 暗褐色土 As-C 僅含。ロームブロック少含。やや砂質。
- 5 暗褐色土 白色粒子・ローム土僅含。褐色土少含。

ピット
1 黒褐色土 炭化物粒・焼土粒・ローム土僅含。

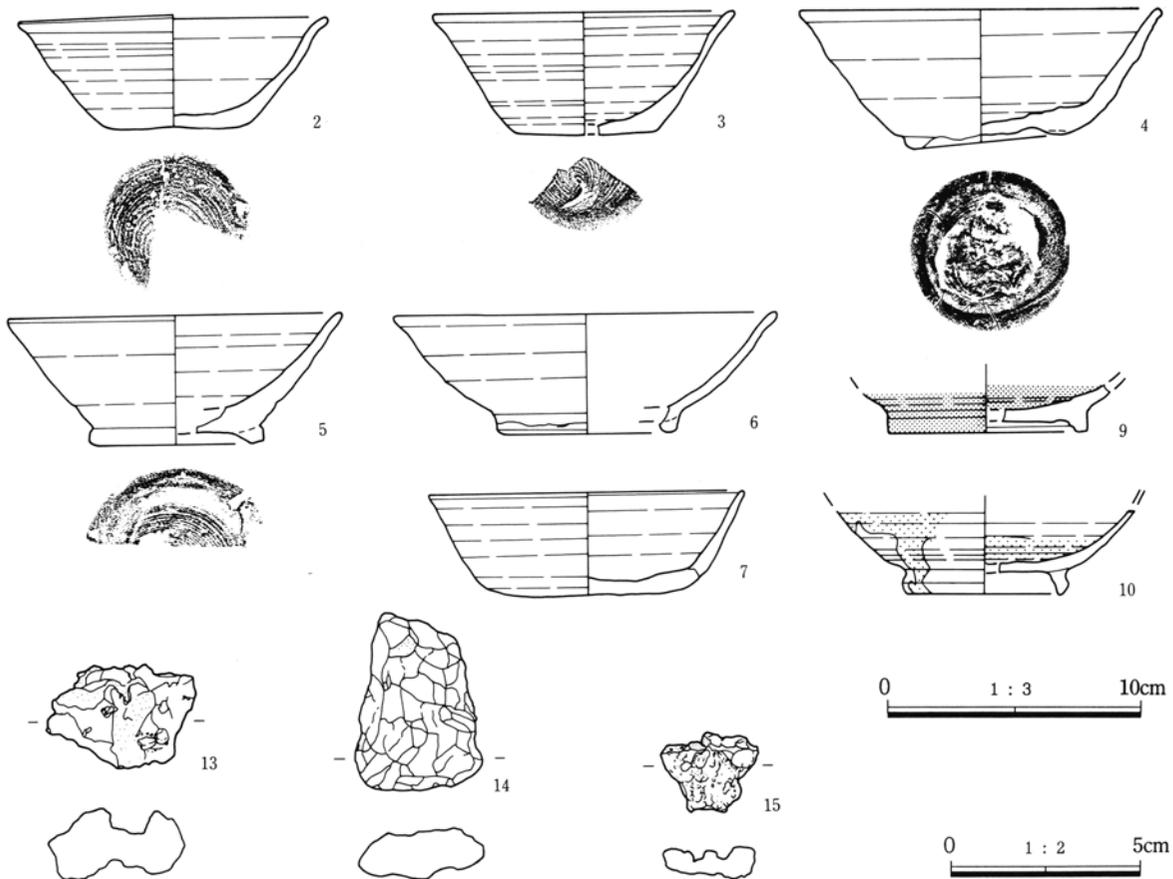


第26図 7号住居跡





第29図 8号住居跡



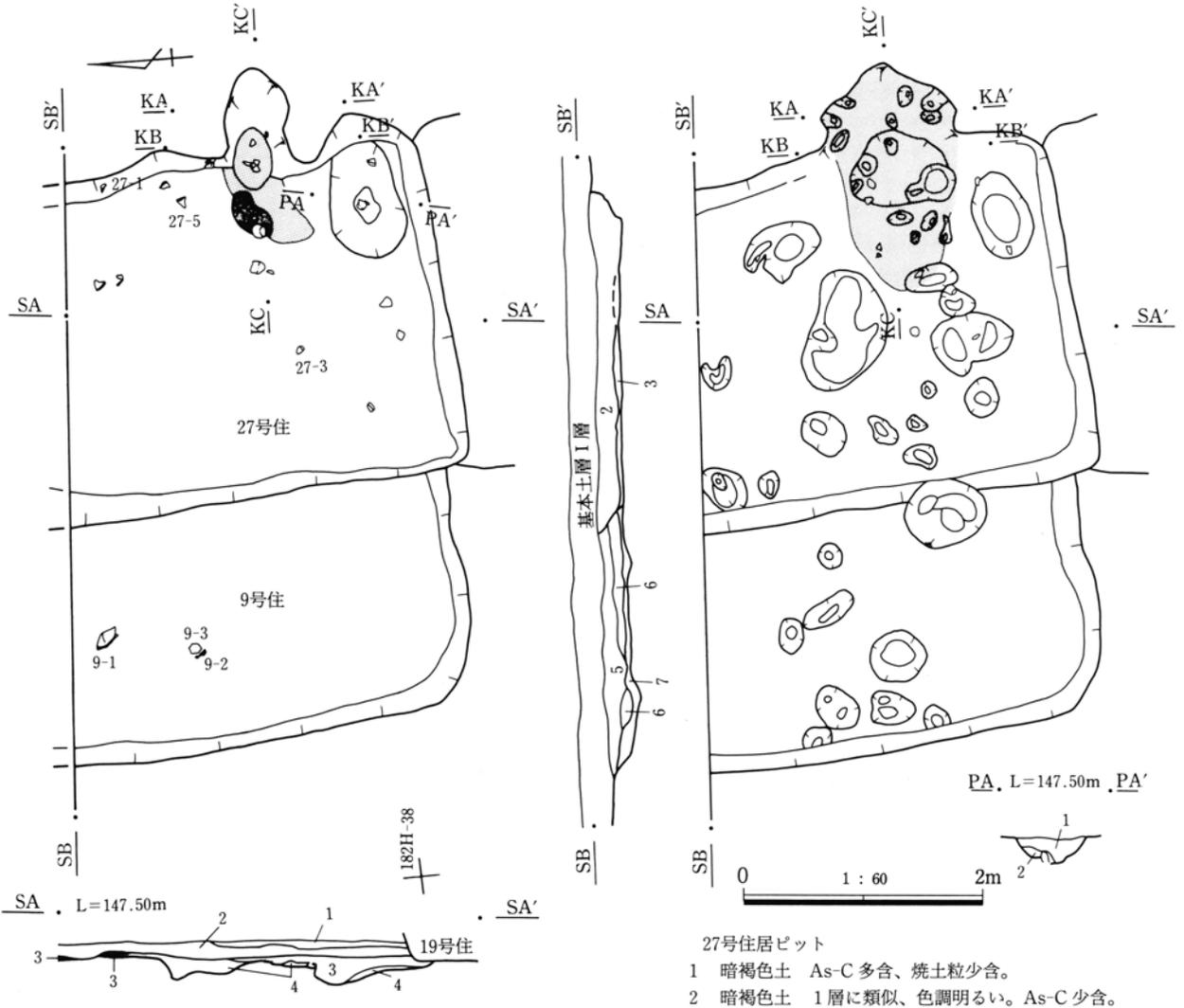
第30図 8号住居跡

8号竪穴住居跡（第28～30図、写真図版8・9・115） 207H—23グリッドに位置し、重複関係では中世の22号土坑に北壁部分を壊されている。確認時に形態が不明確だったために、最終的には掘り方から平面形態を判断したが、おそらくは長方形?である。だが、張り出し部分を持つ不定形の竪穴住居跡か、あるいは2軒の竪穴住居跡の重複、さらには、他の遺構との重複が確認できなかったのかもしれない。床面もはっきりせず、残存する壁高は約5cmと浅く、緩やかに立ち上がる。掘り方は床面から約10～30cm掘り込み、多数のピットと床下土坑が検出されており、ピットの一部は柱穴に想定可能である。だが、明確な壁溝、貯蔵穴は確認されていない。遺物は須恵器の坏や椀、灰釉陶器の椀などがカマド付近から床の中央部分にかけて出土している。カマドは東壁のやや南寄りに位置するが、残存状態は悪い。カマド前の焼土や灰の分布状況や掘り方の南側の様子、さらには鉄滓の出土などから、小鍛冶の可能性が考えられる。あるいは2軒の竪穴住居跡の痕跡を示すかもしれない。住居の廃棄時期は遺物から10世紀前半と考えられる。

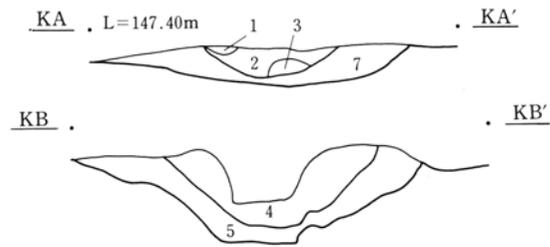
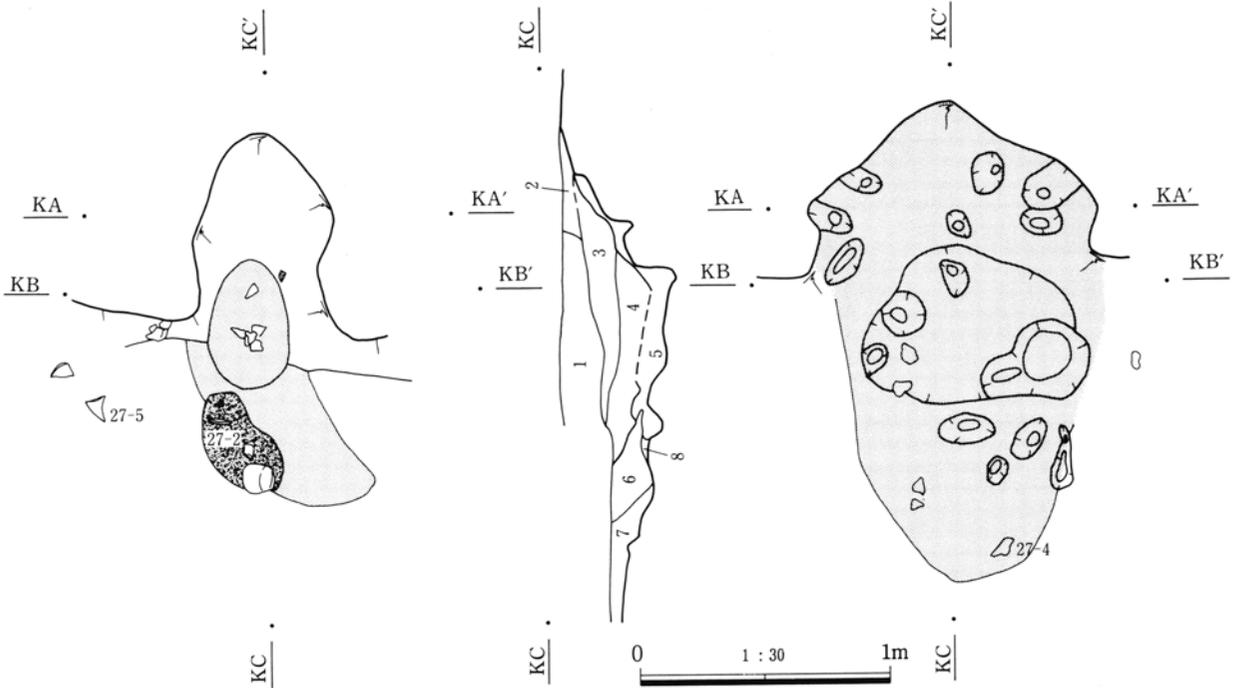
9号竪穴住居跡・27号竪穴住居跡（第31・32図、写真図版9・10・115・119） 182H—38グリッドに位置し、重複関係は9号竪穴住居跡の方が古く、27号竪穴住居跡が新しい。さらに、19号竪穴住居跡とも重複しており、19号竪穴住居跡の方が新しく、27号竪穴住居跡が古い。両竪穴住居跡共に、北壁部分が調査区域外に延びているため、平面形態は不明確であるが、おそらくは長方形と考えられる。地山を掘り込んだだけの床面は堅く平坦で、掘り方の掘り込みもほとんど浅い。残存する壁高は約10～15cmで、緩やかに立ち上がる。27号竪穴住居跡の貯蔵穴は楕円形で南東隅に位置する。掘り方調査段階で柱穴に想定可能な明確な壁溝、貯蔵

第3章 検出された遺構・遺物

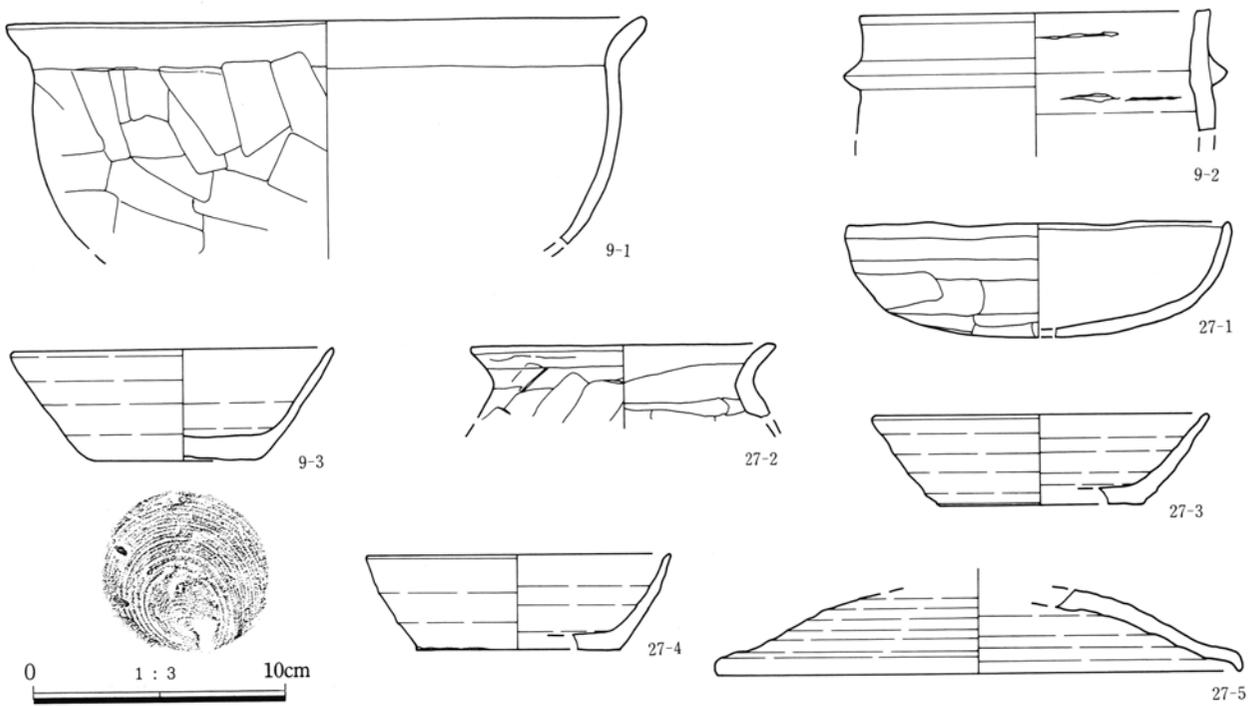
穴は検出されていないが、多数のピットと床下土坑は検出されており、ピットの一部は柱穴に想定可能である。遺物は土師器や須恵器の坏、灰釉陶器などが北東隅部分に集中して出土している。9号竪穴住居跡のカマドは東壁の南東隅寄りに位置し、残存状態はあまり良好ではない。だが、掘り方がやや西にまで広がることや、灰の分布が西にまで広がることから、この部分があるいは27号竪穴住居跡のカマドの痕跡かもしれない。住居の廃棄時期は遺物から9号竪穴住居跡は8世紀後半、それよりも新しい27号竪穴住居跡は、19号竪穴住居跡よりは古いことから、9号竪穴住居跡と同じ8世紀後半か、9世紀、あるいは19号竪穴住居跡の10世紀以前までと考えられる。



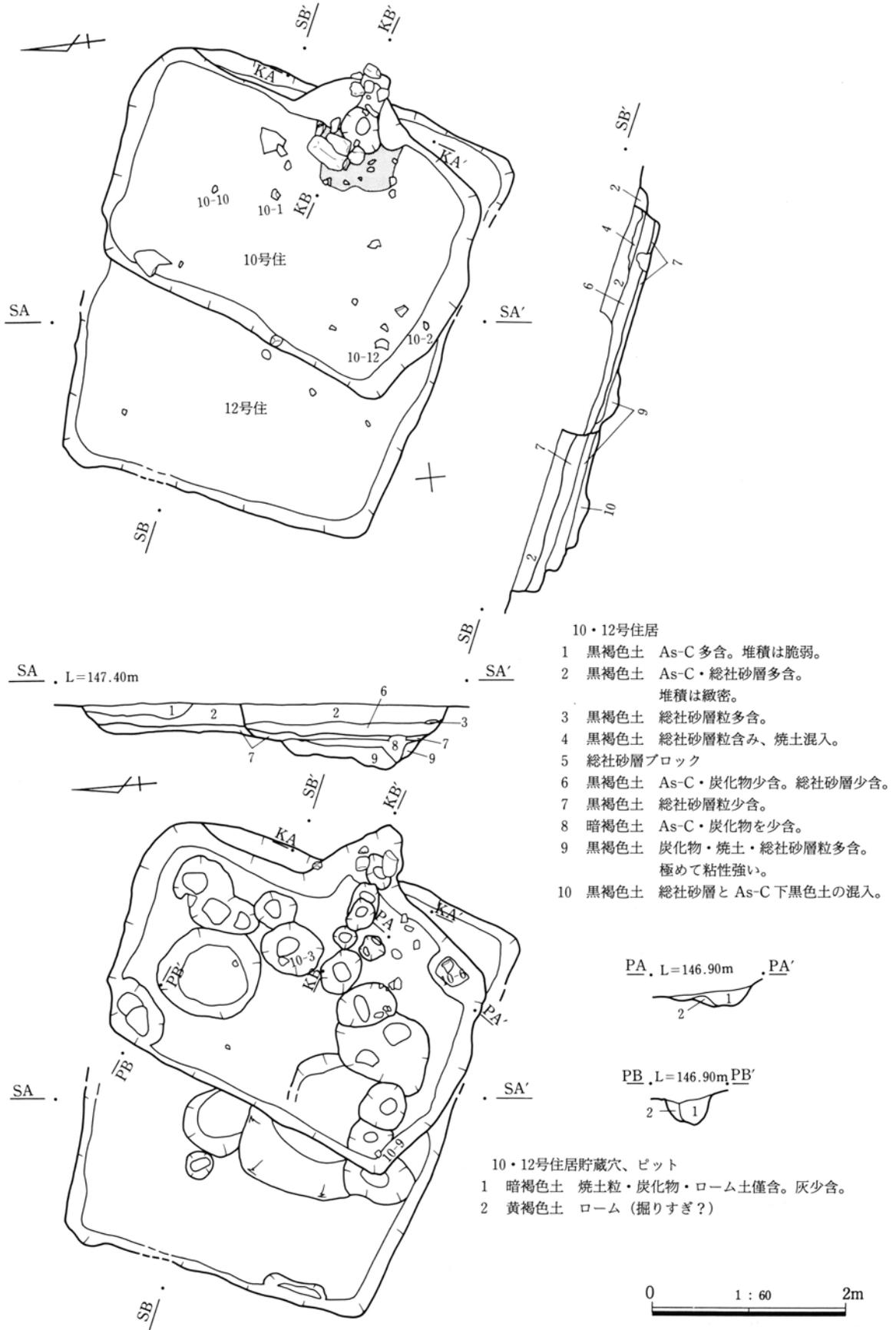
第31図 9・27号住居跡



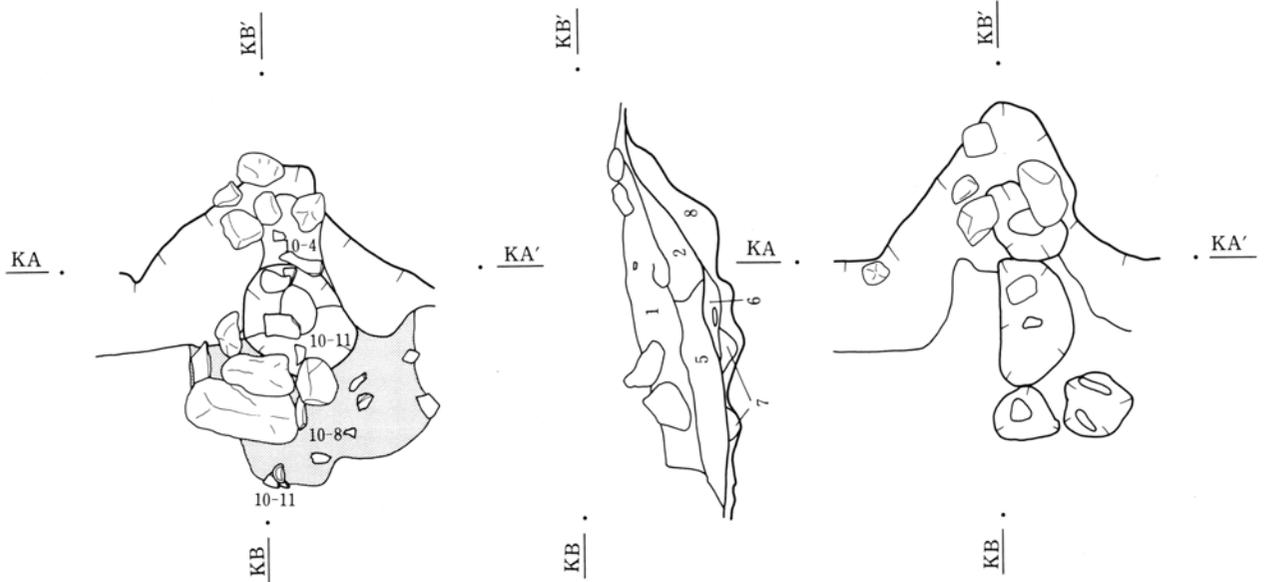
- 1 暗褐色土 総社砂層主体、As-C下黒色土・焼土少含。
- 2 暗褐色土 As-C下黒色土と総社砂層の混土。焼土粒少含。
- 3 暗茶褐色土 総社砂層主体、焼土多含。
- 4 暗赤褐色土 灰・焼土粒多含。焼土層と総社砂層ブロックの混土。
(壁の天井の崩落か)
- 5 黒褐色土 総社砂層主体、焼土小ブロック・炭化物・灰多含。
As-C少含。(竈作り直し構築土か)
- 6 黒褐色土 総社砂層と黒色土の混土。(竈構築土)
- 7 茶褐色土 総社砂層と黒色土の混土。炭化物・焼土粒多含、灰含む。
- 8 茶褐色土 総社砂層主体、焼土・炭化物少含。



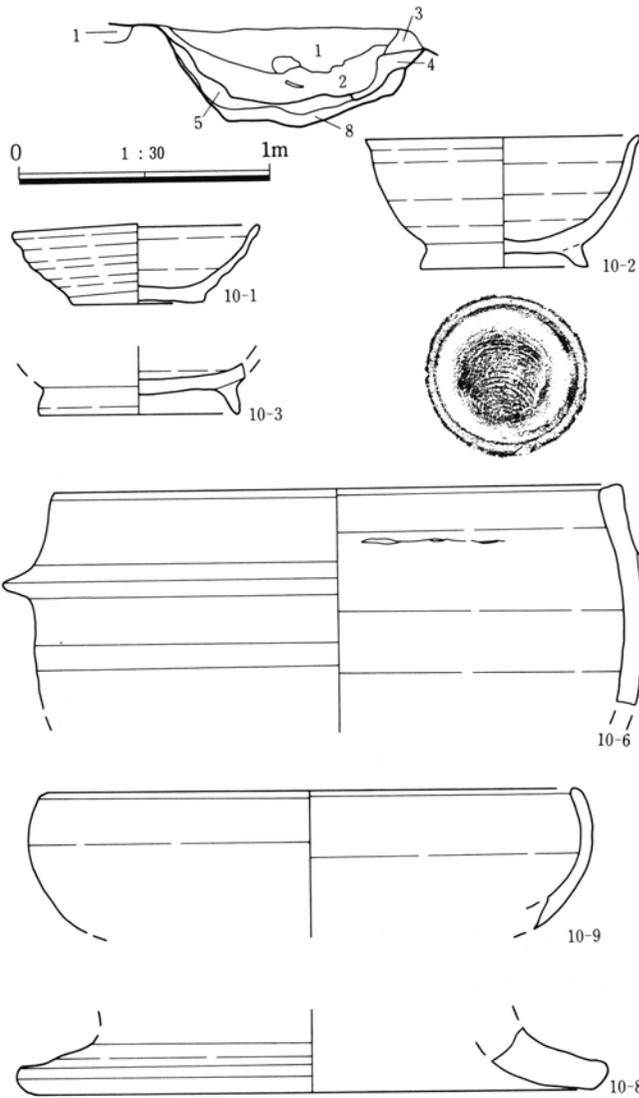
第32図 9・27号住居跡



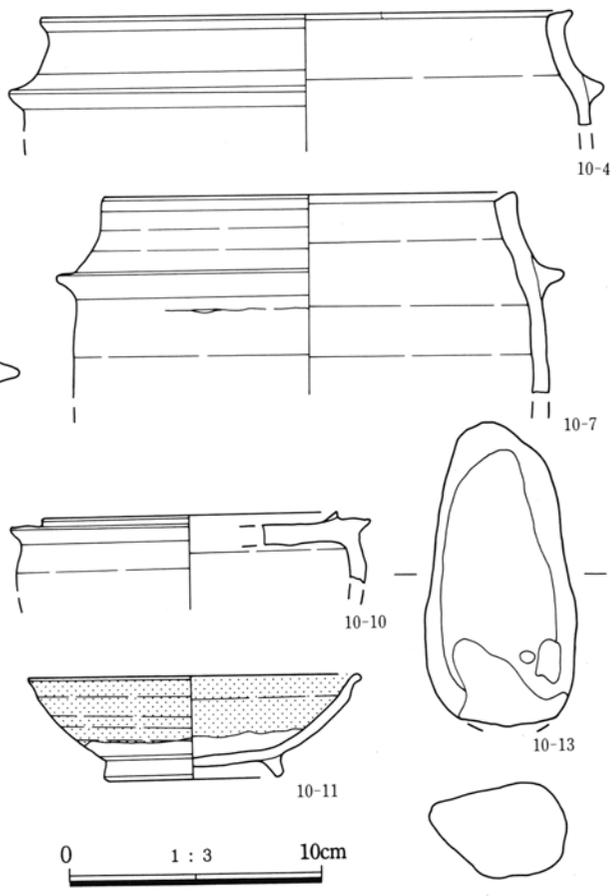
第33図 10・12号住居跡



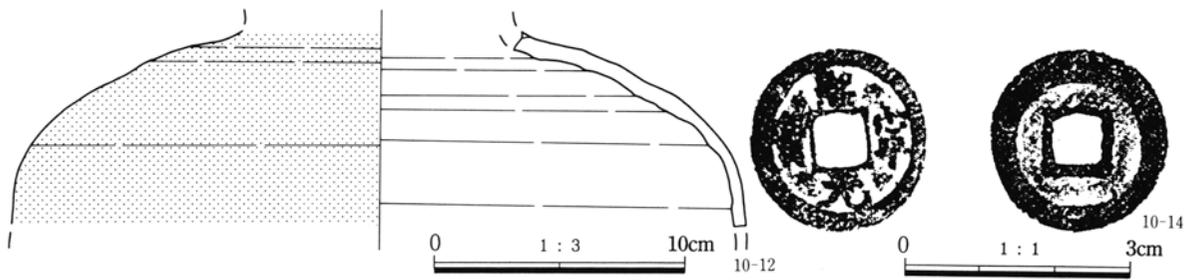
KA L=147.40m



- 1 黒褐色土 As-C・総社砂層ブロック少含。粘性強い。
- 2 黒褐色土 As-C・総社砂層多含。焼土粒僅含。粘性強い。
- 3 黒褐色土 As-C多含。
- 4 黒褐色土 焼土多含。炭化物少含。粘性強い。
- 5 黒褐色土 総社砂層粒少含。焼土粒極僅含。
- 6 黒褐色土 As-C・総社砂層少含。粘性強い。
- 7 黒褐色土 焼土粒少含。灰層。
- 8 黒褐色土 総社砂層と基本土層V層の混土。



第34図 10号住居跡

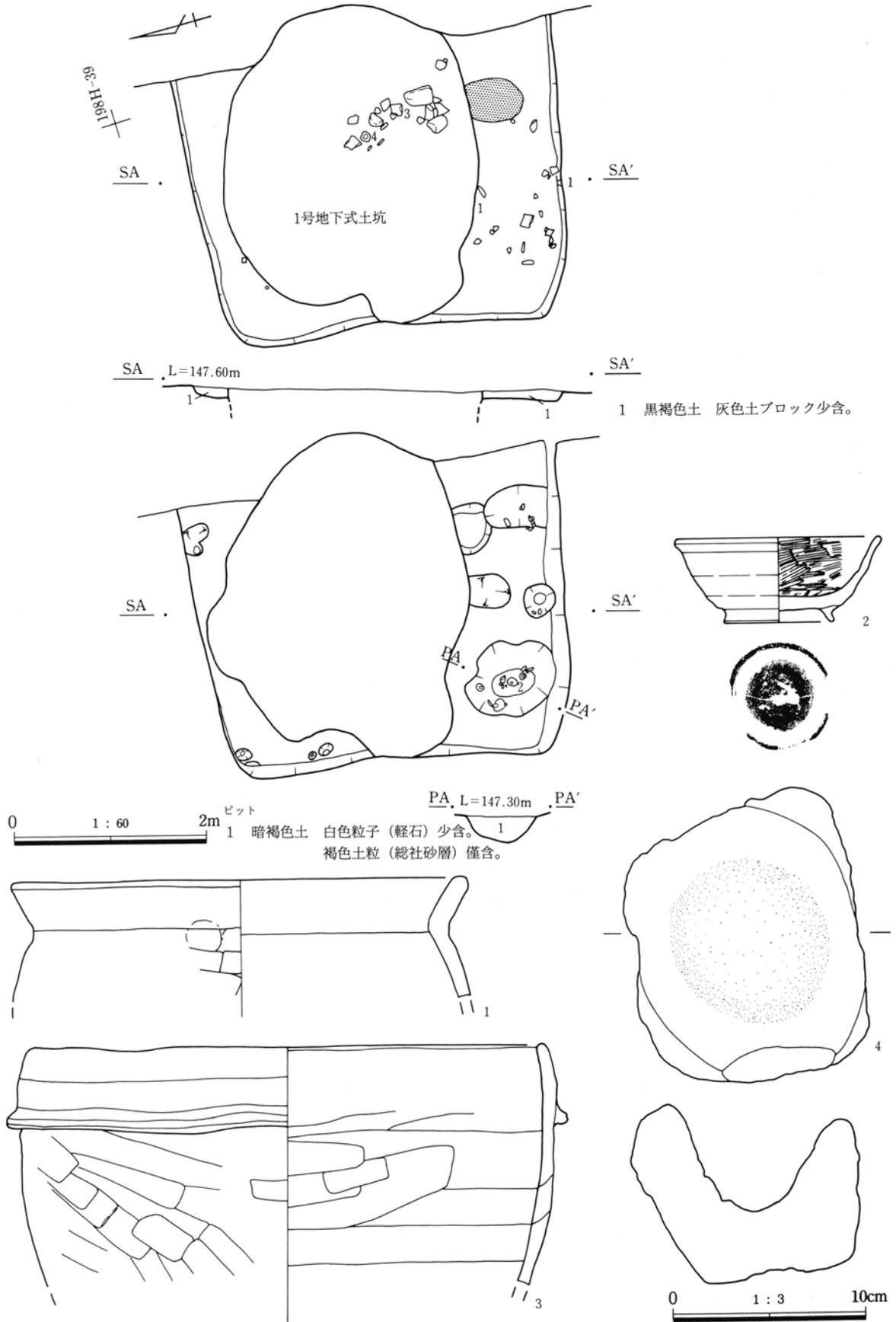


第35図 10号住居跡

10号竪穴住居跡・12号竪穴住居跡（第33～35図、写真図版10・11・115・116） 199H-27グリッドに位置し、重複関係では184号竪穴住居跡が最も古く、次に12号竪穴住居跡で、10号竪穴住居跡が最も新しい。平面形態は10号竪穴住居跡が南北長軸、12号竪穴住居跡が東西長軸の長方形である。試掘トレンチにより北壁と南壁の一部が壊されているが、床面が深いために住居形態ははっきりしている。地山を掘り込んだだけの床面は堅くほぼ平坦である。残存する壁高は10号竪穴住居跡が約30cmと高く、12号竪穴住居跡は約20cmでほぼ垂直に立ち上がる。10号竪穴住居跡の貯蔵穴は南東隅に長方形で存在するが、明確な壁溝、柱穴は検出されていない。ただ、床下土坑の中に柱穴に想定可能なピットがいくつか存在する。遺物は10号竪穴住居跡から須恵器の坏や碗や羽釜、甗、蓋、灰釉陶器の碗などがカマド内、及び周辺や南西隅にかけて出土している。10号竪穴住居跡のカマドは東壁のやや南寄りに位置し、両袖は石を構築材として残存し、煙出し部分にも石を多用している。天井石と思われる長方形の長い石が手前に崩落している。12号竪穴住居跡のカマドは10号竪穴住居跡のカマドとちょうど同じ場所に位置していたために壊されたのか、あるいは拡張した1軒の竪穴住居跡とも考えられる。住居の廃棄時期は遺物から10号竪穴住居跡は10世紀後半、12号竪穴住居跡はそれ以前と考えられる。

11号竪穴住居跡（第36図、写真図版11・12・116） 198H-39グリッドに位置し、重複関係では、99号竪穴住居跡が最も古く、次に11号竪穴住居跡、その東壁部分とカマド部分が、中世の21号溝と1号地下式土坑により壊されているが、21号溝と1号地下式土坑の新旧関係は不明である。平面形態はおそらくは長方形と考えられる。残存部分は少ないものの、地山を掘り込んだだけの床面は堅く平坦である。残存する壁高は約10cmと浅く、やや緩やかに立ち上がる。掘り方の掘り込みはほとんどない。陥没したカマドの右側部分に貯蔵穴と考えられる床下土坑が存在するが、明確な壁溝、柱穴は検出されていない。遺物は土師器の甕や須恵器の碗や羽釜などが、カマド付近や南隅部分、床下土坑などから集中して出土している。カマドは東壁の中央からやや南寄りに位置するが、床の地下部分に地下式土坑が存在するために、床面そのものがその中に崩落している。住居の廃棄時期は遺物から10世紀後半と考えられる。

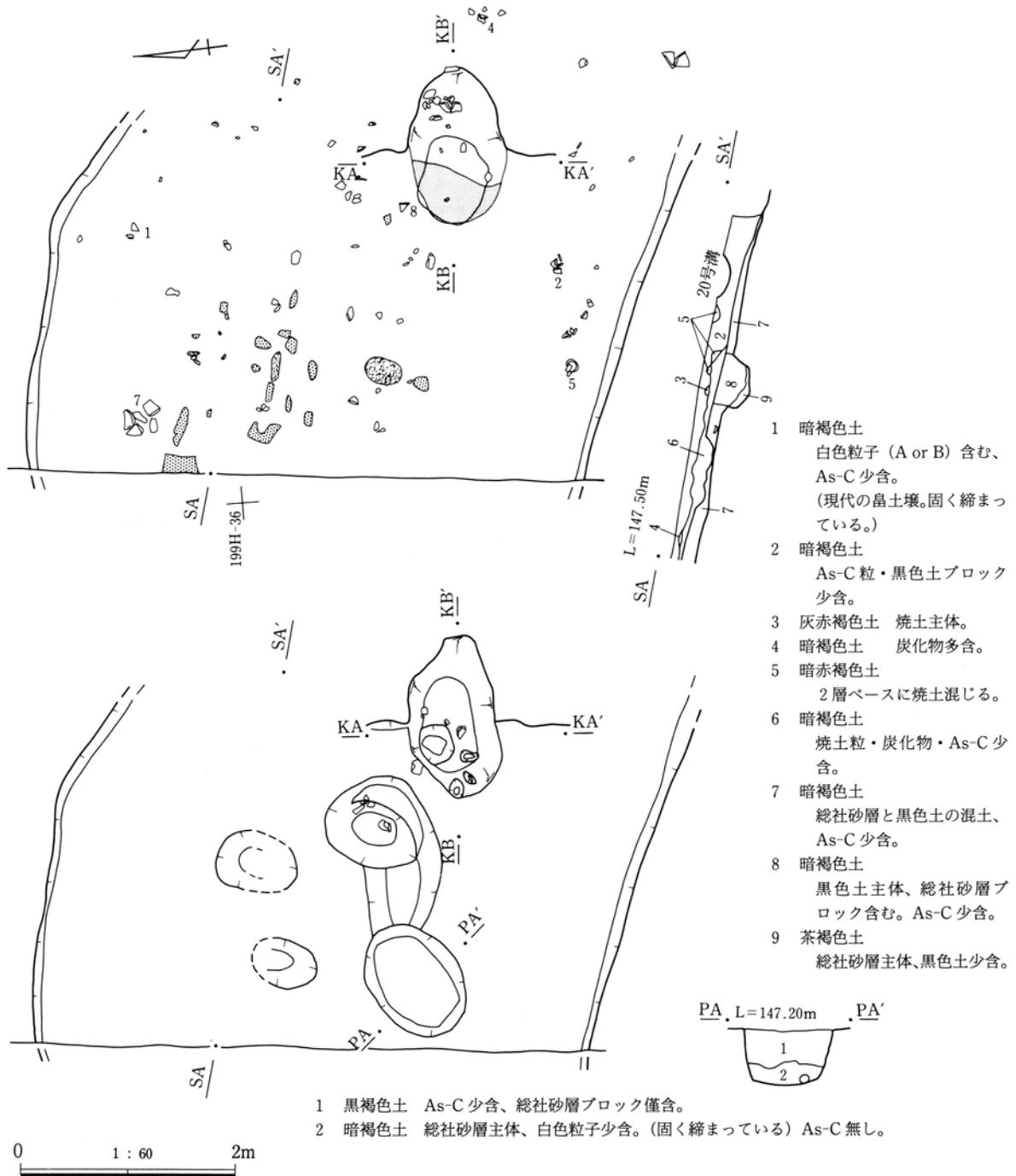
13号竪穴住居跡（第37・38図、写真図版12・13・116） 199H-36グリッドに位置し、重複関係では93号竪穴住居跡と98号竪穴住居跡との新旧関係が不明である。東壁の一部を試掘トレンチに、西壁部分が調査区域外に延びているために、遺構確認調査段階でも明確な平面形態は把握することができなかったが、おそらくは長方形と考えられる。地山を掘り込んだだけの床面は堅く平坦である。残存する壁高は約10～15cmで、緩やかに立ち上がる。明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていないが、大きな床下土坑がいくつか検出され



第36図 11号住居跡

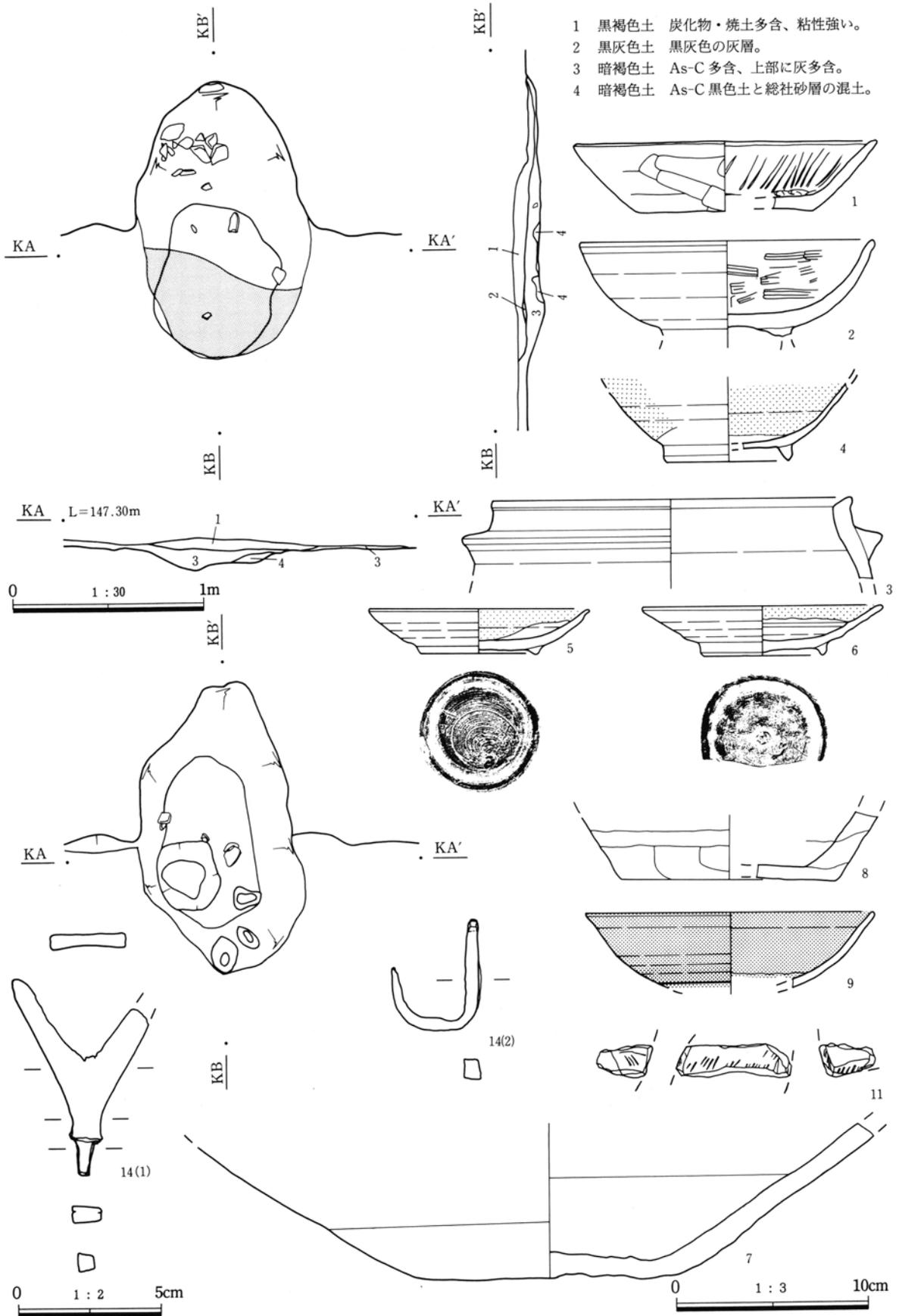
第3章 検出された遺構・遺物

ている。遺物は土師器や須恵器の羽釜、灰釉陶器の椀、緑釉陶器の椀、鉄鏃、砥石などが、カマド前や北壁や南壁付近から出土している。また、床面中央部から西の調査区域外に延びる形でいくつかの炭化材が出土しており、住居建築材と考えられる。一部については樹種分析を実施し、その結果は第5章第3節に記述している。カマドは東壁に位置していたと考えられるが、試掘トレンチにより壊されたものと考えられる。住居の廃棄時期は遺物から10世紀前半と考えられる。



第37図 13号住居跡

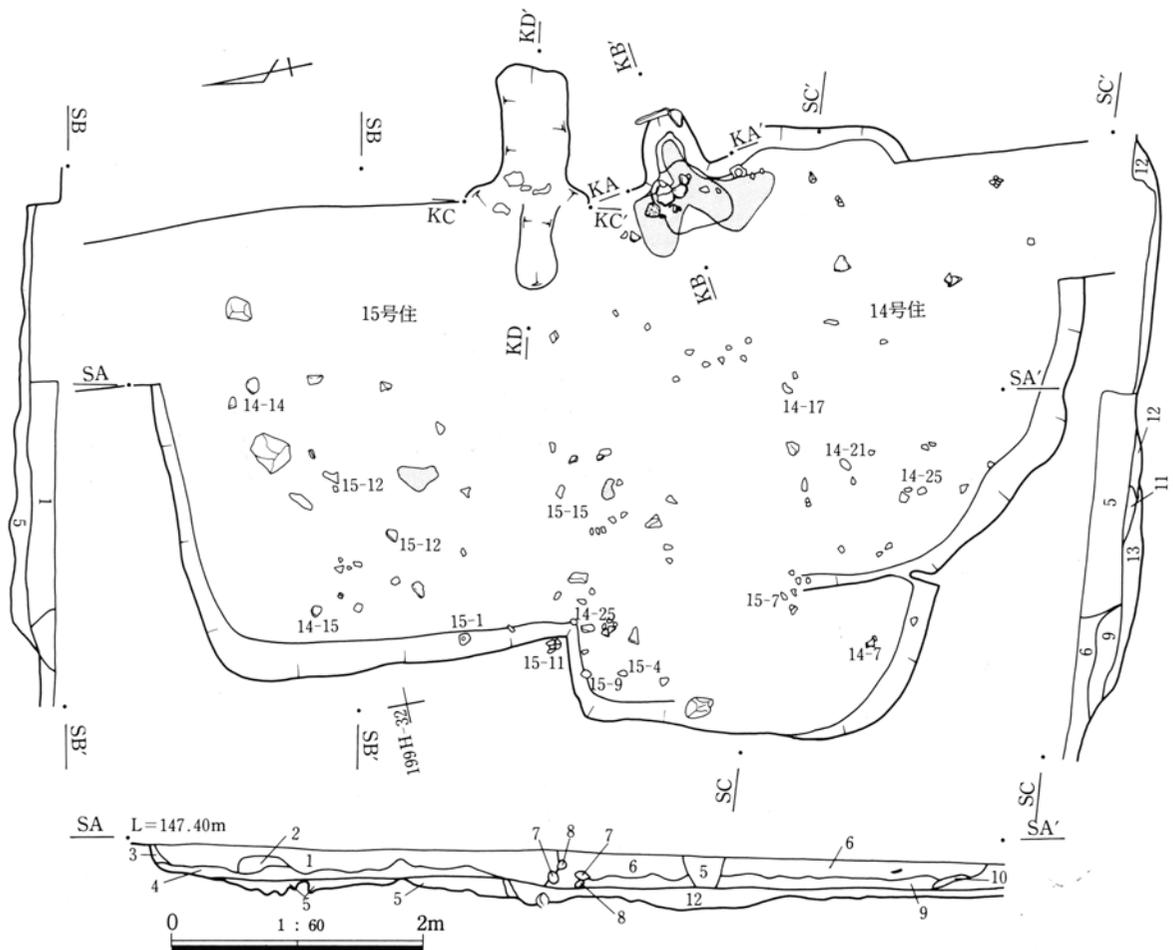
第4節 奈良・平安時代



第38図 13号住居跡

第3章 検出された遺構・遺物

14号竪穴住居跡・15号竪穴住居跡（第39～43図、写真図版13・14・117・118） 199H—32グリッドに位置し、重複関係は15号竪穴住居跡の方が古く、14号竪穴住居跡が新しい。新しい土坑が、14号竪穴住居跡の一部を壊している。また、14号竪穴住居跡と15号竪穴住居跡の東半分の一部を試掘トレンチが壊している。だが、184号竪穴住居跡との新旧関係が不明である。平面形態は両竪穴住居跡共に長方形であるが、14号竪穴住居跡の西壁部分は土層から見て古い別の土坑か、あるいは張り出し部分とも考えられる長方形の掘り込みが存在する。残存する壁高は共に約20cmで、緩やかに立ち上がる。明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。遺物は土師器の暗文土器や須恵器の坏や椀、蓋、灰釉陶器の椀などが床面の西側半分や床下土坑部分から集中して出土している。特に、重要な遺物として、15号竪穴住居跡の床面から銅椀の口縁部破片が出土している。14号竪穴住居跡のカマドは東壁の中央からやや北寄りに位置し、袖に石を構築材として用いている。15号竪穴住居跡のカマドは東壁の中央からやや南寄りに位置しているが、残存状態は悪い。住居の廃棄時期は遺物から15号竪穴住居跡は8世紀中葉、14号竪穴住居跡は10世紀後半から11世紀前半と考えられる。



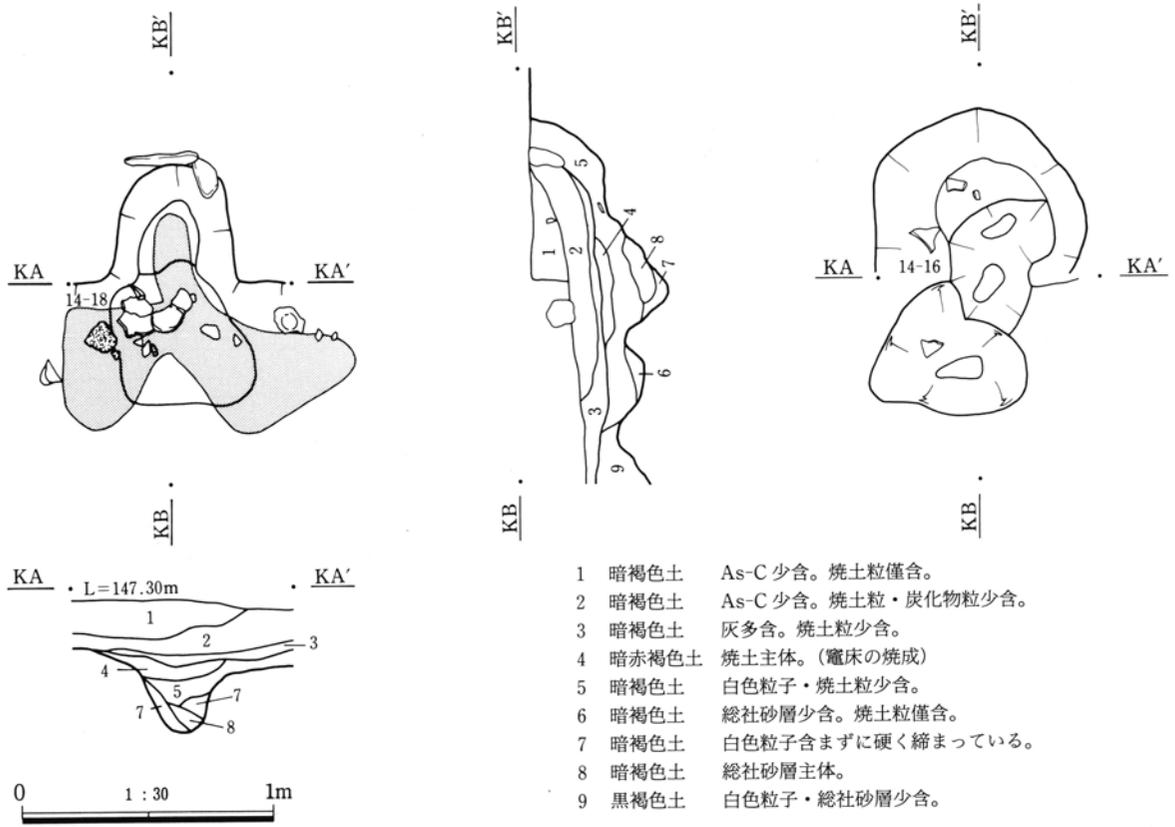
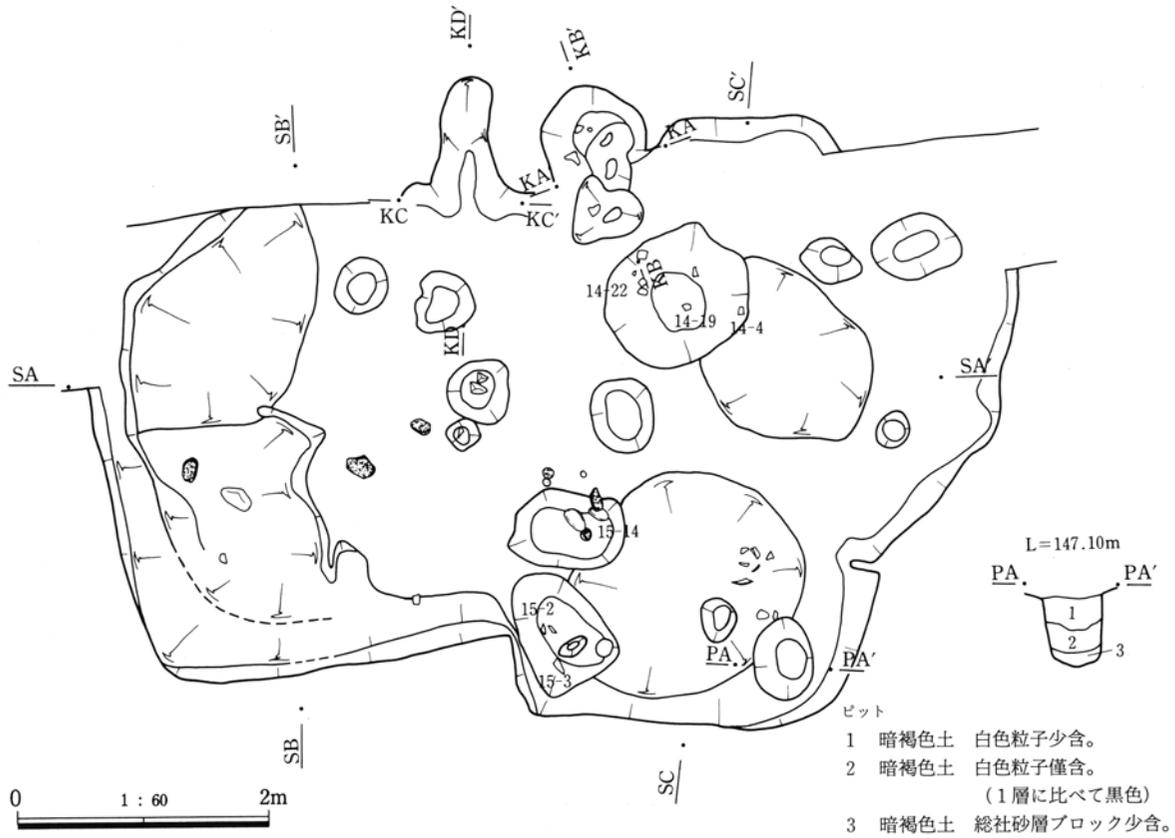
15号住居

- | | | |
|---|------|----------------------------|
| 1 | 暗褐色土 | As-C 少含。焼土粒・炭化物粒僅含。やや黒味強い。 |
| 2 | 暗褐色土 | 炭化物多含。As-C 僅含。 |
| 3 | 暗褐色土 | As-C 僅含。やや粘性強い。 |
| 4 | 暗褐色土 | 赤褐色が強い。焼土粒少含。As-C ほとんど含まず。 |
| 5 | 暗褐色土 | 焼土粒少含。炭化物僅含。 |

14号住居

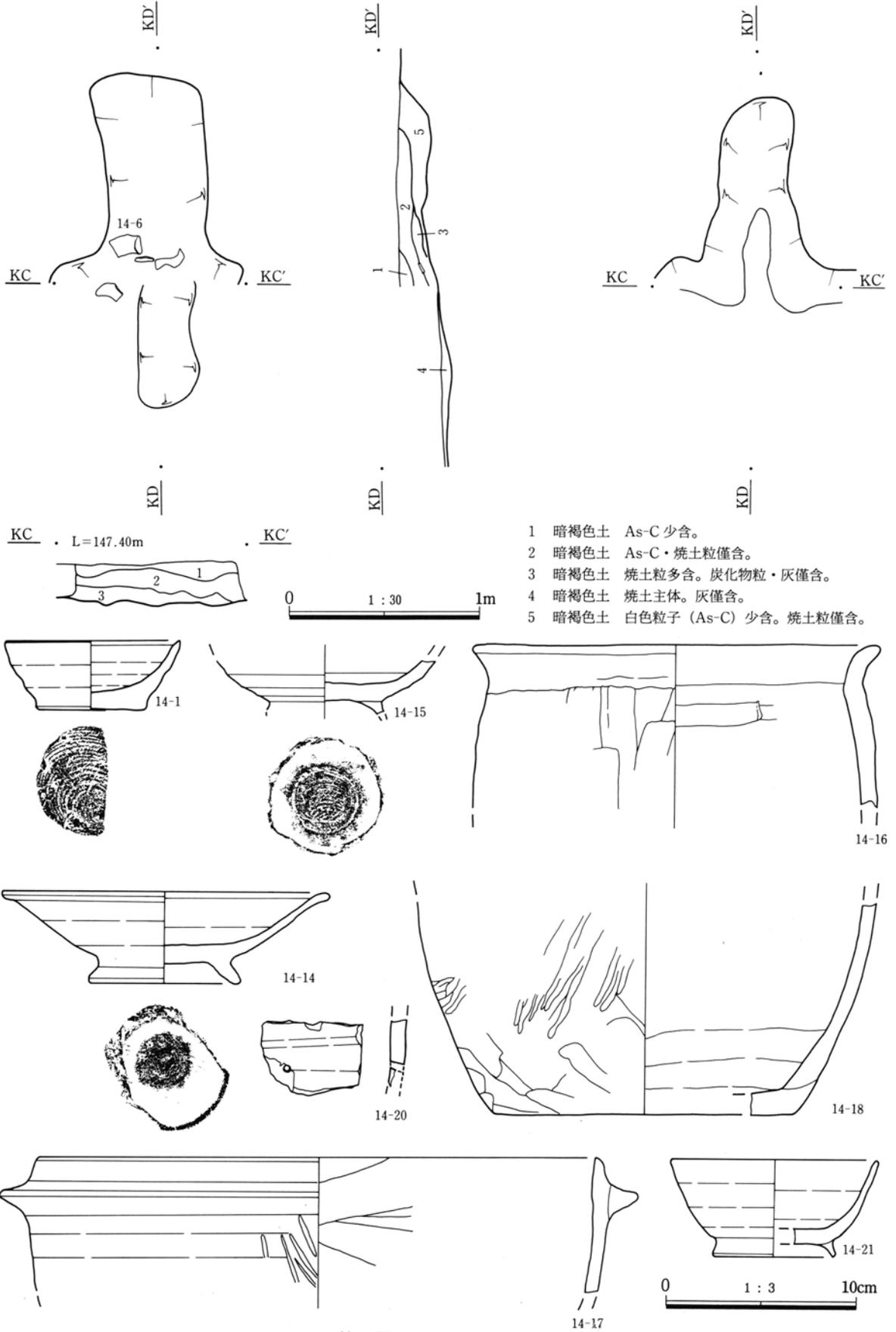
- | | | |
|----|-------|---------------------------------|
| 6 | 暗褐色土 | As-C 少含。炭化物・焼土粒僅含。1層に比べて総社砂層多め。 |
| 7 | 黄褐色土 | ロームブロック。 |
| 8 | 暗褐色土 | ローム土多含。 |
| 9 | 暗褐色土 | As-C 僅含。 |
| 10 | 暗赤褐色土 | 焼土粒多含。 |
| 11 | 暗黄褐色土 | 黄褐色土ブロック多含。 |
| 12 | 暗褐色土 | 白色粒子・焼土粒僅含。 |
| 13 | 暗褐色土 | 焼土粒・炭化物少含。12層に比べて総社砂層ブロック多め。 |

第39図 14・15号住居跡

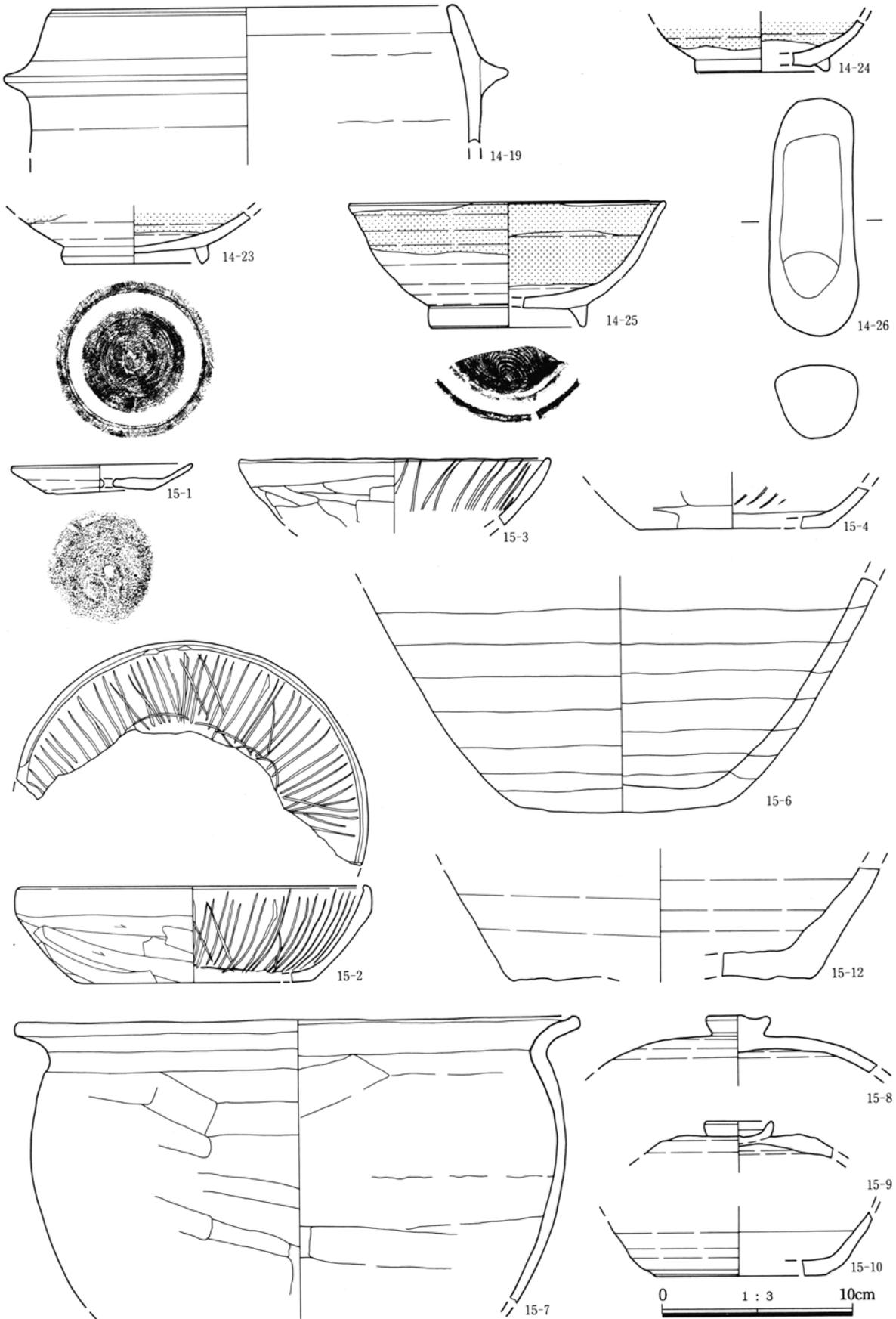


第40図 14・15号住居跡

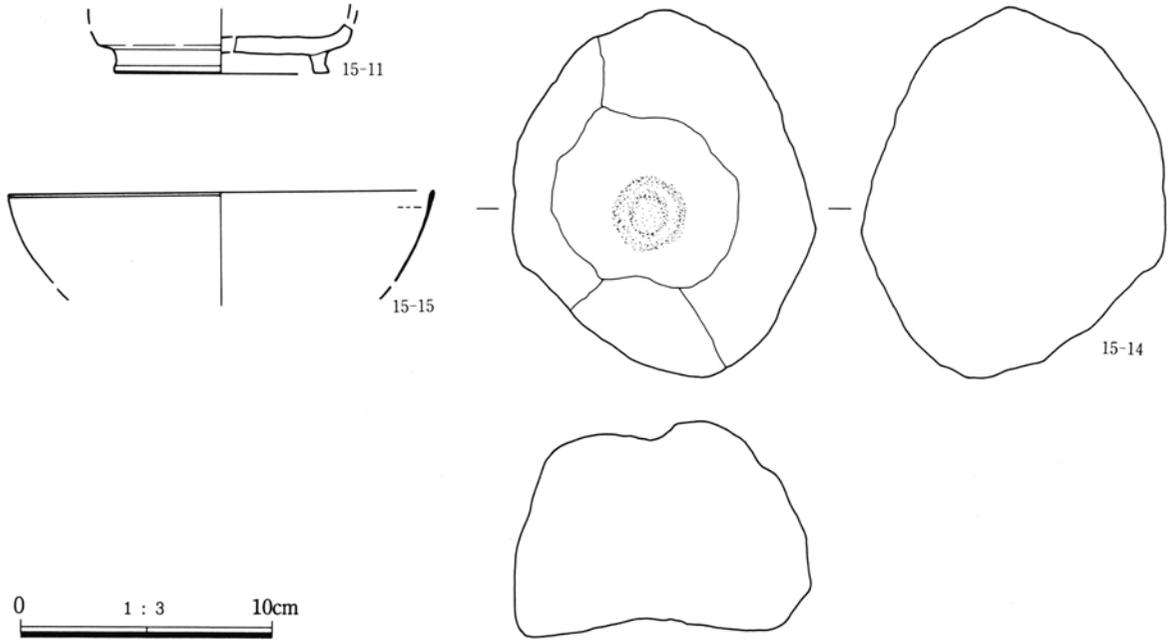
第3章 検出された遺構・遺物



第41図 14・15号住居跡



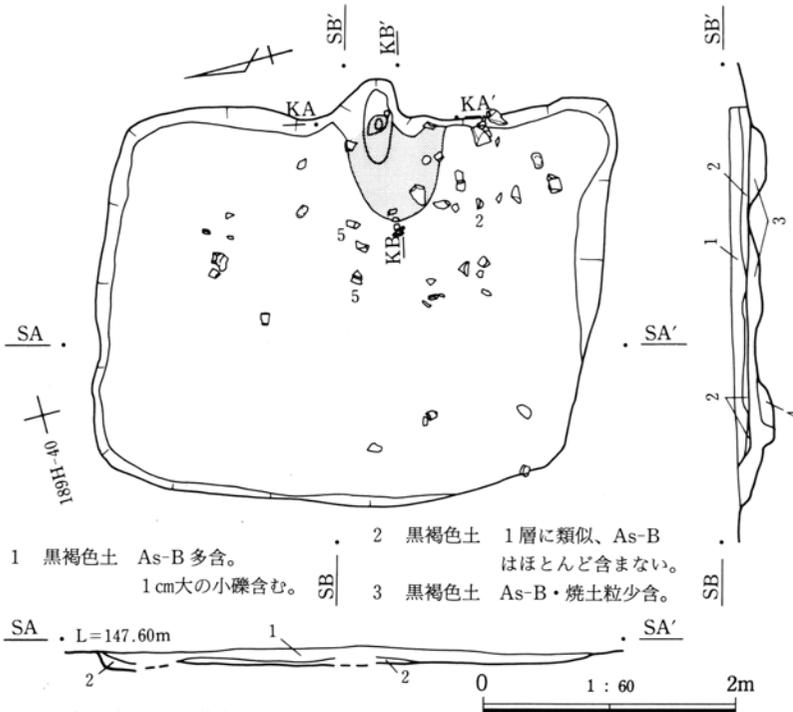
第42図 14・15号住居跡



第43図 15号住居跡

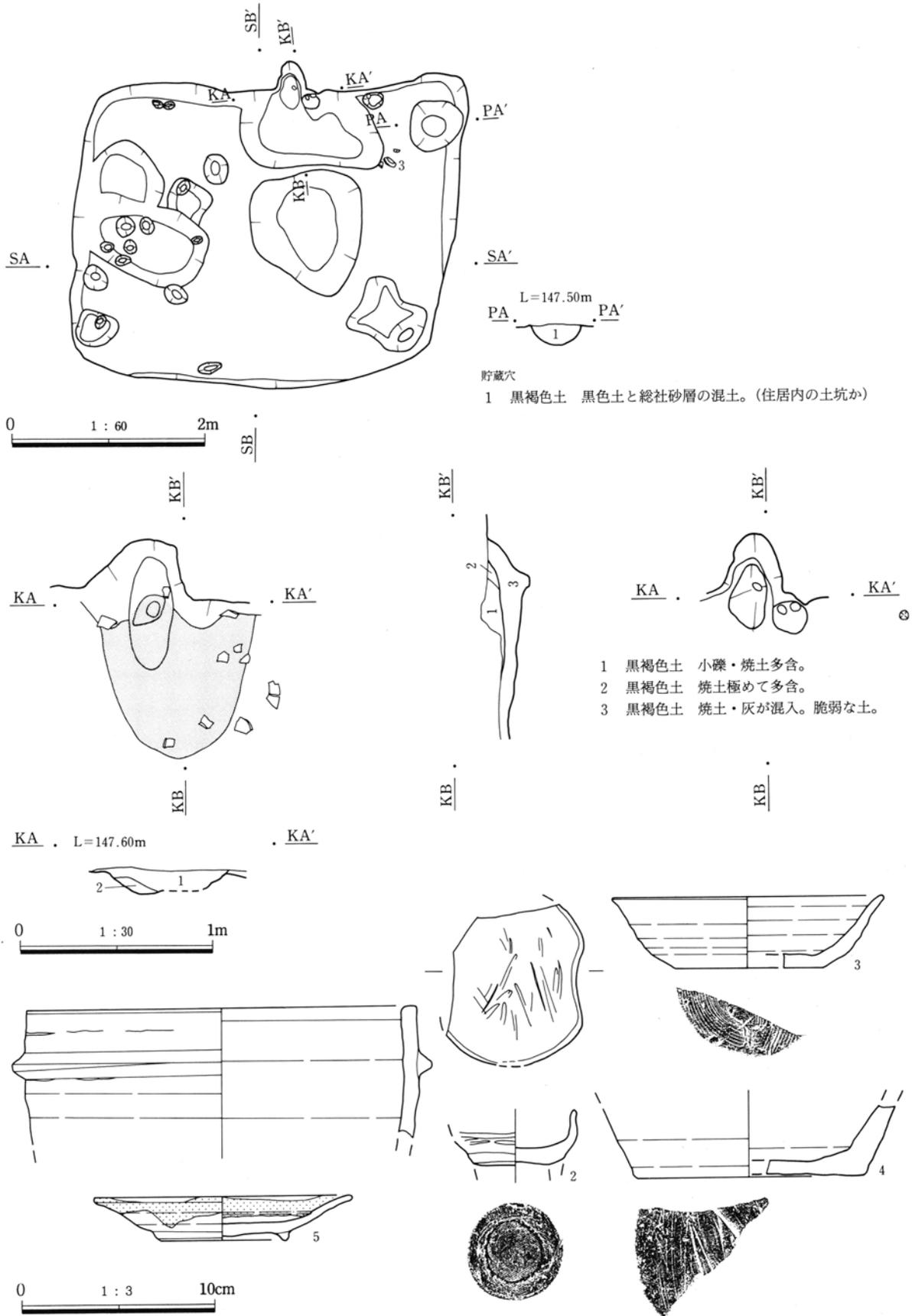
16号竪穴住居跡（第44・45図、写真図版14・15・118）189H—40グリッドに位置し、重複関係では49号竪穴住居跡と50号竪穴住居跡と96号竪穴住居跡との新旧関係が土層断面などからでは不明であるが、確認調査段階の所見から、16号が最も新しいと考えられる。平面形態は長方形である。地山を掘り込んだだけの床面は堅く平坦である。残存する壁高は約10～15cmで、緩やかに立ち上がるが、南西隅部分はほとんど浅く、壁がはっきりしない。掘り方調査でいくつもの床下土坑が検出されているものの、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴

は検出されていない。遺物は須恵器の坏、椀、羽釜、灰釉陶器の皿などがカマド付近から集中して出土している。カマドは東壁の中央から僅かに南寄りに位置する。住居の廃棄時期は遺物から10世紀前半と考えられる。

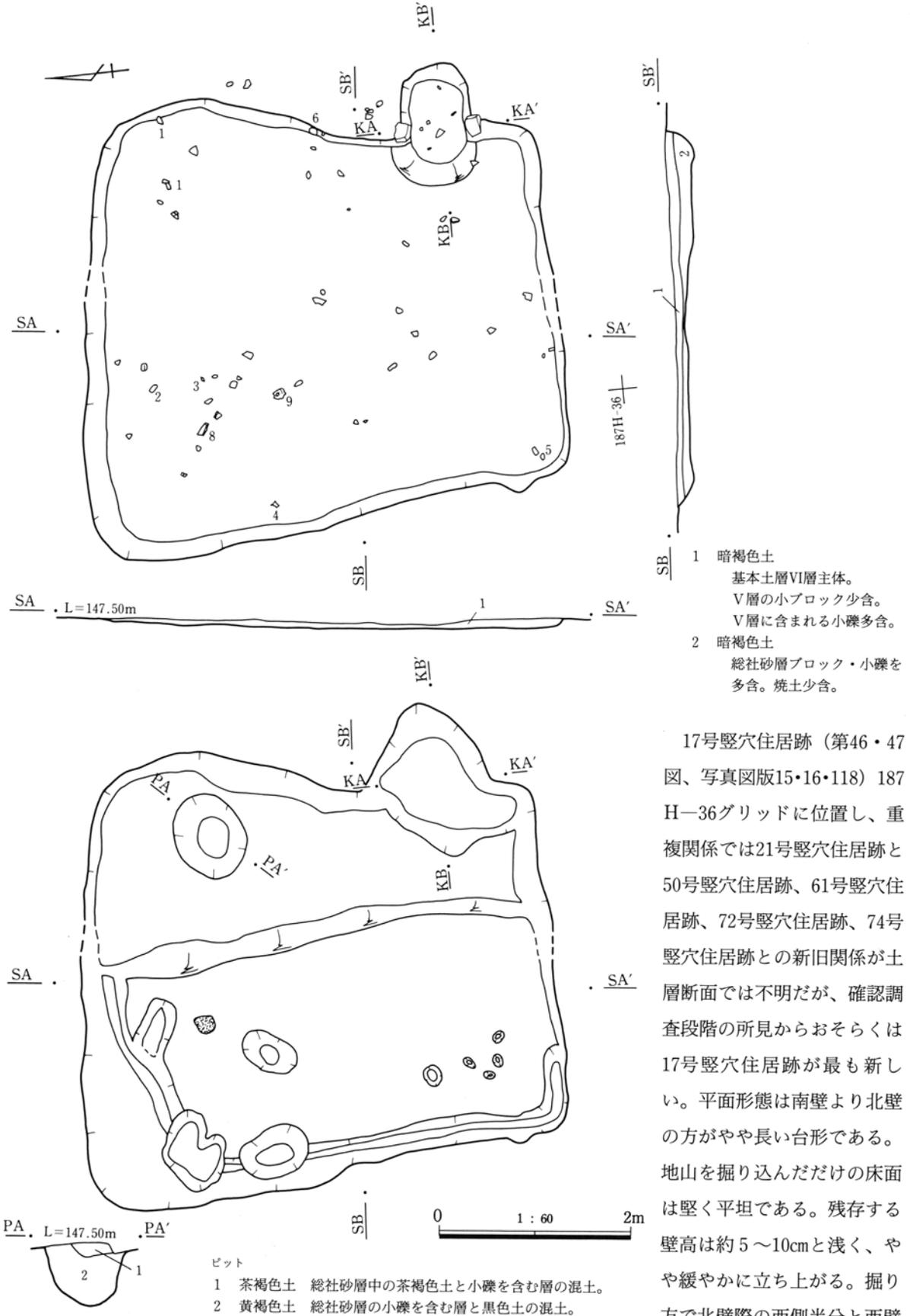


- 1 黒褐色土 As-B多含。
1cm大の小礫含む。
- 2 黒褐色土 1層に類似、As-B
はほとんど含まない。
- 3 黒褐色土 As-B・焼土粒少含。

第44図 16号住居跡

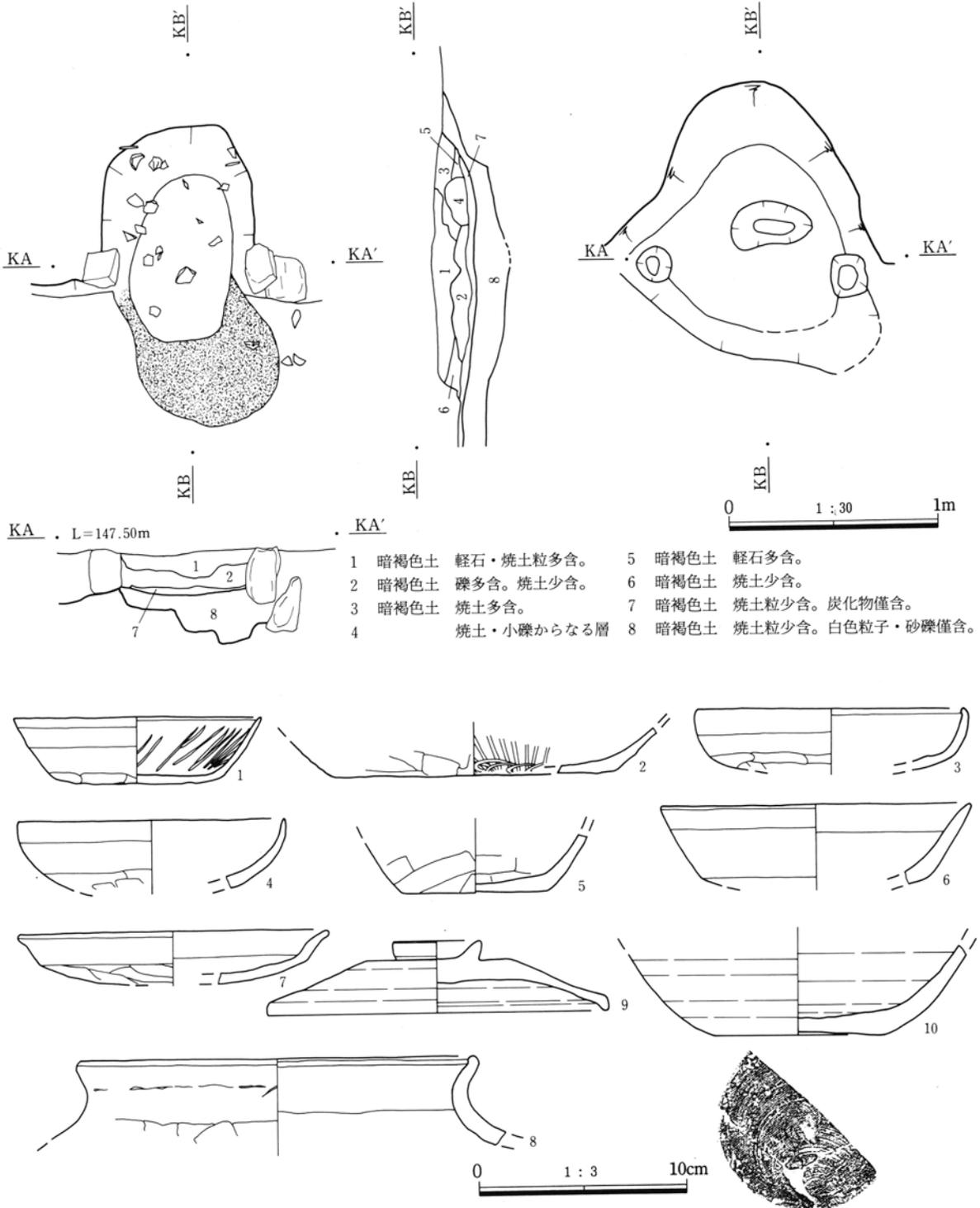


第45図 16号住居跡



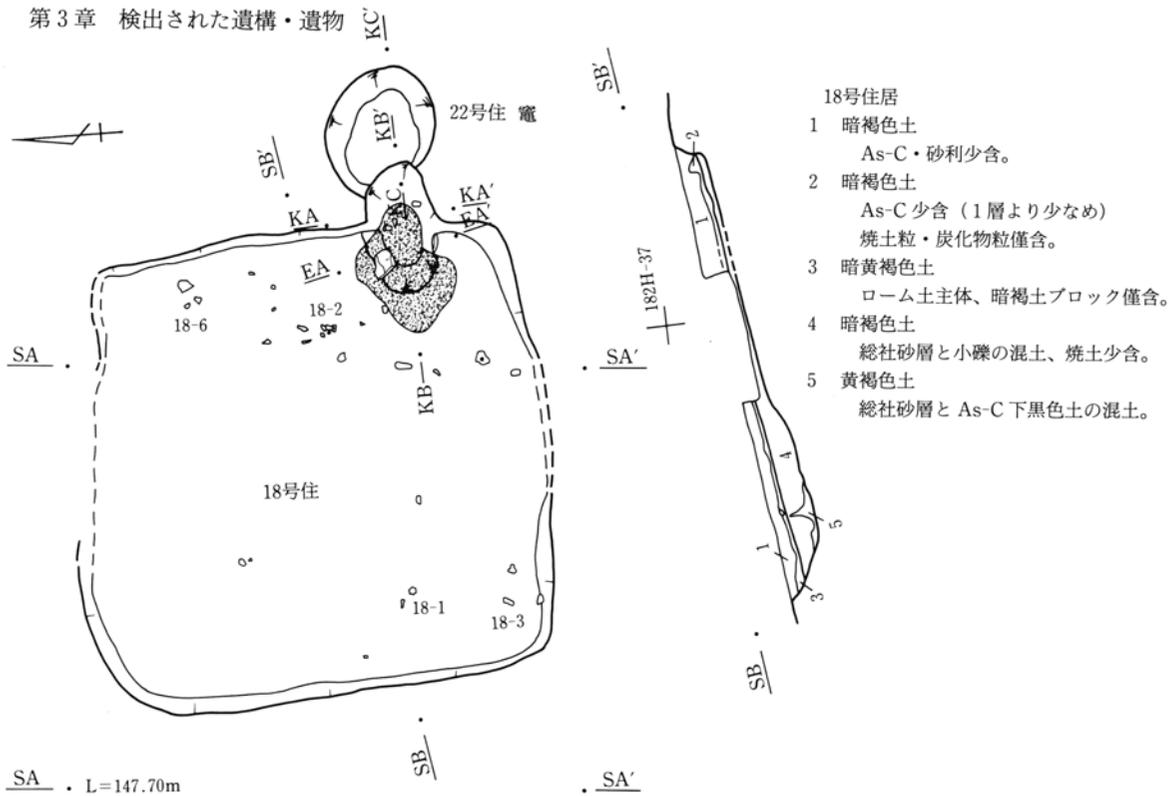
第46図 17号住居跡

ピットが北側の2ヶ所で検出されているものの、貯蔵穴は検出されていない。遺物は土師器の坏、暗文土器や甕、須恵器の坏、蓋、甕などが北西隅部分に集中して出土している。カマドは東壁の中央から南寄りに位置し、両袖は断面正方形の切り出し石を構築材として残存する。掘り方には両袖の石を埋め込むための穴が検出されている。住居の廃棄時期は遺物から8世紀中葉と考えられる。

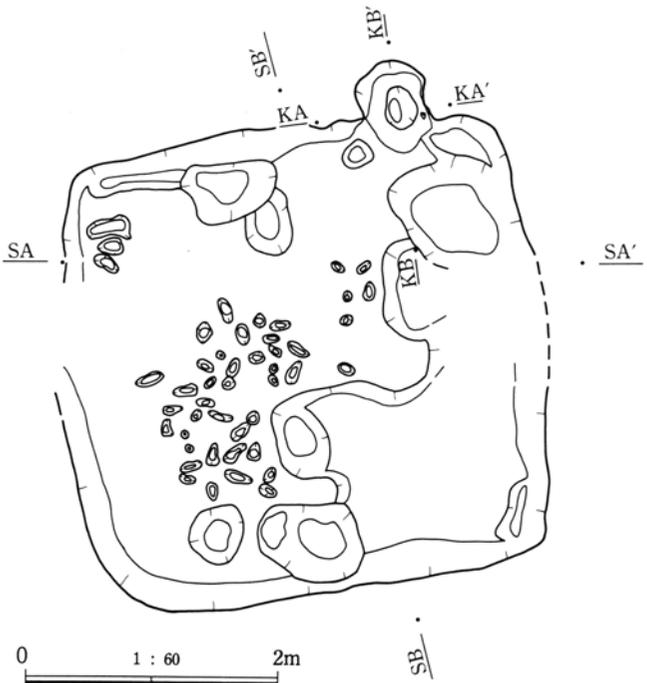
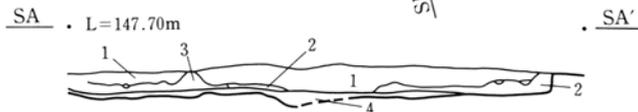


第47図 17号住居跡

第3章 検出された遺構・遺物



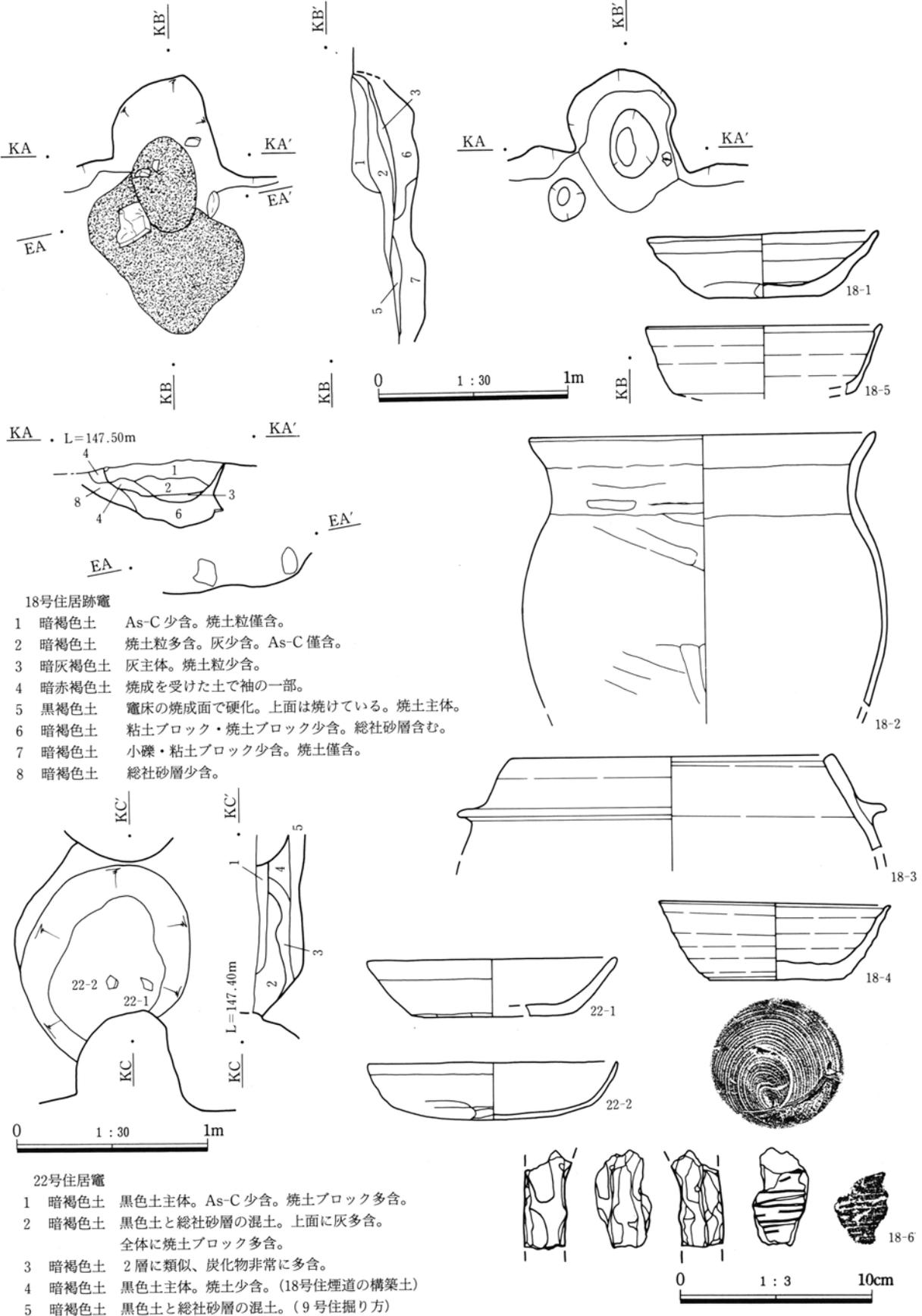
- 18号住居
- 1 暗褐色土
As-C・砂利少含。
 - 2 暗褐色土
As-C少含（1層より少なめ）
焼土粒・炭化物粒僅含。
 - 3 暗黄褐色土
ローム土主体、暗褐色土ブロック僅含。
 - 4 暗褐色土
総社砂層と小礫の混土、焼土少含。
 - 5 黄褐色土
総社砂層と As-C 下黒色土の混土。



第48図 18・22号住居跡

18号竪穴住居跡・22号竪穴住居跡（第48・49図、写真図版16・17・118・119）182H-37グリッドに位置し、重複関係は22号竪穴住居跡の方が古く、18号竪穴住居跡が新しい。平面形態は18号竪穴住居跡が正方形であり、22号竪穴住居跡はカマドのみの残存である。18号竪穴住居跡の床面は堅く平坦である。残存する壁高は約10~20cmで、やや緩やかに立ち上がる。掘り方で大小の床下土坑とピットが検出されているが、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。ただ、北東隅と南西隅に壁溝の残存と考えられる長細い掘り込みが検出されている。遺物は土師器の坏や須恵器の坏、鉄製の紡錘車などが北東隅部分に集中して出土している。特殊な遺物として瓦塔の破片が出土している。18号竪穴住居跡のカマドは東壁の南東隅に位置し、左袖部分に構築材としての石が残存する。22号

竪穴住居跡のカマドは土層の様子から、東側に焚口が想定されることから、調査時点で想定していた西側の18号竪穴住居跡に住居本体が壊されているのではなく、東に隣接して存在する9号竪穴住居跡の西側カマドに相当するものなのかもしれない。住居の廃棄時期は遺物から18号竪穴住居跡は9世紀中葉、22号竪穴住居跡は8世紀後半と考えられる。



18号住居跡竈

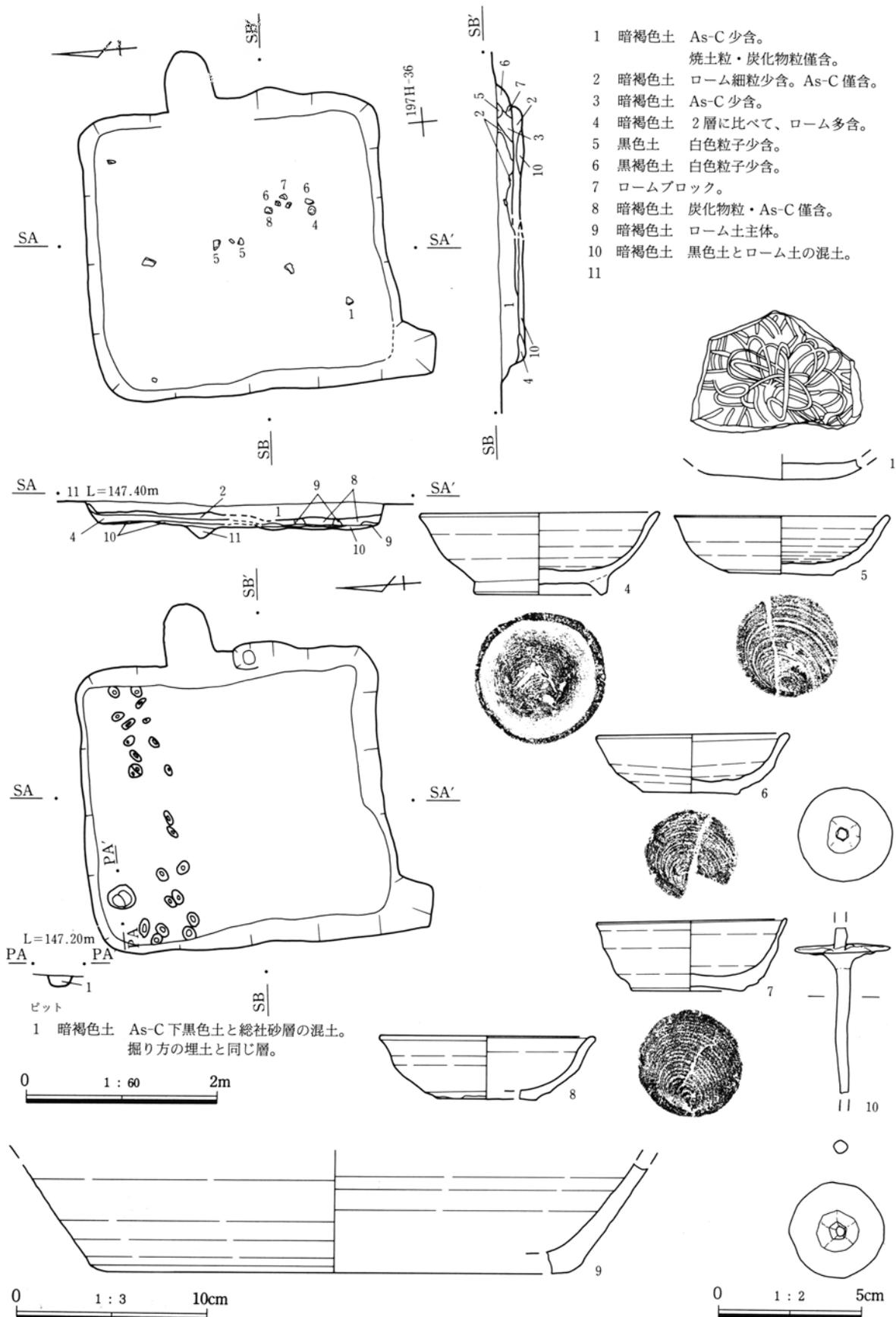
- 1 暗褐色土 As-C少含。焼土粒僅含。
- 2 暗褐色土 焼土粒多含。灰少含。As-C僅含。
- 3 暗灰褐色土 灰主体。焼土粒少含。
- 4 暗赤褐色土 焼成を受けた土で袖の一部。
- 5 黒褐色土 竈床の焼成面で硬化。上面は焼けている。焼土主体。
- 6 暗褐色土 粘土ブロック・焼土ブロック少含。総社砂層含む。
- 7 暗褐色土 小礫・粘土ブロック少含。焼土僅含。
- 8 暗褐色土 総社砂層少含。

22号住居竈

- 1 暗褐色土 黒色土主体。As-C少含。焼土ブロック多含。
- 2 暗褐色土 黒色土と総社砂層の混土。上面に灰多含。全体に焼土ブロック多含。
- 3 暗褐色土 2層に類似。炭化物非常に多含。
- 4 暗褐色土 黒色土主体。焼土少含。(18号住居煙道の構築土)
- 5 暗褐色土 黒色土と総社砂層の混土。(9号住居掘り方)

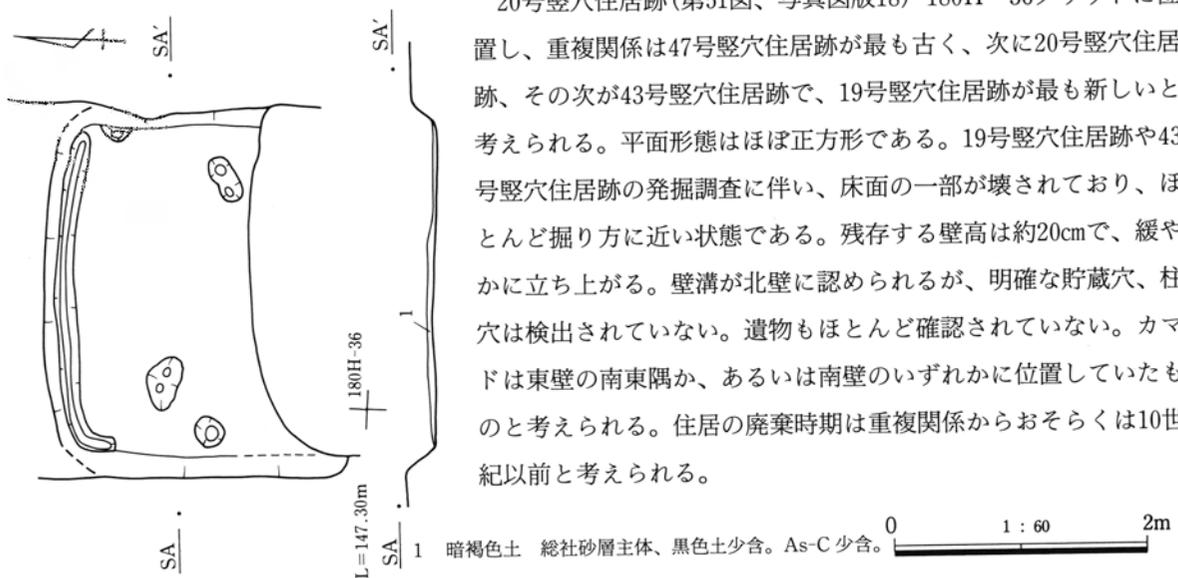
第49図 18・22号住居跡

第3章 検出された遺構・遺物



第50図 19号住居跡

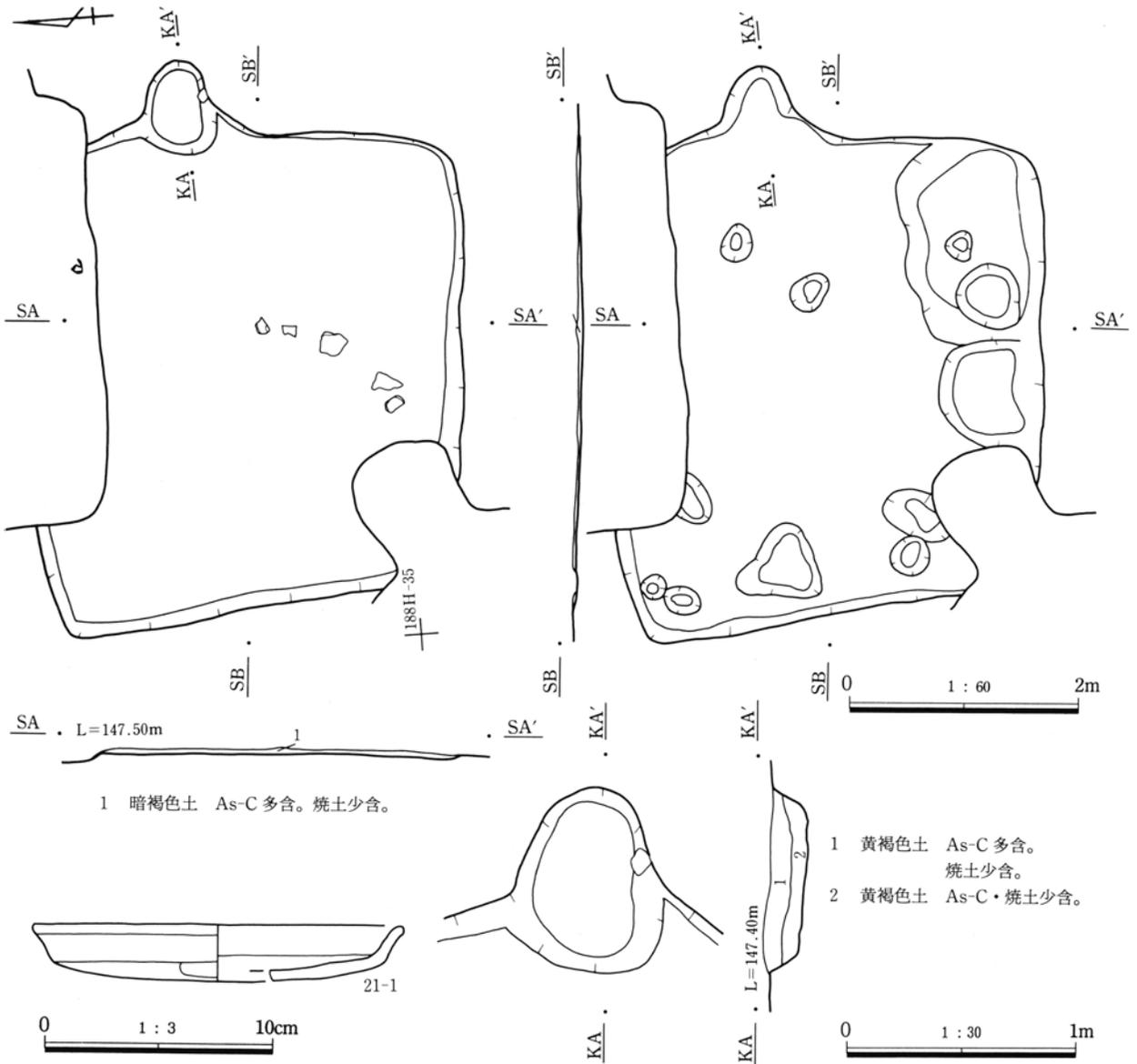
19号竪穴住居跡(第50図、写真図版18・118・119) 179H-36グリッドに位置し、重複関係がはっきりしているなかでは47号竪穴住居跡が最も古く、次に20号竪穴住居跡、その次が43号竪穴住居跡で、19号竪穴住居跡が最も新しいと考えられる。だが、27号竪穴住居跡と32号竪穴住居跡については、20号竪穴住居跡や43号竪穴住居跡、それに47号竪穴住居跡とは重複していないので、その新旧関係は不明である。平面形態はほぼ正方形である。ローム土が主体の貼り床の床面は堅く平坦である。残存する壁高は約15~20cmで、緩やかに立ち上がる。明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。掘り方はほぼ平らで、北壁側部分に多数のピットが検出されており、いずれかが柱穴に相当する可能性もある。遺物は土師器の暗文土器や須恵器の坏、椀、鉄製の紡錘車などが床面のほぼ中央付近に集中して出土している。住居平面の様子からカマドは東壁の中央からやや北寄りに位置するが、発掘調査時にカマドの平面図や土層断面図などを作成せず、観察もしていないために詳細は不明である。住居の廃棄時期は遺物から10世紀と考えられる。



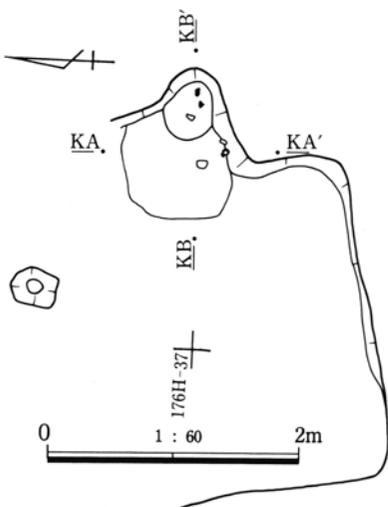
20号竪穴住居跡(第51図、写真図版18) 180H-36グリッドに位置し、重複関係は47号竪穴住居跡が最も古く、次に20号竪穴住居跡、その次が43号竪穴住居跡で、19号竪穴住居跡が最も新しいと考えられる。平面形態はほぼ正方形である。19号竪穴住居跡や43号竪穴住居跡の発掘調査に伴い、床面の一部が壊されており、ほとんど掘り方に近い状態である。残存する壁高は約20cmで、緩やかに立ち上がる。壁溝が北壁に認められるが、明確な貯蔵穴、柱穴は検出されていない。遺物もほとんど確認されていない。カマドは東壁の南東隅か、あるいは南壁のいずれかに位置していたものと考えられる。住居の廃棄時期は重複関係からおそらくは10世紀以前と考えられる。

第51図 20号住居跡

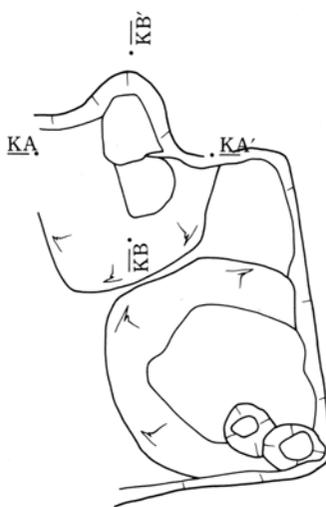
21号竪穴住居跡(第52図、写真図版18・119) 188H-35グリッドに位置し、重複関係では、72号竪穴住居跡と96号竪穴住居跡と74号竪穴住居跡が古く、21号竪穴住居跡と17号竪穴住居跡が新しい。17号竪穴住居跡が21号竪穴住居跡の北東隅と北壁の大部分を、それに72号竪穴住居跡が南西隅部分をそれぞれ壊している。平面形態は正方形に近い、僅かに西側の一辺が短く、東側の一辺が長い台形である。確認面が浅いために壁高は僅かに約5cmで、床面も一部が残存するだけである。掘り方で3本の柱穴とみられるピットがそれぞれ確認されているが、明確な壁溝、貯蔵穴は検出されていない。掘り方からは楕円形から円形の床下土坑がいくつか検出されている。遺物は土師器の坏などが出土している。カマドは東壁の中央からやや北寄りに位置しているが、確認面が浅いためなのか、燃烧部の底面がはっきりしていない。住居の廃棄時期は遺物から8世紀中葉と考えられる。



第52図 21号住居跡

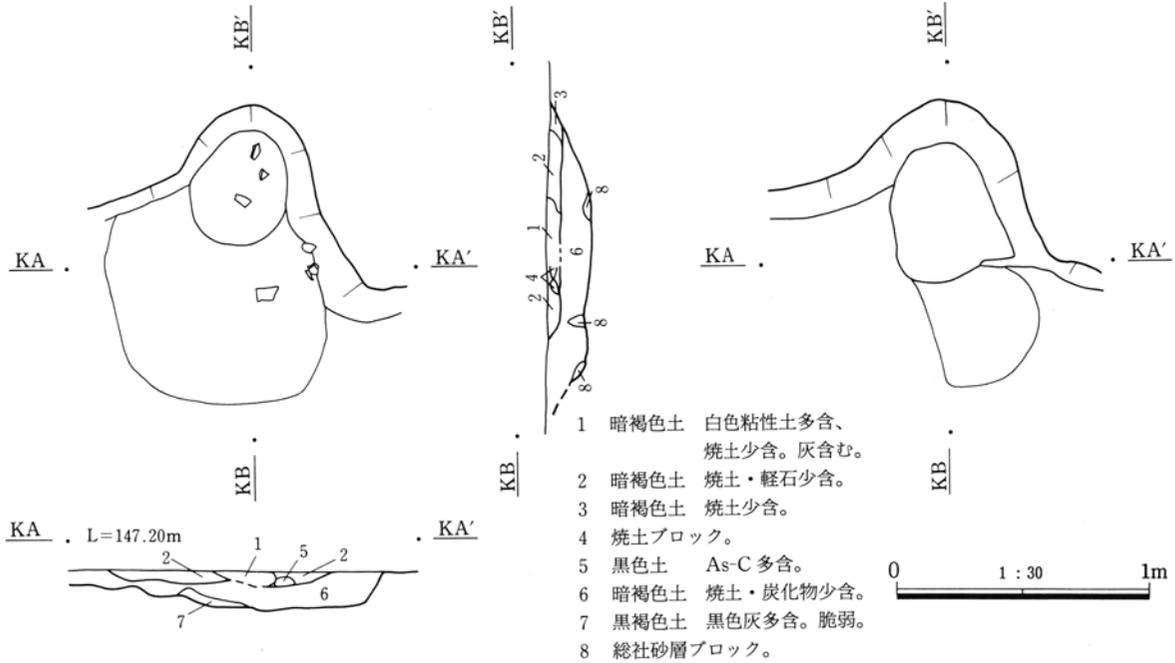


第53図 23号住居跡

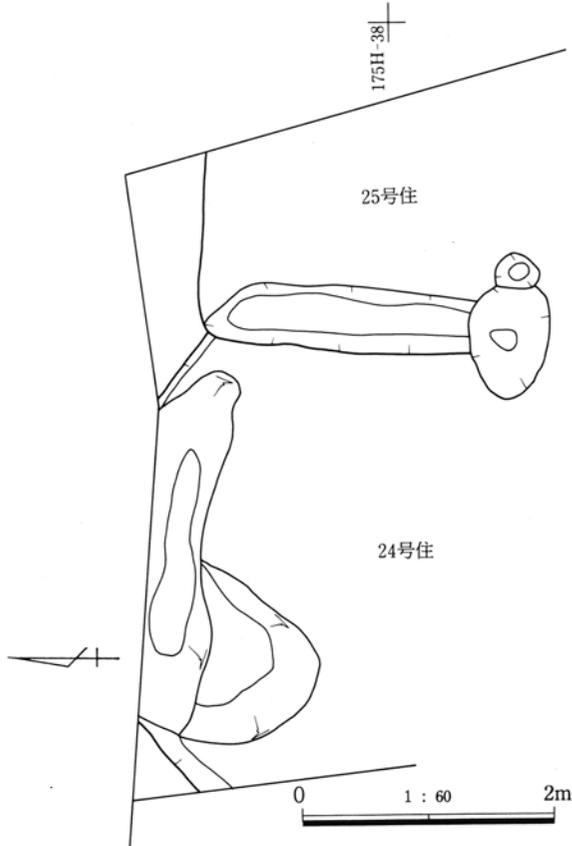


23号竪穴住居跡（第53・54図、写真図版18）176H-37グリッドに位置し、24号竪穴住居跡と重複関係にあるものの、新旧関係は不明である。だが、カマドの有無から23号竪穴住居跡の方が新しい可能性がある。平面形態はおそらくは長方形と考えられる。確認面が浅いために、北側の半分が失われており、南側も床面が一部残存するだけであり、壁高も僅かである。柱穴と考えられるピット

が1基存在するが、掘り方からも明確な壁溝、貯蔵穴は検出されていない。ただ、円形の床下土坑とピットが2ヶ所で検出されている。形態や時期が判断できる遺物は出土していない。カマドは東壁の中央から南寄りに位置する。住居の廃棄時期はカマドの位置から9世紀から10世紀にかけてと考えられる。



第54図 23号住居跡

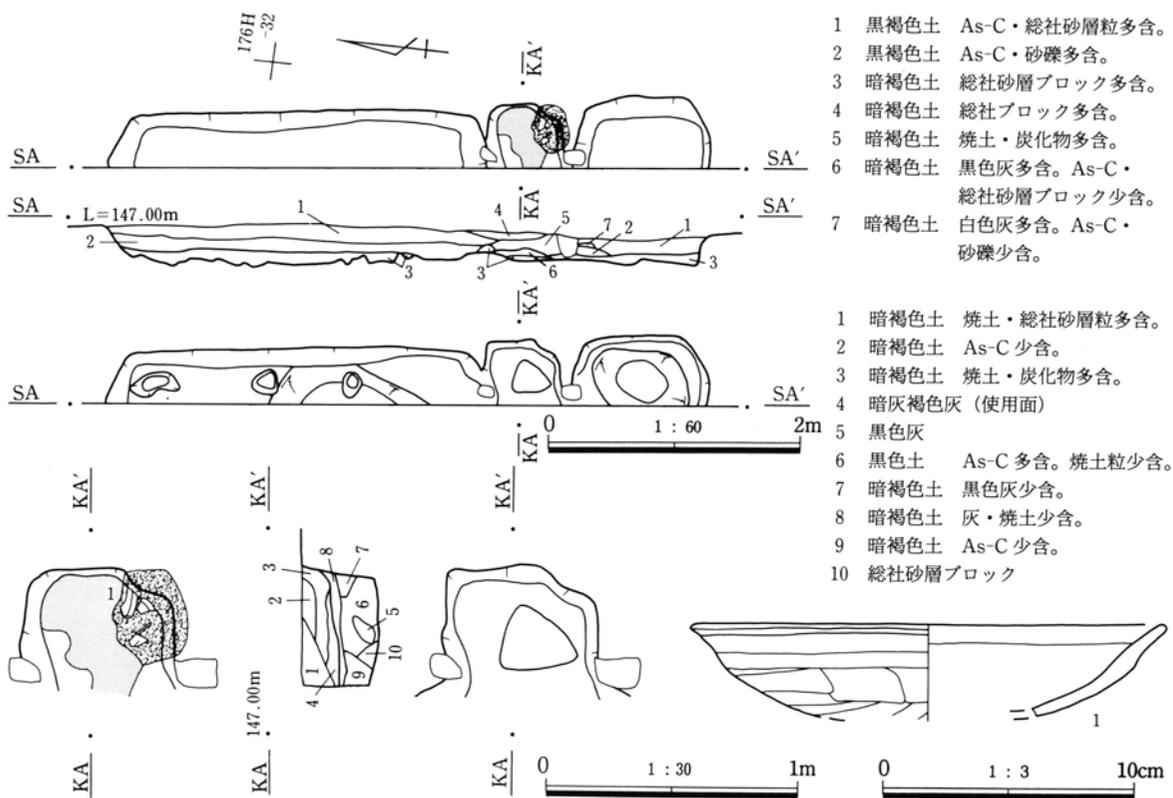


第55図 24・25号住居跡

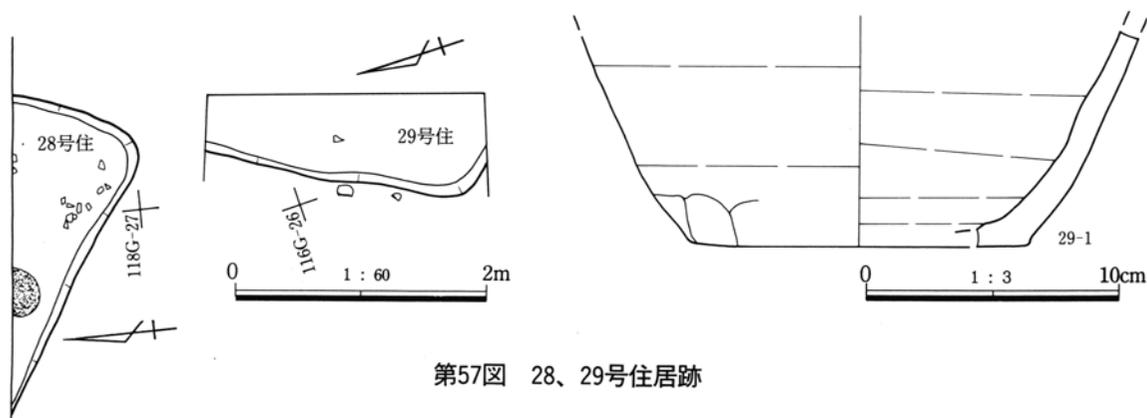
24号竪穴住居跡・25号竪穴住居跡（第55図、写真図版18・19）175H—38グリッドに位置し、24号竪穴住居跡と25号竪穴住居跡に重複関係があるものの、新旧関係は不明である。また、前述したように23号竪穴住居跡とも重複関係がある。確認面が浅いために床面もほとんどはつきりせず、24号竪穴住居跡の北壁の一部と、25号竪穴住居跡の東側半分が調査区域外に延びるために、掘り方からみても平面形態は不明である。残存する壁高も僅かであり、緩やかに立ち上がる。掘り方から24号竪穴住居跡に伴うと考えられる北壁部分と東壁の一部の壁溝や、2基のピットが検出されているが、明確な貯蔵穴、柱穴は検出されていない。形態や時期が判断できる遺物も出土していない。カマドの位置も共に不明であるが、24号竪穴住居跡のカマドがあるいは掘り方のピットの一つに相当するのかもしれない。住居の廃棄時期は共に不明である。

第3章 検出された遺構・遺物

26号竪穴住居跡（第56図、写真図版19・119） 176H—32グリッドに位置し、確認面が浅く、西側部分が1号道跡により壊されているために、重複関係や平面形態は不明であるが、おそらくは長方形と考えられる。地山を掘り込んだだけの床面は堅く平坦である。残存する壁高は約10~20cmで、緩やかに立ち上がる。南東隅に貯蔵穴が検出されているが、明確な壁溝、柱穴は検出されていない。遺物は土師器の坏などが出土している。カマドは東壁の中央から南寄りに位置し、両袖は断面正方形の切り出し石を構築材として残存する。住居の廃棄時期は遺物から8世紀前半と考えられる。



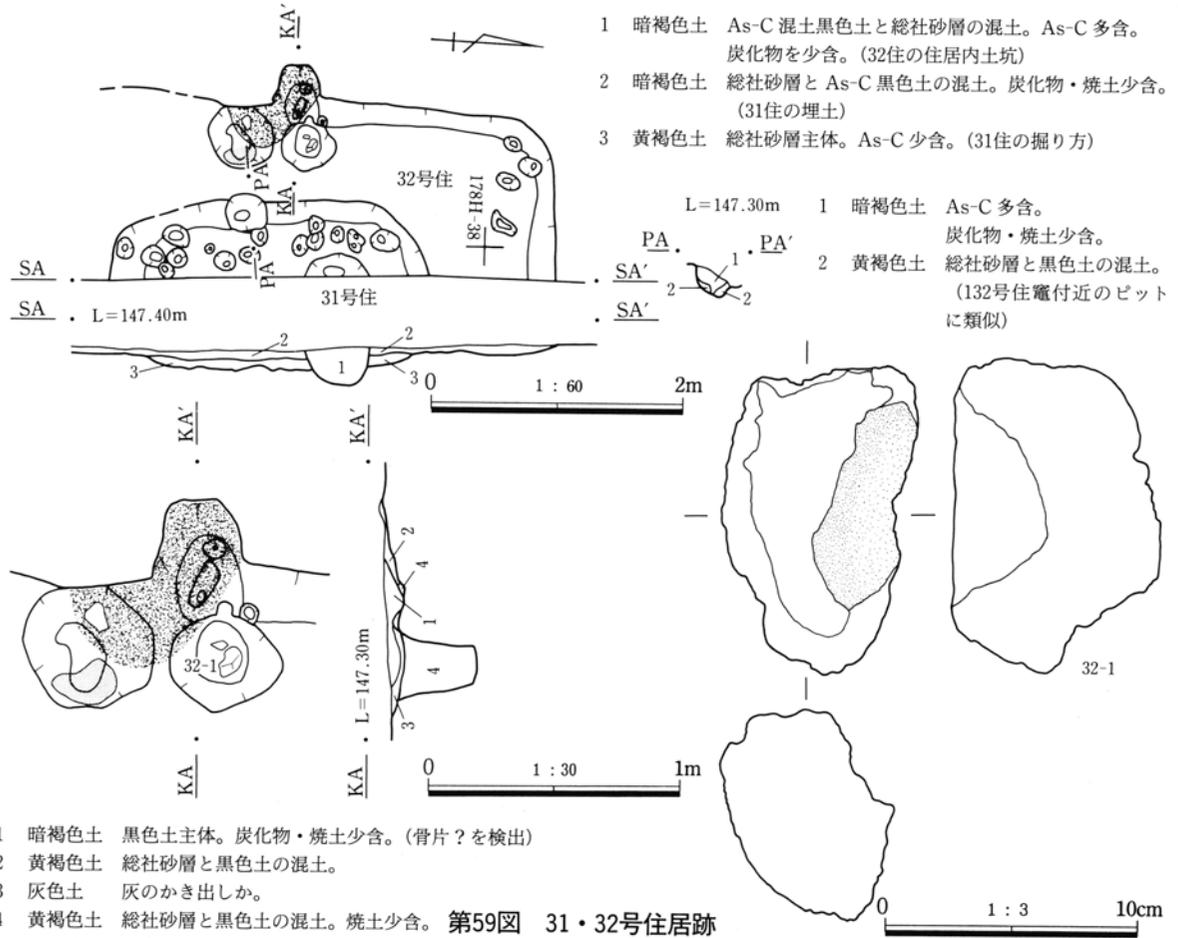
第56図 26号住居跡



第57図 28、29号住居跡

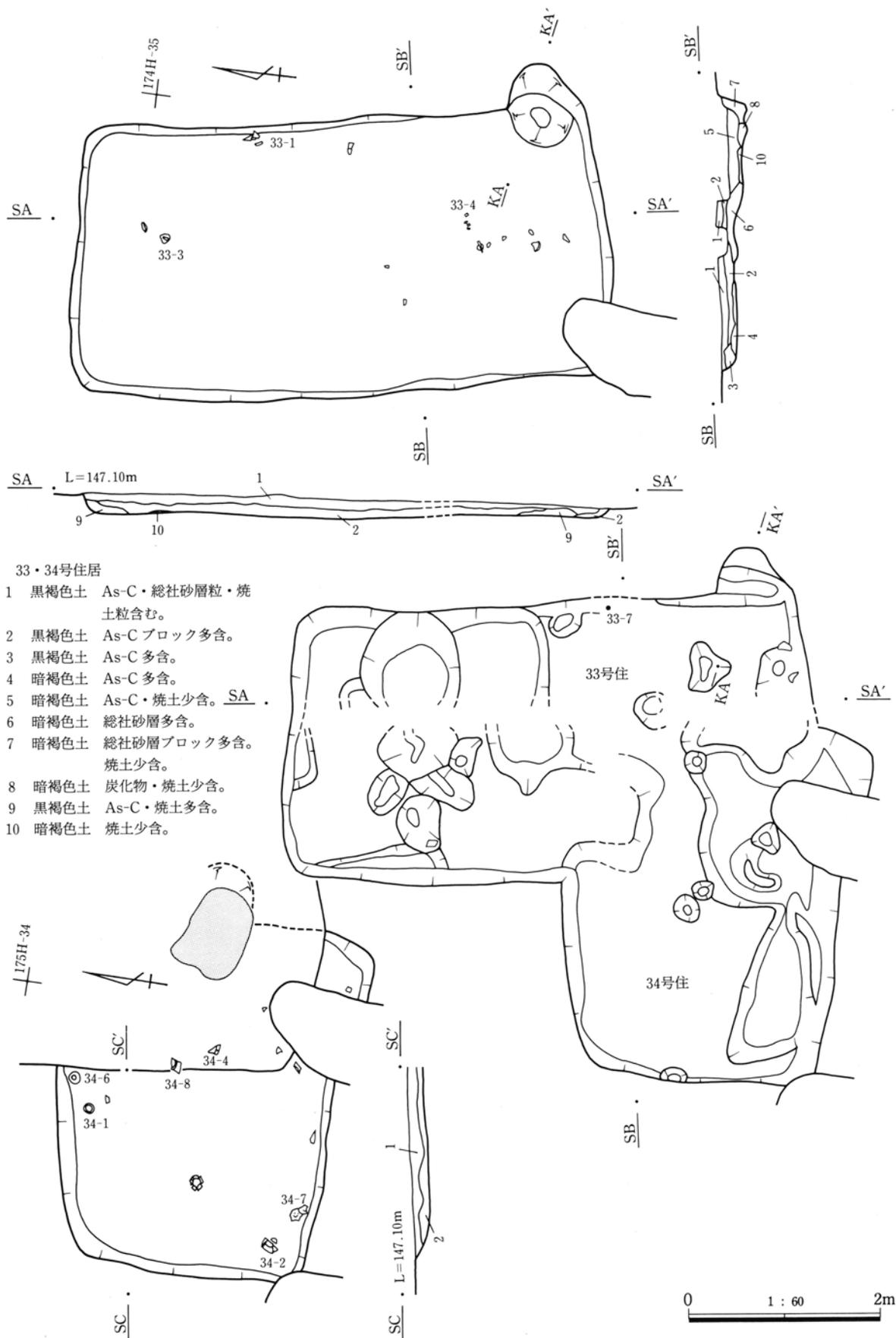
28号竪穴住居跡・29号竪穴住居跡（第57図、写真図版19・119） 118G—27グリッドと116G—26グリッドに位置し、大部分が調査区域外に延びるために、重複関係や平面形態は不明である。残存する壁高は約10cmと浅く、緩やかに立ち上がる。明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。遺物は29号竪穴住居跡から須恵器の甕などが出土している。カマドの位置は共に不明である。住居の廃棄時期も共に不明である。

第3章 検出された遺構・遺物



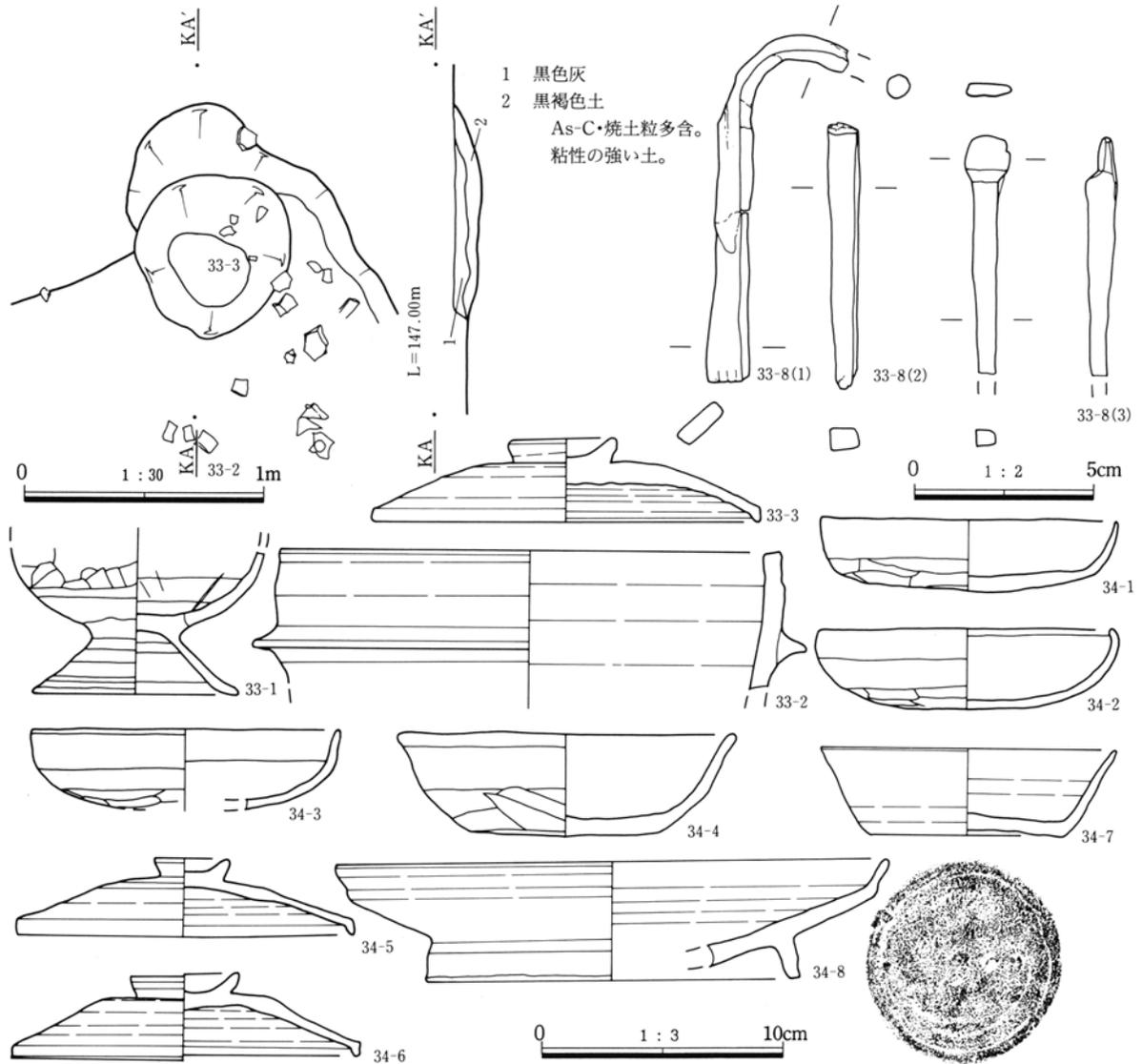
31号竪穴住居跡・32号竪穴住居跡(第59図、写真図版20・21・119) 178H-38グリッドに位置し、西側部分を1号道跡に壊されている。重複関係は31号竪穴住居跡の方が古く、32号竪穴住居跡が新しい。平面形態はおそらくは長方形と考えられる。確認面は浅いものの、地山を掘り込んだだけの床面は堅く平坦である。残存する壁高は約5cmと浅く、緩やかに立ち上がる。明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていないが、掘り方に多数のピットが検出されている。遺物が出土している32号竪穴住居跡のカマドは東壁の中央に位置し、住居の廃棄時期は不明である。

33号竪穴住居跡・34号竪穴住居跡(第60・61図、写真図版21・22・119) 174H-35グリッドに位置する。重複関係は34号竪穴住居跡が古く、33号竪穴住居跡が新しい。また、33号竪穴住居跡は84号竪穴住居跡よりも新しい。平面形態は共に長方形である。地山を掘り込んだだけの床面は堅く平坦である。壁高は北部分が約10cmを測るのに対して、南側部分は壁が不明確であり、緩やかに立ち上がるか、ほとんど壁すら確認できない状態の部分も存在する。壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されなかったが、掘り方に大小の床下土坑、ピットが検出されている。遺物は33号竪穴住居跡が土師器の小形台付甕や須恵器の蓋や羽釜、鉄製品など、34号竪穴住居跡が土師器や須恵器の坏、蓋、盤などが出土している。33号竪穴住居跡のカマドは、東壁の南東隅に位置するが、34号竪穴住居跡のカマドはおそらくは東壁に存在したために、33号竪穴住居跡により壊されていると考えられる。住居の廃棄時期は遺物から34号竪穴住居跡は8世紀中葉、33号竪穴住居跡が重複関係からも10世紀と考えられる。



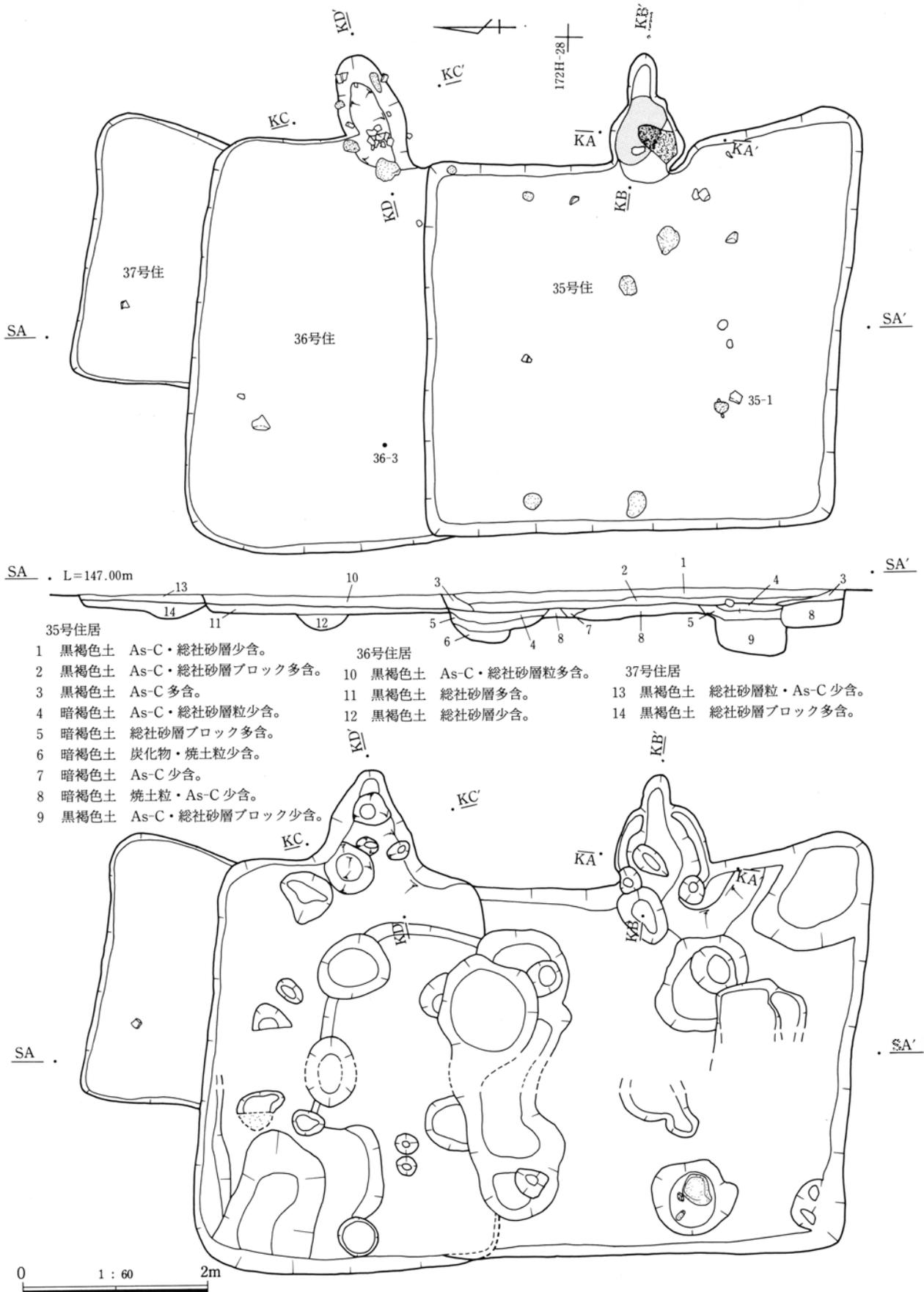
- 33・34号住居
- 1 黒褐色土 As-C・総社砂層粒・焼土粒含む。
 - 2 黒褐色土 As-Cブロック多含。
 - 3 黒褐色土 As-C多含。
 - 4 暗褐色土 As-C多含。
 - 5 暗褐色土 As-C・焼土少含。 SA
 - 6 暗褐色土 総社砂層多含。
 - 7 暗褐色土 総社砂層ブロック多含。焼土少含。
 - 8 暗褐色土 炭化物・焼土少含。
 - 9 黒褐色土 As-C・焼土多含。
 - 10 暗褐色土 焼土少含。

第60図 33・34号住居跡



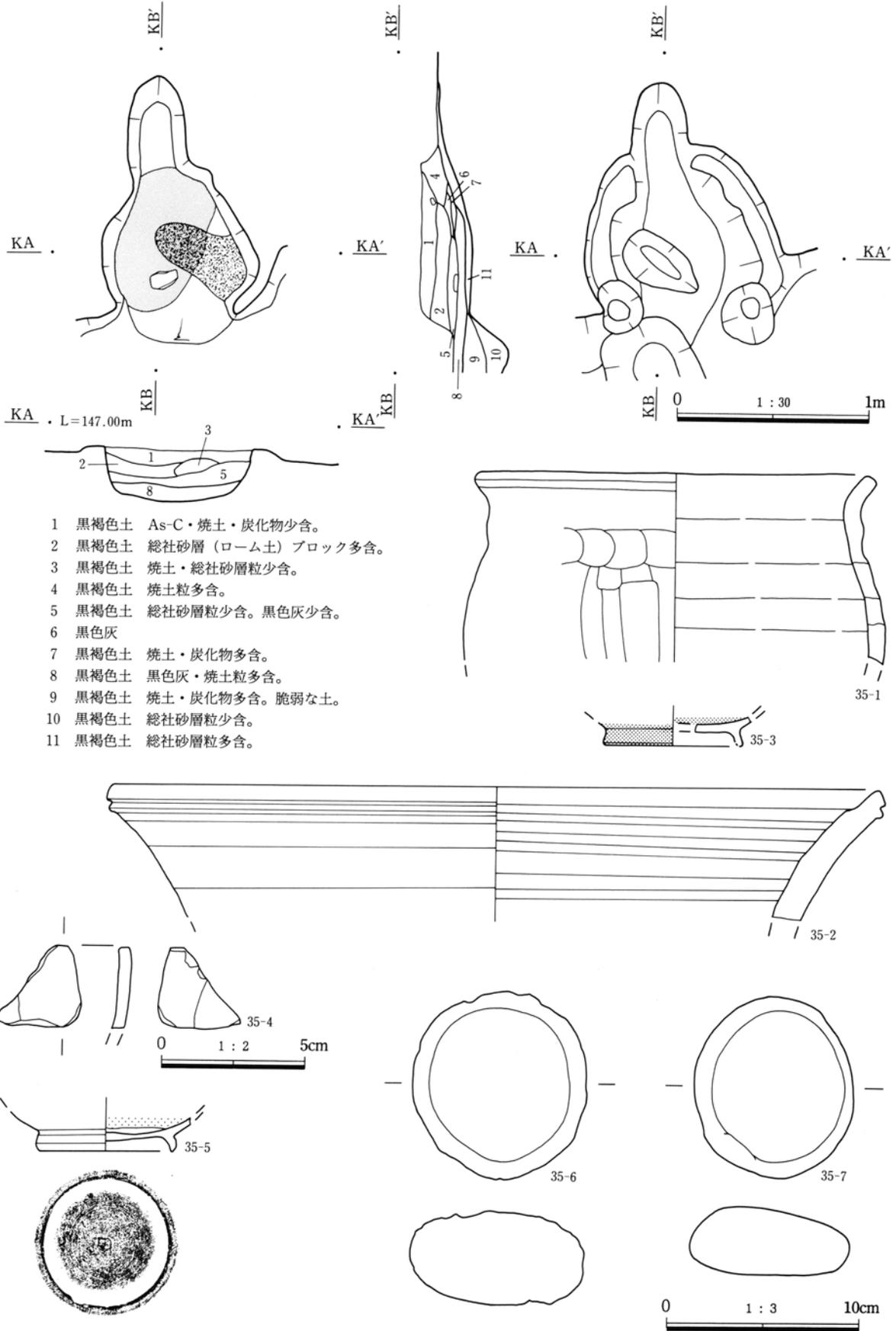
第61図 33・34号住居跡

35号竪穴住居跡・36号竪穴住居跡・37号竪穴住居跡 (第62～64図、写真図版22～24・119・120) 172H—28
 グリッドに位置し、重複関係では37号竪穴住居跡が最も古く、次に36号竪穴住居跡、35号竪穴住居跡の順に
 新しい。57号竪穴住居跡は37号竪穴住居跡と38号竪穴住居跡よりも古いものの、37号竪穴住居跡と38号竪穴
 住居跡との新旧関係は、共に36号竪穴住居跡に壊されているために不明である。平面形態は、35号竪穴住居
 跡が南北長軸の長方形、36号竪穴住居跡が東西長軸の長方形だが、37号竪穴住居跡は36号竪穴住居跡に南側
 半分を壊されて不明である。壁高は、35号竪穴住居跡が約15～20cm、36号竪穴住居跡が約10～15cm、37号竪
 穴住居跡が約5～10cmで、直立気味に立ち上がる。掘り方で35号竪穴住居跡の貯蔵穴と柱穴と考えられる床
 下土坑や大小のピット、36号竪穴住居跡の北壁の西側半分に壁溝と考えられる掘り込みが検出されている。
 遺物は土師器や須恵器の甕と羽釜、灰釉陶器や緑釉陶器の椀などが出土している。カマドは35号竪穴住居跡
 と36号竪穴住居跡が共に東壁の中央からやや南寄りに位置するが、37号竪穴住居跡は東壁に位置していたと
 想定され、36号竪穴住居跡に壊されたと考えられる。36号竪穴住居跡は断面六角形の切り出し石が支脚とし
 て使用されており、35号竪穴住居跡は掘り方から両袖に使用した石のための掘り込み穴が検出されている。
 住居の廃棄時期は遺物から35号竪穴住居跡と36号竪穴住居跡は共に10世紀であるが、37号竪穴住居跡は10世

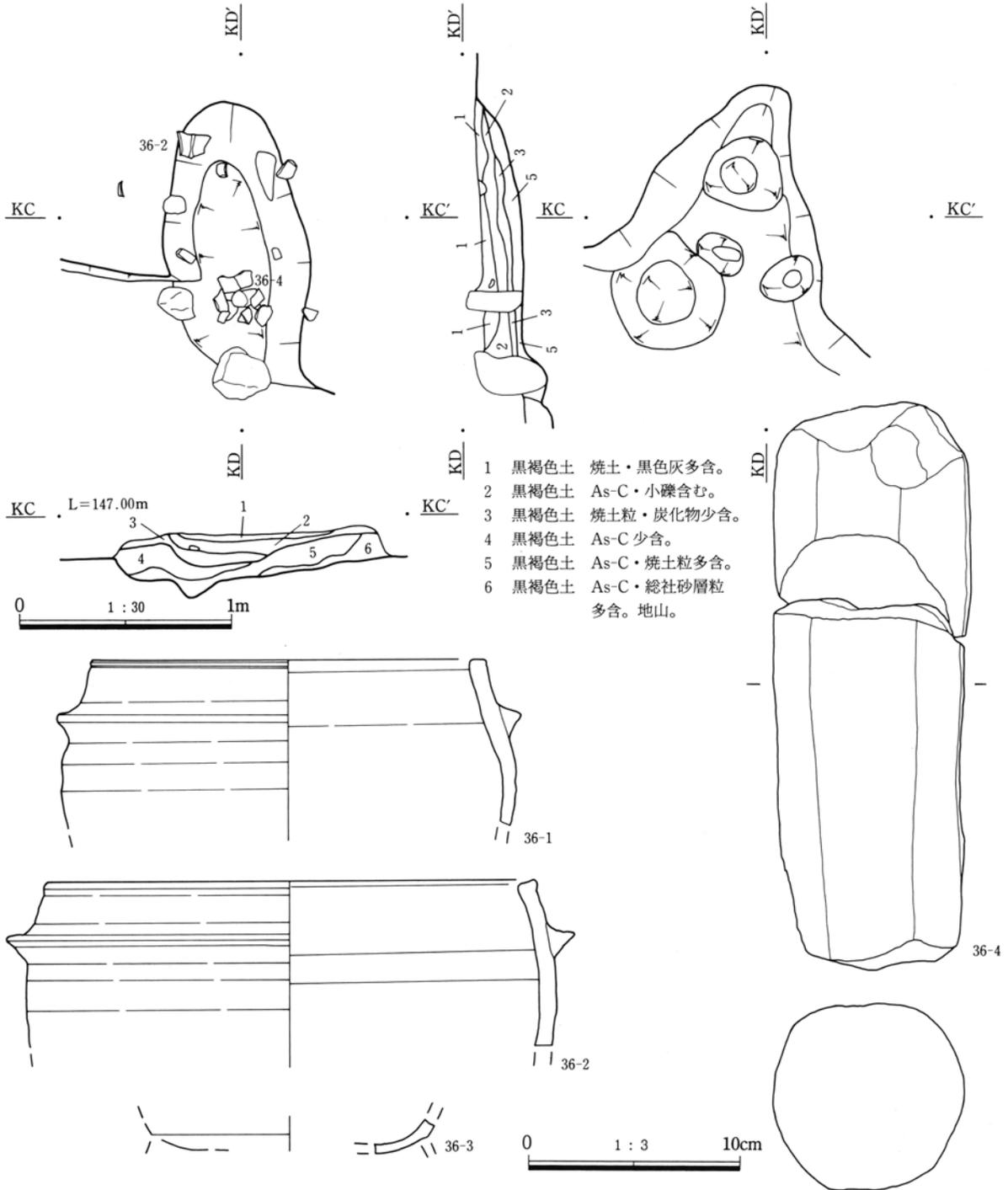


第62図 35・36・37号住居跡

第3章 検出された遺構・遺物



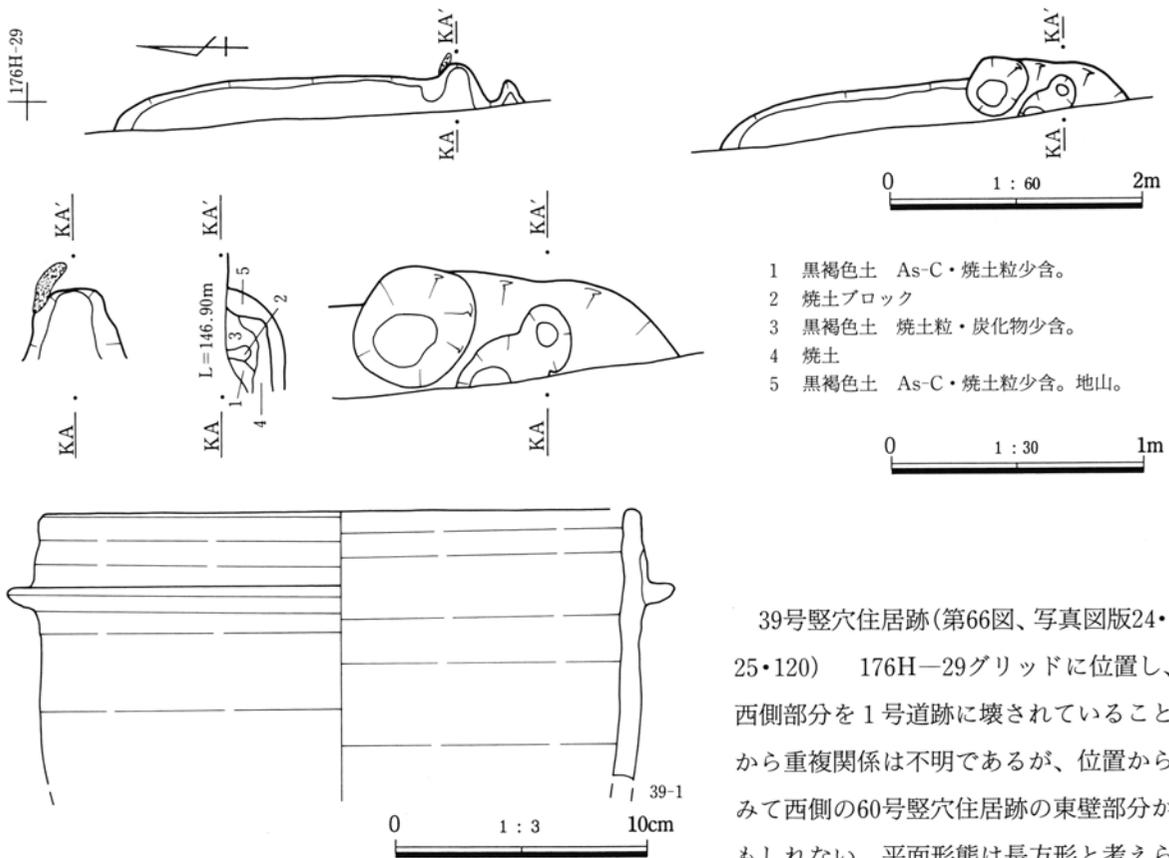
第63図 35号住居跡



第64図 36号住居跡

紀か、それ以前と考えられる。

38号竪穴住居跡・57号竪穴住居跡（第65図、写真図版24・120・123） 175H-29グリッドに位置し、重複関係は57号竪穴住居跡の方が古く、新旧関係は不明だが37号竪穴住居跡と38号竪穴住居跡とが新しいが、36号竪穴住居跡がさらに新しい。住居形態は共におそらくは長方形と考えられる。確認面が浅いために、床面は西壁付近に僅かに残存するだけであり、残存する壁高は僅かである。掘り方から38号竪穴住居跡の北壁の

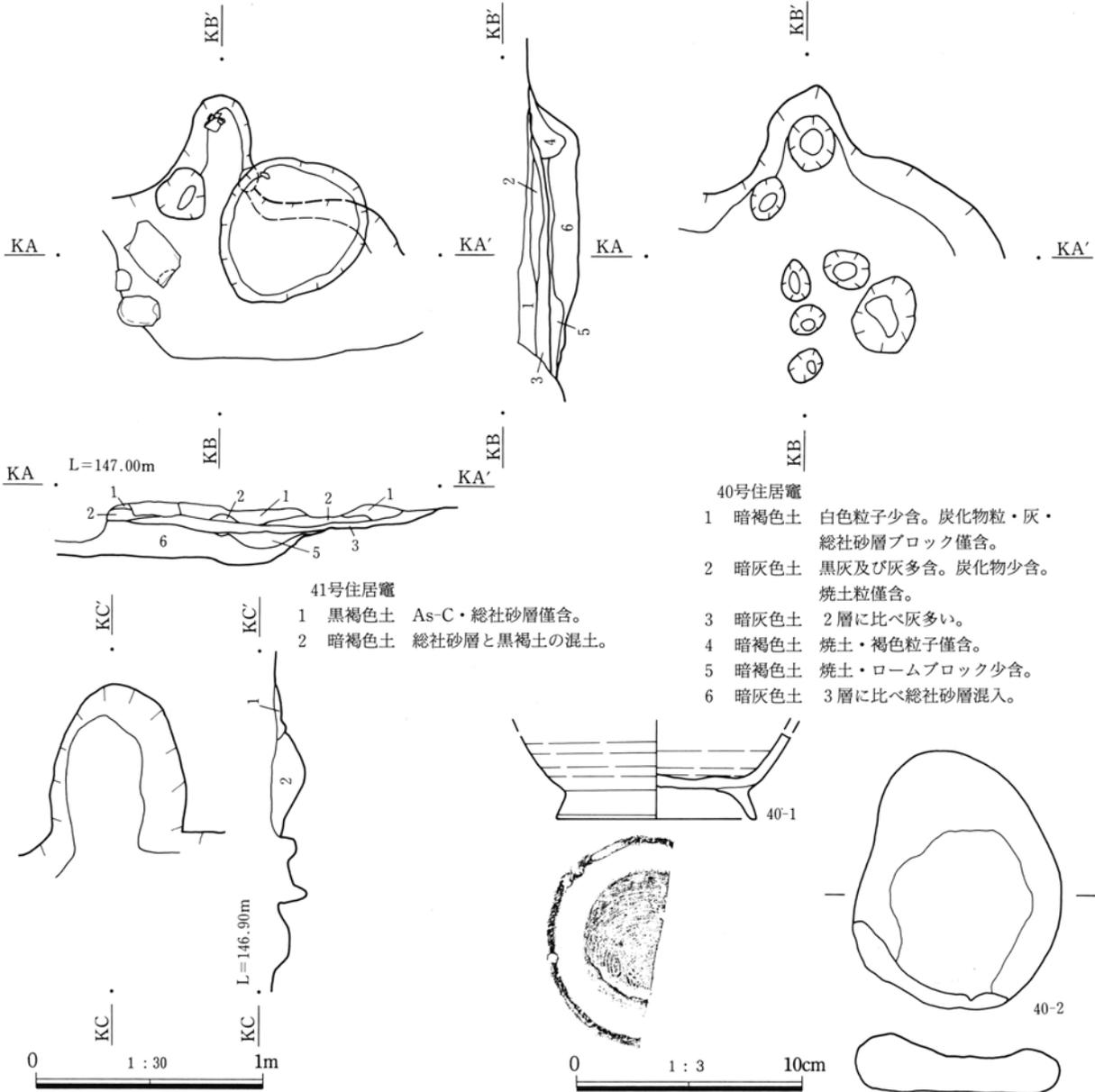


第66図 39号住居跡

39号竪穴住居跡(第66図、写真図版24・25・120) 176H-29グリッドに位置し、西側部分を1号道跡に壊されていることから重複関係は不明であるが、位置からみて西側の60号竪穴住居跡の東壁部分かもしれない。平面形態は長方形と考えられる。残存する壁高は約10cm前後と浅く、

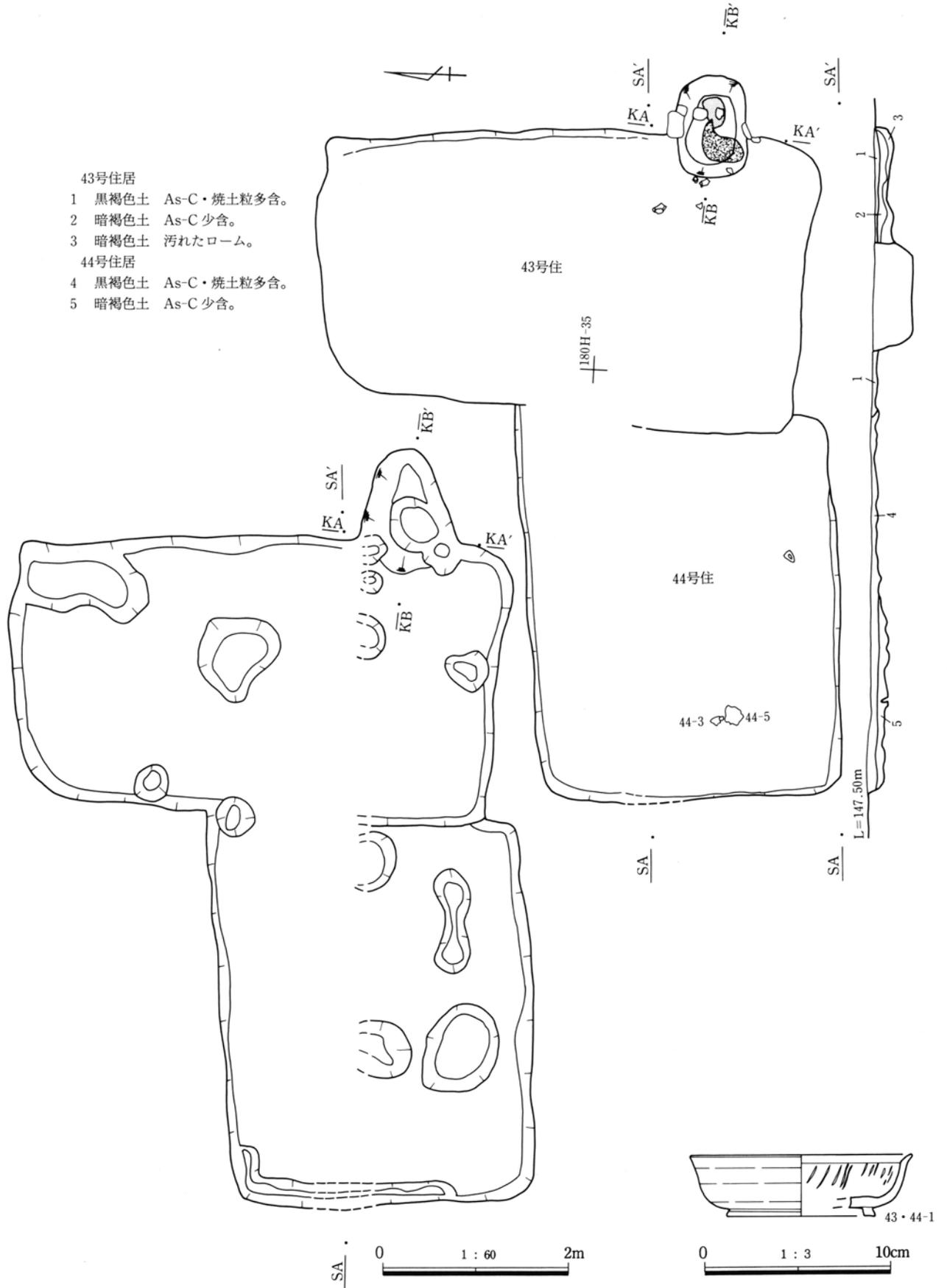
緩やかに立ち上がる。明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。遺物は須恵器の羽釜などが出土している。カマドは東壁の南東隅に位置する。住居の廃棄時期は遺物から10世紀と考えられる。

40号竪穴住居跡・41号竪穴住居跡・42号竪穴住居跡(第67・68図、写真図版25・120) 183H-28グリッドに位置し、重複関係では42号竪穴住居跡が最も古く、次に41号竪穴住居跡で、40号竪穴住居跡の順に新しい。また、40号竪穴住居跡と41号竪穴住居跡より中世と考えられる52号土坑と新しく、41号竪穴住居跡よりも中世と考えられる41号土坑の方が新しい。さらに、53号竪穴住居跡については一部が重複するものの土層確認ができなかったために不明である。41号竪穴住居跡との新旧関係だけでなく、41号竪穴住居跡や42号竪穴住居跡についても不明である。平面形態は、41号竪穴住居跡がほぼ正方形であるのに対して、40号竪穴住居跡と42号竪穴住居跡は共におそらくは長方形と考えられる。確認面が浅いために床面の残存が悪く、一部では掘り方にまで達している部分がある。残存する部分での壁高は約5~10cmと浅く、一部では壁そのものが明確でない部分が存在する。41号竪穴住居跡と42号竪穴住居跡には明確な壁溝が検出されている。掘り方では大小の正方形から楕円形、円形にかけての床下土坑や、いくつかのピットが検出されているが、明確な貯蔵穴、柱穴は検出されていない。遺物は須恵器の椀などが出土している。カマドは40号竪穴住居跡が東壁の南東隅、41号竪穴住居跡が東壁の中央から南寄りに位置しているが、42号竪穴住居跡も東壁に位置していたものと推定されるが、41号竪穴住居跡かあるいは41号土坑により壊されたと考えられる。住居の廃棄時期は遺物から、40号竪穴住居跡が9世紀後半と考えられるのに対して、42号竪穴住居跡は10世紀前半と考えられ、遺構確認時の新旧関係と異なる結果である。41号竪穴住居跡の詳細な時期は不明である。

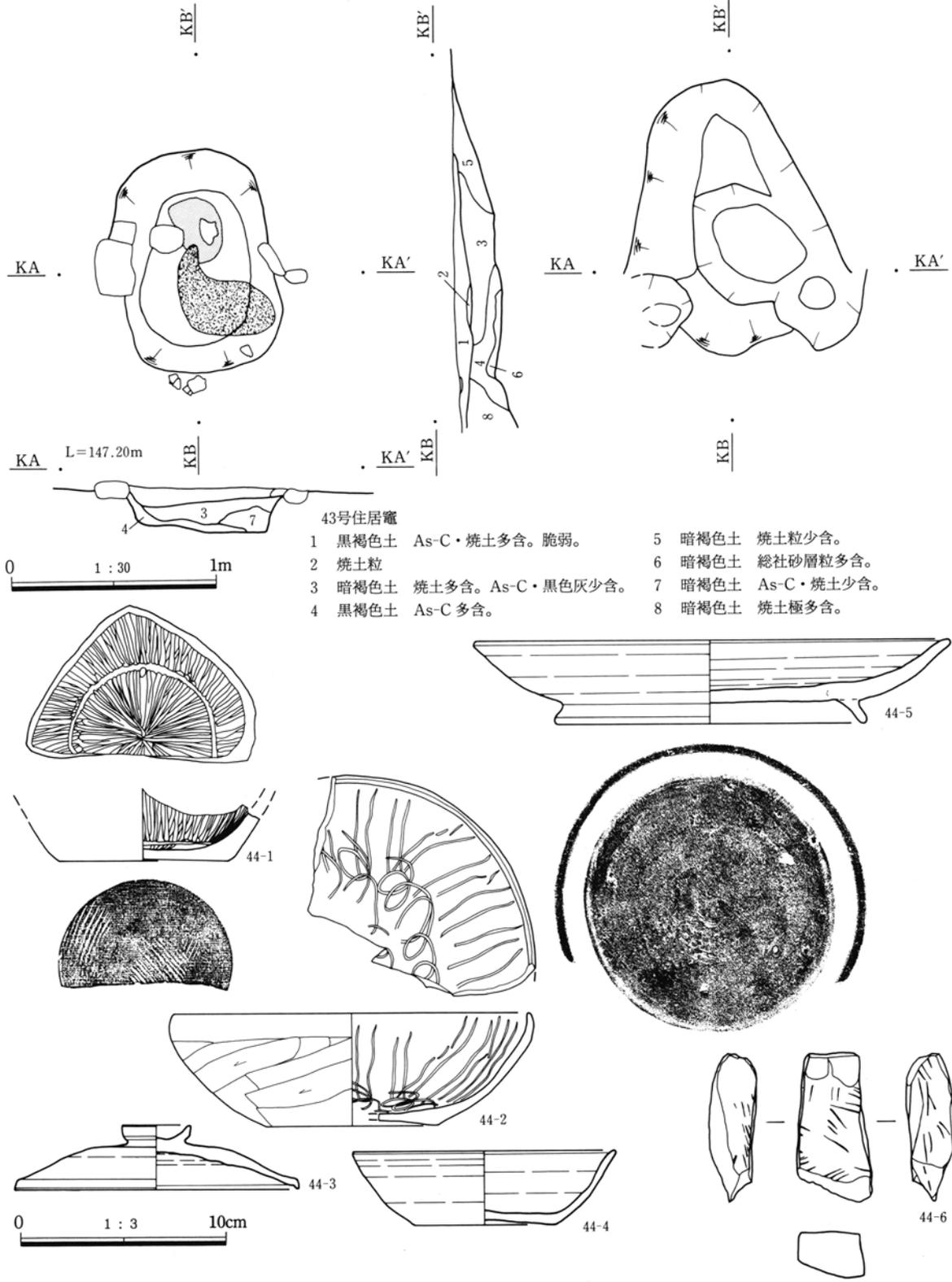


第68図 40・41号住居跡

43号竪穴住居跡・44号竪穴住居跡（第69・70図、写真図版25・26・120） 180H—35グリッドに位置し、重複関係は44号竪穴住居跡の方が古く、43号竪穴住居跡が新しい。また、43号竪穴住居跡の床面の一部を壊して、中世と考えられる50号土坑が存在する。平面形態は43号竪穴住居跡が南北長軸、44号竪穴住居跡が東西長軸の長方形である。確認面が浅いために床面がすでに出ている部分もあるが、地山を掘り込んだだけの大部分の床面は堅く平坦である。残存する壁高は約5～10cmと浅く、緩やかに立ち上がる。44号竪穴住居跡の西壁に壁溝が残存するだけで、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていないが、掘り方でいくつかの床下土坑とピットが検出されている。遺物は土師器の暗文土器や須恵器の坏、盤などが出土している。特に、底部だけの残存であるが、甲斐型の坏は県内での出土が数少ない資料である。43号竪穴住居跡のカマドは東壁の中央から南寄りに位置し、両袖が石を構築材として残存するのに対して、44号竪穴住居跡のカマドは東壁に存在したと想定されるために、43号竪穴住居跡により壊されたものと考えられる。住居の廃棄時期は遺物から43号竪穴住居跡が8世紀、44号竪穴住居跡が8世紀中葉と考えられる。



第69図 43・44号住居跡



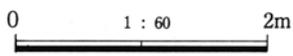
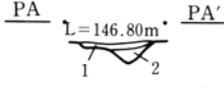
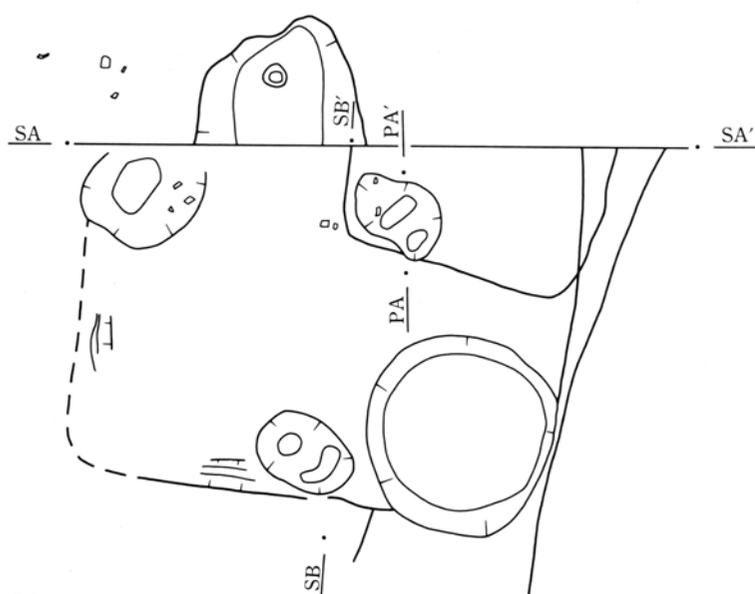
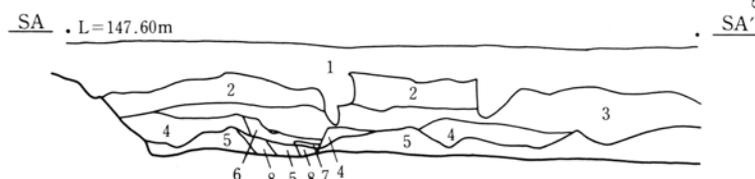
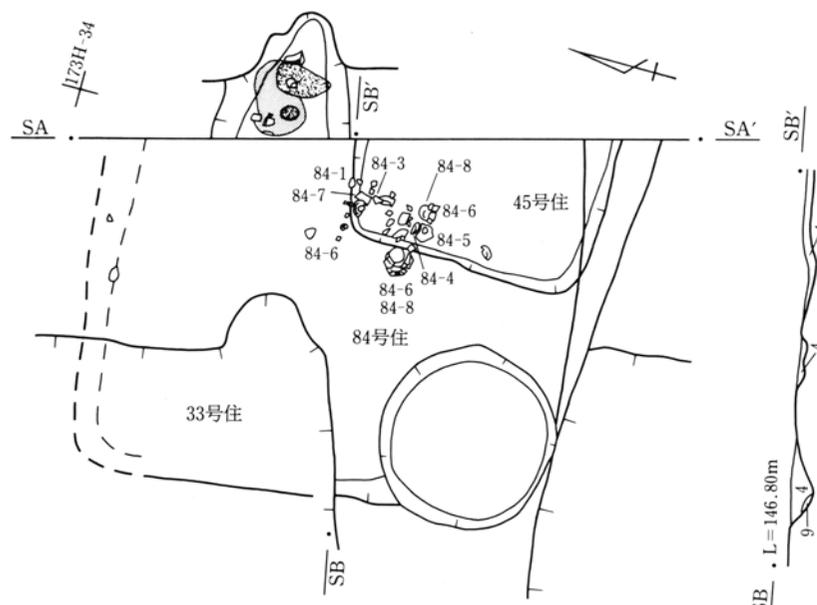
第70図 43・44号住居跡

45号竪穴住居跡・84号竪穴住居跡（第71・72図、写真図版26・27・120・125・126） 173H-34グリッドに位置し、重複関係は45号竪穴住居跡の方が古く、84号竪穴住居跡が新しく、さらに33号竪穴住居跡が最も新しい。45号竪穴住居跡の東側半分と84号竪穴住居跡の東壁が調査区域外に延びるが、平面形態は84号竪穴住

第3章 検出された遺構・遺物

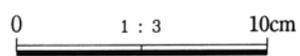
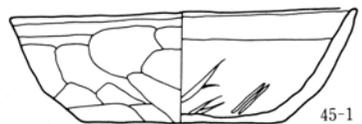
居跡が長方形であるのに対して、45号竪穴住居跡は不明である。確認面が浅いために床面の一部は壊されており、壁も大部分が不明確であり、残存する壁高も約5cm程度とかなり浅い。明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていないが、掘り方から円形の床下土坑やピットが検出されている。遺物は45号住居跡から土師器の坏と暗文土器、須恵器の椀、84号竪穴住居跡からは土師器の甕、須恵器の坏、椀、蓋、羽釜、鉄滓などが

出土している。カマドは調査区域外の農道部分を一部壊して拡幅して検出した84号竪穴住居跡が東壁のほぼ中央か、それよりやや北寄りに、45号竪穴住居跡が調査区域外の部分に位置するものと考えられる。住居の廃棄時期は遺物から45号竪穴住居跡が8世紀中葉、84号竪穴住居跡が9世紀後半と考えられる。



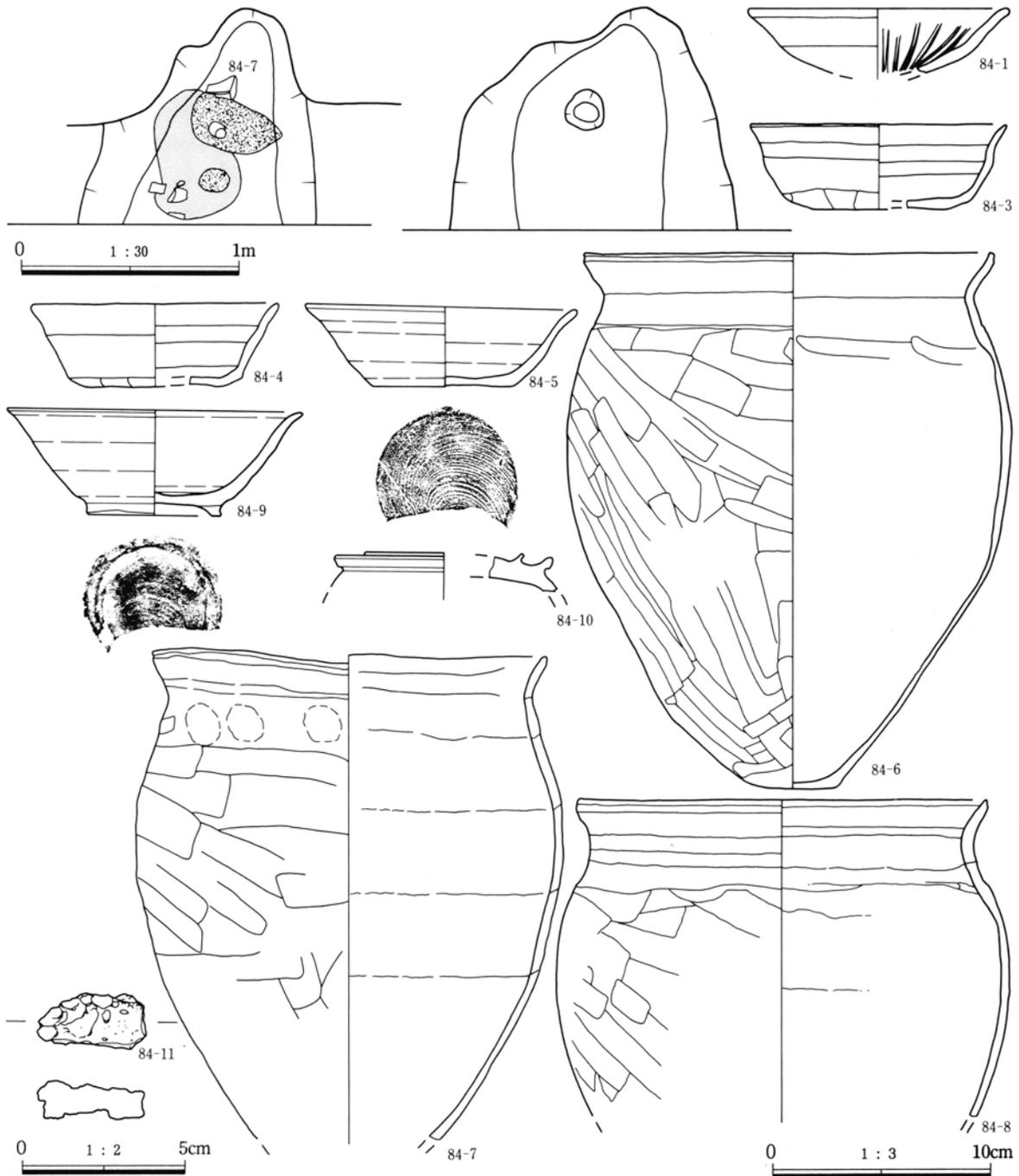
45・84号住居

- 1 暗褐色土 総社砂層と As-C 混入黒色土の混土。焼土・炭化物少含。
- 2 暗褐色土 1層に類似、As-C が少ない。
- 3 暗褐色土 焼土・炭化物多含。
- 4 暗褐色土 As-C 多含。焼土・炭化物少含。
- 5 黄褐色土 総社砂層を多量に含む黒色土の混土。(84住掘り方)
- 6 暗褐色土 焼土・炭化物多含。灰層。遺物(土器片、鉄滓)含む。
- 7 灰色土 灰層。
- 8 暗褐色土 焼土少含。炭化物僅含。
- 9 暗褐色土 黒ボク土ブロック少含。



- 1 黒褐色土 As-C 少含。黒ボク土ブロック僅含。
- 2 暗褐色土 1層ブロック少含。鉄分の付着か? 茶褐色の黒ボク土・総社砂層主体。

第71図 45・84号住居跡

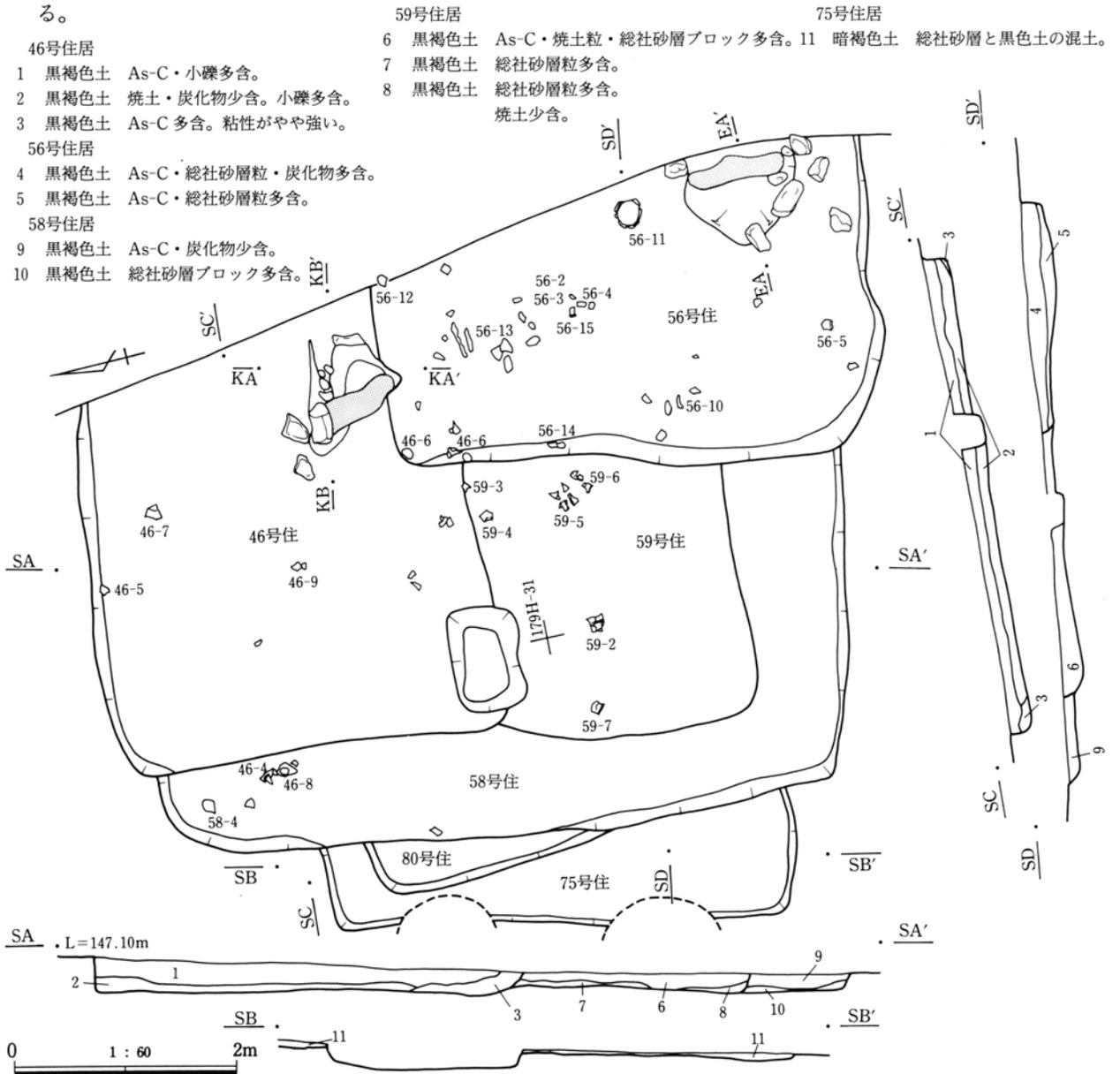


第72図 84号住居跡

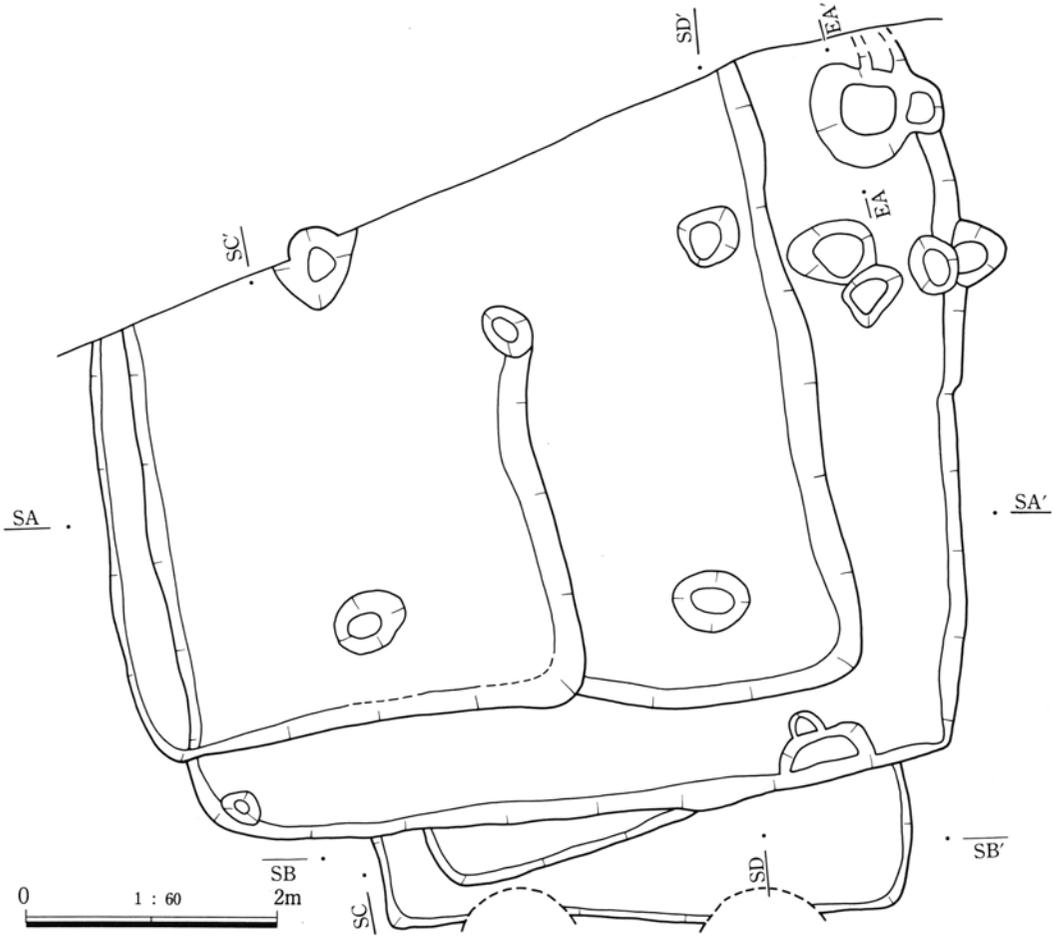
46号竪穴住居跡・56号竪穴住居跡・58号竪穴住居跡・59号竪穴住居跡・75号竪穴住居跡・80号竪穴住居跡 (第73～77図、写真図版27・29・120～123) 179H-31グリッドに位置し、重複関係では、確認作業時の前後関係の判断の間違いでカマドの右袖の一部を壊した46号竪穴住居跡が最も新しく、次に56号竪穴住居跡と、58号竪穴住居跡、59号竪穴住居跡の順に古いものの、最も古い段階が75号竪穴住居跡か、あるいは80号竪穴住居跡かは不明確である。平面形態は46号竪穴住居跡と56号竪穴住居跡が長方形であり、58号竪穴住居跡や59号竪穴住居跡と75号竪穴住居跡と80号竪穴住居跡はそれぞれが住居の東側部分を壊されているために不明である。また、60号竪穴住居跡は56号竪穴住居跡の南壁部分で、95号竪穴住居跡は46号竪穴住居跡と58号竪穴住居跡の北西隅部分で重複しているが、遺構確認や土層からも新旧関係は不明である。46号竪穴住居跡の

第3章 検出された遺構・遺物

床面からは多量の炭化材が出土しているが、木の幹もあることから建築材だけとは言えないかもしれない。第5章第3節に樹種分析結果を収録しており、クリとヤマグワが主体である。46号竪穴住居跡や56号竪穴住居跡は床面が堅いが、残りの竪穴住居跡は確認時点で掘り方にまで達している部分もある。残存する壁高は、46号竪穴住居跡や56号竪穴住居跡が約15~20cmと深く、58号竪穴住居跡や59号竪穴住居跡、75号竪穴住居跡、80号竪穴住居跡はほとんど掘り方の壁であり、約5~10cmと浅く、垂直気味に立ち上がる。位置からみて、56号竪穴住居跡のカマド左の南東隅の貯蔵穴や、58号竪穴住居跡の柱穴4ヶ所が検出されているが、それ以外の明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。だが、掘り方には楕円形~円形の床下土坑やピットがいくつか検出されている。遺物は土師器の坏や甕、置き竈、須恵器の坏や椀、蓋、羽釜、灰釉陶器の耳皿と、砥石、鉄釘などが出土している。カマドは、46号竪穴住居跡と56号竪穴住居跡が東壁の南東隅に位置するが、他は不明である。住居の廃棄時期は遺物から、46号竪穴住居跡と56号竪穴住居跡が9世紀中葉、58号竪穴住居跡が8世紀中葉、59号竪穴住居跡が7世紀後半、75号竪穴住居跡と80号竪穴住居跡はそれ以前と考えられる。

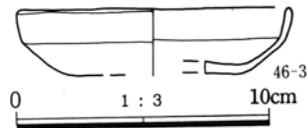
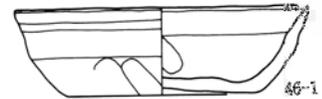
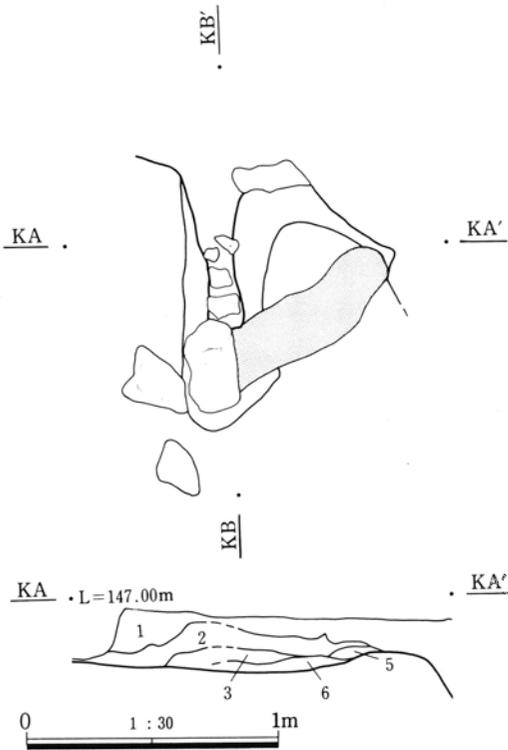


第73図 46・56・58・59・75・80号住居跡

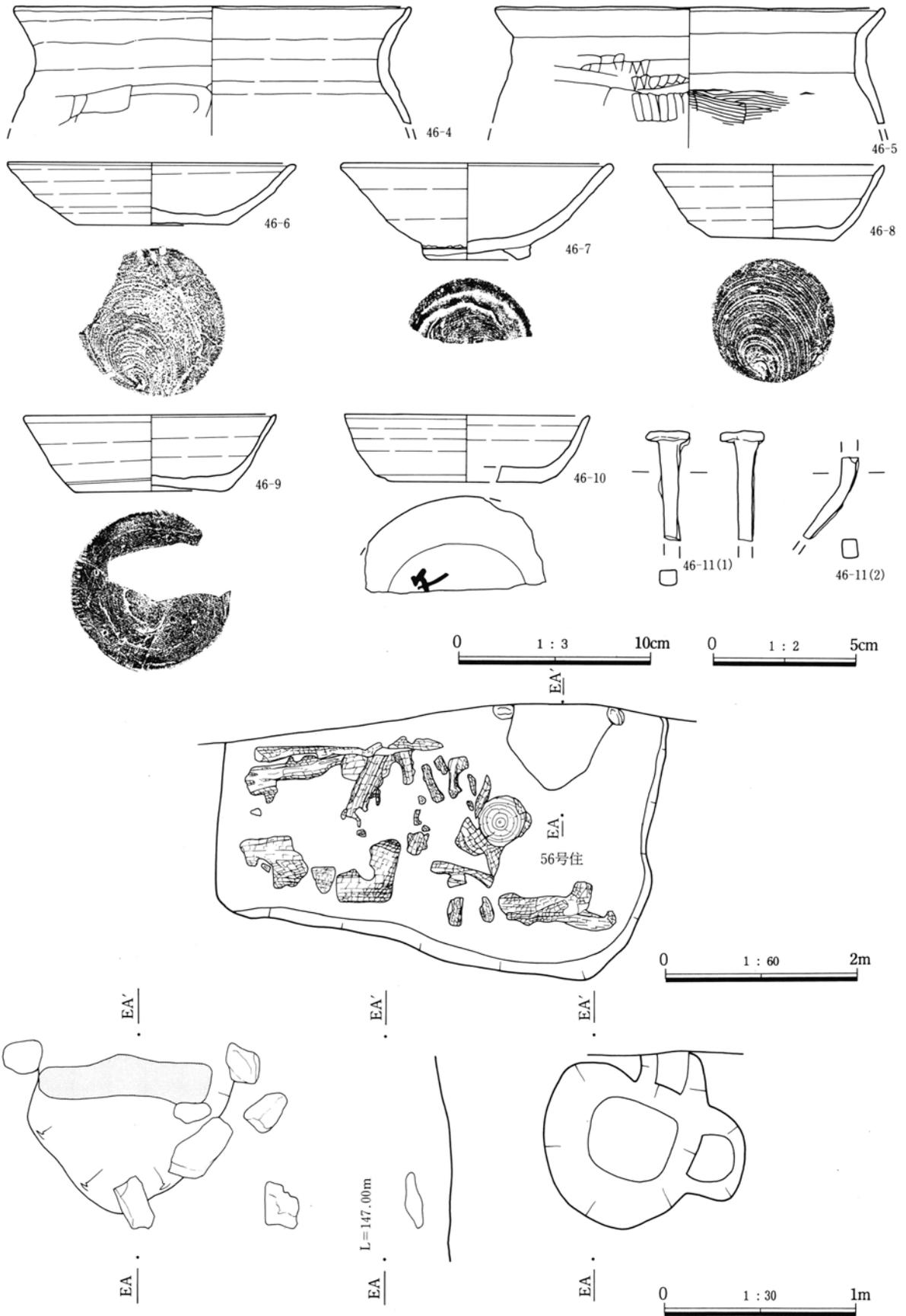


46号住居

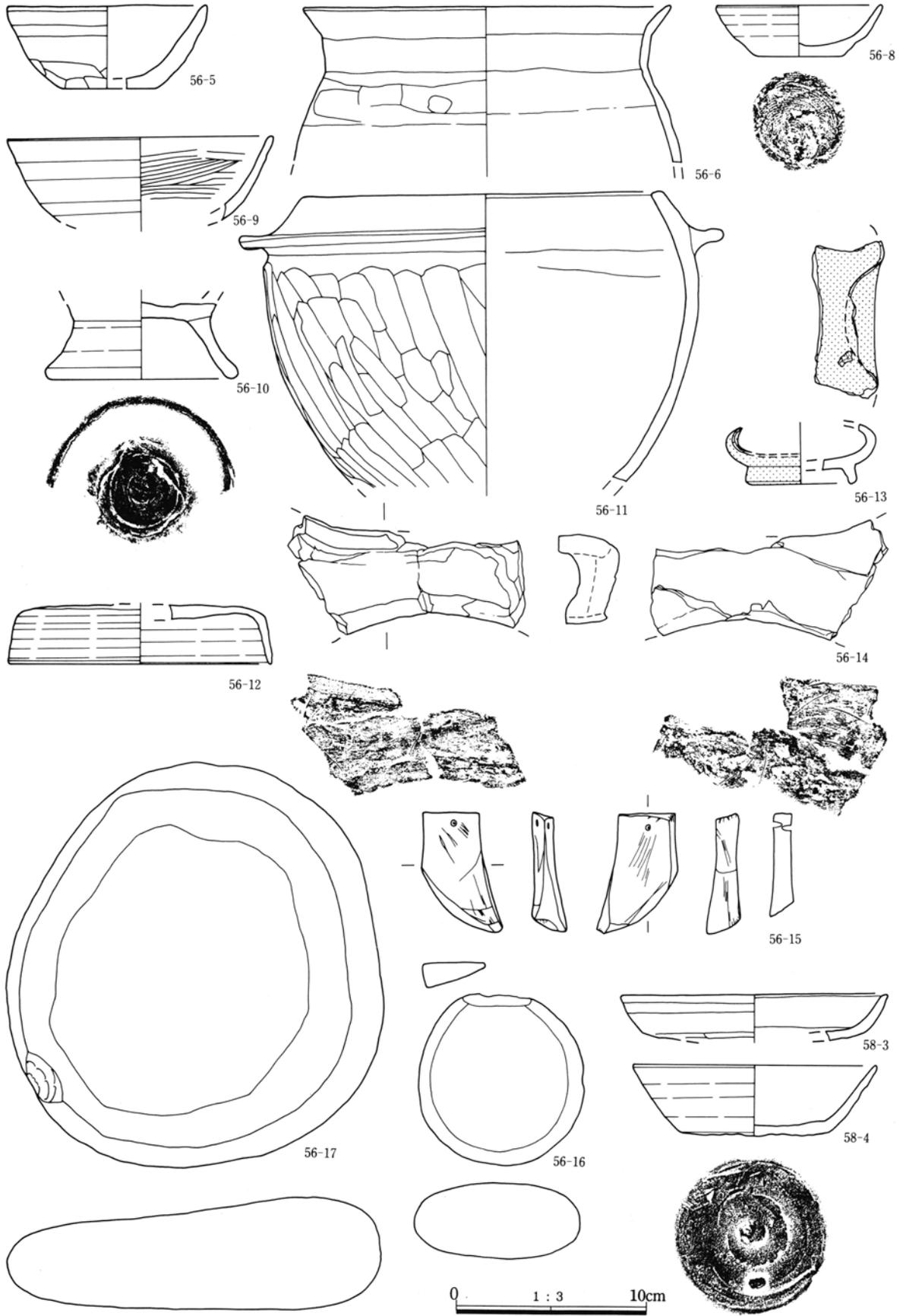
- 1 黒褐色土 As-C・総社砂層含む。
- 2 黒褐色土 焼土少含。
- 3 黒褐色土 焼土・炭化物少含。
- 4 黄褐色土 竈部材。
- 5 黒色灰層
- 6 黄褐色土 焼土少含。
- 7 灰色土 灰層。
- 8 暗褐色土 As-C・総社砂層多含。
- 9 暗褐色土 総社砂層多含。
- 10 暗褐色土 焼土・炭化物多含。
- 11 暗褐色土 炭化物多含。



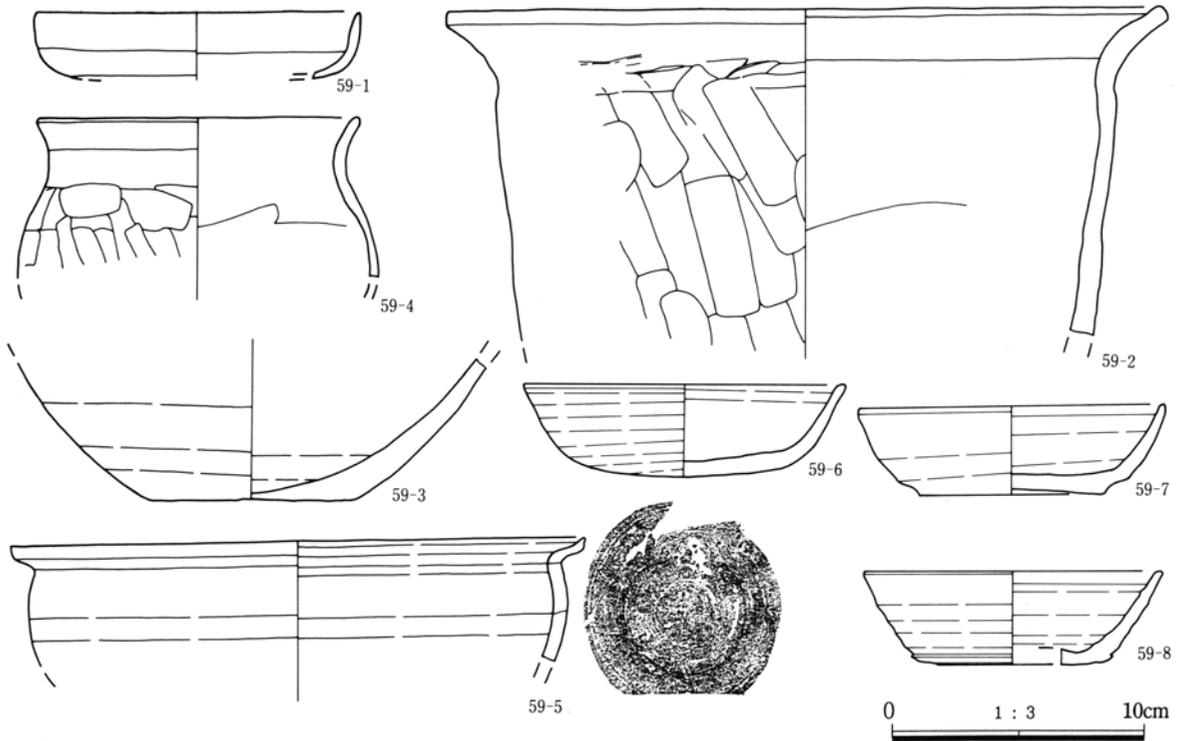
第74図 46・56・58・59・75・80号住居跡



第75図 46・56号住居跡



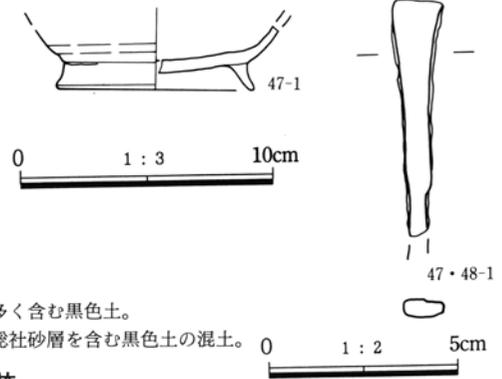
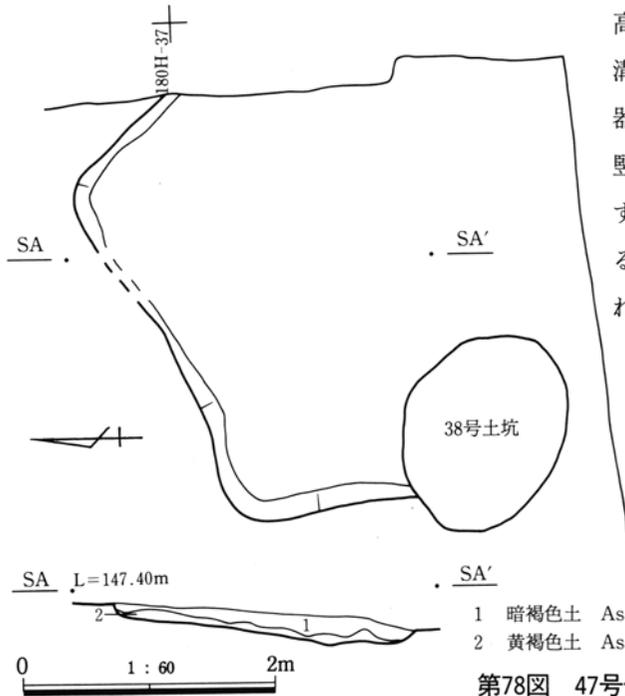
第76図 56・58号住居跡



第77図 59号住居跡

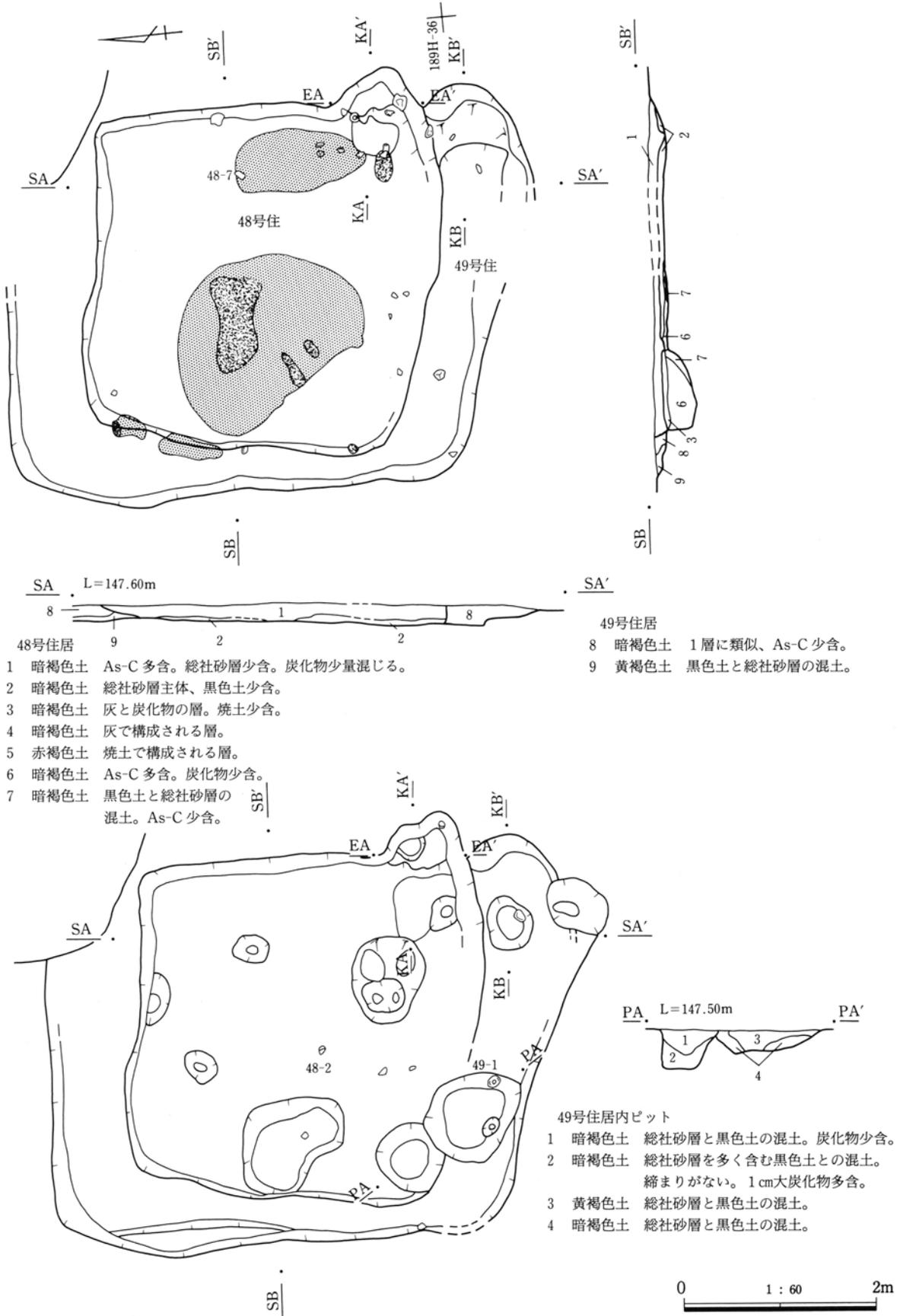
47号竪穴住居跡(第78図、写真図版29・121) 180H-37グリッドに位置し、重複関係では47号竪穴住居跡が最も古く、20号竪穴住居跡と43号竪穴住居跡と44号竪穴住居跡が新しい。また、中世と考えられる38号土坑に西壁の一部を壊されている。だが、確認面がとても浅いために、北壁付近以外の壁が明確でなく、大部分の床面も残存せず、掘り方に達しているために、平面形態は不明である。北壁付近に残存する掘り方の壁

高は約10~15cmで、緩やかに立ち上がる。明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。遺物は須恵器の碗や刀子などが出土している。カマドは、20号竪穴住居跡と43号竪穴住居跡と44号竪穴住居跡のいずれかに壊されていると考えられ、位置は不明である。住居の廃棄時期は遺物から9世紀以降と考えられる。



第78図 47号住居跡

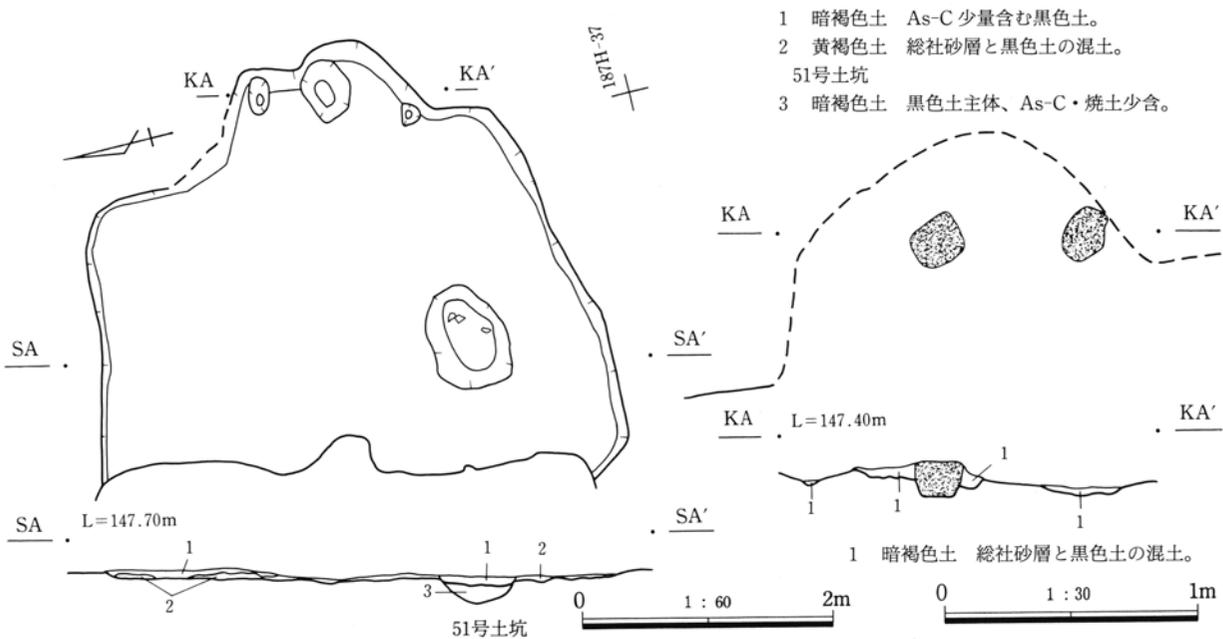
- 1 暗褐色土 As-Cを多く含む黒色土。
- 2 黄褐色土 As-Cと総社砂層を含む黒色土の混土。



第79図 48・49号住居跡

48号竪穴住居跡・49号竪穴住居跡（第79・80図、写真図版30・31・121） 189H-36グリッドに位置し、重複関係では、96号竪穴住居跡が最も古く、次に49号竪穴住居跡で、48号竪穴住居跡が最も新しい。平面形態は48号竪穴住居跡が正方形で、49号竪穴住居跡が長方形である。48号竪穴住居跡の床面は堅く平坦であり、中央部から西壁付近にかけて焼土と灰が厚く分布している。残存する壁高は約15cmで、緩やかに立ち上がる。明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていないが、掘り方で大小の楕円形～円形の床下土坑とピットが検出されており、相当するかもしれない。遺物は土師器の暗文土器や須恵器の坏、羽釜、置き竈などが出土している。両竪穴住居跡共に、カマドは東壁の南東隅に位置する。住居の廃棄時期は遺物から48号竪穴住居跡が11世紀前半、49号竪穴住居跡も11世紀前半と考えられる。

50号竪穴住居跡（第81図、写真図版31） 187H-37グリッドに位置し、重複関係では、50号竪穴住居跡の方が古く、16号竪穴住居跡と17号竪穴住居跡が新しい。平面形態は長方形である。確認時点ですでに床面掘り方に達している。残存する壁高は僅かであり、緩やかに立ち上がる。明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていないが、床下土坑が1基検出されている。明確な器形や時期を判断できる遺物はほとんどない。カマドは東壁の中央からやや南寄りに位置し、両袖に構築材としての粘土塊の痕跡が残存する。住居の廃棄時期は17号竪穴住居跡より古いから8世紀中葉以前と考えられる。

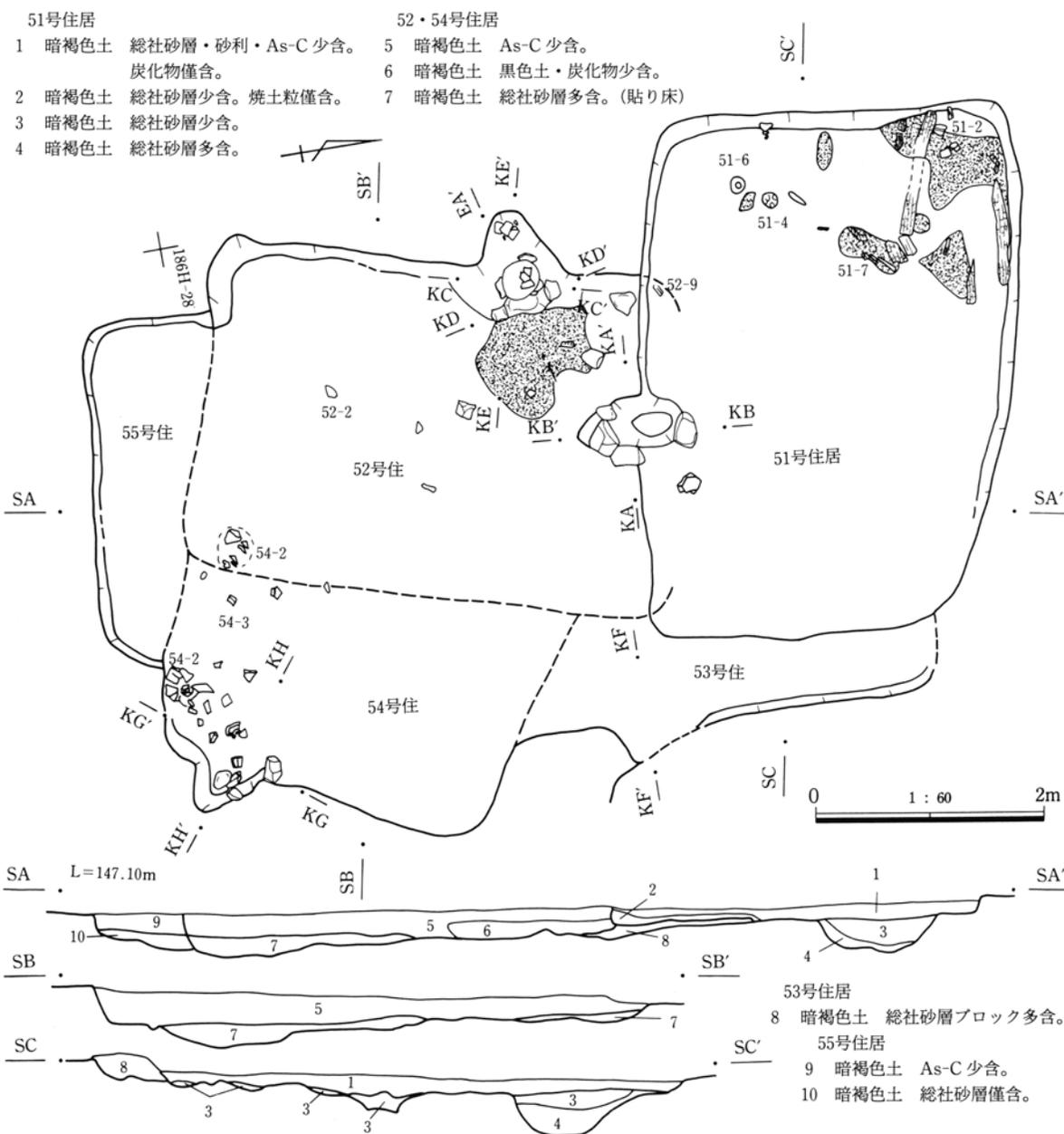


第81図 50号住居跡

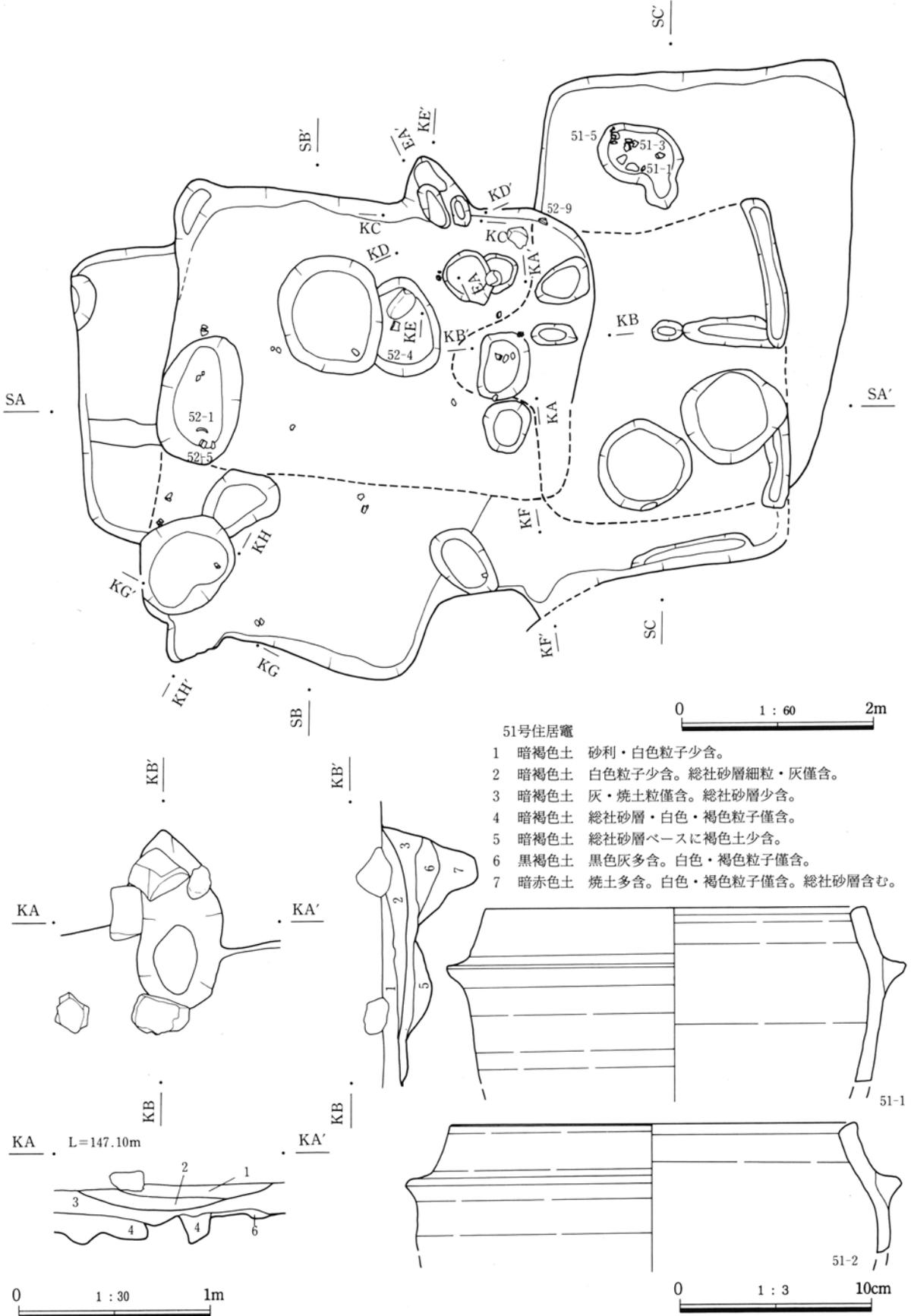
51号竪穴住居跡・52号竪穴住居跡・53号竪穴住居跡・54号竪穴住居跡・55号竪穴住居跡（第82～86図、写真図版31～34・121・122） 186H-28グリッドに位置し、重複関係は55号竪穴住居跡と53号竪穴住居跡が古く、54号竪穴住居跡、52号竪穴住居跡、51号竪穴住居跡の順に新しい。53号竪穴住居跡が55号竪穴住居跡との新旧関係は不明である。平面形態は、51号竪穴住居跡が東西長軸の長方形であるのに対して、52号竪穴住居跡と53号竪穴住居跡、54号竪穴住居跡、55号竪穴住居跡は南北長軸の長方形である。一部に残存する貼り床がしっかりした部分の床面は堅く平坦である。51号竪穴住居跡の北西隅部分を中心に住居建築材と考えられる炭化材が出土しており、一部は樹種分析を実施し、その結果は第5章第3節に収録しているが、モミ属、ヒノキ科、イヌシデ節、コナラ節、クリが検出されている。残存する壁高は約15～20cmで、垂直気味に立ち

第3章 検出された遺構・遺物

上がる。53号竪穴住居跡の北壁と東壁の一部に壁溝が、52号竪穴住居跡に柱穴が2ヶ所、54号竪穴住居跡のカマド右の南東隅に貯蔵穴がそれぞれ検出されており、掘り方から大小の楕円形～円形の床下土坑やピットがいくつか検出されている。遺物は土師器の甕、須恵器の坏や椀、灰釉陶器や緑釉陶器の椀、砥石などが出土しており、鉄鍬が特筆される。51号竪穴住居跡は南壁の中央からやや東寄りに位置し、構築材として石を利用しており、燃烧部手前に天井石が、掘り方で袖部分に埋め込み穴が検出されている。52号竪穴住居跡は西壁の中央からやや北寄りに位置し、構築材として袖石や天井石などが残存している。53号竪穴住居跡は東壁の中央からやや南寄りにその痕跡が残存する。54号竪穴住居跡は東壁の南東隅寄りに位置し、構築材として袖石が残存している。55号竪穴住居跡は54号竪穴住居跡に壊されたものと考えられる。住居の廃棄時期は遺物から51号竪穴住居跡と54号竪穴住居跡が10世紀中葉、52号竪穴住居跡が10世紀前半、53号竪穴住居跡と55号竪穴住居跡がそれ以前であり、遺構確認時の新旧関係の把握と少し異なる。



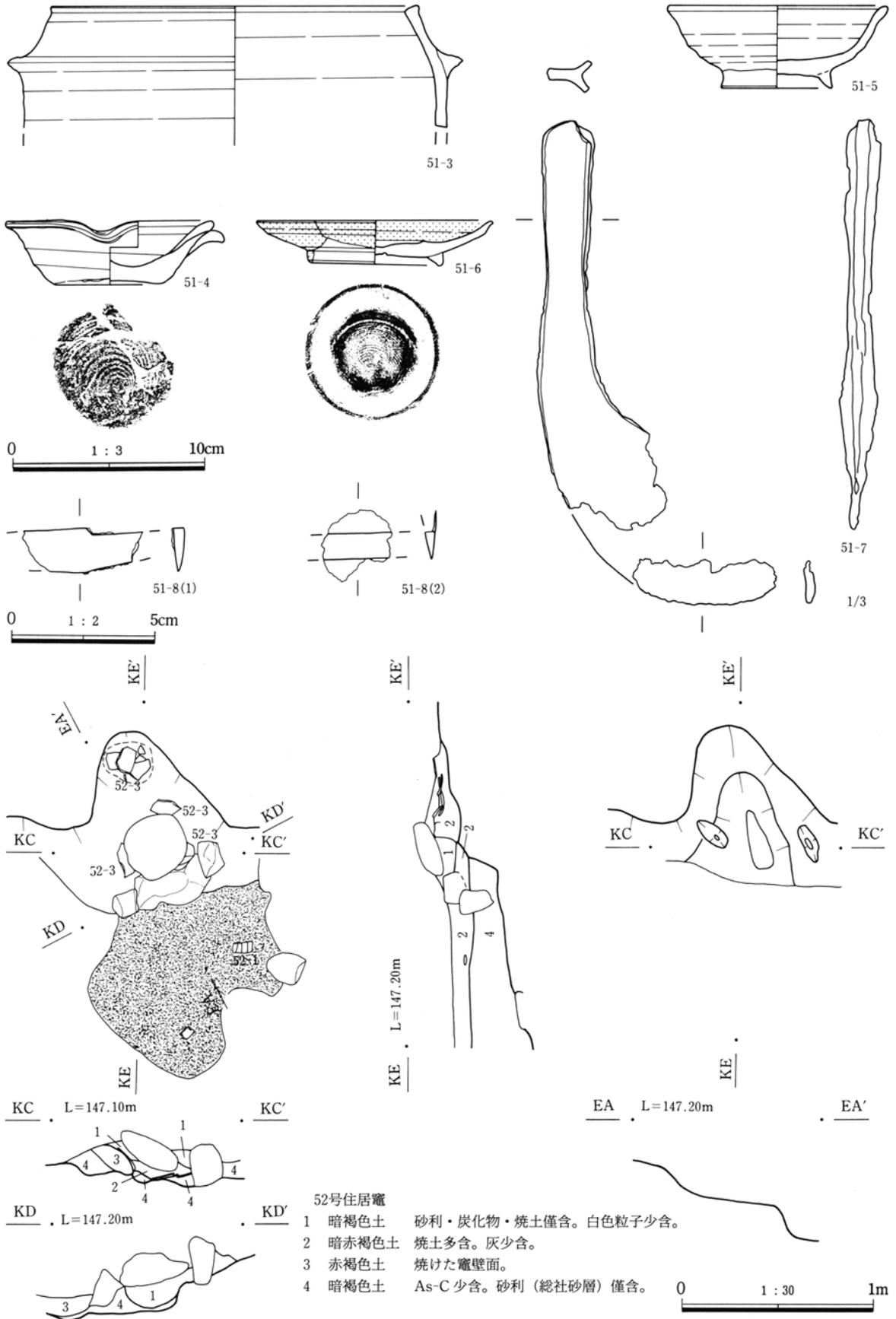
第82図 51・52・53・54・55号住居跡



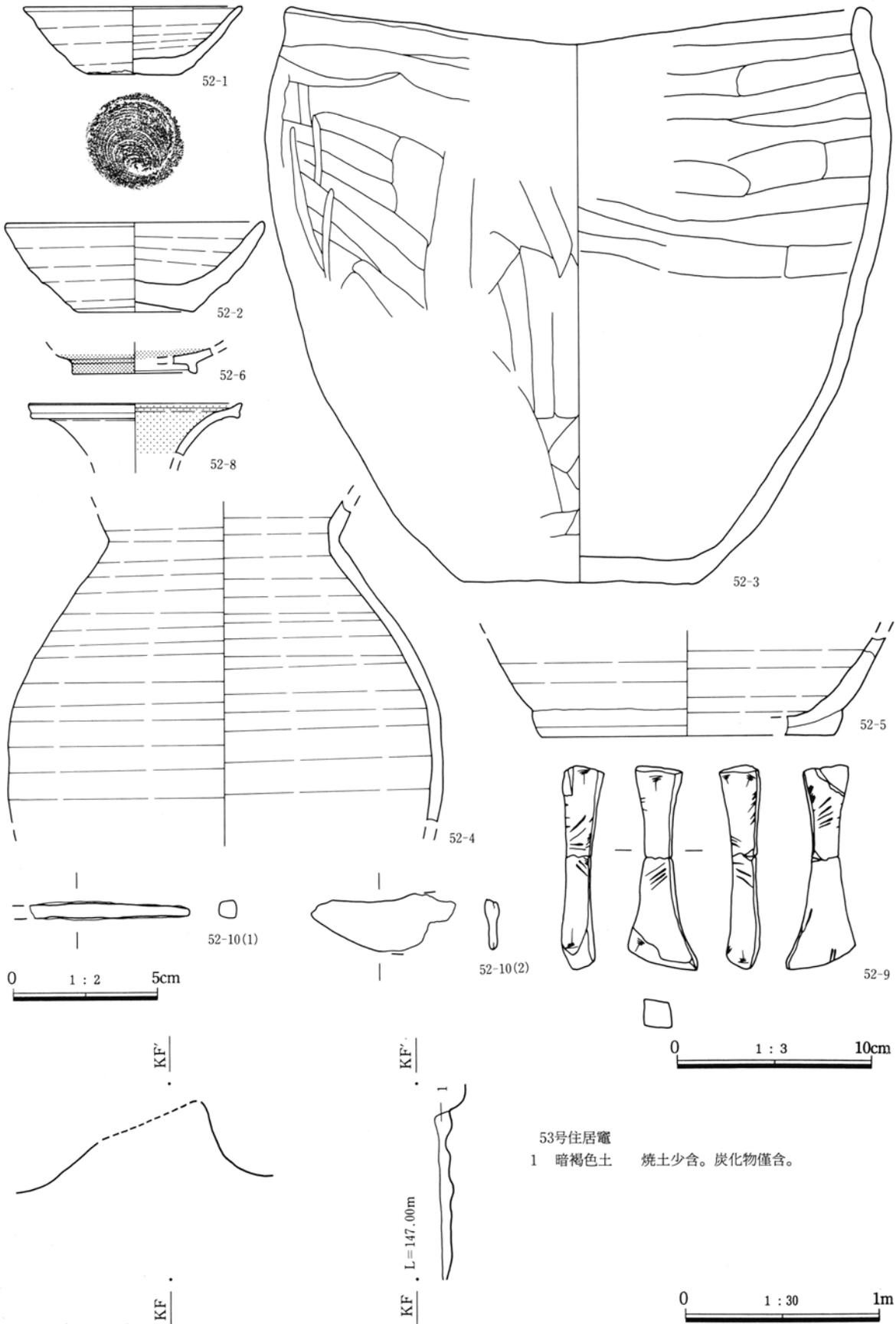
51号住居竈

- 1 暗褐色土 砂利・白色粒子少含。
- 2 暗褐色土 白色粒子少含。総社砂層細粒・灰僅含。
- 3 暗褐色土 灰・焼土粒僅含。総社砂層少含。
- 4 暗褐色土 総社砂層・白色・褐色粒子僅含。
- 5 暗褐色土 総社砂層ベースに褐色土少含。
- 6 黒褐色土 黒色灰多含。白色・褐色粒子僅含。
- 7 暗赤色土 焼土多含。白色・褐色粒子僅含。総社砂層含む。

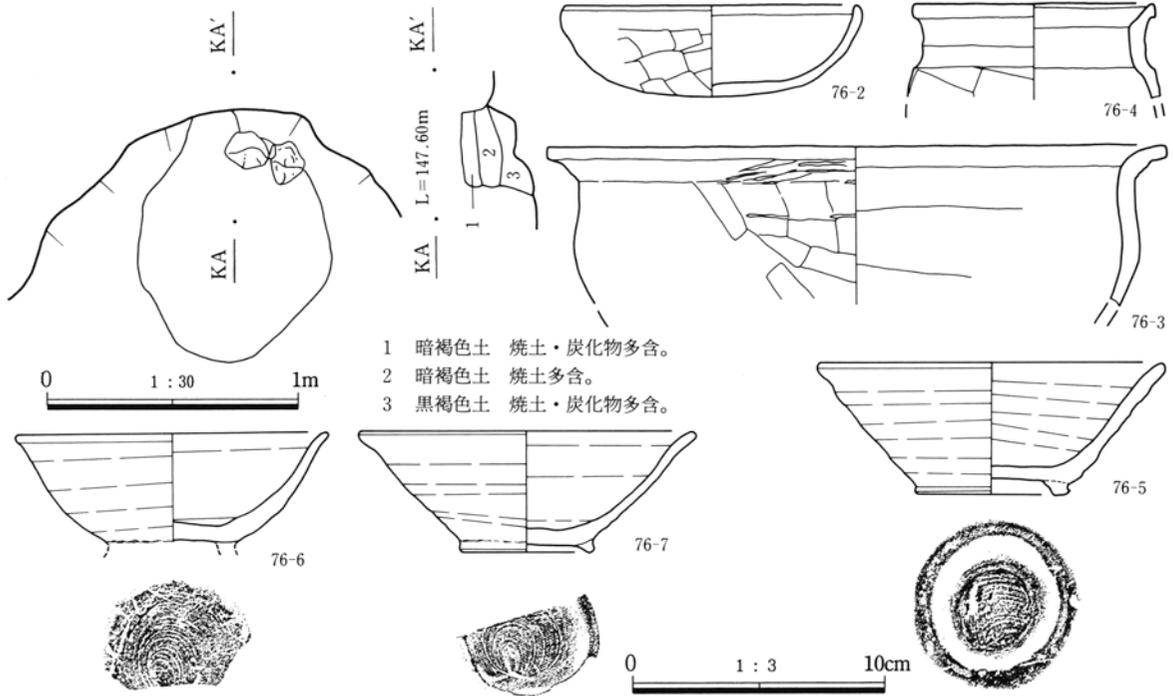
第83図 51・52・53・54・55号住居跡



第84図 51・52号住居跡



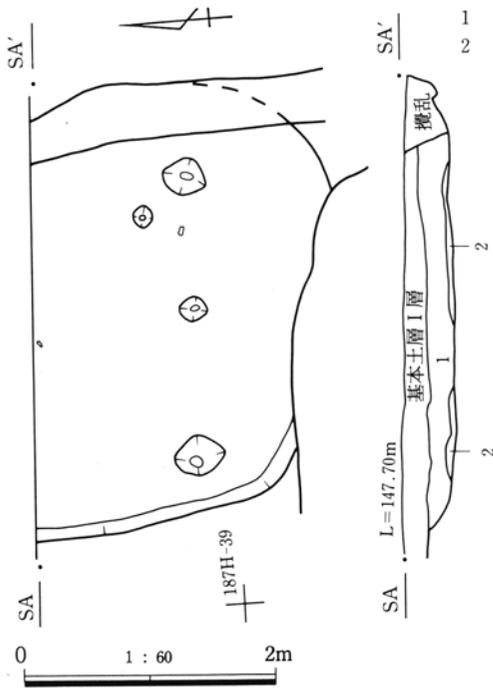
第85図 52・53号住居跡



第88図 76号住居跡

60号竪穴住居跡・76号竪穴住居跡・77号竪穴住居跡・79号竪穴住居跡（第87・88図、写真図版34・35・123・125）179H-29グリッドに位置し、遺構確認時点での重複関係では、76号竪穴住居跡が最も新しく、それぞれの新旧関係は不明だが、60号竪穴住居跡と77号竪穴住居跡と79号竪穴住居跡が古い。また、79号竪穴住居跡が56号竪穴住居跡と重複関係にあり、新旧関係は遺物から79号竪穴住居跡の方が新しい。さらに、60号竪穴住居跡の北西隅部分と79号竪穴住居跡の南西隅部分が、中世と考えられる45号土坑に壊されている。ただ、76号竪穴住居跡と77号竪穴住居跡の北壁がほぼ一致することから、同一住居か、あるいは拡張かもしれない。それぞれの住居の平面形態はおそらくは長方形である。地山を掘り込んだだけの床面は堅く平坦である。残存する壁高は約15~25cmで、緩やかに立ち上がる。明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていないが、掘り方で楕円形~円形の床下土坑がいくつか検出されている。遺物は76号竪穴住居跡を中心に、土師器の坏や甕や鉢、須恵器の坏や碗などが出土している。76号竪穴住居跡のカマドは東壁の南東隅に位置し、60号竪穴住居跡と77号竪穴住居跡と79号竪穴住居跡のカマドは1号道跡や他の住居に壊されたと考えられる。住居の廃棄時期は遺物から76号竪穴住居跡が8世紀中葉、79号竪穴住居跡が10世紀前半で、60号竪穴住居跡と77号竪穴住居跡が不明であり、遺構確認時点の新旧関係と少し異なる。

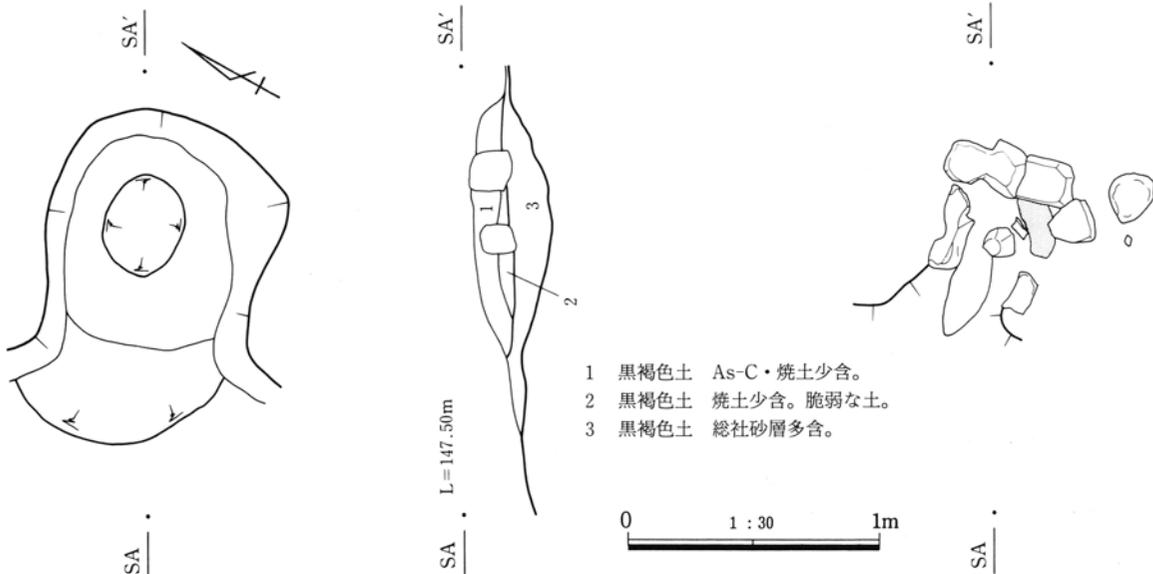
61号竪穴住居跡（第89図、写真図版35）187H-39グリッドに位置し、重複関係では17号竪穴住居跡に南壁の大部分を、28号溝に東壁の大部分をそれぞれ壊されている。さらに、北側半分が調査区域外に延びるために、平面形態は不明である。地山を掘り込んだだけの床面は平坦である。残存する壁高は約20cmで、緩やかに立ち上がる。明確な壁溝、貯蔵穴は検出されていないが、柱穴に相当するピットが2カ所で検出されている。器形や時期の判断できる遺物はほとんど無い。カマドはおそらくは東壁に位置したために壊されたと考えられる。住居の廃棄時期は新旧関係から8世紀中葉以前と考えられる。



- 1 暗褐色土 黒色土主体、As-C 多含。1cm大の礫（総社砂層に含む）多含。
- 2 暗褐色土 黒色土と総社砂層の混土。

62号竪穴住居跡(第90図、写真図版35) 187H-35グリッドに位置し、重複関係では21号竪穴住居跡の南西隅を壊していることから、62号竪穴住居跡の方が新しいが、96号竪穴住居跡との新旧関係は不明である。確認面が浅いために、カマドのみの残存であり、平面形態は不明である。カマドは燃焼部の側面部から煙出し部に断面四角形の切り石などをいくつも用いて構築されている。また、中央に支脚と考えられる石も存在する。燃焼部の様子から本来の住居の床面は西側に広がるものと想定される。住居の廃棄時期は21号竪穴住居跡との新旧関係から8世紀中葉以後と考えられる。

第89図 61号住居跡

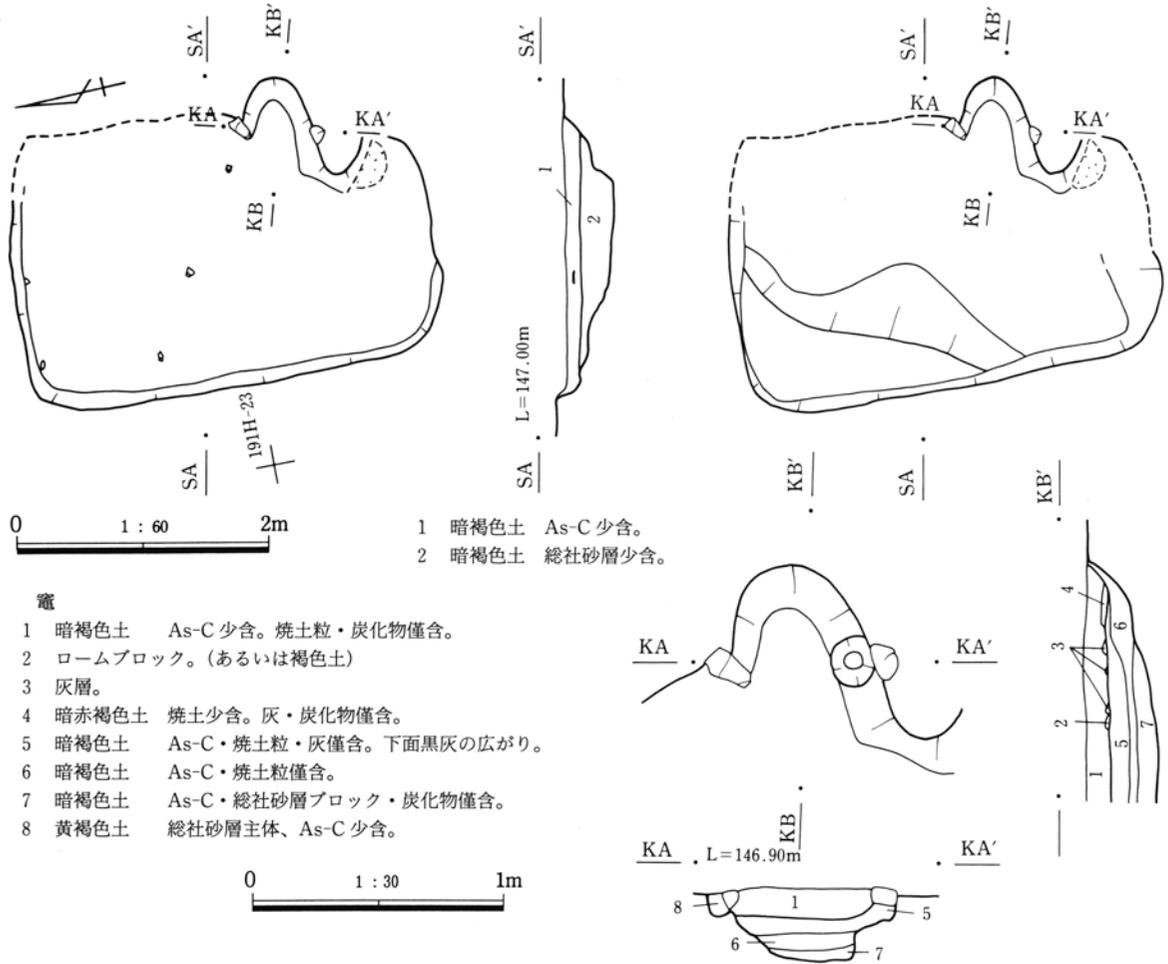


- 1 黒褐色土 As-C・焼土少含。
- 2 黒褐色土 焼土少含。脆弱な土。
- 3 黒褐色土 総社砂層多含。

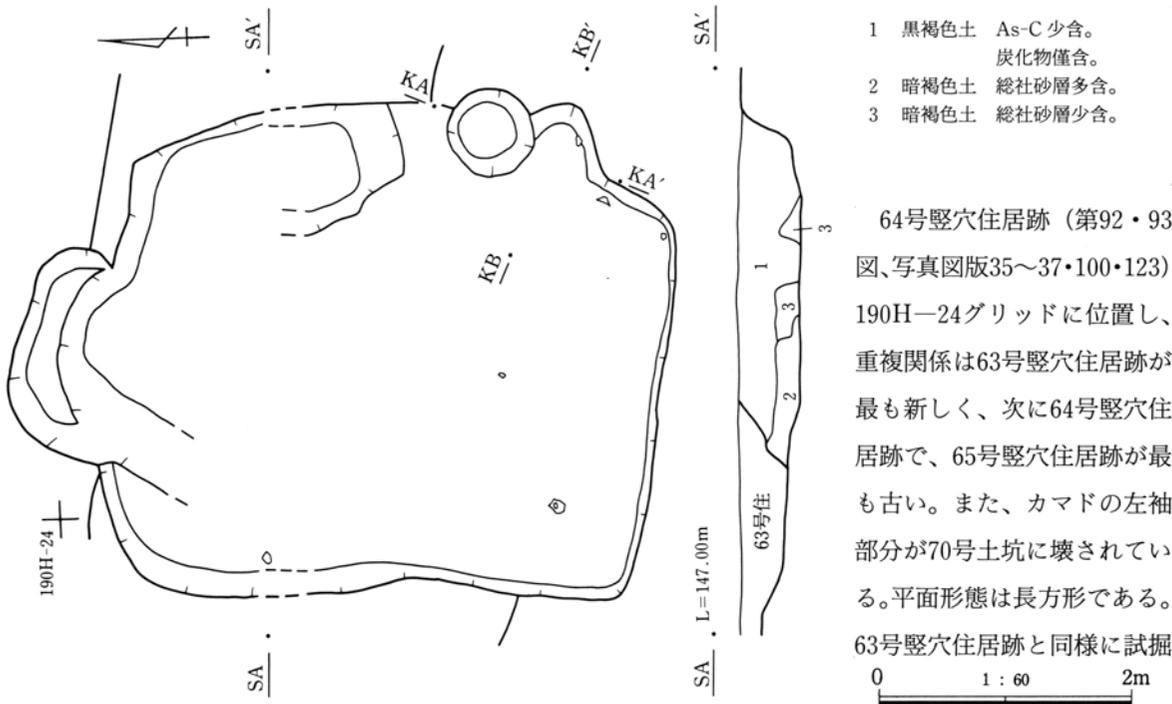
第90図 62号住居跡

63号竪穴住居跡(第91図、写真図版35・36) 191H-23グリッドに位置し、重複関係では、63号竪穴住居跡が最も新しく、次に64号竪穴住居跡で、65号竪穴住居跡が最も古い。重複関係を確認するための試掘トレンチでの土層確認でははっきりしなかったが、遺構確認時のカマドの存在で新旧関係が判明した。平面形態は長方形である。床面はしっかりしておらず、試掘トレンチの土層断面で確認した。確認面が浅いために、残存する壁高は約10cmと浅く、緩やかに立ち上がる。掘り方からも明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。器形や時期の判断できる遺物はほとんど無い。カマドは東壁の中央からやや南寄りに位置し、袖の構築材として石を用いている。住居の廃棄時期は、遺物などからは不明であるが、64号竪穴住居跡との新旧関係から9世紀中葉以後と考えられる。

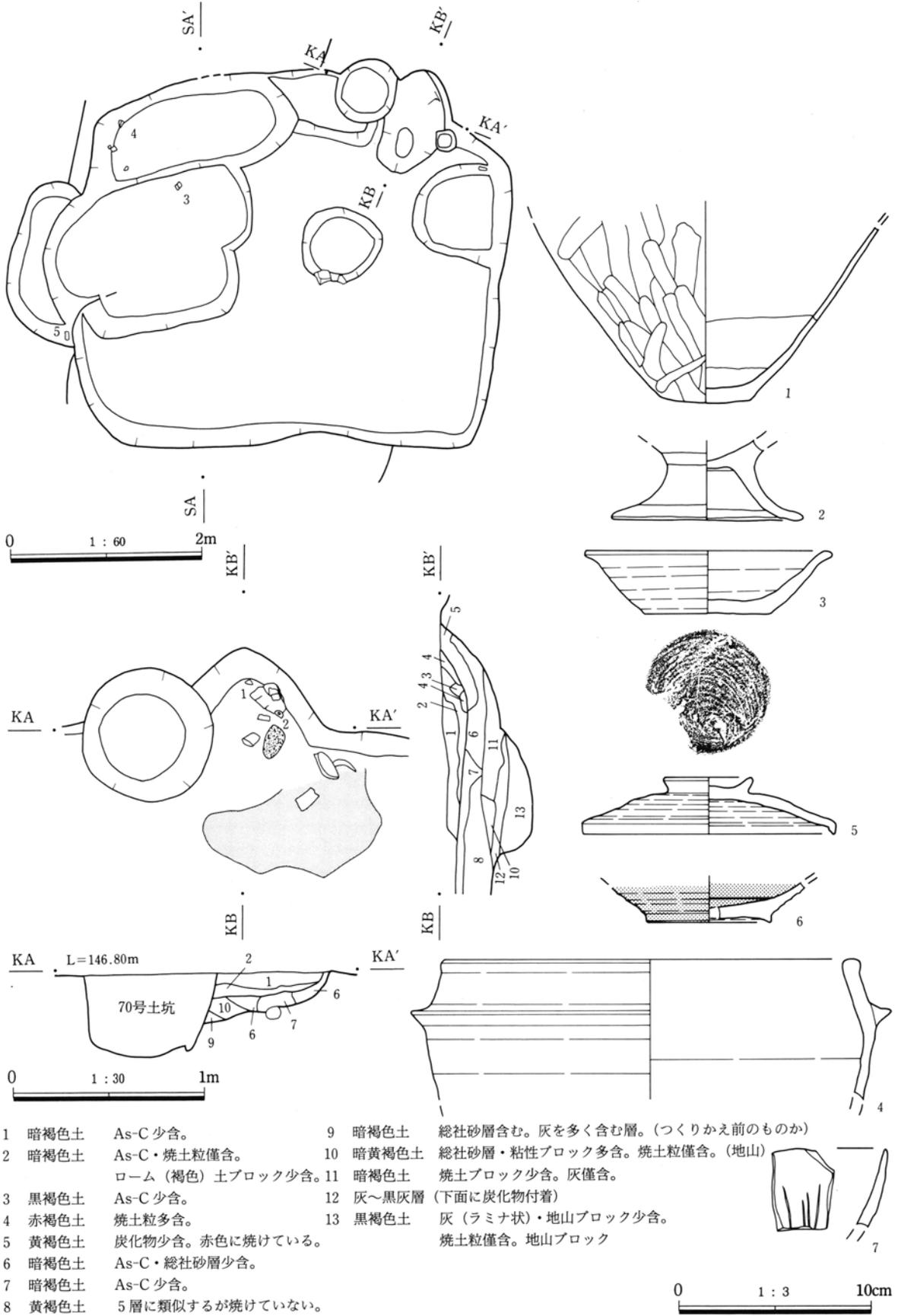
第3章 検出された遺構・遺物



第91図 63号住居跡



第92図 64号住居跡

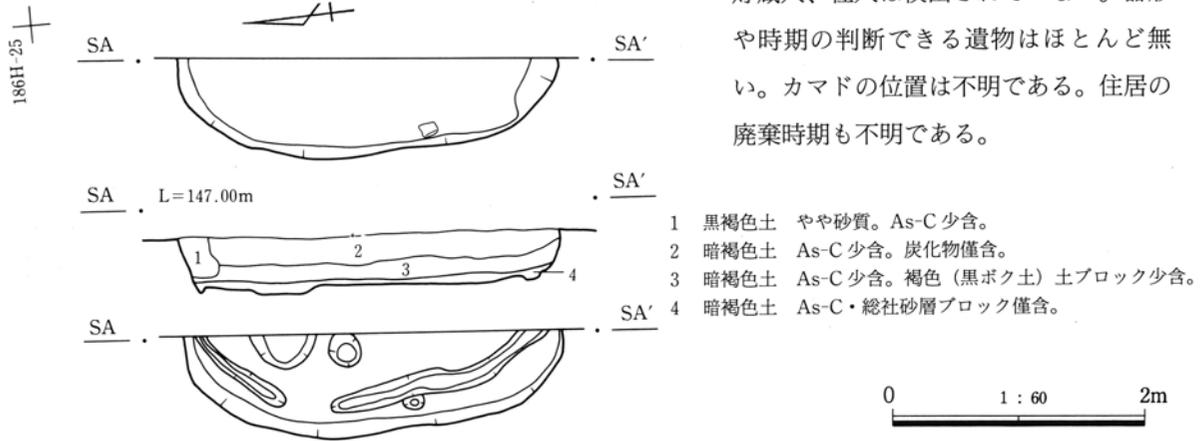


第93図 64号住居跡

世紀中葉以後と考えられる。

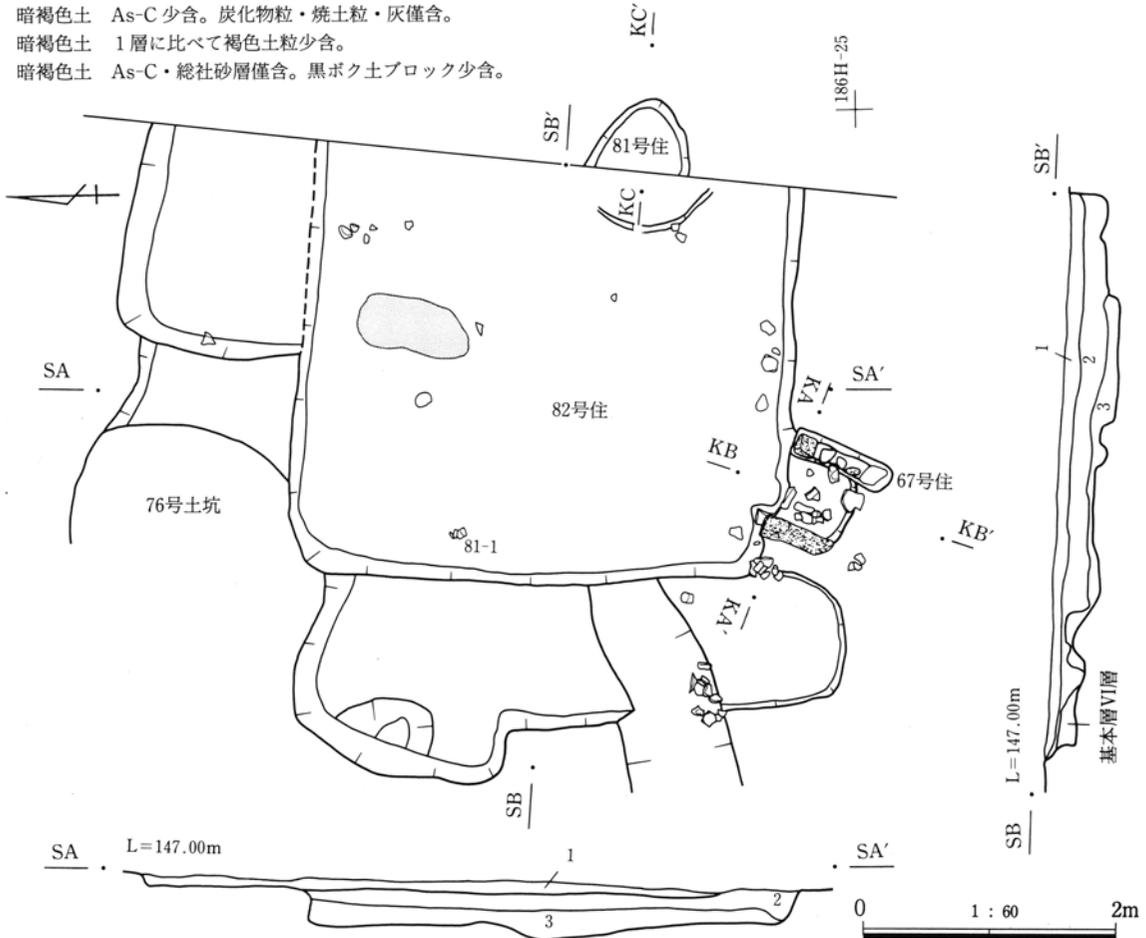
66号竪穴住居跡(第95図、写真図版37) 186H-25グリッドに位置し、東側半分以上が調査区域外に延びるために、重複関係や平面形態は不明である。地山を掘り込んだだけの床面は堅く平坦である。残存する壁高は約40cmと深く、直立気味に立ち上がる。掘り方で床下土坑と共に壁溝が西壁を中心に検出されているが、

貯蔵穴、柱穴は検出されていない。器形や時期の判断できる遺物はほとんど無い。カマドの位置は不明である。住居の廃棄時期も不明である。

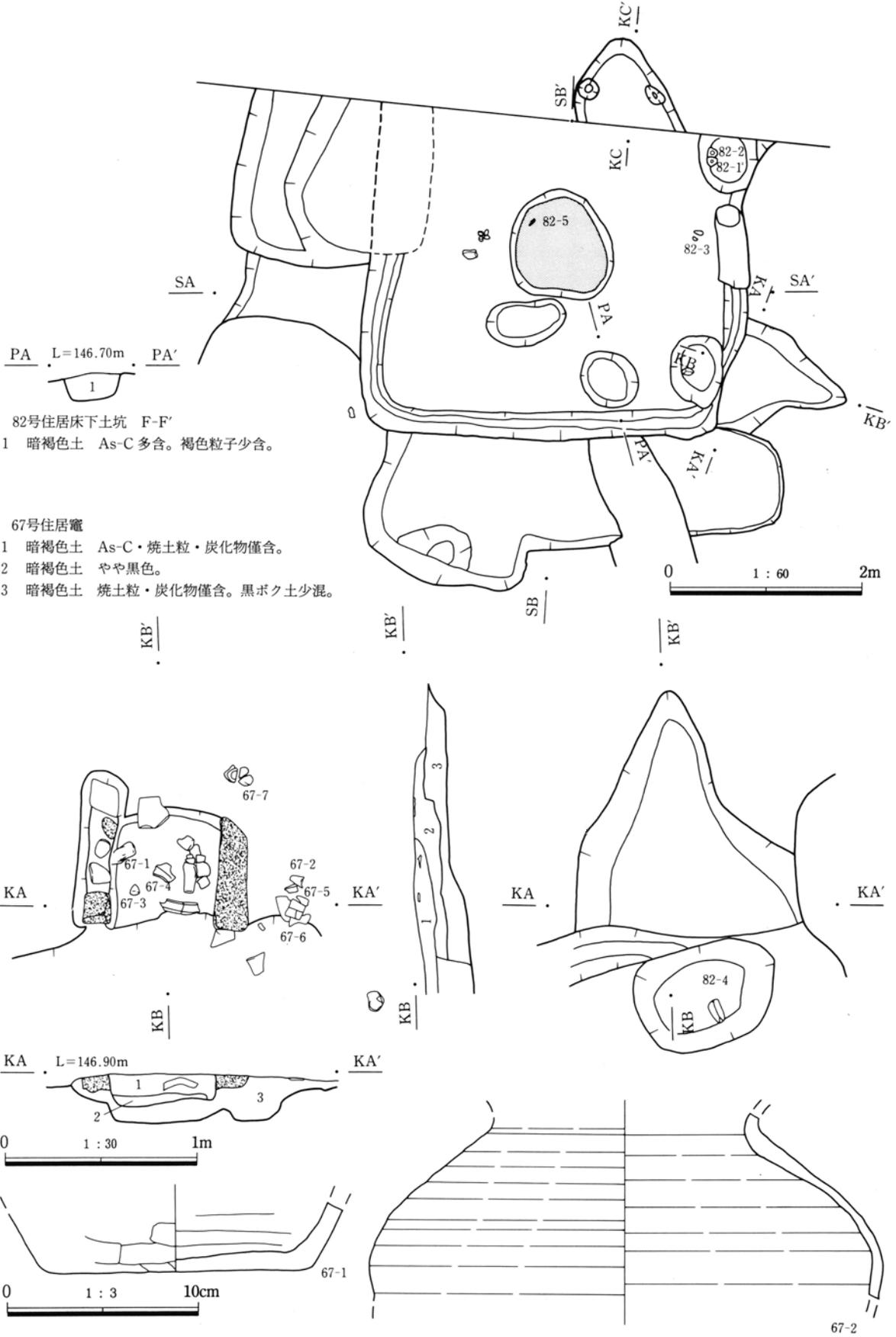


第95図 66号住居跡

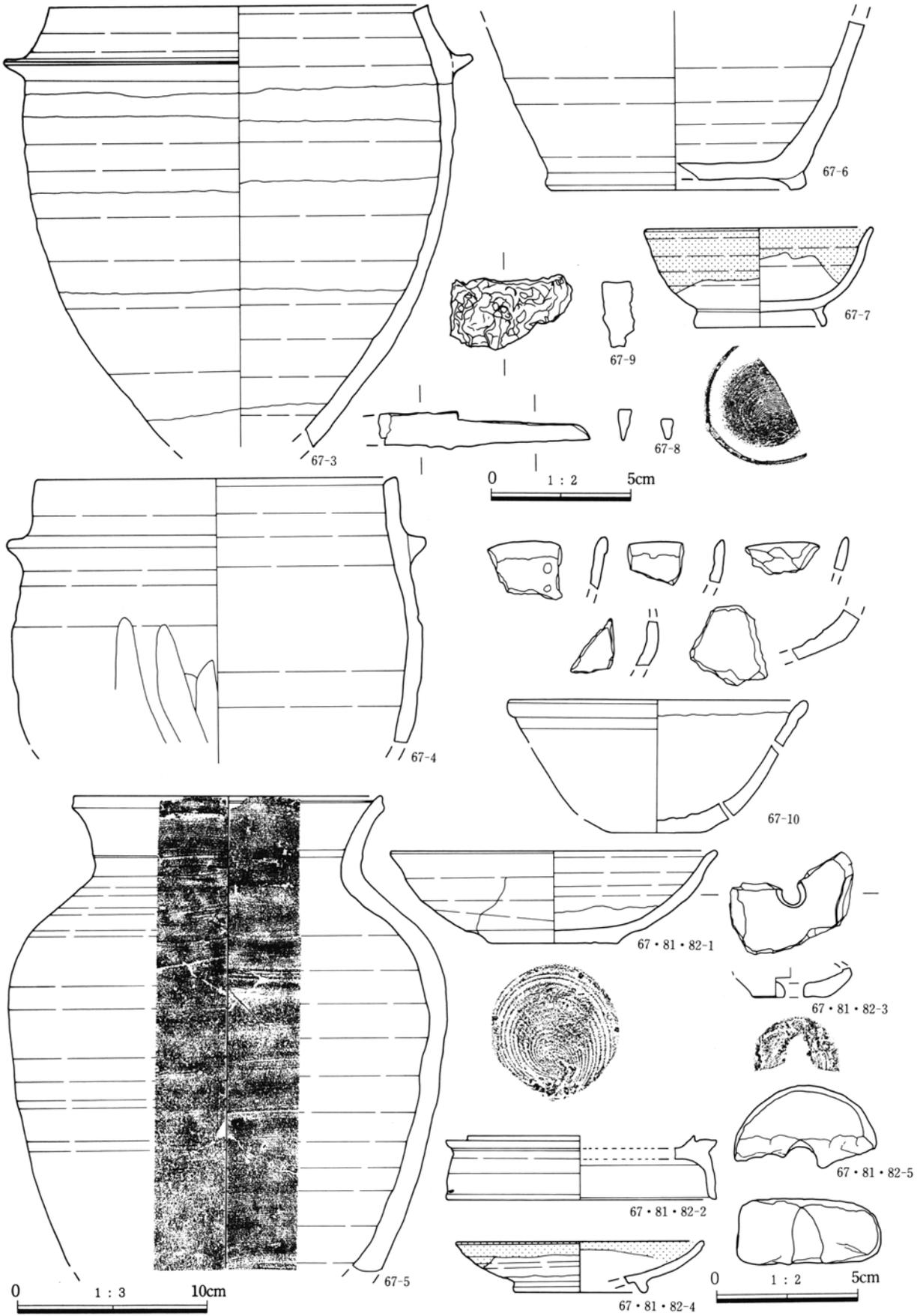
- 1 暗褐色土 As-C 少含。炭化物粒・焼土粒・灰僅含。
- 2 暗褐色土 1層に比べて褐色土粒少含。
- 3 暗褐色土 As-C・総社砂層僅含。黒ボク土ブロック少含。



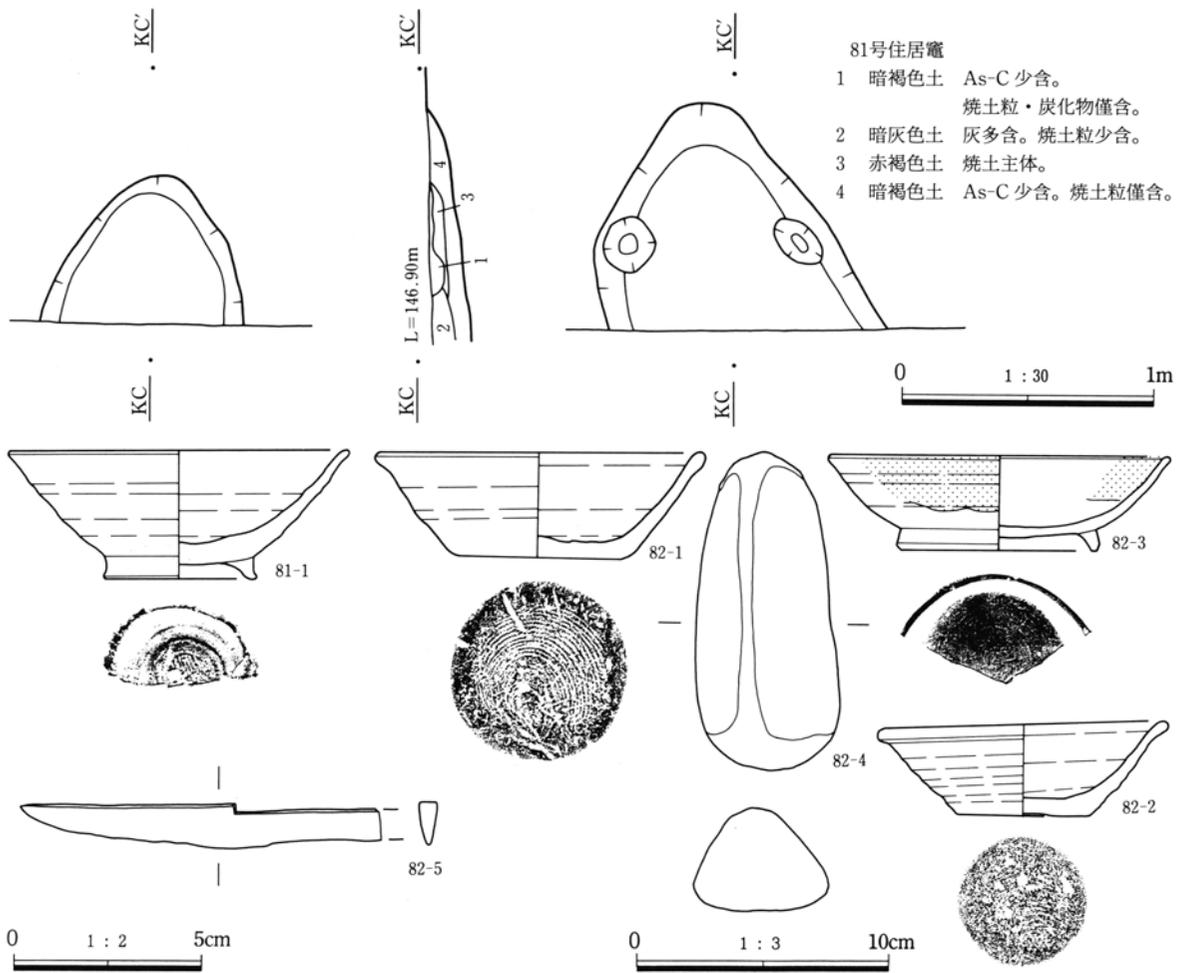
第96図 67・81・82号住居跡



第97図 67・81・82号住居跡



第98図 67、67・81・82号住居跡



81号住居竈

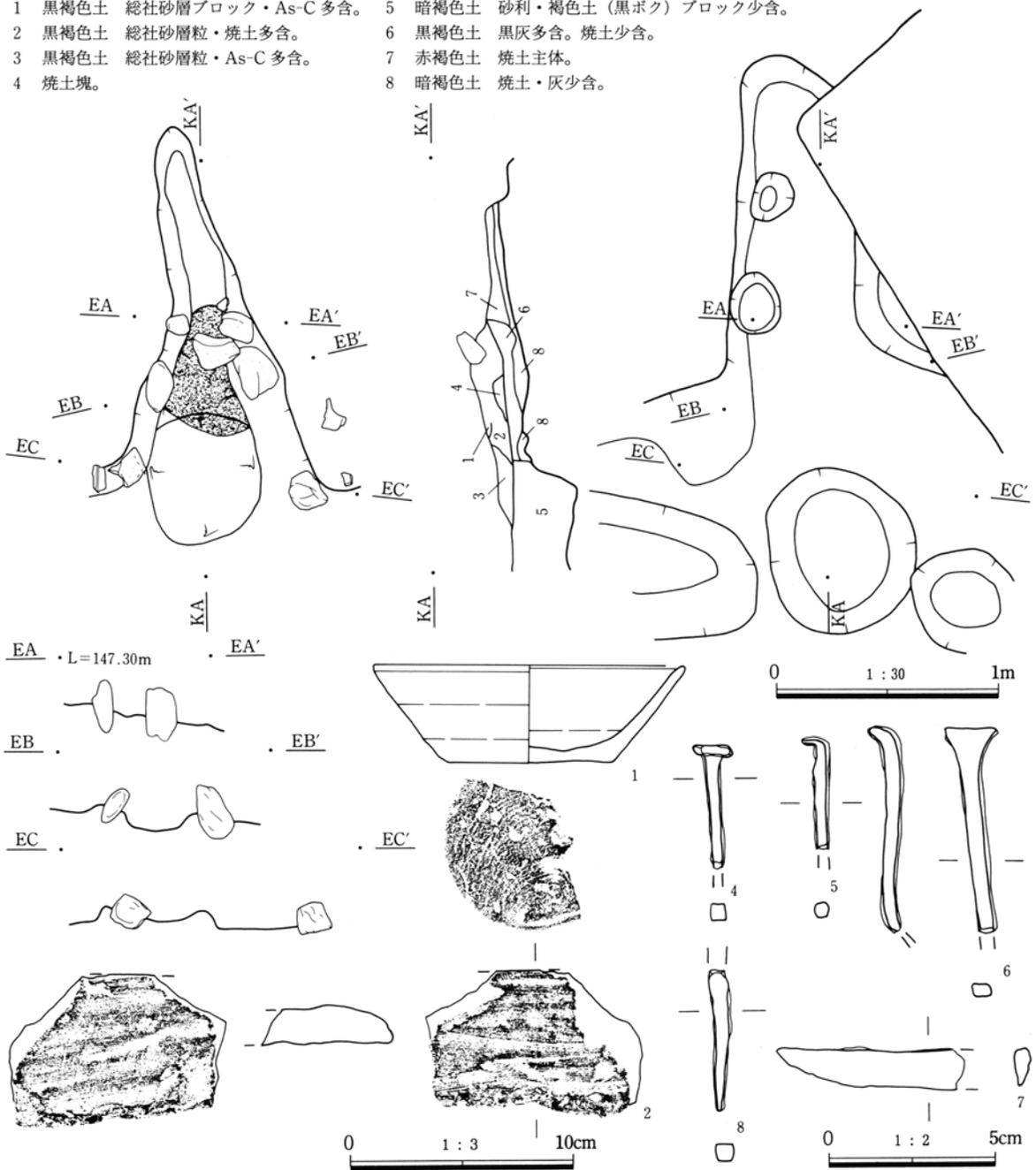
- 1 暗褐色土 As-C 少含。
焼土粒・炭化物僅含。
- 2 暗灰色土 灰多含。焼土粒少含。
- 3 赤褐色土 焼土主体。
- 4 暗褐色土 As-C 少含。焼土粒僅含。

第99図 81・82号住居跡

67号竪穴住居跡・81号竪穴住居跡・82号竪穴住居跡（第96～99図、写真図版37・38・101・123・125）187 H-25グリッドに位置し、遺構確認時の重複関係では、81号竪穴住居跡が最も新しく、次に67号竪穴住居跡で、82号竪穴住居跡が最も古い。さらに、33号溝が住居に壊されている。平面形態は、東側部分が調査区域外に延びるために3軒共不明である。土層確認用の試掘トレンチではしっかりと確認できなかったものの、残存する床面部分はほぼ平坦である。確認面が浅いために81号竪穴住居跡の残存する壁高は約10cmで、緩やかに立ち上がる。それに対して、67号竪穴住居跡の床は深く、壁高は25～30cmである。67号竪穴住居跡の北壁から西壁を巡り、南壁にかけて壁溝が検出されているが、明確な貯蔵穴、柱穴は検出されていない。だが、大小の楕円形の床下土坑がいくつか検出されている。遺物は67号竪穴住居跡のカマドを中心に、土師器や須恵器の坏、などが北東隅部分に集中して出土している。特に、内面に銅の付着した須恵器の碗の破片がいくつか出土しており、器形が復元可能である。掘り方で検出された円形の土坑の底面に灰の堆積があることと合わせて、銅に関する工房との関連が想定される。81号竪穴住居跡のカマドは東壁の南東隅に位置する。67号竪穴住居跡のカマドは南壁の南西隅に位置し、両袖から燃焼部の両側面に石や焼けた粘土を構築材として用いている。掘り方の様子から、82号竪穴住居跡の遺物は、あるいは67号竪穴住居跡の遺物かもしれない。住居の廃棄時期は遺物から、67号竪穴住居跡が10世紀で、81号竪穴住居跡は10世紀以後、82号竪穴住居跡はあるいは8世紀と考えられる。

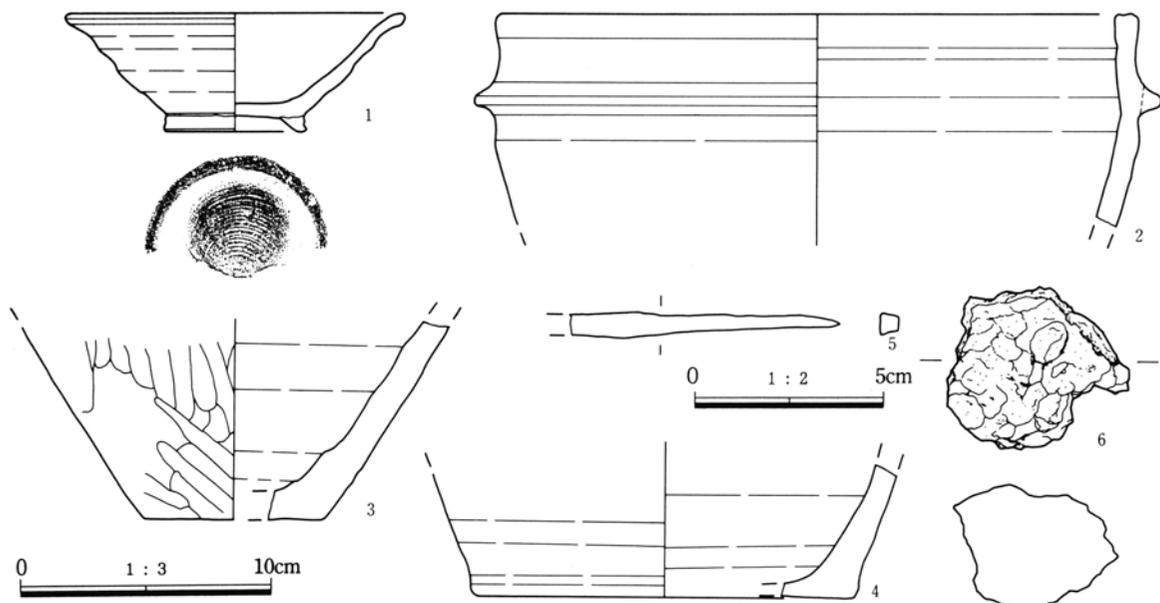
第3章 検出された遺構・遺物

- 1 黒褐色土 総社砂層ブロック・As-C多含。
- 2 黒褐色土 総社砂層粒・焼土多含。
- 3 黒褐色土 総社砂層粒・As-C多含。
- 4 焼土塊。
- 5 暗褐色土 砂利・褐色土（黒ボク）ブロック少含。
- 6 黒褐色土 黒灰多含。焼土少含。
- 7 赤褐色土 焼土主体。
- 8 暗褐色土 焼土・灰少含。

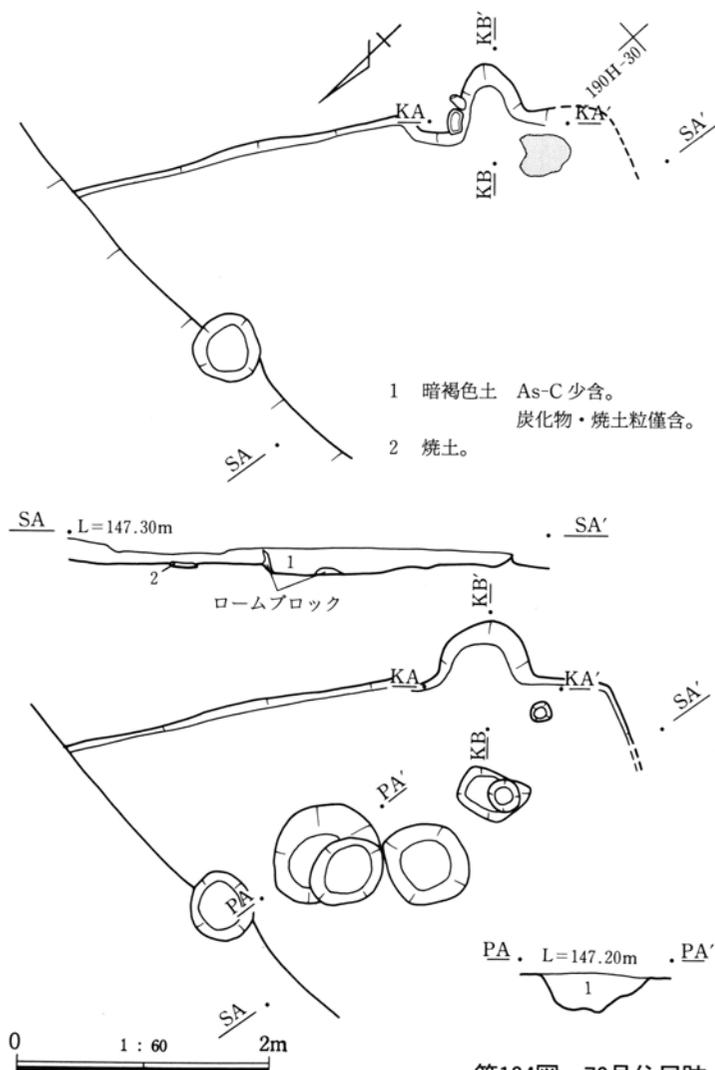


第101図 68号住居跡

68号竪穴住居跡（第100～101図、写真図版39・40・124） 188H-30グリッドに位置し、重複関係では68号竪穴住居跡が最も古く、次に69号竪穴住居跡、中世以後と考えられる47号土坑が最も新しい。平面形態は長方形である。床面は堅く平坦である。確認面が浅く、残存する壁高は約10cmで、緩やかに立ち上がる。掘り方で楕円形～円形の床下土坑が検出されているが、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。遺物は須恵器の坏、置き竈、鉄釘などが北東隅部分に集中して出土している。カマドは東壁の南東隅に位置し、袖から燃焼部にかけての構築材として石を用いている。また、煙道部が長く南東方向に延びている。住居の廃棄時期は遺物から9世紀と考えられる。



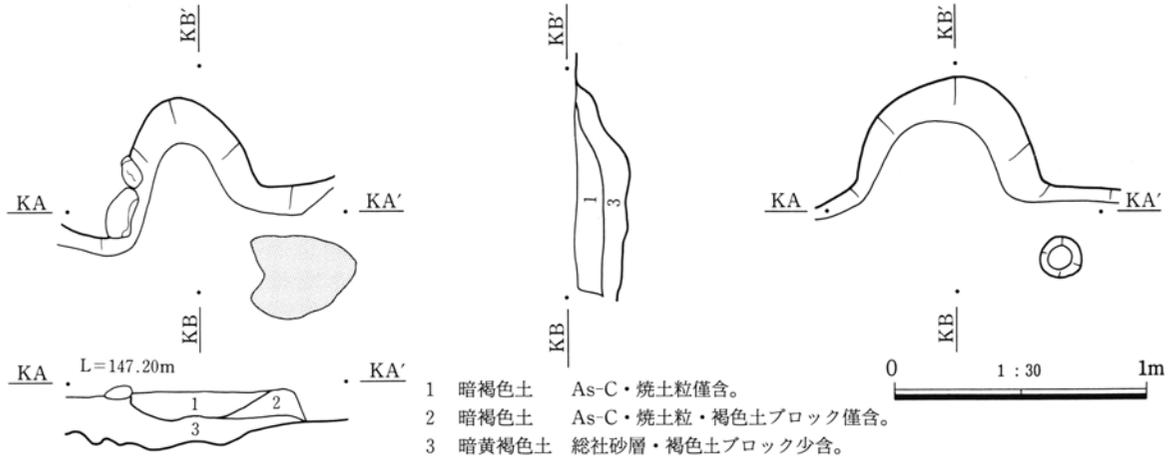
第103図 69号住居跡



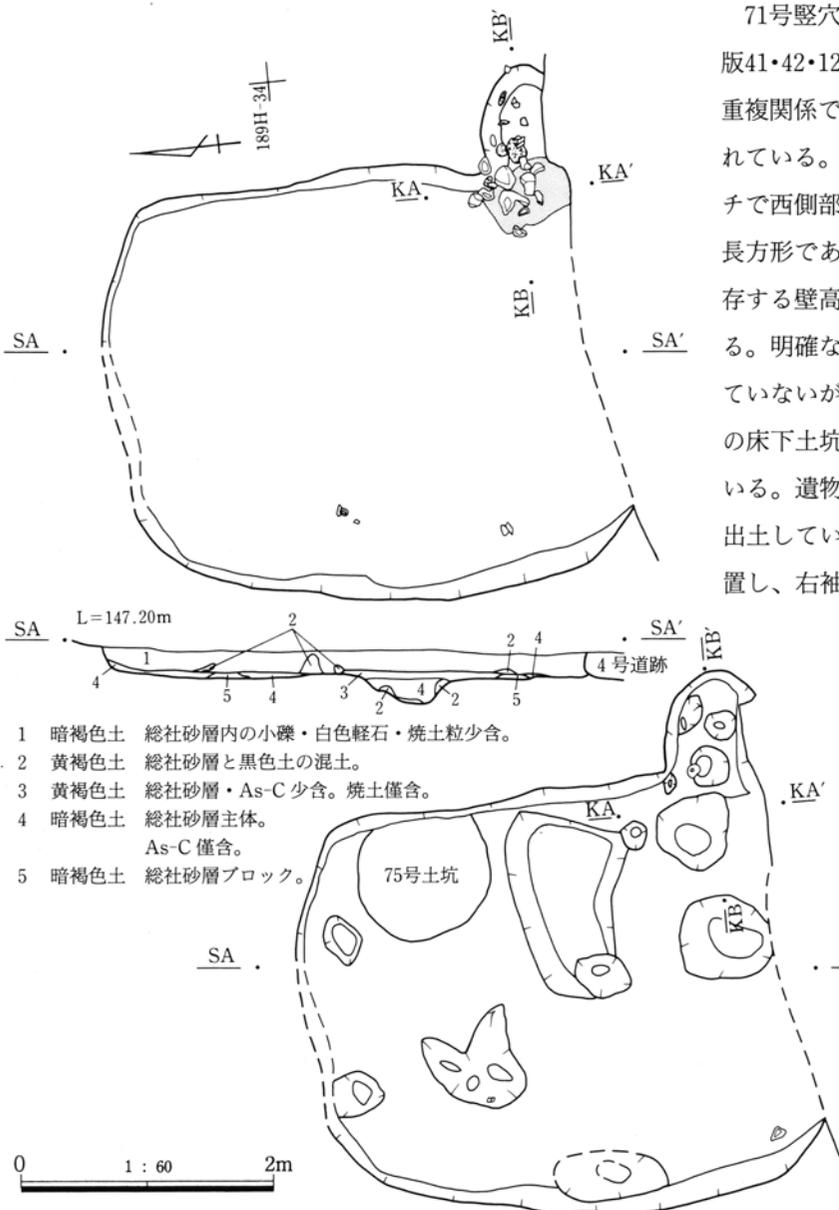
第104図 70号住居跡

70号竪穴住居跡(第104・105図、写真図版39・41) 190H-30グリッドに位置し、重複関係では、4号道跡に北壁部分を、試掘トレンチにより西側半分を壊されている。確認面が浅いために南壁から西壁にかけて不明確であるが、平面形態はおそらくは長方形と考えられる。床面はしっかりしておらず、部分的に残存するだけである。残存する壁高は約10cmと浅く、緩やかに立ち上がる。明確な壁溝、貯蔵穴は検出されていないが、掘り方で大小の楕円形～円形の床下土坑がいくつか検出されている。明確に形状や時期が判定できる遺物はほとんど無い。カマドは東壁の南東隅寄りに位置し、住居の廃棄時期は住居形態から10世紀の可能性はある。

住居内土坑 D-D'
1 暗褐色土(黒色強い) As-C・黒ボク土少含。



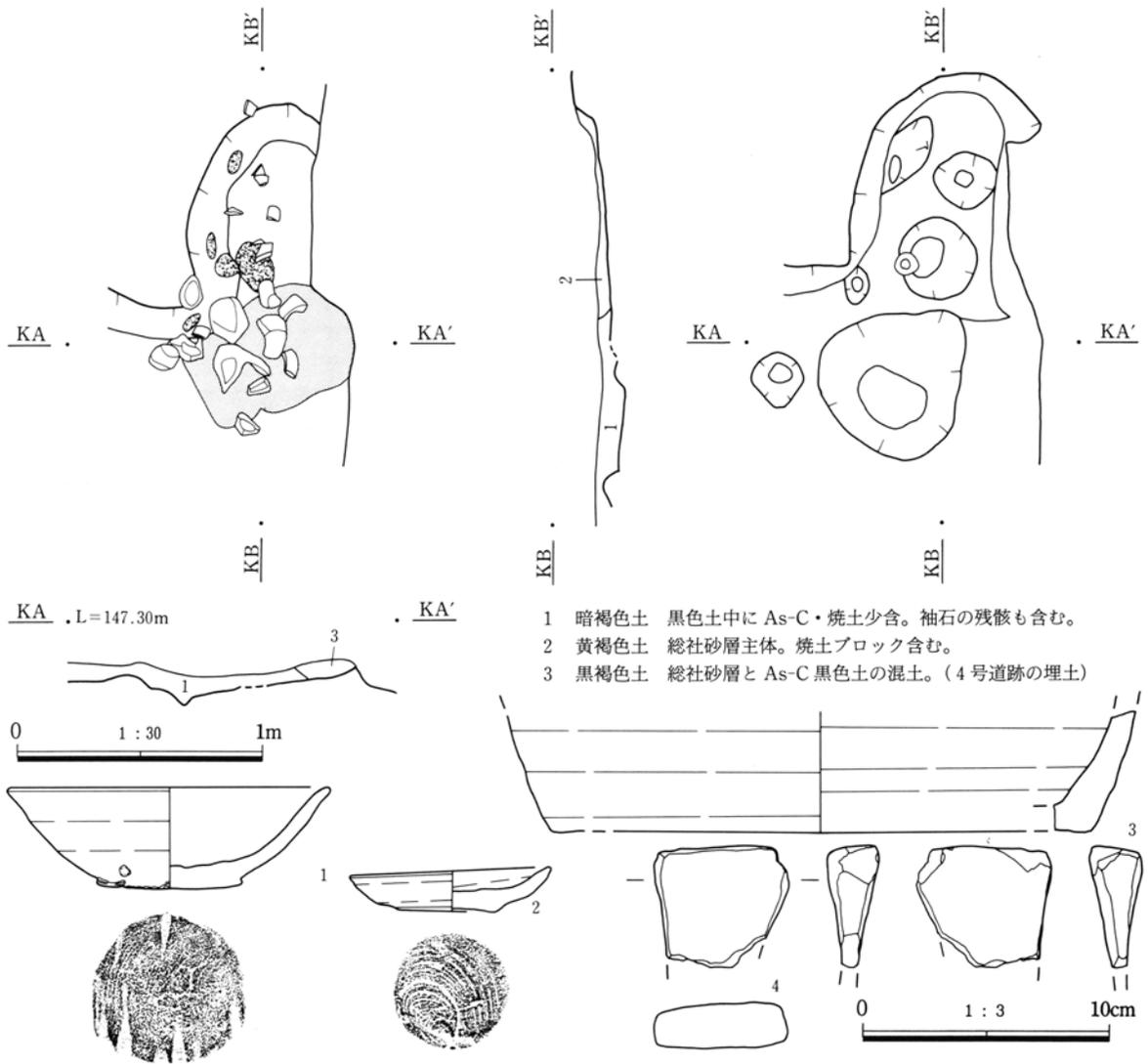
第105図 70号住居跡



第106図 71号住居跡

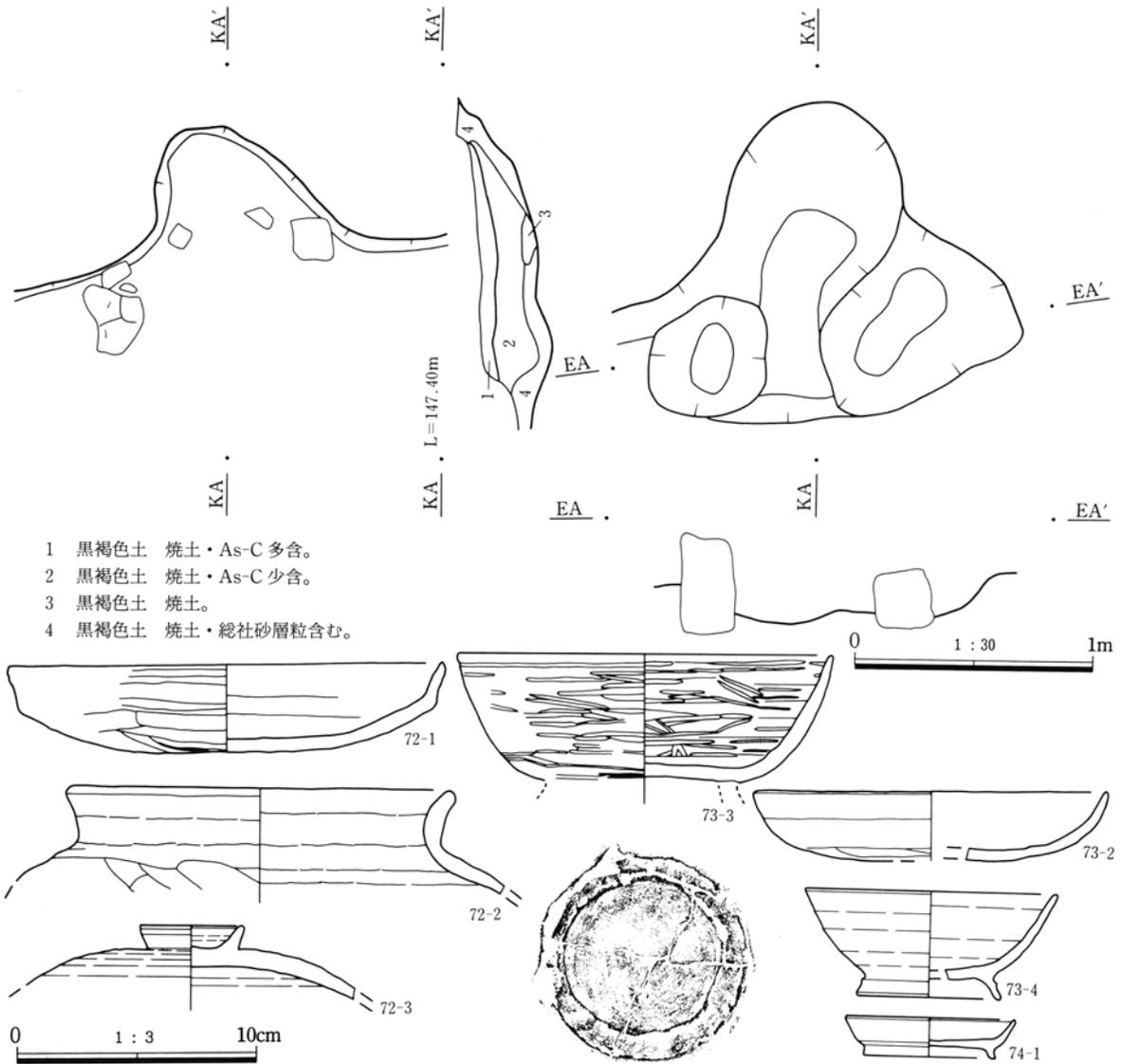
71号竪穴住居跡（第106・107図、写真図版41・42・124）190H-33グリッドに位置し、重複関係では、4号道跡に南壁部分を壊されている。また、試掘調査時の試掘トレンチで西側部分が壊されている。平面形態は長方形である。床面は堅く平坦である。残存する壁高は約15cmで、緩やかに立ち上がる。明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていないが、掘り方に大小の楕円形～円形の床下土坑とピットがいくつか検出されている。遺物は須恵器の坏や甕、砥石などが出土している。カマドは東壁の南東隅に位置し、右袖部分が4号道跡に壊されている

が、左袖に構築材として石を使用している。おそらくは右袖にも使用していたものと考えられる。また、掘り方から支脚を埋め込む穴が検出されている。住居の廃棄時期は遺物から11世紀と考えられる。



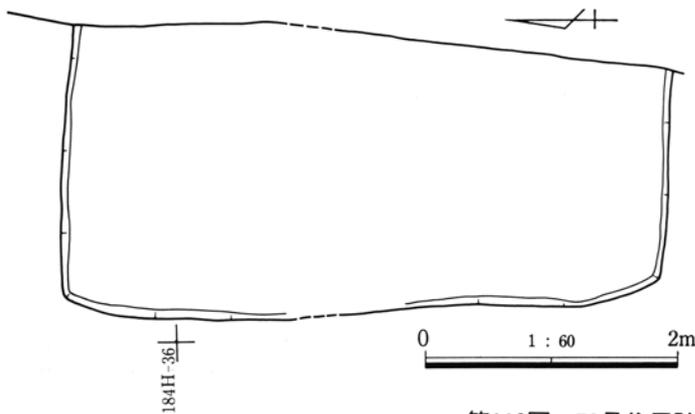
第107図 71号住居跡

72号竪穴住居跡・73号竪穴住居跡・74号竪穴住居跡（第108・109図、写真図版42～44・125）186H-35グリッドに位置し、重複関係は72号竪穴住居跡と74号竪穴住居跡と73号竪穴住居跡の順で新しい。また、17号竪穴住居跡と21号竪穴住居跡と78号竪穴住居跡が、74号竪穴住居跡よりも新しいが、73号竪穴住居跡よりは古い。平面形態では72号竪穴住居跡は不明であるが、73号竪穴住居跡は東西長軸の長方形、74号竪穴住居跡は南北長軸の長方形である。床面は堅く平坦である。確認面が浅いために残存する壁高は約10cmで、緩やかに立ち上がる。掘り方で大小の楕円形～円形の床下土坑やピットが74号竪穴住居跡の南西隅付近から検出されているが、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。遺物は72号竪穴住居跡の掘り方の北東隅部分などから、土師器の坏と甕、須恵器の坏と蓋、皿などが出土している。73号竪穴住居跡のカマドは東壁の中央からやや南寄りに位置し、両袖に構築材として石を利用している。72号竪穴住居跡のカマドは73号竪穴住居跡に、73号竪穴住居跡のカマドは78号竪穴住居跡に、それぞれがおそらく壊されたものと考えられる。住居の廃棄時期は遺物から、72号竪穴住居跡が8世紀前半、73号竪穴住居跡が9世紀前半と考えられる。74号竪穴住居跡は17号竪穴住居跡と21号竪穴住居跡との重複関係から8世紀中葉以前と考えられる。



第109図 72・73・74号住居跡

78号竪穴住居跡(第110図、写真図版42・43) 184H-36グリッドに位置し、確認面が浅いために、東側半分の壁や床が不明確で、平面形態は不明である。重複関係は85号竪穴住居跡が古く、78号竪穴住居跡が新しい。残存する壁高も僅かで、緩やかに立ち上がる。掘り方もほとんど無く、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出され



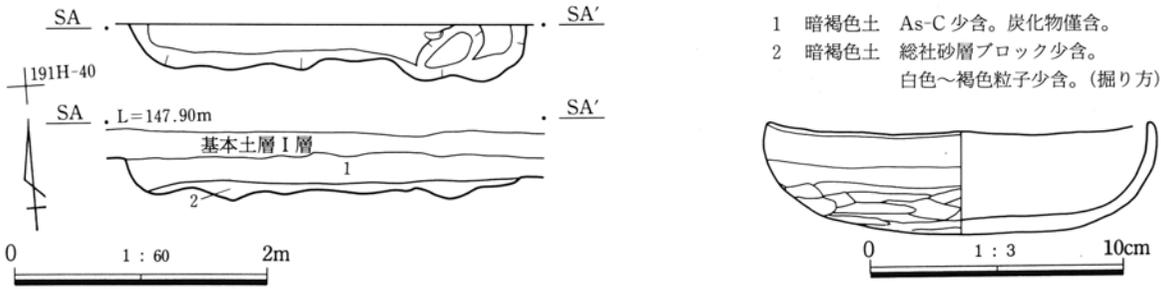
第110図 78号住居跡

れていない。明確に器形や時期が判明できる遺物はほとんど無い。カマドはおそらくは東壁に位置が想定されるが、耕作などの攪拌や遺構確認時の確認面の浅さから消滅したものと考えられる。住居の廃棄時期は不明である。

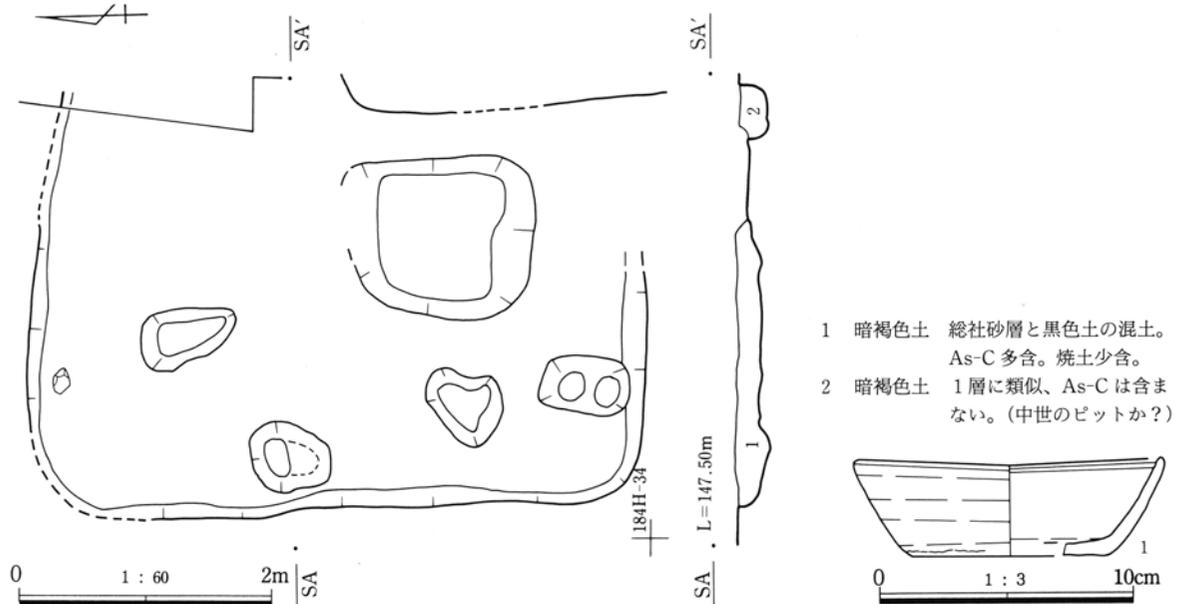
83号竪穴住居跡(第111図、写真図版44・125) 191H-40グリッドに位置し、大部分が調査区域外に延びるために、重複関係や平面形態は不明である。残存する壁高は15cmで、緩やかに立ち上がる。ピットが南西隅から検出されているが、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。遺物は土師器の坏などが出土している。カマドはおそらくは東壁に位置し、住居の廃棄時期は遺物から8世紀と考えられる。

85号竪穴住居跡(第112図、写真図版42・43・126) 184H-34グリッドに位置し、重複関係は85号竪穴住居跡が古く、78号竪穴住居跡が新しい。また、奈良時代と考えられる2号掘立柱建物跡を壊している。平面形態は長方形である。残存する壁高は約15cmで、緩やかに立ち上がる。明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。遺物は須恵器の坏などが出土している。カマドは東壁に位置し、住居の廃棄時期は遺物から8世紀後半と考えられる。

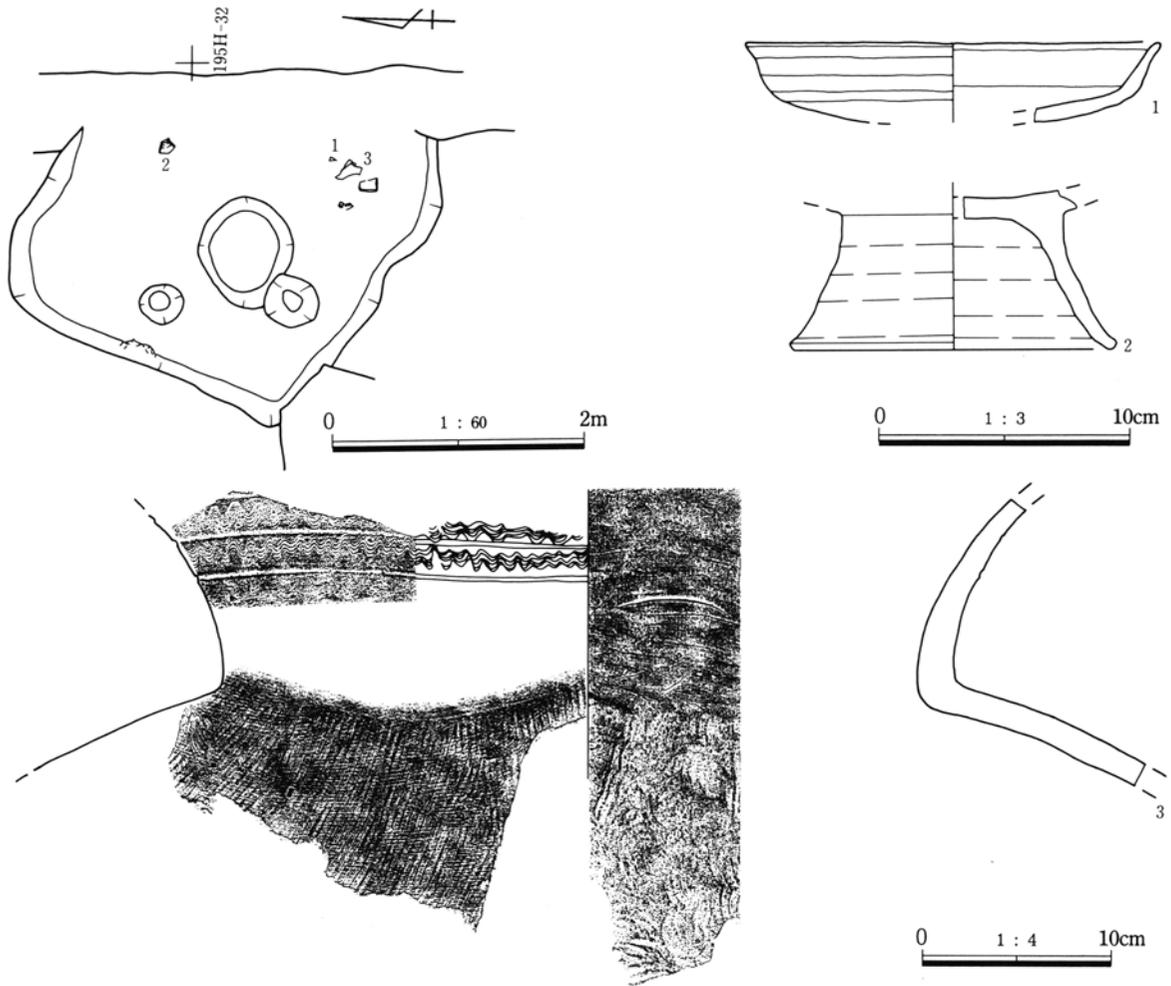
86号竪穴住居跡(第113図、写真図版44・126) 195H-32グリッドに位置し、重複関係は21号溝に壊されている。平面形態は正方形である。残存する壁高は浅く、緩やかに立ち上がる。掘り方で円形の床下土坑とピットが検出されているが、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。遺物は土師器の坏や須恵器の足高高台碗、甕などが北東隅部分に集中して出土している。カマドはおそらくは東壁に位置したために、溝に壊されたものと考えられる。住居の廃棄時期は遺物から10世紀と考えられる。



第111図 83号住居跡



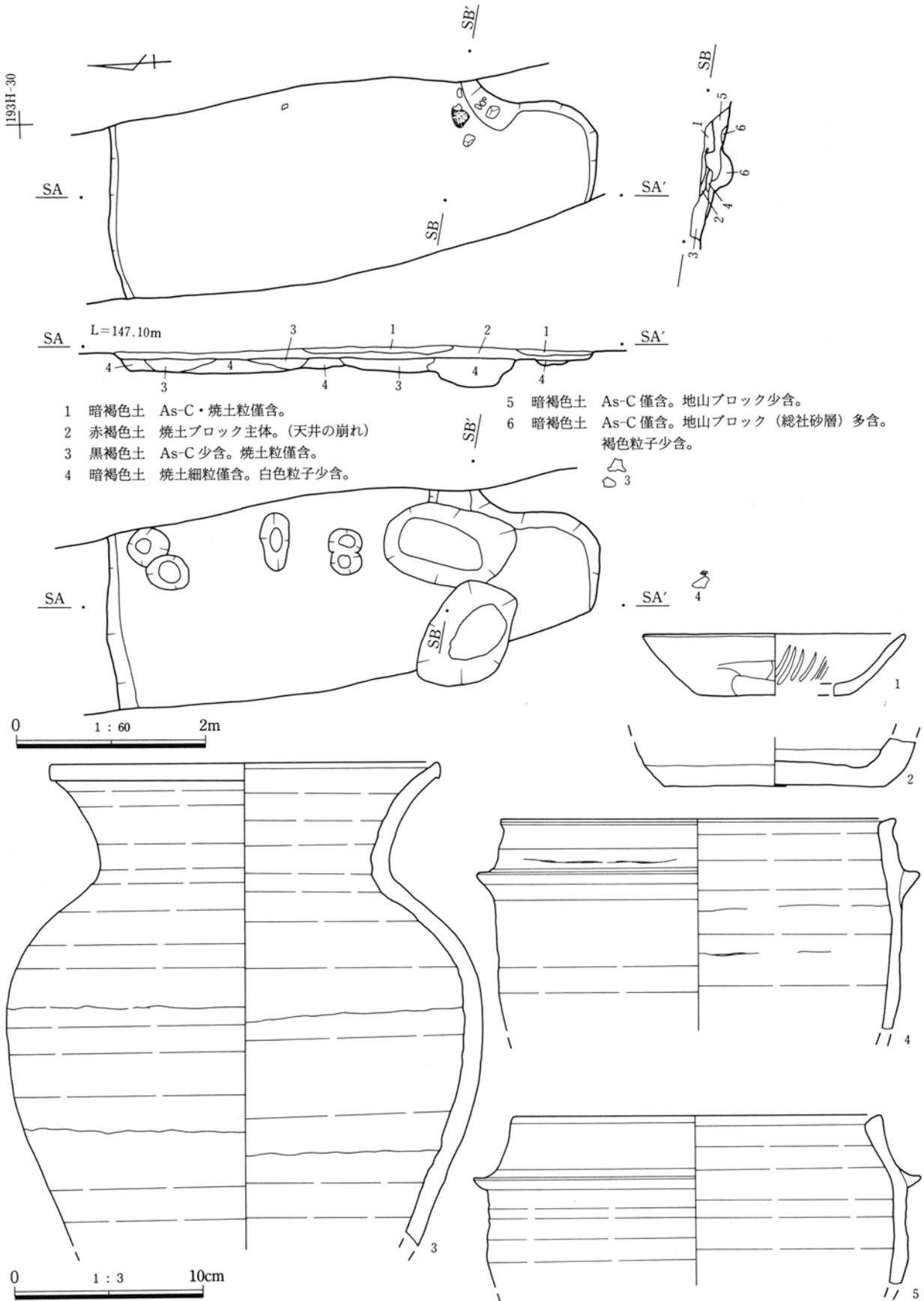
第112図 85号住居跡



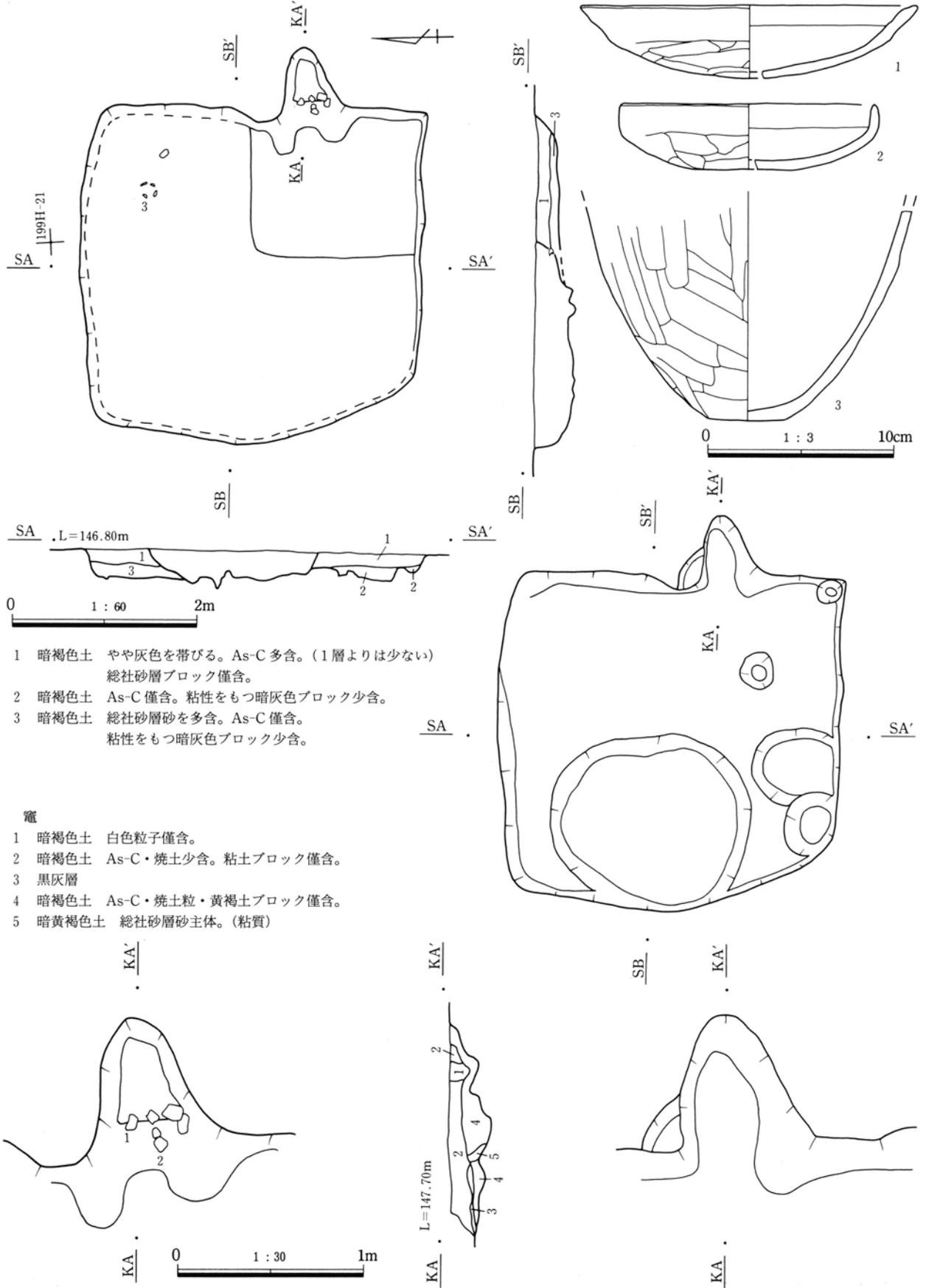
第113図 86号住居跡

87号竪穴住居跡（第114図、写真図版44・45・126） 193H-30グリッドに位置し、重複関係は東壁と西壁を19号溝と21号溝にそれぞれ壊されている。平面形態はおそらくは長方形である。貼り床の床面は堅く平坦である。確認面が浅いために残存する壁高は約10cmで、緩やかに立ち上がる。掘り方から大小の楕円形～円形の床下土坑とピットがいくつか検出されているが、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。遺物は土師器の暗文や須恵器の甕や羽釜などが出土している。カマドは石を構築材として僅かに残存する右袖の痕跡から東壁に位置したことがわかり、19号溝に壊されたものと考えられる。住居の廃棄時期は遺物から10世紀前半と考えられる。

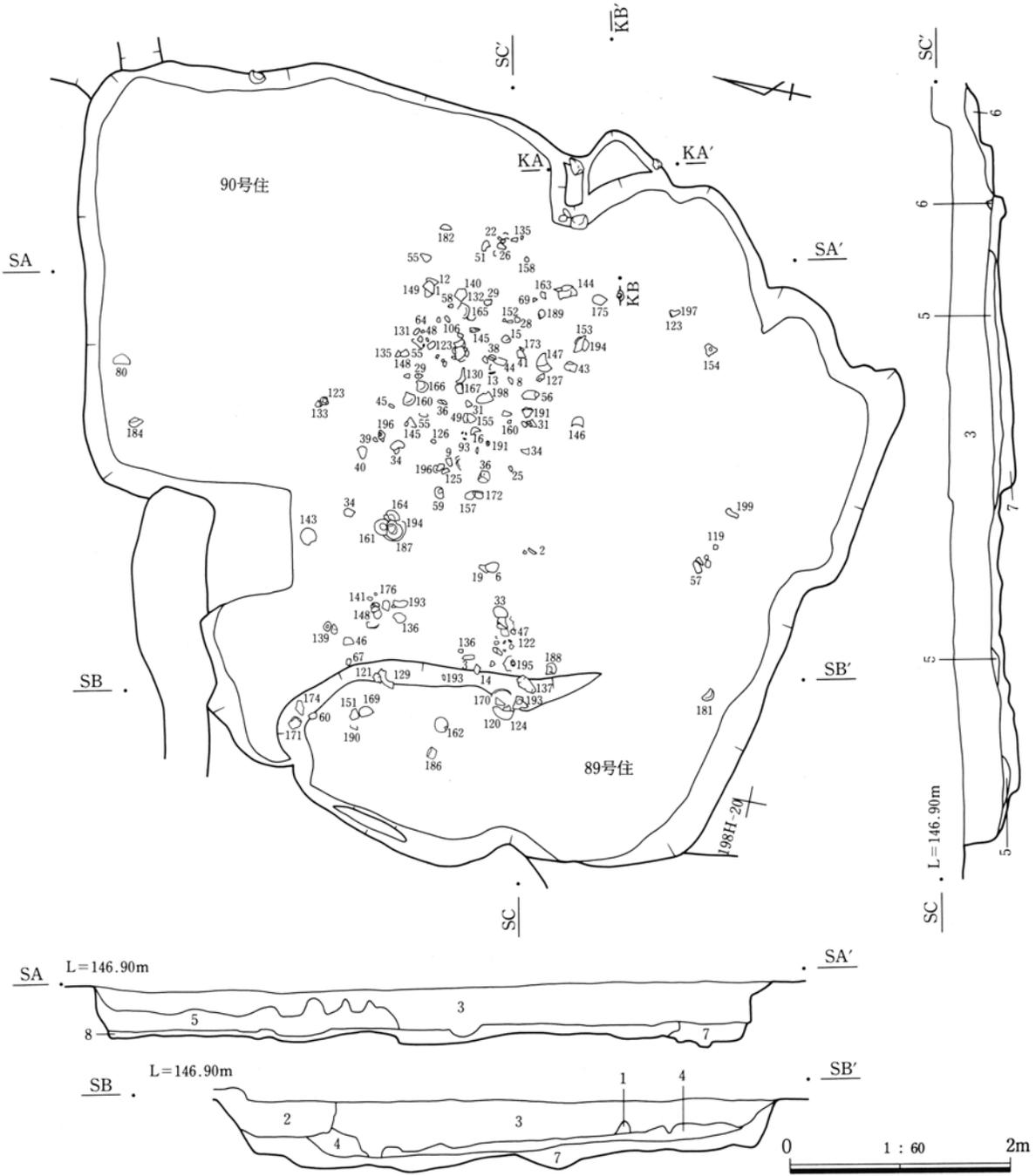
88号竪穴住居跡（第115図、写真図版45・126） 199H-21グリッドに位置し、重複関係は88号竪穴住居跡が新しく、182号竪穴住居跡が古い。平面形態は正方形である。床面はカマド周辺の南東隅を中心に残存しており、堅く平坦である。残存する壁高は約15cmで、直立気味に立ち上がる。掘り方で大小の楕円形の床下土坑とピットがいくつか出土しており、ピットのひとは柱穴に相当すると思われるが、明確な壁溝、貯蔵穴は検出されていない。遺物は土師器の坏や甕などがカマドの燃焼部分などから出土している。カマドは東壁の中央から南寄りに位置し、住居の廃棄時期は遺物から8世紀前半と考えられる。



第114図 87号住居跡

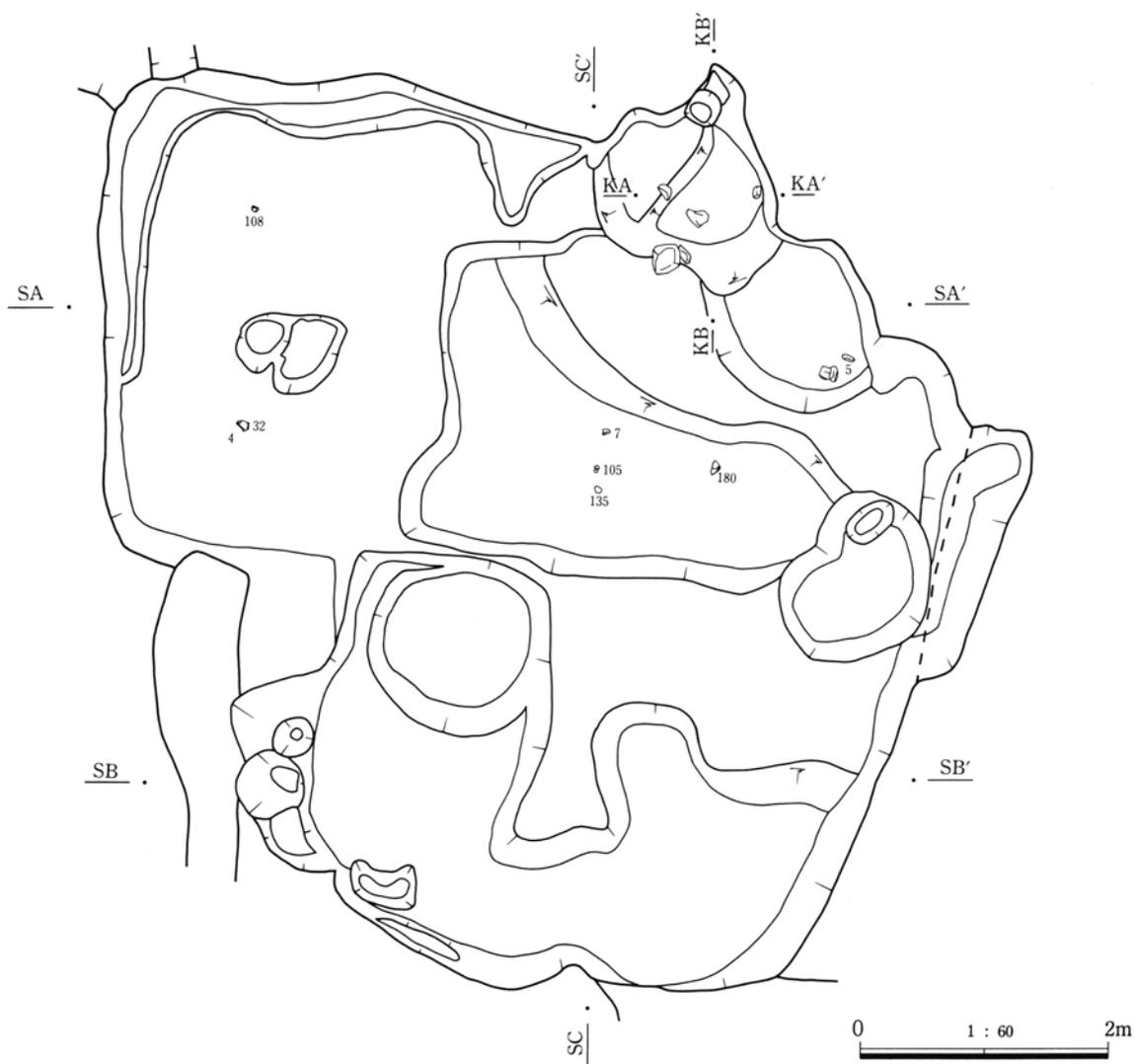


第115図 88号住居跡



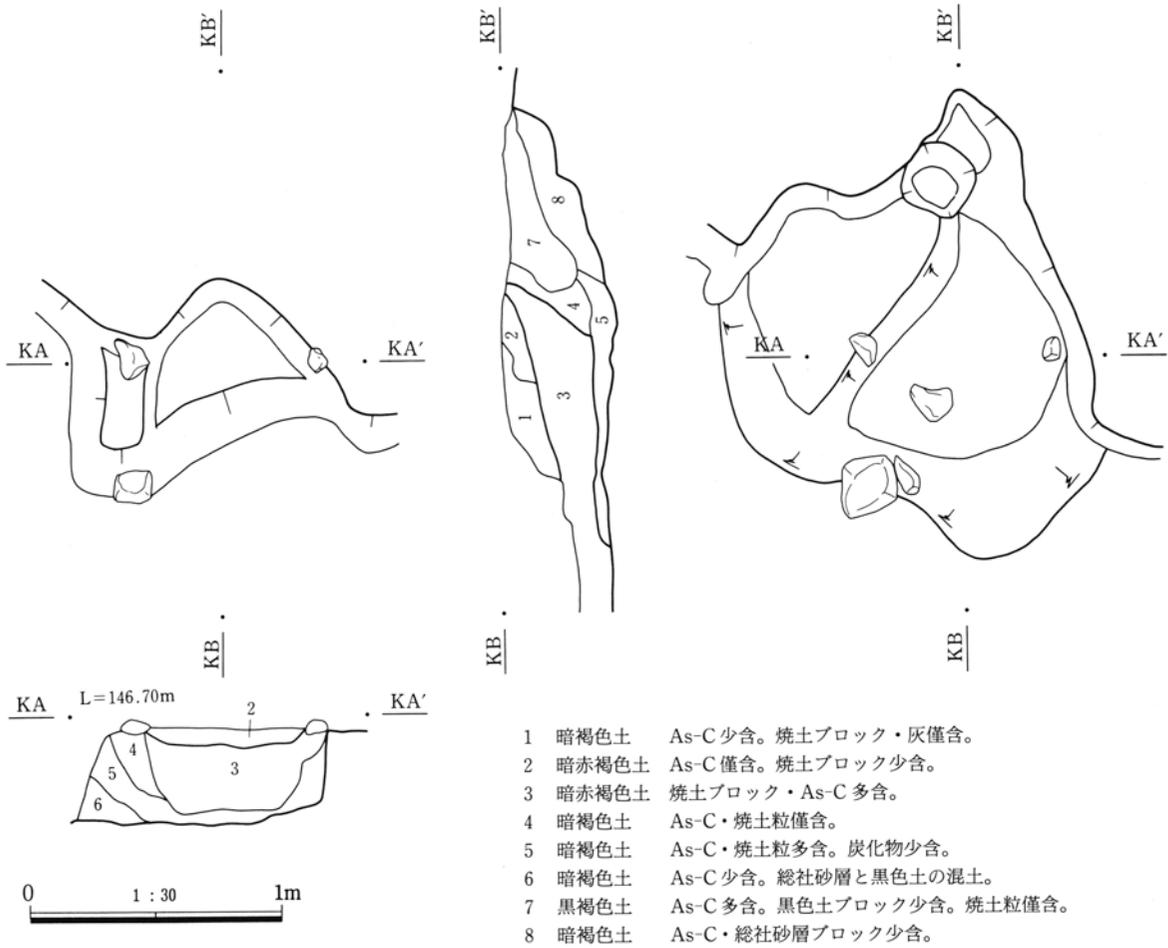
- | | | |
|------------|-------------------------------|-----------------------------|
| 1 総社砂層ブロック | 5 暗灰褐色土 | As-C・総社砂層ブロック・暗褐色粘質土ブロック少含。 |
| 2 暗褐色土 | As-C少含。黒ボク土ブロック僅含。(中世土坑) | 6 暗赤褐色土 |
| 3 暗褐色土 | As-C・炭化物少含。焼土粒・総社砂層ブロック僅含。 | 7 黄褐色土 |
| 4 暗褐色土 | As-C・総社砂層ブロック少含。暗褐色粘質土ブロック僅含。 | 8 黄褐色土 |
| | | 7層に類似、焼土粒少含。 |

第116図 89・90号住居跡



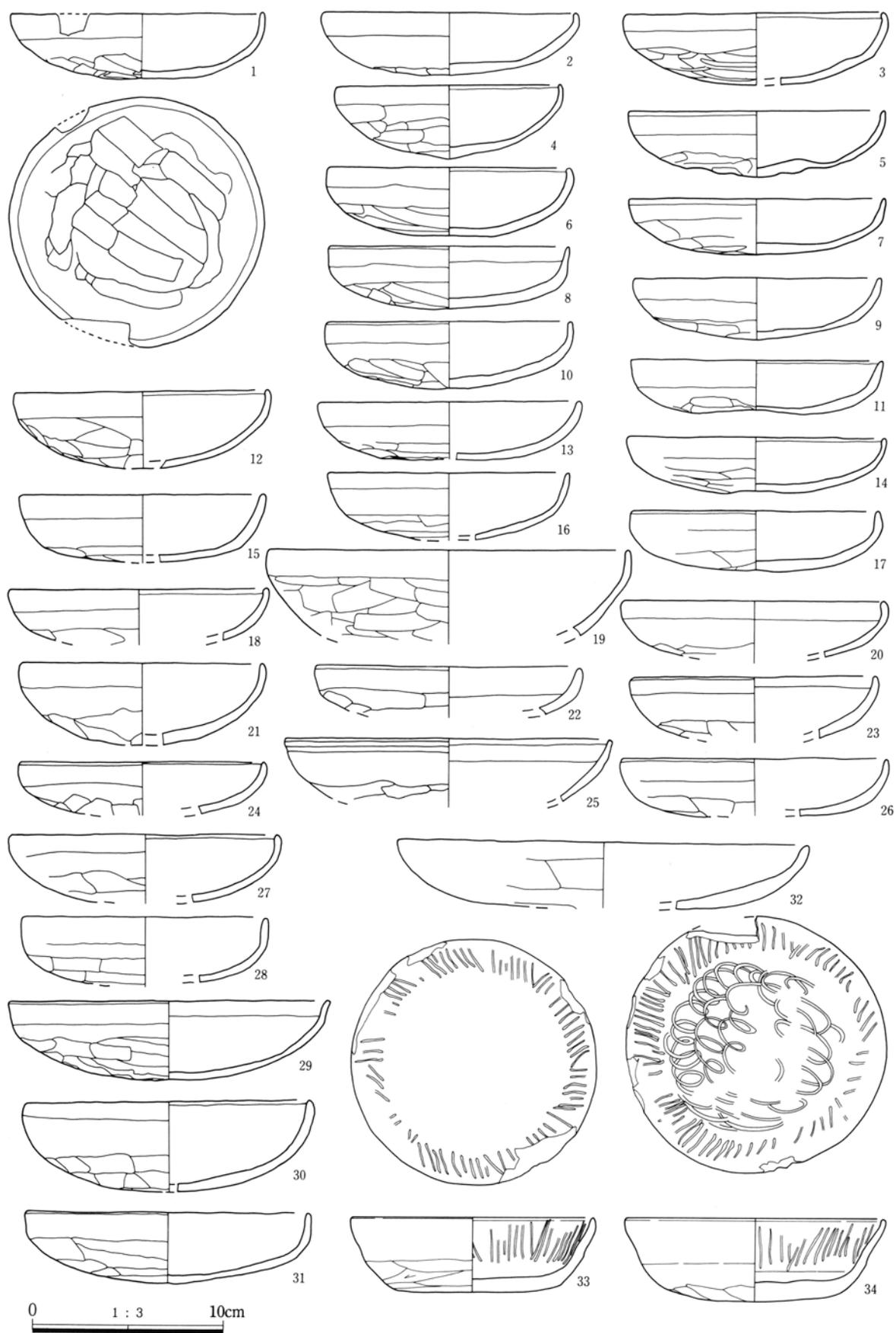
第117図 89・90号住居跡

89号竪穴住居跡・90号竪穴住居跡（第115～126図、写真図版45・46・127～134）199H-21グリッドに位置し、遺構確認当初の時点では張り出し部分を持つ1軒の住居とを考えていたが、再度の遺構確認精査や試掘トレンチなどから2軒の住居と判断し、89号竪穴住居跡と90号竪穴住居跡の名称を付けた。だが、調査中にも両住居の遺構番号をとり違えたり、出土した遺物の注記が間違ふなどの混雑が生じた。重複関係は、土層断面確認などから89号竪穴住居跡の方が古く、90号竪穴住居跡が新しいと判断したが、遺物の残存状態からは、逆に90号竪穴住居跡の方が古く、89号竪穴住居跡が新しいとも考えられる。平面形態は、89号竪穴住居跡が南北長軸の長方形であるのに対して、90号竪穴住居跡は東西長軸の長方形である。だが、2軒ともにカマドの位置が東壁に推定される。特に、89号竪穴住居跡の一部に貼床をもつ床面は堅く平坦である。残存する壁高は、89号竪穴住居跡が約35～50cmと深く、直立気味に立ち上がるのに対して、90号竪穴住居跡は土層断面確認でも壁の立ち上がりがはっきりせず、こうしたことから新旧関係の把握に苦しみ、その判断が間違っていると考える根拠にもなっている。掘り方からは大小の楕円形～円形の床下土坑とピットがいくつか出土しており、なかには柱穴に相当するピットがあると考えられる。また、90号竪穴住居跡の北壁から東壁にか

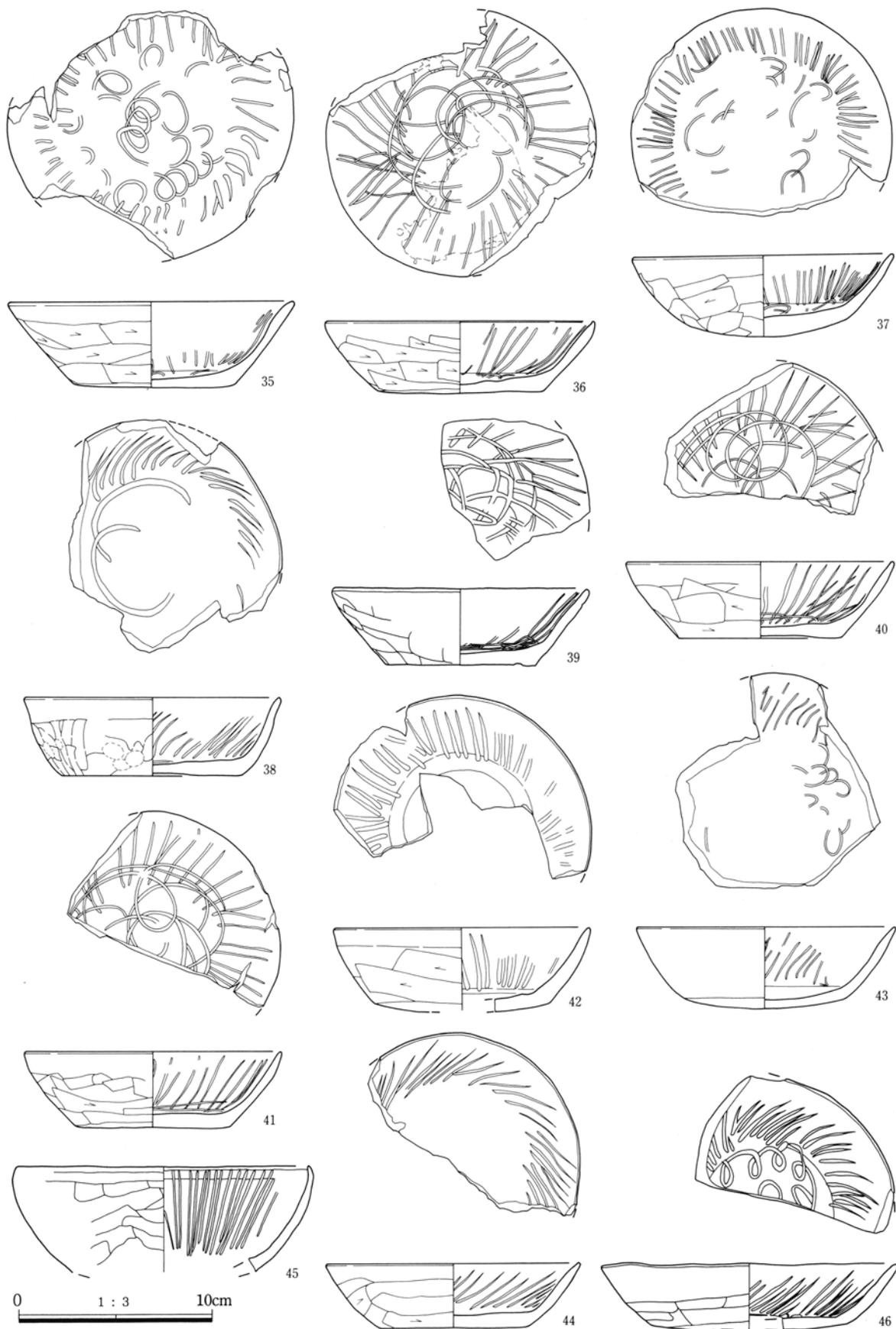


第118図 90号住居跡

けては、その際にやや広めの壁溝が存在する。明確な貯蔵穴、柱穴は検出されていない。遺物は、89号竪穴住居跡を中心に十字に設定した試掘トレンチの上部から下部にいたるまで、びっしりと詰めたように出土し、掘り出す土よりも多いような状態であった。特に、90号竪穴住居跡のkamadoの左手前、89号竪穴住居跡の北東隅部分を中心に集中するような形で多数出土し、床下まで掘り下げられないほどの状況であった。その種類は、土師器の坏や甕、須恵器の坏や椀、蓋、高坏、盤、長頸壺、四足火舎の獣足部分、切り出し石、直刀など多種多様であり、それらが北東隅部分に集中して出土している。特に、暗文土器が多量に出土している点や、県内でも出土例の少ない四足火舎など、特殊な遺物の存在から東に隣接する下東西遺跡での官☆の様相と合わせて、本遺跡の8世紀代を考えるうえで重要な遺構である。90号竪穴住居跡のkamadoは東壁の南東隅に位置し、右袖の残存状態は悪いものの、左袖には石を構築材として使用してしっかりしており、燃烧部分の残りも良い。あるいは、前記したように89号竪穴住居跡のkamadoである可能性も考えられる。住居の廃棄時期は、遺物から89号竪穴住居跡が8世紀中葉頃、さらには8世紀の第二四半期にまで遡る可能性が考えられる。90号竪穴住居跡はそれ以後か、あるいは89号竪穴住居跡との時間差が少ない8世紀代の可能性も考えられる。



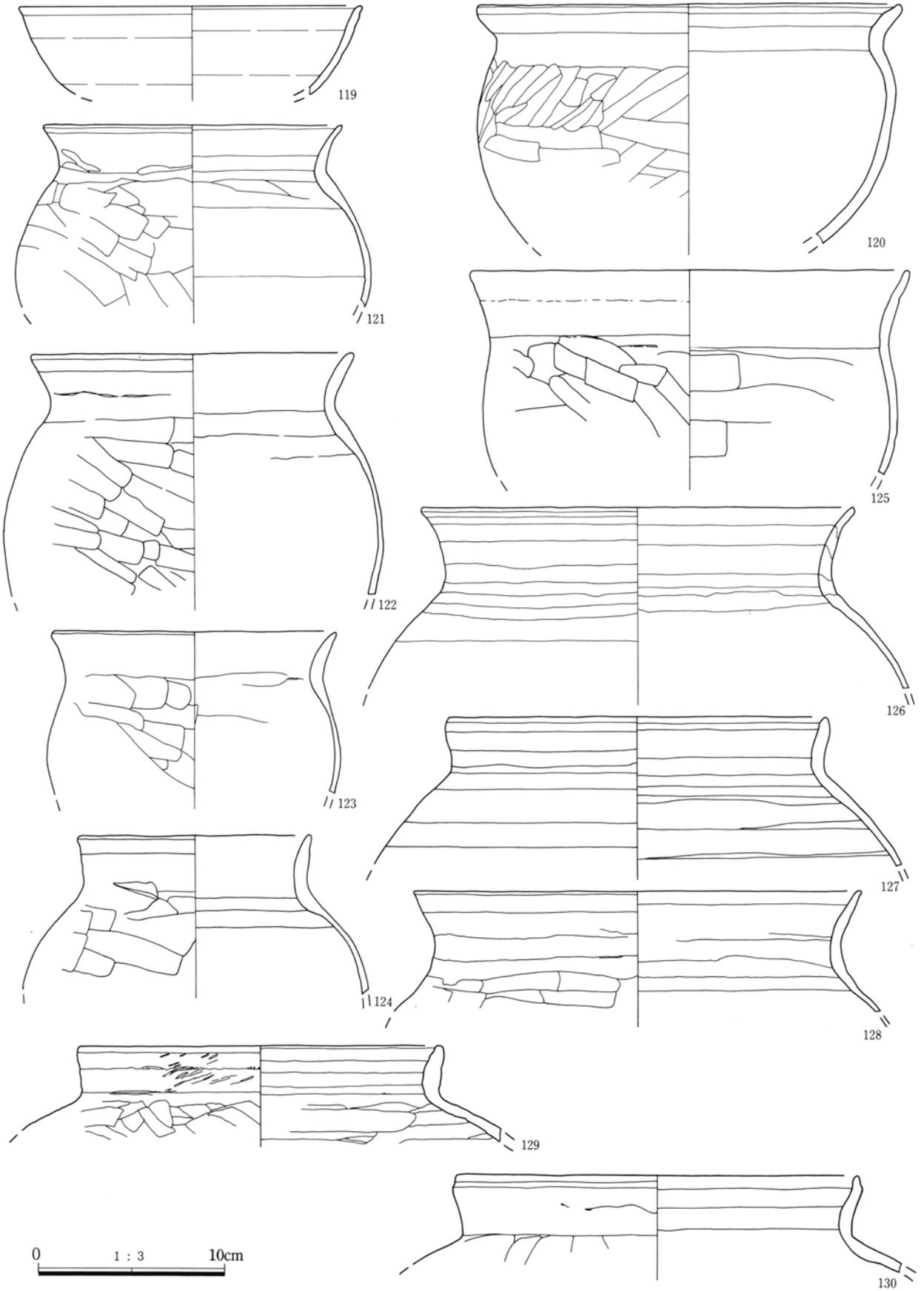
第119図 89・90号住居跡



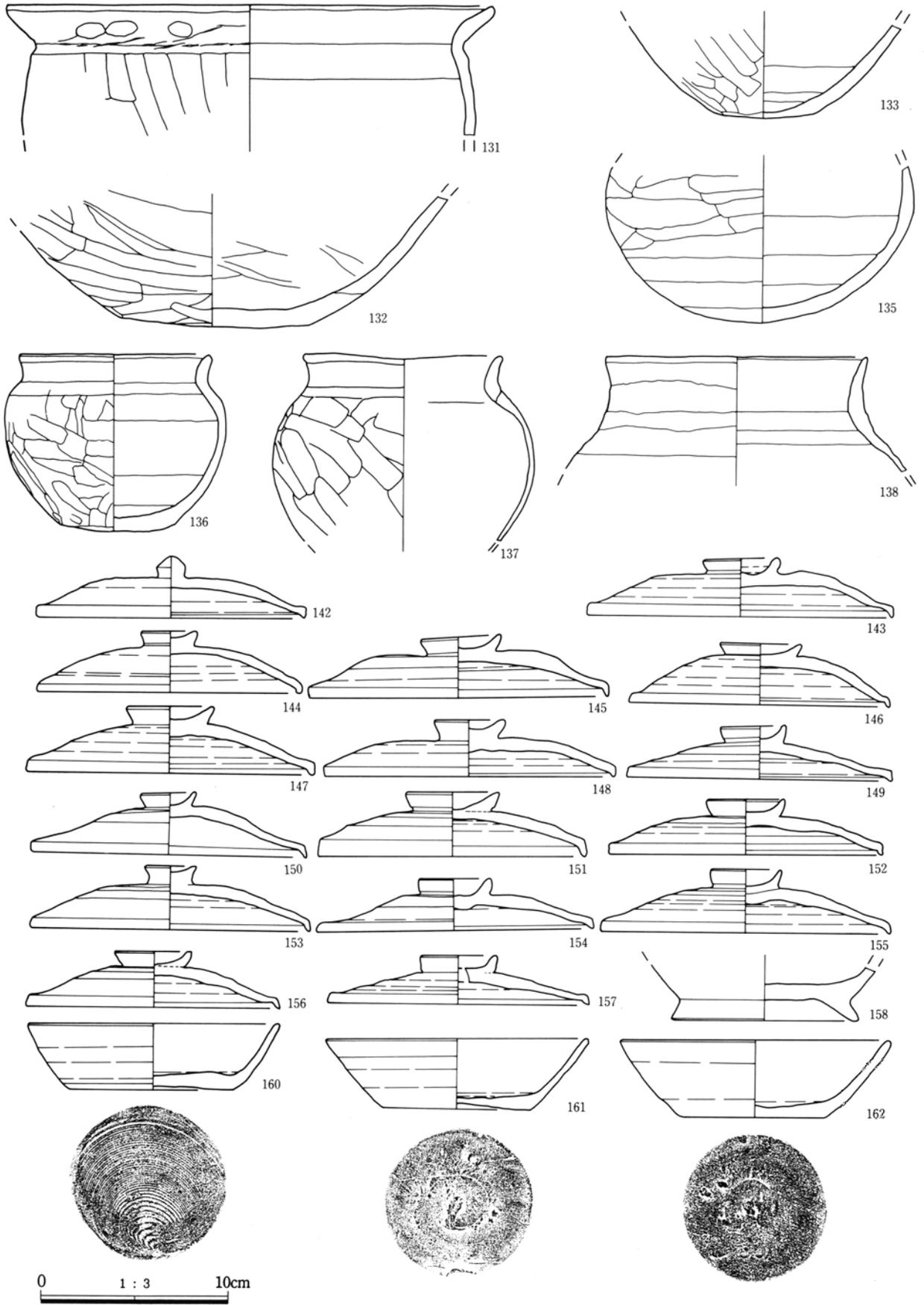
第120図 89・90号住居跡



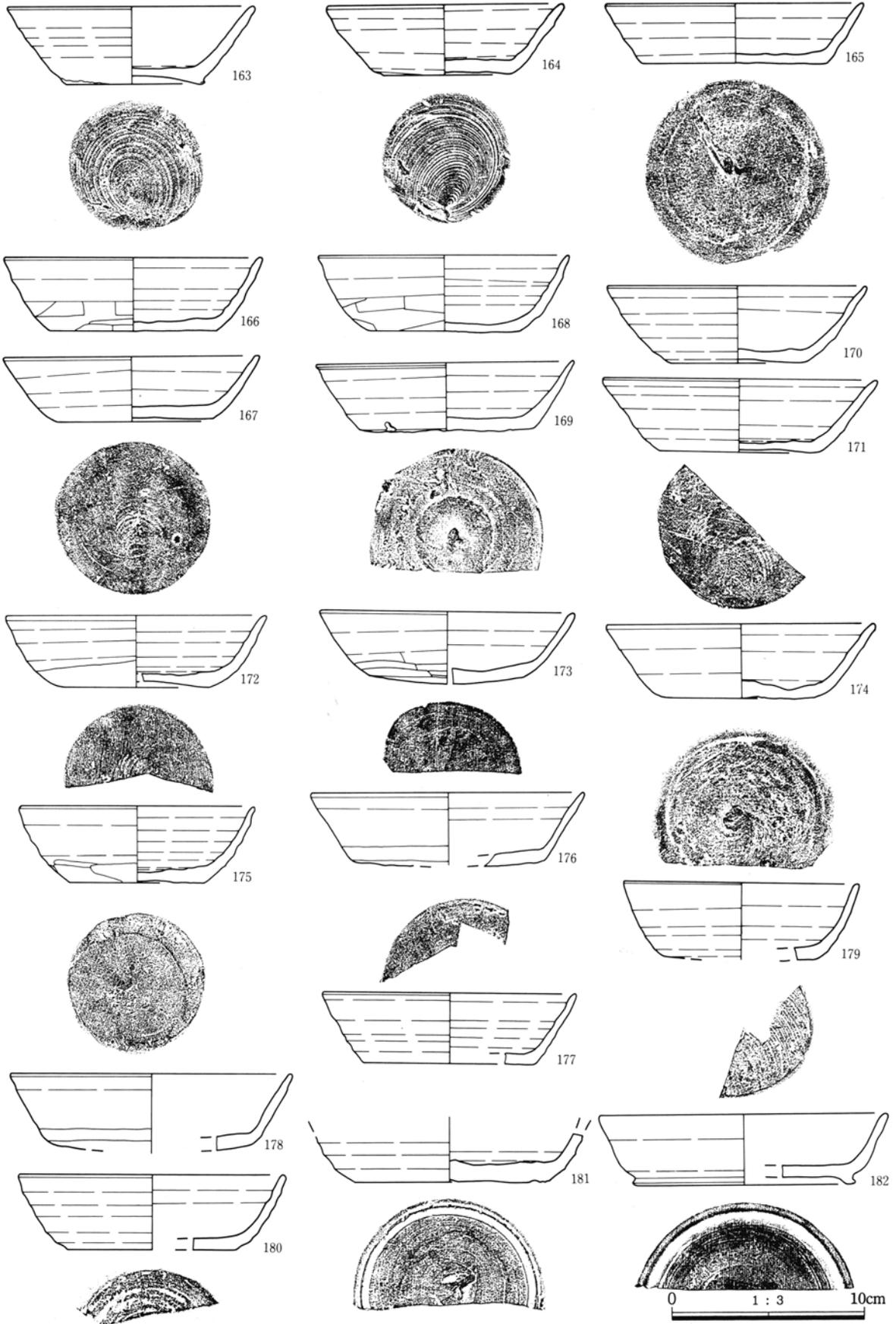
第121図 89・90号住居跡



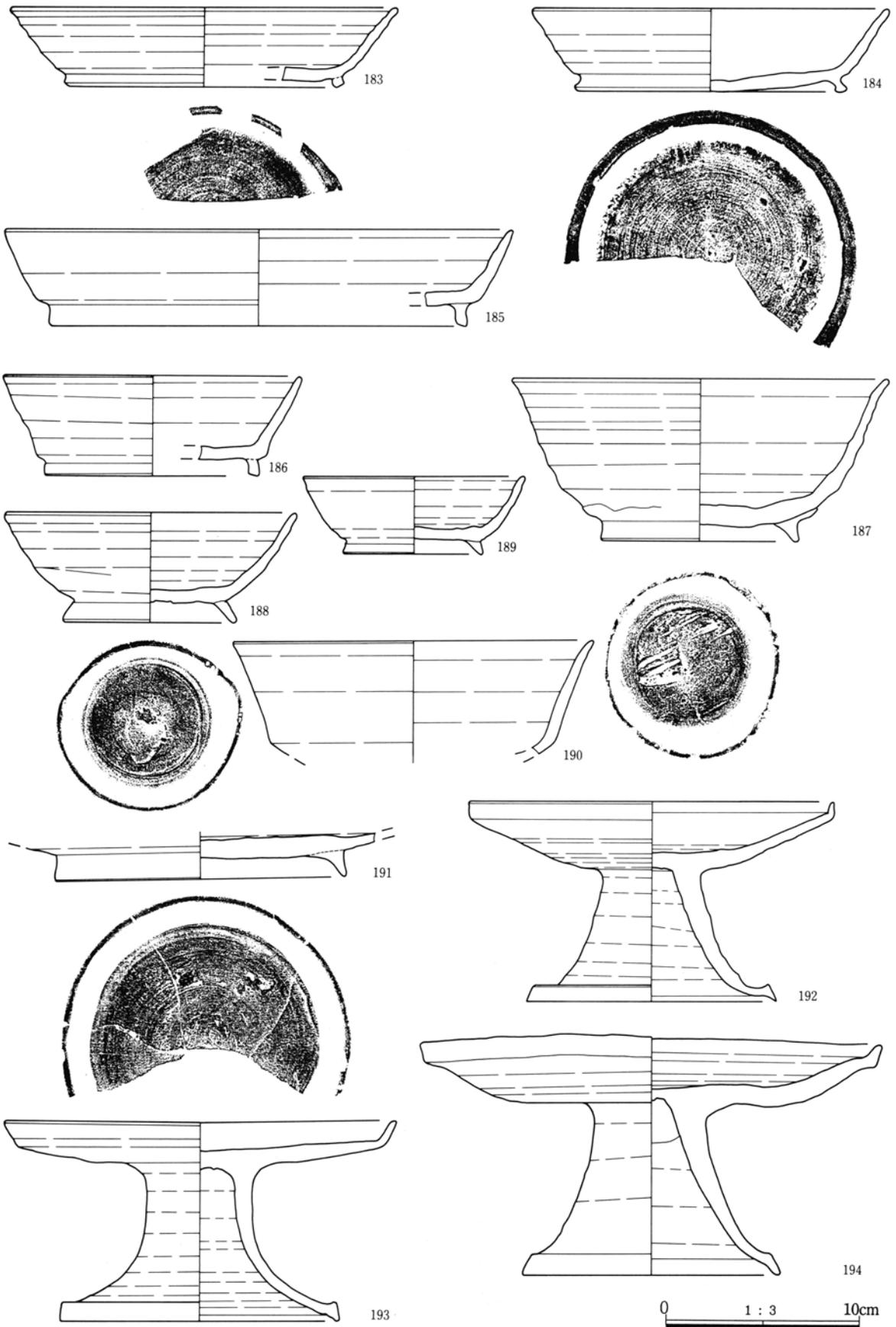
第122図 89・90号住居跡



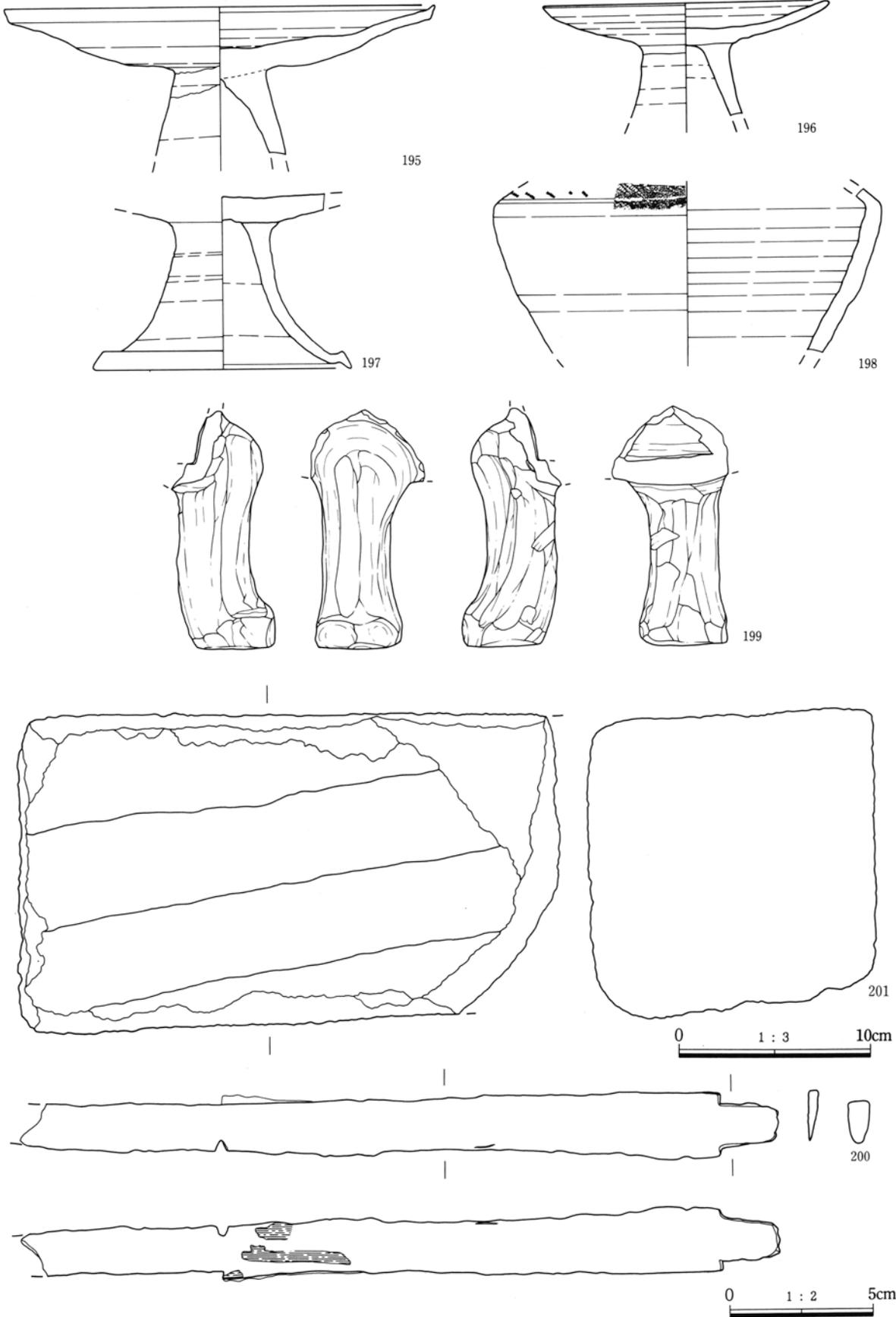
第123図 89・90号住居跡



第124図 89・90号住居跡

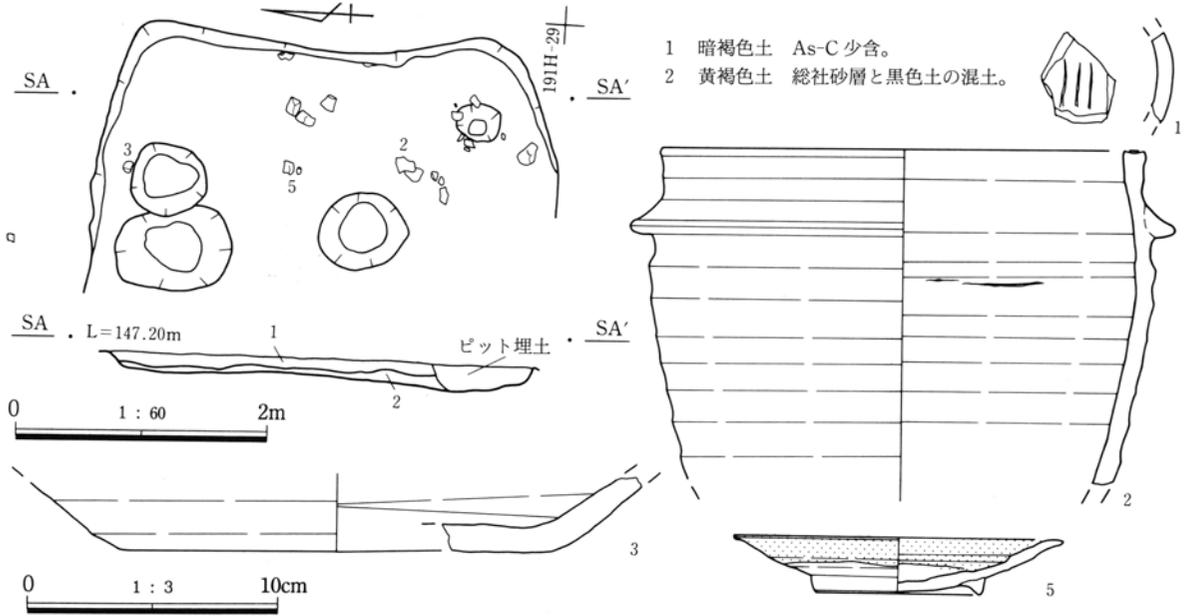


第125図 89・90号住居跡



第126図 89・90号住居跡

第3章 検出された遺構・遺物



第127図 91号住居跡

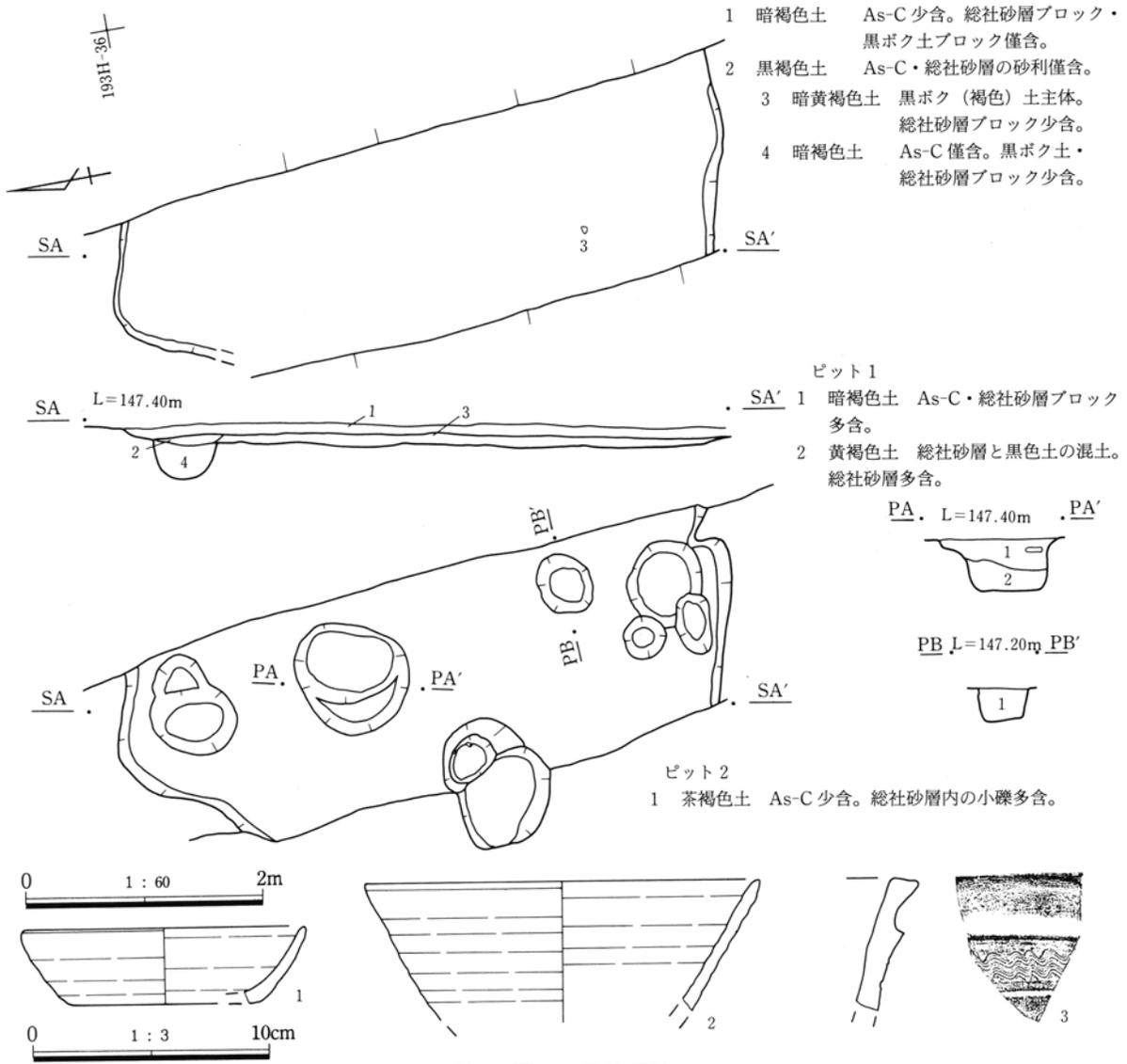
91号竪穴住居跡（第127図、写真図版46・134） 191H-29グリッドに位置し、重複関係は西側半分が19号溝に壊されており、平面形態は不明である。床面は堅く平坦である。確認面が浅いために残存する壁高は約10cmで、緩やかに立ち上がる。掘り方で大小の楕円形～円形の床下土坑とピットがいくつか出土しており、ピットのひとつは柱穴に相当すると考えられるが、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。遺物は土師器の暗文土器の破片、須恵器の甕と羽釜、灰釉陶器の皿などが出土している。カマドの位置は不明である。住居の廃棄時期は遺物から10世紀前半と考えられる。

92号竪穴住居跡（第128図、写真図版46・47・134） 193H-36グリッドに位置し、重複関係は19号溝と21号溝に東壁と西壁を壊されており、平面形態は不明である。床面は堅く平坦である。確認面が浅いために残存する壁高は約10cmで、緩やかに立ち上がる。掘り方で大小の楕円形～円形の床下土坑とピットがいくつか出土しているが、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。遺物は須恵器の坏や甕などが出土している。カマドは東壁に位置したと推定される。住居の廃棄時期は遺物から9世紀前半と考えられる。

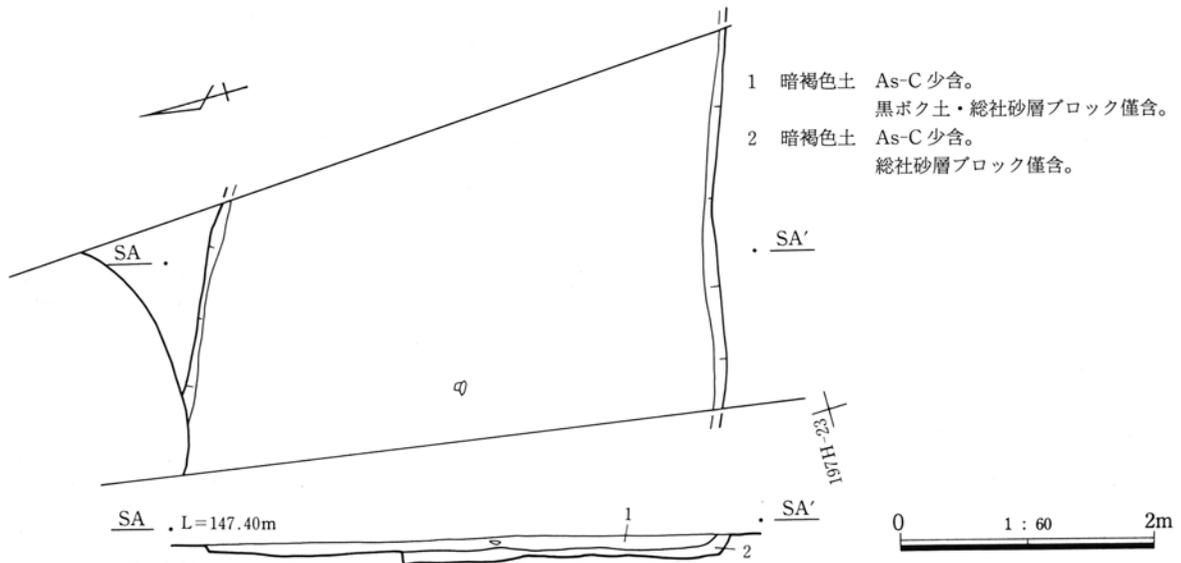
93号竪穴住居跡（第129・130図、写真図版47・134） 197H-33グリッドに位置し、重複関係は21号溝と試掘トレンチに東壁と西壁を壊されており、平面形態は不明である。地山を掘り込んだだけの床面は堅く平坦である。確認面が浅いために残存する壁高は約10cmで、緩やかに立ち上がる。掘り方で大小の楕円形～円形の床下土坑とピットがいくつか出土しているが、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。遺物は須恵器の羽釜などが出土している。カマドは東壁に位置したと推定される。住居の廃棄時期は遺物から10世紀前半と考えられる。

94号竪穴住居跡（第131図、写真図版47・48・134） 193H-31グリッドに位置し、重複関係は19号溝と21号溝に東壁と西壁を壊されており、平面形態は不明である。床面は堅く平坦である。確認面が浅いために残存する壁高は約10cmで、緩やかに立ち上がる。掘り方で大小の楕円形～円形の床下土坑とピットがいくつか出

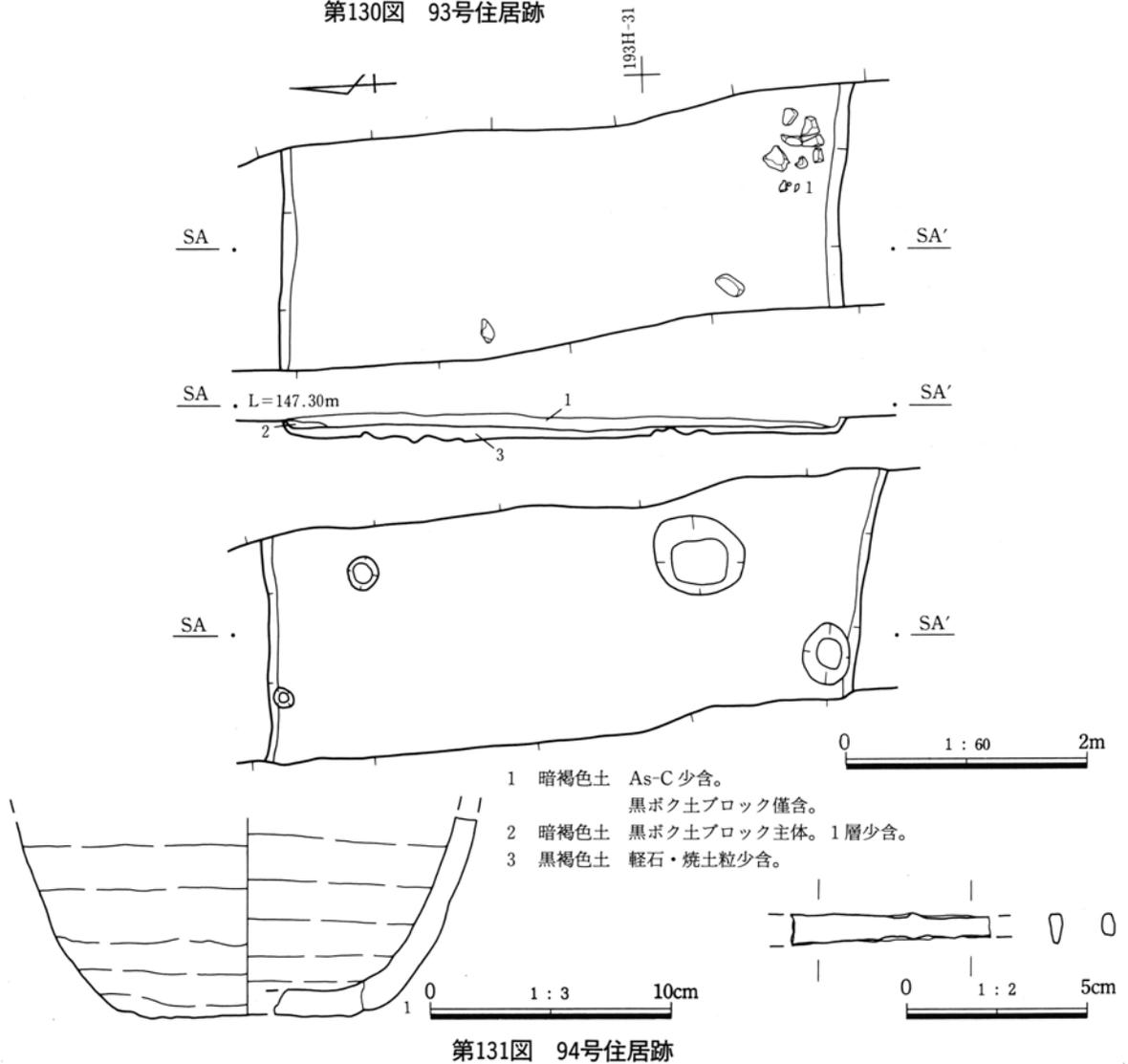
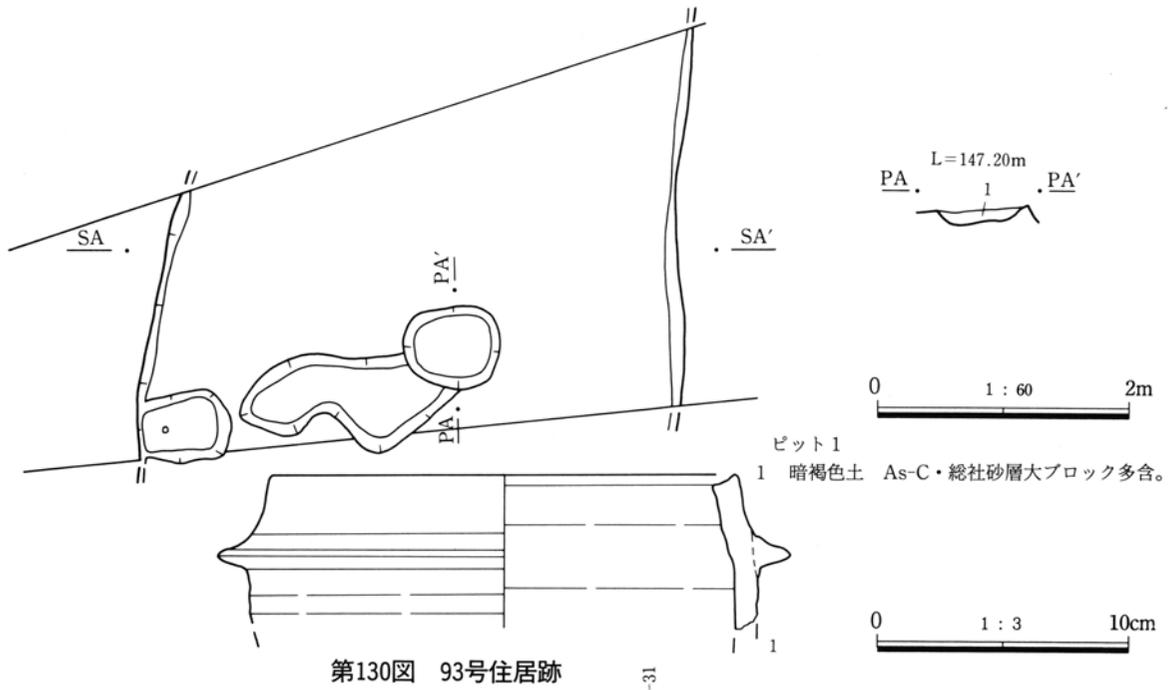
第4節 奈良・平安時代

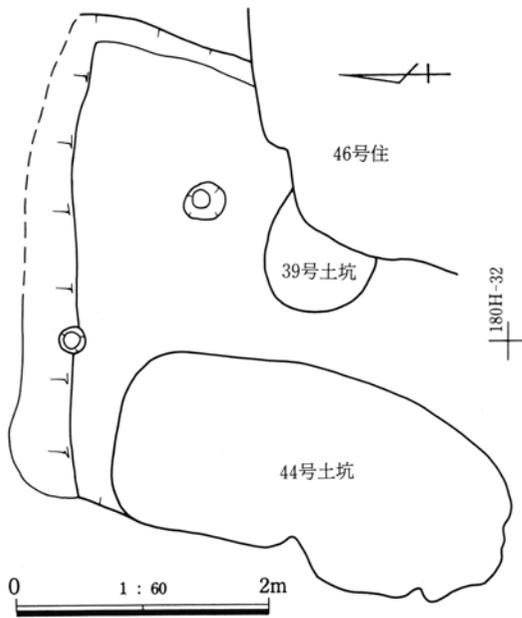


第128図 92号住居跡



第129図 93号住居跡

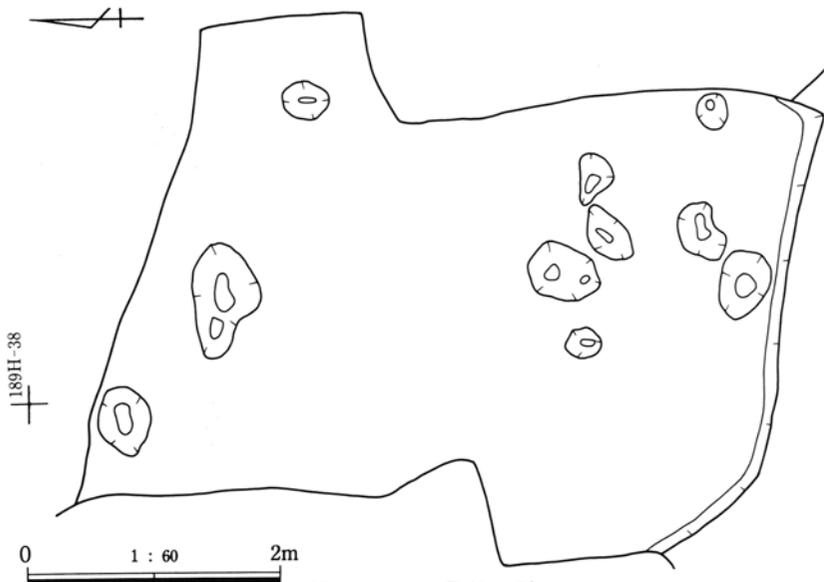




第132図 95号住居跡

土しているが、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。遺物は土師器の甕や刀子などが出土している。カマドは東壁に位置したと推定される。住居の廃棄時期は遺物から11世紀と考えられる。

95号竪穴住居跡(第132図、写真図版48)180H-32グリッドに位置し、重複関係は43号竪穴住居跡と44号竪穴住居跡、46号竪穴住居跡と58号竪穴住居跡、39号土坑、44号土坑に壊されている。確認面が浅いために床面の大部分は壊されており、平面形態も不明である。明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。明確に器形や時期が判定できる遺物はほとんど無い。カマドの位置は不明で、住居の廃棄時期は前述した住居との新旧関係から8世紀中葉以前と考えられる。

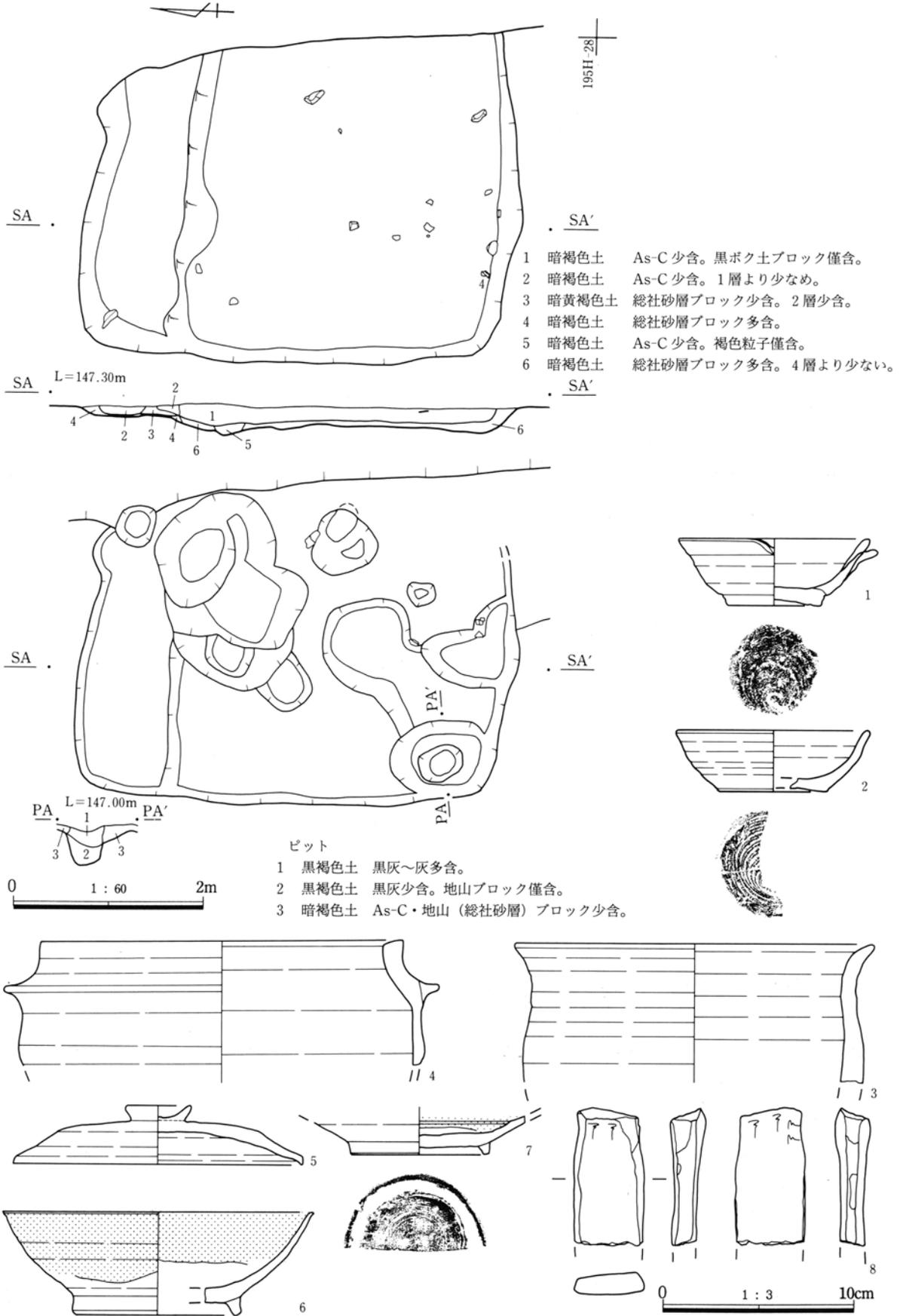


第133図 96号住居跡

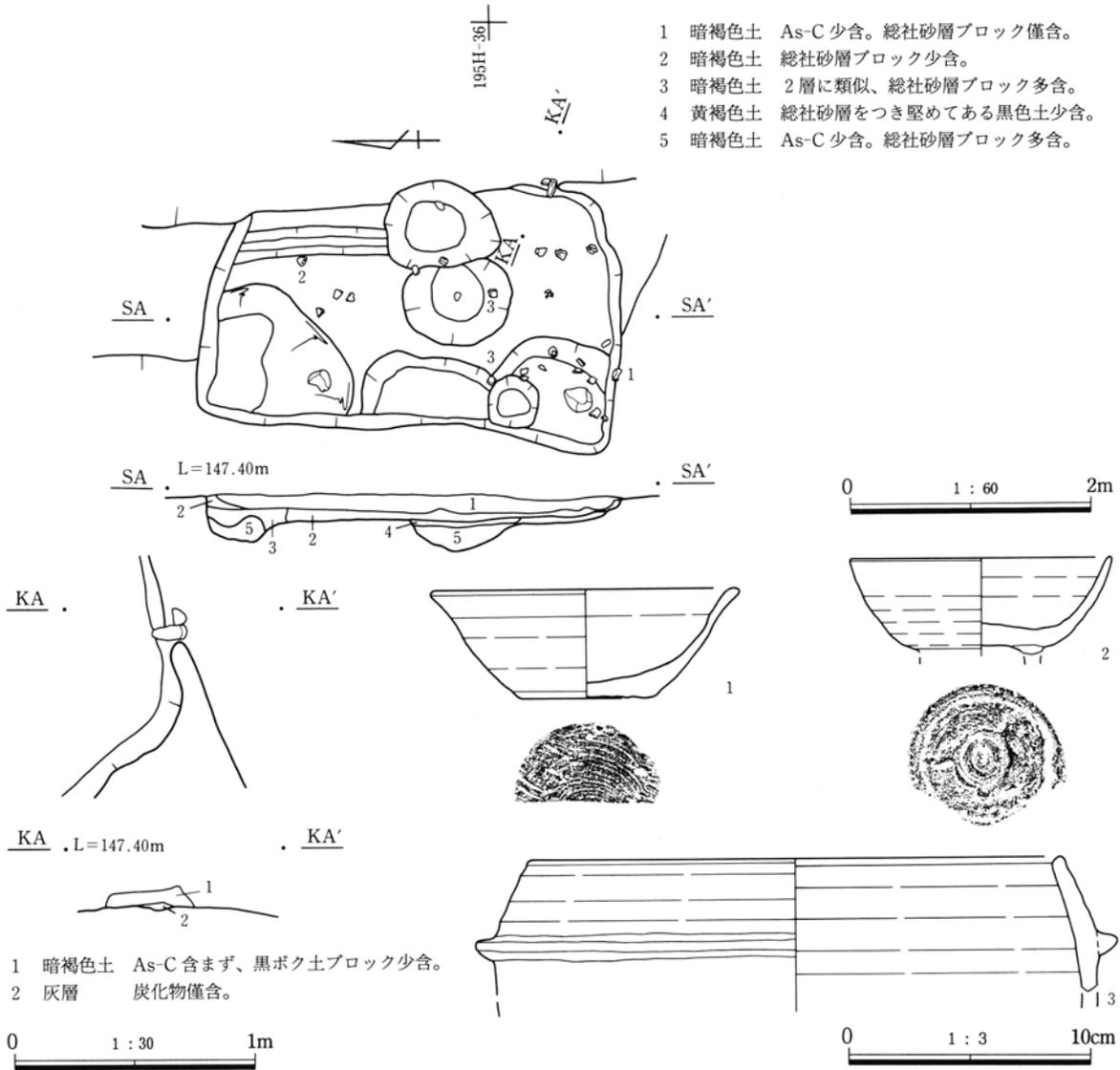
96号竪穴住居跡(第133図、写真図版48)189H-38グリッドに位置し、重複関係では16号竪穴住居跡と50号竪穴住居跡、48号竪穴住居跡と49号竪穴住居跡、21号竪穴住居跡に壊されているが、62号竪穴住居跡との新旧関係は不明である。平面形態も不明である。掘り方から多数のピットが検出されているが、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。明確に器形や時期が判定できる遺物はほとんど

無い。カマドはおそらくは東壁に位置したと推定され、住居の廃棄時期は前述した住居との新旧関係から8世紀中葉以前と考えられる。

97号竪穴住居跡(第134図、写真図版48・134)195H-28グリッドに位置する。重複関係は21号溝に東壁を壊されている。平面形態は不明である。貼り床の床面は堅く平坦である。壁高は約10~15cmで、緩やかに立ち上がる。掘り方で大小の楕円形~円形の床下土坑とピットがいくつか検出されているが、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されなかった。遺物は須恵器の坏や椀、羽釜、蓋、灰釉陶器の椀、砥石などが出土している。カマドはおそらくは東壁に位置したと推定され、21号溝に壊されたと考えられる。住居の廃棄時期は遺物から10世紀中葉と考えられる。



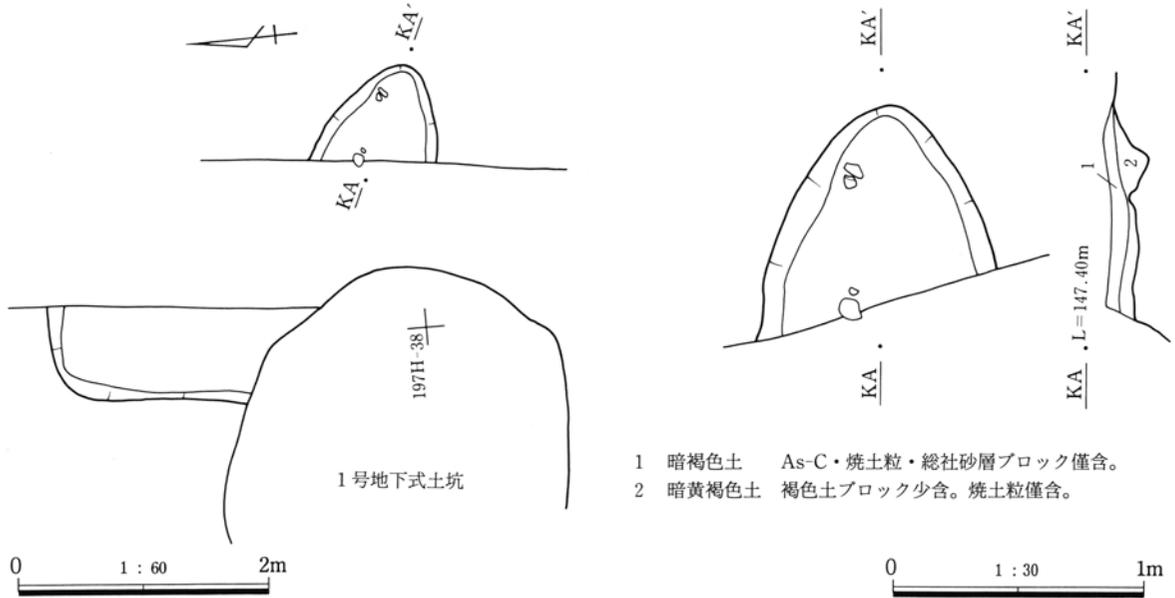
第134図 97号住居跡



第135図 98号住居跡

98号竪穴住居跡(第135図、写真図版48・135) 195H-36グリッドに位置し、重複関係は東壁の大部分を21号溝に、西側部分の一部を試掘トレンチに壊されているが、平面形態は長方形と考えられる。貼り床の床面は堅く平坦である。確認面が浅いために残存する壁高は約10cmで、緩やかに立ち上がる。掘り方で大小の楕円形～円形の床下土坑とピットがいくつか検出されているが、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。遺物は須恵器の坏や椀、羽釜などが出土している。カマドは石を構築材として僅かに残存する右袖の痕跡から東壁の中央からやや南寄りに位置していたことがわかり、21号溝に壊されたものと考えられる。住居の廃棄時期は遺物から10世紀中葉と考えられる。

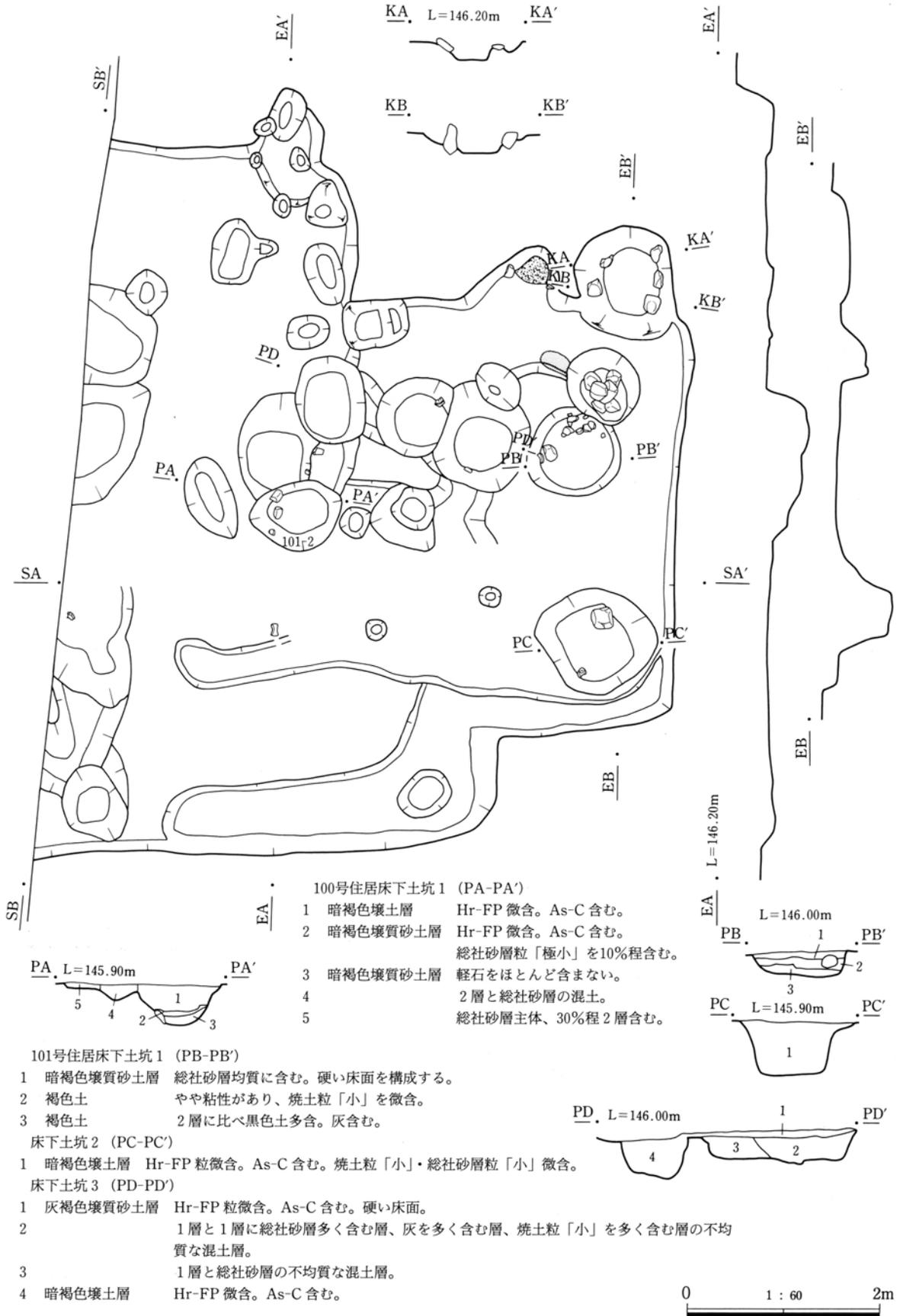
99号竪穴住居跡(第136図、写真図版49) 197H-38グリッドに位置し、重複関係では11号竪穴住居跡と1号地下式土坑に南西隅部分を、試掘トレンチに東壁から中央部分にかけての床面の大部分を壊されている。平面形態は長方形と推定される。確認面が浅く、残存する壁高は僅かで、緩やかに立ち上がる。明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。明確に器形や時期が判明する遺物はほとんど無い。カマドは東壁の中央



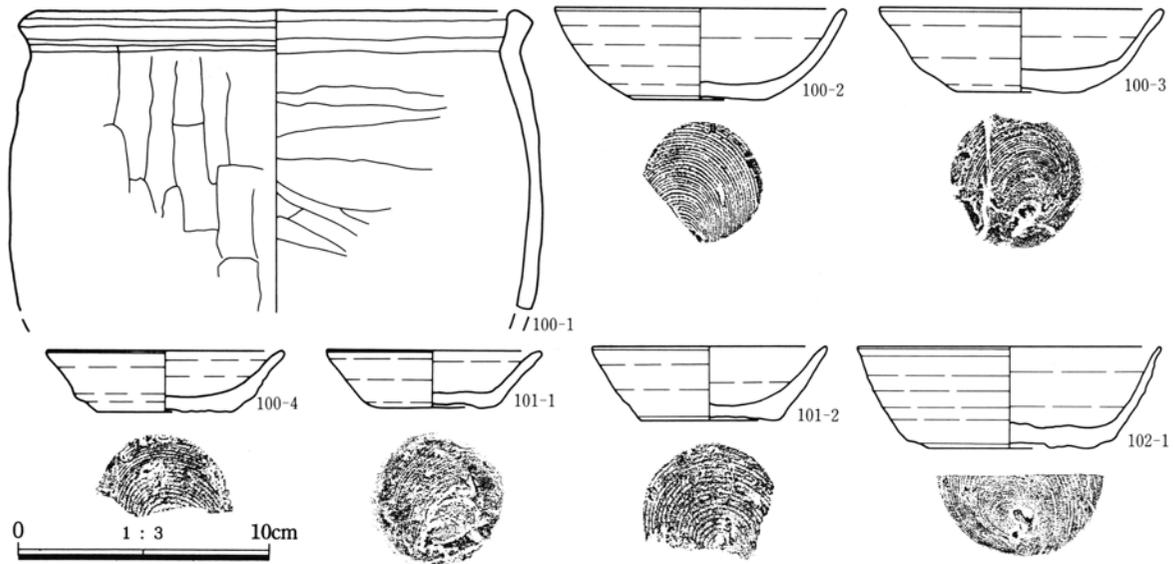
第136図 99号住居跡

からやや南寄りに位置するが、残存状態が良くない。住居の廃棄時期は11号竪穴住居跡との新旧関係から10世紀後半以前と考えられる。

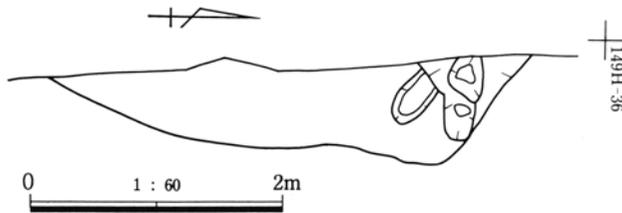
100号竪穴住居跡・101号竪穴住居跡・102号竪穴住居跡（第137～139図、写真図版49・50・135） 145H—35グリッドに位置し、100号竪穴住居跡と102号竪穴住居跡の北壁部分が調査区域外に延びるために不明確な部分もあるが、判明する範囲内での重複関係では102号竪穴住居跡が最も古く、次に101号竪穴住居跡で、100号竪穴住居跡の順に新しい。平面形態は100号竪穴住居跡と101号竪穴住居跡が東西長軸の長方形であるが、102号竪穴住居跡は100号竪穴住居跡と101号竪穴住居跡に東側の大部分を壊されており、形状は不明である。床面の様子や土層確認のセクションからも、ほとんど同一の床面と言えるような状態であり、それぞれが比較的堅く平坦である。残存する壁高は調査区域外との境の土層確認セクションでの深い部分で約40～50cmで、遺構確認面からの浅い部分で約10～15cmであり、それぞれの住居の壁が直立気味に立ち上がる。掘り方からは大小の楕円形～円形の床下土坑やピットが多数検出されており、中に石が詰められたものや、柱穴に相当する可能性があるものも存在するが、掘り方で明確な壁溝、貯蔵穴は検出されていない。遺物は土師器の甕、須恵器の坏などがそれぞれの住居から出土している。100号竪穴住居跡のカマドは東壁の南東隅に位置し、101号竪穴住居跡のカマドも東壁の南東隅に位置し、袖部分は不明確だが、燃焼部の側面から背面にかけて石を構築材として使用している。102号竪穴住居跡のカマドは東壁に位置したと推定され、100号竪穴住居跡か101号竪穴住居跡のどちらかに壊されたと考えられるが、掘り方で検出された土坑のどれかが掘り方に相当するかもしれない。あるいは、101号竪穴住居跡のカマドの北に存在するカマド状の三角形の突出部分が、101号



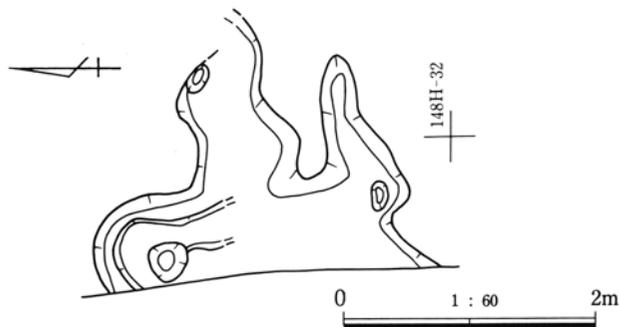
第138図 100・101・102号住居跡



第139図 100・101・102号住居跡



第140図 104号住居跡



第141図 105号住居跡

104号竪穴住居跡(第140図、写真図版) 149 H-36グリッドに位置し、住居の東壁を除く大部分を圃場整備以前の農道跡に壊されており、確認作業時点で確認面が浅いこともあり、床面どころか掘り方がやっと検出できる程度の残存状態であり、重複関係や平面形態は不明である。掘り方でピットはいくつか検出されているものの、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。器形や時期が推定できる遺物はほとんど無い。カマドの位置は不明であり、住居の廃棄時期も不明である。

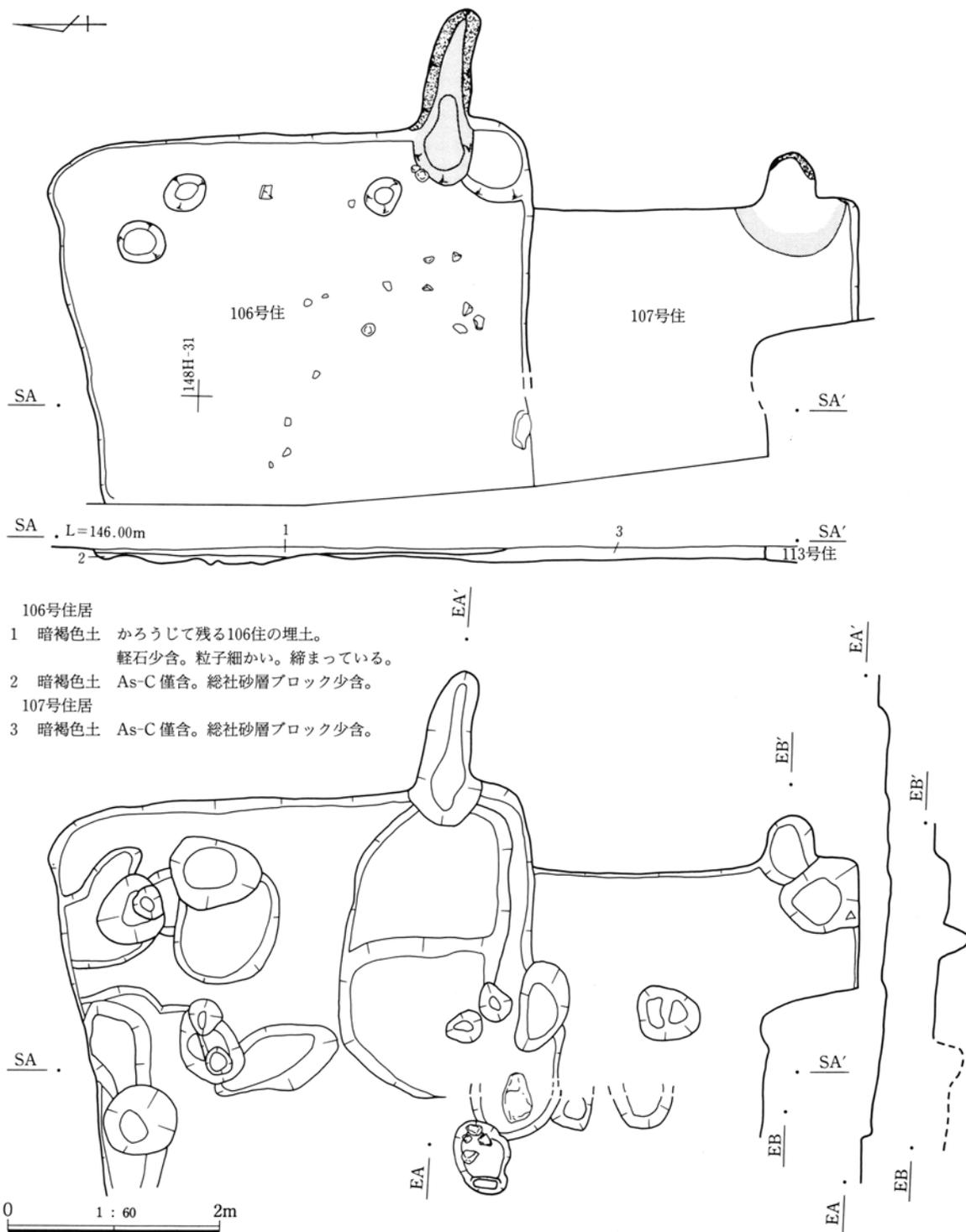
105号竪穴住居跡(第141図、写真図版) 148H-32グリッドに位置し、104号竪穴

住居跡と同様に、住居の大部分を圃場整備以前の農道跡に壊されており、確認作業時点で確認面が浅いこともあり、床面どころか掘り方がやっと検出できる程度の残存状態であり、重複関係や平面形態は不明である。掘り方で壁溝のような掘り込みやピットはいくつか検出されているものの、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。器形や時期が推定できる遺物もほとんど無い。カマドの位置は不明であり、住居の廃棄時期も不明である。ただ、農道跡を挟んで存在する110号竪穴住居跡と同一の住居の可能性もある。

106号竪穴住居跡・107号竪穴住居跡(第142図、写真図版50・51) 148H-31グリッドに位置し、重複関係では土層確認セクションから107号竪穴住居跡の方が最も古く、次に106号竪穴住居跡で、113号竪穴住居跡が最も新しい。平面形態は西壁部分が調査区域外に延びるために不明である。確認面が浅いために106号竪穴住居跡は壁高が約5cmと僅かであり、107号竪穴住居跡は大部分の床面が壊されており、掘り方が露出してし

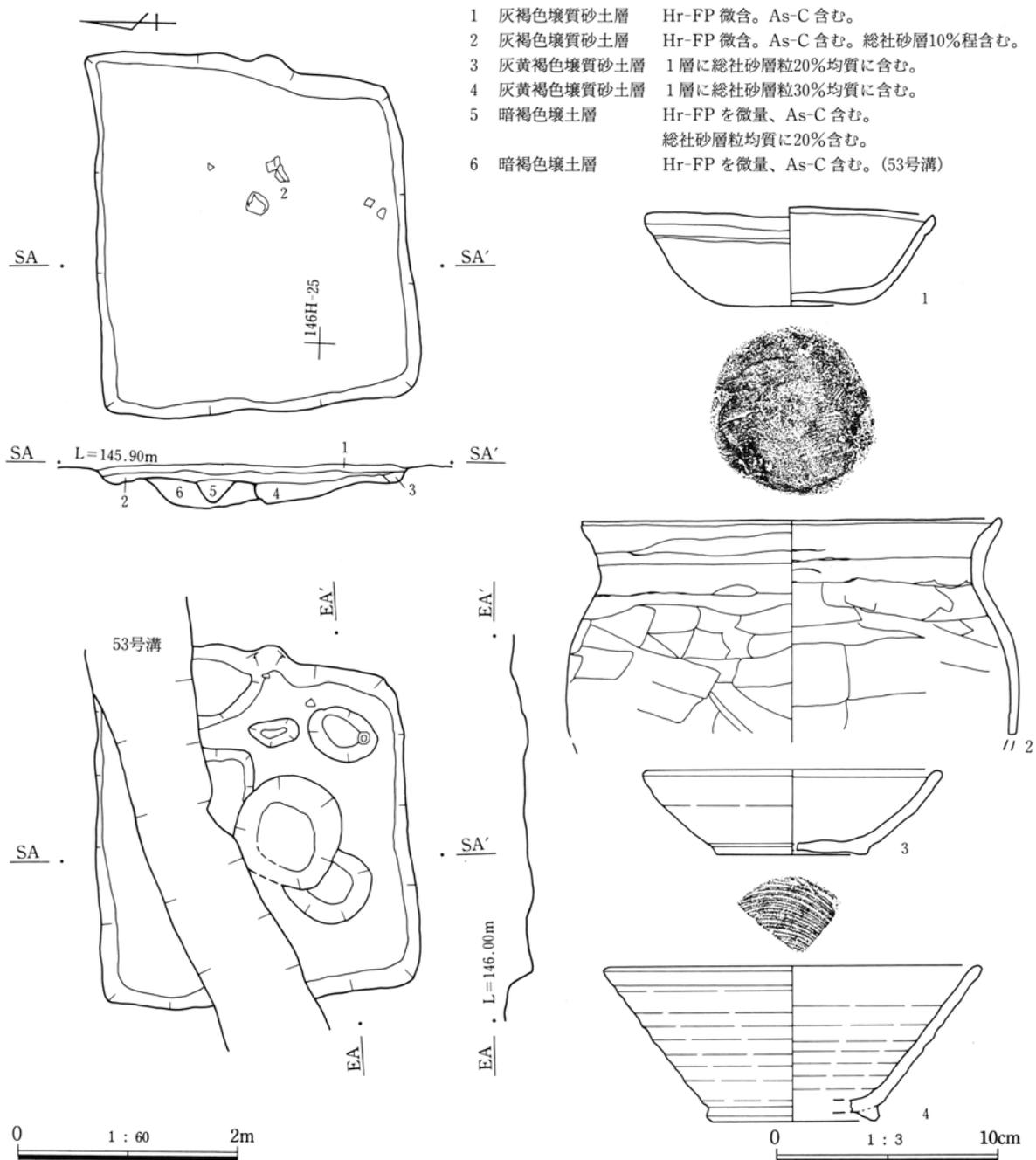
第3章 検出された遺構・遺物

まっている。大小の楕円形～円形の床下土坑やピットが多数検出されており、柱穴に相当する可能性があるものも存在するが、明確な壁溝、貯蔵穴は検出されていない。器形や時期が推定できる遺物もほとんど無い。106号竪穴住居跡のカマドは東壁の南東隅に位置し、煙道部の両側面に構築材の粘土がしっかり残存している。107号竪穴住居跡のカマドも東壁の南東隅に位置するが、確認面が浅いために残存状態は良くない。住居の廃棄時期は竪穴住居跡の形態から、両住居共に10世紀代と考えられる。

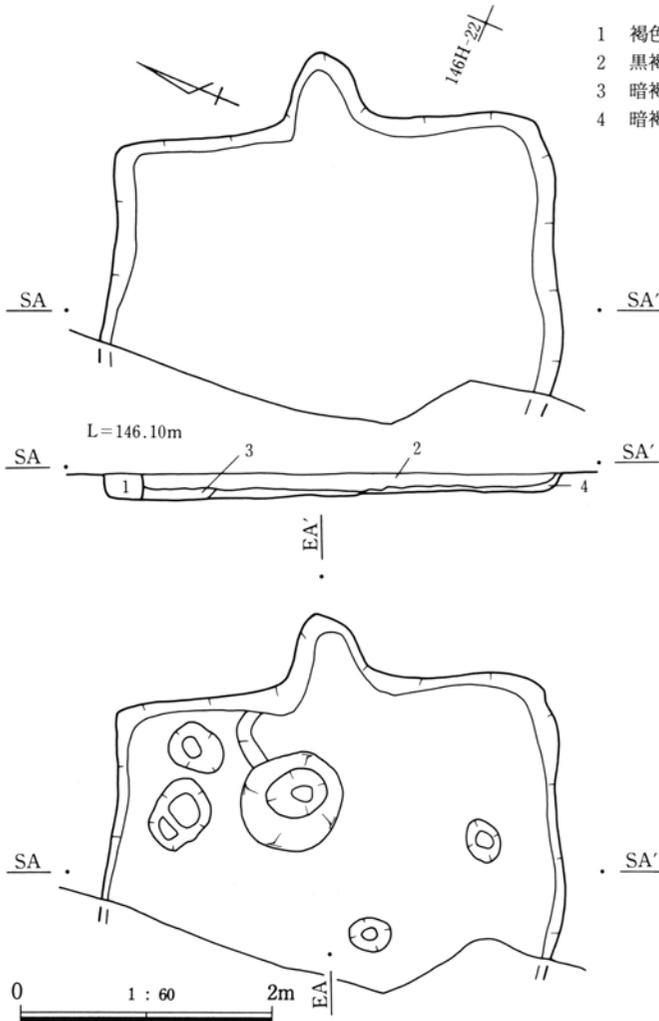


第142図 106・107号住居跡

108号竪穴住居跡（第143図、写真図版51・135） 146H-25グリッドに位置し、重複関係は平安時代以前と考えられる53号溝を壊している。平面形態は北壁が南壁よりもやや長い台形である。貼り床の床面は堅く平坦である。確認面が浅いために残存する壁高は約5cmと僅かで、緩やかに立ち上がる。掘り方で正方形から楕円形の床下土坑がいくつか検出されているものの、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。あるいは古い53号溝の埋没土中に掘り込まれたために、調査時点で存在が確認できなかった土坑やピットがあったかもしれない。遺物は土師器の坏と甕、須恵器の坏と椀などが出土している。カマドの痕跡は無く、あるいは竪穴遺構かもしれない。住居の廃棄時期は遺物から9世紀後半と考えられる。



第143図 108号住居跡



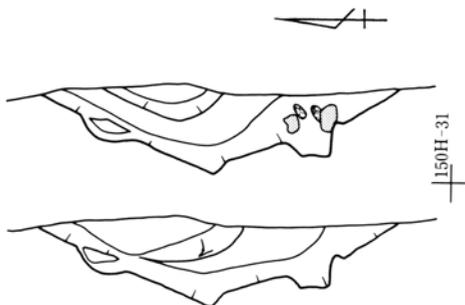
- 1 褐色土 本来的な住居埋土ではない。
- 2 黒褐色土 軽石（主にAs-C）多含。あまり締まりがない。
- 3 暗褐色土 軽石の含有量が少ない。
- 4 暗褐色土 As-Cはあまり含まない。

109号竪穴住居跡（第144図、写真図版51）146H-22グリッドに位置し、西壁部分を圃場整備以前の農道跡に壊されている。重複関係は無い。平面形態はおそらくは長方形である。貼り床状の床面は平坦である。残存する壁高は約10cmで、やや直立気味に立ち上がる。土層確認セクションの北壁部分に、109号竪穴住居跡よりも新しい小さなピットが検出されているが、確認作業時点では形状を把握することができなかった。掘り方で大小の楕円形～円形の床下土坑やピットがいくつか検出されており、柱穴に相当する可能性があるものも存在するが、明確な壁溝、貯蔵穴は検出されていない。器形や時期が推定できる遺物はほとんど無い。カマドは東壁のほぼ中央に位置するが、燃焼部の痕跡などはあまり明確でない。住居の廃棄時期は不明である。

第144図 109号住居跡

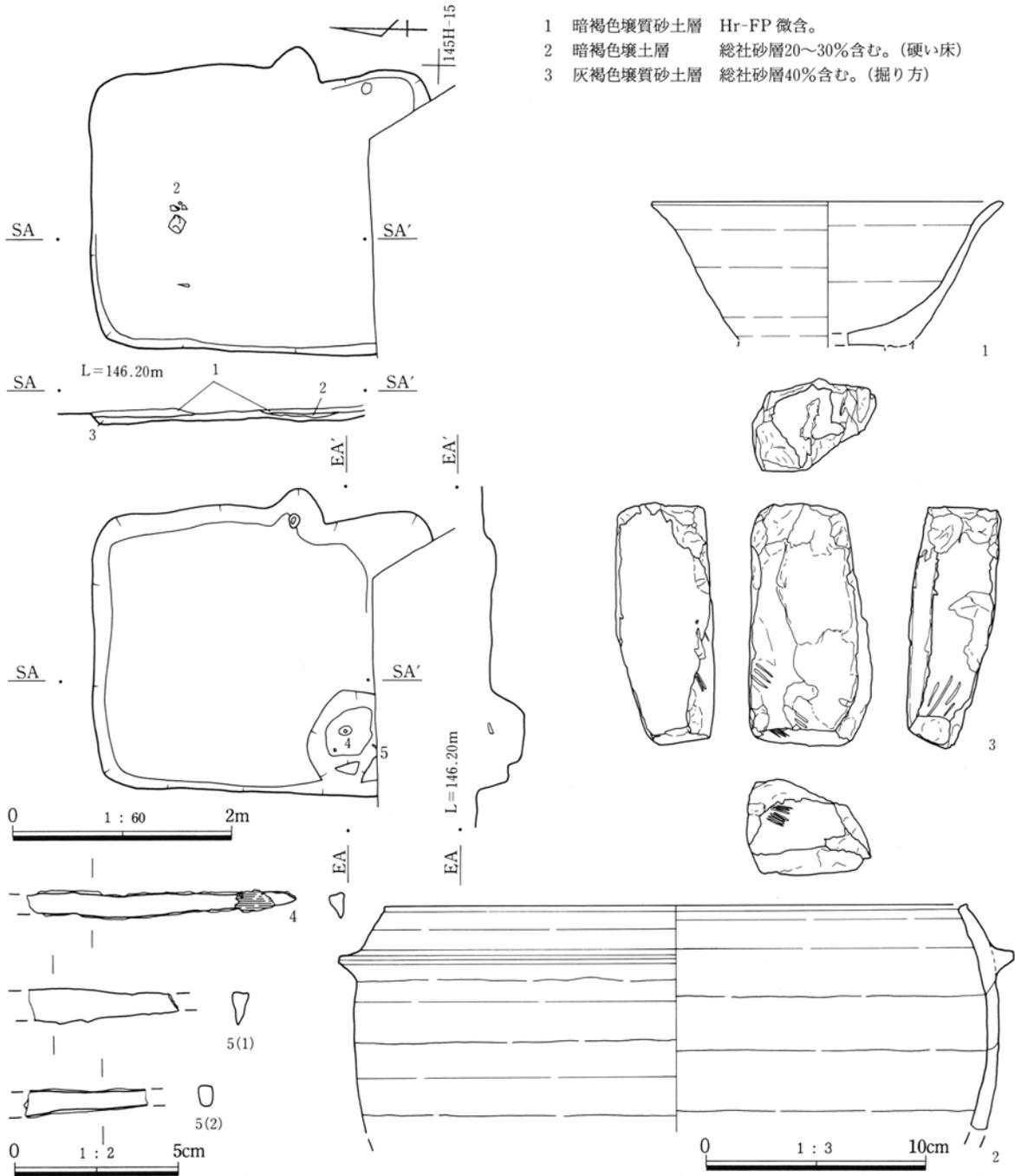
110号竪穴住居跡（第145図、写真図版51・52）150H-31グリッドに位置し、105号竪穴住居跡と同様に、住居の大部分を圃場整備以前の農道跡に壊されており、確認作業時点で確認面が浅いこともあり、床面どころか掘り方がやっと検出できる程度の残存状態であり、重複関係や平面形態は不明である。掘り方で壁溝のような掘り込みやピットはいくつか検出されているものの、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。器形や時期が推定できる遺物もほとんど無い。カマドの位置は不明であるが、南西隅部分に相当するかもしれない残存部分に、焼土と炭の分布が少量見られることから、カマドの痕跡の可能性もあるかもしれない。

住居の廃棄時期も不明である。ただ、農道跡を挟んで存在する105号竪穴住居跡と同一の住居の可能性もある。



第145図 110号住居跡

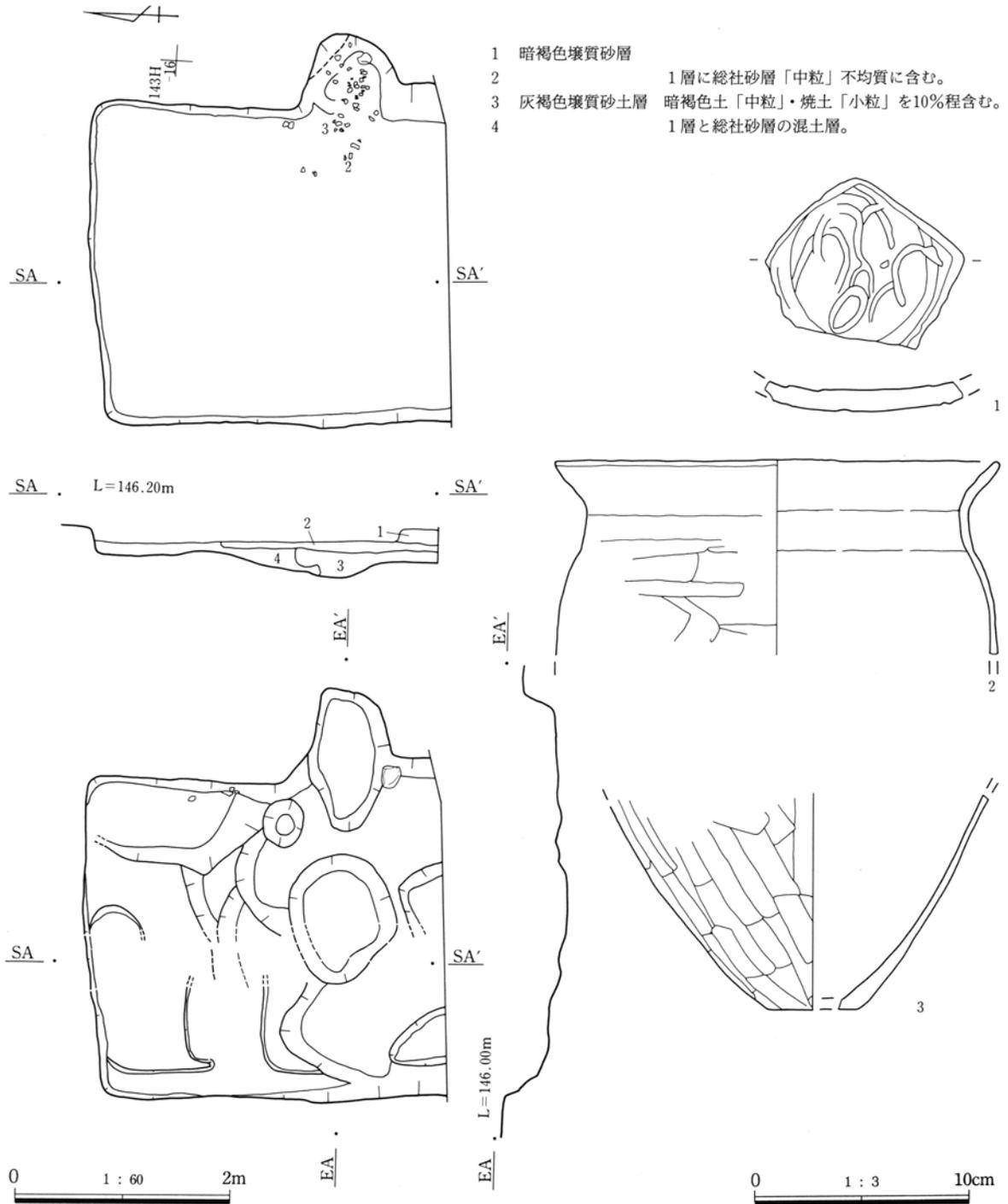
111号竪穴住居跡（第146図、写真図版52・135） 145H-15グリッドに位置し、南壁から南西隅部分にかけて、調査区域外に延びているために重複関係は不明だが、平面形態は長方形である。確認面が浅いために残存する壁高は約5cmと僅かで、緩やかに立ち上がる。掘り方も浅く、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。遺物は須恵器の椀と羽釜、砥石などが出土しており、特に南西隅付近の楕円形の床下土坑内から刀子が出土している。カマドは東壁の中央からやや南寄りに位置するが、確認面が浅いために残存状態が良くないのか、焼土や灰などもほとんど検出されていない。住居の廃棄時期は遺物から10世紀前半と考えられる。



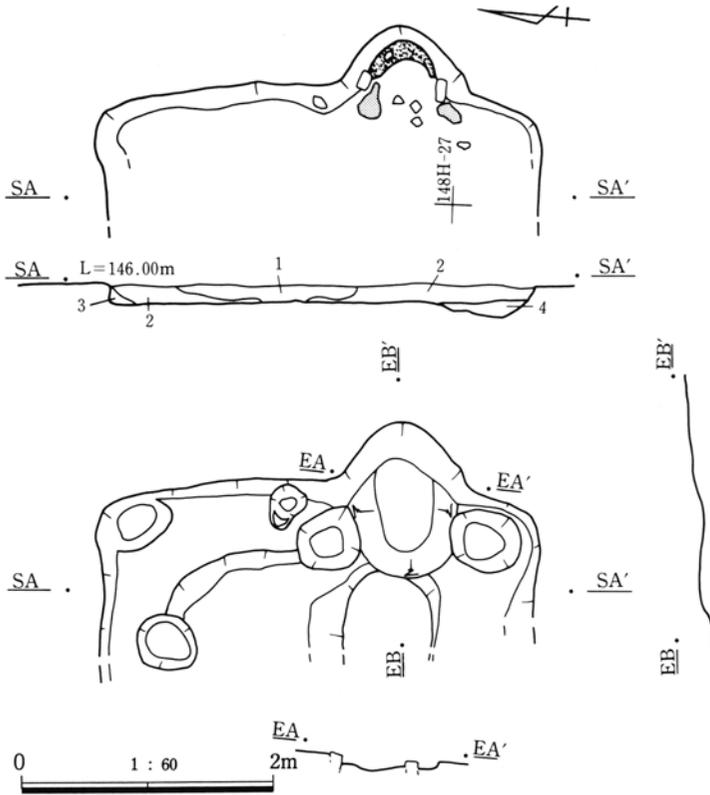
第146図 111号住居跡

第3章 検出された遺構・遺物

112号竪穴住居跡（第147図、写真図版52・53・135） 143H-16グリッドに位置し、南壁部分が調査区域外に延びるために重複関係は不明だが、平面形態はおそらくは長方形である。床面は堅く平坦である。残存する壁高は約10～15cmで、直立気味に立ち上がる。掘り方で壁溝のような掘り込みや、大小の楕円形～円形の床下土坑やピットがいくつか検出されているが、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。遺物は土師器の坏や甕などがカマドの燃焼部分から集中して出土している。カマドは東壁の南東隅に位置し、住居の廃棄時期は遺物から9世紀中葉と考えられる。



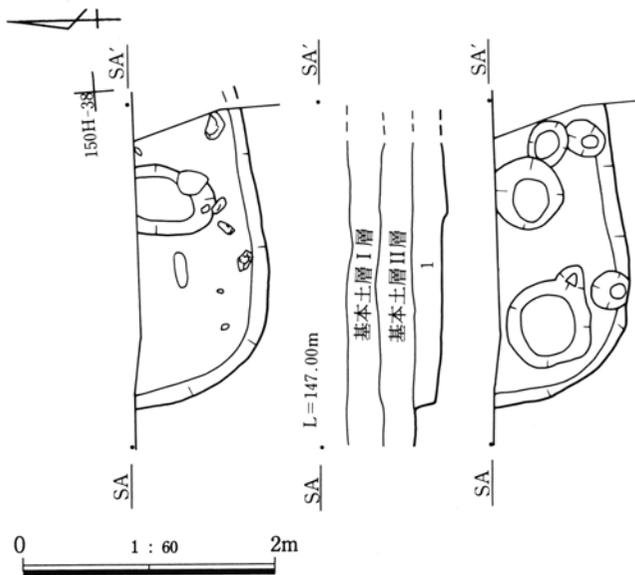
第147図 112号住居跡



- 1 暗褐色土 軽石やや多含。粒子粗く締まりない。
- 2 暗褐色土 軽石を含む。粒子粗いがやや締まる。
- 3 褐色土 2層より締まりあり。
- 4 黒褐色土 軽石少含。(床下掘り方への埋土)

第148図 113号住居跡

113号竪穴住居跡(第148図、写真図版53) 148H-27グリッドに位置し、重複関係は土層確認セクションから107号竪穴住居跡の方が古く、113号竪穴住居跡が新しい。住居の西側部分を圃場整備以前の農道跡に壊されており、平面形態は不明である。床面は比較的堅く平坦である。残存する壁高は約15cmで、直立気味に立ち上がる。掘り方で円形の床下土坑やピットがいくつか検出されており、両袖の手前に対で存在するピットが本来の袖の構築材かもしれない。明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。器形や時期が判断できる遺物はほとんど無い。カマドは東壁の中央からやや南寄りに位置し、両袖に構築材として石を使用しており、燃烧部の壁は粘土で形成している。住居の廃棄時期は新旧関係から10世紀代と考えられる。



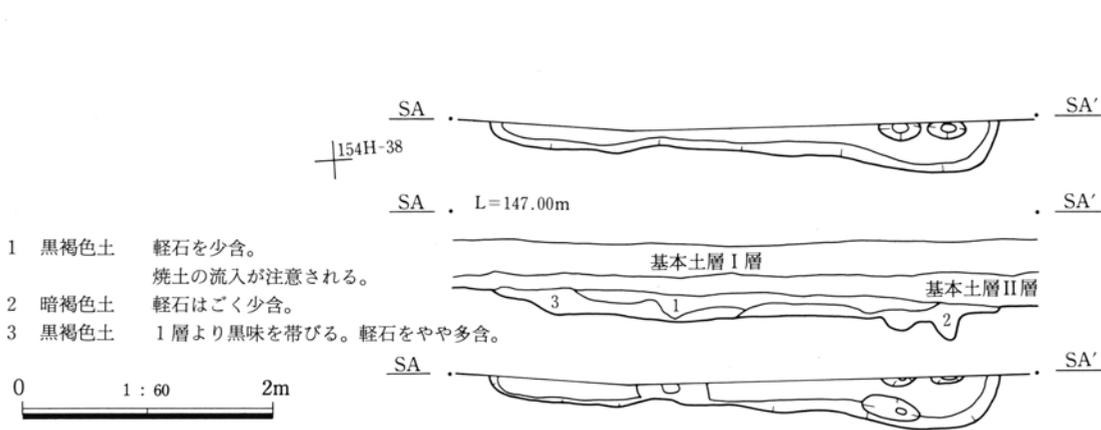
- 1 黒褐色土 軽石を少含。焼土の流入が注意される。

第149図 114号住居跡

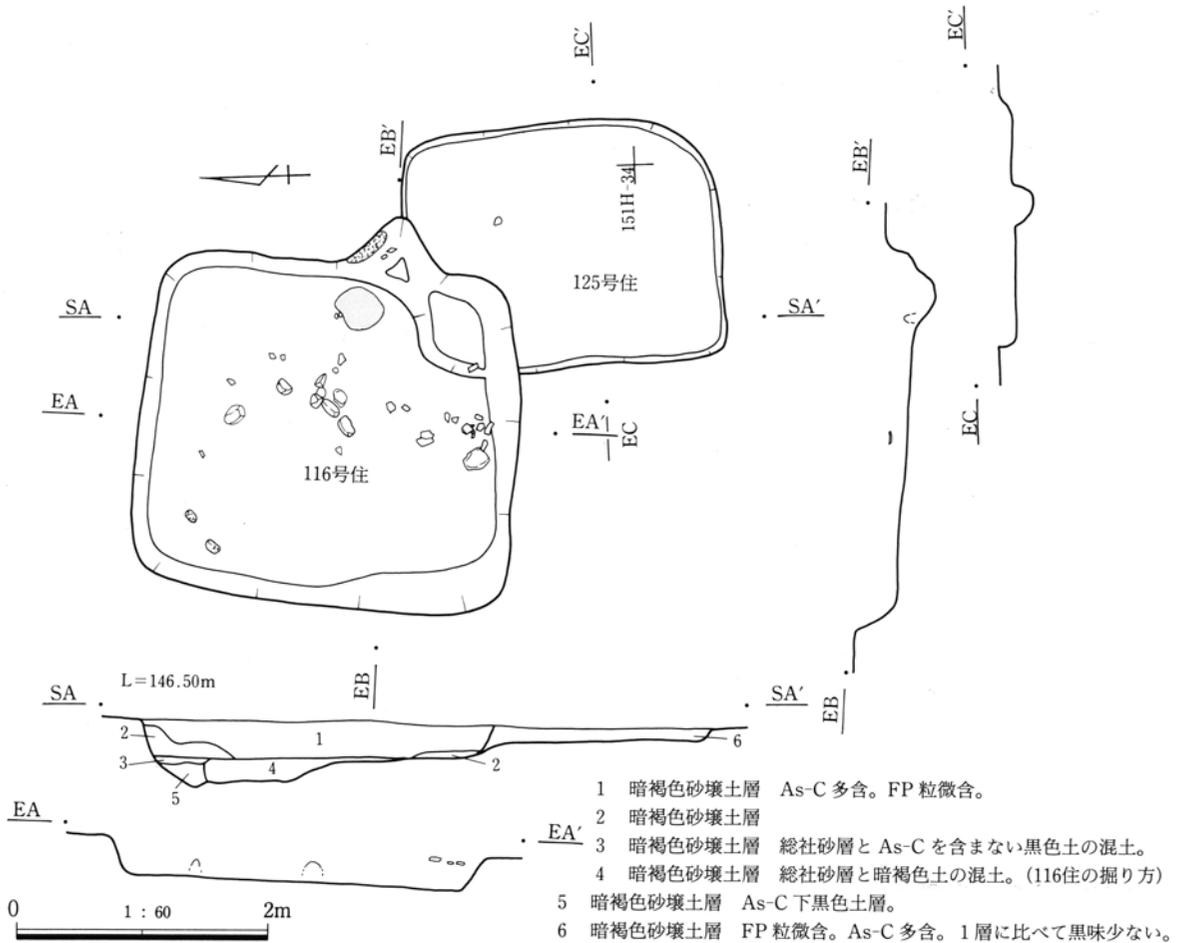
114号竪穴住居跡(第149図、写真図版53) 150H-38グリッドに位置し、住居の東側部分を圃場整備以前の農道跡に壊されており、北側部分は調査区域外に延びるために、重複関係や平面形態は不明である。残存する壁高は約20cmで、直立気味に立ち上がり、床面は平坦である。掘り方で円形の床下土坑やピットがいくつか検出されており、南西隅など柱穴に相当する2ヶ所が存在する。明確な壁溝、貯蔵穴は検出されていない。器形や時期が判断できる遺物はほとんど無い。カマドの位置は不明だが、壊された部分に存在したものと考えられる。住居の廃棄時期も不明である。

第3章 検出された遺構・遺物

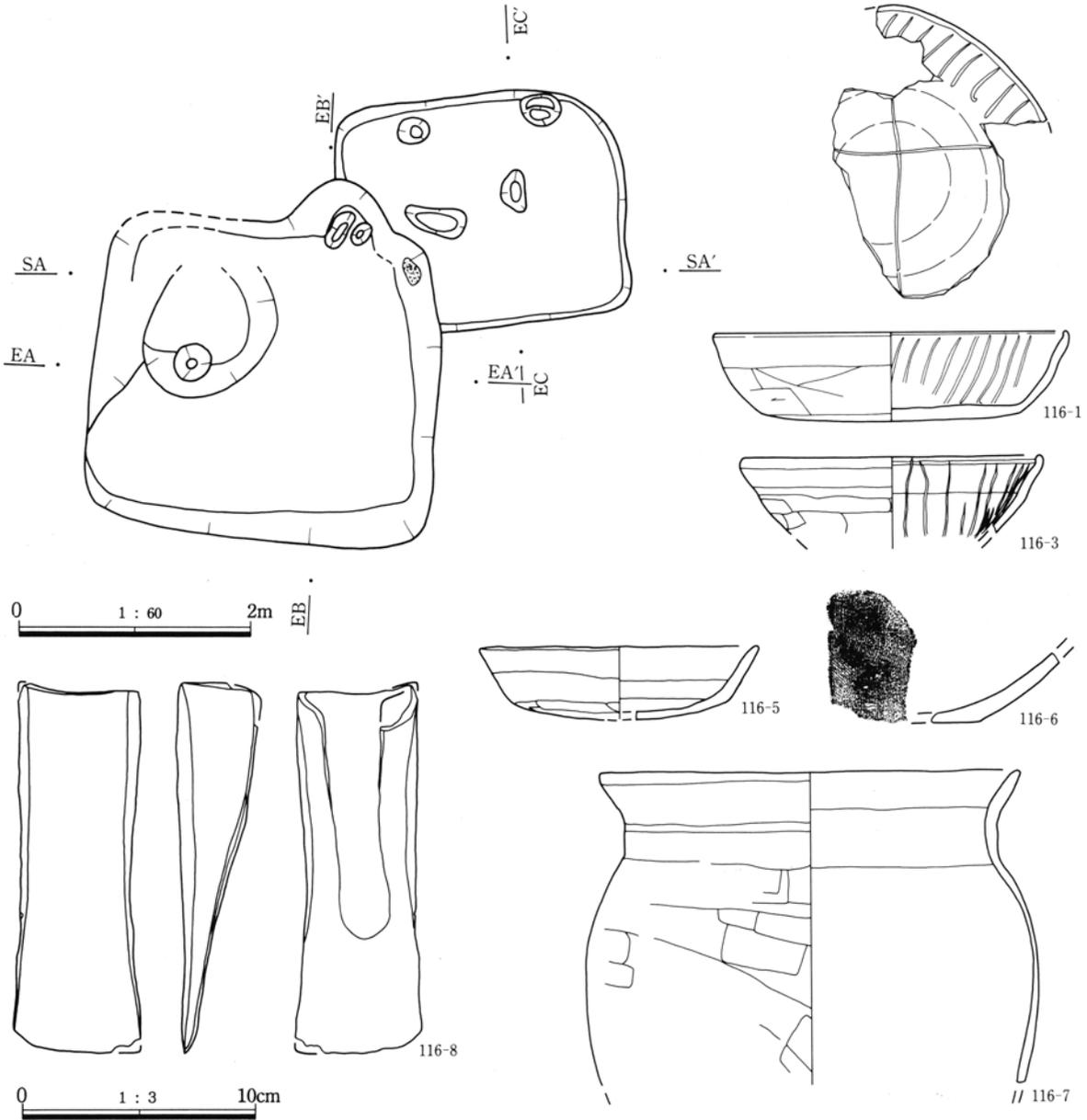
115号竪穴住居跡(第150図、写真図版53) 154H-38グリッドに位置し、南壁付近が僅かに検出されただけで、住居の大部分は調査区域外に延びるために、重複関係や平面形態は不明である。地山を掘り込んだだけの床面はしっかりしていない。残存する壁高は約15~20cmで、壁そのものの緩やかに立ち上がる。南東隅部分にピットが存在するが、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。器形や時期が判断できる遺物はほとんど無い。カマドの位置は不明だが、調査区域外の部分に存在すると考えられる。住居の廃棄時期は不明である。



第150図 115号住居跡



第151図 116・125号住居跡

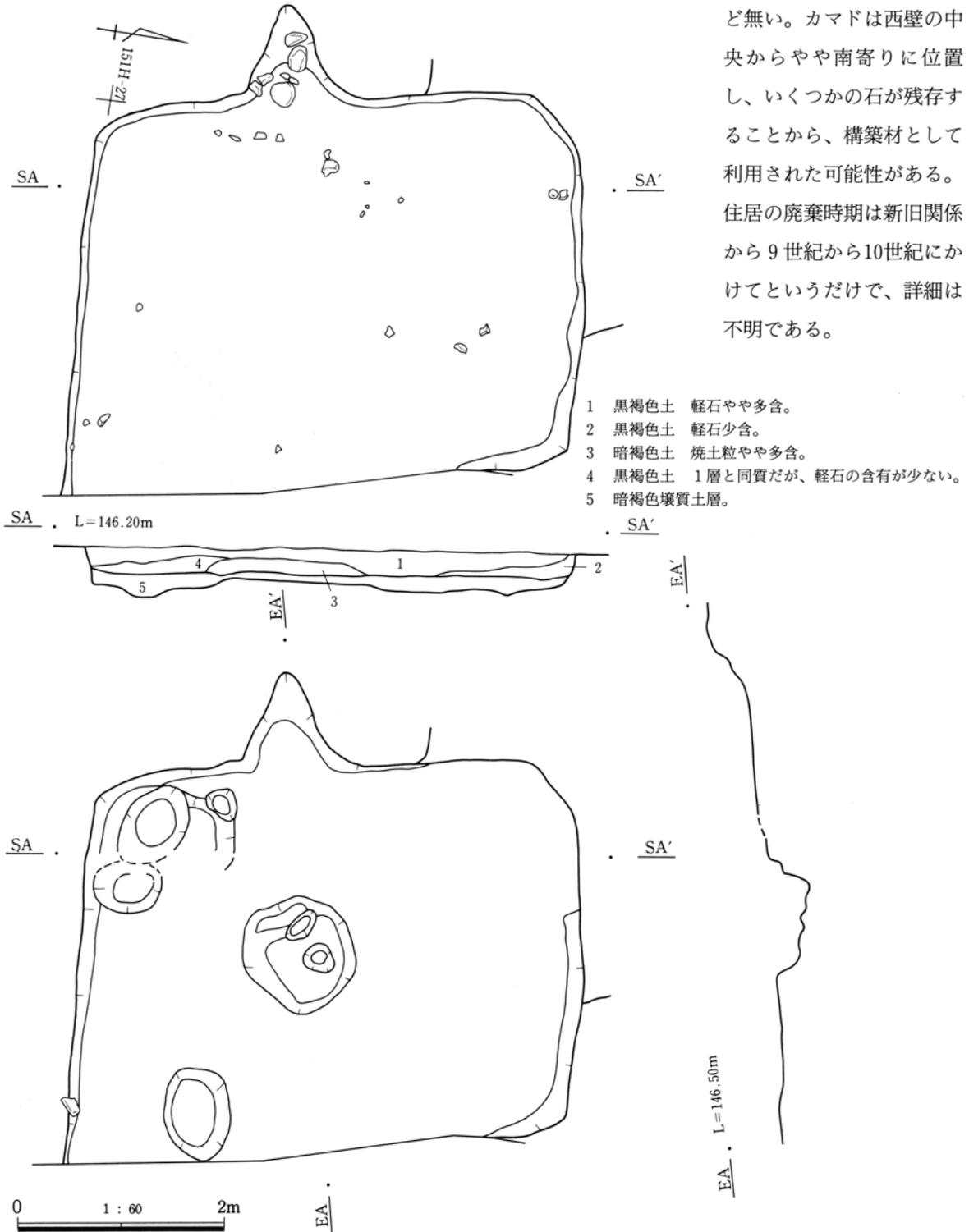


第152図 116・125号住居跡

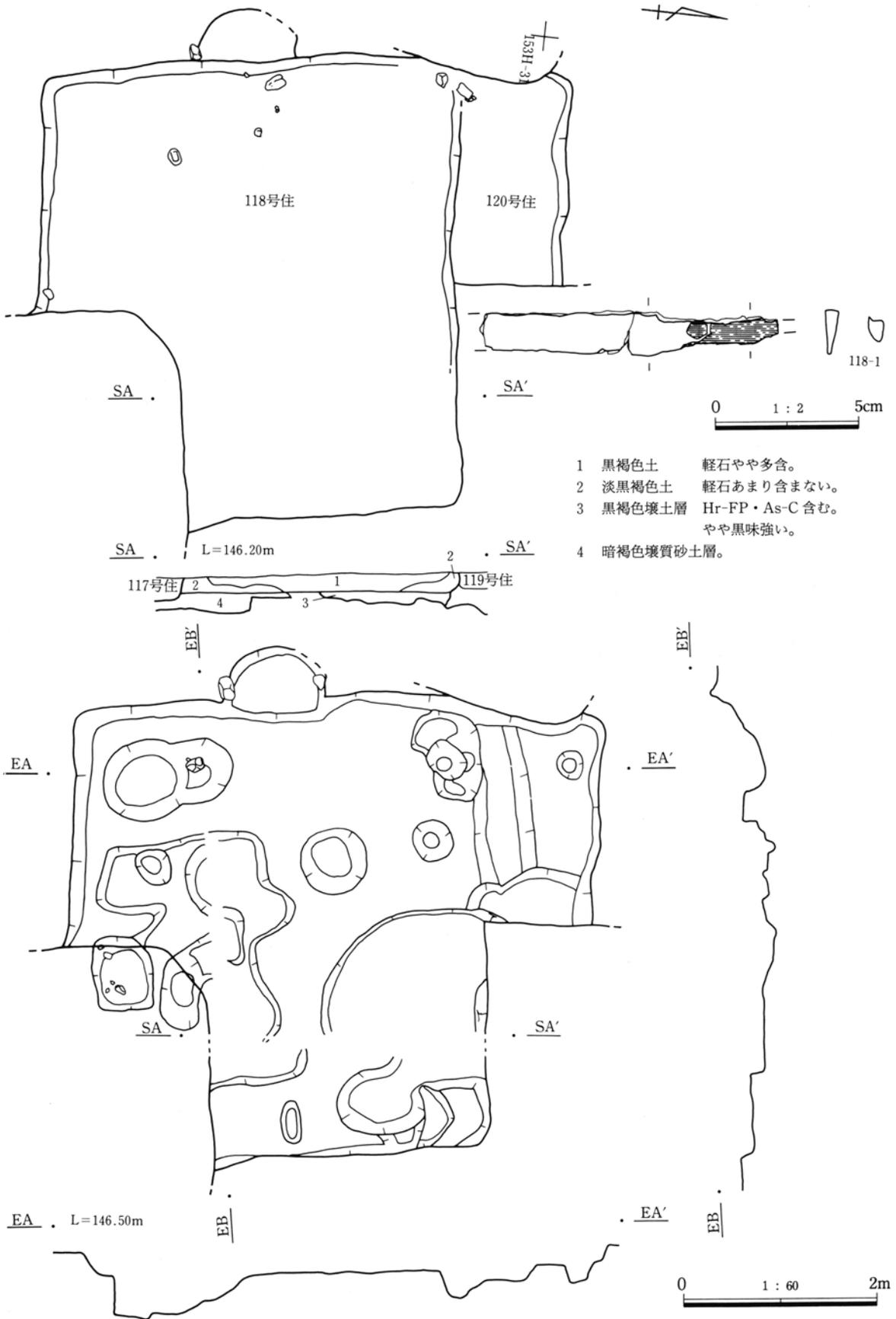
116号竪穴住居跡・125号竪穴住居跡（第151・152図、写真図版53・54・135・136） 151H-34グリッドに位置し、重複関係は125号竪穴住居跡が古く、116号竪穴住居跡が新しい。平面形態は116号竪穴住居跡が正方形で、125号竪穴住居跡が長方形である。貼り床の床面は堅く平坦である。残存する壁高は116号竪穴住居跡が約25~30cmと深く直立気味に立ち上がるのに対して、125号竪穴住居跡は約10cmで、緩やかに立ち上がる。掘り方でピットがいくつか出土しているが、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。遺物は土師器の坏や甕、鉄斧などが、主に116号竪穴住居跡から出土している。116号竪穴住居跡のカマドは東壁の南東隅寄りに位置し、燃烧部の左壁部分に構築材としての粘土が検出されている。125号竪穴住居跡にはカマドの痕跡が認められず、北西部分に位置したために116号竪穴住居跡に壊されたのか、あるいはカマドが付設されない竪穴遺構なのかもしれない。住居の廃棄時期は遺物から116号竪穴住居跡は9世紀中葉で、125号竪穴住居跡はそれ以前と考えられる。

第3章 検出された遺構・遺物

117号竪穴住居跡(第153図、写真図版54) 151H-27グリッドに位置し、重複関係は118号竪穴住居跡の方が古く、117号竪穴住居跡が新しい。南東隅部分から東壁の大部分にかけて、圃場整備以前の農道跡に壊されている。平面形態は長方形である。床面は堅く平坦である。残存する壁高は約25cmで、直立気味に立ち上がる。掘り方で大小の楕円形～円形の床下土坑が検出されているが、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。あるいは南東隅付近の土坑が柱穴に相当するかもしれない。器形や時期の判断できる遺物はほとんど無い。カマドは西壁の中央からやや南寄りに位置し、いくつかの石が残存することから、構築材として利用された可能性がある。住居の廃棄時期は新旧関係から9世紀から10世紀にかけてというだけで、詳細は不明である。



第153図 117号住居跡

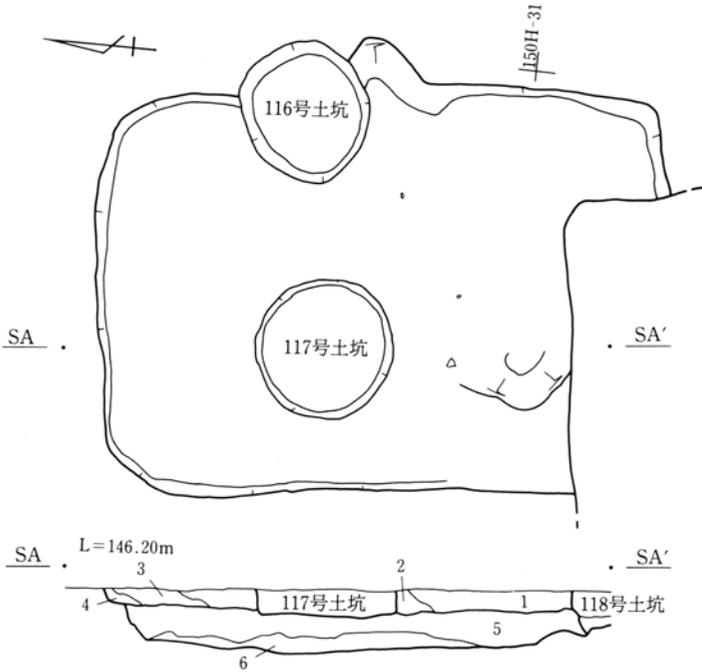


第154図 118・120号住居跡

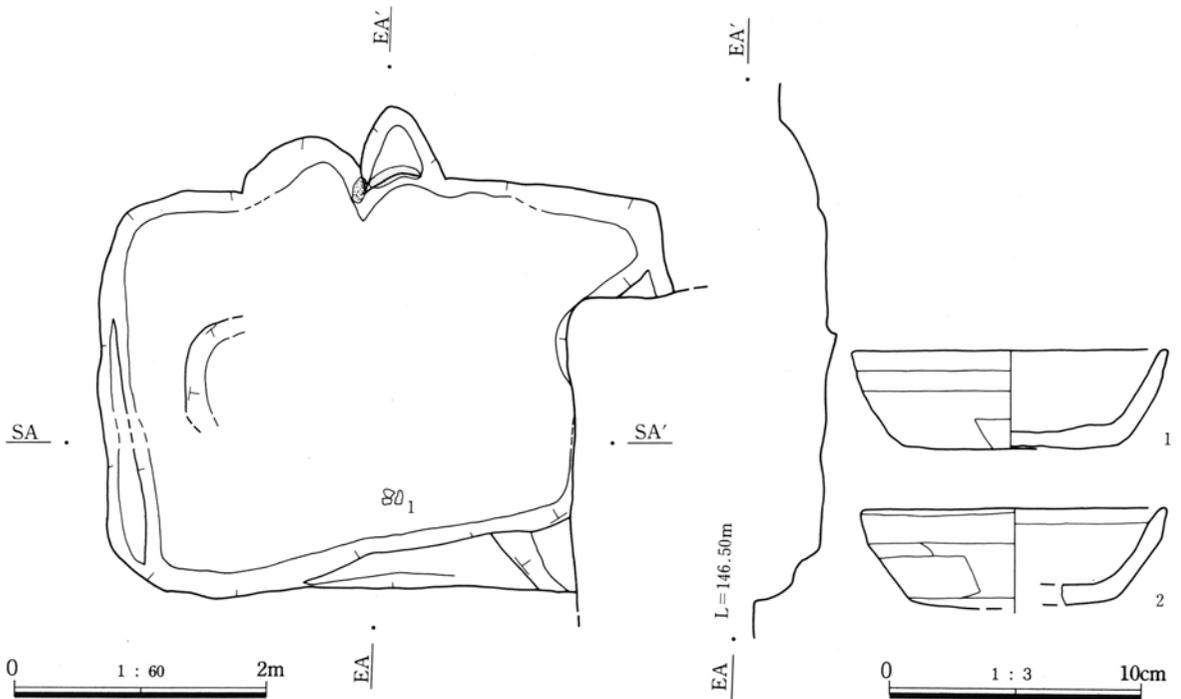
第3章 検出された遺構・遺物

118号竪穴住居跡・120号竪穴住居跡（第154図、写真図版55・56・136） 153H-31グリッドに位置し、重複関係では120号竪穴住居跡が最も古く、次に119号平坦竪穴住居跡、118号竪穴住居跡の順で、117号竪穴住居跡と121号竪穴住居跡が最も新しい。平面形態は118号竪穴住居跡が東西長軸の長方形で、120号竪穴住居跡は118号竪穴住居跡や119号竪穴住居跡に壊されているために不明である。床面は堅く平坦である。残存する壁高は約20cmで、直立気味に立ち上がる。掘り方で大小の楕円形～円形の床下土坑やピットなどが検出されており、118号竪穴住居跡の柱穴と考えられる2ヶ所のピットが存在するが、明確な壁溝、貯蔵穴は検出されていない。遺物は刀子が出土しているが、器形や時期の判断できる遺物はほとんど無い。118号竪穴住居跡のカマドは西壁のほぼ中央に位置し、両袖は石を構築材として使用しているが、確認面が浅いために残存状態は

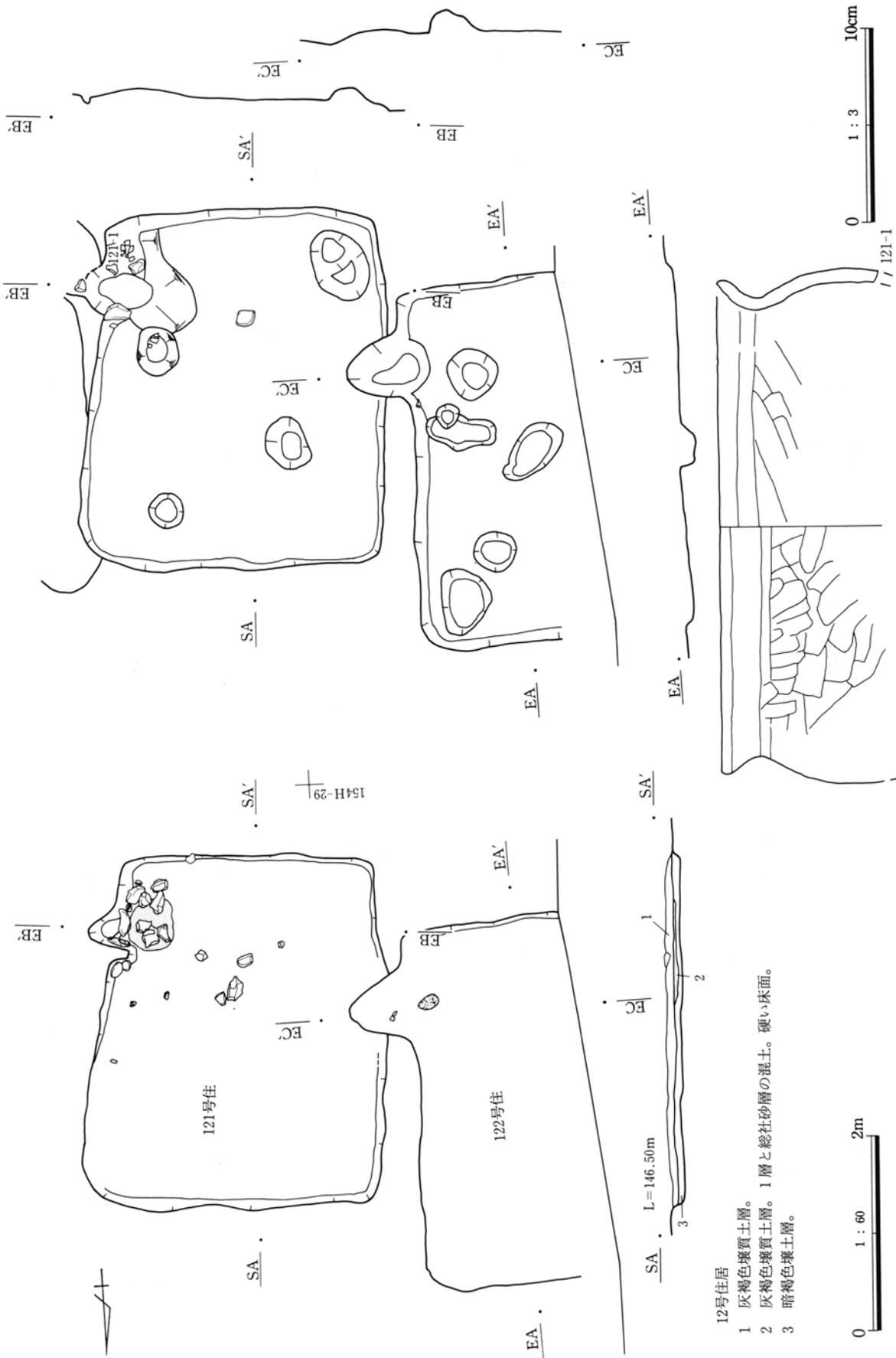
良くない。120号竪穴住居跡のカマドは118号竪穴住居跡や119号竪穴住居跡に壊されているために位置が不明である。住居の廃棄時期は新旧関係から118号竪穴住居跡は9世紀前半以後、120号竪穴住居跡は9世紀前半以前と考えられる。



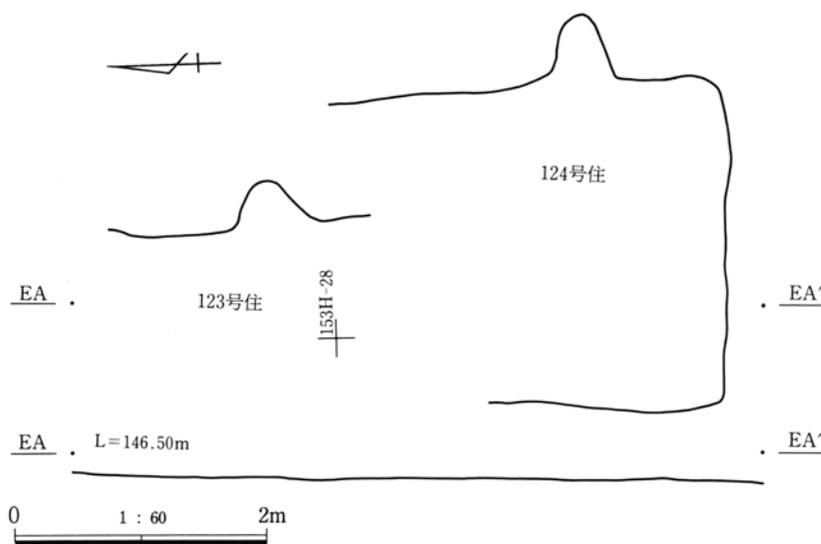
- 1 黒褐色土 軽石やや多含。
- 2 淡黒褐色土 軽石多含。やや締まりあり。
- 3 淡黒褐色土 軽石少含。
- 4 淡黒褐色土 軽石ほとんど含まない。
- 5 暗褐色壤土層 Hr-FP・As-C 含む。
- 6 暗褐色壤土層 5層と総社砂層の混土層。



第155図 119号住居跡



第156図 121・122号住居跡



第157図 123・124号住居跡

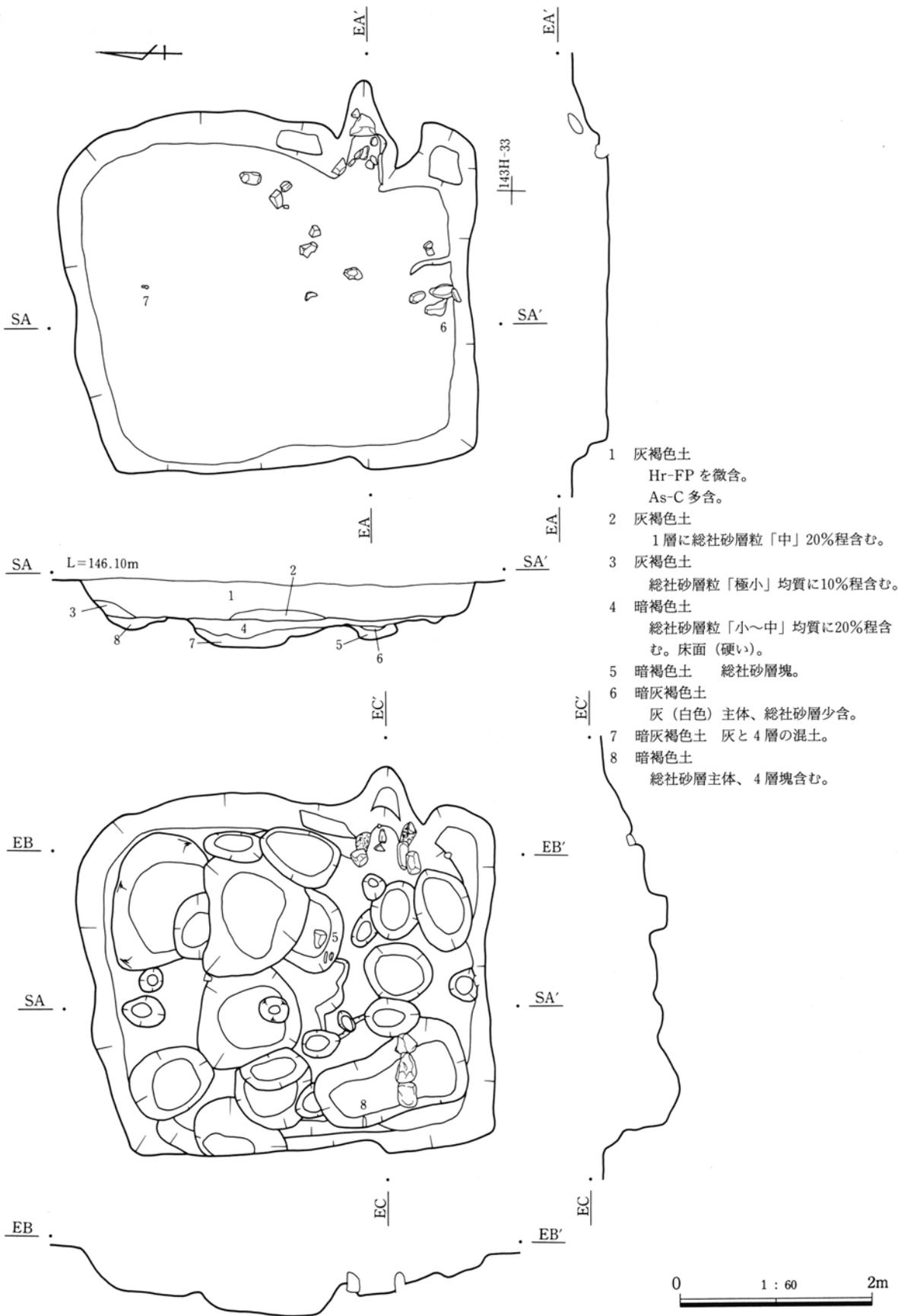
123号竪穴住居跡・124号竪穴住居跡(第157図、写真図版56・57) 153H-28グリッドに位置し、確認面が浅いため、壁が残っておらず、住居形態も不明確であるが、重複関係は124号竪穴住居跡が古く、123号竪穴住居跡が新しいと考えられる。平面形態は124号竪穴住居跡が長方形である。明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。器形

や時期の判断できる遺物はほとんど無い。カマドは東壁に位置している。住居の廃棄時期は不明である。

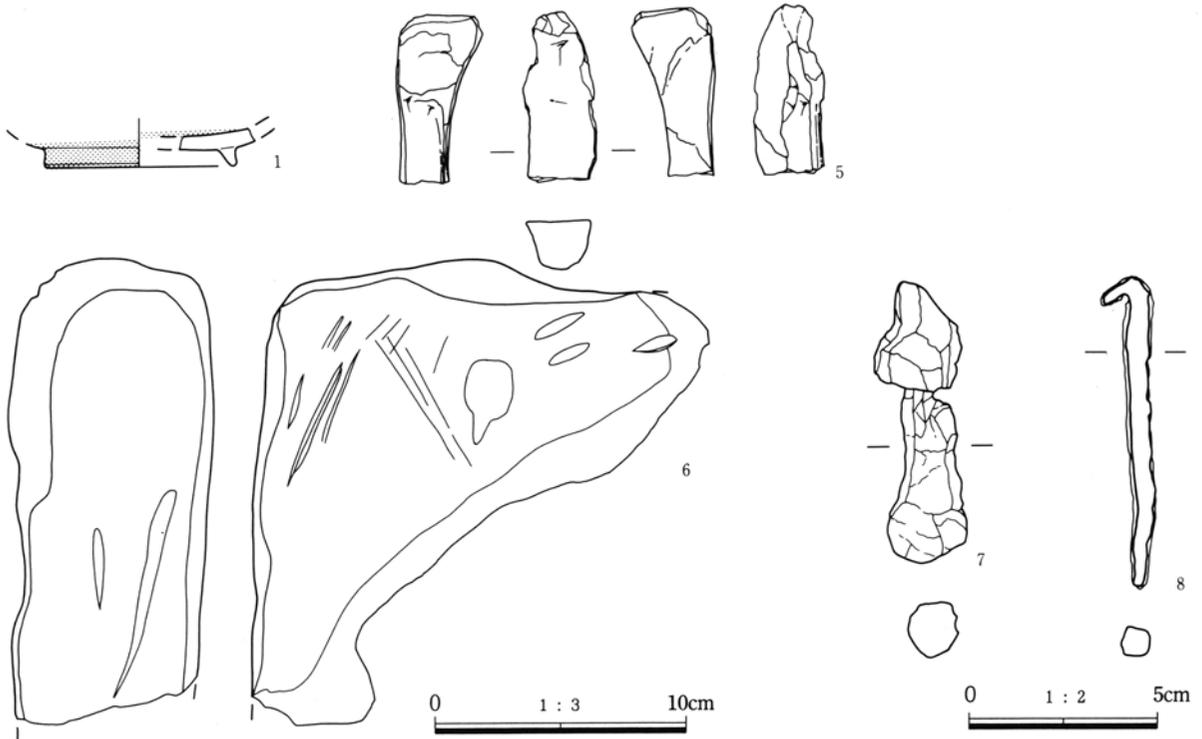
119号竪穴住居跡(第155図、写真図版55・136) 150H-31グリッドに位置し、重複関係では120号竪穴住居跡が最も古く、次に119号竪穴住居跡で、118号竪穴住居跡が最も新しい。さらに、116号土坑にカマド左袖部分を、117号土坑に住居の西側の一部を壊されている。平面形態は長方形である。床面は堅く平坦である。残存する壁高は約20cmで、直立気味に立ち上がる。掘り方は約30cmと深いものの、床下土坑などは無く、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。遺物は土師器の坏などが出土している。カマドは東壁のほぼ中央に位置し、左袖の掘り方の一部に粘土が残存することから、構築材として粘土が利用されたと考えられる。住居の廃棄時期は遺物から9世紀前半と考えられる。

121号竪穴住居跡・122号竪穴住居跡(第156図、写真図版56・136) 155H-30グリッドに位置し、重複関係は121号竪穴住居跡の方が古く、122号竪穴住居跡が新しい。平面形態は121号竪穴住居跡が長方形だが、122号竪穴住居跡は調査区域外に延びるために不明である。床面は共に堅く平坦である。確認面が浅いために残存する壁高は共に約5~10cmで、緩やかに立ち上がる。掘り方で大小の楕円形~円形の床下土坑やピットがいくつか出土しており、柱穴に相当するものが2ヶ所ほどある。明確な壁溝、貯蔵穴、は検出されていない。遺物は土師器の甕などが出土している。カマドは共に東壁の南東隅寄りに位置し、121号竪穴住居跡は両袖から燃焼部の壁にかけての構築材として石を使用している。住居の廃棄時期は新旧関係から121号竪穴住居跡が8世紀以後で、122号竪穴住居跡はそれ以後と考えられる。

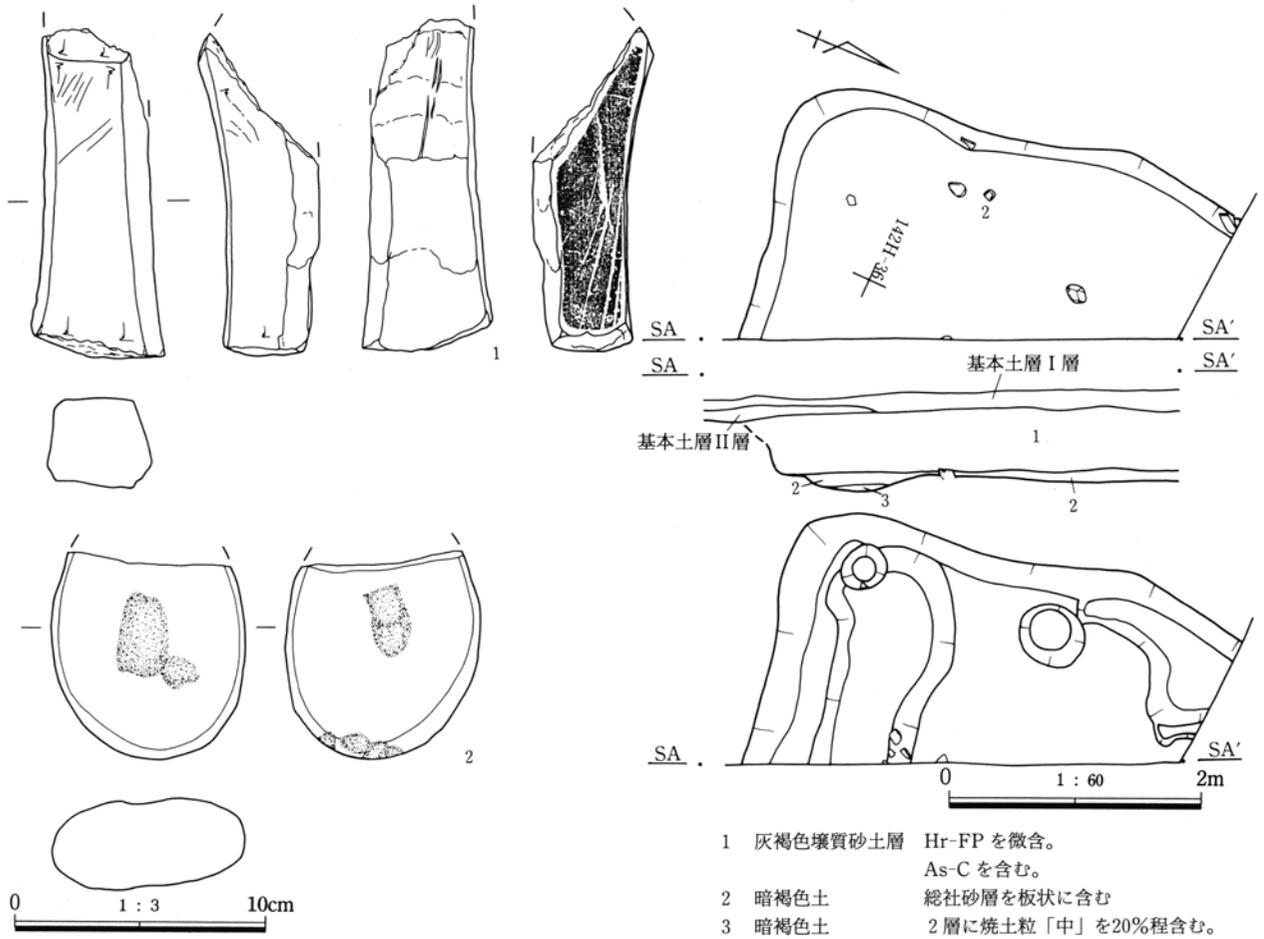
127号竪穴住居跡(第158・159図、写真図版57・136) 143H-34グリッドに位置し、重複関係は無い。平面形態は長方形である。床面は平坦である。残存する壁高は約40cmと深く、緩やかに立ち上がる。掘り方で大小の楕円形~円形の床下土坑やピットが多数出土しており、一部は貯蔵穴や柱穴に相当する。また、石が一行に並んでいる土坑があり、その目的はあるいは柱に関係するものなのかもしれない。明確な壁溝は検出されていない。遺物は緑釉陶器の椀、砥石、鉄釘などが出土している。カマドは東壁の南東隅寄りに位置し、両袖に石を構築材として使用している。住居の廃棄時期は遺物から9世紀後半以後と考えられる。



第158図 127号住居跡

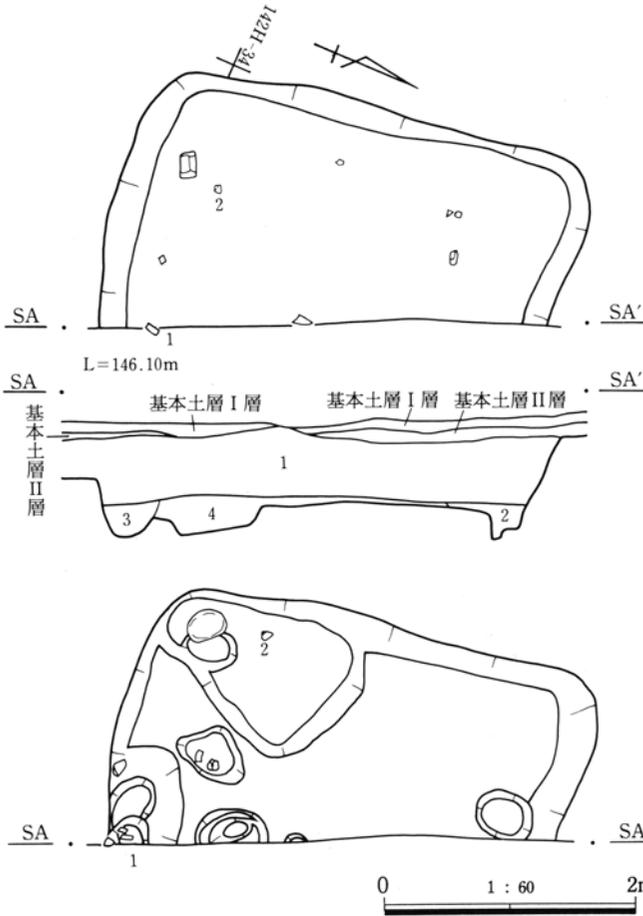


第159図 127号住居跡



- 1 灰褐色壤質砂土層 Hr-FPを微含。
As-Cを含む。
- 2 暗褐色土 総社砂層を板状に含む
- 3 暗褐色土 2層に焼土粒「中」を20%程含む。

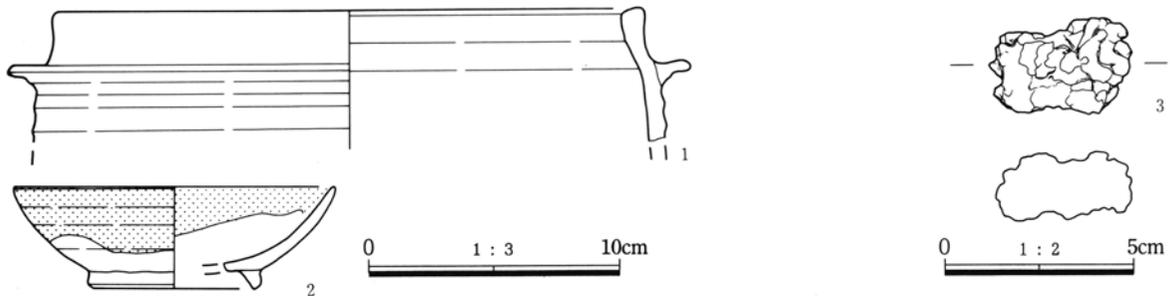
第160図 128号住居跡



- 1 灰褐色壤質砂土層 Hr-FPを微含。As-Cを含む。 3 暗褐色壤質砂土層
 2 暗褐色土 総社砂層主体、1層を少含。 4 暗褐色土

128号竪穴住居跡(第160図、写真図版57・58・136) 142H-36グリッドに位置し、調査区域外に延びるために、重複関係や平面形態は不明である。床面は堅く平坦である。残存する壁高は約40~45cmで、緩やかに立ち上がる。掘り方でピットが検出されているが、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。砥石などが出土しているが、明確に器形や時期の判断できる遺物はほとんど無い。カマドは調査区域外に位置すると思われる。住居の廃棄時期は不明である。

129号竪穴住居跡(第161図、写真図版58・136) 142H-34グリッドに位置し、東側半分が調査区域外に延びるために、重複関係や平面形態は不明である。床面は堅く平坦である。残存する壁高は約50cmと深く、直立気味に立ち上がる。掘り方で大小の床下



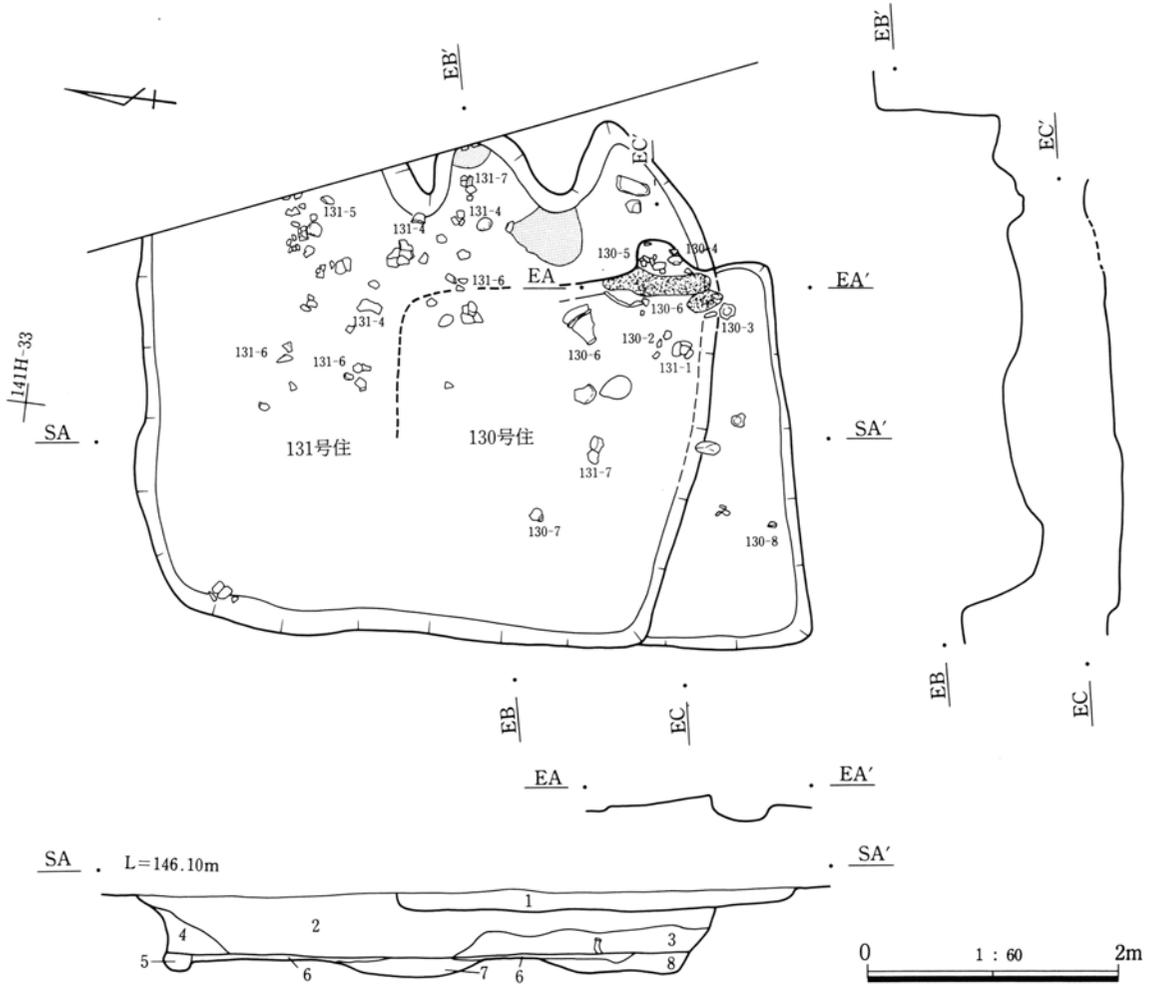
第161図 129号住居跡

土坑やピットがいくつか出土しているが、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。遺物は須恵器の羽釜や灰釉陶器の椀、鉄滓などが出土している。カマドは掘り方で南東部分の貯蔵穴状の土坑の存在から、調査区域外の東壁の南東隅寄りに位置すると思われる。住居の廃棄時期は遺物から10世紀前半と考えられる。

130号竪穴住居跡・131号竪穴住居跡(第162~166図、写真図版58~60・136・137) 141H-33グリッドに位置し、重複関係は131号竪穴住居跡が古く、130号竪穴住居跡が新しい。131号竪穴住居跡の北東隅付近が調査区域外に延びるものの、平面形態は共に長方形である。ただ、遺構確認時点での新旧関係の確認ミスで、130号竪穴住居跡の北壁から東壁のカマド際まで壊してしまっている。130号竪穴住居跡は確認面が浅いために、

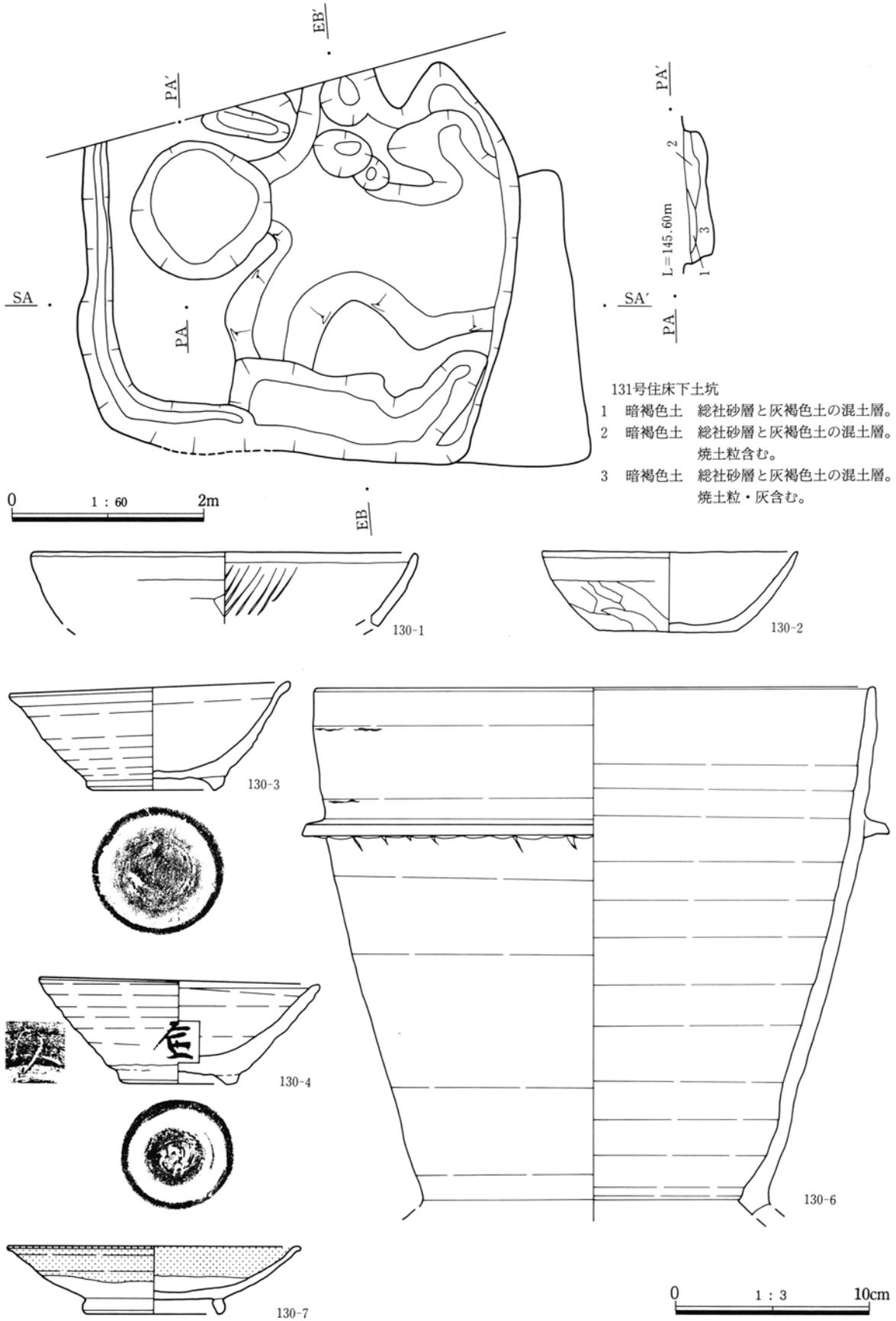
第3章 検出された遺構・遺物

残存する壁高は約10cmで、緩やかに立ち上がるのに対して、131号竪穴住居跡の床面は貼り床で堅く平坦であり、壁高は約50cmと深く、直立気味に立ち上がる。131号竪穴住居跡の掘り方で大型の床下土坑やピットなどが検出されており、北壁を中心に壁溝が認められるが、明確な貯蔵穴、柱穴は検出されていない。遺物は土師器の坏や甕、須恵器の碗や甑、灰釉陶器の碗などが、両住居のカマド付近を中心に出土している。カマドは共に東壁の南東隅に位置し、石がいくつか残存することから構築材として利用していたと考えられる。住居の廃棄時期は遺物から131号竪穴住居跡が9世紀、130号竪穴住居跡が10世紀前半と考えられる。



- 130号住居
- 1 灰褐色砂壤土層 As-Cを含む。Hr-FPを微含。
- 131号住居
- 2 灰褐色砂壤土層 As-Cを含む。Hr-FPを微含。
1層との区別はほとんどつかない、部分的に総社砂層を含む。硬い床はない。
- 3 灰褐色砂壤土層 総社砂層粒「中～大」を少含。
- 4 灰褐色砂壤土層 総社砂層粒「小」を均質に含む。
- 5 暗褐色土層（周溝）
- 6 暗褐色土、灰、総社砂層の混土。3枚の硬い床が層状をなす。
- 7 暗褐色壤質砂土層
- 8 暗褐色壤質砂土層 総社砂層を20%程含む。

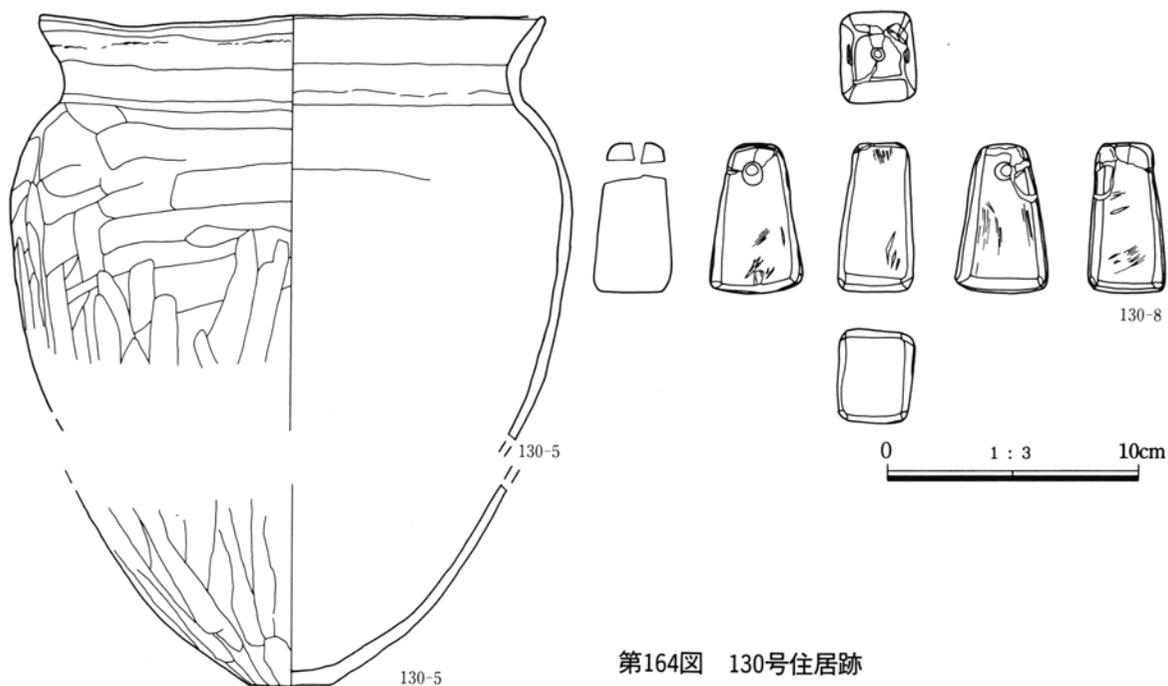
第162図 130・131号住居跡



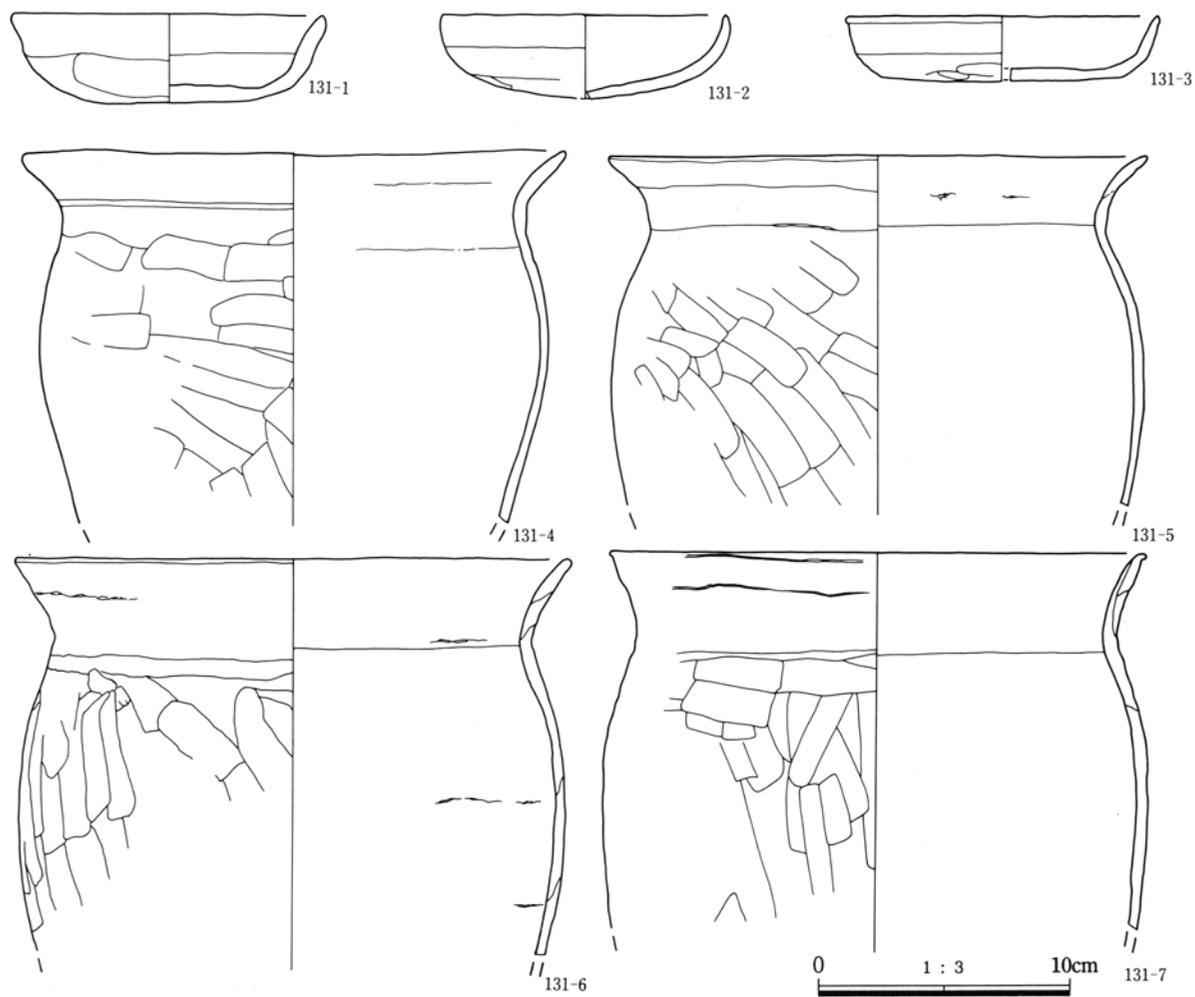
131号住床下土坑

- 1 暗褐色土 総社砂層と灰褐色土の混土層。
- 2 暗褐色土 総社砂層と灰褐色土の混土層。
焼土粒含む。
- 3 暗褐色土 総社砂層と灰褐色土の混土層。
焼土粒・灰含む。

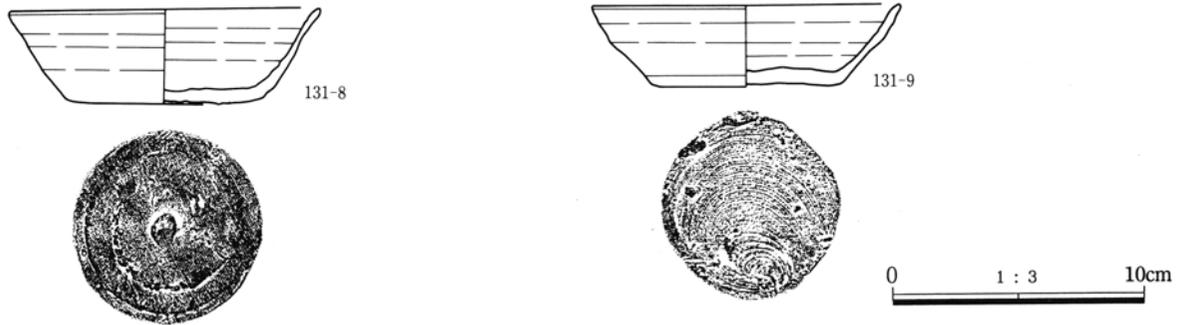
第163図 130号住居跡



第164図 130号住居跡



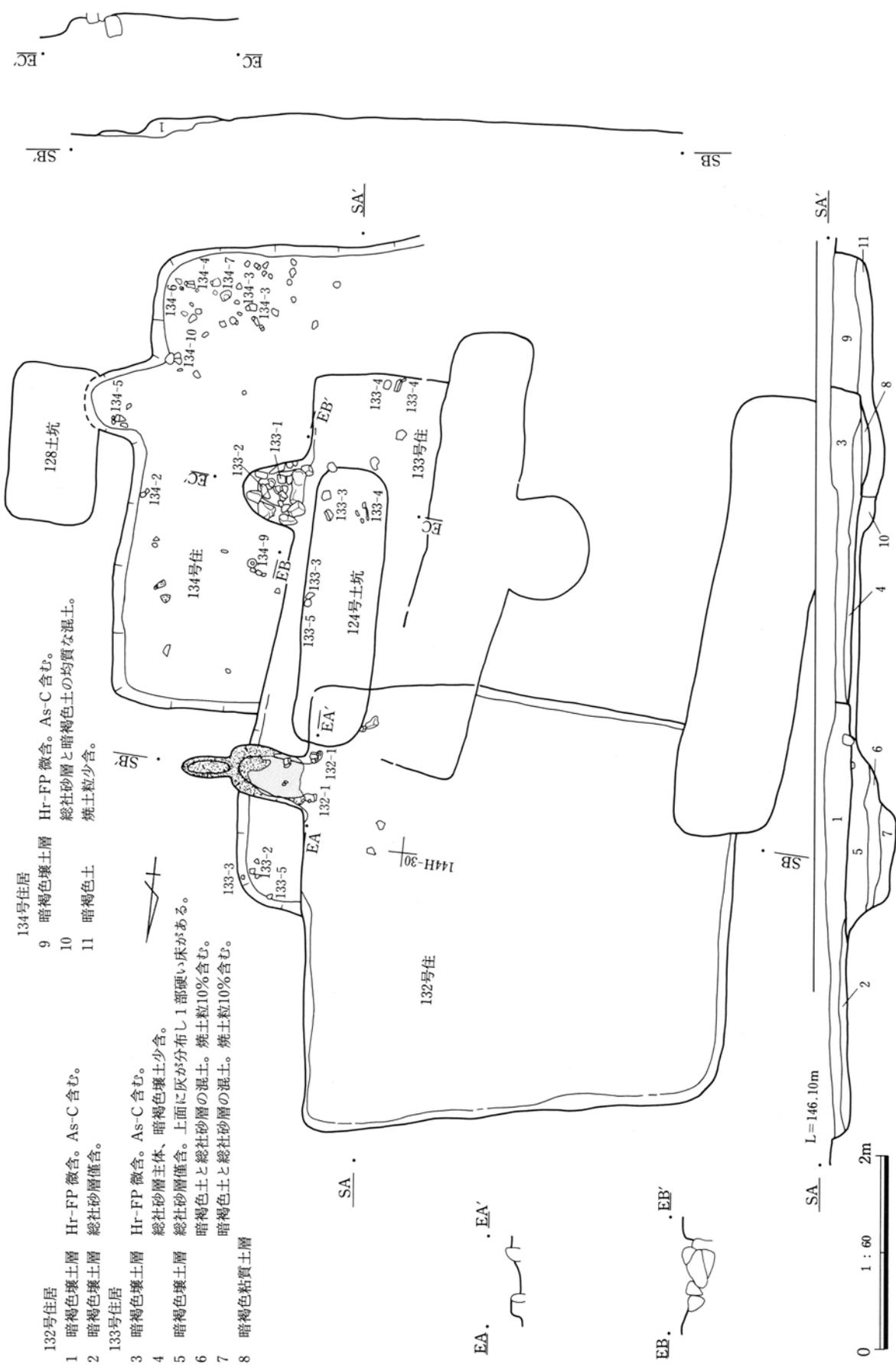
第165図 131号住居跡



第166図 131号住居跡

132号竪穴住居跡・133号竪穴住居跡・134号竪穴住居跡（第167～169図、写真図版60・61・138） 144H-30グリッドに位置し、重複関係では136号竪穴住居跡が最も古く、次に134号竪穴住居跡と133号竪穴住居跡の順で、132号竪穴住居跡が最も新しい。また、133号竪穴住居跡を中心に124号土坑と51号溝、52号溝に壊されている。平面形態では132号竪穴住居跡は西壁が東壁よりやや短い正方形に近い台形であり、133号竪穴住居跡と134号竪穴住居跡は長方形であることが掘り方で確認できた。床面は堅く平坦である。残存する壁高はそれぞれが約20～30cmで、やや垂直気味に立ち上がる。掘り方で長方形から円形の床下土坑やピットが多数検出されているが、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。遺物は土師器の坏、須恵器の坏、碗、羽釜などがそれぞれの竪穴住居跡のカマド付近を中心に集中して出土している。カマドは3軒共に、東壁の南東隅寄りに位置する。132号竪穴住居跡のカマドは両袖に石を構築材として使用し、燃烧部の両壁から煙道部にかけて粘土で形成している。133号竪穴住居跡のカマドは両袖の石の上に天井石を架け、燃烧部の両壁から煙出し部分にかけて石を構築材として使用している。134号竪穴住居跡のカマドは煙出し部分を128号土坑に壊されている。住居の廃棄時期は遺物から、10世紀中葉の遺物が混ざっているが134号竪穴住居跡は9世紀中葉、8世紀中葉の遺物が混ざっているが133号竪穴住居跡が10世紀後半、132号竪穴住居跡が10世紀代と考えられる。

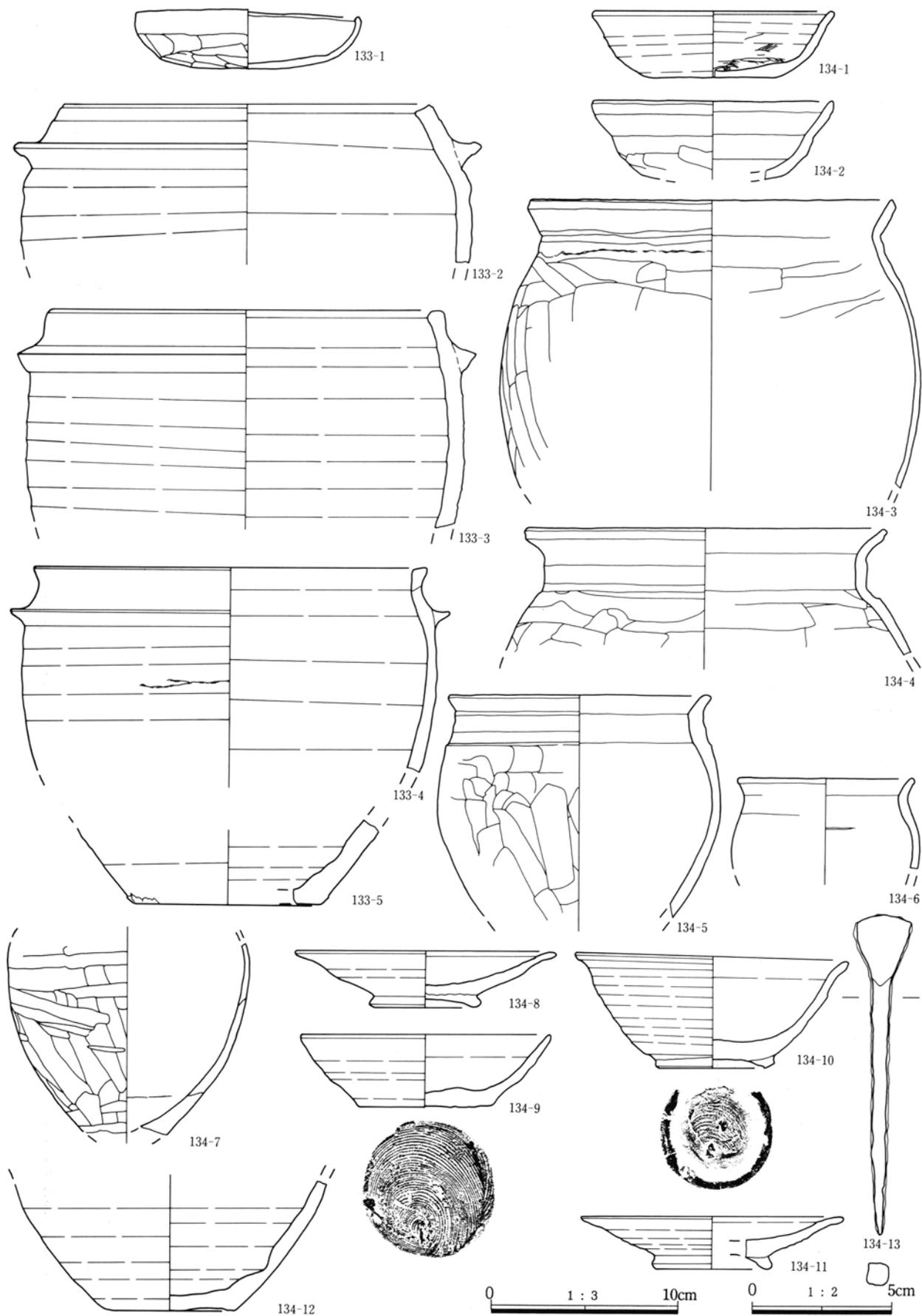
136号竪穴住居跡（第170～172図、写真図版61・62・138・139・140） 141H-27グリッドに位置し、重複関係は136号竪穴住居跡が古く、134号竪穴住居跡が新しい。また、53号溝にカマドの右半分と南東隅部分の上部を、125号土坑に住居のほぼ中央部分をそれぞれ壊されている。平面形態は長方形である。床面は堅く平坦である。残存する壁高は約40cmと深く、緩やかに立ち上がる。掘り方で不定形の床下土坑やピットがいくつか検出されており、カマドの右の南東隅には貯蔵穴が存在する。明確な壁溝、柱穴は検出されていない。遺物は土師器の坏や甕と台付小形甕、須恵器の坏と蓋と甕、石製紡錘車、刀子などがカマド付近と北西隅部分とに集中して出土している。カマドは東壁の南東隅寄りに位置し、両袖に石を構築材として使用している。住居の廃棄時期は遺物から9世紀前半と考えられる。



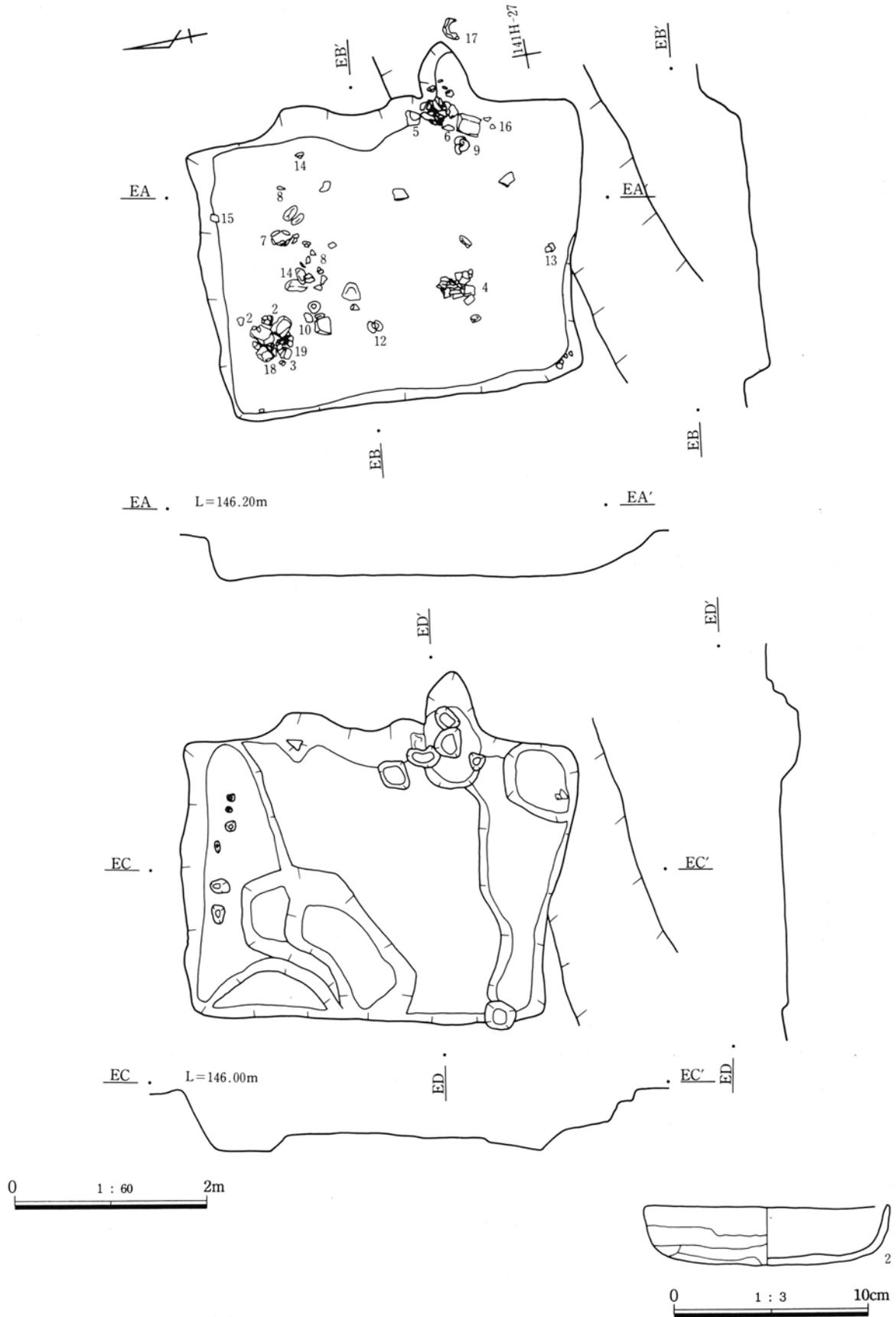
- 132号住居
- 1 暗褐色壤土層 Hr-FP 微含。As-C 含む。
 - 2 暗褐色壤土層 総社砂層僅含。
- 133号住居
- 3 暗褐色壤土層 Hr-FP 微含。As-C 含む。
 - 4 暗褐色壤土層 総社砂層主体、暗褐色壤土少含。
 - 5 暗褐色壤土層 総社砂層僅含。上面に灰が分布し1部硬い床がある。
 - 6 暗褐色土と総社砂層の混土。焼土粒10%含む。
 - 7 暗褐色土と総社砂層の混土。焼土粒10%含む。
 - 8 暗褐色粘質土層
- 134号住居
- 9 暗褐色壤土層 Hr-FP 微含。As-C 含む。
 - 10 総社砂層と暗褐色土の均質な混土。
 - 11 暗褐色土 焼土粒少含。

第167図 132・133・134号住居跡

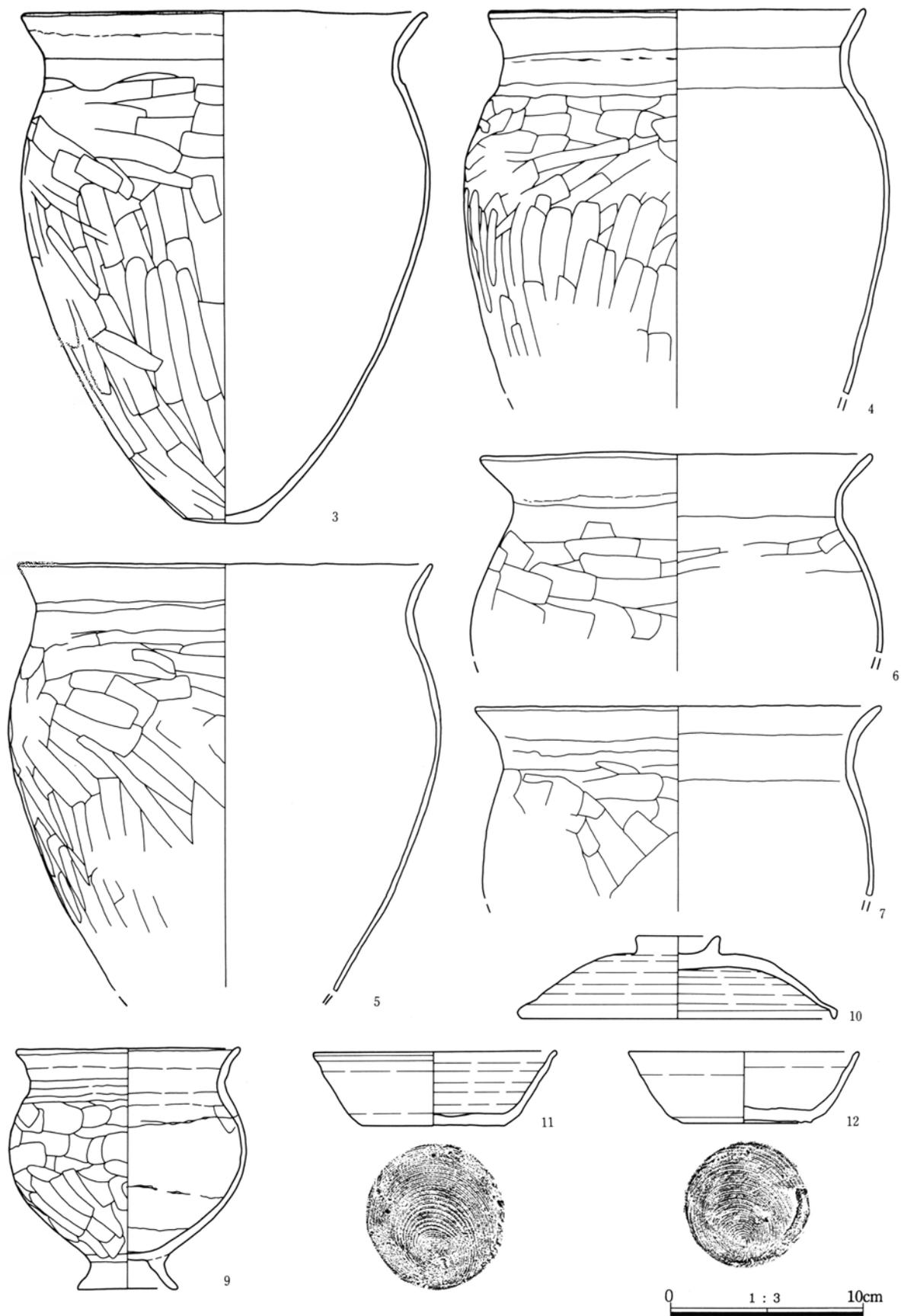
第3章 検出された遺構・遺物



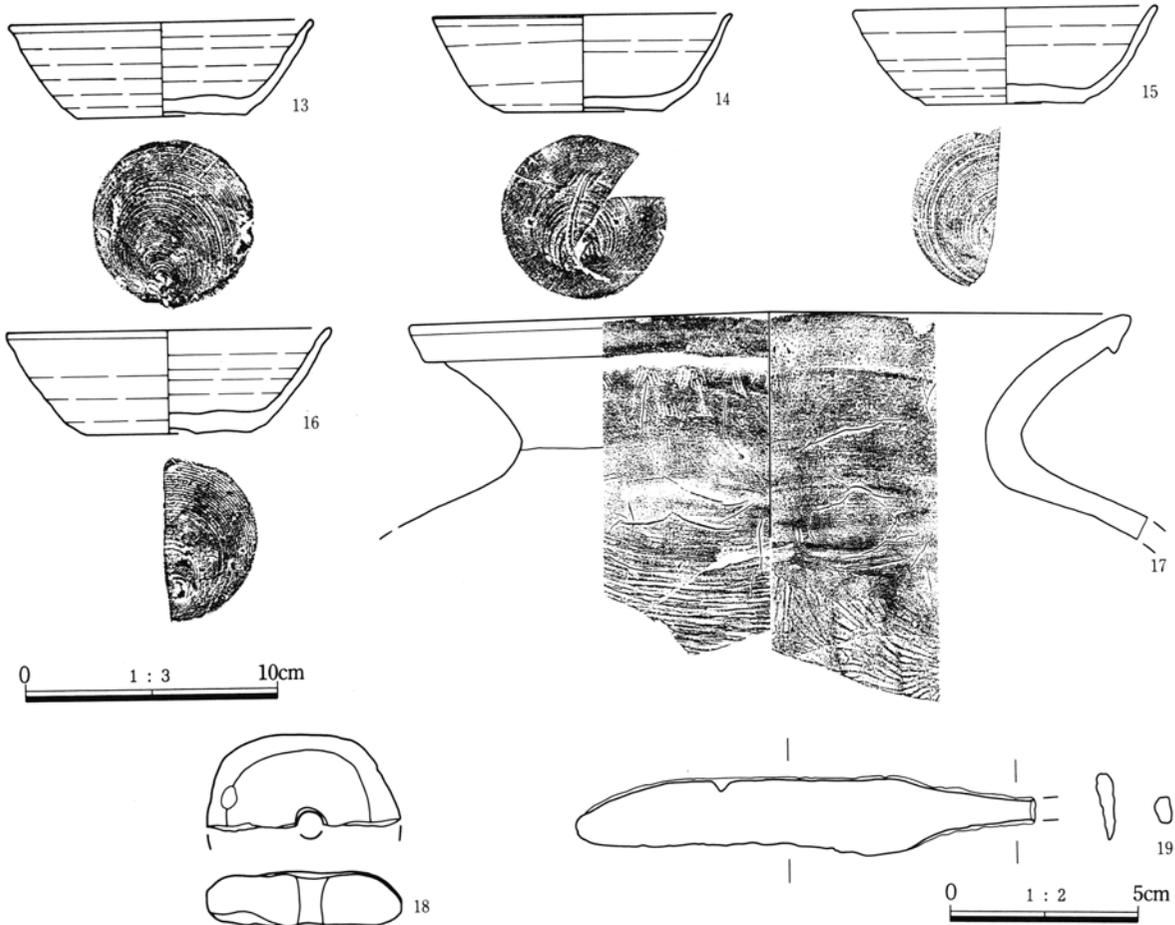
第169図 133・134号住居跡



第170図 136号住居跡



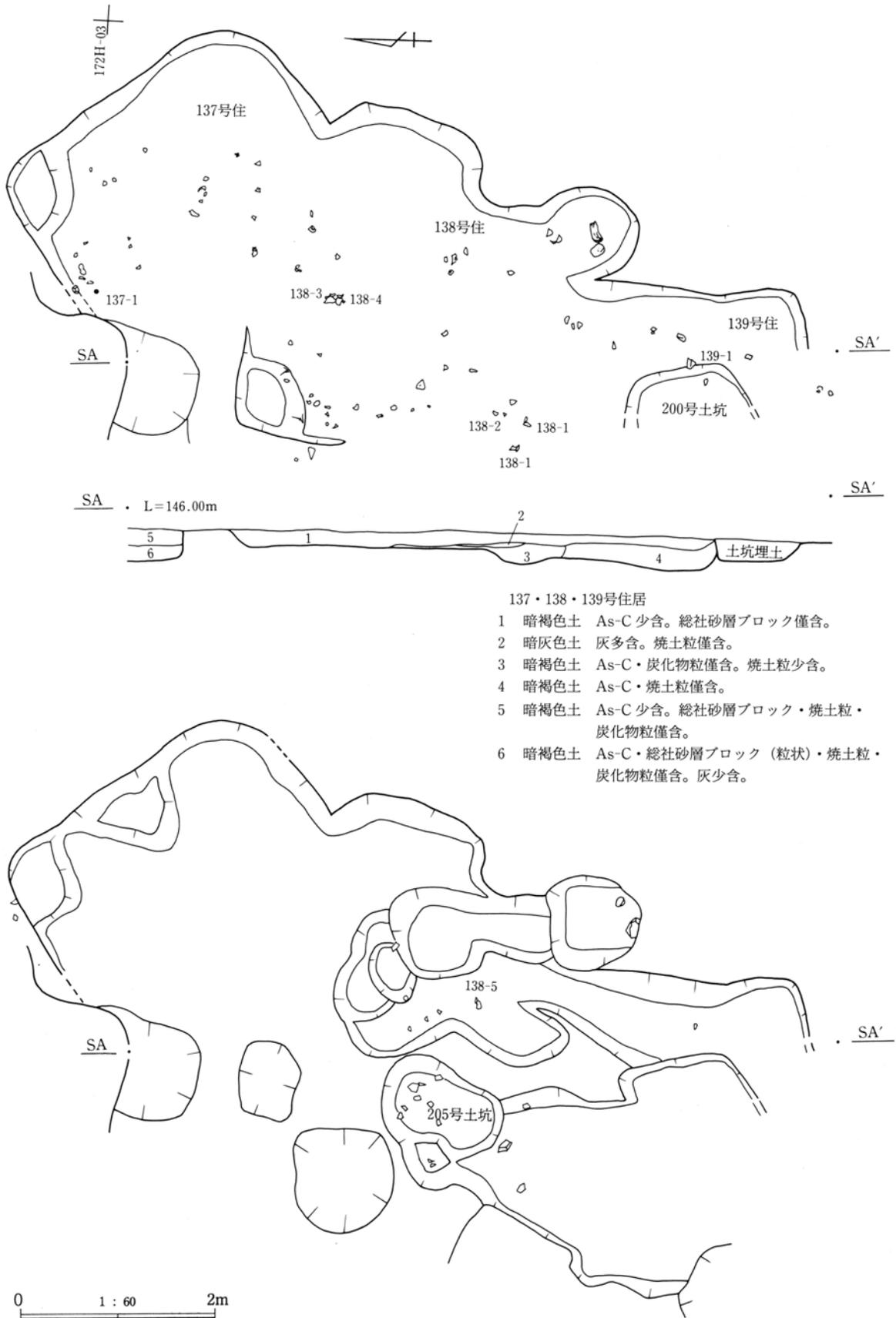
第171図 136号住居跡



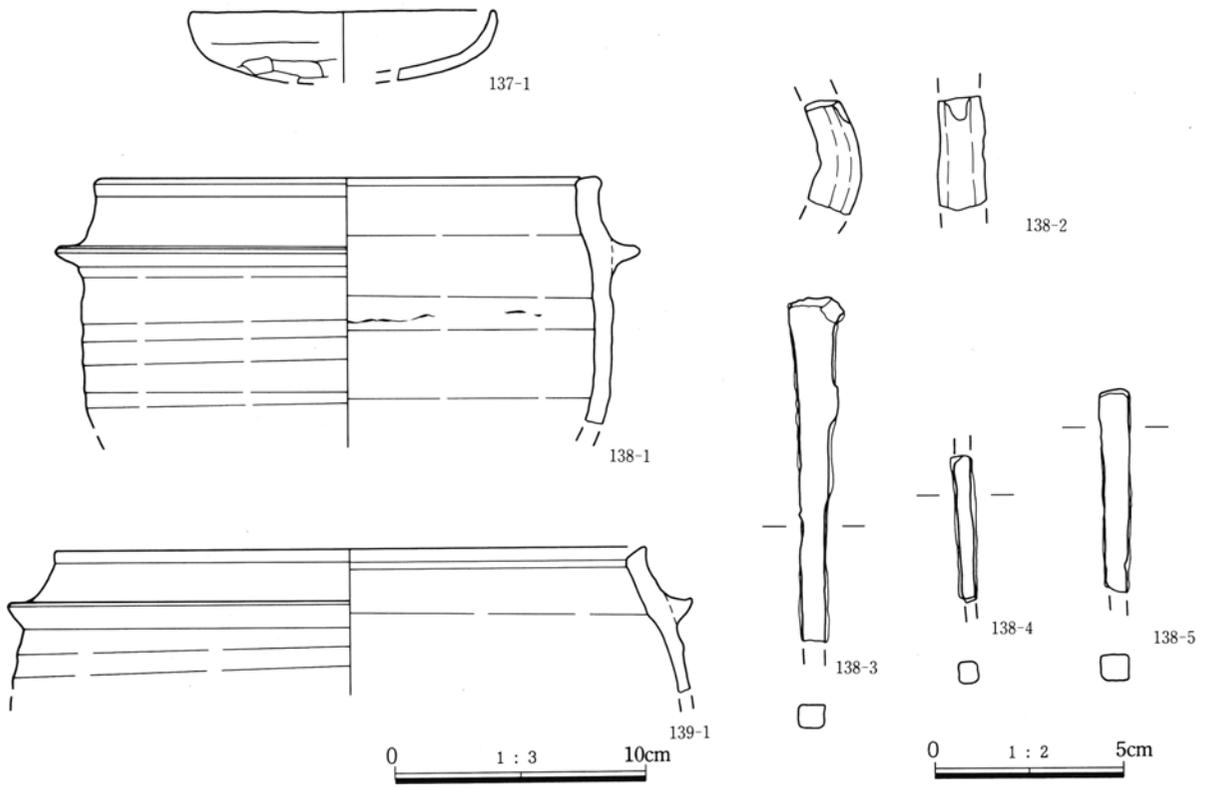
第172図 136号住居跡

137号竪穴住居跡・138号竪穴住居跡・139号竪穴住居跡（第173・174図、写真図版62・140）

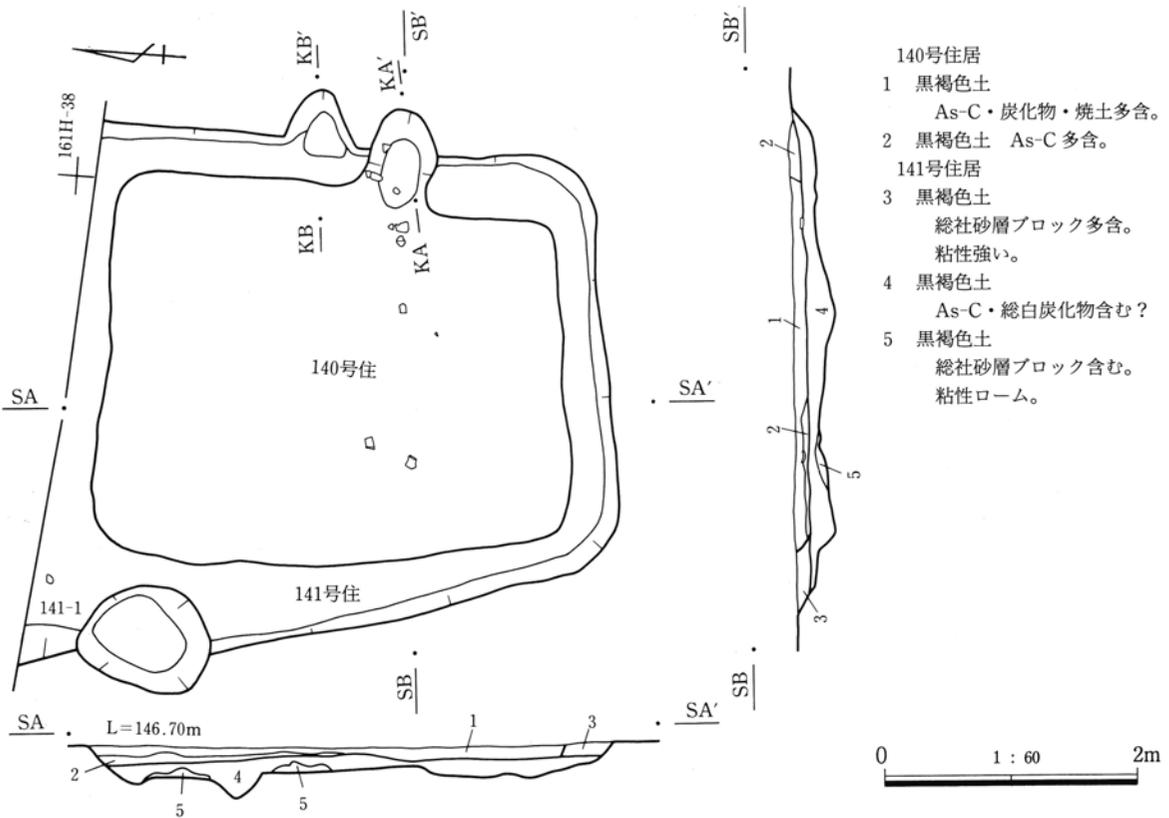
172H-03グリッドに位置する。3軒の重複関係は、それぞれが切り合っていることや、西側に圃場整備以前の農道である1号道跡が存在することから、新旧関係は遺構確認時点では不明である。また、137号竪穴住居跡と173号竪穴住居跡が、138号竪穴住居跡と181号竪穴住居跡が、139号竪穴住居跡と177号竪穴住居跡が重複関係の位置にあるものの、新旧関係は不明である。はっきりしているのは、3軒共に33号溝に壊されていることである。この溝を北に延長すると走行方向が、現代の圃場整備以前の農道である1号道跡と異なり、中世と考えられる19号溝や21号溝とも異なることから、あるいは近世から近代にかけての道跡と推定される。さらに、139号竪穴住居跡の一部が200号土坑に壊されている。平面形態はおそらくは3軒とも長方形であると考えられる。床面はほとんどはっきりしていない。壁高は北部分が約10cmなのに対して、南側部分は壁が不明確であり、緩やかに立ち上がるか、ほとんど壁すら確認できない状態の部分も存在する。掘り方で楕円形～円形の床下土坑などが検出されているが、一部は住居を壊していたことが確認できなかった新しい土坑の可能性もある。壁溝、貯蔵穴、柱穴に相当するものは検出されなかった。遺物は3軒の住居内の床面に散漫に分布しており、土師器の坏、須恵器の羽釜、鉄釘などが出土している。カマドは削平されていると考えられる。住居の廃棄時期は遺物から137号竪穴住居跡が8世紀後半、138号竪穴住居跡と139号竪穴住居跡が10世紀前半と考えられる。



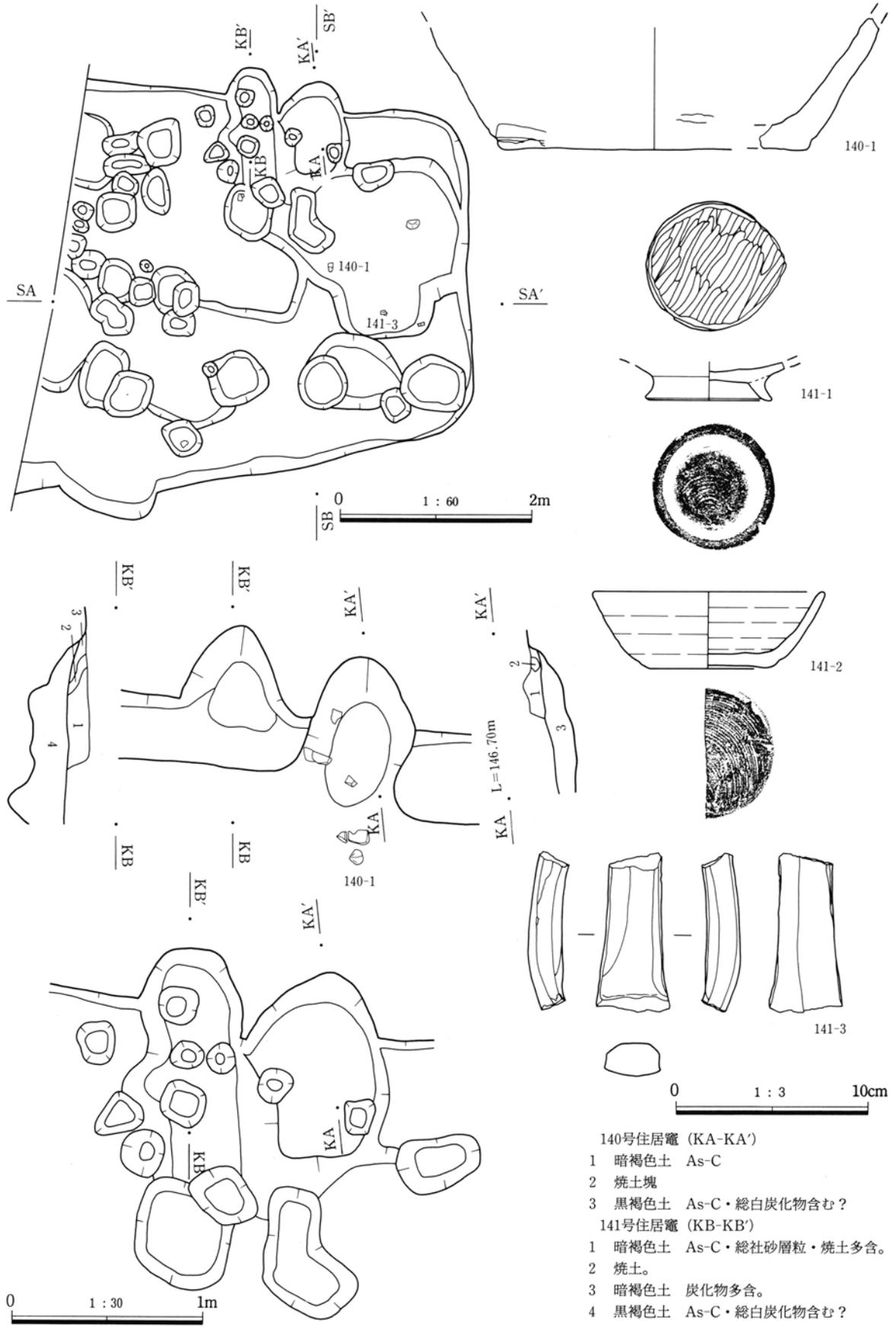
第173図 137・138・139号住居跡



第174図 137・138・139号住居跡

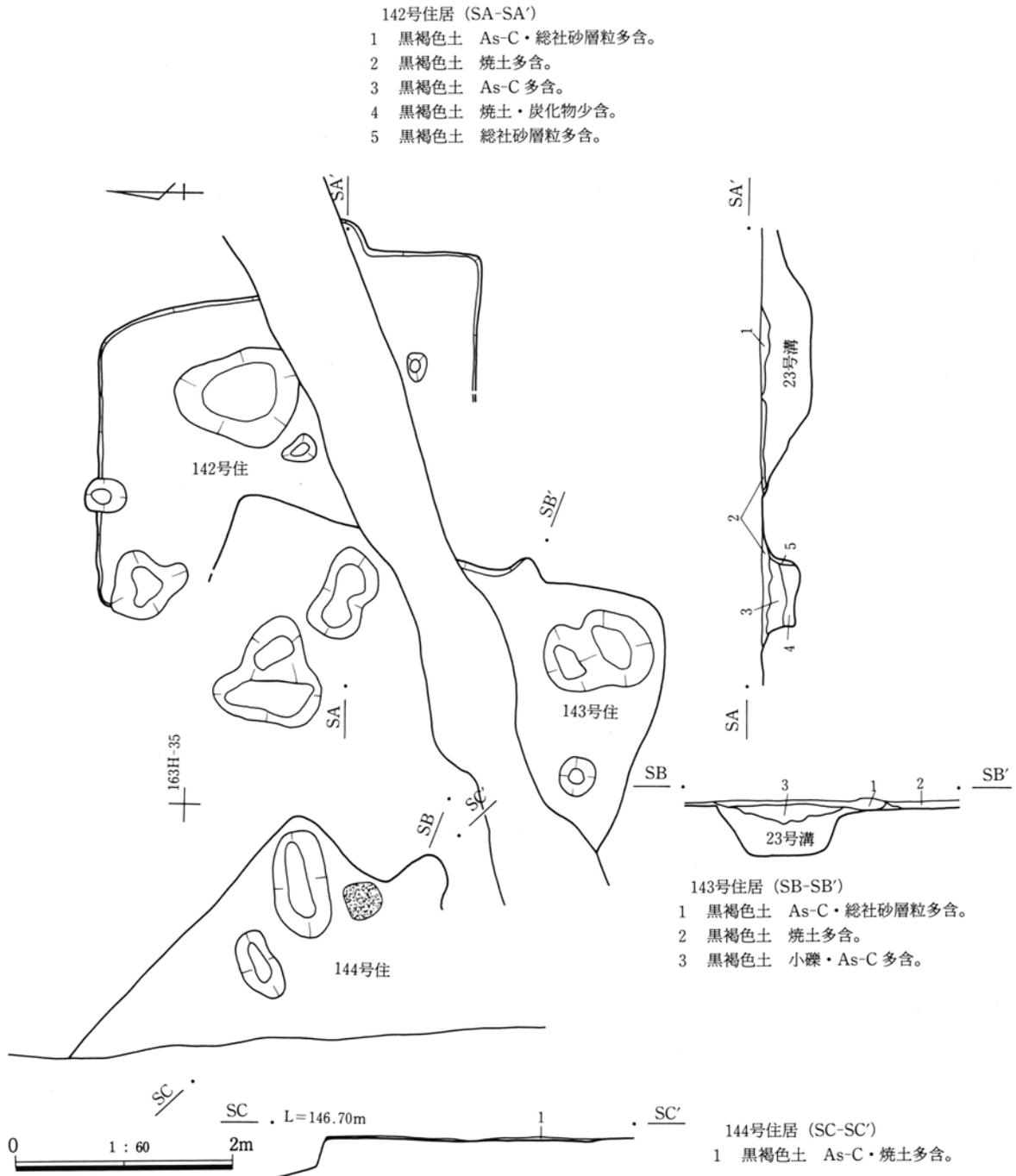


第175図 140・141号住居跡



第176図 140・141号住居跡

140竪穴住居跡・141号竪穴住居跡（第175・176図、写真図版62・140） 161H-38グリッドに位置し、重複関係は141号竪穴住居跡が古く、140号住居が新しい。141号竪穴住居跡の北壁部分が調査区域外に延びるものの、平面形態は共に長方形である。床面は堅く平坦である。残存する壁高は約10cmで、緩やかに立ち上がる。掘り方から大小の楕円形～円形の床下土坑やピットが多数検出されており、明らかに柱穴に想定されるピットも何か所か存在するものの、明確な壁溝、貯蔵穴は検出されていない。遺物は須恵器の坏や椀、甕などが床下土坑を中心に出土している。カマドは共に東壁の中央からやや南寄りに位置し、住居の廃棄時期は遺物と新旧関係から141号竪穴住居跡が9世紀前半、140号竪穴住居跡が9世紀前半以後と考えられる。



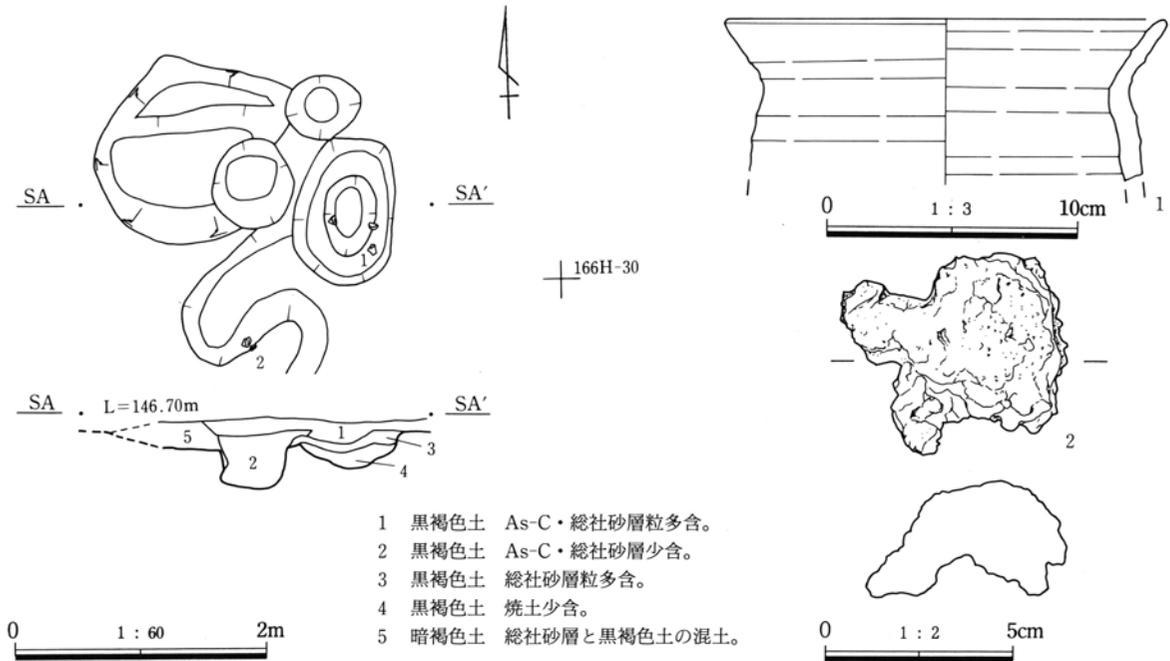
第177図 142・143・144号住居跡

第3章 検出された遺構・遺物

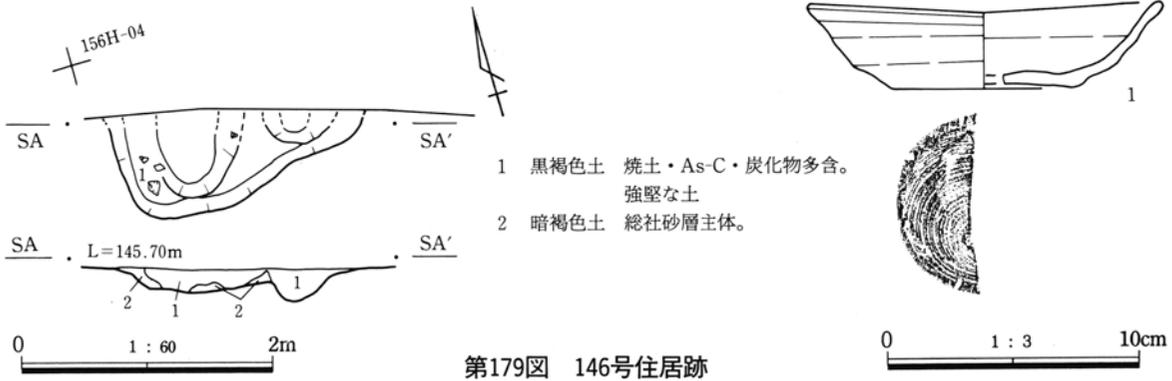
142号竪穴住居跡・143号竪穴住居跡・144号竪穴住居跡（第177図、写真図版63） 163H—35グリッドに位置し、確認面が浅いためにはっきりしない部分があるものの、重複関係は142号竪穴住居跡が最も古く、次に143号竪穴住居跡で、144号竪穴住居跡が最も新しい。また、土層確認セクションからみても、3軒の住居よりも北東—南西方向に延びる23溝の方が古い。平面形態は3軒共、おそらくは長方形である。確認面が浅いために床面の大部分は失われている。残存する壁高は僅かで、緩やかに立ち上がる。明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。器形や時期の判断できる遺物はほとんど無い。カマドは142号竪穴住居跡と143号竪穴住居跡がそれぞれ東壁の中央からやや南寄りに位置しており、144号竪穴住居跡についても同様と考えられる。住居の廃棄時期は3軒共不明である。

145号竪穴住居跡（第178図、写真図版63・140） 167H—30グリッドに位置し、確認面が浅いために、重複関係や平面形態は不明である。地山を掘り込んだだけの床面は堅く平坦である。おそらくは掘り方の一部が残存するだけで、カマドかその周辺と考えられる。明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。遺物は土師器の甕、鉄滓などが掘り方の床下土坑から出土している。カマドの位置は不明である。住居の廃棄時期は遺物から10世紀と考えられる。

146号竪穴住居跡（第179図、写真図版64・140） 155H—03グリッドに位置し、南西部分が検出されているだけで、北側の半分以上が調査区域外に延びるために、重複関係や平面形態は不明である。確認面が浅いために、床面の大部分が失われており、残存する壁高も僅かで、緩やかに立ち上がる。床下土坑は検出されているが、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。遺物は須恵器の坏などが出土している。カマドの位置は不明である。住居の廃棄時期は遺物から9世紀後半と考えられる。



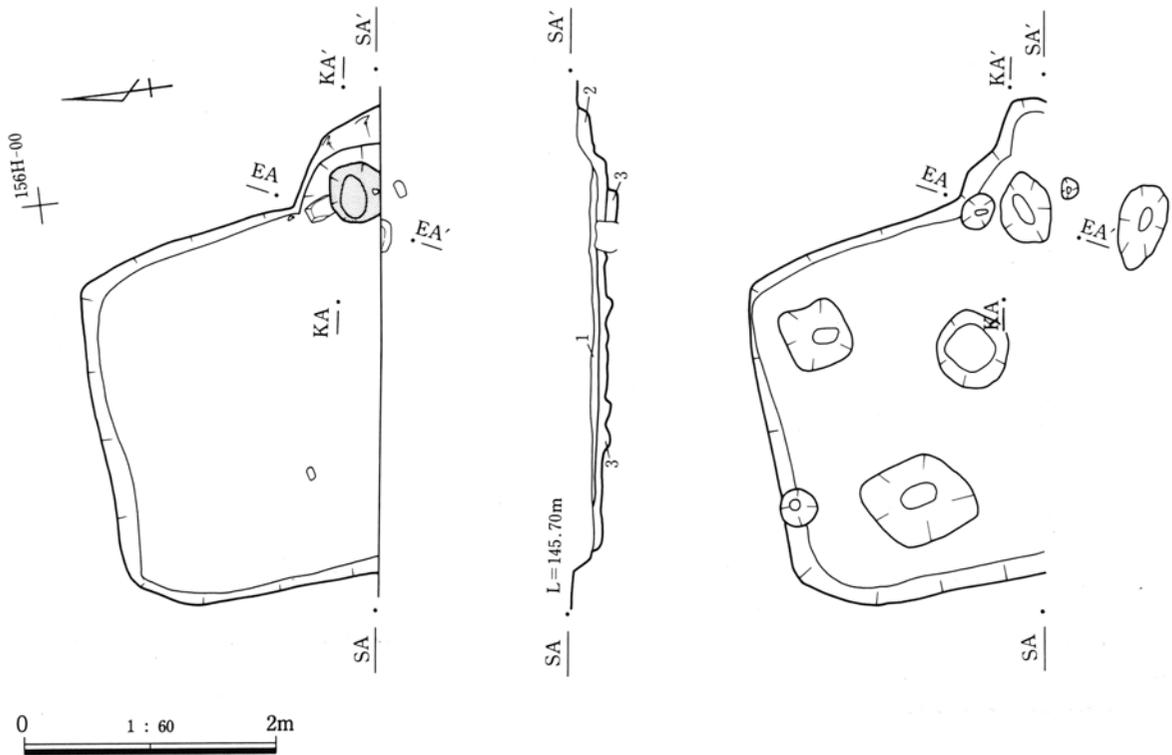
第178図 145号住居跡



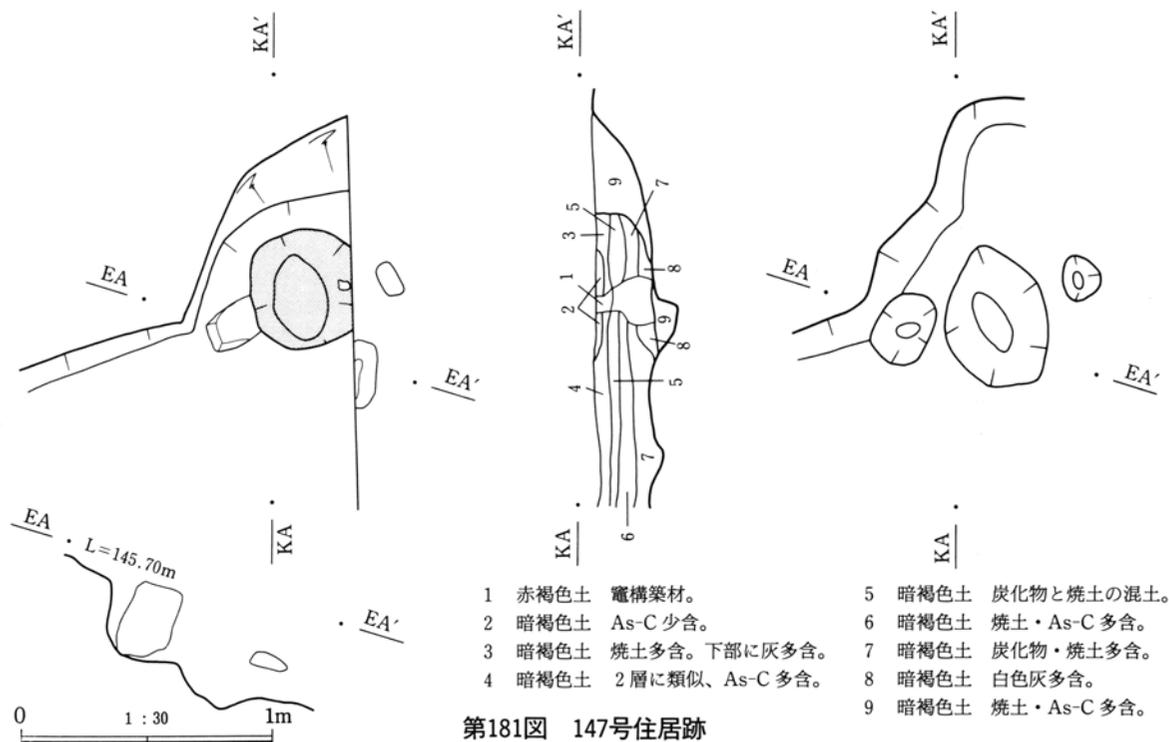
第179図 146号住居跡

147号竪穴住居跡（第180・181図、写真図版64） 156G—48グリッドに位置し、カマドの右半分を含む住居南側の半分以上が、圃場整備時の水田造成の際の切り盛り段差により壊されているために、重複関係や平面形態は不明である。貼り床の床面は堅く平坦である。確認面が浅いために、残存する壁高は約5cmと僅かであり、緩やかに立ち上がる。掘り方で楕円形の床下土坑やピットがいくつか検出されており、柱穴に想定されるものもあるが、明確な壁溝、貯蔵穴は検出されていない。器形や時期の判断できる遺物はほとんど無い。カマドは東壁の南東隅寄りに位置すると考えられ、左袖に構築材として石を使用していることから、おそらくは掘り方のピットの存在から右袖にも石を使用していた可能性が考えられる。住居の廃棄時期は不明である。

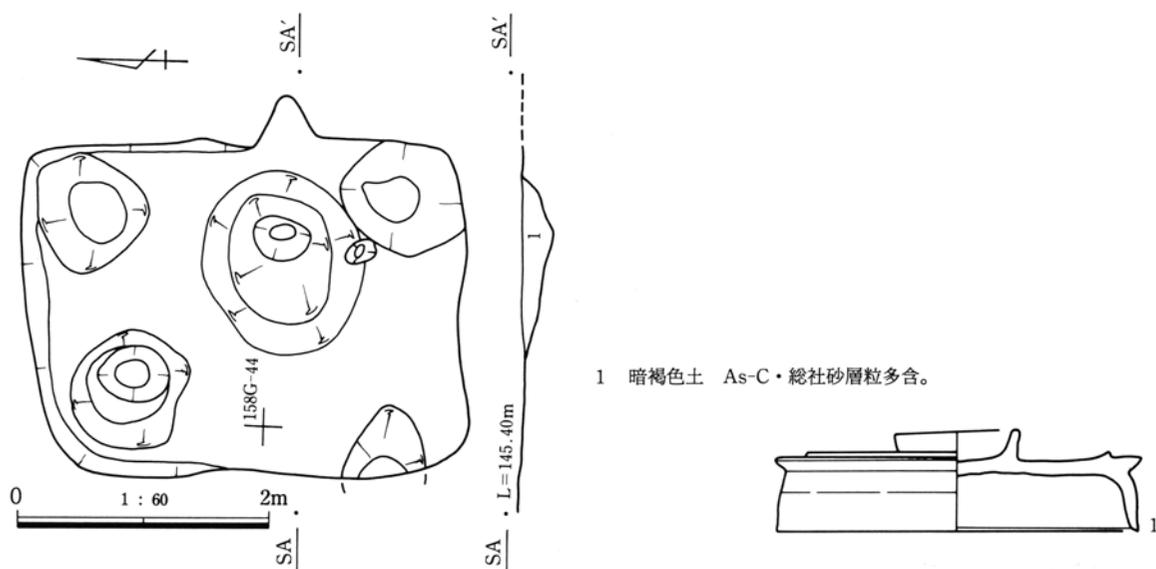
- 1 暗褐色土 As-C・総社砂層ブロック多含。
- 2 灰色土 焼土多含。灰層。
- 3 暗褐色土 As-C・総社砂層ブロック多含。（掘り方）



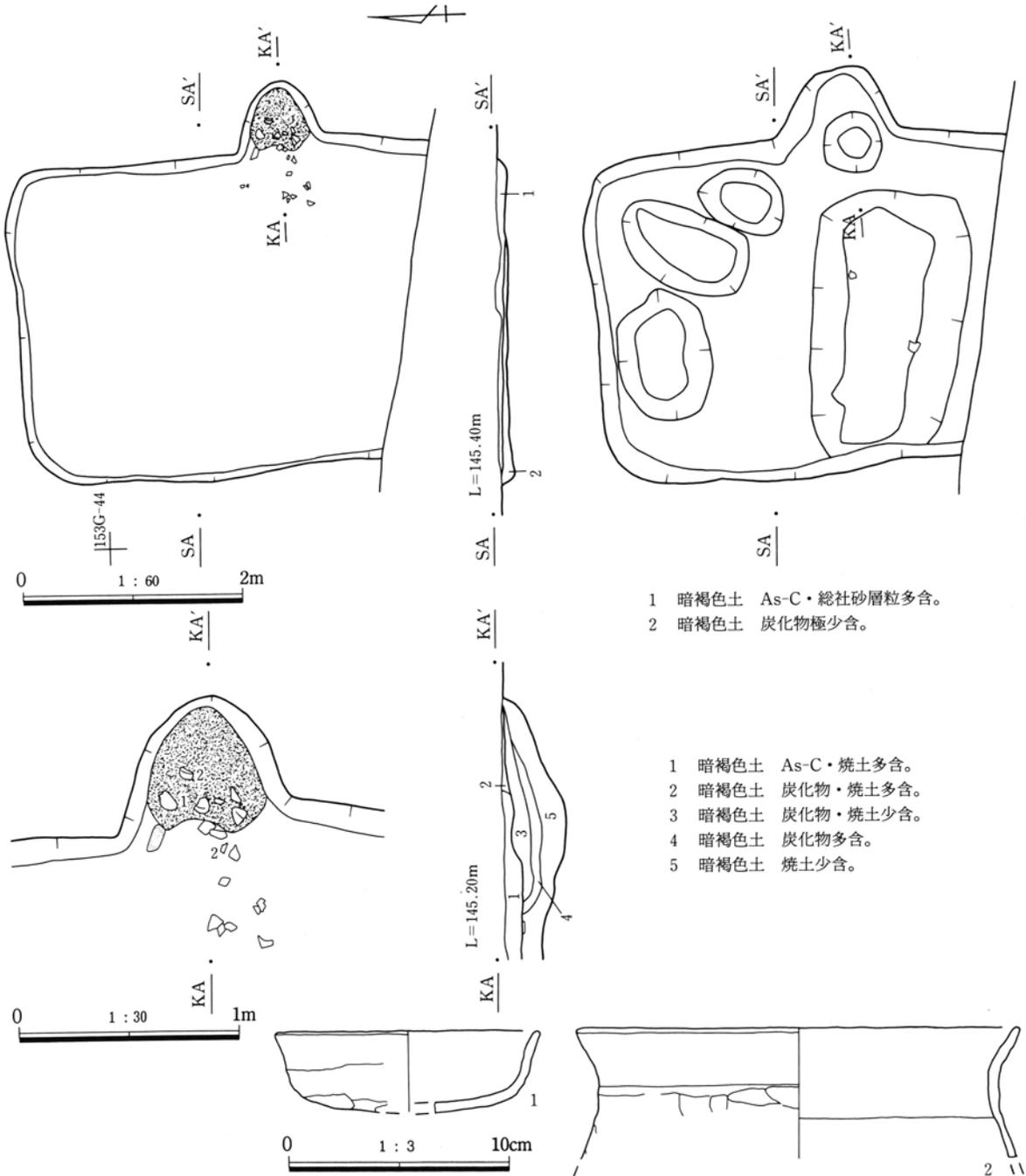
第180図 147号住居跡



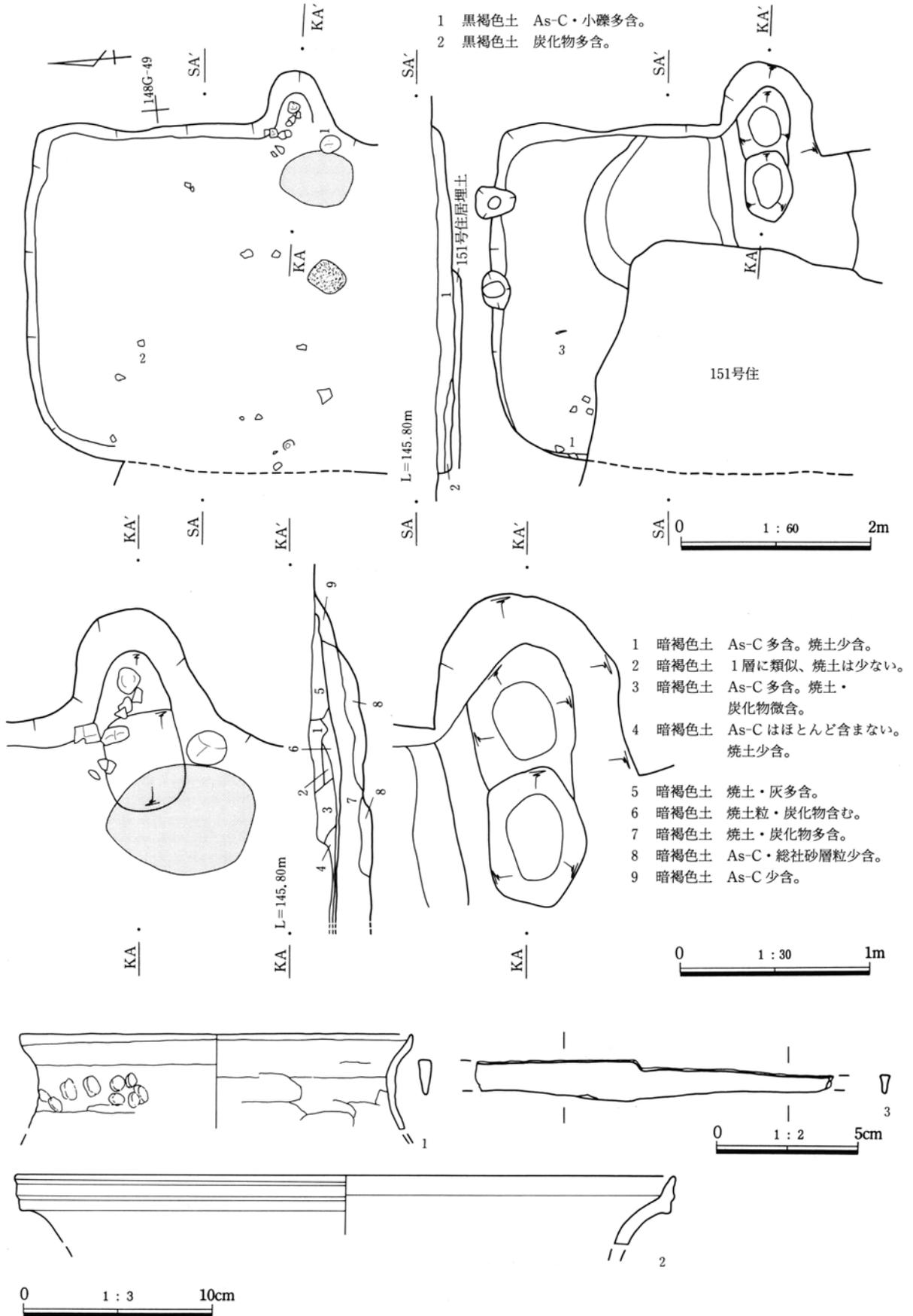
148号竪穴住居跡（第182図、写真図版64・140） 157G-43グリッドに位置し、確認面が浅いために、カマドや住居南側の半分以上がほとんど削平されており、壁も北壁以外はほとんど無い。重複関係は無い。平面形態は長方形である。確認面がほとんど無いほど浅いために、床面の大部分が失われており、掘り方がほとんど現れている。掘り方からはカマド前に大型の楕円形の床下土坑と、少なくとも柱穴と考えられる3ヶ所の土坑が検出されているが、明確な壁溝、貯蔵穴は検出されていない。遺物は須恵器の蓋などが出土している。カマドは東壁の中央からやや南寄りに位置するが、確認面が浅いためにほとんど燃焼部が残っておらず、袖や煙出し部分の構造などは不明である。住居の廃棄時期は遺物から8世紀中葉と考えられる。



149号竪穴住居跡（第183図、写真図版65・140） 151G—43グリッドに位置し、南壁付近が圃場整備時の水田造成の際の切り盛り段差により壊されているために重複関係は不明であるが、平面形態はおそらくは長方形と考えられる。確認面が浅いために、残存する壁高は約5～10cmと浅い。掘り方で大型の長方形が1基と、楕円形～円形の床下土坑がいくつか検出されているが、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。遺物は土師器の坏や甕などが、カマドの燃焼部内を中心に出土している。カマドは東壁の中央からやや南寄りに位置し、燃焼部部分に炭化物や焼土が厚く存在する。住居の廃棄時期は遺物から9世紀前半と考えられる。



第183図 149号住居跡



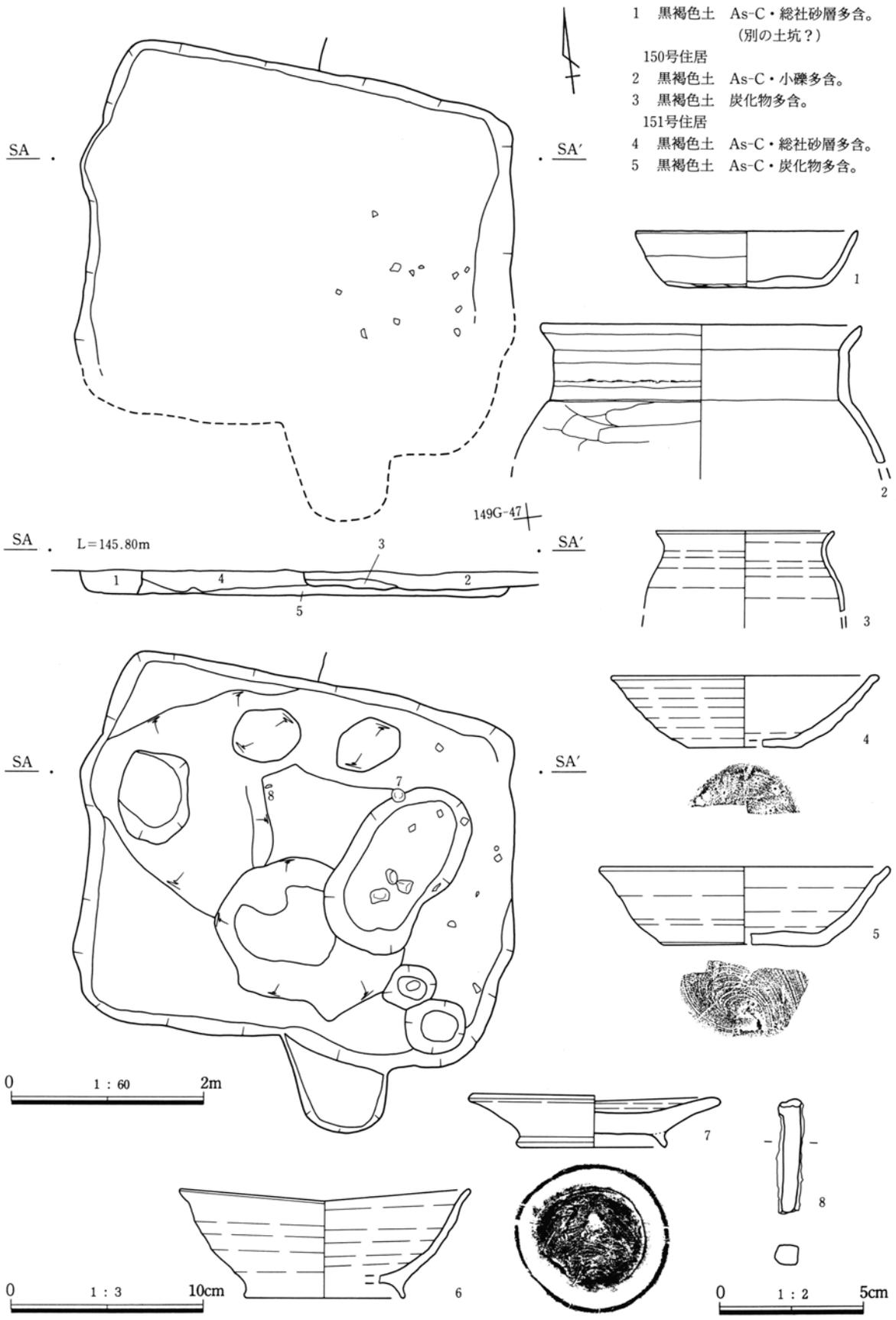
第184図 150号住居跡

150号竪穴住居跡（第184図、写真図版66・140） 148G—48グリッドに位置し、圃場整備時の水田造成の際の切り盛り段差により、南壁部分が壊されている。重複関係は、遺構確認時点では判断が難しかったが、土層確認から150号竪穴住居跡の方が新しく、西壁部分から南西隅部分にかけて151号竪穴住居跡に壊されている。平面形態はおそらくは長方形である。床面は平坦である。残存する壁高は約15cmで、緩やかに立ち上がる。掘り方で北壁際にピットが検出されているが、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。遺物は土師器と須恵器の甕、刀子などが出土している。カマドは東壁の南東隅寄りに位置し、両袖に構築材として石を使用している。住居の廃棄時期は遺物から9世紀中葉と考えられる。

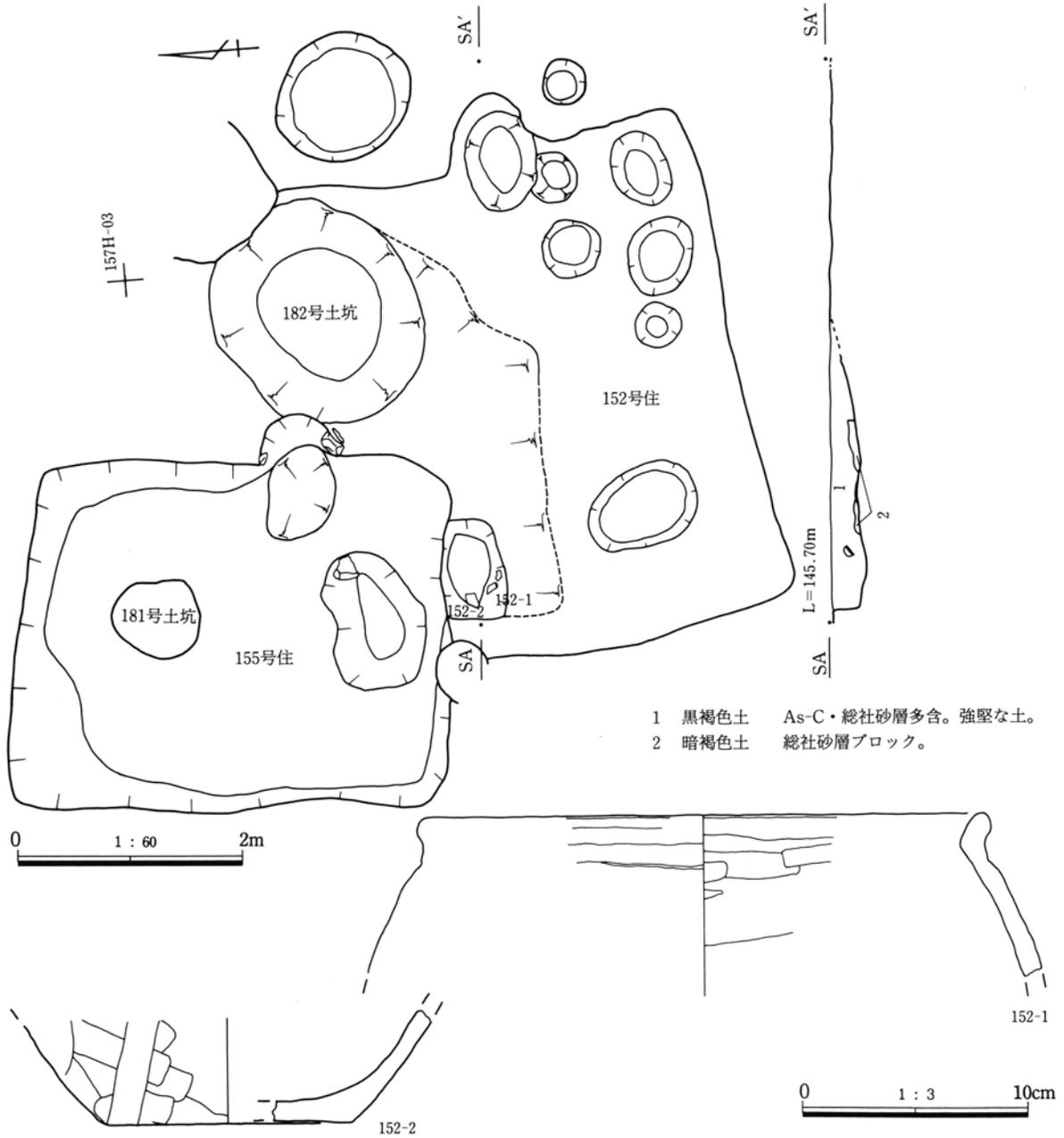
151号竪穴住居跡（第185図、写真図版66・140） 150G—48グリッドに位置し、圃場整備時の水田造成の際の切り盛り段差により、南壁部分が壊されている。重複関係は151号竪穴住居跡の方が古く、150号竪穴住居跡が新しい。平面形態は長方形である。床面は平坦である。残存する壁高は約20cmで、緩やかに立ち上がる。掘り方で大小の楕円形～円形の床下土坑やピットがいくつか検出されているが、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。遺物は土師器の坏と甕、須恵器の坏と碗、鉄釘などが出土している。カマドの位置は不明であるが、掘り方の様子からあるいは南壁に位置していた可能性が考えられる。住居の廃棄時期は遺物から9世紀中葉と考えられる。

152号竪穴住居跡・155号竪穴住居跡（第186図、写真図版66・67・141） 158H—01グリッドに位置し、重複関係は152号竪穴住居跡の方が古く、155号竪穴住居跡が新しい。また、181号土坑と182号土坑がそれぞれの竪穴住居跡を壊している。平面形態はそれぞれ長方形である。確認面が浅いために、壁や一部の床面が僅かに検出されているだけで、ほとんど掘り方が現れている。残存する壁高も僅かで、緩やかに立ち上がる。掘り方で大小の楕円形～円形の床下土坑やピットがいくつか検出されており、柱穴に想定されるピットが2カ所に存在するが、明確な壁溝、貯蔵穴は検出されていない。遺物は土師器の甕などが出土している。カマドは東壁の中央からやや南寄りに位置し、155号竪穴住居跡のカマドは両袖に石を構築材として使用している。確認面が浅いために152号竪穴住居跡のカマドは燃烧部の掘り方が残存するだけである。住居の廃棄時期は遺物から10世紀と考えられる。

第3章 検出された遺構・遺物

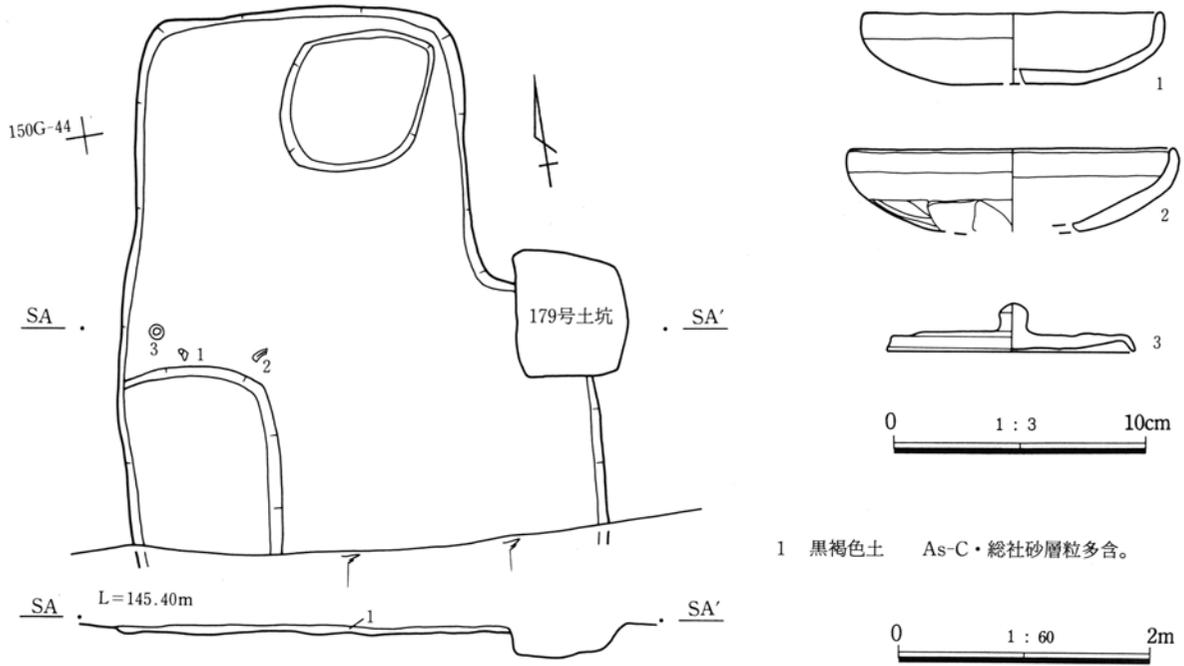


第185図 151号住居跡



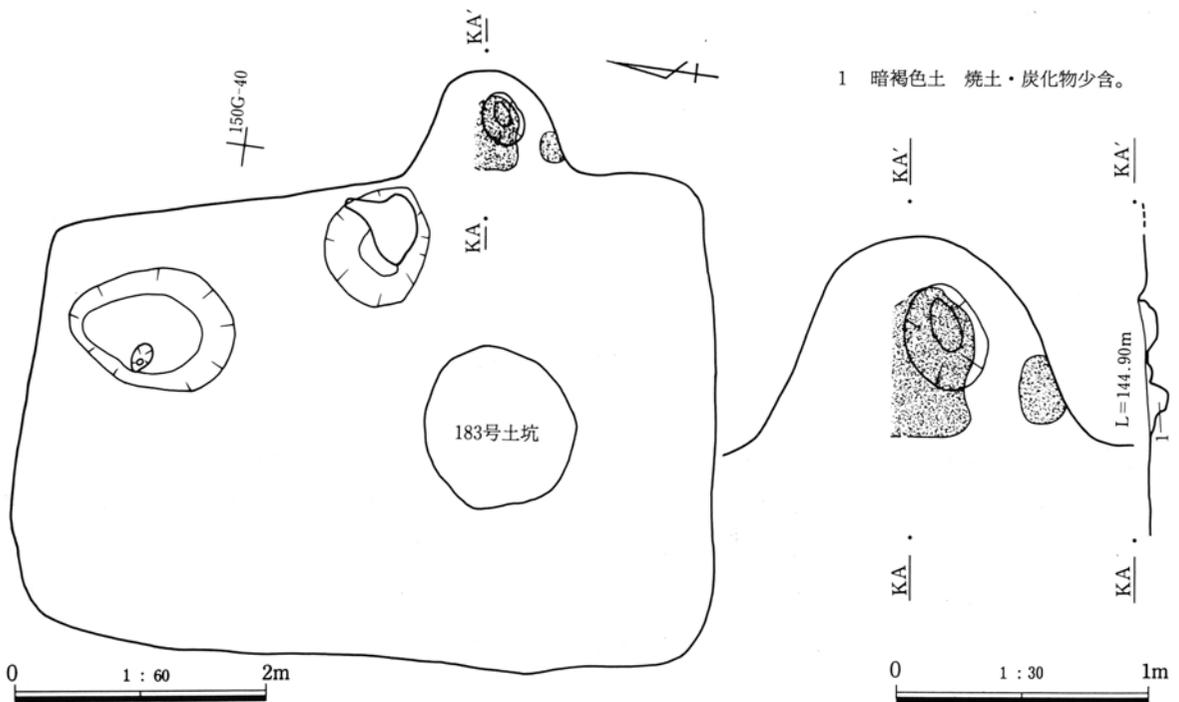
第186図 152・155号住居跡

153号竪穴住居跡（第187図、写真図版67・141） 149G—42グリッドに位置し、圃場整備時の水田造成の際の切り盛り段差により、南壁部分が壊されている。重複関係は無い。平面形態は不定形である。床面は平坦である。確認面が浅いために残存する壁高は僅かで、緩やかに立ち上がる。長方形～正方形の床下土坑が検出されているが、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。遺物は土師器の坏、須恵器の蓋などが出土している。カマドの位置は不明である。住居の廃棄時期は遺物から8世紀後半と考えられる。

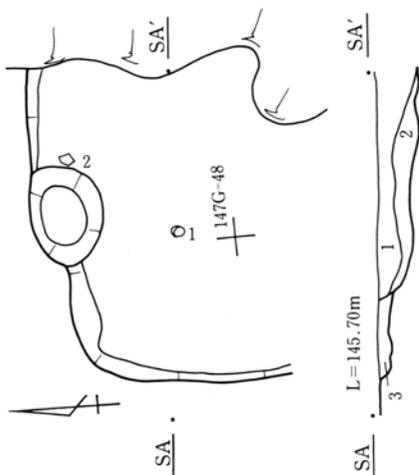


第187図 153号住居跡

154号竪穴住居跡(第188図、写真図版67) 150G—38グリッドに位置し、重複関係は183号土坑に壊されている。平面形態は長方形である。確認面が浅いために、床面や壁は不明確である。掘り方での楕円形の床下土坑が2カ所検出されているが、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。器形や時期の判断できる遺物はほとんど無い。カマドは東壁の中央から南寄りに位置し、確認面が浅いために燃烧部の底部が僅かに残存するだけである。住居の廃棄時期は不明である。

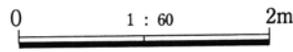


第188図 154号住居跡

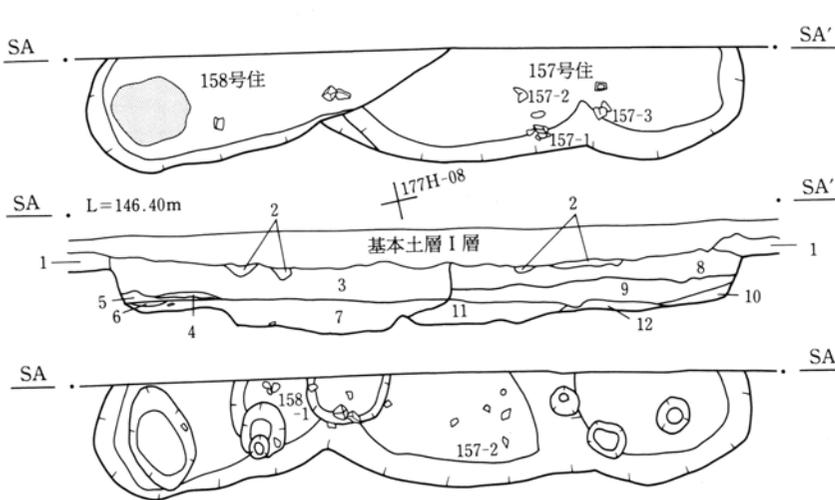
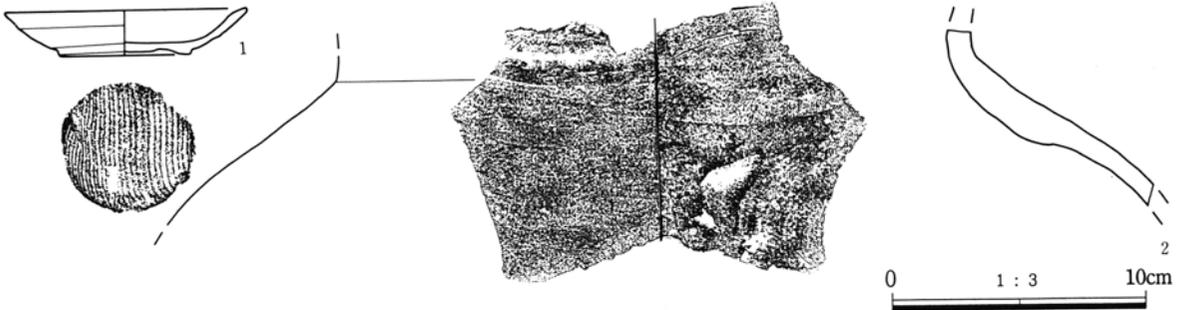


156号竪穴住居跡(第189図、写真図版67・141) 146G-48グリッドに位置し、南壁部分は圃場整備時の水田造成の際の切り盛り段差により壊されている。東壁は遺構確認時の掘り下げ過ぎにより壊されている。重複関係は無い。平面形態は不明である。床面は平坦でなく、軟質である。確認面が浅いために、残存する壁高は約20cmで、緩やかに立ち上がる。北壁部分にピットが検出されているが、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。遺物は須恵器の坏と甕などが出土している。カマドの位置は不明である。住居の廃棄時期は遺物から10世紀と考えられる。

- 1 黒褐色土 As-C・総社砂層粒多含。
- 2 黒褐色土 総社砂層粒多含。
- 3 黒褐色土 総社砂層粒多含。

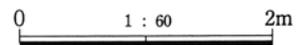


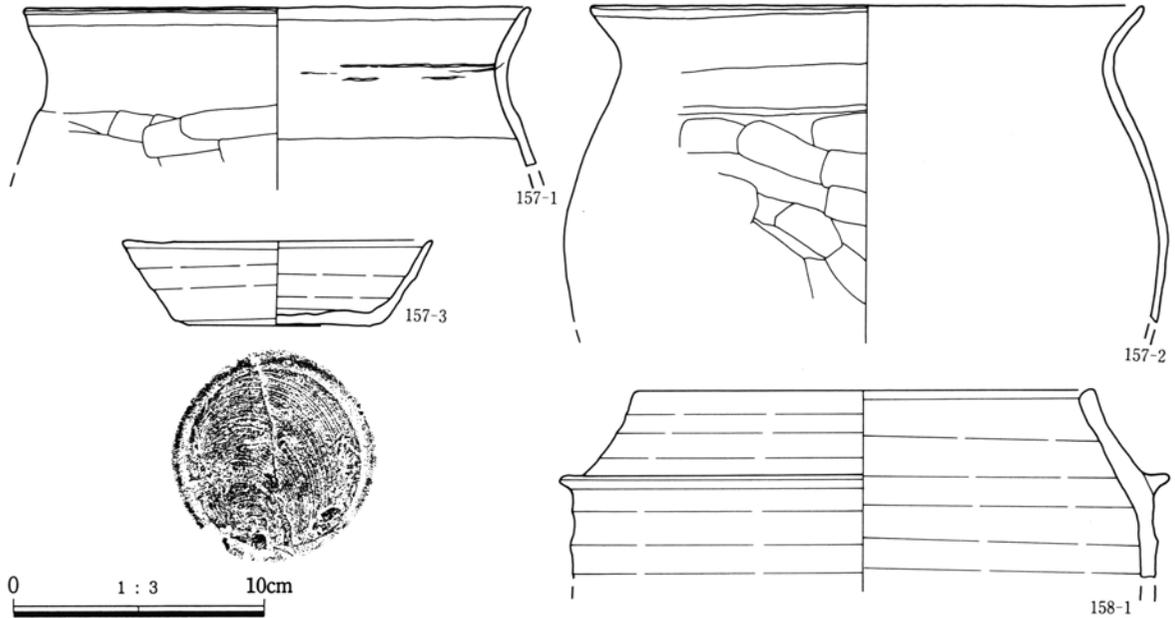
第189図 156号住居跡



- | | | | |
|------------|----------------------------|----------|---|
| 157・158号住居 | | 157号住居 | |
| 1 黄褐色土 | 総社砂層(基本土層IX層)主体。 | 8 黒褐色土 | As-C・黒色土ブロック少含。焼土粒僅含。 |
| 2 黄褐色土 | 総社砂層ブロック少含。As-C 僅含。 | 9 暗褐色土 | As-C・黒色土ブロック(8層に比べて少なめ)・総社砂層ブロック少含。焼土粒僅含。 |
| 158号住居 | | 10 暗褐色土 | As-C・黒色土ブロック多含。 |
| 3 暗褐色土 | As-C 少含。焼土粒・炭化物・灰・総社砂層粒僅含。 | 11 暗赤褐色土 | 焼土ブロック(7層に比べて)・灰少含。総社砂層ブロック僅含。 |
| 4 黒灰層 | | 12 暗褐色土 | 焼土ブロック僅含。総社砂層ブロック少含。 |
| 5 暗黄褐色土 | 総社砂層主体。黒灰・焼土粒僅含。 | | |
| 6 暗褐色土 | 総社砂層粒少含。焼土粒僅含。 | | |
| 7 暗褐色土 | As-C 少含。焼土粒・灰多含。 | | |

第190図 157・158号住居跡

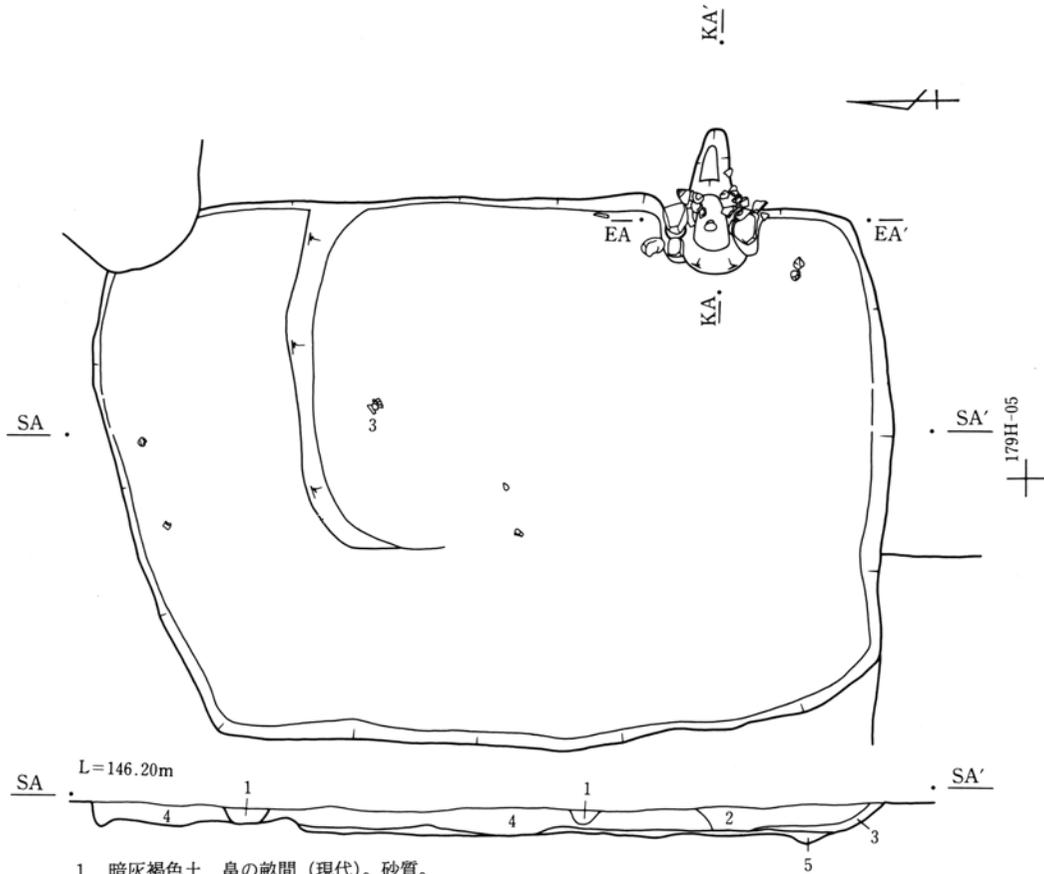




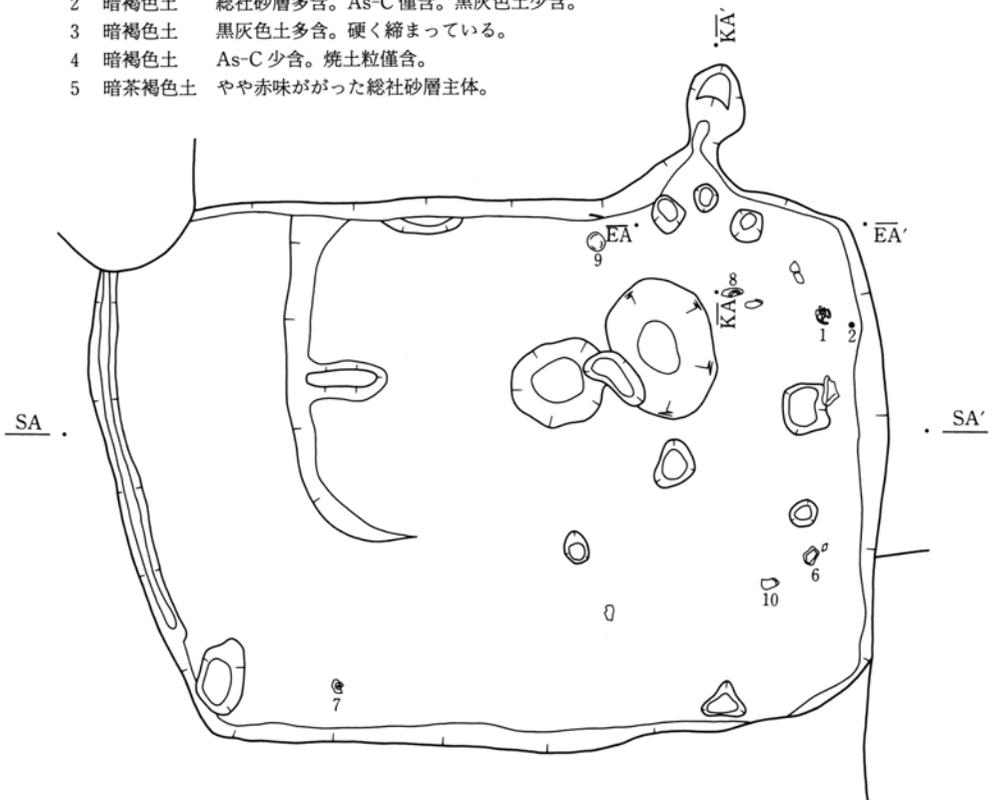
第191図 157号住居跡

157号竪穴住居跡・158号竪穴住居跡（第190・191図、写真図版68・141） 176H-08グリッドに位置し、北側の大部分が調査区域外に延びるために、平面形態は不明である。重複関係は157号竪穴住居跡の方が古く、158号竪穴住居跡が新しいが、159号竪穴住居跡の北東隅と158号竪穴住居跡の南西隅との重複関係は、遺構確認時点では不明である。貼り床の床面は堅く平坦である。残存する壁高は約30cmで、直立気味に立ち上がる。掘り方で大小の楕円形～円形の床下土坑やピットがいくつか検出されているが、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。ただ、158号竪穴住居跡の南東隅部分に位置する床下土坑がカマド右の貯蔵穴に相当する可能性がある。遺物は土師器の甕、須恵器の坏と羽釜などが出土している。カマドの位置は不明である。住居の廃棄時期は遺物から157号竪穴住居跡が9世紀前半、158号竪穴住居跡が10世紀前半と考えられる。

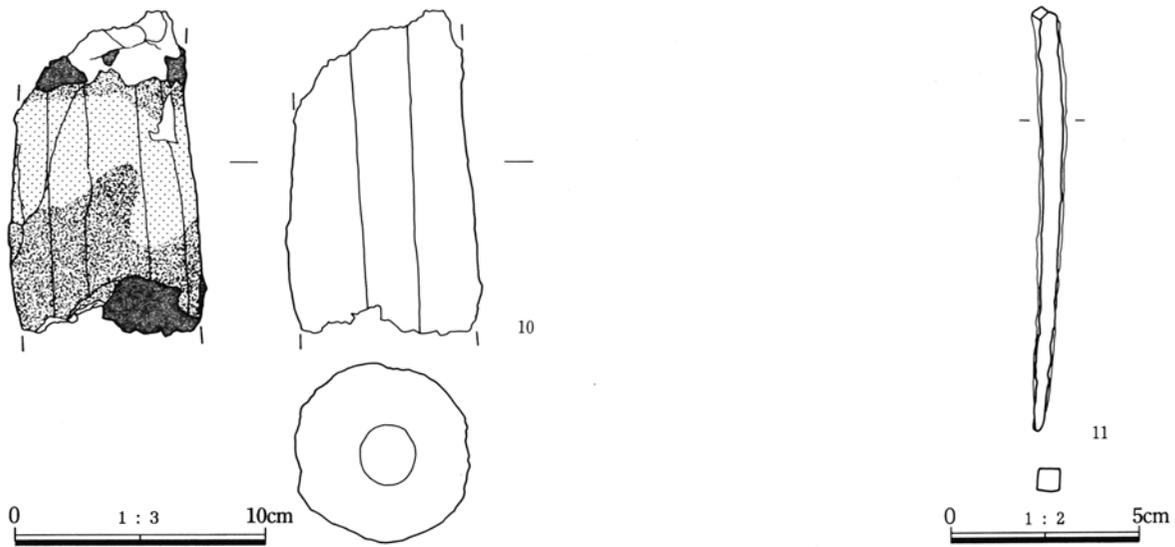
159号竪穴住居跡（第192～194図、写真図版68・69・141） 178H-06グリッドに位置し、159号竪穴住居跡の北東隅と158号竪穴住居跡の南西隅との重複関係は不明である。平面形態は長方形であるが、形状からあるいは拡幅の可能性もある。地山を掘り込んだだけの床面は堅く平坦である。残存する壁高は約20cmで、緩やかに立ち上がる。掘り方で大小の楕円形～円形の床下土坑やピットがいくつか検出されているが、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。遺物は須恵器の坏や椀、蓋、羽口、鉄釘などがカマド付近を中心に出土している。カマドは東壁の南東隅寄りに位置し、両袖に石を構築材として使用しており、袖から燃烧部、煙道部がしっかりしている。住居の廃棄時期は遺物から10世紀後半と考えられる。



- 1 暗灰褐色土 畠の畝間（現代）。砂質。
- 2 暗褐色土 総社砂層多含。As-C 僅含。黒灰色土少含。
- 3 暗褐色土 黒灰色土多含。硬く締まっている。
- 4 暗褐色土 As-C 少含。焼土粒僅含。
- 5 暗茶褐色土 やや赤味があった総社砂層主体。



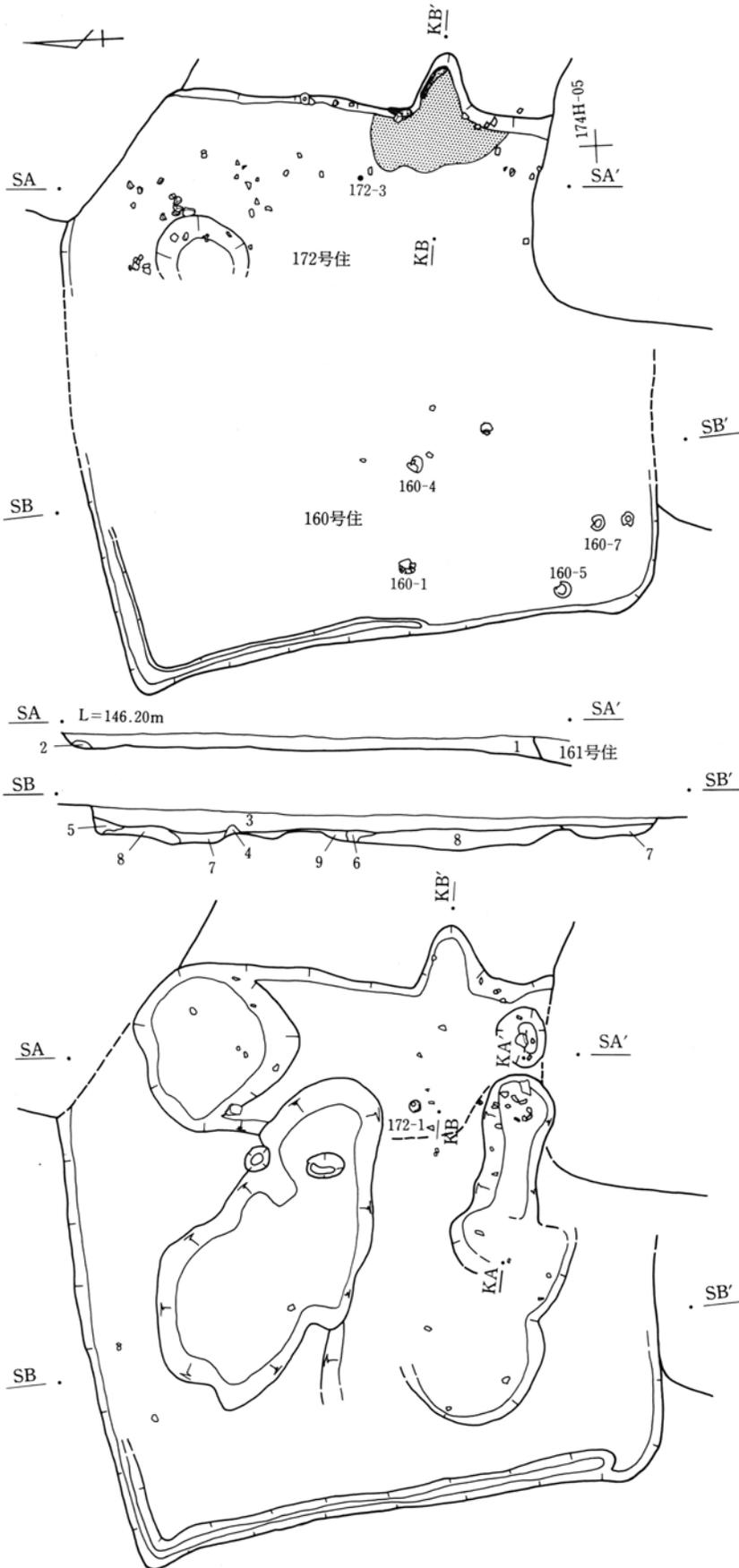
第192図 159号住居跡



第194図 159号住居跡

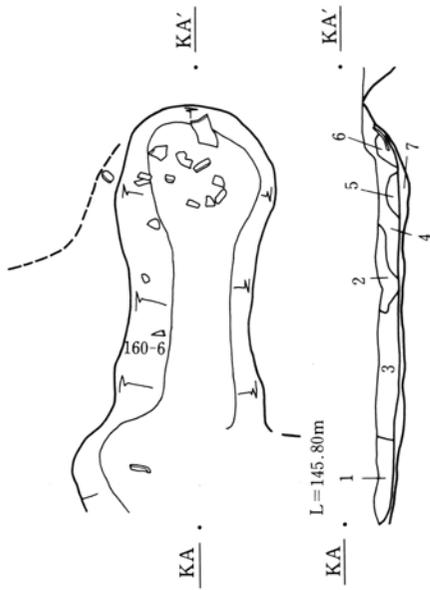
160号竪穴住居跡・172号竪穴住居跡（第195～197図、写真図版69・70・141・142） 174H-06グリッドに位置し、重複関係では、遺構確認時点の所見では172号竪穴住居跡が最も古く、次に160号竪穴住居跡と173号竪穴住居跡で、161号竪穴住居跡が最も新しい。また、住居のほぼ真ん中部分が圃場整備以前の農道により壊されているが、平面形態は長方形である。床面は堅く平坦である。確認面が浅いために残存する壁高は約10cmで、緩やかに立ち上がる。160号竪穴住居跡の北西隅から西壁にかけて壁溝、172号竪穴住居跡のカマド右の南東隅部分に小型の貯蔵穴が認められる。掘り方で大小の楕円形～円形の床下土坑が検出されているが、明確な柱穴などは検出されていない。遺物は土師器の坏、須恵器の坏と椀、銅製品の飾金具などが出土している。カマドは共に東壁の中央からやや南寄りに位置し、特に、160号竪穴住居跡のカマドは掘り方で検出されている。住居の廃棄時期は遺物から172号竪穴住居跡が9世紀前半、160号竪穴住居跡が9世紀後半と考えられる。

161号竪穴住居跡（第198・199図、写真図版70・71・142） 175H-04グリッドに位置し、重複関係は無い。東壁の大部分からカマドの一部が圃場整備以前の農道により壊されているが、平面形態は長方形である。地山を掘り込んだだけの床面は堅く平坦である。確認面が浅いために残存する壁高は約20cmで、緩やかに立ち上がる。掘り方で楕円形～円形のいくつかの床下土坑や掘り込みが検出されており、北壁際から西壁際を廻って南壁に及ぶ壁溝や、遺物が多数存在する貯蔵穴が認められるが、明確な柱穴は検出されていない。遺物は土師器の坏、須恵器の坏や甕や椀、羽釜、灰釉陶器の椀、鉄滓などが貯蔵穴や床下土坑などから集中して出土している。カマドは東壁の南東隅寄りに位置し、袖部分は圃場整備以前の農道により壊されているが、煙出し部分にいくつかの石が残存し、燃烧部の壁に粘土が認められることから、構造のしっかりしたカマドだったと推定される。住居の廃棄時期は遺物から10世紀前半と考えられる。



- 160・172号住居
 172号住居
 1 暗褐色土
 As-C 少含。焼土粒僅含。
 2 暗褐色土
 総社砂層少含。
 160号住居
 3 暗褐色土
 As-C 少含。総社砂層粒・
 焼土粒・炭化物僅含。
 4 総社砂層(粘性土)ブロック。
 5 暗褐色土
 1層に総社砂層粒多含。
 6 暗褐色土
 As-C 少含。
 総社砂層ブロック僅含。
 7 暗褐色土
 As-C (1層に比べて少ない)
 ・総社砂層ブロック少含。
 8 暗赤褐色土
 As-C 僅含。
 焼土粒・総社砂層粒少含。
 9 黒褐色土
 As-C 僅含。

第195図 160・172号住居跡

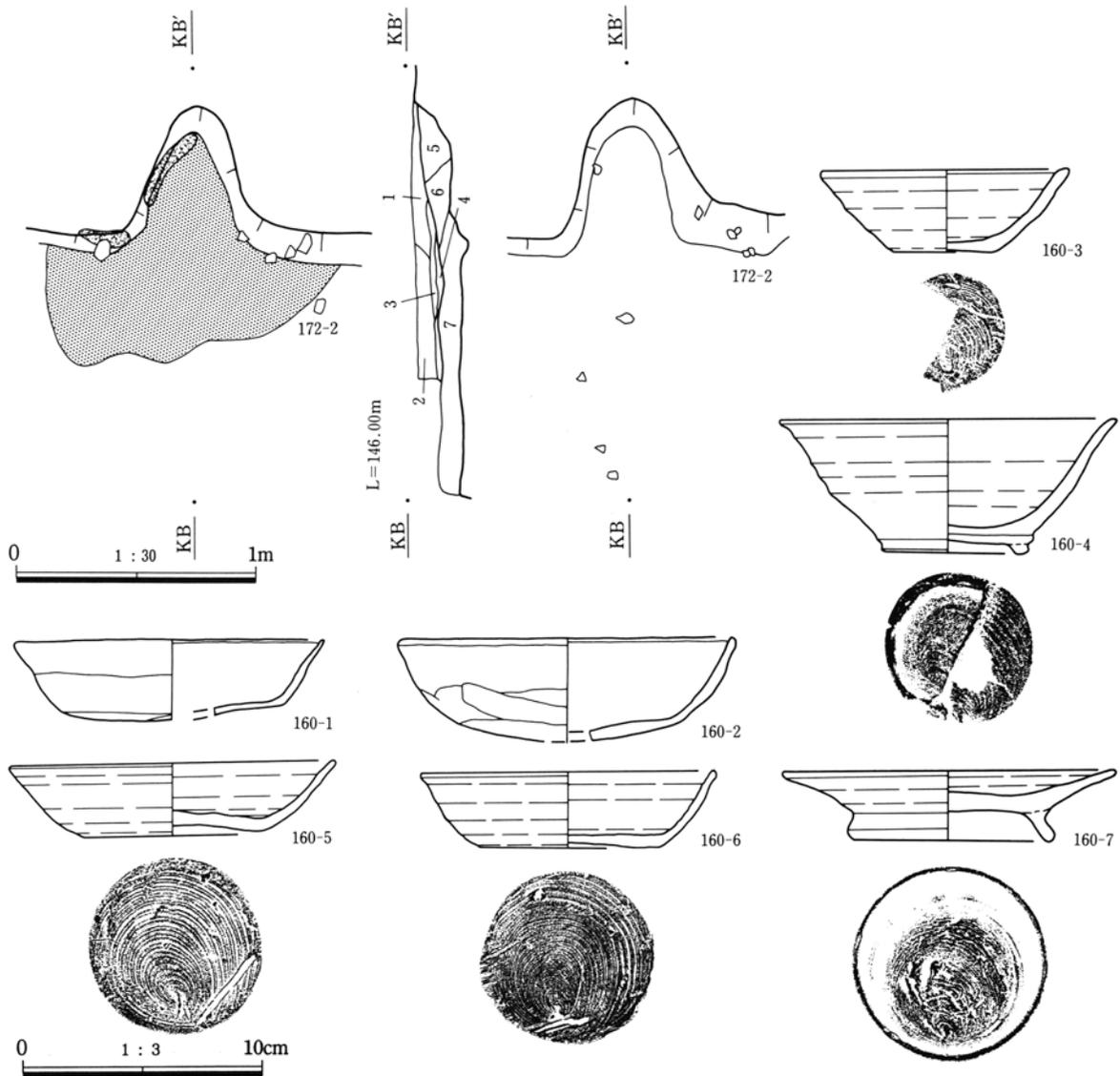


160号住居 (KA-KA')

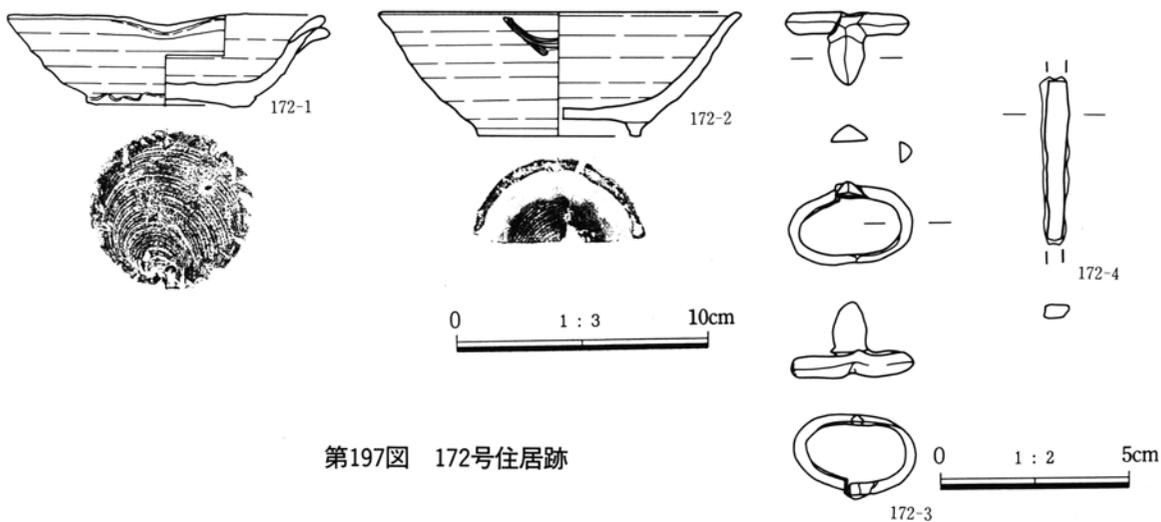
- 1 暗褐色土 As-C・総社砂層 (砂利含む) 少含。焼土粒・炭化物僅含。
- 2 暗灰褐色土 焼土粒・灰少含。炭化物僅含。
- 3 暗褐色土 As-C 僅含。焼土粒・灰少含。
- 4 暗褐色土 As-C・焼土粒・灰少含。
- 5 黒褐色土 焼土粒・灰僅含。粘性。
- 6 暗灰色砂層
- 7 暗褐色土 焼土ブロック少含。灰僅含。

172号住居 (KB-KB')

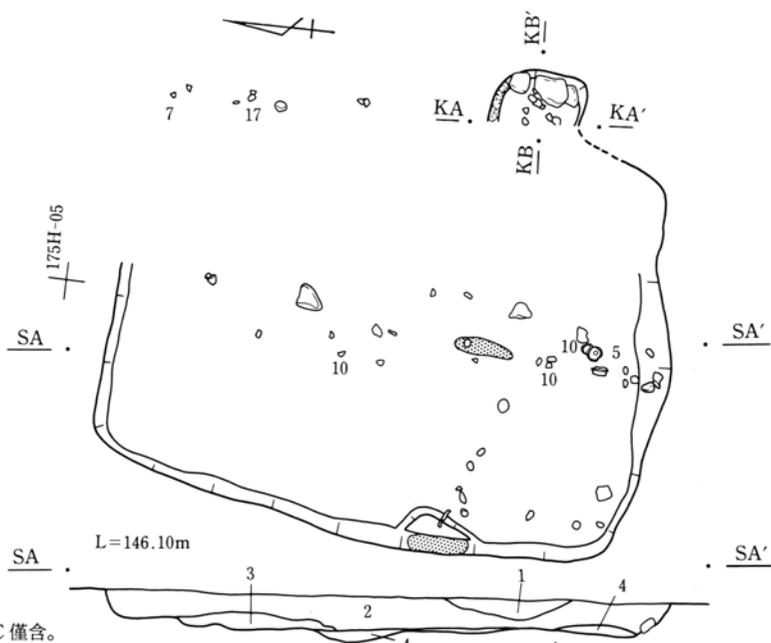
- 1 暗褐色土 As-C・焼土粒僅含。Hr-FA?ブロック少含。
- 2 暗褐色土 As-C・炭化物僅含。焼土粒少含。
- 3 暗灰色土 灰多含。焼土粒僅含。
- 4 暗灰色土 黒灰主体。
- 5 暗赤色土 焼土粒・灰少含。
- 6 暗褐色土 As-C ほとんど含まない。焼土細粒僅含 (7層よりも少ない)。
- 7 暗褐色土 As-C・褐色土ブロック少含。焼土粒僅含。



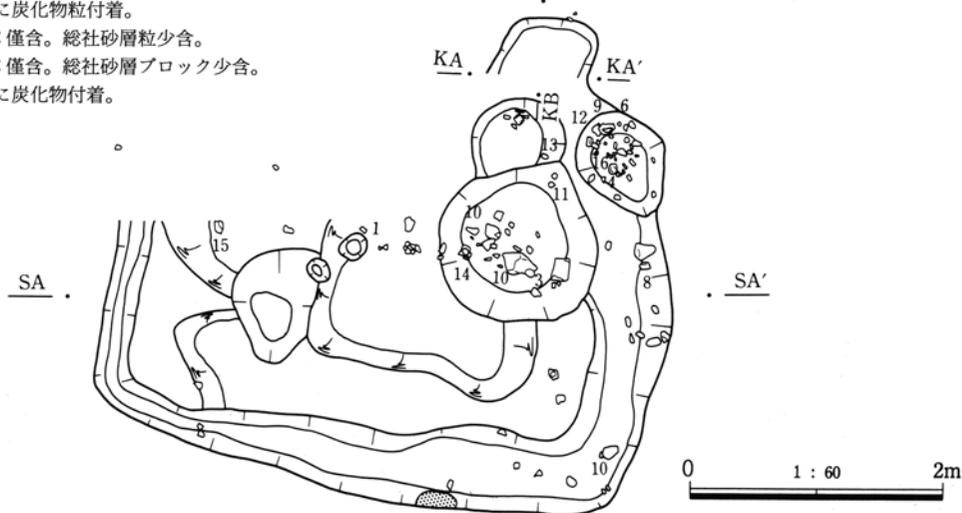
第196図 160・172号住居跡



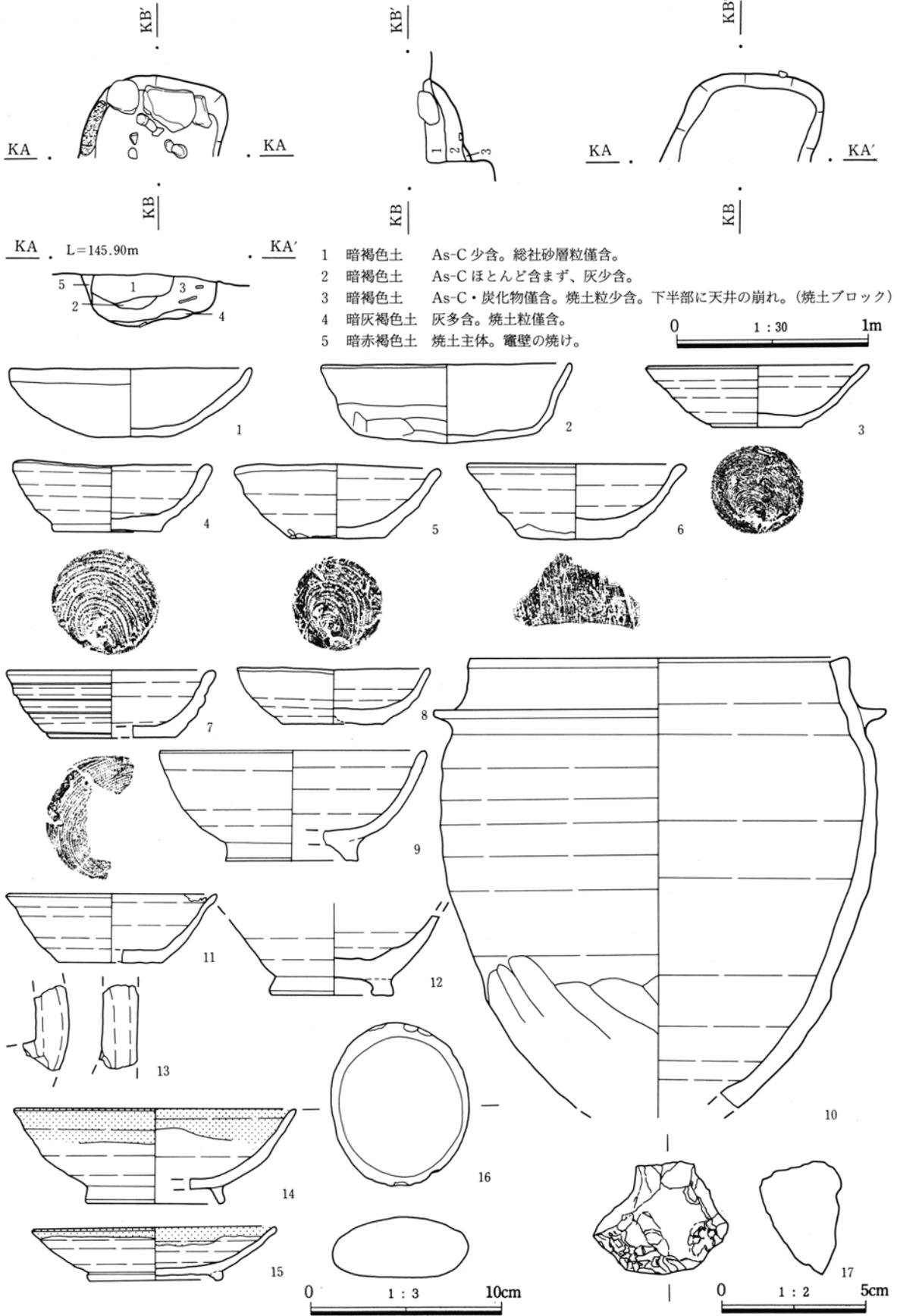
第197図 172号住居跡



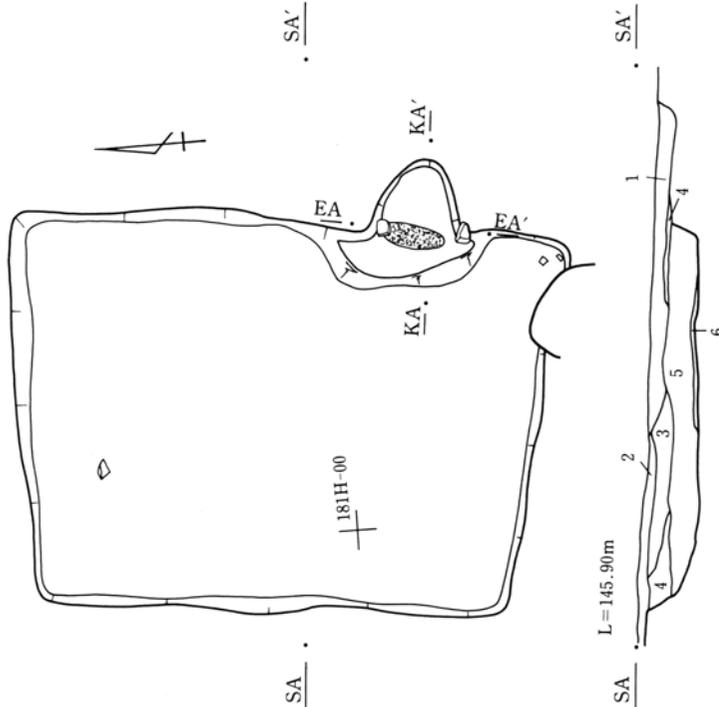
- 1 暗褐色土 As-C 僅含。
- 2 暗褐色土 160住居1層と類似するが、焼土粒少ない。
下面に炭化物粒附着。
- 3 暗褐色土 As-C 僅含。総社砂層粒少含。
- 4 暗褐色土 As-C 僅含。総社砂層ブロック少含。
上面に炭化物附着。



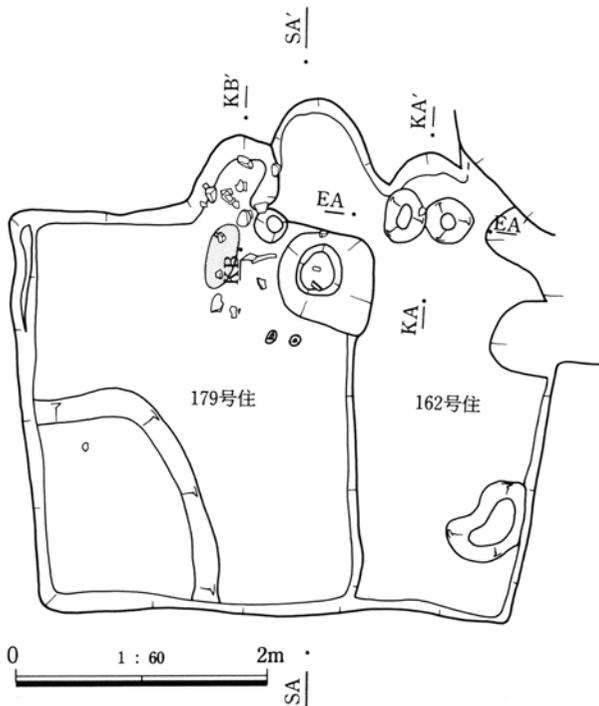
第198図 161号住居跡



第199図 161号住居跡

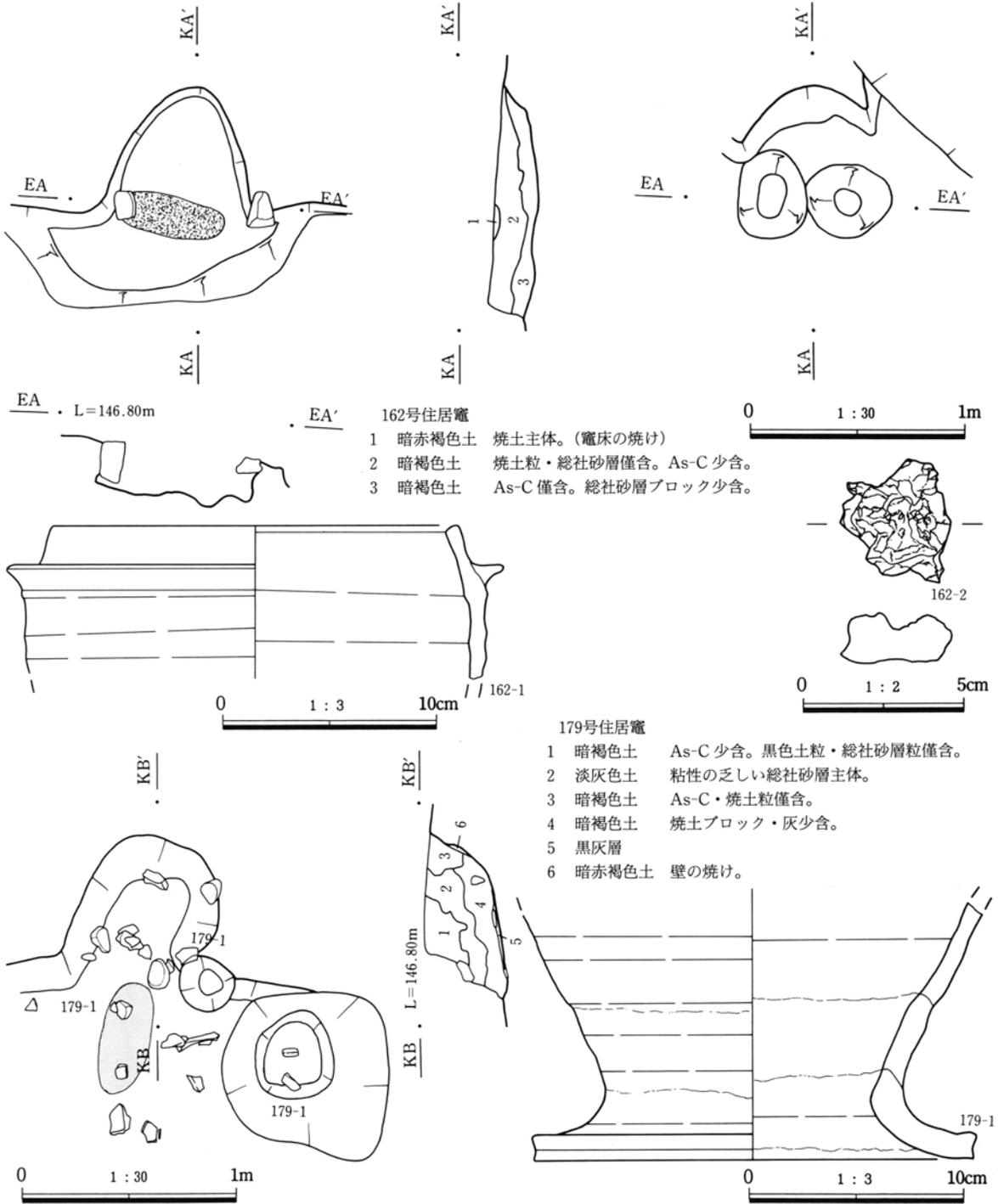


- 1 暗褐色土 総社砂層及び砂利多含。(別の土)
162号住居
- 2 暗褐色土 総社砂層ブロック・As-C 僅含。
- 3 暗褐色土 総社砂層ブロック・As-C 少含。炭化物粒・焼土粒僅含。
- 4 黒褐色土 As-C 少含。焼土粒僅含。
179号住居
- 5 暗褐色土 やや砂質。As-C 僅含。総社砂層ブロック・砂利少含。
- 6 黒褐色土 黒灰混入 (少量) 貼り床か? (固く締まっている)



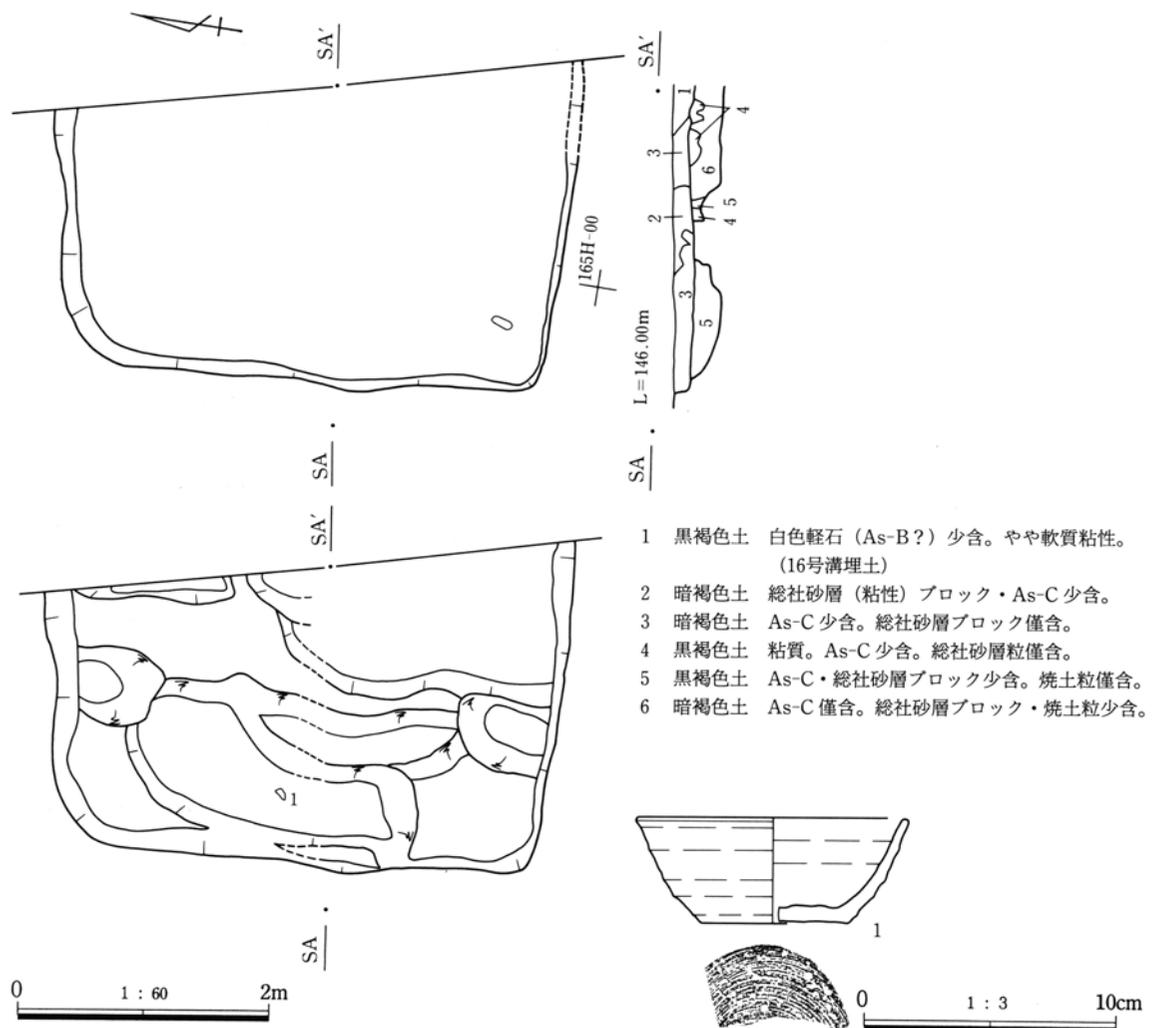
162号竪穴住居跡・179号竪穴住居跡 (第200・201図、写真図版71・72・142・147) 180G-49グリッドに位置し、重複関係は179号竪穴住居跡の方が古く、162号竪穴住居跡が新しい。平面形態は共に長方形である。共に地山を掘り込んだだけの床面は堅く平坦である。残存する壁高は、162号竪穴住居跡が約10cm、179号竪穴住居跡が約40cmで、共に垂直気味に立ち上がる。掘り方で床下土坑やピットがいくつか検出されており、179号竪穴住居跡のカマド右の南東隅に貯蔵穴が認められるが、明確な壁溝や柱穴は検出されていない。遺物は須恵器の羽釜や甑、鉄滓などが出土している。カマドは162号竪穴住居跡のカマドが東壁の南東隅寄り、両袖に石を構築材として使用している。179号竪穴住居跡のカマドは東壁の中央から南寄りに位置し、燃烧部内にくつかの石が残存することから、構築材に石が使用されていた可能性がある。住居の廃棄時期は遺物から、162号竪穴住居跡と179号竪穴住居跡共に9世紀以降と考えられる。

第200図 162・179号住居跡



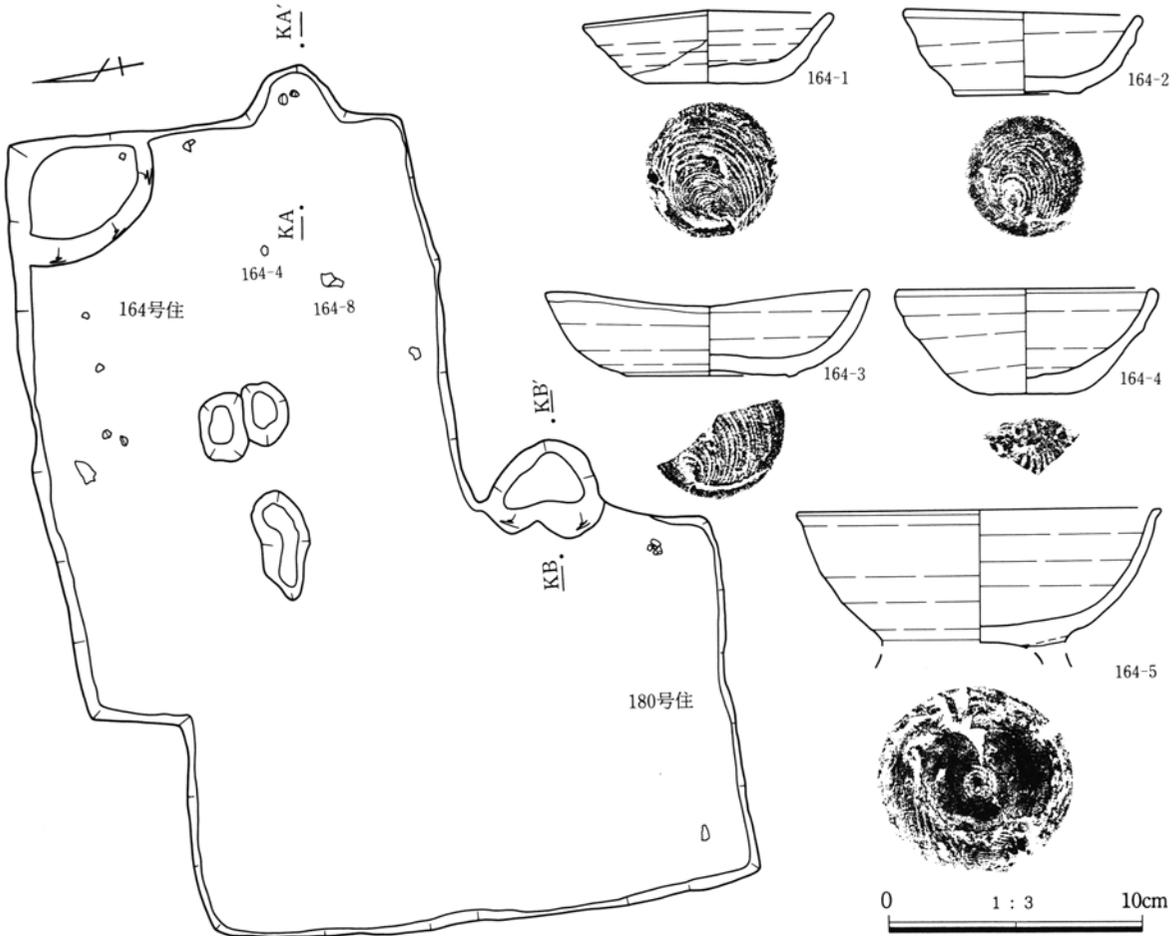
第201図 162・179号住居跡

163号竪穴住居跡（第202図、写真図版72・142） 165H-01グリッドに位置し、東側半分が調査区域外に延びるため、重複関係や平面形態は不明である。床面は堅く平坦である。確認面は浅く、残存する壁高は約15cmで、緩やかに立ち上がる。掘り方には浅い掘り込みがいくつか検出されているが、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。遺物は須恵器の坏などが出土している。カマドはおそらくは東壁に位置すると考えられる。住居の廃棄時期は不明である。



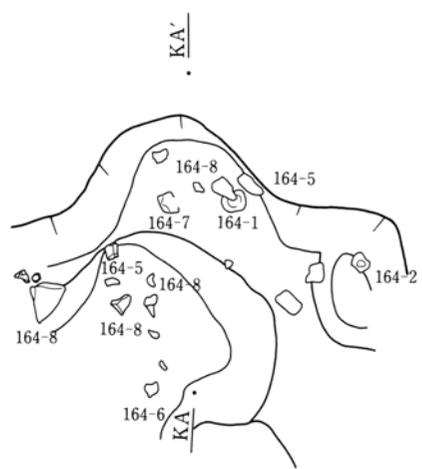
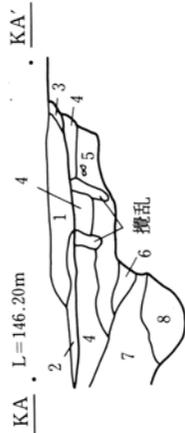
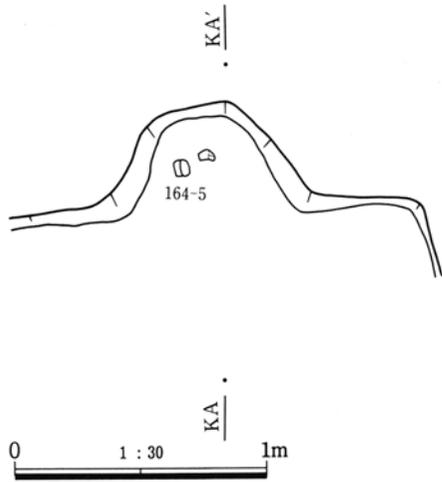
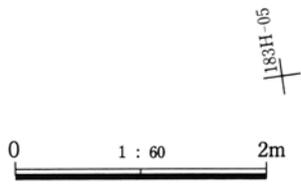
第202図 163号住居跡

164号竪穴住居跡・180号竪穴住居跡 (第203～205図、写真図版73・74・142・143・146・147) 181H-04グリッドに位置し、重複関係は、遺構確認時点の所見では180号竪穴住居跡の方が古く、164号竪穴住居跡が新しい。平面形態は164号竪穴住居跡が東西長軸の長方形、180号竪穴住居跡が南北長軸の長方形である。床面は堅く平坦である。確認面は浅いために残存する壁高は僅かで、緩やかに立ち上がる。両竪穴住居跡共に掘り方から大小の楕円形～円形の床下土坑やピットが多数検出されており、両方のカマド右の南東隅に貯蔵穴が認められるが、明確な壁溝や柱穴は検出されていない。ただ、164号竪穴住居跡のカマドの手前に楕円形～円形の床下土坑が集中しており、銅塊が出土していることから、工房の可能性も考えられる。また、164号竪穴住居跡の北壁の一部に壁溝と考えられる細長い掘り込みが検出されている。遺物は須恵器の坏や椀、甕、羽釜などが出土している。特に、銅製品の未製品とも考えられる塊の出土は、前記したように集落における工房の存在を暗示させる。カマドは両竪穴住居跡共に東壁の南東隅寄りに位置し、前記したように南東隅にそれぞれ貯蔵穴をもっている。住居の廃棄時期は遺物から164号竪穴住居跡が10世紀前半、180号竪穴住居跡が10世紀後半と考えられ、遺構確認時点の所見と逆になっている。

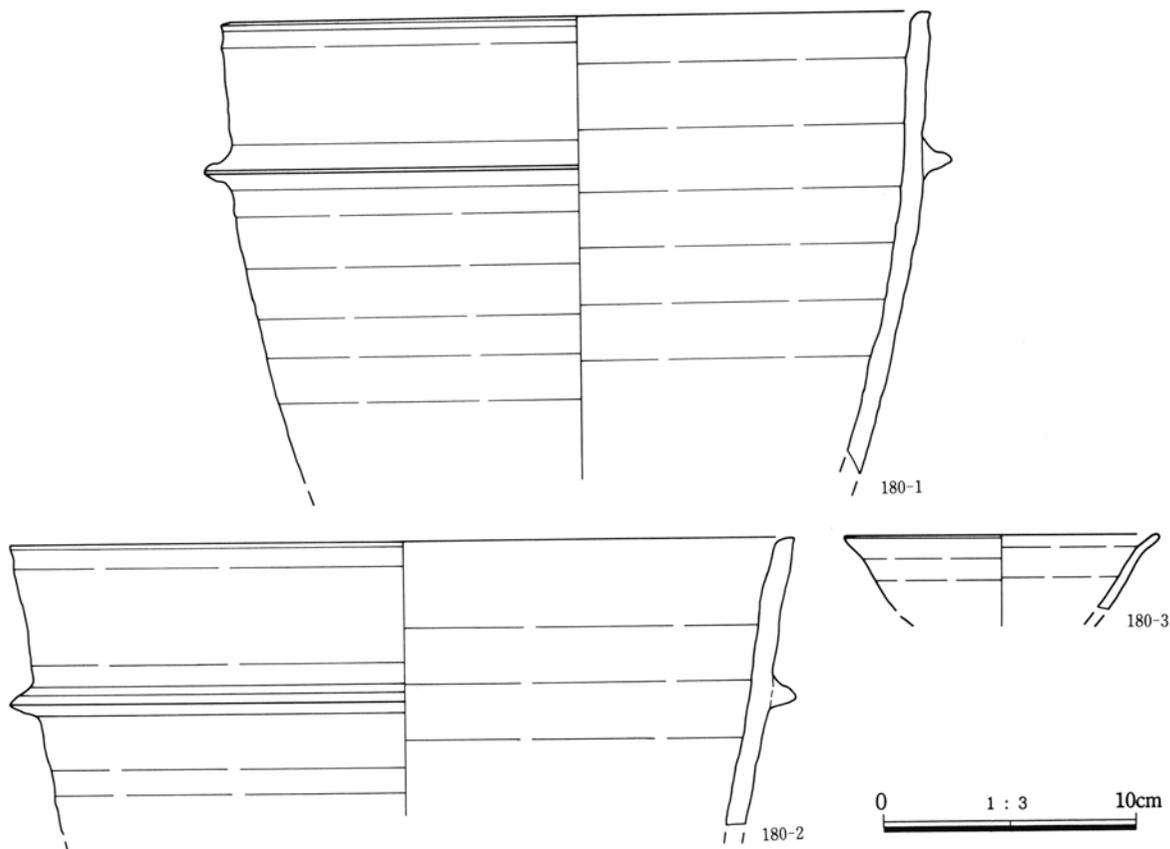


164号住居竈

- 1 暗褐色土 As-C・焼土粒少含。
- 2 黒褐色土 1層に比べて、焼土粒多含。灰僅含。
- 3 暗赤褐色土 1層に焼土ブロック多含。
- 4 暗褐色土 焼土ブロック多含。As-C少含。
- 5 灰褐色土 灰と炭化物を多含。焼土粒少含。
- 6 黄褐色土 総社砂層主体、黒色土を少含。
- 7 暗褐色土 As-B多含。総社砂層小ブロックを下部に多含。灰小ブロック少含。
- 8 黄褐色土 総社砂層小ブロックとAs-Bを多く含む黒色土の混土。灰小ブロック多含。



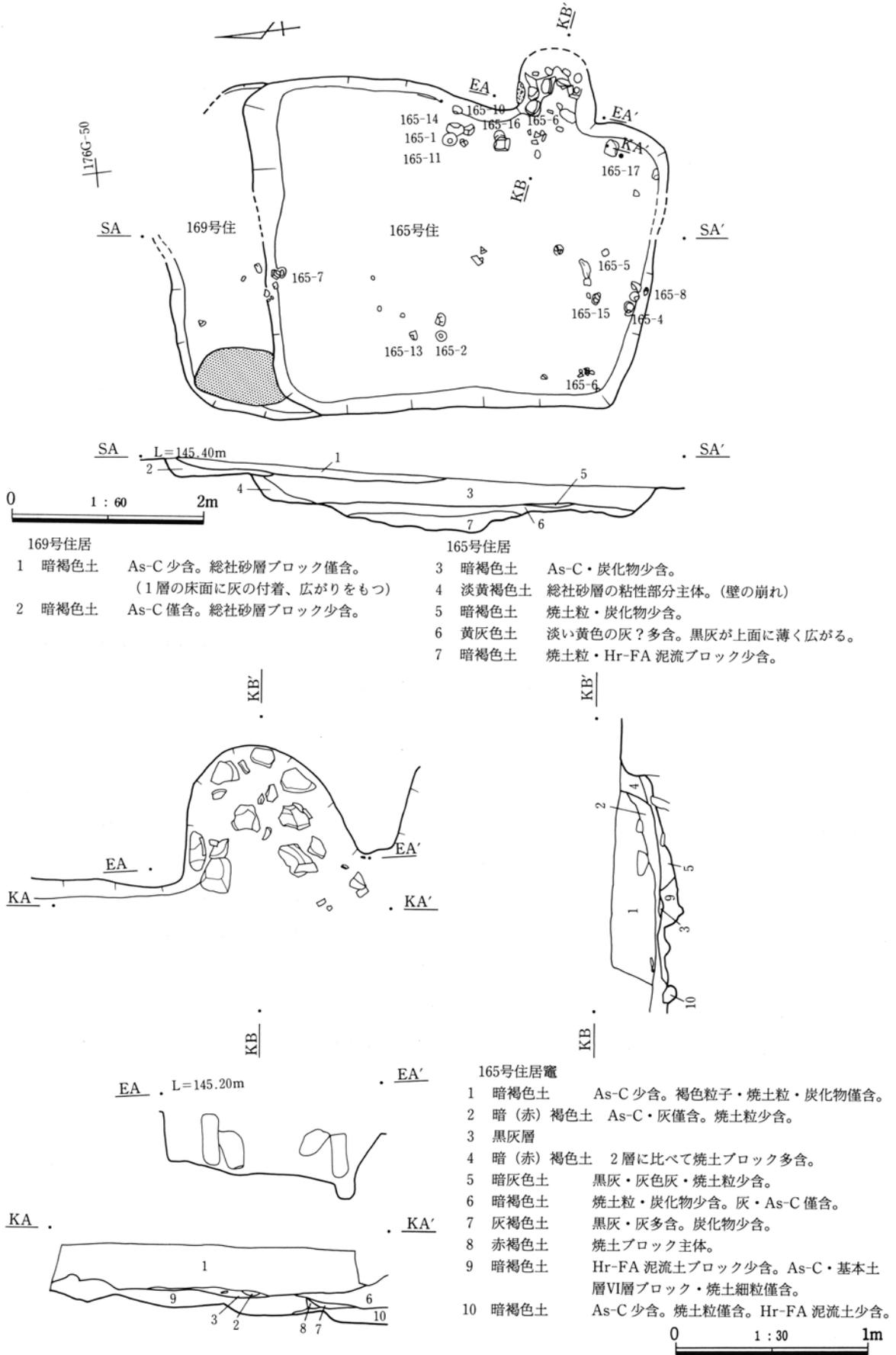
第203図 164・180号住居跡



第205図 180号住居跡

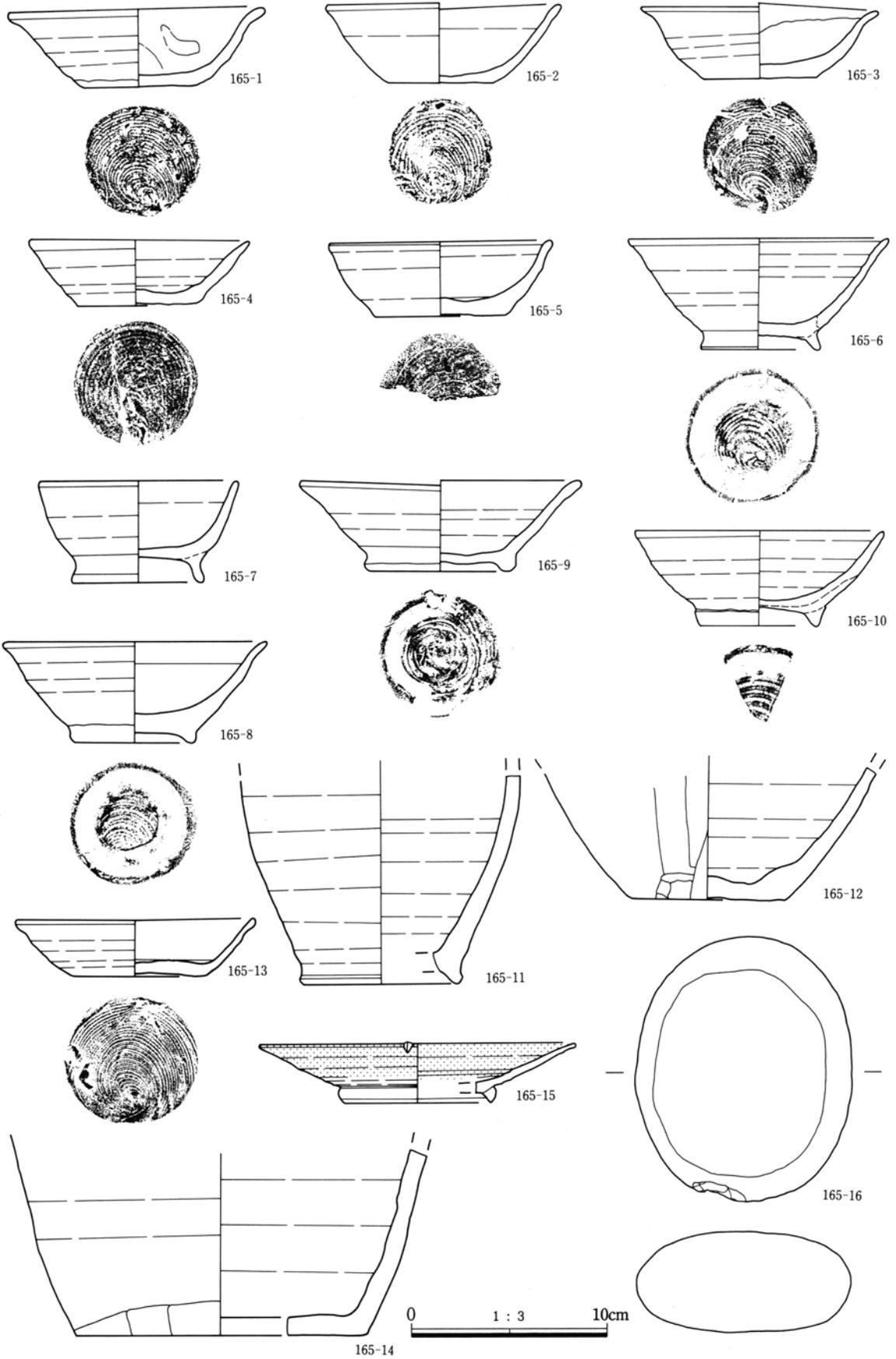
165号竪穴住居跡・168号竪穴住居跡・169号竪穴住居跡（第206～209図、写真図版74～76・143・144） 176
 G-48グリッドに位置し、重複関係は168号竪穴住居跡が最も古く、次に165号竪穴住居跡、169号竪穴住居跡
 の順に新しい。南に緩やかに傾斜する地形であることや、確認面が浅いために、169号竪穴住居跡のカマド部
 分を含む南側が削平されてしまっている。平面形態は共に長方形である。地山を掘り込んだだけの床面は堅
 く平坦である。残存する壁高は、165号竪穴住居跡が約30cmと深いのに対して、168号竪穴住居跡が約10cm、
 165号竪穴住居跡が約15cmと浅いが、それぞれが緩やかに立ち上がる。明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出され
 ていない。遺物は168号竪穴住居跡が土師器の坏や甕を中心に、165号竪穴住居跡が須恵器の坏や碗、甕、灰
 釉陶器の碗などを中心に、共にカマド周辺を中心に集中して出土している。カマドは共に東壁の南東隅寄り
 に位置し、住居の廃棄時期は遺物から168号竪穴住居跡が9世紀中葉、165号竪穴住居跡が9世紀後半、169号
 竪穴住居跡がそれ以降と考えられる。

第3章 検出された遺構・遺物

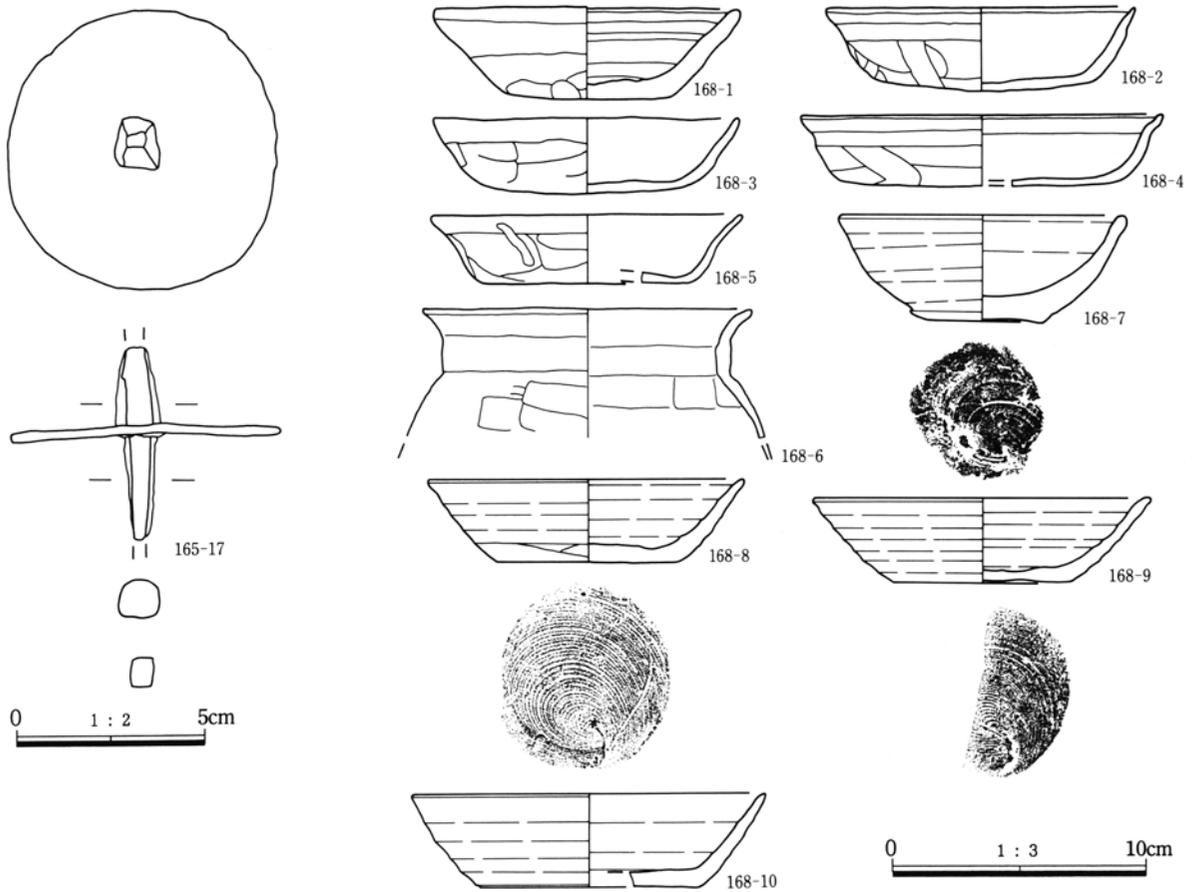


第206図 165・169号住居跡

第3章 検出された遺構・遺物

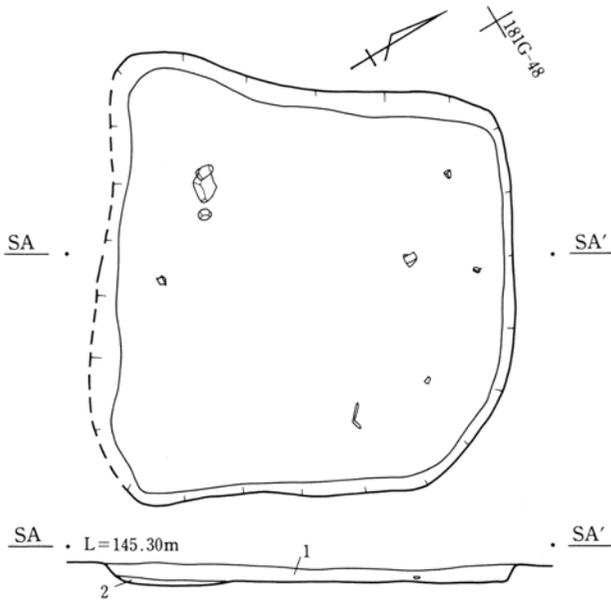


第208図 165号住居跡

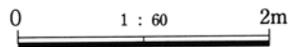


第209図 165・168号住居跡

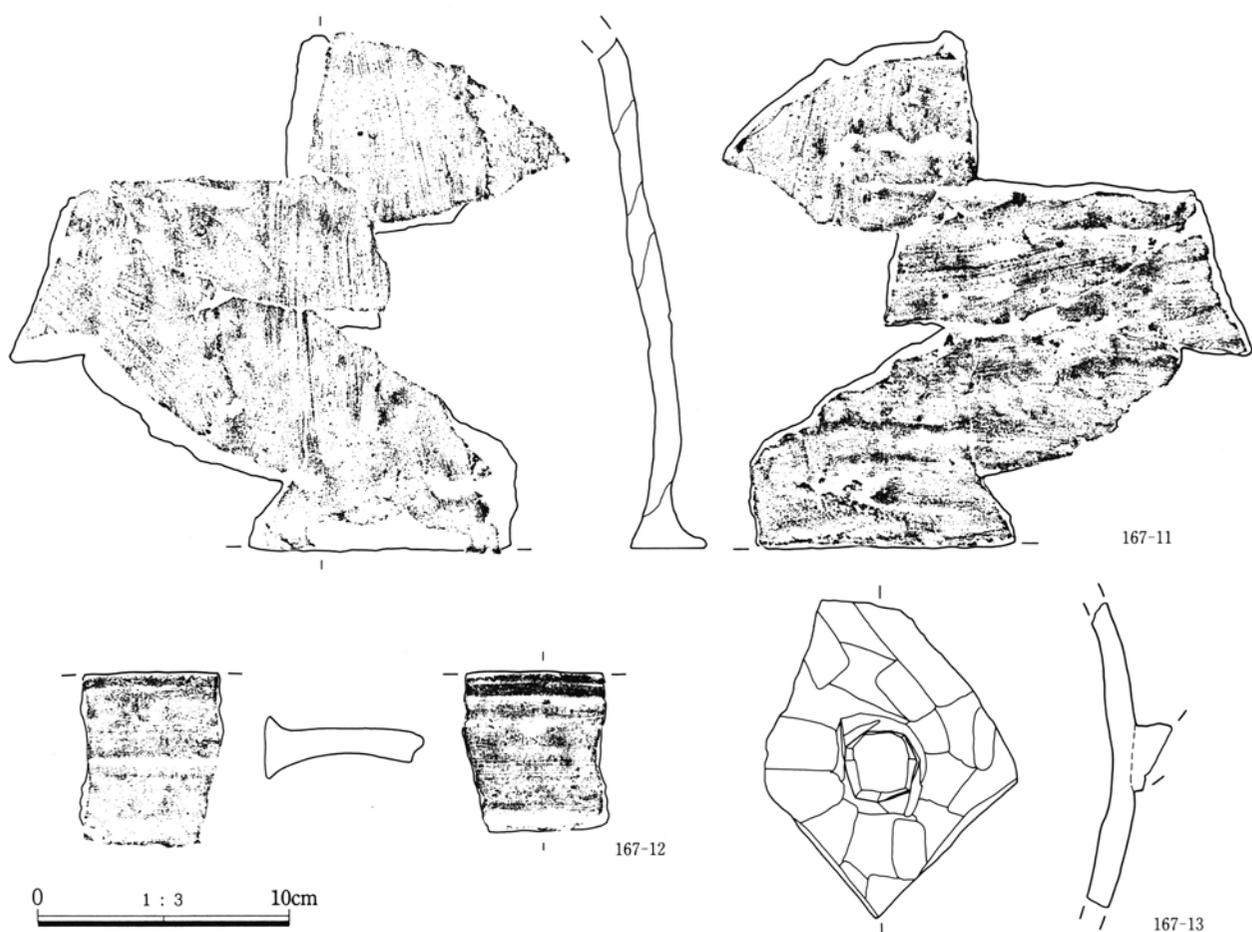
166号竪穴住居跡(第210図、写真図版76) 180 G-46グリッドに位置し、重複関係は無い。平面形態はほぼ正方形である。地山を掘り込んだだけの床面は堅く平坦である。確認面が浅いために残存する壁高は約10cmで、緩やかに立ち上がる。明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。器形や時期の判断できる遺物はほとんど無い。カマドはその痕跡が認められないことから、あるいは竪穴遺構とも考えられる。住居の廃棄時期は不明である。



- 1 黒褐色土 As-C 少含。総社砂層粒僅含。やや粘性。
- 2 暗褐色土 総社砂層多含。



第210図 166号住居跡

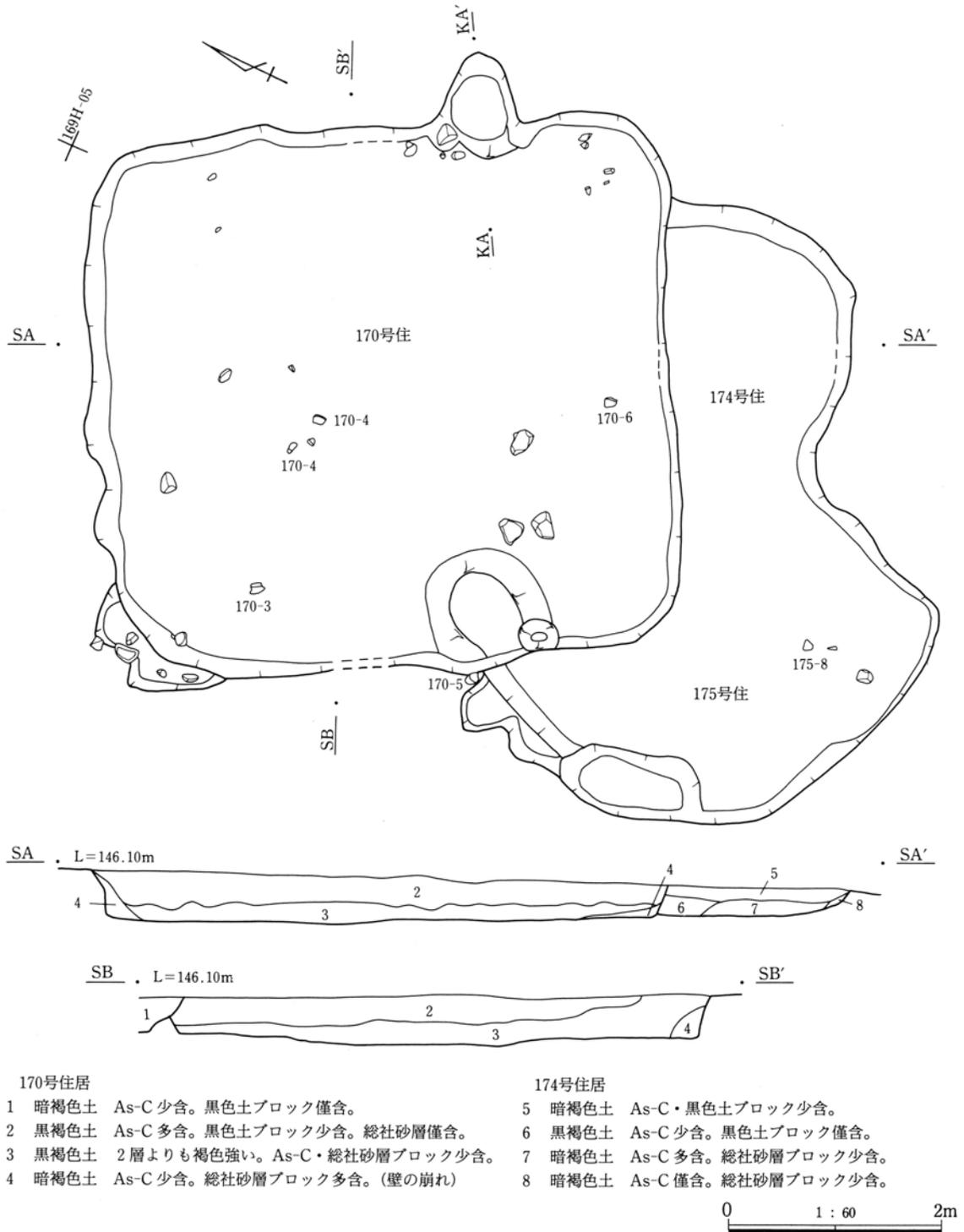


第212図 167号住居跡

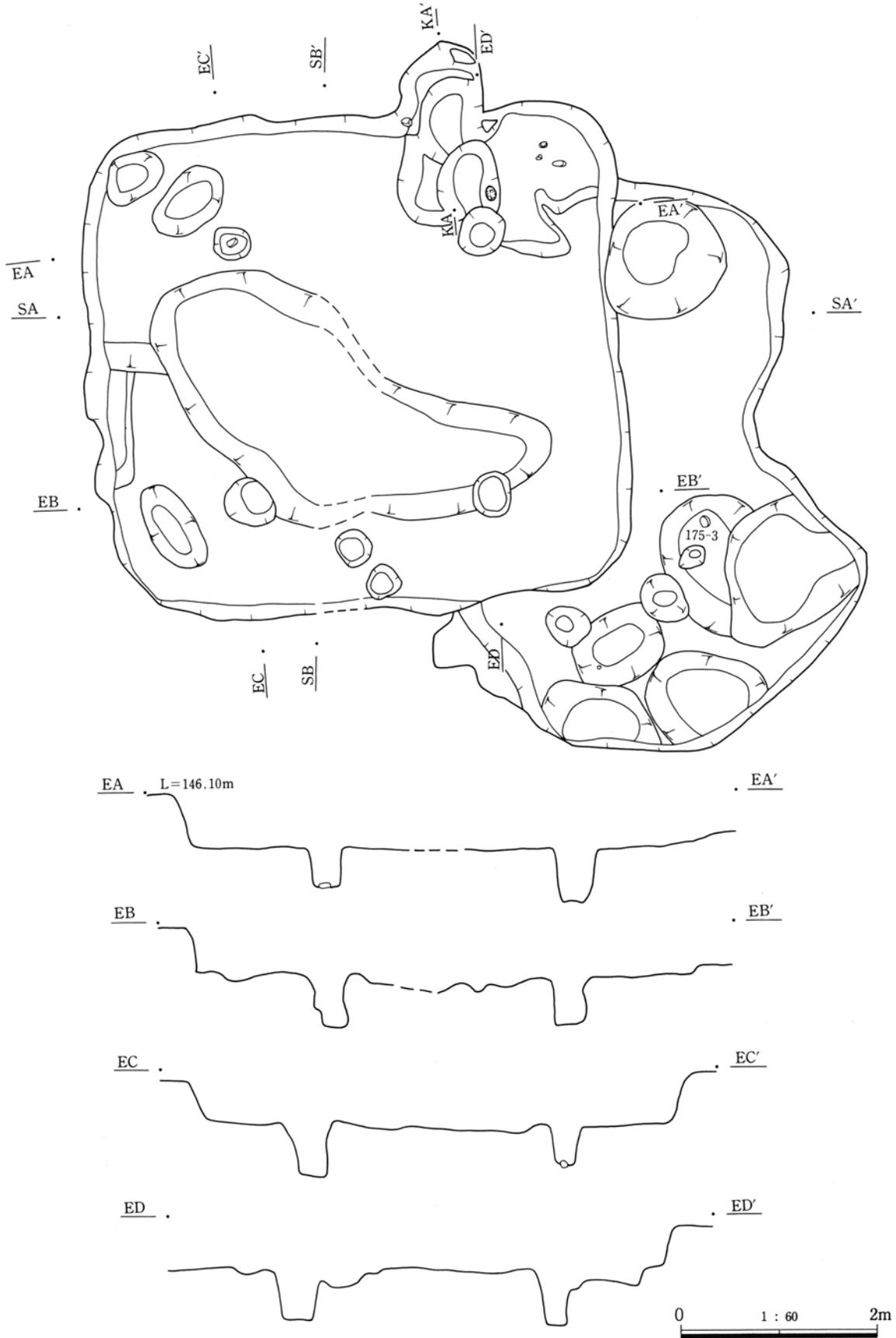
170号竪穴住居跡・174号竪穴住居跡・175号竪穴住居跡（第213～216図、写真図版77・144・145） 169H-01 グリッドに位置し、遺構確認時点での重複関係では、土層断面観察などから170号竪穴住居跡が最も新しく、174号竪穴住居跡と175号竪穴住居跡との新旧関係は不明確との判断であった。平面形態は、170号竪穴住居跡がやや正方形気味の長方形であるが、174号竪穴住居跡や175号竪穴住居跡は重複の様子から不明である。床面は堅く平坦であり、特に170号竪穴住居跡は貼り床である。残存する壁高は、170号竪穴住居跡が約40cmと深く、直立気味に立ち上がるのに対して、174号竪穴住居跡や175号竪穴住居跡は約25cmで、緩やかに立ち上がる。掘り方で大小の楕円形～円形の床下土坑とピットがいくつか検出されており、170号竪穴住居跡には4本の柱穴がしっかりと認められるが、明確な壁溝や貯蔵穴は検出されていない。あるいはカマド右の南東隅部分に存在する不定形の掘り込みが貯蔵穴に相当するのかもしれない。遺物では、170号竪穴住居跡からは土師器の坏や甕、須恵器の碗や甕、羽口など、175号竪穴住居跡からは須恵器の碗や甕、羽釜、灰釉陶器の碗などが出土している。170号竪穴住居跡のカマドは東壁の中央から南寄りに位置し、左袖に石を構築材として利用している。174号竪穴住居跡と175号竪穴住居跡のカマドの位置は不明であるが、重複による破壊を受けて消失したものなのか、あるいは、174号竪穴住居跡と175号竪穴住居跡の両方かどちらかが竪穴遺構の可能性も考えられる。住居の廃棄時期は遺物から170号竪穴住居跡が8世紀前半、175号竪穴住居跡が10世紀前半と

第3章 検出された遺構・遺物

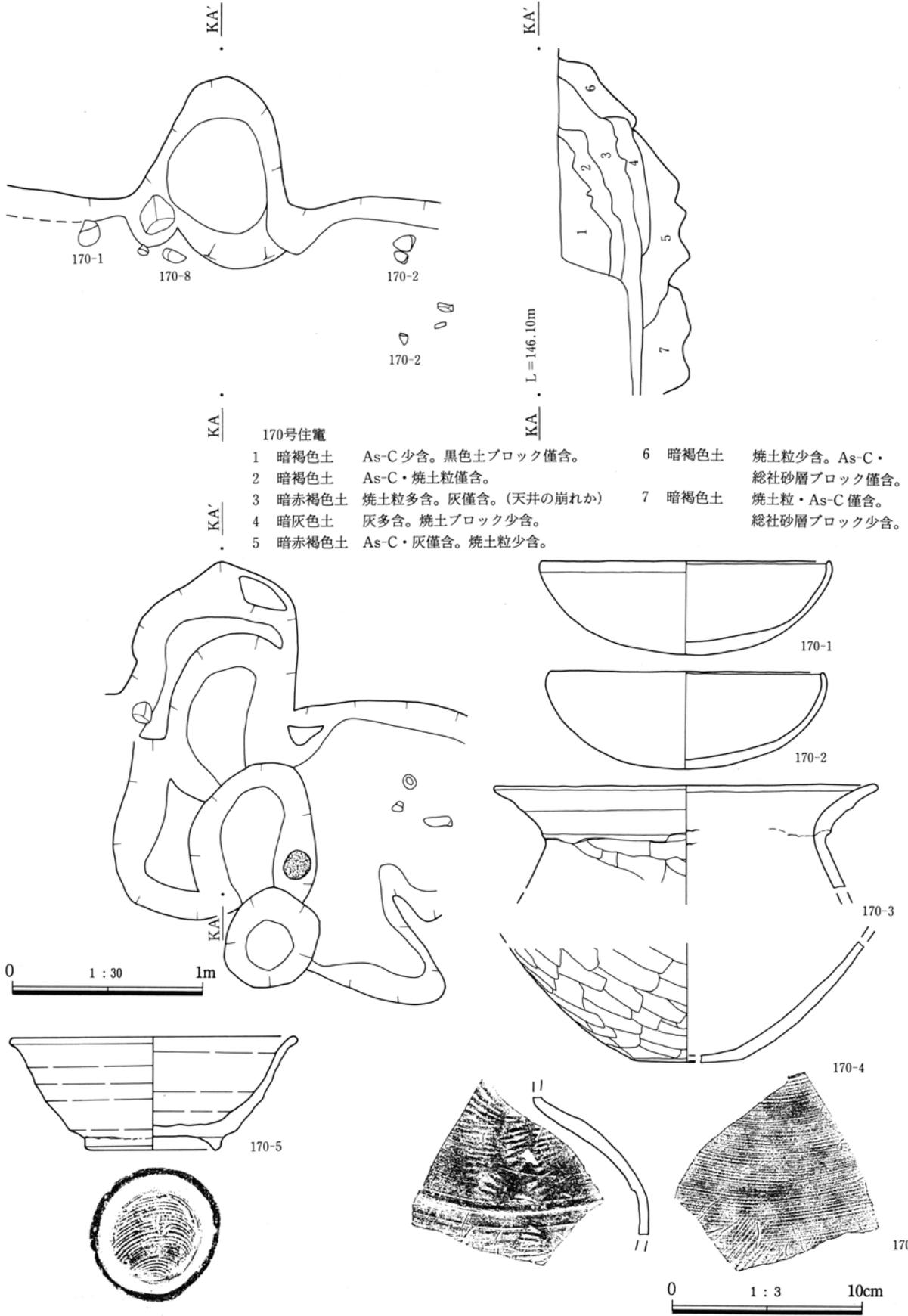
考えられることから、遺構確認時点の判断と異なる結果である。おそらくは、住居形態からも170号竪穴住居跡が最も古いという、遺物からの時期判断が正しいと考えられる。



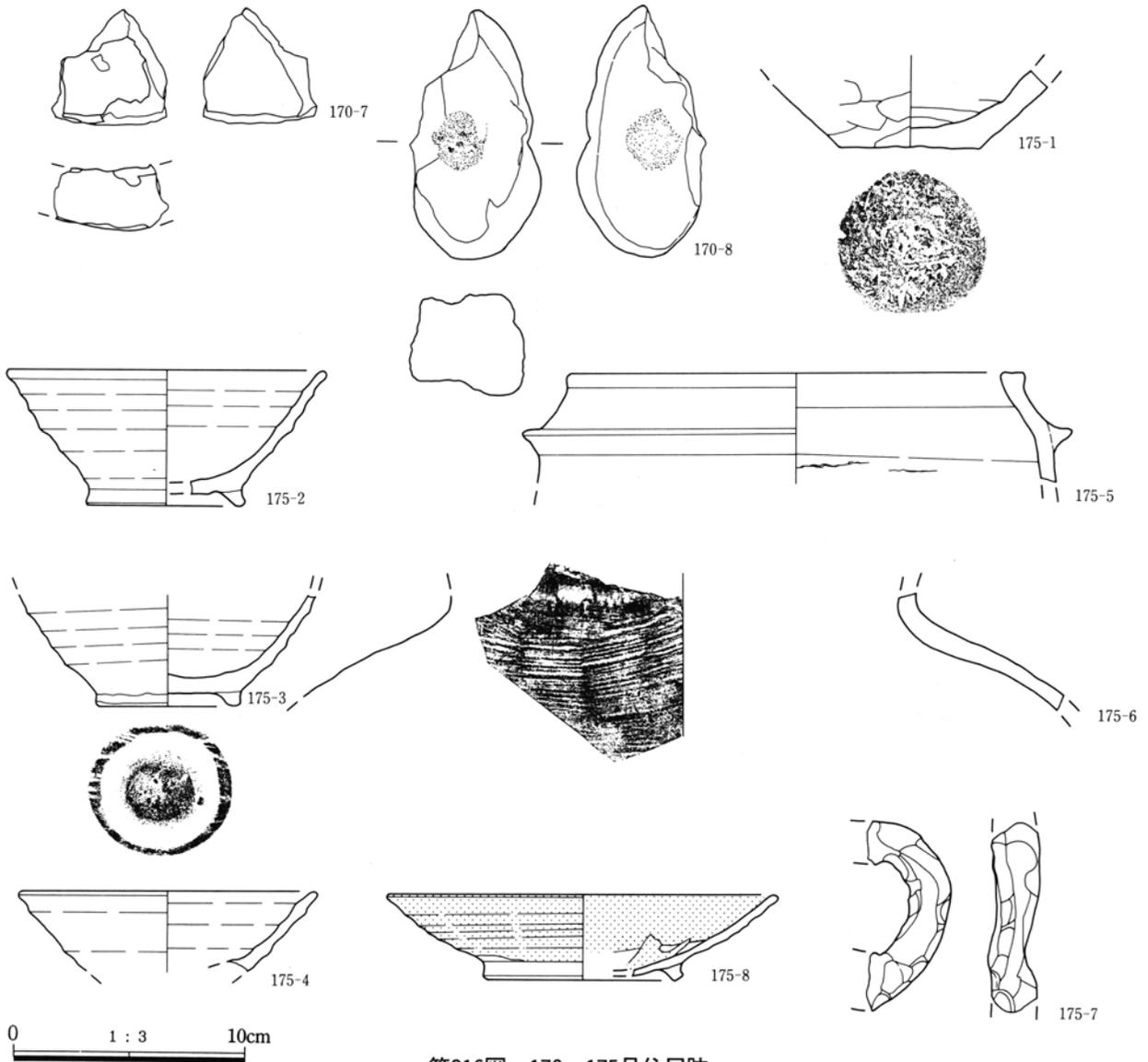
第213図 170・174・175号住居跡



第214図 170・174・175号住居跡



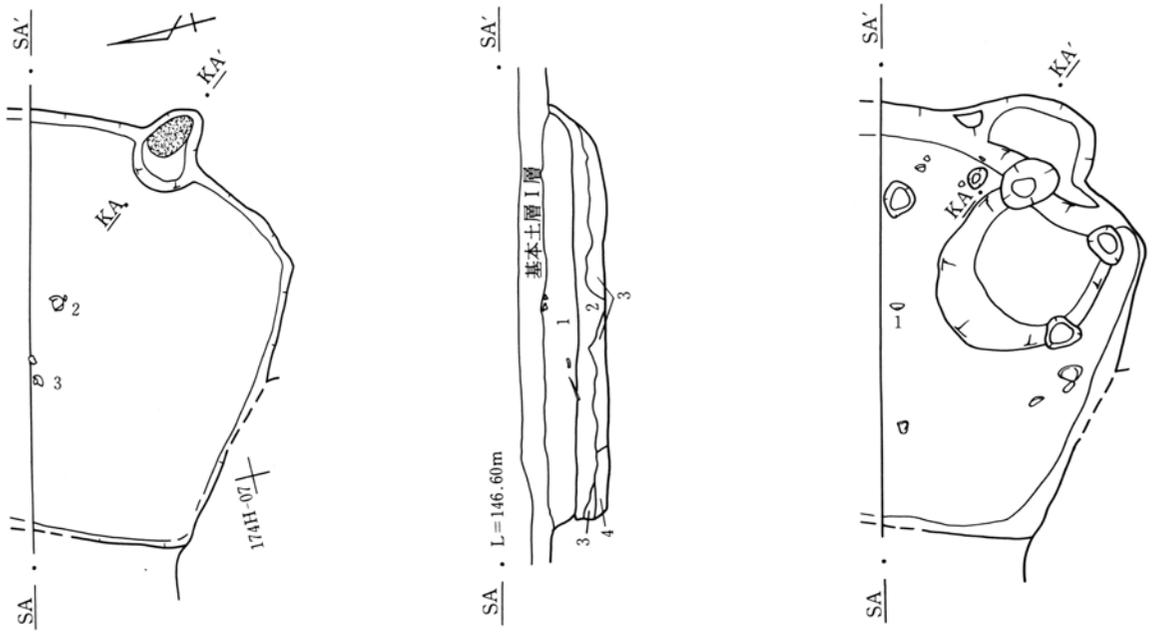
第215図 170号住居跡



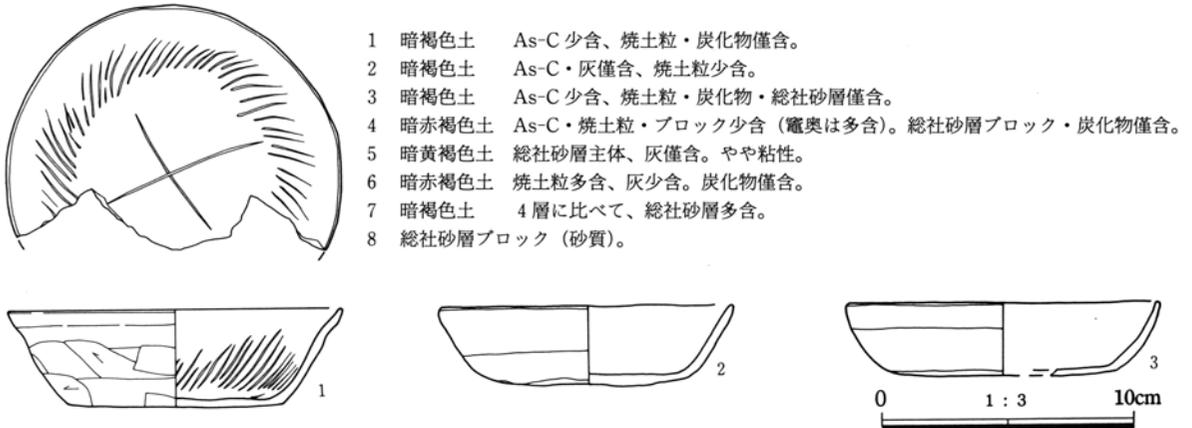
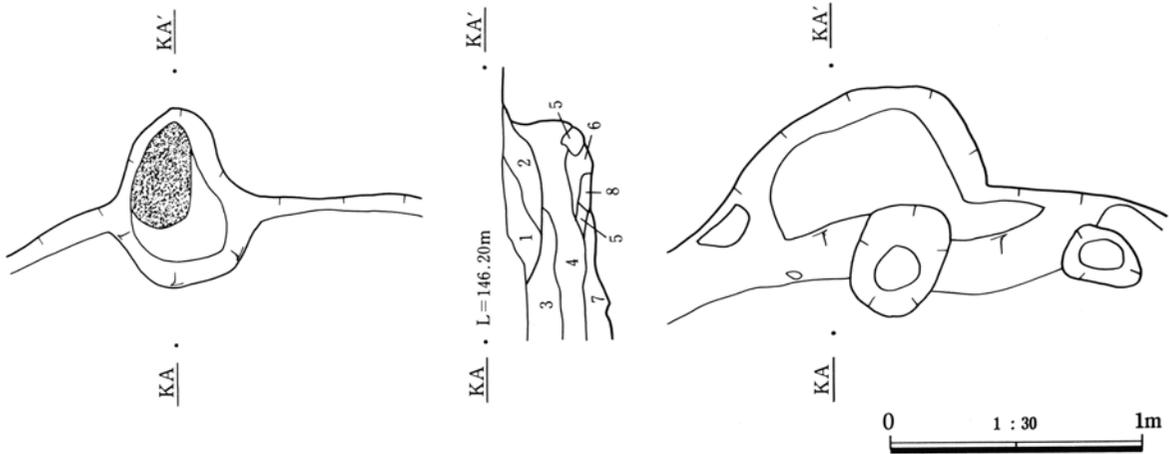
第216図 170・175号住居跡

171号竪穴住居跡(第217図、写真図版78・145) 173H-07グリッドに位置し、172号竪穴住居跡と南西隅部分が重複関係だが、遺構確認時点での新旧関係は判断できなかった。北側半分が調査区域外に延びるため、平面形態は不明である。貼り床の床面は堅く平坦である。残存する壁高は約50cmと深く、直立気味に立ち上がる。掘り方で大小の楕円形～円形の床下土坑とピットがいくつか検出されているが、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。遺物は土師器の坏などが出土している。カマドは東壁の中央から南寄りに位置するが、残存状態が良好でないので構造ははっきりしない。住居の廃棄時期は遺物から8世紀後半から9世紀前半にかけてと考えられる。

第3章 検出された遺構・遺物



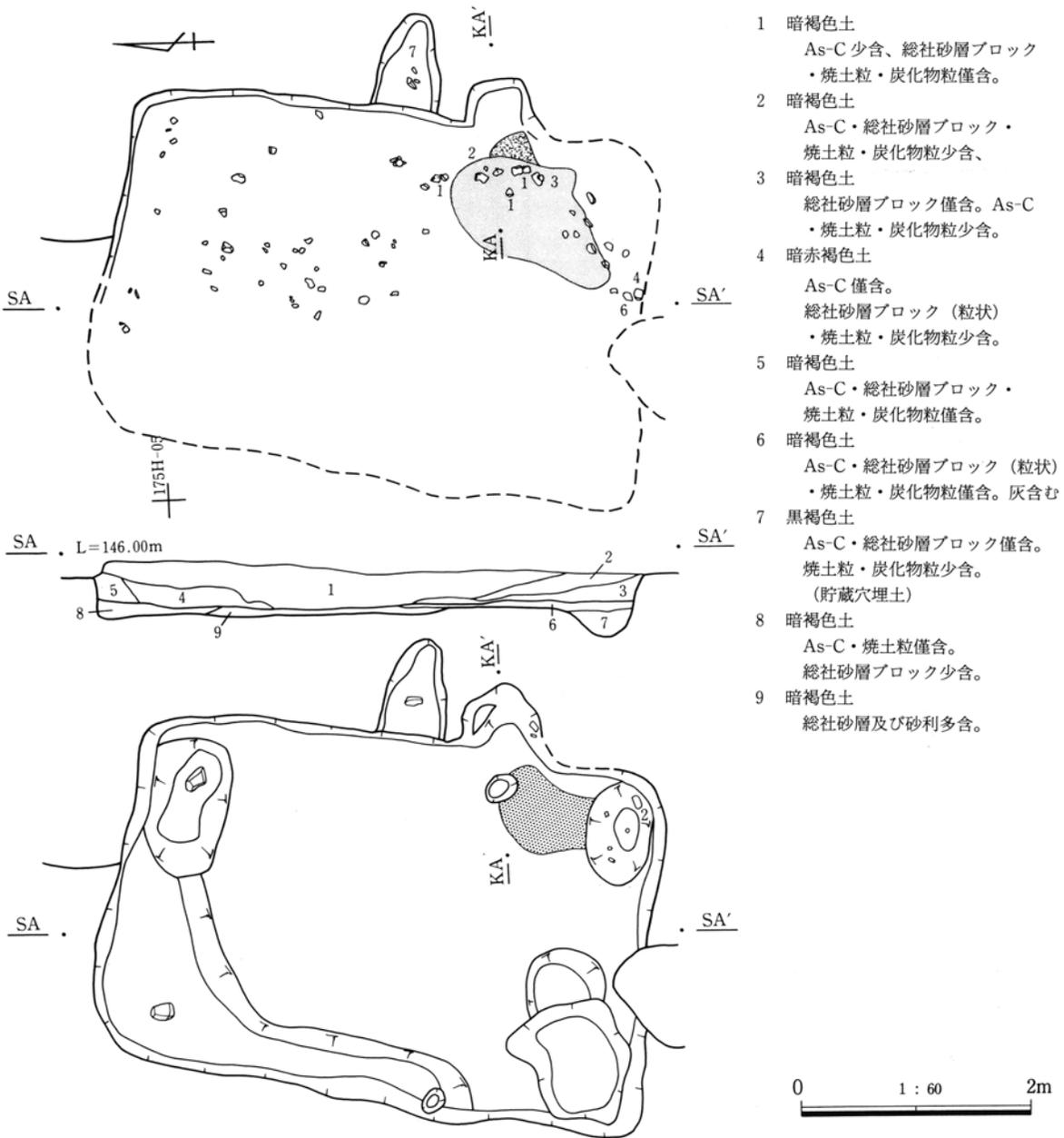
- 1 暗褐色土 As-C (やや大粒)・焼土粒・炭化物粒少含、黒色土少含。
- 2 暗褐色土 As-C 少含、焼土粒・炭化物僅含。
- 3 暗褐色土 As-C・総社砂層・Hr-FA ブロック僅含。
- 4 暗黄褐色土 Hr-FA ブロック多含。



- 1 暗褐色土 As-C 少含、焼土粒・炭化物僅含。
- 2 暗褐色土 As-C・灰僅含、焼土粒少含。
- 3 暗褐色土 As-C 少含、焼土粒・炭化物・総社砂層僅含。
- 4 暗赤褐色土 As-C・焼土粒・ブロック少含 (竈裏は多含)。総社砂層ブロック・炭化物僅含。
- 5 暗黄褐色土 総社砂層主体、灰僅含。やや粘性。
- 6 暗赤褐色土 焼土粒多含、灰少含。炭化物僅含。
- 7 暗褐色土 4層に比べて、総社砂層多含。
- 8 総社砂層ブロック (砂質)。

第217図 171号住居跡

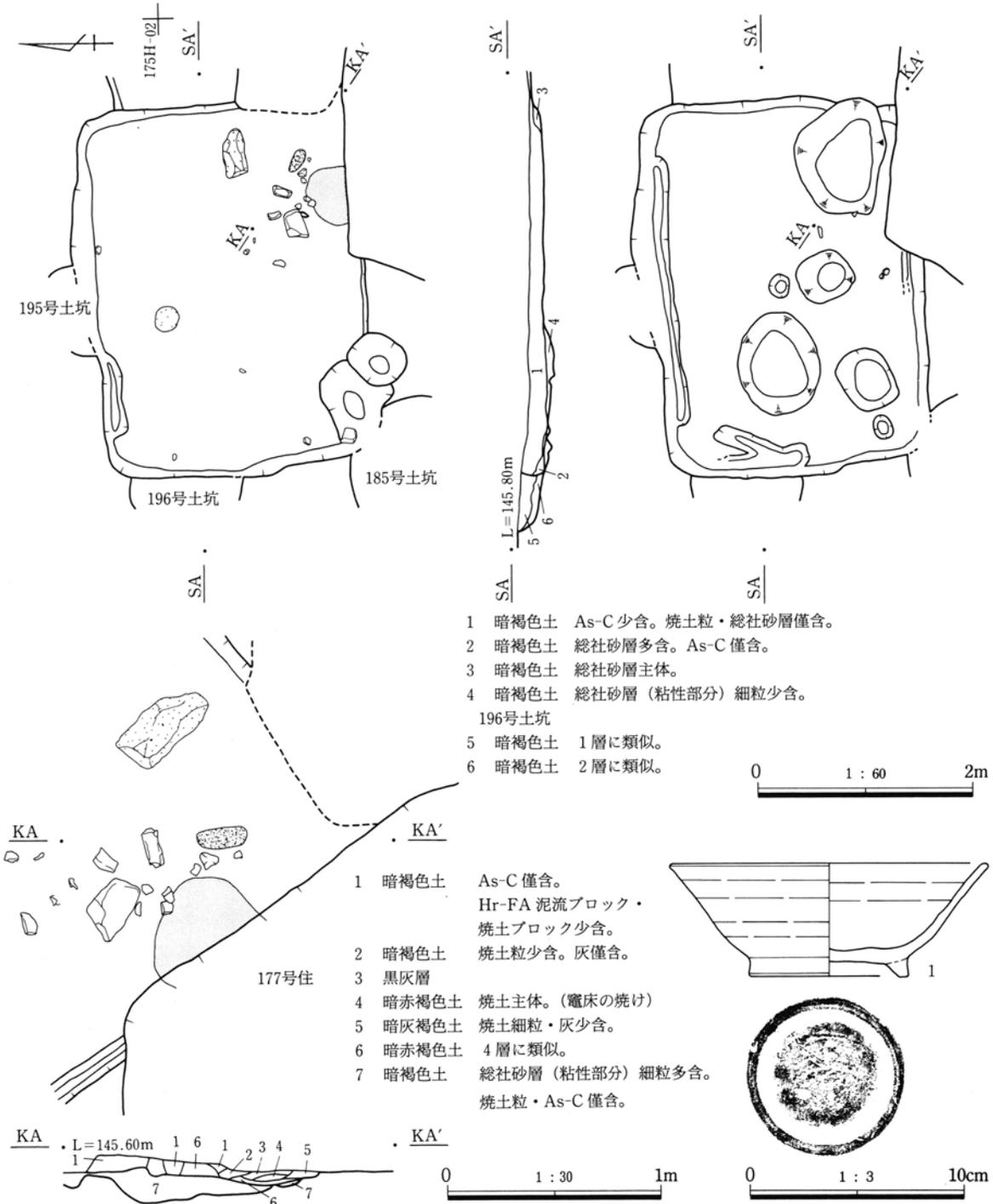
173号竪穴住居跡（第218・219図、写真図版78・79・145） 173H-03グリッドに位置し、重複関係では、遺構確認時点の所見では172号竪穴住居跡が最も古く、次に160号竪穴住居跡と173号竪穴住居跡で、161号竪穴住居跡が最も新しい。また、住居のほぼ真ん中部分が圃場整備以前の農道により壊されているが、平面形態は長方形である。地山を掘り込んだだけの床面は堅く平坦である。残存する壁高は約40cmとやや深く、直立気味に立ち上がる。掘り方で大小の楕円形～円形の床下土坑とピットがいくつか検出されており、カマド右の南東隅に貯蔵穴が存在するが、明確な壁溝や柱穴は検出されていない。遺物は須恵器の坏と碗、鉄釘などが出土している。カマドは東壁の中央から南寄りに位置するが、残存状態が良好ではない。住居の廃棄時期は遺物から9世紀後半と考えられる。



第218図 173号住居跡

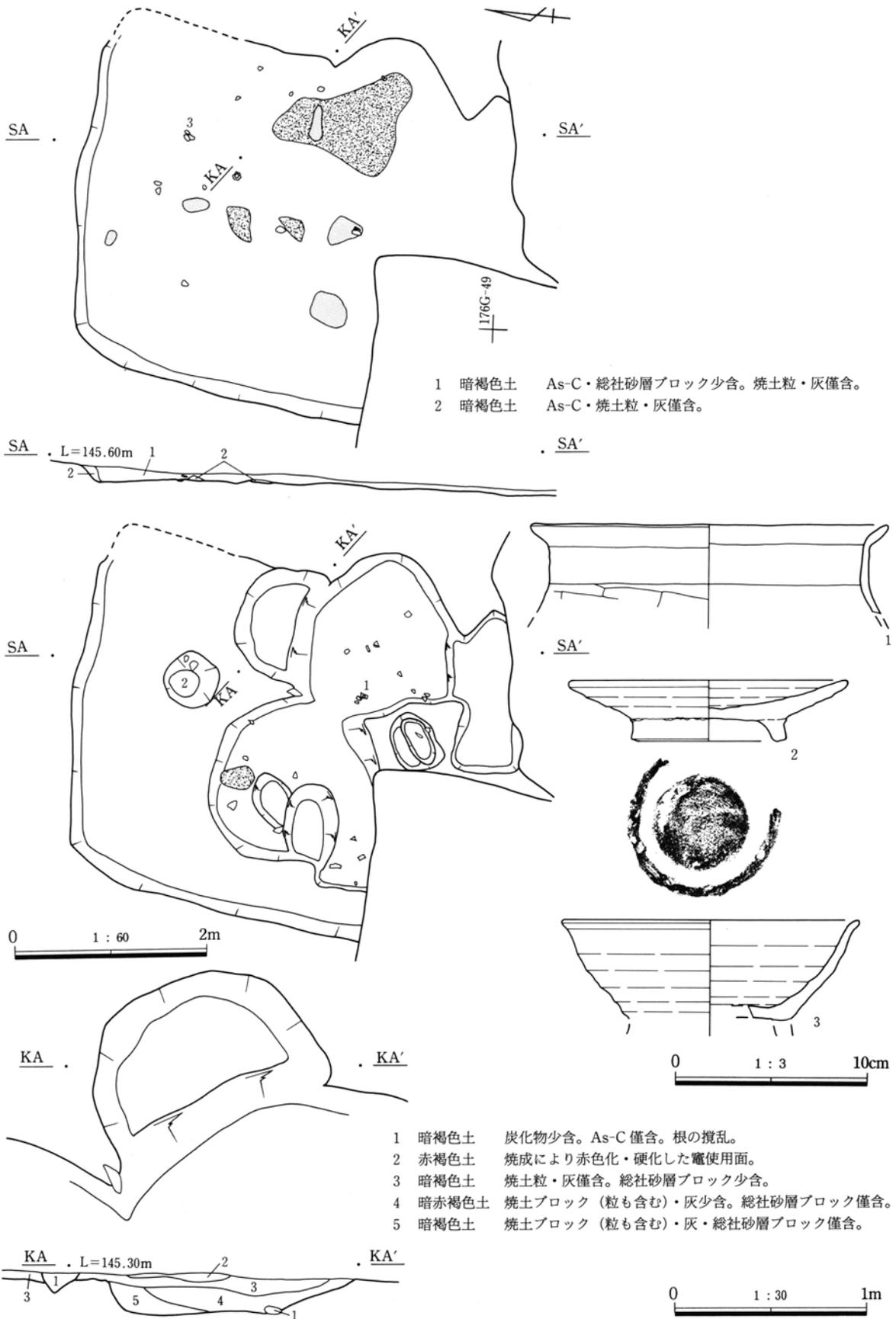
ことから、遺構確認時に壊された可能性がある。住居の廃棄時期は遺物から10世紀前半と考えられる。

177号竪穴住居跡（第221図、写真図版79・80・145・146） 175H-00グリッドに位置し、重複関係では、177号竪穴住居跡よりも139号竪穴住居跡と176号竪穴住居跡と169号竪穴住居跡が新しく、次に165号竪穴住居跡で、178号竪穴住居跡とはほぼ同時期である。平面形態は長方形である。床面は堅く平坦である。確認面が浅く、残存する壁高は約10cmで、緩やかに立ち上がる。掘り方で大小の楕円形～円形の床下土坑とピットが



第220図 176号住居跡

第3章 検出された遺構・遺物



第221図 177号住居跡

いくつか検出されているが、明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。遺物は土師器の甕、須恵器の椀などが出土している。カマドは焼土の分布位置から東壁の中央から南寄りに位置していたと考えられる。住居の廃棄時期は遺物から9世紀中葉と考えられる。

178号竪穴住居跡（第222～224図、写真図版80・146） 174G-47グリッドに位置し、東側半分は圃場整備以前の農道により壊されている。北東隅付近で165号竪穴住居跡、169号竪穴住居跡と接しているものの重複関係が無い。それに対して、177号竪穴住居跡と東壁部分が僅かに重複しているものの、確認作業時点や土層断面確認を通じても新旧関係は明確でない。平面形態はおそらくは長方形である。床面は堅く平坦である。残存する壁高は約20～30cmで、緩やかに立ち上がる。明確な壁溝、貯蔵穴、柱穴は検出されていない。遺物は土師器の坏や甕、須恵器の坏や椀などが出土している。カマドはおそらくは東壁に位置していたために壊されたものと考えられる。住居の廃棄時期は遺物から9世紀中葉と考えられる。

